青森市埋蔵文化財調査報告書 第56集

稲山（いなやま）遺跡

発掘調査報告書Ⅰ

（第一分冊　本文編）

平成12年度

青森市教育委員会

遺跡遠景（ＮＥ→）

IV a 層の遺物出土状況（ＳＥ→）

Ⅳａ層の遺物出土状況（Ｓ→）

Ⅳａ層の遺物出土状況

Ⅳａ層の遺物出土状況

Ⅳａ層の遺物出土状況

序

青森市内では、多数の遺跡が市内全域において確認されておりますが、東部地区においては、大浦貝塚や山野峠遺跡などの著名な遺跡が知られているものの、規模の大きい調査例は、他地域と比較すると僅かなものでありました。しかし近年では、青森県新総合運動公園建設事業に係る発掘調査等により徐々に当地区における先人の営みが明らかになりつつあります。

そのような中、当委員会では東北縦貫自動車道八戸線建設事業に係る市内諏訪沢地区所在の稲山遺跡について、平成９年度に実施した熊沢遺跡発掘調査に引続き、その記録保存を図るため、発掘調査を実施しており、本書は、平成10年度に実施した発掘調査の結果をまとめたものであります。

調査の結果、土坑等各種の遺構が多数存在することが確認されるとともに、土器や石器、土製品、石製品等、多量の遺物が出土し、縄文時代前期並びに後期を主体とする遺跡であることが判明いたしました。

本書が、いささかでも今後の埋蔵文化財の保護と活用に役立つことができれば幸いと存じます。

最後となりましたが、調査の実施から本書の作成にわたる、調査員、関係各機関並びに各位からのご指導、地元各町会からのご協力、さらに工事主体者であります日本道路公団並びに青森市都市政策部のご理解に対しまして、厚くお礼を申し上げます。

平成13年３月

青森市教育委員会

教育長　池田　敬

例　　言

1．本書は、平成10年度より青森市教育委員会が発掘調査を実施している青森市大字諏訪沢字山辺に所在する稲山遺跡の、第１次調査に相当する平成10年度分の発掘調査報告書である。第一分冊は本文編、第二分冊は表・写真図版編とした。なお、平成10年度刊行の「稲山遺跡発掘調査概報」は、調査について速報的にまとめたものであり、記載内容については、本書が優先する。

2．本遺跡の遺跡番号は、01045である。

3．本書の執筆並びに編集は、青森市教育委員会が行った。執筆分担については、執筆者名を依頼原稿では文頭に、他は文末に記した。

4．出土遺物の分類については、第４編「平成10年度発掘調査成果」の第３章「検出遺構と出土遺物」第２節「出土遺物」において個々に記載した。

5．各遺構の計測値については、確認面から計測した数値である。

6．遺構番号は、原則的に遺構の種別毎に、確認順に番号を付した。

7．図版番号及び表番号は、原則的に「第○図」、「第○表」とし、順番に通し番号を付したが、依頼原稿については「図○」とし、個々に番号を付した。

8．土層の注記については「新版標準土色帖」（小山正忠、竹原秀雄1993）に準拠した。

9．挿図の縮尺は、各図ごとに示し、また写真図版の縮尺については統一を図っていない。

10. 資料の鑑定及び分析について次の方々に依頼した（順不同・敬称略)。

遺跡周辺の地形と地質	青森県総合学校教育センター指導主事	工藤　一彌
石器の石質鑑定	〃	〃
水晶の鑑定	山梨学院大学教授	十菱　駿武

11. 引用参考文献は、巻末に収めている。文中で引用・参考にした文献については、文中に著者名、編集機関名と刊行西暦年で示している。なお、依頼原稿では文末に記している。

12. 発掘調査における出土遺物、実測図、写真等は、現在、青森市教育委員会で保管している。

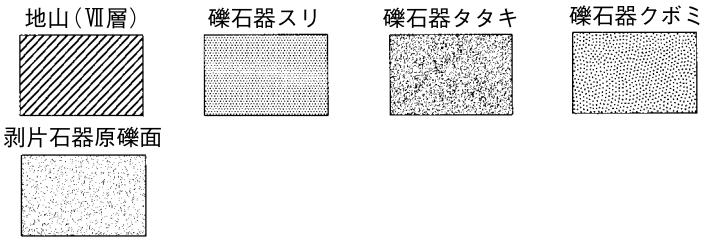
13. 発掘調査及び報告書の作成にあたって次の各機関・各氏からご指導・ご教示・ご協力を賜った。記して感謝の意を表する（順不同・敬称略)。

青森県教育庁文化課・青森県埋蔵文化財調査センター・東部二区連合町会・諏訪沢地区農事振興会・伊東　信・上野　隆博・岡田　康博・小笠原　雅行・葛西　勵・鈴木　徹・清野　彰史・高橋　潤・田中　寿明・中嶋　友文・中村　哲也・中村　美杉・成田　滋彦・畠山　昇・福田　友之・藤沼　邦彦・古屋敷　則雄・三宅　徹也

凡　　例

1．本報告書内で使用する、スクリーントーン・表現方法・略称は以下のとおりである。

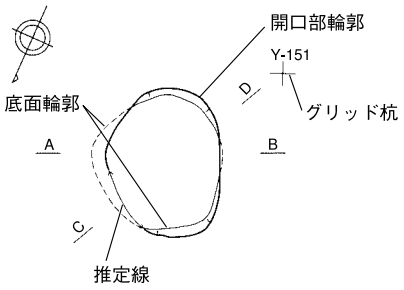
（1）図中で使用したスクリーントーン



（※依頼原稿については文中に個別に表示）

（2）土坑の推定線等

（例）第16号土坑

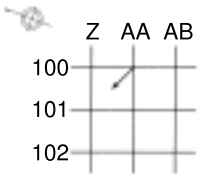


A～D：セクション及びエレベーションポイント

（3）石器実測図の剥片石器原礫面については、ドットを基本的に用い、一部スクリーントーンを併用した。

（4）グリッドの呼称

（例）ＡＡ－100グリッド



（5）図中、文中で使用した遺構の略称

「第○号竪穴住居跡」→「○住」　「第○号土坑」→「○土」

（6）図中で使用したアルファベットを用いた略称

Ｐ…土器　　Ｓ…石器　　ＬＢ…ロームブロック

目　　次

（第一分冊　本文編）

序
例言
凡例
本文目次
図版目次

第１編　調査の概要……1
　第１章　調査に至る経緯……1
　第２章　発掘調査の方法……1
　　第１節　調査区の設定……1
　　第２節　遺構……2
　　第３節　遺物……2

第２編　遺跡の環境……5
　第１章　遺跡の環境……5
　第２章　周辺の遺跡……5
　第３章　遺跡周辺の地形と地質……8

第３編　堆積層の様相……11
　第１章　基本層序……11
　第２章　遺物包含層の様相……11
　　第１節　Ⅳａ層の様相……11
　　第２節　Ⅳｃ層の様相……21

第４編　平成10年度発掘調査成果……22
　第１章　平成10年度稲山遺跡発掘調査要項……22
　第２章　調査経過……23
　第３章　検出遺構と出土遺物……29
　　第１節　検出遺構……29
　　１．土坑……29
　　第２節　出土遺物……104
　　１．土器……104
　　第Ⅰ群土器……104
　　第Ⅱ群土器……104
　　第Ⅲ群土器……113
　　第Ⅳ群土器……136
　　２．石器……187
　　３．土製品……247
　　４．石製品……261

　平成10年度調査のまとめ……279

図版目次

第 1 図　調査区設定図 ……３・４
第 2 図　周辺の遺跡図 ……６
第 3 図　基本層序柱状模式図(１) ……12
第 4 図　基本層序柱状模式図(２) ……13
第 5 図　本遺跡の土層堆積状況 ……15・16
第 6 図　Ⅳａ層における礫の分布 ……18
第 7 図　Ⅳａ層における土器の分布 ……19・20
第 8 図　遺構配置概略図(１) ……25・26
第 9 図　遺構配置概略図(２) ……27
第 10 図　平成10年度遺構配置図 ……28
第 11 図　土坑(１)(１土・２土Ａ・２土Ｂ・３～５土)……58
第 12 図　土坑(２)(７～10土・11土Ａ・11土Ｂ) ……59
第 13 図　土坑(３)(12～16土) ……60
第 14 図　土坑(４)(18土・20～23土)……61
第 15 図　土坑(５)(24土・25土・27土・33土Ａ・33土Ｂ・33土Ｃ)…62
第 16 図　土坑(６)(34土・35土・39土Ａ・39土Ｂ・41土) ……63
第 17 図　土坑(７)(43土・46土・50土・56土・57土) ……64
第 18 図　土坑(８)(58土・60土・63土・64土・68土・74土)……65
第 19 図　土坑(９)(76土Ａ・76土Ｂ・77土・78土・79土Ａ・79土Ｂ)…66
第 20 図　土坑(10)(81土・130土・140土・141土・143土) ……67
第 21 図　土坑(11)(145土・146土・148土・152土Ａ・152土Ｂ)…68
第 22 図　土坑(12)(153土・154土・172土・173土Ａ・173土Ｂ)…69
第 23 図　土坑(13)(1001土～1006土・1008土)……70
第 24 図　土坑(14)(1009土・1011・1013～1017土) ……71
第 25 図　土坑(15)(2001土～2010土) ……72
第 26 図　遺構内出土土器(１) ……73
第 27 図　遺構内出土土器(２) ……74
第 28 図　遺構内出土土器(３) ……75
第 29 図　遺構内出土土器(４) ……76
第 30 図　遺構内出土土器(５) ……77
第 31 図　遺構内出土土器(６) ……78
第 32 図　遺構内出土土器(７) ……79
第 33 図　遺構内出土土器(８) ……80
第 34 図　遺構内出土土器(９) ……81
第 35 図　遺構内出土土器(10) ……82
第 36 図　遺構内出土土器(11) ……83
第 37 図　遺構内出土土器(12) ……84
第 38 図　遺構内出土土器(13) ……85
第 39 図　遺構内出土土器(14) ……86
第 40 図　遺構内出土土器(15) ……87
第 41 図　遺構内出土土器(16) ……88
第 42 図　遺構内出土土器(17) ……89
第 43 図　遺構内出土土器(18) ……90
第 44 図　遺構内出土土器(19) ……91
第 45 図　遺構内出土石器(１) ……92
第 46 図　遺構内出土石器(２) ……93
第 47 図　遺構内出土石器(３) ……94
第 48 図　遺構内出土石器(４) ……95
第 49 図　遺構内出土石器(５) ……96
第 50 図　遺構内出土石器(６) ……97
第 51 図　遺構内出土石器(７) ……98
第 52 図　遺構内出土石器(８) ……99
第 53 図　遺構内出土石器(９) …… 100
第 54 図　遺構内出土石器(10) …… 101
第 55 図　遺構内出土土製品 …… 102
第 56 図　遺構内出土石製品 …… 103
第 57 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(１) …… 114
第 58 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(２) …… 115
第 59 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(３) …… 116
第 60 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(４) …… 117
第 61 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(５) …… 118
第 62 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(６) …… 119
第 63 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(７) …… 120
第 64 図　遺構外出土第Ⅱ群・第Ⅲ群土器(１) …… 121
第 65 図　遺構外出土第Ⅰ群・第Ⅱ群土器 …… 122
第 66 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(８) …… 123
第 67 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(９) …… 124
第 68 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(10) …… 125
第 69 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(11) …… 126
第 70 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(12) …… 127
第 71 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(13) …… 128
第 72 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(14) …… 129

第 73 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(15) …… 130
第 74 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(16) …… 131
第 75 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(17) …… 132
第 76 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(18) …… 133
第 77 図　遺構外出土第Ⅱ群土器(19) …… 134
第 78 図　遺構外出土第Ⅱ群・第Ⅲ群土器(２) …… 135
第 79 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(１) …… 145
第 80 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(２) …… 146
第 81 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(３) …… 147
第 82 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(４) …… 148
第 83 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(５) …… 149
第 84 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(６) …… 150
第 85 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(７) …… 151
第 86 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(８) …… 152
第 87 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(９) …… 153
第 88 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(10) …… 154
第 89 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(11) …… 155
第 90 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(12) …… 156
第 91 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(13) …… 157
第 92 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(14) …… 158
第 93 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(15) …… 159
第 94 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(16) …… 160
第 95 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(17) …… 161
第 96 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(18) …… 162
第 97 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(19) …… 163
第 98 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(20) …… 164
第 99 図　遺構外出土第Ⅳ群土器(21) …… 165
第100図　遺構外出土第Ⅳ群土器(22) …… 166
第101図　遺構外出土第Ⅳ群土器(23) …… 167
第102図　遺構外出土第Ⅳ群土器(24) …… 168
第103図　遺構外出土第Ⅳ群土器(25) …… 169
第104図　遺構外出土第Ⅳ群土器(26) …… 170
第105図　遺構外出土第Ⅳ群土器(27) …… 171
第106図　遺構外出土第Ⅳ群土器(28) …… 172
第107図　遺構外出土第Ⅳ群土器(29) …… 173
第108図　遺構外出土第Ⅳ群土器(30) …… 174
第109図　遺構外出土第Ⅳ群土器(31) …… 175
第110図　遺構外出土第Ⅳ群土器(32) …… 176
第111図　遺構外出土第Ⅳ群土器(33) …… 177
第112図　遺構外出土第Ⅳ群土器(34) …… 178
第113図　遺構外出土第Ⅳ群土器(35) …… 179
第114図　遺構外出土第Ⅳ群土器(36) …… 180
第115図　遺構外出土第Ⅳ群土器(37) …… 181
第116図　遺構外出土第Ⅳ群土器(38) …… 182
第117図　遺構外出土第Ⅳ群土器(39) …… 183
第118図　遺構外出土第Ⅳ群土器(40) …… 184
第119図　遺構外出土第Ⅳ群土器(41) …… 185
第120図　遺構外出土第Ⅳ群土器(42) …… 186
第121図　遺構外出土石器(１) …… 198
第122図　遺構外出土石器(２) …… 199
第123図　遺構外出土石器(３) …… 200
第124図　遺構外出土石器(４) …… 201
第125図　遺構外出土石器(５) …… 202
第126図　遺構外出土石器(６) …… 203
第127図　遺構外出土石器(７) …… 204
第128図　遺構外出土石器(８) …… 205
第129図　遺構外出土石器(９) …… 206
第130図　遺構外出土石器(10) …… 207
第131図　遺構外出土石器(11) …… 208
第132図　遺構外出土石器(12) …… 209
第133図　遺構外出土石器(13) …… 210
第134図　遺構外出土石器(14) …… 211
第135図　遺構外出土石器(15) …… 212
第136図　遺構外出土石器(16) …… 213
第137図　遺構外出土石器(17) …… 214
第138図　遺構外出土石器(18) …… 215
第139図　遺構外出土石器(19) …… 216
第140図　遺構外出土石器(20) …… 217
第141図　遺構外出土石器(21) …… 218
第142図　遺構外出土石器(22) …… 219
第143図　遺構外出土石器(23) …… 220
第144図　遺構外出土石器(24) …… 221
第145図　遺構外出土石器(25) …… 222
第146図　遺構外出土石器(26) …… 223
第147図　遺構外出土石器(27) …… 224
第148図　遺構外出土石器(28) …… 225

第149図　遺構外出土石器(29) …… 226
第150図　遺構外出土石器(30) …… 227
第151図　遺構外出土石器(31) …… 228
第152図　遺構外出土石器(32) …… 229
第153図　遺構外出土石器(33) …… 230
第154図　遺構外出土石器(34) …… 231
第155図　遺構外出土石器(35) …… 232
第156図　遺構外出土石器(36) …… 233
第157図　遺構外出土石器(37) …… 234
第158図　遺構外出土石器(38) …… 235
第159図　遺構外出土石器(39) …… 236
第160図　遺構外出土石器(40) …… 237
第161図　遺構外出土石器(41) …… 238
第162図　遺構外出土石器(42) …… 239
第163図　遺構外出土石器(43) …… 240
第164図　遺構外出土石器(44) …… 241
第165図　遺構外出土石器(45) …… 242
第166図　遺構外出土石器(46) …… 243
第167図　遺構外出土石器(47) …… 244
第168図　遺構外出土石器(48) …… 245
第169図　遺構外出土石器(49) …… 246
第170図　遺構外出土土製品(１) …… 253
第171図　遺構外出土土製品(２) …… 254
第172図　遺構外出土土製品(３) …… 255
第173図　遺構外出土土製品(４) …… 256
第174図　遺構外出土土製品(５) …… 257
第175図　遺構外出土土製品(６) …… 258
第176図　遺構外出土土製品(７) …… 259
第177図　遺構外出土土製品(８) …… 260
第178図　遺構外出土石製品(１) …… 266
第179図　遺構外出土石製品(２) …… 267
第180図　遺構外出土石製品(３) …… 268
第181図　遺構外出土石製品(４) …… 269
第182図　遺構外出土石製品(５) …… 270
第183図　遺構外出土石製品(６) …… 271
第184図　遺構外出土石製品(７) …… 272
第185図　遺構外出土石製品(８) …… 273
第186図　遺構外出土石製品(９) …… 274
第187図　遺構外出土石製品(10) …… 275
第188図　遺構外出土石製品(11) …… 276
第189図　遺構外出土石製品(12) …… 277
第190図　遺構外出土石製品(13) …… 278

第１編　調査の概要

第１章　調査に至る経緯

日本道路公団は、東北縦貫自動車道八戸線建設を計画し、青森～青森間16㎞の路線をその取り掛かりの事業とした。

この事業について日本道路公団は、建設予定地内の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無を青森県教育庁文化課（以下県文化課とする。）に照会を行った。

これを受け県文化課は、熊沢、三内丸山（６）、安田（２）、栄山（３）、稲山遺跡の５カ所の周知の遺跡及び自衛隊敷地内における新規登録遺跡である岩渡小谷（１）遺跡の計６遺跡を確認し、路線変更もしくは、それが適わない場合事前の発掘調査が必要である旨を回答した。

日本道路公団では、路線の変更は困難であることから事前の発掘調査を実施することとし、路線内の遺跡のうち、熊沢遺跡については、遺跡所在地の管轄である青森市に発掘調査の依頼がなされ、青森市教育委員会が平成９年度に発掘調査を実施した。(註１)

引き続いて稲山遺跡についても、日本道路公団から平成10年２月13日付東北支調管第159号により、青森市教育委員会に平成10年度からの発掘調査の依頼がなされた。青森市教育委員会では、協議の結果、開発行為と文化財保護との円滑な調整を図るため、調査を受託することとし、日本道路公団からの平成10年４月１日付東北支調管第146号による、平成10年度の調査依頼に対し、平成10年４月21日付青市教委社第149号においてその旨を日本道路公団に回答した。

以後、平成11年度には、平成11年４月１日付東北支調管第145号、平成12年度には、平成12年４月１日付東北支用管第166号において、当委員会への調査依頼がなされ、当委員会では平成11年４月１日付青市教委社第148号、平成12年４月４日付青市教委文第１－１号において、調査受託の旨回答した。

また、東北縦貫自動車道八戸線建設事業については青森市都市政策部が地方協力をおこなっており、平成10年度並びに平成12年度の調査については、調査委託者の一員となった。

なお、本遺跡の発掘調査は平成13年度も継続して実施する予定である。

註１　　青森市教育委員会　2000ａ　「熊沢遺跡発掘調査報告書」

（小野）

第２章　発掘調査の方法

第１節　調査区の設定

調査区の設定にあたっては、工事用中心杭ＳＴＡ.142とＳＴＡ.147を結ぶ直線を調査区長軸方向の基準線（ＡＡライン）とし、工事用中心杭ＳＴＡ.147でこれに直交する直線を調査区短軸方向の基準線（100ライン）として調査区全体に４ｍ×４ｍのメッシュを組んだ。なお、調査区長軸方向の基準線（ＡＡライン）は、真北より、東偏21°である。

グリッド杭の表示は、工事用中心杭ＳＴＡ.147（ＡＡ－100）を起点として北側へ、Ｚ、Ｙ、Ｘ…、南側へ、ＡＡ、ＡＢ、ＡＣ…、の順にアルファベットを付し、また、東側へ99、98、97…、西側へ101、

102、103…、の順に算用数字を付した。

各グリッドの呼称は、アルファベットと算用数字を組み合わせて示し、東隅のグリッド杭の表示によるものとした。

グリッド杭の打設にあたっては、業者に委託し、調査区内に必要に応じ、８ｍないし20m間隔で調査区全域に打設した。

調査区域での測量原点（Ｂ.Ｍ.）は、工事用の測量原点を基準とし、業者に委託し、原点移動を行い、調査区内に打設した全てのグリッド杭を測量原点（Ｂ.Ｍ.）として併用した。

第２節　遺構

各遺構は、種類別、確認順に１番から遺構番号を付した。精査後、遺構でないと判明したものについては欠番とした。ただし、平成10年度の調査において、調査区160ライン以西の土坑については、調査区中央部において今後確認される土坑が多数存在すると思われたことから、1000番もしくは、2000番から遺構番号を付した。また、遺構精査後、重複を確認した土坑については、一部100土Ａ、100土Ｂ等、算用数字とアルファベットを組み合わせた遺構番号を付した。

遺構精査にあたっては、原則として、４分法、２分法を用いることとし、その他、遺構の重複等必要に応じ、土層観察用のベルトを設定した。

遺構の実測図作成においては、平面図、断面図を主体に作成した。また、遺構内出土遺物については、必要に応じ、微細図、分布図を作成した。実測にあたっては、基本的に簡易遣り方測量で行い、縮尺については、原則として竪穴住居跡、土坑は縮尺20分の１、埋設土器遺構等その他の遺構については、縮尺10分の１とした。写真撮影については、土層断面、完掘状況を主体に撮影し、必要に応じ、遺物出土状況等を撮影した。フィルムは、モノクロームとカラーリバーサルを併用した。

第３節　遺物

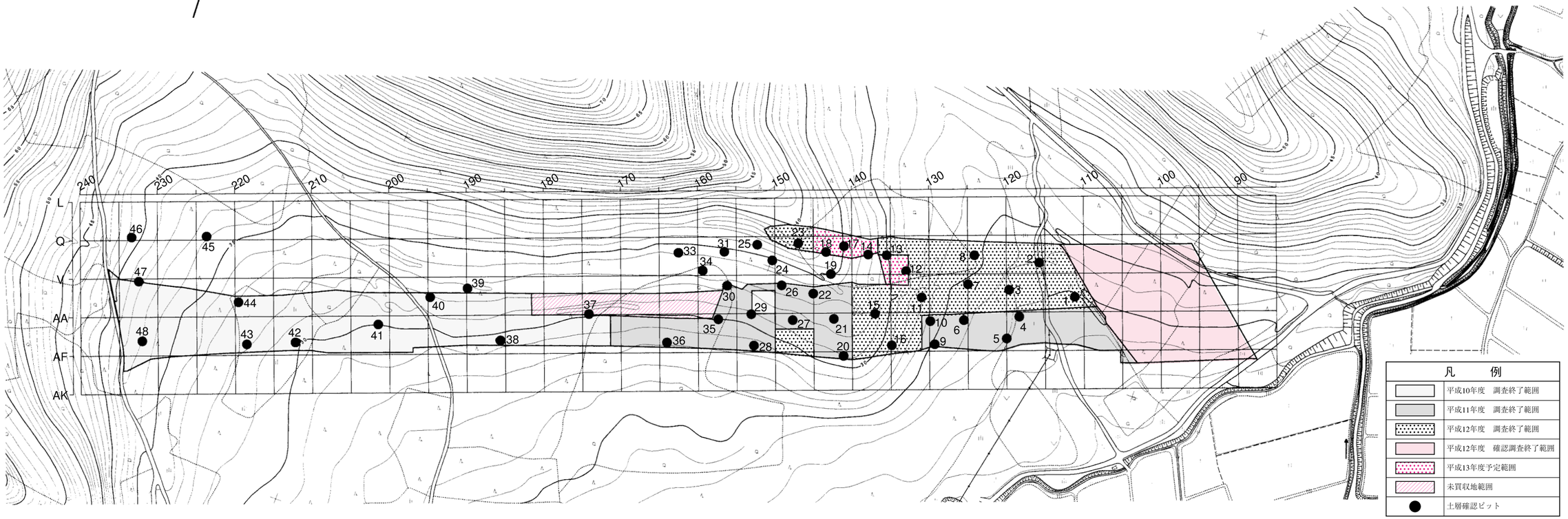
出土遺物の記録は、遺構内外の遺物ともに、必要に応じ出土状況図、分布図を作成し、出土位置を記録した。図面の縮尺については、基本的に20分の１、もしくは10分の１とした。その他、必要に応じ写真撮影を行った。フィルムは遺構と同様に、モノクロームとカラーリバーサルを併用した。

出土遺物の取り上げは、遺構内出土遺物は、主として半截途中の出土遺物等、覆土の堆積状況確認前に取り上げた遺物については、個々の遺構及び遺物の種類別に覆土を一括して取り上げた。覆土の堆積状況確認後は、個々の遺構及び遺物の種類別に、覆土の各層位毎に一括して取り上げた。遺構外出土遺物は、遺物の種類別に、原則的にグリッド単位で層位毎に一括して取り上げた。

出土遺物には、主に土器、石器、土製品、石製品等がある。なお、石器については、原則的に加工痕、使用痕の認められるものを現地調査時に選択した。また、平成10年度調査のⅣａ層精査時に際して、多数の水晶の出土が見られたことから、出土水晶についても取り上げることとした。その他、必要に応じて、炭化物、火山灰、土壌等をサンプリングした。

これら遺物の取り上げに際しては、一括土器は黄色、石器は青等、遺物の種類に応じ、色分けした遺物カードに出土地点、出土層位、出土年月日等を記録した。

（小野）


L
Q
V
AA
AF
AK
240
230
220
210
200
190
180
170
160
150
140
130
120
110
100
90
凡　例
平成10年度　調査終了範囲
平成11年度　調査終了範囲
平成12年度　調査終了範囲
平成12年度　確認調査終了範囲
平成13年度予定範囲
未買収地範囲
土層確認ピット
0
200m

第1図　調査区設定図

第２編　遺跡の環境

第１章　遺跡の環境

本遺跡が所在する青森市は、陸奥湾に面する青森平野とこれを取り囲む、東部の山地、南部に広がる火山性台地、西部の丘陵地からなる。本遺跡は、青森市東部の山地に位置する。戸山団地北側の砥取山からは、小山地が平野部に突出して伸びており、その末端部に相当するのが稲山である。

本遺跡は、市街地からは裏側にあたる稲山の南丘陵、標高10～40mに位置している。本遺跡から北側の陸奥湾へは、直線距離にして３㎞、東側を流れる野内川へは２㎞の距離となっている。

調査対象範囲は、本遺跡範囲中の北側にあたり、地形的には、北西から南東に緩やかに下る斜面となっている。そのなかで調査区中央部は、標高20～40mの丘陵が一部南に突き出している台地状の地形となっている。調査区東側とは10m前後の比高差がある、西側とは、５m前後の比高差がある。西側は、稲山の緩斜面の丘陵が続く。東側は、標高20m程の平坦面である。調査前には山林として利用されていた。

（小野）

第２章　周辺の遺跡

本遺跡の周辺には、多数の遺跡が所在している。

本遺跡と同様、砥取山から稲山へと伸びる小山地には本遺跡の他に４カ所の遺跡が所在する。稲山の北側の丘陵には、縄文、平安時代の後蒻遺跡、西側の丘陵には、縄文時代の桑原遺跡、小山地の基部、東側には縄文時代中期、弥生、平安時代の牛蒡畑遺跡が所在する。また本遺跡の東側には平野部を挟んで、高山の東丘陵に縄文時代の諏訪沢山辺（１）遺跡が所在している。これらはいずれも散布地として登録されている。さらに本遺跡の南西、戸崎には中世の館跡である戸崎館遺跡が所在している。さらに、高山の東側、野内川の西側にも４カ所の遺跡が所在する。築木館遺跡は、中世の館跡である。その他縄文時代前期から晩期にかけての時期の散布地が確認されている。

砥取山の南側の火山性台地にも多数の遺跡が所在する、縄文、平安時代の散布地が大半だが、蛍沢遺跡では、戸山団地造成に先立つ発掘調査が行われており、縄文時代早期から中、後、晩期、弥生、平安時代の各時期の遺物のほか、縄文、平安時代の住居跡等、多数の遺構を検出している。

本遺跡の北西、市街地平野部分にも、４カ所の遺跡が所在する。露草遺跡は奈良時代、沢田遺跡、小柳遺跡は平安時代でいずれも散布地である。

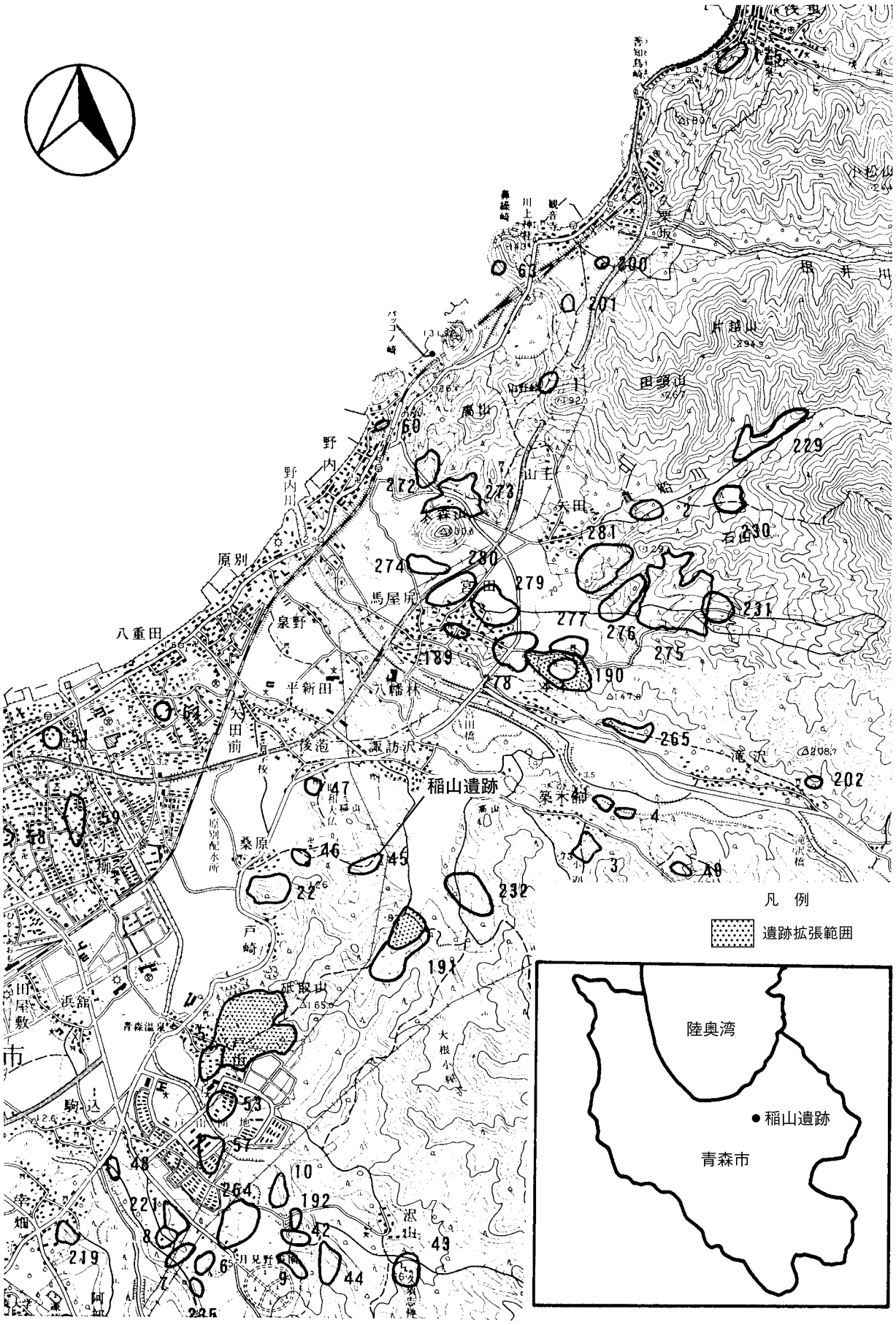
本遺跡の北東、野内川以北にも多数の遺跡が所在している。

その中で長森遺跡は青森市教育委員会が２カ年にわたり発掘調査を実施しており縄文時代晩期の竪穴式住居跡３軒、土壙墓を４基等検出している。また縄文時代後期の遺跡である山野峠遺跡の発掘調査においては、一直線状に並ぶ石棺墓が７基検出されている他、石室に収められた土器棺が検出されており、土器棺の内部から人骨を検出している。

海岸部には晩期の貝塚として著名な大浦遺跡が所在している。本遺跡は、平安時代の製塩土器が出土している。

近年では、青森県新総合運動公園建設事業に伴い、宮田地区においては、青森県埋蔵文化財調査センターにより、山下、上野尻、米山（１）、（２）、玉水（２）遺跡等の調査が実施されている。

（小野）



第2図　周辺の遺跡（S＝1/50,000）

周辺の遺跡

台帳番号	遺　跡　名	種別	所　在　地	時　　代	文　　献
1	山野峠遺跡	墓地	野内字牧原、矢田字牧原	縄文(後)	青森市教育委員会　1983
2	長森遺跡	散布地	矢田字山野井	縄文(晩)、平安	青森市教育委員会　1985
3	築木館岩瀬遺跡	散布地	築木館岩瀬	縄文(前・後・晩)、平安	
4	築木館布引遺跡	散布地	滝沢字下河原	縄文(前・中・後)	
5	戸山遺跡	散布地	戸山字赤坂	縄文(前・中)、弥	
6	玉清水(１)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文(晩)	青森市教育委員会　1967
7	玉清水(２)遺跡	散布地	駒込字月見野	不明	
8	玉清水(３)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文(前)	青森市教育委員会　1971a
9	月見野霊園遺跡	散布地	駒込字月見野	平安	
10	月見野遺跡	散布地	駒込字蛍沢	縄文(前・後)	
22	戸崎館遺跡	館跡	戸崎字宮井	中世	
41	築木館遺跡	館跡	滝沢字下河原	平安・中世	
42	沢山(１)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文(晩)	
43	沢山(２)遺跡	散布地	駒込字月見野、沢山字平野	縄文、平安、中世	
44	沢山(３)遺跡	散布地	沢山字平野	平安	
45	稲山遺跡	集落跡	諏訪沢字野田	縄文(前・後)	青森市教育委員会　1999b、2000b
46	桑原遺跡	散布地	桑原字山崎	縄文	
47	後蒄遺跡	散布地	後蒄字外山、後蒄字久堅	縄文、平安	
48	駒込館遺跡	館跡	駒込字桐ノ沢、駒込字月見野	平安	
49	山の井遺跡	散布地	滝沢字山の井	縄文(後)	
51	沢田遺跡	集落跡	造道３丁目	平安	
53	赤坂遺跡	散布地	戸山字赤坂	平安	
57	蛍沢遺跡	集落跡	駒込字月見野	縄文(早・中～晩)、弥生、平安	青森市蛍沢遺跡発掘調査団　1979
58	佃遺跡	散布地	佃３丁目	縄文(前)	
59	小柳遺跡	散布地	小柳三丁目	平安	
60	野内遺跡	散布地	野内字鈴森	縄文(晩)	
61	露草遺跡	散布地	八重田３丁目	奈良	
63	大浦遺跡	貝塚	野内字浦島	縄文(晩)	青森市教育委員会　1971b
175	宇多夫井館遺跡	館跡	浅虫字山下	中世	
189	玉水遺跡	散布地	宮田字玉水	縄文、平安	
190	宮田館遺跡	館跡	宮田字玉水	縄文、平安、中世	
191	牛蒡畑遺跡	散布地	諏訪沢字山辺	縄文(中)、弥生、平安	
192	月見野(２)遺跡	散布地	駒込字蛍沢	不明	
200	久栗坂浜田(１)遺跡	散布地	久栗坂字浜田	縄文(晩)	
201	久栗坂浜田(２)遺跡	散布地	久栗坂字浜田	縄文(中)	
202	宮田山下(１)遺跡	散布地	宮田字山下	縄文(前)	
219	阿倍野(２)遺跡	散布地	幸畑字阿倍野	平安	
221	月見野(３)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文(後)、平安	
229	菖蒲沢(１)遺跡	散布地	矢田字菖蒲沢	縄文(後)	
230	菖蒲沢(２)遺跡	散布地	矢田字菖蒲沢	縄文(晩)	
231	宮田米山(１)遺跡	散布地	宮田字米山	縄文	
232	諏訪沢山辺(１)遺跡	散布地	諏訪沢字山辺	縄文	
235	月見野(４)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文(後)	
264	月見野(５)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文	
265	扇沢遺跡	散布地	三本木字扇沢	縄文	
272	鈴森(１)遺跡	散布地	野内字鈴森	縄文(後)	
273	鈴森(２)遺跡	散布地	野内字鈴森	縄文(後)、江戸	
274	小金沢遺跡	散布地	馬屋尻字小金沢	縄文(後)	
275	米山(１)遺跡	散布地	宮田字米山	縄文(中・後・晩)、平安	
276	米山(２)遺跡	集落跡	宮田字米山	平安	青森県教育委員会　2000
277	山下遺跡	集落跡	宮田字山下	縄文(前・中・後)、平安	青森県教育委員会　1999、2000
278	玉水(２)遺跡	散布地	宮田字玉水	平安	
279	玉水(３)遺跡	散布地	宮田字玉水	平安	
280	玉水(４)遺跡	散布地	宮田字玉水	縄文(前・中)	
281	上野尻遺跡	集落跡	矢田字上野尻、宮田字米山	縄文(前・中・後・晩)、平安	青森県教育委員会　1999

第３章　遺跡周辺の地形と地質

青森県総合学校教育センター　指導主事　工　藤　一　彌

青森平野は新生代第四紀（約170万年前～現在）に形成された海岸平野であり、東は東岳を中心とした古い地層の分布する比較的急俊な山地、西は標高50～150ｍの比較的緩傾斜の開析が進んだ丘陵、北は陸奥湾に面し、南は八甲田火山群につらなる火山性の台地に囲まれている。

平野部は標高15ｍ以下の平担地からなり、西の高田付近に荒川の扇状地、東の矢田前付近に野内川の扇状地があり、標高２～10ｍは各河川の三角州性の低地、標高２ｍ以下の海岸低地は海岸線に平行な砂州とその間の湿地からなっており、それぞれの境界は市街地化や耕地整理によって不鮮明になっている。平野部と西部の丘陵地との境界には「入内断層」と呼ばれる南北方向の大きな断層が存在している。この断層は第四紀洪積世初頭（約170万年前）から活動を始め、断層の東側が最大で800ｍ以上も北に落ち込み、南方の八甲田火山群などの後背地から運ばれた大量の砕屑物により非常に厚い地層が堆積し、海岸平野が形成されていった。

東部の山地は地質構造上、東北地方の脊梁山脈である奥羽山脈の延長部にあたり、新生代新第三紀（約2500万年前～約170万年前）の火山岩、堆積岩などで構成されており、浸食作用により起伏の大きい地形となっている。野内川流域の段丘面や緩傾斜地に扇沢・築木舘などの遺跡が存在する。

南～南東側の火山性台地は、八甲田カルデラ（現在の田代平）から噴出した八甲田火砕流堆積物、いわゆる「田代平溶結凝灰岩」で構成されており、八甲田火山群から北方に続いており標高は40～500ｍである。この台地を構成する溶結凝灰岩は侵食に弱いため、入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川など、いずれの河川の谷壁も25～40度と他の開析谷に比べて著しく急傾斜となっている。この台地は北～北西に流れる数本の河川によって分けられている。入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川に挟まれた部分は平野に対し舌状に突き出した台地となっており、縄文時代の遺跡は各台地上に大部分が分布する。

西部の丘陵地は開析がすすみ、稜線の標高は50～150ｍで緩やかに北に傾斜している。砂・砂質シルト層からなる洪積世の岡町層を基盤に砂・砂礫や八甲田火砕流堆積物などが重なり、丘陵地と平野の境界部に朝日山・細越・栄山など多数の遺跡が分布している。

本遺跡は、東部の山地に位置している。遺跡の北を流れる野内川に向かって大根小屋沢、牛蒡畑沢という幅広い沢が合流しており、その西側の砥取山～稲山にかけて標高160～100ｍの非常に開析が進んだ尾根が連なっている。本遺跡は標高約100ｍの稲山から南東に伸びる尾根の末端部に位置しており、西側山麓には昭和大仏がある。遺跡の地形は尾根の延長部と南北両翼部で異なっており、北翼の方が南翼に比べて傾斜が大きく、遺構は尾根の延長部に集中している。

本地域の地層は大部分が新生代（約6500万年前～現在）の地層で構成されており、先第三系（約6500万年以前の地層）は東部の東岳付近と夏泊半島の東岸に部分的に分布している。東岳付近のものは石灰岩、粘板岩、チャートなどの堆積岩と花崗岩からなり時代未詳である。夏泊半島のものは石灰岩、チャートからなり、石灰岩から発見されたコノドントという化石によって中生代三畳紀～ジュラ紀であることが分かった。東岳の先第三系の年代は、夏泊半島と比較的近距離にあることや他地域の花崗岩の年代から中生代であろうと推定されている。

新生代新第三紀の地層は下位から金ヶ沢層・四ツ沢層・和田川層の順に重なっている。金ヶ沢層は主に、変朽安山岩（風化・変質した安山岩)、凝灰岩、凝灰角礫岩などからなり、全体的に変質が激しく暗緑色～紫色をしている。これらの岩石は新第三紀の海底火山活動によるものであり、野内川上流一帯に分布している。四ツ沢層は金ヶ沢層分布域の周辺や駒込川・荒川の谷底に分布し、安山岩、玄武岩、泥岩、凝灰岩からなる。凝灰岩はグリーンタフと呼ばれ緑色を呈し、流紋岩質～安山岩質である。和田川層は泥岩、凝灰岩からなり、凝灰岩は野内川下流に分布し淡緑色～淡黄色で、凝灰角礫岩や細粒凝灰岩が多い。

新生代第四紀（約170万年前～現在）の地層は岡町層と十和田・八甲田火山噴出物に分けられる。岡町層は青森市西部の岡町、新城付近に分布し、砂岩、礫岩、シルト岩などからなり、西部の丘陵地の基盤を構成している。十和田・八甲田火山噴出物は八甲田火山溶岩、八甲田火砕流堆積物、降下火山灰等からなり、溶岩は両輝石安山岩～玄武岩質安山岩で多くの種類に分類されている。

八甲田火砕流堆積物は村岡・長谷（1990）によると、大きく２つに区分され、そのうち１期のものには水底火砕流堆積物として産する場合があり、従来の鶴ヶ坂層がこれに相当するという。２期のものは従来の田代平溶結凝灰岩に相当し、陸上火砕流堆積物が主体である。村岡・長谷（1990）はＫ－Ar法により八甲田第１期火砕流堆積物を約65万年前、八甲田第２期火砕流堆積物を約40万年前の活動としている。八甲田火砕流堆積物は「入内断層」によってできた低地を埋め、緩やかな勾配で北西側に傾斜し、横内～駒込付近から平野に没し、平野部の試錐データによると断層の東側で1000m、市の中心部では500m、市東部の矢田前付近では300mの深さまで達している。

本地域の火山灰層は沢田（1976）により３層に区分され、下位から三内火山灰・大谷火山灰・月見野火山灰と呼ばれている。下位の三内火山灰は中部と最下部に浮石帯をもつ赤褐色粘土質降下火山灰で、中位の大谷火山灰は赤褐色粘土質降下火山灰と茶褐色浮石質降下火山灰よりなり、分布範囲は狭い。上位の月見野火山灰は最も広範囲に分布しており、黄褐色浮石質火山灰からなり、浮石流～火山灰流の部分も多い。

遺跡の基盤は周囲の地質等から新生代第三紀の和田川層と考えられ、遺跡の中心部にその風化帯が露出している。砥取山～稲山にかけて和田川層の緑色凝灰岩や流紋岩が分布しているが非常に変質が進んでおり、原岩の組織等は分かりにくい。基盤の上位には、赤褐色の粘土質火山灰が部分的に分布しており、これは大谷火山灰と考えられる。その上位には広範囲に黄褐色火山灰層が分布しており、これは月見野火山灰と考えられ、その上に黒色土が重なる。上位の火山灰層や最上位の黒色土は、地形によって厚さが異なり、尾根の延長部で薄く、南北両翼部で厚くなっている。

なお、地形区分では1969年撮影の空中写真を使用した。

引用・参考文献

青森県　1983　土地分類基本調査「青森東部」

青森県　1985　土地分類基本調査「浅虫」

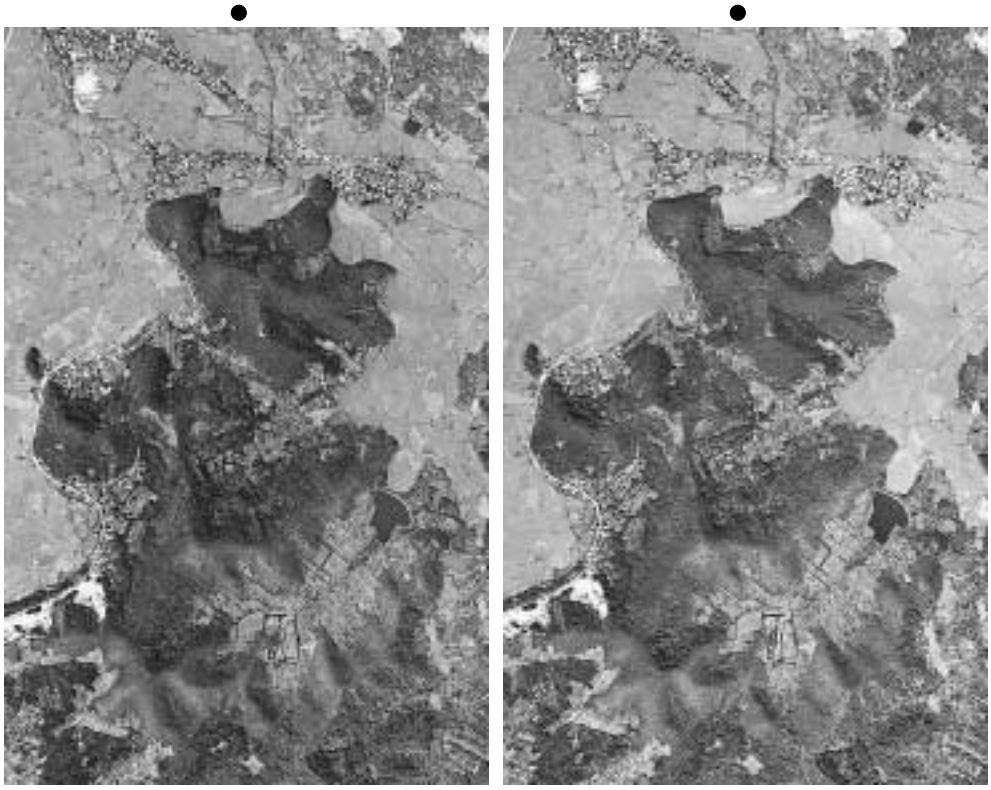
池田敬　1979　青森市の自然　（青森市教育委員会）

北村信他　1972　青森県の地質　（青森県）

村岡洋文・高倉伸一　1988　10万分の１八甲田地熱地域地質図・説明書　（地質調査所）

沢田庄一郎　1976　近野遺跡発掘調査報告書（Ⅲ）　（青森県教育委員会）

沢田庄一郎　　1976　三内丸山（Ⅱ）遺跡発掘調査報告書　　（青森県教育委員会）
資源エネルギー庁　　1976　昭和50年度広域調査報告書「八甲田地域」



国土地理院撮影　1969年　空中写真（実体図）

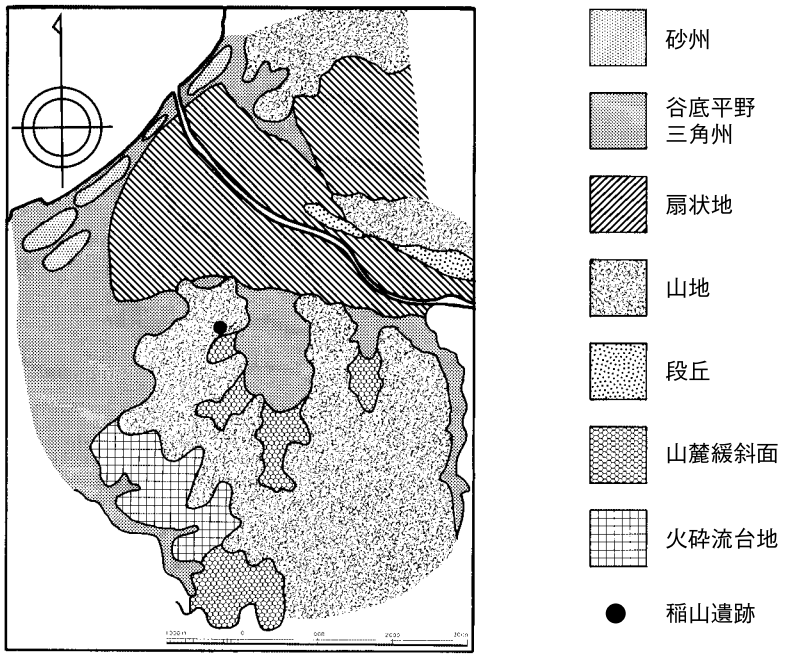


図１　地形区分図

第３編　堆積層の様相

第１章　基本層序

本遺跡の発掘調査は、遺跡内の道路建設予定地内を対象とするため、総延長約600ｍにわたる長大な範囲となっており、斜面地や沢地、丘陵地などを横切る調査区となった。このため、当初から地形に応じて遺跡内の堆積層が異なることが予想されたこと、発掘調査の計画立案にあたり遺構の有無確認や堆積状況の把握が必要となったことなどを勘案し、この範囲内に48ヶ所の土層確認用のピットを設定し調査を実施した。土層確認ピットの調査地点は第１図“調査区設定図”に、各地点の堆積状況は第３・４図“基本層序柱状模式図”に掲げた。

調査の結果、調査区域内全体の土層が連続的に堆積せず、地形や区域によって、堆積の状況が異なることを確認した。火山灰の検出状況や時期が特定できる遺物包含層の有無、漸移層やローム層などの有意な自然層の存在を基準に検討した結果、基本的に以下の７層に区分されることが明らかとなった。

第Ⅰ層：主に黒褐色を呈し、木草根等を多く含む表土である。近・現代に相当する堆積層である。

第Ⅱ層：主に黒褐色を呈しており、平安時代以降に相当する堆積層である。

第Ⅲ層：主に暗褐色を呈している。第Ⅲ層中や第Ⅲ層上面に十和田ａ火山灰（To－ａ）や、白頭山苫小牧火山灰（Ｂ－Tm）と考えられるものが観察される。本市の小牧野遺跡においても同様な状況がみられることから、弥生時代に相当する堆積層として考えられる。

第Ⅳ層：主に黒褐色を呈しており、縄文時代に相当する堆積層である。発掘当初、この堆積層の上位には縄文後期、下位には縄文前期の遺物が包含していたことから、縄文中期の遺物包含層も勘案し、Ⅳａ～Ⅳｃ層の堆積層を想定していたが、縄文中期の包含層が検出されなかったため、Ⅳｂ層は除外するものとする。すなわち、Ⅳａ層と表記していたものは縄文後期の遺物包含層を指し、Ⅳｃ層が縄文前期の遺物包含層を指す。なお、Ⅳａ層並びにⅣｃ層については、次章で詳しく述べることとする。

第Ⅴ層：主に黒色を呈する無遺物層である。

第Ⅵ層：主に暗褐色を呈し、第Ⅳ層及び第Ⅴ層のシルト質土壌と第Ⅶ層のローム質土壌との漸移層である。

第Ⅶ層：主に黄褐色あるいは赤褐色を呈するローム層である。局所的に多量の角礫を包含するところもある。

（児玉）

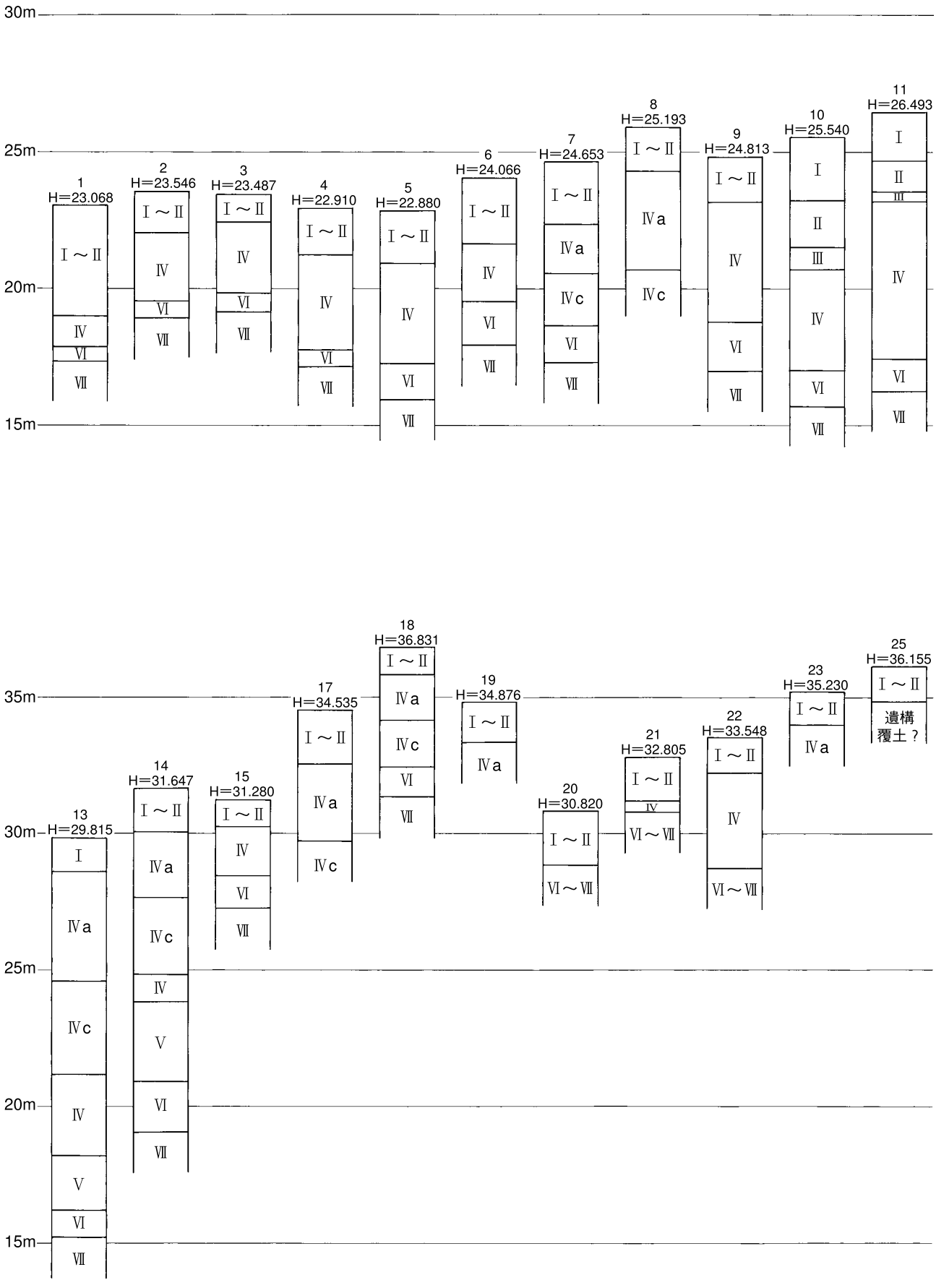
第２章　遺物包含層の様相

第１節　Ⅳａ層の様相

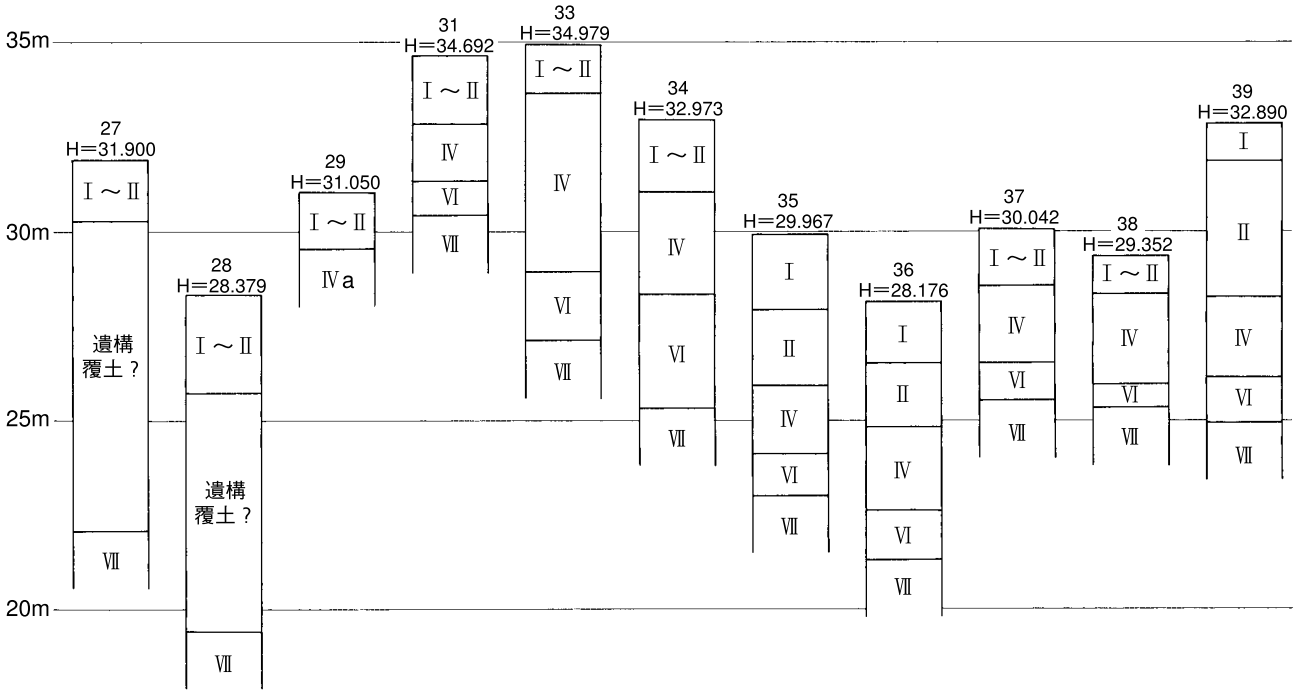
（１）概要

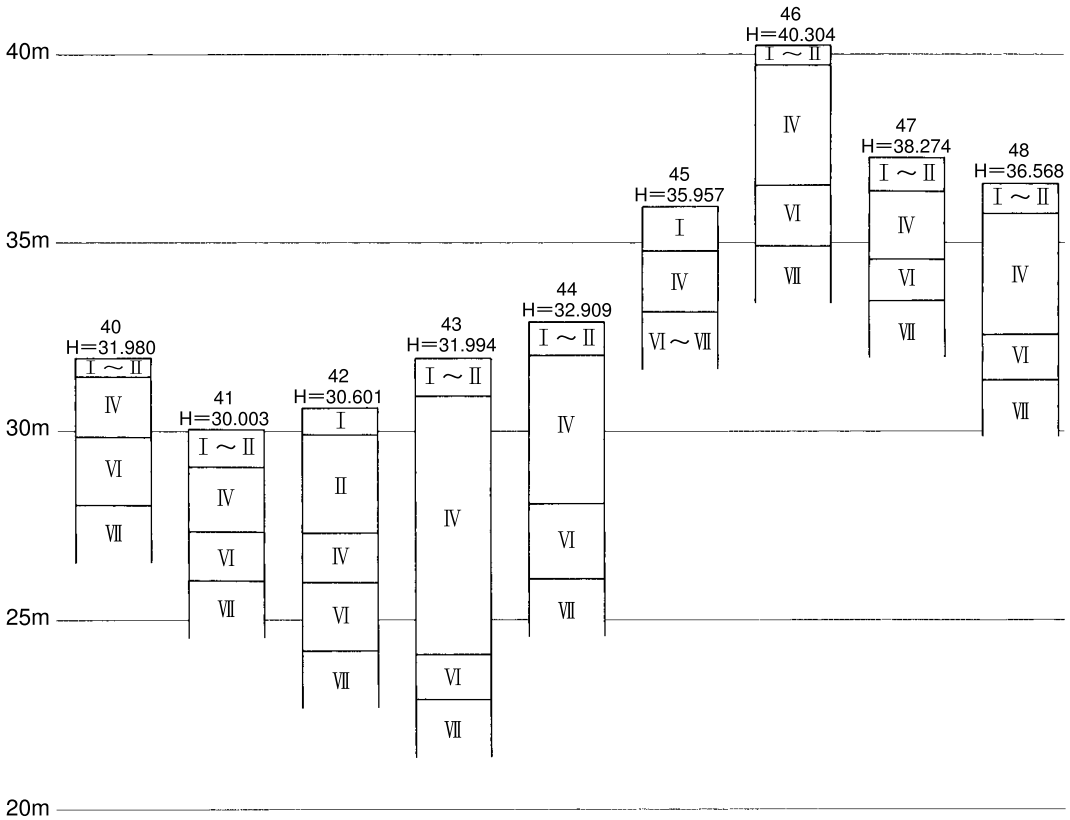
Ⅳａ層は、縄文時代に相当する堆積層である第Ⅳ層のうち、縄文後期の相当する遺物包含層である。

遺物包含層は、平成10～12年度までの調査で、調査区のＹ－136～153グリッドからＡＦ－138～150グリッドに広がり、地形的には30～33ｍの等高線付近に形成されていることを確認した。調査区内における包含層の範囲は、現時点で約1,700㎡を測るが、一部調査区域外に広がる部分も含めると推定約2,000㎡

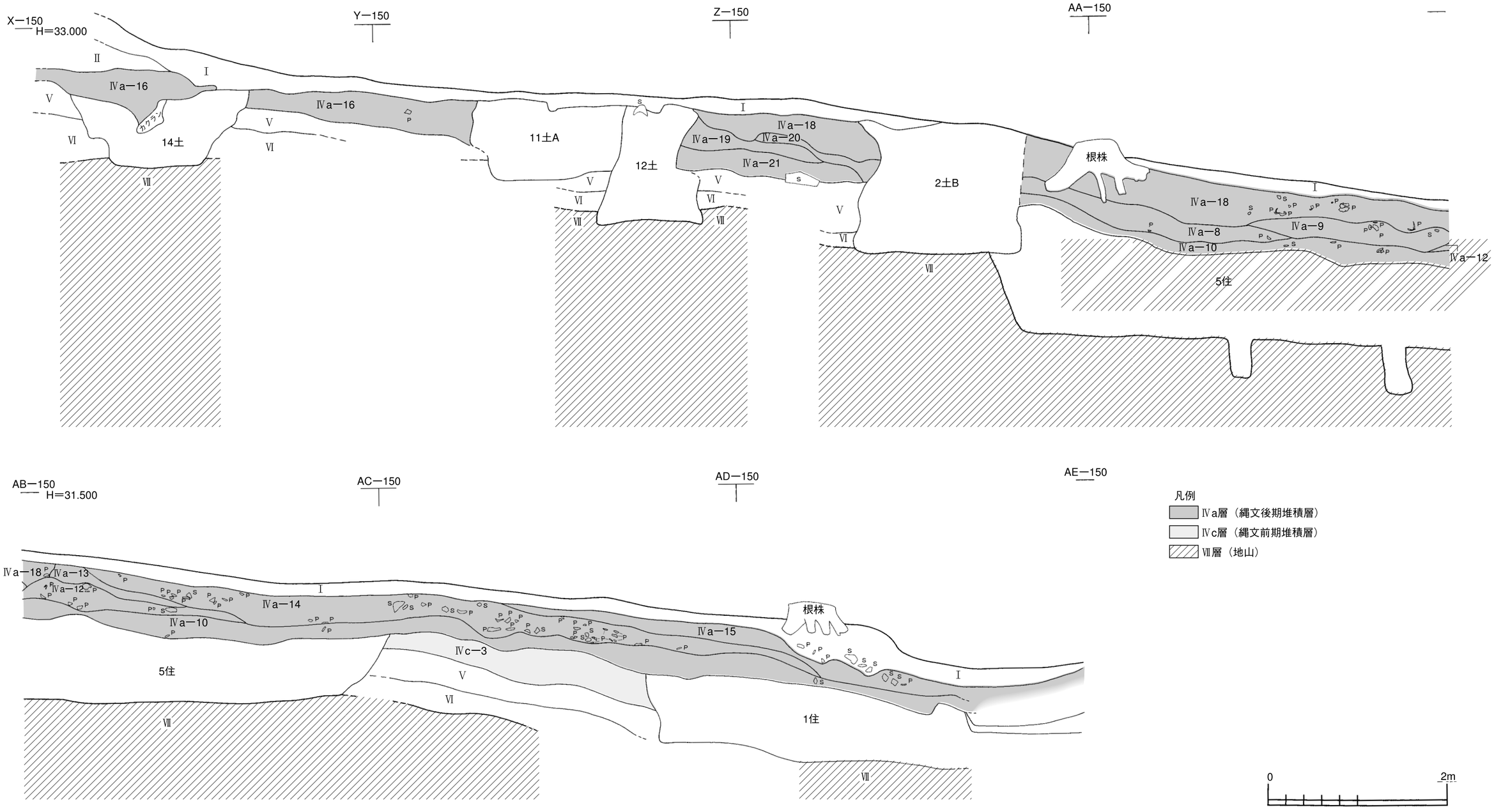


第3図　基本層序柱状模式図（1）





第4図　基本層序柱状模式図（2）



第5図　本遺跡の土層堆積状況

を測るものと思われる。また、包含層は10～100㎝前後の厚さを測り、複数の土層で構成されるものもある。Ｘ～ＡＥ－150ラインのセクション（第５図）では、縄文前期の竪穴住居跡の覆土上に堆積している箇所や、堆積後に土坑の構築によって切られている箇所もある。こうした状況は、このセクションラインに限るものではなく、包含層全体で局所的にみられるものである。

（２）礫群の出土状況―大型配石遺構の存在―

遺物包含層には、多量の土器や石器などの遺物のほかに、１kg以下の小型の礫から10kgを超える大型の礫まで多量に包含している。これらの礫は、遺跡周辺の河原から運搬されたと思われる礫や地山ロームの中に含まれる角礫などで構成されている。

これらの出土状況は、地山ロームの中に含まれる角礫の場合、局所的にまとまりをもって分布している。仮にこれを“角礫の一群”と呼称する。角礫の一群は、礫が広範にわたり分布するものや小さくまとまるもの、ある程度の厚さで集積するものなど多様であり、現在までに様々な遺跡で確認されている“配石遺構”や“集石遺構”のそれとは異なり、むしろ土器の廃棄状況に似た様相を呈する。本調査では縄文後期のフラスコ状土坑が多数検出されているが、それらの壁面は角礫がびっしりと詰った地山であることが多い。おそらく、この角礫の一群は、土坑の構築（地山の掘削）の際に出土した角礫の廃棄ブロックである可能性が高い。

遺跡周辺の河原から運搬されたと思われる礫の場合、調査区のＸ－135～153グリッドからＡＧ－135～153グリッドの範囲内に分布し、この中から石棺墓や配石遺構も複数検出されている。第６図は、礫の分布と石棺墓および配石遺構の配置状況を図化したものである。ＡＡ－141グリッドには、第２号石棺墓、第７号配石遺構、第８号配石遺構が位置し、直径２ｍの環状配置となっている。これを中心に、半径９～14ｍの環状帯に多量の礫とともに石棺墓や配石遺構が分布している。仮にこれを、“中央帯”と“環状帯”と呼び１つのセットとして考えた場合、径２ｍの中央帯と径28ｍの環状帯からなる“環状列石”である可能性も考えられる。また、その東隣の径15ｍ前後の礫群からなる環状帯も同様な遺構として考えることもできる。

これらの遺構は、複数の礫群や配石遺構が偶然、環状にまとまっただけなのかもしれないが、いずれにしても、相当数の礫の搬入や石棺墓および配石遺構の構築を含め、膨大な時間と労力をかけて構築されたものであることには間違いはなく、多数の礫と複数の配石遺構が一体となった“大型配石遺構”である。

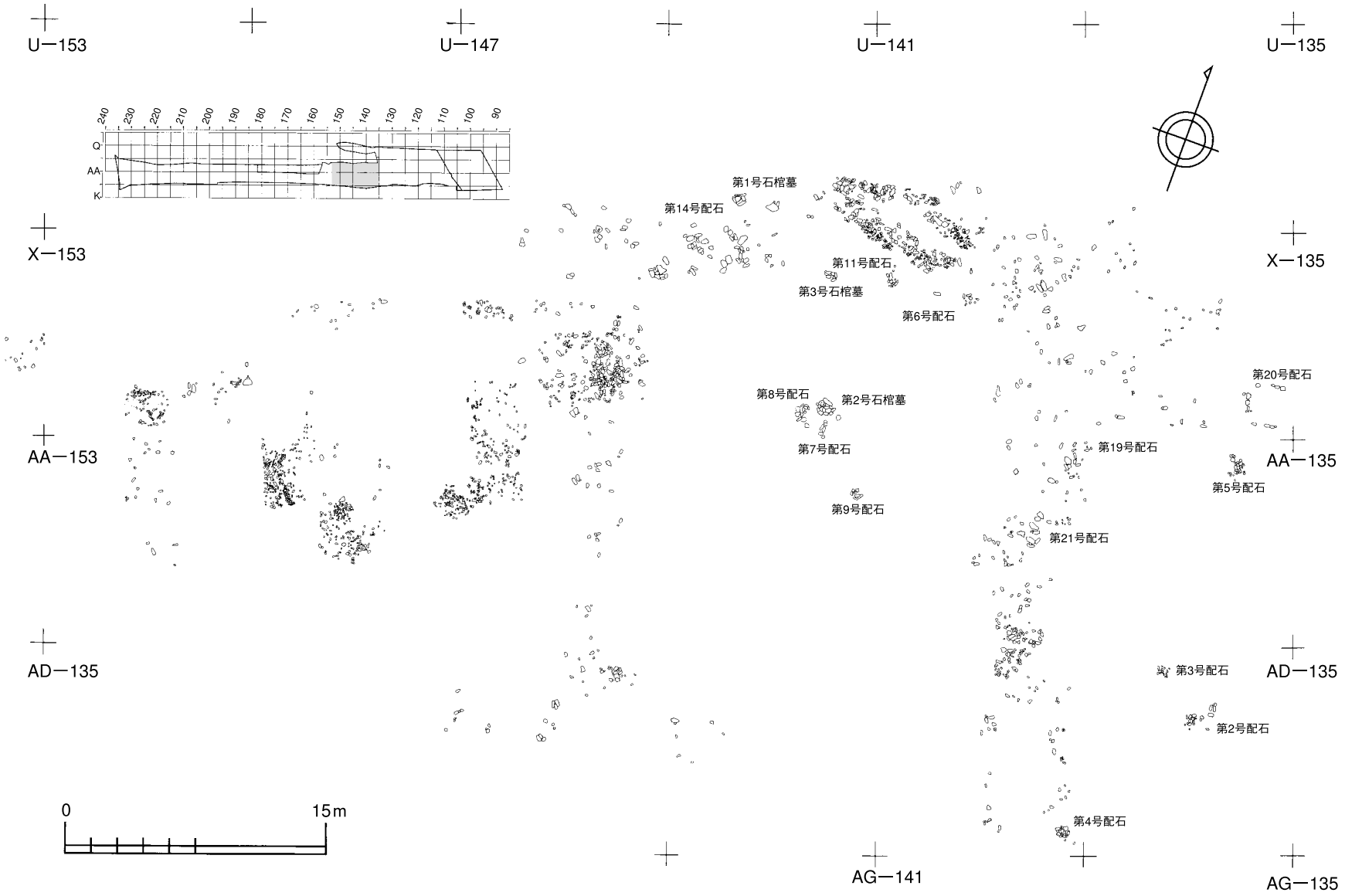
なお、この大型配石遺構や石棺墓、配石遺構は、平成13年度以降の発掘調査報告書で詳細を報告する予定となっている。

（３）遺物の出土状況

Ⅳａ層からは、縄文後期初頭～前葉の土器や石器、土製品・石製品などが多量に出土しており、平成10～12年度の調査でダンボール約600箱前後の遺物が出土している。

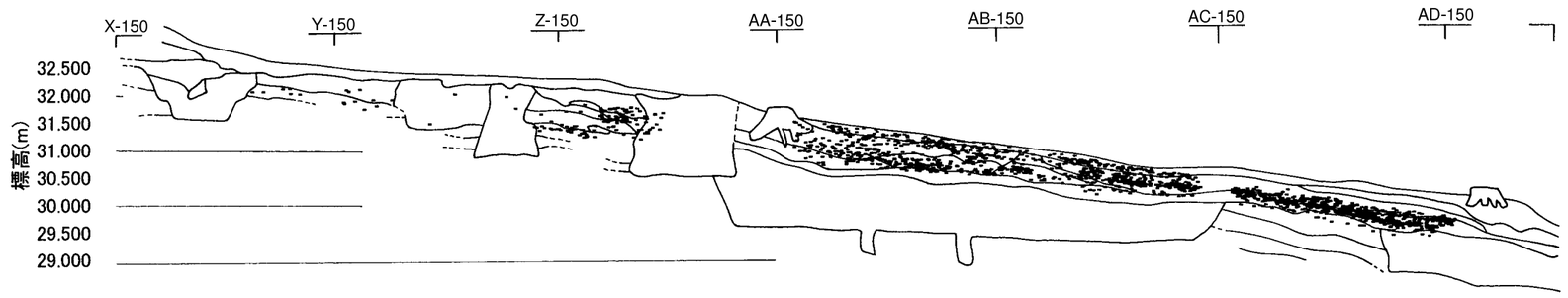
特に土器の出土が圧倒的に多い。第７図は、Ｘ～ＡＥ－150ラインの幅50㎝のセクションベルトから出土した土器の分布図で、上がセクション図と重ねあわせたもの、下が分布図のみのものである。これを見ると、Ⅳａ層から出土する土器の分布密度が非常に高いことが理解できる。平面的には、切られた遺構が存在する部分を除いて、遺物包含層全体に土器がまんべんなく分布しているが、中には土器が密集するブロックも複数みられる。土器が密集するブロックには、完形品や復元可能な土器も多い。

石器は、石鏃や石錐、石匙、石篦、磨製石斧、石皿、敲磨器類などのほか、後期前葉の特徴的な石器である大石平型石篦が、石核や剥片とともに出土している。また、包含層からは水晶も多量に出土しており、中には利器としての可能性も考えられるものも数点みられる。

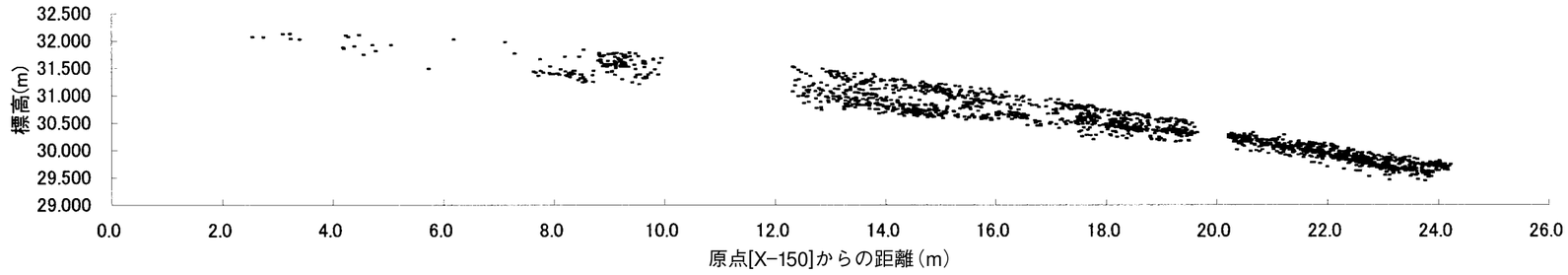


第6図　Ⅳa層における礫の分布

セクション図に投影した分布図



土器のみの分布図



第7図　Ⅳa層における土器の分布

土製品や石製品は、土偶や鐸形土製品、ミニチュア土器、土器片利用土製品、三角形岩版、円形岩版、有孔石製品、球状石製品などが出土しているが、なかでも土器片利用土製品や三角形岩版、円形岩版といった盤状を呈する製品が極めて多量に出土している。

石器や土製品、石製品の出土状況は、土器の密集ブロックの中に含まれることが多く、土器とともに廃棄されたものと考えられる。

以上のように遺物の大半は、廃棄されたものと考えられるが、上述した礫群の出土状況、つまり大型配石遺構の存在の可能性からみて、祭祀・儀礼時に使用されたものも含まれているものと思われる。とくに、土製品や石製品など第二の道具（小林　1977）と呼ばれる祭祀性の強い遺物の出土も多く、なかでも出土量が極めて多い円形や三角形を呈する岩版類は、青森県小牧野遺跡や一ノ渡遺跡、秋田県伊勢堂岱遺跡など大型配石遺構を有する遺跡からも多量に出土しており、祭祀・儀礼時に関わる特徴的な遺物として挙げられよう。

なお、出土量や遺構配置の関係を表した分布状況の詳細は、報告書刊行最終年度の考察編に掲載する予定である。

第２節　Ⅳｃ層の様相

（１）概要

Ⅳｃ層は、縄文時代の堆積層である第Ⅳ層のうち、縄文前期に相当する遺物包含層である。遺物包含層は、平成10～12年度までの調査で、調査区のＲ－133～136グリッドからＴ－133～136グリッド及びＸ－148～155グリッドからＡＦ－146～155グリッドの概ね２ヶ所（連続する可能性も考えられる）に広がり、地形的には28～33ｍの等高線付近に形成されていることを確認した。

また、Ⅳｃ層に連続する土層が竪穴住居跡の覆土として確認されている。このⅣｃ層が堆積する直前期には、廃絶された竪穴住居跡が窪地として形成されていたものと推測される。

竪穴住居跡窪地の中には、多量の土器が出土する場合があり、平成11～12年度調査の第22号竪穴住居跡（窪地）からは円筒下層ｂ式を主体とする土器、第11号住居跡（窪地）からは円筒下層ｄ１式土器が、いずれも70個体前後も出土しており、捨て場として理解されるものもある。

（２）遺物の出土状況

Ⅳｃ層からは縄文前期中葉～末葉の土器や石器、土製品、石製品などが出土しており、平成10～12年度の調査でダンボール100箱前後が出土している。

土器は円筒下層ｂ式及びｄ式を主体とする土器が、局所的に個体で出土したり、破片を主体にしてある程度のまとまりをもって出土したりする場合が多い。また、前項でも触れたが、竪穴住居跡廃絶後の窪地から多量の土器が密集して出土する場合もある。また、円筒下層式の土器のほか、本県でも類例の少ない大木６式土器の完形品、北陸地方の前期末葉の土器である福浦上層式～朝日下層式の中に位置付けられる土器片も出土している。

石器は、石鏃や石匙、敲磨器類の出土が多いが、円筒土器の特徴的な石器である打製石器、すり切り打法による石斧や研石、半円状扁平打製石器の出土も目立つ。

土製品や石製品の類はほとんどみられず、現在のところ土器片利用土製品（中央に孔をもつ土製円盤）が若干みられるのみである。

（児玉）

第４編　平成10年度発掘調査成果

第１章　平成10年度稲山遺跡発掘調査要項

１．調査目的

東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設工事、高規格道路建設促進事業に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

２．遺跡名及び所在地

稲山遺跡　（いなやま）

青森市大字諏訪沢字山辺地内

３．事業実施期間　平成10年４月１日～平成11年３月31日

（発掘調査期間　平成10年５月11日～平成10年11月20日）

５．調査対象面積　16,100㎡（調査実施面積　7,552㎡）

６．調査委託者　日本道路公団、青森市都市政策部

７．調査受諾者　青森市教育委員会

８．調査担当機関　青森市教育委員会生涯学習部社会教育課埋蔵文化財対策室

９．調査指導機関　青森県教育庁文化課

10．調査体制

調査指導員	村越　　潔	青森大学考古学研究所所長兼教授	（考　古　学）
調　査　員	十菱　駿武	山梨学院大学教授	（考　古　学）
〃	市川　金丸	青森県考古学会会長	（考　古　学）
〃	工藤　一彌	青森県総合学校教育センター指導主事	（地　質　学）
〃	長沼　圭一	青森市立長島小学校教諭	（考　古　学）
〃	三浦　孝仁	青森市立長島小学校教諭	（考　古　学）
調査協力員	小笠原　実	東部二区連合町会長	
〃	斎藤　義隆	諏訪沢地区農事振興会会長	
〃	豊川　　功	地主	
〃	斎藤　　誠	地主	

調査事務局　青森市教育委員会

教育長	池田　敬
生涯学習部長	齋藤　勝
社会教育課長	間山義弘
埋蔵文化財対策室長	遠藤正夫
室長補佐	福士　敦
埋蔵文化財係長	石岡義文
主事	田澤淳逸
〃	小野貴之（調査担当）
〃	木村淳一
〃	児玉大成（調査担当）
〃	沼宮内陽一郎（調査担当）
〃	設楽政健

（小野）

第２章　調査経過

５月11日、調査開始式を行い、草刈り等調査区内外の環境整備を開始した。

５月中旬、調査区内の層序観察のため、１×２ｍのテストトレンチを調査区全体に設定し、試掘を開始した。調査区中央部の台地上部から東斜面を中心に縄文時代後期の遺物包含層を確認した。また、その下層では縄文時代前期の遺物包含層を確認した。台地上部から東側の平坦面まで広がるものと思われた。台地上部では、さらにその下部に遺構の存在も予想された。縄文時代後期の遺物包含層からは、十腰内Ⅰ式土器が主体的に出土し、縄文時代前期の遺物包含層からは、円筒下層ｄ$_1$式土器が主体的に出土した。

５月下旬、遺物の分布が密である調査区中央の台地上で表土剥ぎを開始した。また一部トレンチにより試掘をおこなったところ多数の土坑を確認した。

６月上旬、調査区西側については、遺構分布状況を確認するため８×32ｍのトレンチを設定し試掘を行った結果、２基の土坑及び溝状の落ち込みを１カ所確認した。調査区中央部では、表土剥ぎが終了し、縄文時代後期の遺物包含層の精査を開始した。以後遺物包含層の精査を主体に調査をおこなった。

７月中旬、縄文時代後期の遺物包含層の出土状況について写真撮影、微細図、分布図作成を主体に調査を行った。

７月下旬、遺物包含層の精査が終了したＡＣ－150第Ⅴ層において土坑を確認し精査を開始した。

８月、徐々に縄文時代後期の遺物包含層の精査が終了し、Ⅳｃ層、第Ⅴ層上面で密に分布する土坑を確認し、精査を続けた。

９月初旬　台地上において確認した土坑が170基に達した。また、台地南斜面においては縄文時代前期の竪穴住居跡を確認したが、一部検出に留まった。

９月下旬、調査区西側では、散発的に分布する土坑を確認し精査を行った。

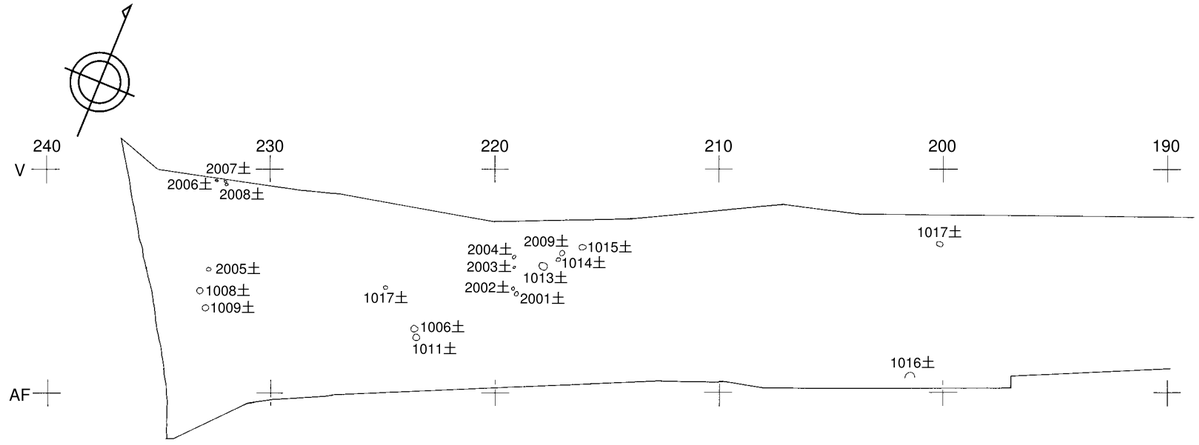
10月、確認した全ての土坑の精査は困難と思われＸ～ＡＡ－149～153範囲での土坑の精査を主体に調査をおこなった。

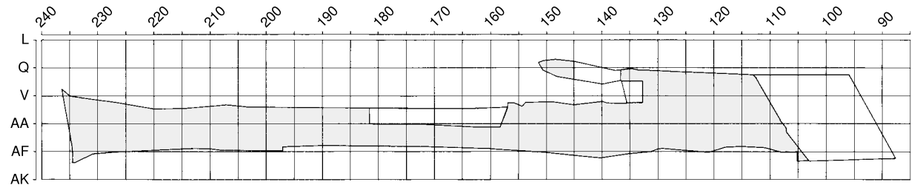
10月下旬　当初10月末までの予定であった調査期間を11月20日まで延長することとした。

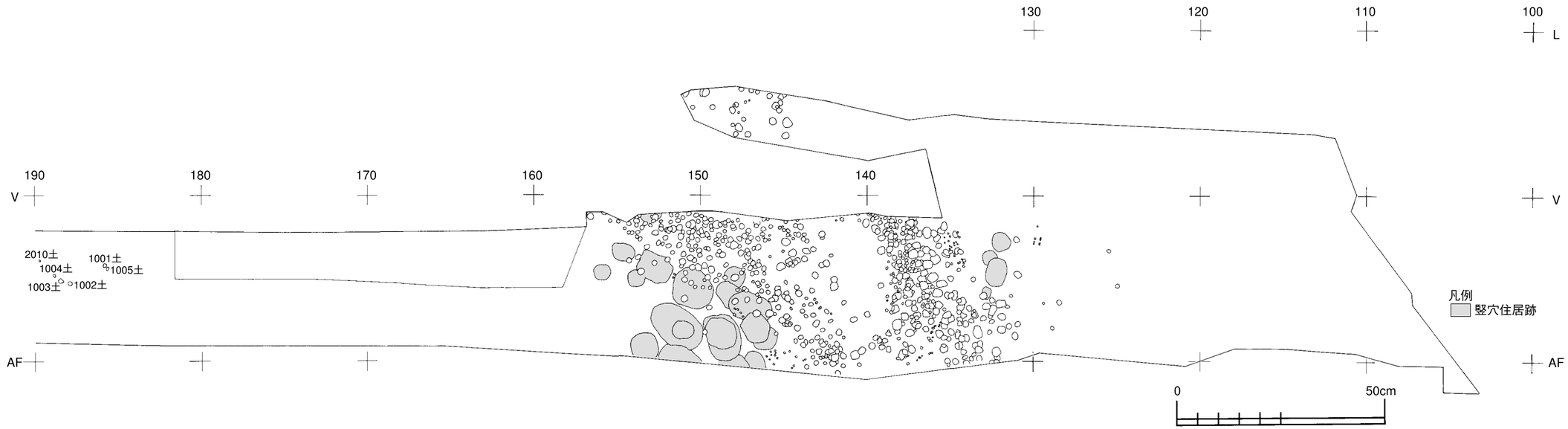
11月上旬　引き続き遺構精査を主体に調査を行った。また、越冬にあたっての環境整備も行った。

11月20日　調査終了式を行い、平成10年度の調査を終了した。検出遺構数は土坑96基である。出土遺物量は、段ボール箱換算で480箱であった。

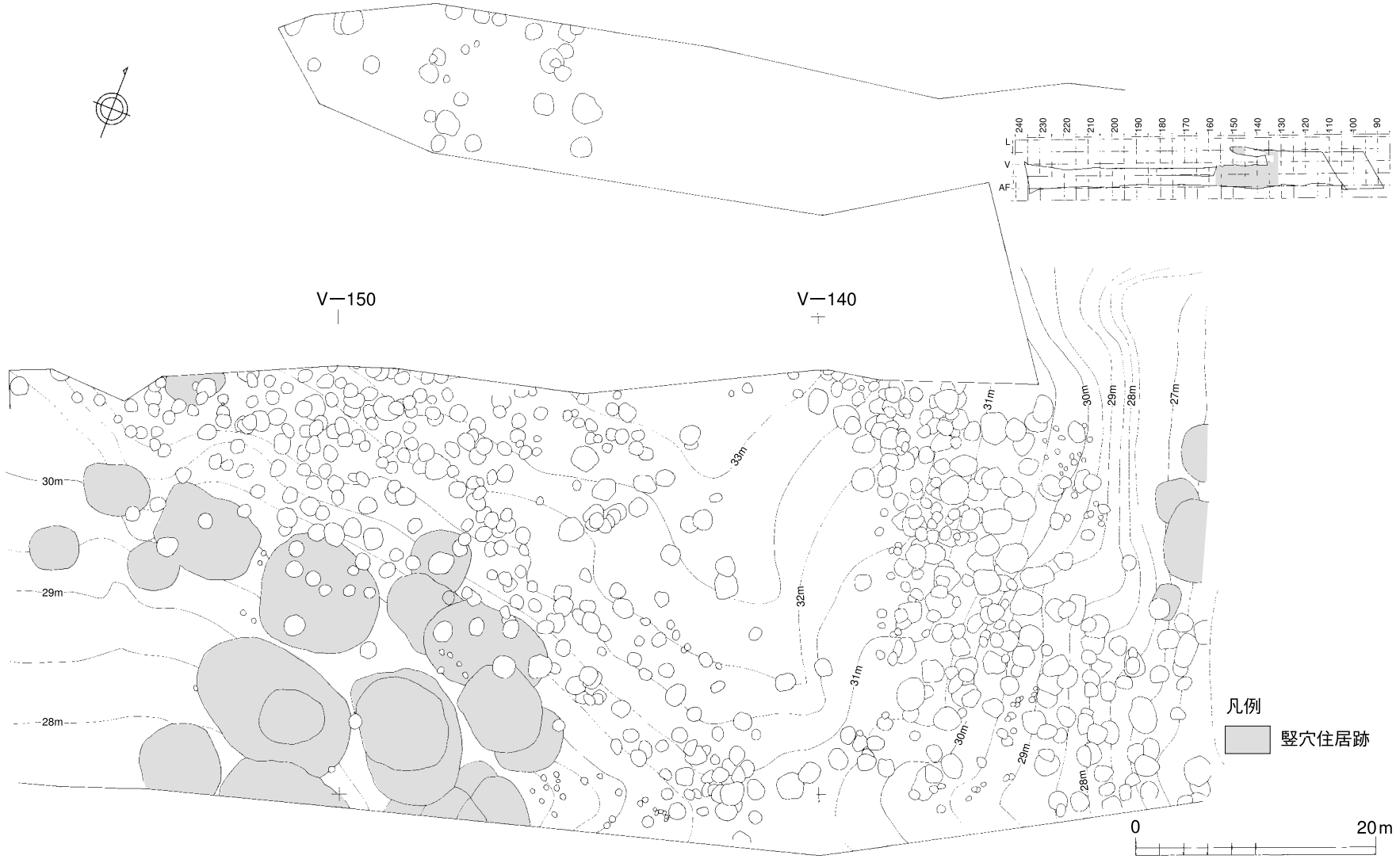
（小野）



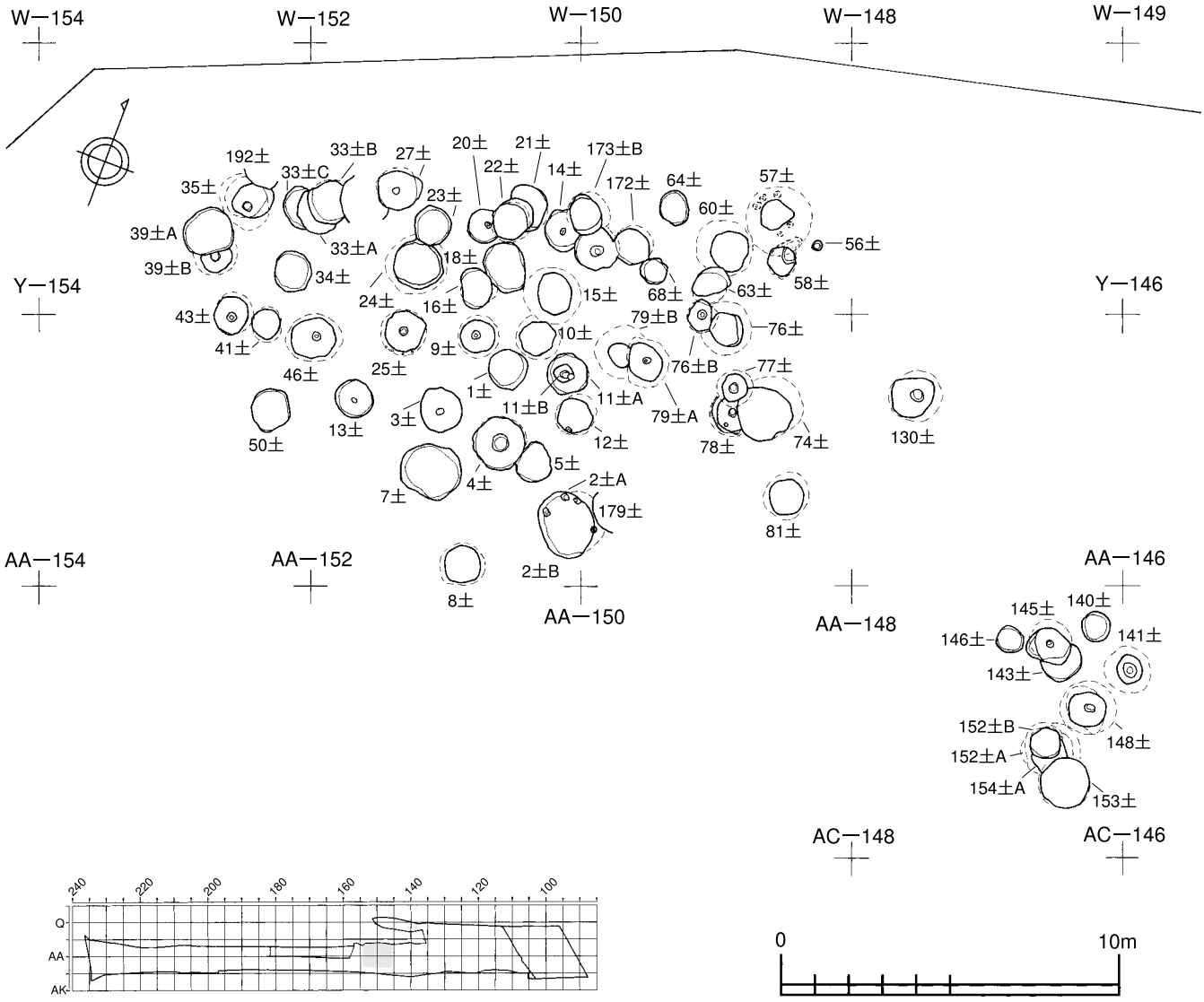




第8図　遺構配置概略図（1）



第9図　遺構配置概略図（1）



第10図　平成10年度遺構配置図

第３章　検出遺構と出土遺物

第１節　　検出遺構

１．土坑

第１号土坑（第11図）

［位置・確認層］Ｚ－150グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径118㎝、底面は推定で110㎝×102㎝、深さは28㎝である。

［壁］全体として外側へ緩やかな立ち上がりを呈する。北西側は一部オーバーハングする。

［底面］ほぼ平坦である。

［堆積土］黒褐色土が堆積し、パミスを含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］第１層より第Ⅱ群５ａ類土器（第31図27）、第Ⅳ群２ａ類ないし６類、４類土器（第31図28、29）が出土している。

［時期］出土遺物から縄文時代後期の土坑と思われる。

第２号土坑Ａ（第11図）

［位置・確認層］ＡＡ－149・150グリッドに位置する。第２号土坑Ｂ覆土において確認した。

［重複］第２号土坑Ｂと重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は14㎝×24㎝、底面は24㎝×16㎝、深さは37㎝である。

［壁］全体に西側に傾いて立ち上がる。

［底面］南側から北側へ傾斜が見られるが、ほぼ平坦である。

［堆積土］２層に分層した。第１層は褐色土が堆積し、人為堆積と思われる。

［出土遺物］覆土より石鏃３類２が１点（第45図１）、敲磨器２Ａ類が１点（第51図54）出土している。

［時期］出土遺物及び遺構間の重複関係から縄文時代後期の土坑と思われる。

第２号土坑Ｂ（第11図）

［位置・確認層］ＡＡ－149・150グリッドに位置する。Ⅳｃ層、Ⅴ層において確認した。その後、設定してあったベルトの観察でⅣａ層を掘り込む土坑であることを確認した。

［重複］第５号竪穴住居跡、第２号土坑Ａ、第179号土坑と重複し、本遺構は、第５号竪穴住居跡より新しく、第２号土坑Ａ、第179号土坑より古い。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は200㎝×148㎝、底面は長径182㎝、深さは86㎝である。

［壁］西側は外側へ直線的に立ち上がる。東側は、緩やかにオーバーハングしフラスコ状を呈する。

［底面］起伏があるがほぼ平坦である。西側の壁際、北側及び西側の壁よりに合計３基の底面ピットを有する。

［堆積土］７層に分層した。第１層の黒褐色土はⅣａ層に相当すると思われる。黒褐～褐色土を主体とし、パミス、ロームを含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、第５、２層より第Ⅱ群３類、５ａ類土器（第31図34、36）、第６、５、３、１層、覆土より第Ⅳ群１～２類、２類、２ｂ類、３～４類、４類、５類、８類土器（第26図１、第31図30～33、35、37、38）が出土している。石器は、第６層より不定形石器１Ｃ類が１点（第45図４）、１Ｄ類が１点（第45図３）、第２層より不定形石器１Ａ類が１点（第45図２）出土している。土製品は、覆土より土器片利用土製品が３点（第55図１～３）出土している。石製品は、覆土より円形岩版が２点（第56図１、２）出土している。

［時期］出土遺物及び遺構間の重複関係から縄文時代後期の土坑と思われる。

第３号土坑（第11図）

［位置・確認層］Ｚ－150・151グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径130㎝、底面は長径120㎝、深さは20㎝である。

［壁］やや外側へ直線的に立ち上がる。

［底面］西側から東側へ若干の傾斜を有するが、ほぼ平坦である。中央部に底面ピットを有する。

［堆積土］２層に分層した。黒褐色土が堆積し、ＬＢを含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、第１層より第Ⅱ群７類土器（第31図39）、第１層、覆土より第Ⅳ群１～２類、２類、３類、５類土器等（第31図40～45）が出土している。石器は、第１層より石鏃３類２が１点（第45図５）出土している。石製品は、第１層より有孔石製品が１点（第56図３）出土している。

［時期］出土遺物から縄文時代後期の土坑と思われる。

第４号土坑（第11図）

［位置・確認層］Ｚ・ＡＡ－150グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。

［重複］第５号土坑と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径150㎝、底面は長径150㎝、深さは26㎝である。

［壁］北東側は若干オーバーハングして立ち上がる。南西側はやや外側に直線的に立ち上がる。

［底面］ほぼ平坦である。中央部に底面ピットを有する。

［堆積土］９層に分層した。黒褐色土を主体とし、ＬＢ、パミスを含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、第９層より第Ⅱ群７類土器（第31図46）、第９、７～４、２層、覆土より第Ⅳ群土器、第Ⅳ群２ａ類、３類、３～４類、４類、７類、10類土器（第26図２、第31・32図47～55）が出土している。石器は、第５層より、不定形石器１Ｃ類が１点（第45図７）、覆土より石鏃３類２が１点（第45図６）出土している。

［時期］出土遺物及び遺構間の重複関係から縄文時代後期の土坑と思われる。

第５号土坑（第11図）

［位置・確認層］Ｚ・ＡＡ－149・150グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。

［重複］第４号土坑と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］平面形は不整な円形で、開口部は最長119㎝、底面は最長119㎝、深さは12㎝である。

［壁］北側は、わずかしか壁を検出していない。南側は外側に緩やかに立ち上がる。

［底面］南側から北側に若干傾斜しているがほぼ平坦である。
［堆積土］黒褐色土が堆積している。
［出土遺物］土器は、第１層より第Ⅱ群７類土器（第32図59、60、64）、第Ⅳ群４類、５類、６類、７類、８類、10類土器（第32図56～58、61～63）が出土している。
［時期］出土遺物から縄文時代後期の土坑と思われる。

第７号土坑（第12図）
［位置・確認層］Ｚ・ＡＡ－150・151グリッドに位置する。第Ⅳｃ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は174㎝×158㎝、底面は157㎝×136㎝、深さは45㎝である。
［壁］一部外側に屈曲するが、おおむね底面より直線的に立ち上がる。
［底面］若干の起伏が見られるがほぼ平坦である。
［堆積土］第４層に分層した。黒～暗褐色土を主体としパミスを含む、人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、覆土より第Ⅱ群３類、５ａ類土器（第32図65、66）、第Ⅳ群土器（第32図69）、Ⅳ群２ｂ～３類、４類、５類土器等（第32図67、68、70、71）が出土している。土製品は、覆土より多孔土製品が１点（第55図４）出土している。
［時期］出土遺物から縄文時代後期の土坑と思われる。

第８号土坑（第12図）
［位置・確認層］ＡＡ・ＡＢ－150・151グリッドに位置する。第Ⅳａ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径106㎝、底面は長径138㎝、深さは109㎝である。
［壁］オーバーハングし、フラスコ状を呈する。
［底面］ほぼ平坦である。
［堆積土］25層に分層した。覆土全体に炭化物、ローム、角礫等を多量に含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第11、８、４層、覆土より第Ⅳ群土器（第32図72）、第Ⅳ群２ａ類、５類、７類土器（第26図３、32図73、74）が出土している。石器は、第４層より敲磨器２Ａ類が１点（第51図57）、覆土より不定形石器１Ｃ類が１点（第45図８）、敲磨器１Ａ類が２点（第51図55、59）、２Ａ類が１点（第51図56）、４Ｄ類が１点（第51図58）出土している。石製品は、覆土より円形岩版が２点（第56図４、５）出土している。
［時期］遺構確認層及び出土遺物から縄文時代後期の土坑と思われる。

第９号土坑（第12図）
［位置・確認層］Ｚ－150グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は106㎝×98㎝、底面は130㎝×116㎝、深さは56㎝である。
［壁］オーバーハングし、袋状を呈する。
［底面］北側から南側に若干傾斜するが、ほぼ平坦である。中央部に底面ピットを有する。

［堆積土］５層に分層した。褐色土を主体としＬＢ、円礫を多量に含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、覆土より第Ⅱ群５ａ類、７類（第32図75、76）、第Ⅳ群４類、５類土器（第26図４、５、第32図77～80）が出土している。石器は、第２層より、磨製石斧Ａ類が１点（第51図60）、覆土より石皿Ｂ類が１点（第51図61）出土している。
［時期］出土遺物から縄文時代後期の土坑と思われる。

第10号土坑（第12図）
［位置・確認層］Ｚ－150グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。
［重複］第15号土坑と重複し、本遺構が古い。
［平面形・規模］平面形は不整な円形で、開口部は110㎝×96㎝、底面は長径133㎝、深さは42㎝である。
［壁］オーバーハングし、袋状を呈する。
［底面］ほぼ平坦である。
［堆積土］黒褐色土が堆積している。パミスを含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第１層より第Ⅱ群５ａ類、７類土器（第32図81、82）が出土している。石器は、第１層より不定形石器１Ａ類が３点（第45図９～11）出土している。
［時期］出土遺物から縄文時代前期の土坑と思われる。

第11号土坑Ａ（第12図）
［位置・確認層］Ｚ－149・150グリッドに位置する。第Ⅵ層において確認した。その後設定してあったベルトの観察でⅣａ層を掘り込む土坑であることを確認した。
［重複］第11号土坑Ｂと重複し、本遺構が新しい。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径121㎝、底面は長径114㎝、深さは26㎝である。
［壁］一部オーバーハングする個所も見られるが、他は全体として外側へ緩やかに立ち上がる。
［底面］ほぼ平坦である。やや中央に底面ピットを有する。
［堆積土］黒褐色土が堆積する。パミスを含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］石器は、第１層より石鏃２類１が１点（第45図12）出土している。
［時期］遺構確認層及び出土遺物から縄文時代後期の土坑と思われる。

第11号土坑Ｂ（第12図）
［位置・確認層］Ｚ－149・150グリッドに位置する。第11号土坑Ａの底面において、第11号土坑Ａより古い、土坑底面の一部と底面ピットを確認した。
［重複］第11号土坑Ａと重複し、本遺構が古い。
［平面形・規模］平面形、規模は不明である。
［壁］不明である。
［底面］残存する底面はほぼ平坦である。底面ピットを有する。
［堆積土］底面ピット堆積土も含め２層に分層した。第２層は、パミスを含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］なし。
［時期］遺構間の重複関係から縄文時代後期以前の土坑と思われる。

第12号土坑（第13図）

［位置・確認層］Ｚ－149・150グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。その後設定してあったベルトの観察によりⅣａ層を掘り込む土坑であることを確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径103㎝、底面は長径127㎝、深さは57㎝である。

［壁］オーバーハングし、袋状を呈する。

［底面］北東側から南西側へ傾斜が見られる。南側壁際に底面ピットを有する。

［堆積土］底面ピット堆積土を含め８層に分層した。第１～４層の覆土上層は、暗褐色土を主体とする。人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、第１層、覆土より第Ⅱ群７類土器（第33図83、84、86)、第Ⅳ群４類（第26図６)、７類土器（第33図85、87）が出土している。土製品は、覆土より笠形土製品が１点（第55図５）出土している。

［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第13号土坑（第13図）

［位置・確認層］Ｚ－151グリッドに位置する。第Ⅳ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径112㎝、底面は長径103㎝、深さは41㎝である。

［壁］外側にやや湾曲して立ち上がる。

［底面］北側から南側に若干の傾斜が見られるが、ほぼ平坦である。

［堆積土］５層に分層した。自然堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、覆土より第Ⅱ群５ａ類、７類土器（第33図88、89)、第Ⅳ群土器（第33図94)、第Ⅳ群２ｂ類、３類、４類、５類、８類土器（第33図90、91、92、93、95）が出土している。

［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第14号土坑（第13図）

［位置・確認層］Ｙ－150グリッドに位置する。第Ⅵ層において確認した。

［重複］173号土坑Ａ、173号土坑Ｂと重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径120㎝、底面は長径98㎝、深さは21㎝である。

［壁］外側へ直線的に立ち上がる。

［底面］ほぼ平坦である。中央に底面ピットを有する。

［堆積土］６層に分層した。黒褐色土が堆積する。自然堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、覆土より第Ⅱ群３類土器（第33図96)、第Ⅳ群６類、８類土器（第33図97、98、99）が出土している。石器は、覆土より石鏃２類２が１点(第45図13）出土している。

［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第15号土坑（第13図）

［位置・確認層］Ｚ・Ｙ－150グリッドに位置する。第Ⅳａ層において確認した。

［重複］第10号土坑と重複し、本遺構が新しい。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径102㎝、底面は長径168㎝、深さは133㎝である。
［壁］オーバーハングし、袋状を呈する。
［底面］若干の起伏が見られるがほぼ平坦である。
［堆積土］９層に分層した。褐～暗褐色土を主体とし、角礫を含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第９、１層、覆土より第Ⅳ群４類、４ないし６類、６類、11類土器（第26図７、第33図100、101、102）が出土している。石器は、第１層より敲磨器３類が１点（第51図62）出土している。水晶は、第４層より１点（第45図14）が出土している。
［時期］遺構確認層及び出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第16号土坑（第13図）
［位置・確認層］Ｙ－150グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。
［重複］第18号土坑と重複し、本遺構が新しい。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は102㎝×92㎝、底面は長径110㎝、深さは88㎝である。
［壁］オーバーハングし、袋状を呈する。
［底面］若干の起伏が見られるがほぼ平坦である。
［堆積土］14層に分層した。褐～暗褐色土を主体とし、ＬＢ、炭化物を含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第14、13、１層より第Ⅱ群７類土器（第33図103、104、105、116）、第13、12、10、９、７、２、１層、覆土より第Ⅳ群土器（第33図107、109、114）、第Ⅳ群２類、４類、５類、６類土器（第26図８、第33図106、108、110、111、112、113、115、117、118）が出土している。石器は、第13層より不定形石器１Ｄ類が１点（第46図15）出土している。
［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第18号土坑（第14図）
［位置・確認層］Ｙ－150グリッドに位置する。第Ⅵ層において確認した。
［重複］第16号土坑と重複し、本遺構が古い。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は150㎝×118㎝、底面は140×110㎝、深さは12㎝である。
［壁］外側に緩やかに立ち上がる。
［底面］北側から南側へ若干の起伏が見られるが、ほぼ平坦である。
［堆積土］埋設されたと思われる土器内部も含め４層に分層した。黄褐色土を主体とする。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第３、４層より第Ⅱ群５ａ類土器（第27図９）が出土している。石器は、第３層より、敲磨器１Ｂ類が１点（第52図63）、２Ａ類が１点（第52図64）、２Ｃ類が１点（第52図65）出土している。
［時期］出土遺物より縄文時代前期の土坑と思われる。

第20号土坑（第14図）
［位置・確認層］Ｙ－150グリッドに位置する。第Ⅵ層において確認した。

［重複］第22号土坑と重複し、本遺構が古い。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径98㎝、底面は長径94㎝、深さは77㎝である。
［壁］全体として若干オーバーハングする。袋状を呈する。
［底面］起伏があるが、ほぼ平坦である。
［堆積土］３層に分層した。褐～暗褐色土が堆積する。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、覆土より第Ⅱ群７類土器（第34図119、120)、Ⅳ群土器（第34図121、122）が出土している。
［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第21号土坑（第14図）
［位置・確認層］Ｙ－150グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］第20号土坑、第198号土坑と重複し、本遺構は、第20号土坑より古く、第198号土坑より新しい。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径116㎝、底面は長径130㎝、深さは58㎝である。
［壁］オーバーハングし、袋状を呈する。
［底面］外側から中央部へ若干の傾斜が見られるが、ほぼ平坦である。中央に底面ピットを有する。
［堆積土］４層に分層した。明褐～黒褐色土が堆積する。第１～３層は、ＬＢを含む。第４層の黒褐色土は円礫を含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、覆土より第Ⅱ群３類土器（第34図126)、第３、２層、覆土より第Ⅳ群土器（第34図123、124、133)、第Ⅳ群４類、５類、６類、８類土器（第34図125、127～132、134、135）が出土している。石器は、覆土より敲磨器２Ｂ類が１点（第52図66）出土している。
［時期］遺構間の重複関係及び出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第22号土坑（第14図）
［位置・確認層］Ｙ－150グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］第20号土坑、第21号土坑と重複し、本遺構が新しい。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径104㎝、底面は長径114㎝、深さは103㎝である。
［壁］全体として南西側へ若干オーバーハングする。袋状を呈する。
［底面］北側から南側へ傾斜する。
［堆積土］８層に分層した。赤褐～黒褐色土が堆積している。全体に炭化物、ロームを含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第６、３層より第Ⅱ群５ａ類、７類土器（第34図137、139)、第８、６、３、２層、覆土より第Ⅳ群４～６類、５類、６類、11類土器（第34図136、138、140～146）が出土している。石器は、第６、５層より不定形石器１Ａ類が各１点（第46図16、17）出土している。土製品は、第３層、覆土より土器片利用土製品が各１点（第55図６、７）出土している。
［時期］遺構間の重複関係及び出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第23号土坑（第14図）
［位置・確認層］Ｙ－150、151グリッドに位置する。第Ⅵ層において確認した。

［重複］第24号土坑と重複し、本遺構が新しい。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径112㎝、底面は長径104㎝、深さは24㎝である。
［壁］外側に緩やかに立ち上がる。
［底面］外側から中央部に緩い傾斜が見られる。
［堆積土］２層に分層した。黒褐色土が堆積している。
［出土遺物］土器は、覆土より第Ⅱ群７類土器（第34図147、148）が出土している。
［時期］出土遺物より縄文時代前期の土坑と思われる。

第24号土坑（第15図）
［位置・確認層］Ｙ－150、151グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］第23号土坑と重複し、本遺構が古い。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は156㎝×140㎝、底面は長径182㎝、深さは61㎝である。
［壁］オーバーハングしフラスコ状を呈する。
［底面］若干中央に傾斜するがほぼ平坦である。
［堆積土］５層に分層した。暗褐色土を主体とする。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、覆土より第Ⅱ群３類、５ａ類、７類土器（第34図149～152）が出土している。石器は、覆土より不定形石器１Ｃ類が１点（第46図18）出土している。
［時期］遺構間の重複関係及び出土遺物より縄文時代前期の土坑と思われる。

第25号土坑（第15図）
［位置・確認層］Ｙ・Ｚ－151グリッドに位置する。第Ⅵ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径124㎝、底面は長径140㎝、深さは86㎝である。
［壁］オーバーハングし袋状を呈する。
［底面］若干の起伏が見られるがほぼ平坦である。中央に１基、壁際に小規模な５基の底面ピットを有する。
［堆積土］11層に分層した。暗～黒褐色土を主体とし、暗褐色土はＬＢ、パミスを多量に含む。９、11層黒褐色土はパミス、炭化物を含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第５、３、２層より第Ⅱ群５ａ類、７類土器（第35図155、156、160）、第11、８、３、２層、覆土より第Ⅳ群土器（第35図153、154）、第Ⅳ群４類、８類土器（第35図157、158、159、161、162）が出土している。石器は、第１層より不定形石器１Ｂ類が１点（第46図19）、敲磨器１Ａ類が１点（第52図67）出土している。
［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第27号土坑（第15図）
［位置・確認層］Ｘ・Ｙ－151グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］第26号土坑と重複し、本遺構が新しい。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径124㎝、底面は長径140㎝、深さは86㎝である。

［壁］若干オーバーハングし袋状を呈する。
［底面］若干の起伏が見られる。
［堆積土］15層に分層した。褐～黒褐色土が堆積し、覆土下層の黒褐色土は、円礫、ＬＢ、炭化物を含む。覆土上層の暗褐色土は、ＬＢ、炭化物を含む。第６層は、重複関係にある26土覆土の崩落土と思われる。第５層は、掘り返した可能性がある。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第１層、覆土より第Ⅱ群７類土器（第35図166、167)、第６層、覆土より第Ⅳ群土器（第35図163、164)、第Ⅳ群４類、６類土器（第35図165、168、169）が出土している。
［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第33号土坑Ａ（第15図）
［位置・確認層］Ｙ－152グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。
［重複］第33号土坑Ｂ、第33号土坑Ｃと重複し、本遺構は、第33号土坑Ｂより古く、第33号土坑Ｃより新しい。
［平面形・規模］平面形は不明である。開口部は最長86㎝、底面は長径146㎝、深さは92㎝である。
［壁］残存部はオーバーハングし、袋状を呈する。
［底面］ほぼ平坦である。
［堆積土］３層に分層した。暗～黒褐色土が堆積し、ＬＢ、炭化物を含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第２層より第Ⅱ群５ａ類、７類土器（第35図170、171)、第２層、覆土より第Ⅳ群土器（第35図172)、第Ⅳ群４類、８類土器（第35図173、174）が出土している。石器は、第２層より石鏃２類２が１点（第46図20）出土している。
［時期］遺構間の重複関係及び出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第33号土坑Ｂ（第15図）
［位置・確認層］Ｙ－151、152グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。
［重複］第26号土坑、第33号土坑Ａと重複し、本遺構は、第26号土坑より古く、第33号土坑Ａより新しい。
［平面形・規模］平面形は不整な円形で、開口部は最長96㎝、底面は長径116㎝、深さは109㎝である。
［壁］オーバーハングし袋状を呈する。
［底面］東側から西側への傾斜が見られる。
［堆積土］６層に分層した。暗～黒褐色土が堆積し、黒褐色土は、ＬＢ、パミス、炭化物、円礫を含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第５層、覆土より第Ⅱ群３類、７類土器（第35図177、182)、第６～２層、覆土より第Ⅳ群４類、５類、６類、７類、８類土器（第35・36図175、176、178～181、183～188）が出土している。石器は、覆土より不定形石器１Ａ類が１点（第47図21)、１Ｃ類が１点（第47図22)、敲磨器１Ａ類が１点（第52図68）出土している。水晶は、第１層より１点（第47図23）が出土している。土製品は、第２層より土器片利用土製品が１点（第55図８）出土している。
［時期］遺構間の重複関係及び出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第33号土坑Ｃ（第15図）

［位置・確認層］Ｙ－152グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。

［重複］第33号土坑Ａと重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］平面形は不明である。開口部は長径122㎝、底面は長径102㎝、深さは44㎝である。

［壁］外側へ緩やかに立ち上がる。

［底面］南側から北側への傾斜が見られる。

［堆積土］黒褐色土が堆積し、炭化物、ＬＢを含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、１層より第Ⅳ群４類、８類（第36図189、190、191）土器が出土している。石器は、第１層より石鏃２類２が１点（第47図24）出土している。

［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第34号土坑（第16図）

［位置・確認層］Ｙ－151、152グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径116㎝、底面は長径105㎝、深さは109㎝である。

［壁］全体として外側へ直線的に立ち上がる。東側は一部内側へ屈曲する。

［底面］起伏があるがおおむね平坦である。

［堆積土］９層に分層した。褐～暗褐色土を主体とし、炭化物、ローム、円礫を含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、第９層、覆土より第Ⅱ群３類、７類土器（第36図192、205）、第９、８、３～１層より第Ⅳ群４類、５類、６類、７類、８類土器（第36・37図193～204）が出土している。石器は、第１層より石錘１類が１点（第52図69）出土している。

［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第35号土坑（第16図）

［位置・確認層］Ｘ・Ｙ－152グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。

［重複］第192号土坑と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は125㎝×102㎝、底面は長径121㎝、深さは79㎝である。

［壁］全体として強くオーバーハングしフラスコ状を呈する。

［底面］南東側の壁際から中央部に傾斜が見られる。中央部はほぼ平坦である。南側に底面ピットを有する。

［堆積土］５層に分層した。褐～暗褐色土を主体とし、ロームを多量に含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、第３層より第Ⅱ群７類土器（第37図208）、第５～１層より第Ⅳ群４類、８類土器（第37図206、207、209、210、211）が出土している。石器は、覆土より石鏃３類１が１点（第47図25）出土している。

［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第39号土坑Ａ（第16図）

［位置・確認層］Ｙ－152グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。

［重複］第39号土坑Ｂと重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］平面形は不整な円形で、開口部は長径153㎝、底面は長径144㎝、深さは48㎝である。

［壁］全体として外側へ直線的に立ち上がる。一部オーバーハングする。脆弱である。

［底面］起伏が激しい。

［堆積土］５層に分層した。暗～黒褐色土がブロック状に堆積し、黒褐色土はパミスを含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］なし。

［時期］遺構間の重複関係より縄文時代後期以後の土坑と思われる。

第39号土坑Ｂ（第16図）

［位置・確認層］Ｙ－152グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。

［重複］第39号土坑Ａと重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径92㎝、底面は長径130㎝、深さは113㎝である。

［壁］オーバーハングし袋状を呈する。

［底面］中央部から北側へ若干の傾斜が見られるが、ほぼ平坦である。ほぼ中央部に底面ピットを有する。

［堆積土］12層に分層した。褐～暗褐色土を主体とし、炭化物を含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、第12、４層より第Ⅱ群３類、７類土器（第37図214、223）、第12～９、６、５、３層より第Ⅳ群土器（第37図220）、第Ⅳ群４類、５類、８類土器（第37図212、213、215～219、221、222、224、225）が出土している。石器は、第４層より敲磨器４Ａ類が１点（第52図70）、覆土より石匙２類が１点（第47図26）出土している。土製品は、第３、５、８層より土器片利用土製品が各１点（第55図９、10、11）出土している。

［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第41号土坑（第16図）

［位置・確認層］Ｙ・Ｚ－152グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は91㎝×80㎝、底面は105㎝×88㎝、深さは28㎝である。

［壁］オーバーハングし袋状を呈する。

［底面］中央部への傾斜が見られるが、ほぼ平坦である。

［堆積土］５層に分層した。褐～黒褐色土が堆積し、第２、４層の黒褐色土は炭化物、パミスを含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、第４、１層より第Ⅱ群７類（第37図226、232）土器、第４、２、１層、覆土より第Ⅳ群４類、５類、７類、８類、９類土器（第27図10、第37図227～231、233）が出土している。

［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第43号土坑（第17図）

［位置・確認層］Ｙ・Ｚ－152グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。その後設定してあったベルトの観察で第Ⅳａ層を掘り込む土坑であることを確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径110㎝、底面は長径126㎝、深さは180㎝である。

［壁］オーバーハングし袋状を呈する。

［底面］中央部に向かう傾斜が見られる。中央部に底面ピットを有する。

［堆積土］９層に分層した。褐～黒褐色土が堆積し、黒褐色土は、パミス、炭化物、ＬＢを含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、第５層より第Ⅱ群７類土器（第38図234)、第５、４層より第Ⅳ群２ｂ類、４類、４～５類、５類、８類土器（第38図235～240）が出土している。石器は、第４層、覆土より不定形石器２類が各１点（第47図27、28）出土している。土製品は第４層より土器片利用土製品が１点（第55図12）出土している。

［時期］遺構確認層及び出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第46号土坑（第17図）

［位置・確認層］Ｚ－151・152グリッドに位置する。第Ⅵ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は134㎝×116㎝、底面は166㎝×140㎝、深さは66㎝である。

［壁］オーバーハングし袋状を呈する。

［底面］北側から南側へ傾斜が見られるが、ほぼ平坦である。ほぼ中央部に底面ピットを有する。

［堆積土］７層に分層した。褐～黒褐色土が堆積し、第１、２、４層の黒褐色土は、パミス、炭化物を含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、第７、５層より第Ⅱ群７類土器（第38図241、243)、第７、５、４、２、１層より第Ⅳ群土器（第38図253、254)、第Ⅳ群２～４類、４類、４～６類、５類、５～６類、７類、８類、９類土器（第38図242、244～252、255、256）が出土している。石器は、第５層より不定形石器１Ｂ類が１点（第48図30)、第１層より不定形石器１Ｃ類が１点（第47図29)、石錘１類が１点（第52図71）出土している。土製品は、第１層より土器片利用土製品が３点（第55図13、14、15)、覆土より土器片利用土製品が１点（第55図16）出土している。石製品は、覆土より円形岩版が１点（第56図６）出土している。

［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第50号土坑（第17図）

［位置・確認層］Ｚ－152グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径118㎝、底面は長径118㎝、深さは20㎝である。

［壁］外側へ直線的に立ち上がる。北東側は、一部オーバーハングする。

［底面］起伏が見られる。

［堆積土］黒褐色土が堆積する。炭化物を含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第１層より第Ⅱ群５ａ類、７類土器（第38図257、258)、第Ⅳ群２類、４類、５類土器（第38図259～262）が出土している。石器は、第１層より石鏃３類３が１点（第48図31）出土している。
［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第56号土坑（第17図）
［位置・確認層］Ｙ－148グリッドに位置する。第Ⅵ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は30㎝×24㎝、底面は22㎝×17㎝、深さは14㎝である。
［壁］外側へ直線的に立ち上がる。
［底面］壁際から中央部へ緩く傾斜し、中央部は若干丸みを帯びている。
［堆積土］暗褐色土が堆積している。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第１層より第Ⅱ群７類土器（第38図264)、第Ⅳ群土器（第38図263）が出土している。
［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第57号土坑（第17図）
［位置・確認層］Ｙ－148グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。また開口部周囲を取り囲むように５基のピットを確認し、本遺構に付属するものと思われたため一括して記載する。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は最長100㎝、底面は204㎝×195㎝、深さは125㎝である。
［壁］オーバーハングし袋状を呈する。
［底面］西側から東側へ傾斜が見られる。南西側の壁際に楕円形の底面ピットを有する。
［堆積土］14層に分層した。褐～暗褐色土を主体とし、パミス、炭化物を含む。人為堆積と思われる。付属すると思われる各ピットは褐～暗褐色土が堆積する。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第12、10、７～５、１層、覆土より第Ⅱ群５ａ類土器（第27図11、第39図265、266、267、268、269、270)、覆土より第Ⅳ群土器が出土している。ピット１より第Ⅱ群７類土器（第39図271）が出土している。覆土から第Ⅳ群６類土器（第39図272）がわずかに出土しているものの、出土層位を確認したものは全て第Ⅱ群土器であり、完形品も含んでいる。石器は、第６層より敲磨器４Ｂ類が１点（第53図73)、覆土より石匙２類が１点（第48図32)、不定形石器３類が１点（第48図33)、半円状扁平打製石器が１点（第53図72）出土している。
［時期］出土遺物及びその出土状況より、縄文時代前期の土坑と思われる。

第58号土坑（第18図）
［位置・確認層］Ｙ－148グリッドに位置する。第Ⅵ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径86㎝、底面は最長108㎝、深さは41㎝である。

［壁］全体として、オーバーハングし、袋状を呈する。西壁は一部直線的に立ち上がる。
［底面］北東側の壁際に底面ピットを有する。壁際から中央部に傾斜が見られる。
［堆積土］４層に分層した。暗褐色土を主体とし、ＬＢ、角礫を含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、覆土より第Ⅱ群３類、７類土器（第39図275、276)、第３、２層、覆土より第Ⅳ群４類、６類土器（第39図273、274、277）が出土している。
［時期］出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第60号土坑（第18図）
［位置・確認層］Ｙ－148・149グリッドに位置する。第Ⅵ層において確認した。
［重複］第63号土坑と重複し、本遺構が古い。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径119㎝、底面は長径173㎝、深さは158㎝である。
［壁］オーバーハングし、フラスコ状を呈する。
［底面］壁際から中央部に傾斜が見られる。
［堆積土］29層に分層した。褐～暗褐色土を主体とし、ＬＢ、炭化物、角礫を含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第３～１層より第Ⅳ群４類、６類土器（第39図278、279、280）が出土している。石器は、覆土より石篦４類が１点（第48図34）出土している。土製品は、覆土より土器片利用土製品が２点（第55図17、18）出土している。
［時期］出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第63号土坑（第18図）
［位置・確認層］Ｙ－148・149グリッドに位置する。第Ⅵ層において確認した。
［重複］第60号土坑、第76号土坑Ｂと重複し、本遺構は第60号土坑より新しく第76号土坑Ｂより古い。
［平面形・規模］平面形は不整な円形で、開口部は長径116㎝、底面は最長116㎝、深さは90㎝である。
［壁］全体としてオーバーハングし、袋状を呈する。
［底面］若干の起伏がみられるがほぼ平坦である。
［堆積土］９層に分層した。第２層、第４層は、第３層中にブロック状に存在する。褐～暗褐色土を主体とし、覆土下層の黒褐色土もＬＢ、炭化物等を含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第５層、覆土より第Ⅱ群３類土器（第39図284、285)、第４、１層、覆土より第Ⅳ群土器（第39図281)、第Ⅳ群４類、６類土器（第39図282、283）が出土している。土製品は、覆土より土器片利用土製品が３点（第55図19～21）出土している。
［時期］遺構間の重複関係及び出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第64号土坑（第18図）
［位置・確認層］Ｙ－149グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］第65号土坑と重複し、本遺構が新しい。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は102㎝×86㎝、底面は90㎝×64㎝、深さは17㎝である。
［壁］外側へ緩やかに立ち上がる。

［底面］壁際から中央部に傾斜が見られる。
［堆積土］３層に分層した。暗褐色土が堆積する。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第２層、覆土より第Ⅳ群４類、６類土器（第40図286、287、288）が出土している。石器は、覆土より磨製石斧Ａ類が１点（第53図74）出土している。
［時期］出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第68号土坑（第18図）
［位置・確認層］Ｙ－149グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］第172号土坑と重複し、本遺構が古い。
［平面形・規模］平面形は不整な円形で、開口部は長径82㎝、底面は長径71㎝、深さは14㎝である。
［壁］外側へ緩やかに立ち上がる。
［底面］西側から東側に傾斜が見られる。また、若干の起伏が見られる。
［堆積土］黒褐色土が堆積する。
［出土遺物］土器は、第１層より第Ⅱ群７類土器（第40図289）、第Ⅳ群５類、６類、８類土器（第40図290、291、292）が出土している。
［時期］出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第74号土坑（第18図）
［位置・確認層］Ｚ－148グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。
［重複］第77号土坑、第78号土坑と重複し、本遺構は、第77号土坑より古く、第78号土坑より新しい。
［平面形・規模］平面形は不整な円形で、開口部は長径171㎝、底面は最長204㎝、深さは58㎝である。
［壁］全体としてオーバーハングし、袋状を呈する。北東側は、外側に立ち上がる。
［底面］東側から西側に傾斜が見られる。
［堆積土］３層に分層した。黒～暗褐色土を主体とし、パミス、炭化物、ＬＢを含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第２層、覆土より第Ⅱ群３類、７類土器（第40図294、297、298）、第３、１層、覆土より第Ⅳ群土器（第40図293、296）、第Ⅳ群３類、６類土器（第40図295、299、300）が出土している。石器は、第１層より半円状扁平打製石器が１点（第53図76）、石錘２類が１点（第53図75）、覆土より石匙１類が１点（第48図35）出土している。
［時期］出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第76号土坑Ａ（第19図）
［位置・確認層］Ｙ・Ｚ－149グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。
［重複］第76号土坑Ｂと重複し、本遺構が古い。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径107㎝、底面は長径158㎝、深さは231㎝である。
［壁］オーバーハングし、フラスコ状を呈する。
［底面］若干の起伏があるがおおむね平坦である。
［堆積土］12層に分層した。褐～暗褐色土を主体とし、パミス、ＬＢ、角礫、炭化物を含む。人為堆積

と思われる。

［出土遺物］土器は、第12、11、９層より第Ⅱ群３類、５ａ類土器（第27図12、第40図301、302、303、304）が出土している。石器は、第９層より不定形石器１Ａ類が１点（第48図37)、覆土より石匙１類が１点（第48図36)、磨製石斧Ｃ類が１点（第53図77)、敲磨器１Ｂ類が１点（第53図78）出土している。

［時期］出土遺物より、縄文時代前期の土坑と思われる。

第76号土坑Ｂ（第19図）

［位置・確認層］Ｙ・Ｚ－149グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。

［重複］第63号土坑、第76号土坑Ａと重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］平面形は不整な円形で、開口部は長径75㎝、底面は長径167㎝、深さは84㎝である。

［壁］オーバーハングし、袋状を呈する。北側は一部外側へ立ち上がる。

［底面］底面ほぼ中央部に底面ピットを有する。平坦である。

［堆積土］底面ピット堆積土も含め11層に分層した。明褐～暗褐色土を主体とし、黒褐色土は炭化物、パミスを含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、第10、６層より第Ⅱ群７類土器（第40図305、307)、第10層より第Ⅳ群土器（第40図306）が出土している。

［時期］出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第77号土坑（第19図）

［位置・確認層］Ｙ－148、149グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。

［重複］第74号土坑、第78号土坑と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径80㎝、底面は長径108㎝、深さは82㎝である。

［壁］オーバーハングし、袋状を呈する。

［底面］若干の起伏を有し、壁際から中央部に傾斜が見られる。中央部に底面ピットを有する。

［堆積土］４層に分層した。第１層は、暗褐色土であり、人為堆積と思われる。第２、４層は、黒褐色土である。自然堆積か人為堆積か判然としない。第３層は第Ⅴ層崩落土の可能性があると思われる。

［出土遺物］土器は、第３、１層、覆土より第Ⅳ群３類、４～６類、６類、８類土器（第28図13、第40図308～312）が出土している。

［時期］遺構間の重複関係及び出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第78号土坑（第19図）

［位置・確認層］Ｚ－148、149グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。

［重複］第74号土坑、第77号土坑と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］平面形は不明である。開口部は長径110㎝、底面は長径142㎝、深さは45㎝である。

［壁］残存部はオーバーハングし、袋状を呈する。

［底面］中央部及び南側に底面ピットを有する。壁際残存部を巡る溝を有する。

［堆積土］第３層に分層した。褐～暗褐色土を主体とする。人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、第２層より第Ⅱ群７類土器（第40図314）、第３～１層より第Ⅳ群土器（第40図315～318）、第Ⅳ群８類土器（第40図313）が出土している。石器は、第２層より敲磨器３類が１点（第53図79）、不定形石器１Ａ類が１点（第49図39）、第１層より不定形石器１Ａ類が１点（第49図40）、覆土より石鏃２類２が１点（第49図38）出土している。土製品は、覆土より土器片利用土製品（第55図22）１点が出土している。
［時期］出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第79号土坑Ａ（第19図）
［位置・確認層］Ｚ－149グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。
［重複］第79号土坑Ｂと重複し、本遺構が新しい。
［平面形・規模］平面形は不整な円形で、開口部は長径125㎝、底面は長径140㎝、深さは88㎝である。
［壁］全体としてオーバーハングし、フラスコ状を呈する。
［底面］南東側から北西側へ傾斜が見られる。中央部に底面ピットを有する。
［堆積土］底面ピット堆積土も含め７層に分層した。褐～暗褐色土を主体とし、ＬＢ、炭化物等を含む。４層は、炭化物を多量に含む黒色土である。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第６～４層より第Ⅱ群５ａ類、７類（第41図319、320、321、322）土器、第４層、覆土より第Ⅳ群４類土器（第41図323、324、325）が出土している。石器は、第５層より敲磨器２Ｃ類が１点（第53図81）、覆土より敲磨器４Ｂ類が１点（第53図80）出土している。土製品は、覆土より鐸形土製品が１点（第55図23）、環状土製品が１点（第55図24）、土器片利用土製品が２点（第55図25、26）出土している。石製品は、覆土より三角形岩版が１点（第56図７）出土している。
［時期］出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第79号土坑Ｂ（第19図）
［位置・確認層］Ｚ－149グリッドに位置する。第Ⅵ層において確認した。
［重複］第79号土坑Ａと重複し、本遺構が古い。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径75㎝、底面は長径167㎝、深さは84㎝である。
［壁］オーバーハングし、袋状を呈する。
［底面］壁際から中央部への傾斜が見られる。
［堆積土］７層に分層した。覆土上部は褐～暗褐色土を主体とし、第３、７層の黒褐色土はパミスを含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第６、４層、覆土より第Ⅱ群３類、５ａ類、７類土器（第41図326、327、328、329、330）が出土している。
［時期］出土遺物より、縄文時代前期の土坑と思われる。

第81号土坑（第20図）
［位置・確認層］ＡＡ－148グリッドに位置する。第Ⅳ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径106㎝、底面は長径136㎝、深さは90㎝である。

［壁］オーバーハングし、袋状を呈する。
［底面］南西側から北東側へ傾斜が見られる。
［堆積土］14層に分層した。褐～暗褐色土を主体とし、パミス、炭化物、ロームを含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、覆土より第Ⅱ群３類土器（第41図340)、第14、10、８、２、１層より第Ⅳ群４類、４～６類、５類、10類土器（第41図331～339）が出土している。石器は、第14層より不定形石器１Ｂ類が１点（第49図41)、覆土より敲磨器１Ａ類が１点（第54図82）出土している。
［時期］出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第130号土坑（第20図）
［位置・確認層］Ｚ－147グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は不整な円形で、開口部は最長124㎝、底面は長径156㎝、深さは107㎝である。
［壁］オーバーハングし、フラスコ状を呈する。
［底面］北西側から南東側へ傾斜が見られる。中央部に底面ピットを有する。
［堆積土］11層に分層した。褐～暗褐色土を主体とし、炭化物、ロームを含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、覆土より第Ⅱ群７類土器（第41図341、342)、第Ⅳ群４～６類、５類、６類土器（第28図14～16、第41図343～349）が出土している。石器は、覆土より石匙１類が１点、敲磨器２Ａ類が２点、敲磨器２Ｂ類が１点、敲磨器３類が１点出土している。
［時期］出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第140号土坑（第20図）
［位置・確認層］ＡＢ－146グリッドに位置する。第Ⅵ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径87㎝、底面は76㎝×70㎝、深さは57㎝である。
［壁］外側へ直線的に立ち上がる。
［底面］若干の起伏があるがおおむね平坦である。
［堆積土］第４層に分層した。暗褐色土を主体とする。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、覆土より第Ⅱ群７類土器（第42図350、351）が出土している。
［時期］出土遺物より、縄文時代前期の土坑と思われる。

第141号土坑（第20図）
［位置・確認層］ＡＢ－145、146グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径106㎝、底面は長径136㎝、深さは90㎝である。
［壁］オーバーハングし、袋状を呈する。
［底面］全体として壁際から中央部へ傾斜が見られる。
［堆積土］底面ピット堆積土も含め、11層に分層した。暗褐色土を主体とする。人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、覆土より第Ⅱ群７類土器（第42図353)、第Ⅳ群土器（第42図355、356)、第Ⅳ群２類、５類土器（第42図352、354）が出土している。石器は、覆土より石鏃３類２が１点（第49図42）出土している。
［時期］出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第143号土坑（第20図）
［位置・確認層］ＡＢ－146グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。
［重複］第145号土坑と重複し、本遺構が古い。
［平面形・規模］平面形は不明である。開口部は長径120㎝、底面は長径110㎝、深さは41㎝である。
［壁］南東側一部は若干外側に直線的に立ち上がるが、その他は、緩くオーバーハングし、全体として袋状を呈する。
［底面］壁際から中央部へ若干の傾斜が見られるが、ほぼ平坦である。
［堆積土］暗褐色土が堆積し、パミスを多量に含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第１層より第Ⅱ群７類土器（第42図357)、第Ⅳ群２ａ類、６類土器（第28図17、第42図358、359）が出土している。
［時期］遺構間の重複関係及び出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第145号土坑（第21図）
［位置・確認層］ＡＢ－146グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。
［重複］第143号土坑と重複し、本遺構が新しい。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は128㎝×97㎝、底面は長径124㎝、深さは131㎝である。
［壁］オーバーハングし、全体としてフラスコ状を呈する。
［底面］北東側から南西側に若干の傾斜が見られる。中央部に底面ピットを有する。
［堆積土］10層に分層した。暗褐色土を主体とする。第３、５、７、９、10層の黒～黒褐色土は第Ⅴ層崩落土の可能性がある。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第８層より第Ⅱ群７類土器（第42図360)、第８、４層、覆土より第Ⅳ群土器（第42図361、362)、第Ⅳ群５類、６類、８類土器（第42図363、364、365）が出土している。石器は、覆土より石匙１類が１点（第49図43）出土している。
［時期］出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第146号土坑（第21図）
［位置・確認層］ＡＢ－146グリッドに位置する。第Ⅵ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径80㎝、底面は長径76㎝、深さは14㎝である。
［壁］若干外側へ緩やかに立ち上がる。
［底面］起伏が見られる。南西側から北東側へ傾斜が見られる。
［堆積土］褐色土が堆積し、パミス、ＬＢを含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第１層より第Ⅳ群土器（第42図366、367）が出土している。石器は、覆土より不

定形石器１Ｆ類が１点（第49図44）出土している。
［時期］出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第148号土坑（第21図）
［位置・確認層］ＡＢ・ＡＣ－146グリッドに位置する。第Ⅴ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径109㎝、底面は長径166㎝、深さは140㎝である。
［壁］オーバーハングし、全体としてフラスコ状を呈する。
［底面］壁際から中央部に若干の傾斜が見られる。中央部に底面ピットを有する。
［堆積土］11層に分層した。褐～暗褐色土を主体とし、パミス、ＬＢ、炭化物を含む。第10層は崩落土の可能性がある。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第９、４、２層、覆土より第Ⅳ群５類、６類土器（第29図18～20、第42図368、369、370、371）が出土している。石器は、第９層より敲磨器３類が１点（第54図86）、石錘２類が１点（第54図84）、第４層より石皿Ｂ類が１点（第54図87）、第２層より敲磨器４Ｂ類が１点（第54図85）、覆土より石錘１類が１点（第54図83）出土している。土製品は、覆土よりミニチュア土器が１点（第55図27）出土している。石製品は、第２層より三角形岩版が１点（第56図８）出土している。
［時期］出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第152号土坑Ａ（第21図）
［位置・確認層］ＡＣ－146グリッドに位置する。第Ⅳａ層において確認した。
［重複］第152号土坑Ｂと重複し、本遺構が新しい。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径96㎝、底面は長径92㎝、深さは54㎝である。
［壁］西側は若干内側へ、東側は若干外側へ、おおむね直線的に立ち上がる。
［底面］起伏が見られる。
［堆積土］赤褐色土が堆積する。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、第１層より第Ⅱ群７類土器（第43図373）、第Ⅳ群２ｂ類土器（第43図372）が出土している。
［時期］遺構確認層及び出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第152号土坑Ｂ（第21図）
［位置・確認層］ＡＣ－146グリッドに位置する。第Ⅳａ層において確認した。
［重複］第152号土坑Ａ、第153号土坑、第154号土坑と重複し、本遺構は、第152号土坑Ａ、第153号土坑より古く、第154号土坑より新しい。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は150㎝×104㎝、底面は168㎝×148㎝、深さは91㎝である。
［壁］オーバーハングし、全体として袋状を呈する。
［底面］北東側から南西側へ傾斜が見られる。
［堆積土］暗褐色土が堆積し、ＬＢを含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は第１層より第Ⅱ群７類土器（第43図374、375）、第Ⅳ群４類土器（第43図376）が出

土している。石器は、第１層より石鏃１類１が１点（第49図45）出土している。
［時期］遺構確認層、遺構間の重複関係及び出土遺物より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第153号土坑（第22図）
［位置・確認層］ＡＣ－146グリッドに位置する。第Ⅳａ層において確認した。
［重複］第２号竪穴住居跡、第152号土坑Ｂと重複し、本遺構が新しい。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径144㎝、底面は長径152㎝、深さは42㎝である。
［壁］若干オーバーハングし、全体として袋状を呈する。
［底面］北側から南側へ傾斜が見られる。起伏が見られる。
［堆積土］２層に分層した。赤褐、暗褐色土が堆積し、ＬＢ、角礫を含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、底面より第Ⅱ群７類土器（第43図377、378）、第１層、覆土より第Ⅳ群土器（第43図382）、第Ⅳ群２類、３～４類、７類土器（第43図379、380、381）が出土している。石器は、第１層より石匙１類が１点（第49図46）出土している。
［時期］土坑底面より、第Ⅱ群土器の破片が出土しているが、他の出土遺物、遺構確認層、遺構間の重複関係より、縄文時代後期の土坑と思われる。

第154号土坑（第22図）
［位置・確認層］ＡＣ－146グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］第152号土坑Ｂと重複し、本遺構が古い。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径144㎝、底面は長径174㎝、深さは69㎝である。
［壁］オーバーハングし、全体として袋状を呈する。
［底面］北東側から南西側へ傾斜が見られる。起伏が見られる。
［堆積土］２層に分層した。赤褐、暗褐色土が堆積し、ＬＢを含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器覆土より第Ⅱ群５ａ類土器（第43図383）、第Ⅳ群土器（第43図385）、第Ⅳ群３～４類、７類土器（第43図384、386）が出土している。石器は、覆土より石鏃３類３が１点（第49図47）、不定形石器１Ｃ類が１点（第50図48）、敲磨器２Ｂ類が２点（第54図88、89）出土している。
［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第172号土坑（第22図）
［位置・確認層］Ｙ－149グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］第68号土坑、第173号土坑Ａと重複し、本遺構は、第68号土坑、第173号土坑Ａより古い。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径114㎝、底面は長径130㎝、深さは94㎝である。
［壁］南側は一部外側へ立ち上がるが、その他はオーバーハングし、全体として袋状を呈する。
［底面］北側から南側へ若干の傾斜が見られる。中央部から壁際へ傾斜が見られる。
［堆積土］13層に分層した。明褐～暗褐色土を主体とし、炭化物、パミスを含む。第９層は崩落土の可能性がある。第11層、第13層は自然堆積か人為堆積か判然としない。その他は人為堆積と思われる。
［出土遺物］土器は、覆土より第Ⅱ群３類土器（第44図392、393）、第８層、覆土より第Ⅳ群４類、５類、６類、11類土器（第44図387～391）が出土している。石器は、覆土より不定形石器１Ａ類が１点

（第50図49）出土している。

［時期］遺構間の重複関係及び出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第173号土坑Ａ（第22図）

［位置・確認層］Ｙ－149、150グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。

［重複］第14号土坑、第172号土坑、第173号土坑Ｂと重複し、本遺構は、第14号土坑、第172号土坑より新しく、第173号土坑Ｂより古い。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径120㎝、底面は長径130㎝、深さは94㎝である。

［壁］オーバーハングし、全体として袋状を呈する。

［底面］壁際から中央部へ傾斜が見られる。中央部に底面ピットを有する。

［堆積土］４層に分層した。暗褐色土を主体とし、ＬＢを含む。第４層は、第Ⅴ層崩落土の可能性がある。その他は、人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、第３層より第Ⅱ群５ａ類土器（第44図395）、第４～１層より第Ⅳ群４類、８類土器（第44図394、396、397、398、399）が出土している。石器は、第１層より不定形石器１Ｃ類が１点（第50図50）出土している。

［時期］遺構間の重複関係及び出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第173号土坑Ｂ（第22図）

［位置・確認層］Ｙ－149、150グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。

［重複］第14号土坑、第173号土坑Ａと重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は118㎝×92㎝、底面は長径126㎝、深さは158㎝である。

［壁］オーバーハングし、全体としてフラスコ状を呈する。

［底面］起伏が見られる。

［堆積土］22層に分層した。黄褐～暗褐色土を主体とし、パミス、ＬＢ、炭化物、角礫を含む。第１層の黒褐色土はパミスを含む。第５、６層の黒褐色土はＬＢ、炭化物を含む。第３層は、Ⅳａ層崩落土の可能性がある。第４層、第14層、第22層はⅦ層崩落土の可能性がある。その他は、人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器は、第９、８層より第Ⅱ群３類、７類土器（第44図405、406）、第19、17、15～13、11、５、３層より第Ⅳ群２ａ類、４類、５類、６類土器（第29、30図21～26、第44図400、401、402、403、404、407）が出土している。石器は、第15層より不定形石器１Ｂ類が２点（第50図52、53）、第14層より不定形石器１Ｂ類が１点（第50図51）、敲磨器３類が１点（第54図90）、第11層より石錘２類が１点（第54図91）出土している。石製品は、第１層より三角形岩版が１点（第56図９）出土している。

［時期］出土遺物より縄文時代後期の土坑と思われる。

第1001号土坑（第23図）

［位置・確認層］ＡＡ－185グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は96㎝×70㎝、底面は89㎝×60㎝、深さは13㎝である。

［壁］外側へ緩やかに立ち上がる。
［底面］南側から北側へ若干の傾斜が見られる。
［堆積土］黒褐色土が堆積し、パミス、ロームが微量見られる。自然堆積か人為堆積か判然としない。
［出土遺物］なし。
［時期］不明である。

第1002号土坑（第23図）
［位置・確認層］ＡＢ－187グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径107㎝、底面は長径126㎝、深さは24㎝である。
［壁］オーバーハングし、袋状を呈する。
［底面］北西側から南西側へ若干の傾斜が見られる。
［堆積土］黒褐色土が堆積し、パミス、ロームが見られる。人為堆積と思われる。
［出土遺物］なし。
［時期］不明である。

第1003号土坑（第23図）
［位置・確認層］ＡＢ－188グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径110㎝、底面は長径102㎝、深さは19㎝である。
［壁］一部内側へ緩やかに立ち上がるが、全体として若干外側へ緩やかに立ち上がる。
［底面］壁側から中央部へ傾斜が見られる。北側に底面ピットを有する。
［堆積土］黒褐色土が堆積し、パミス、ロームが見られる。人為堆積と思われる。
［出土遺物］なし。
［時期］不明である。

第1004号土坑（第23図）
［位置・確認層］ＡＡ・ＡＢ－188グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径110㎝、底面は長径102㎝、深さは19㎝である。
［壁］オーバーハングし、袋状を呈する。
［底面］南西側から北東側へ傾斜が見られる。
［堆積土］黒褐色土が堆積し、ロームを含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］なし。
［時期］不明である。

第1005号土坑（第23図）
［位置・確認層］ＡＡ－185グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。

［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は98㎝×56㎝、底面は89㎝×37㎝、深さは６㎝である。
［壁］外側へ緩やかに立ち上がる。
［底面］北側から南側へ傾斜が見られる。
［堆積土］黒褐色土が堆積し、ロームを含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］なし。
［時期］不明である。

第1006号土坑（第23図）
［位置・確認層］ＡＢ・ＡＣ－223グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は不整な円形で、開口部は長径116㎝、底面は長径102㎝、深さは18㎝である。
［壁］外側へ緩やかに立ち上がる。
［底面］壁際から中央部へ緩い傾斜が見られる。
［堆積土］黒色土が堆積し、ロームを含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］なし。
［時期］不明である。

第1008号土坑（第23図）
［位置・確認層］ＡＣ－223グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径123㎝、底面は50㎝×30㎝、深さは30㎝である。
［壁］全体として外側へ緩やかに立ち上がる。
［底面］起伏が激しい。
［堆積土］黒褐色土が堆積し、ロームを含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］なし。
［時期］不明である。

第1009号土坑（第24図）
［位置・確認層］ＡＣ－232、233グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は不整な円形で、開口部は長径105㎝、底面は最長48㎝、深さは36㎝である。
［壁］外側へ緩やかに立ち上がる。
［底面］南西側から北東側へ傾斜が見られる。
［堆積土］黒褐色土が堆積し、ロームを含む。人為堆積と思われる。
［出土遺物］なし。
［時期］不明である。

第1011号土坑（第24図）

［位置・確認層］ＡＣ－223グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径107㎝、底面は長径104㎝、深さは５㎝である。

［壁］外側へ緩やかに立ち上がる。

［底面］北東側から南西側へ傾斜が見られる。

［堆積土］黒色土が堆積し、ロームを含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］なし。

［時期］不明である。

第1013号土坑（第24図）

［位置・確認層］Ｙ－217、218グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は不整な円形で、開口部は最長151㎝、底面は長径122㎝、深さは57㎝である。

［壁］オーバーハングしフラスコ状を呈する。

［底面］東側から西側へ傾斜が見られる。

［堆積土］黒褐色土が堆積し、ロームを含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］なし。

［時期］不明である。

第1014号土坑（第24図）

［位置・確認層］Ｚ－216、217グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は不整な円形で、開口部は最長100㎝、底面は72㎝×54㎝、深さは49㎝である。

［壁］オーバーハングしフラスコ状を呈する。

［底面］一部壁際から中央部へ傾斜が見られるが、全体としてほぼ平坦である。

［堆積土］黒褐色土が堆積し、ロームを含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］なし。

［時期］不明である。

第1015号土坑（第24図）

［位置・確認層］Ｚ－215、216グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径100㎝、底面は長径114㎝、深さは48㎝である。

［壁］オーバーハングしフラスコ状を呈する。

［底面］平坦である。

［堆積土］３層に分層した。黒～暗褐色土を主体としロームを含む。人為堆積と思われる。

［出土遺物］なし。

［時期］不明である。

第1016号土坑（第25図）

［位置・確認層］ＡＦ－201グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は不明である。開口部は最長111㎝、底面は最長100㎝、深さは20㎝である。

［壁］外側へ緩やかに立ち上がる。起伏を有する。

［底面］起伏を有する。

［堆積土］黒色土が堆積している。自然堆積と思われる。

［出土遺物］なし。

［時期］不明である。

第1017号土坑（第25図）

［位置・確認層］Ｚ－200グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は不整な円形で、開口部は最長112㎝、底面は長径92㎝、深さは11㎝である。

［壁］外側へ緩やかに立ち上がる。

［底面］北側から南側へ緩やかな傾斜が見られる。

［堆積土］２層に分層した。

［出土遺物］なし。

［時期］不明である。

第2001号土坑（第25図）

［位置・確認層］ＡＢ－218グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径26㎝、底面は最長15㎝、深さは35㎝である。

［壁］全体に北東側へ傾いて立ち上がる。

［底面］南西側から北東側へ急激に傾く。

［堆積土］黒色土が堆積している。自然堆積と思われる。

［出土遺物］なし。

［時期］不明である。

第2002号土坑（第25図）

［位置・確認層］ＡＡ－218グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径44㎝、底面は長径36㎝、深さは６㎝である。

［壁］外側へ緩やかに立ち上がる。

［底面］平坦である。

［堆積土］黒色土が堆積している。自然堆積と思われる。
［出土遺物］なし。
［時期］不明である。

第2003号土坑（第25図）
［位置・確認層］ＡＡ－218グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は50㎝×40㎝、底面は長径34㎝、深さは13㎝である。
［壁］外側へ緩やかに立ち上がる。
［底面］壁際から中央部へ緩やかに傾斜し、湾曲している。
［堆積土］黒褐色土が堆積している。自然堆積と思われる。
［出土遺物］なし。
［時期］不明である。

第2004号土坑（第25図）
［位置・確認層］Ｚ－218、219グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は不整な楕円形で、開口部は最長52㎝、底面は最長41㎝、深さは８㎝である。
［壁］外側へ緩やかに立ち上がる。
［底面］壁際から中央部へ緩やかに傾斜し、若干湾曲している。
［堆積土］黒色土が堆積している。自然堆積と思われる。
［出土遺物］なし。
［時期］不明である。

第2005号土坑（第25図）
［位置・確認層］ＡＡ－232グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径36㎝、底面は30㎝×16㎝、深さは59㎝である。
［壁］全体として西側へ傾き立ち上がる。起伏を有する。
［底面］西側から東側へ傾斜が見られる。
［堆積土］黒色土が堆積している。自然堆積と思われる。
［出土遺物］なし。
［時期］不明である。

第2006号土坑（第25図）
［位置・確認層］Ｗ－232グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は隅丸方形で、開口部は28㎝×26㎝、底面は17㎝×14㎝、深さは35㎝である。

［壁］外側へ直線的に立ち上がる。
［底面］壁際から中央部へ若干の傾斜が見られる。
［堆積土］黒色土が堆積している。自然堆積と思われる。
［出土遺物］なし。
［時期］不明である。

第2007号土坑（第25図）
［位置・確認層］Ｗ－231、232グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］第2008号土坑と重複し、本遺構が新しい。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径32㎝、底面は16㎝、深さは34㎝である。
［壁］外側へ直線的に立ち上がる。
［底面］ほぼ平坦である。
［堆積土］黒色土が堆積している。自然堆積と思われる。
［出土遺物］なし。
［時期］不明である。

第2008号土坑（第25図）
［位置・確認層］Ｗ－231、232グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。
［重複］第2007号土坑と重複し、本遺構が古い。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径36㎝、底面は24㎝、深さは22㎝である。
［壁］外側へ緩やかに立ち上がる。
［底面］東側から西側へ緩やかな傾斜が見られる。
［堆積土］２層に分層した。黒褐色土が堆積し、第２層は、ＬＢを含む。自然堆積か人為堆積か判然としない。
［出土遺物］なし。
［時期］不明である。

第2009号土坑（第25図）
［位置・確認層］Ｙ・Ｚ－217グリッドに位置する。第Ⅵ層において確認した。
［重複］なし。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部は66㎝×50㎝、底面は65㎝×48㎝、深さは14㎝である。
［壁］全体としてやや外側へ直線的に立ち上がる。一部内側へオーバーハングする個所も見られる。
［底面］若干の起伏があるがおおむね平坦である。
［堆積土］黒色土が堆積している。自然堆積と思われる。
［出土遺物］なし。
［時期］不明である。

第2010号土坑（第25図）

［位置・確認層］Ｚ－189グリッドに位置する。第Ⅶ層において確認した。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形は円形で、開口部は長径34㎝、底面は24㎝、深さは19㎝である。

［壁］外側へ湾曲して立ち上がる。

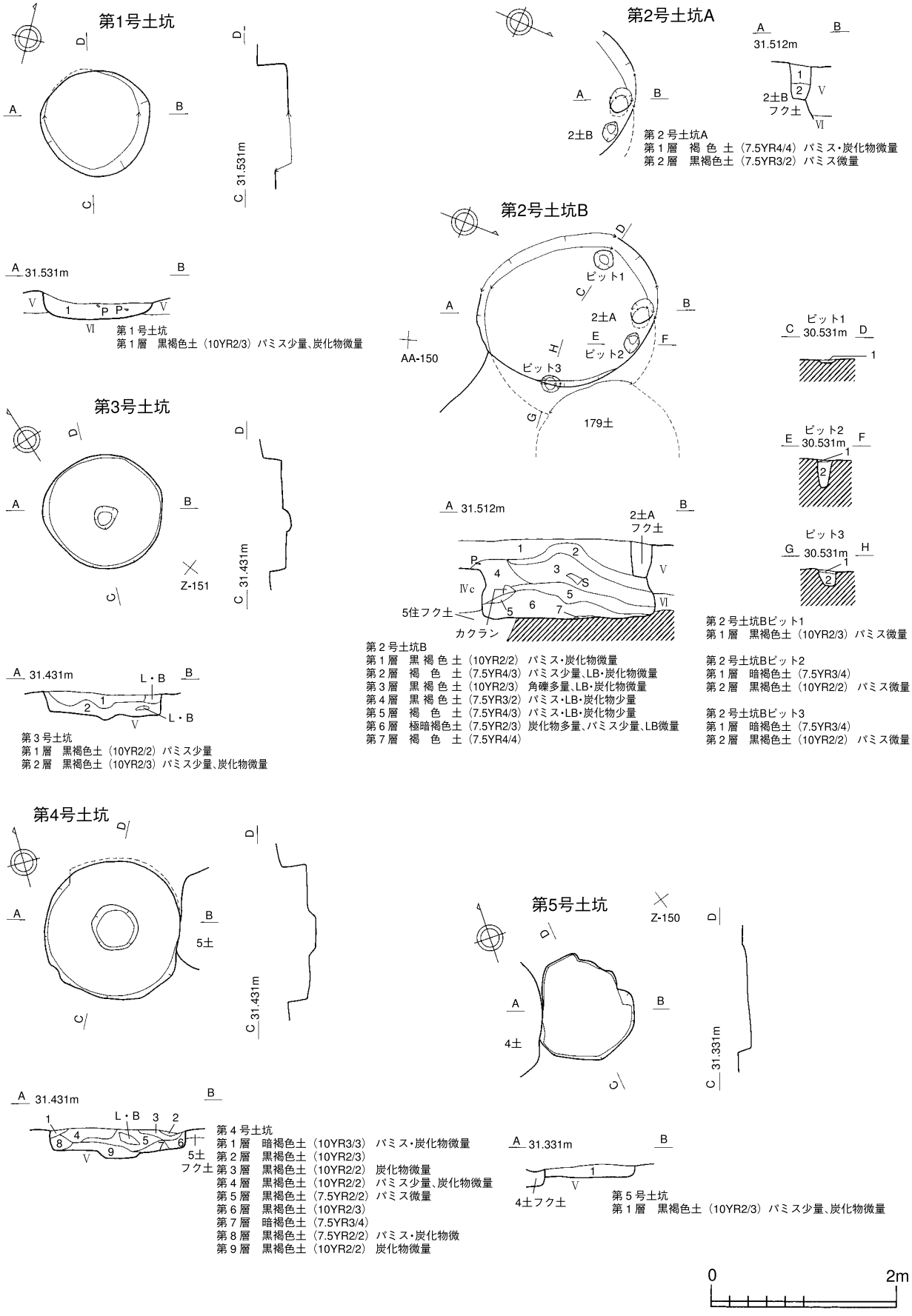
［底面］南西側から北東側へ若干の傾斜が見られる。

［堆積土］黒色土が堆積している。自然堆積と思われる。

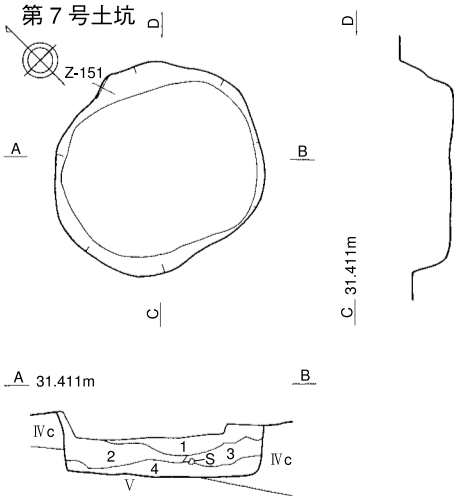
［出土遺物］なし。

［時期］不明である。

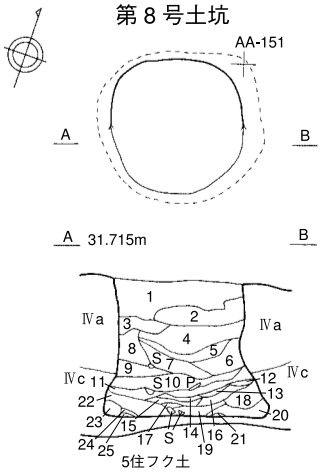
（小野）



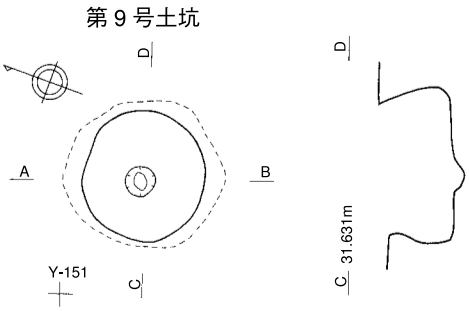
第11図　土坑（1）（1土・2土A・2土B・3～5土）

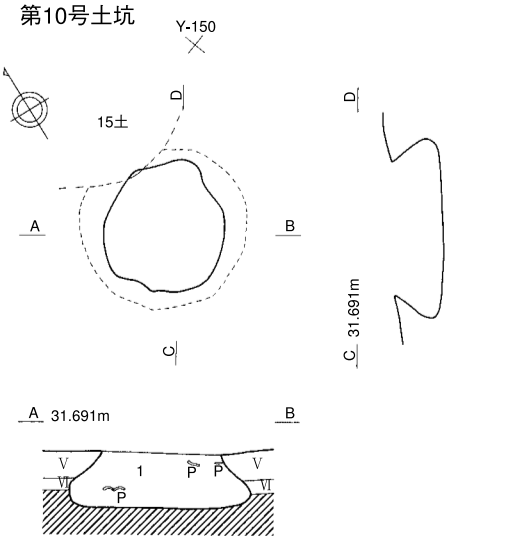


第７号土坑
第１層　黒褐色土（10YR2/2）パミス少量
第２層　黒褐色土（10YR2/3）パミス・炭化物微量
第３層　暗褐色土（10YR3/4）パミス少量
第４層　黒褐色土（10YR2/2）パミス・炭化物微量

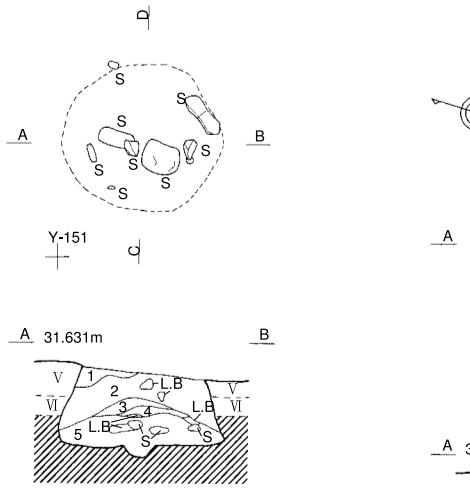


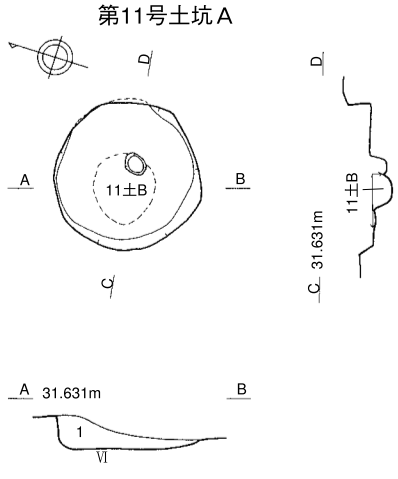
第８号土坑
第１層　暗褐色土（10YR3/4）パミス・炭化物多量、ローム粒少量
第２層　暗褐色土（10YR3/4）LB・ローム粒多量
第３層　暗褐色土（10YR3/4）パミス・角礫多量
第４層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）LB少量
第５層　黒褐色土（10YR2/3）パミス・炭化物・角礫多量
第６層　暗褐色土（10YR3/4）パミス・炭化物少量
第７層　黒褐色土（10YR2/3）炭化物・角礫少量
第８層　暗褐色土（10YR3/4）角礫多量、ローム粒・炭化物少量
第９層　暗褐色土（10YR3/4）ローム粒・炭化物・角礫少量
第10層　黒褐色土（10YR2/3）土器片多量、パミス・炭化物少量
第11層　褐　色　土（10YR4/4）炭化物少量
第12層　黒褐色土（10YR2/3）
第13層　暗褐色土（10YR3/3）ローム粒少量
第14層　黒褐色土（10YR2/3）炭化物少量
第15層　黒　色　土（10YR2/1）パミス・炭化物多量
第16層　黒褐色土（10YR3/2）炭化物・角礫少量
第17層　黒褐色土（10YR2/3）
第18層　黒　色　土（10YR2/1）炭化物少量
第19層　黒褐色土（10YR2/3）角礫少量
第20層　暗褐色土（10YR3/3）ローム粒・LB・炭化物多量
第21層　暗褐色土（10YR3/4）炭化物少量
第22層　黒褐色土（10YR2/3）炭化物多量
第23層　黒　色　土（10YR2/1）炭化物少量
第24層　褐　色　土（10YR4/4）パミス・炭化物少量
第25層　暗褐色土（10YR3/3）パミス・炭化物少量

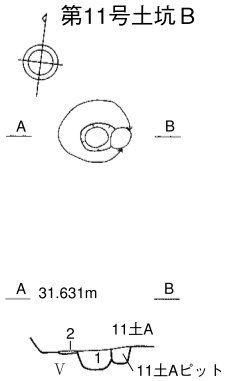




第10号土坑
第１層　黒褐色土（10YR2/3）パミス少量、炭化物微量







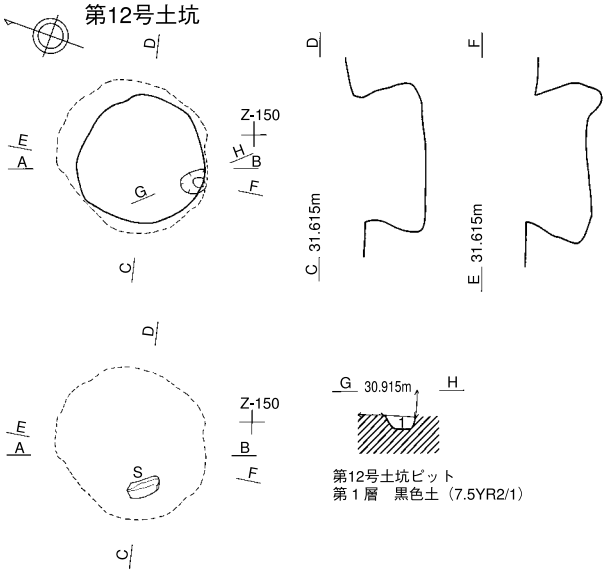
第９号土坑
第１層　黒褐色土（10YR2/2）パミス少量
第２層　暗褐色土（10YR3/4）と黒褐色土（10YR2/3）の混合土　ローム粒微量
第３層　暗褐色土（7.5YR3/4）炭化物多量
第４層　褐　色　土（7.5YR4/4）LB中量
第５層　黒褐色土（10YR2/3）ローム粒微量、円礫含む

第11号土坑Ａ
第１層　黒褐色土（10YR2/3）パミス少量、炭化物微量

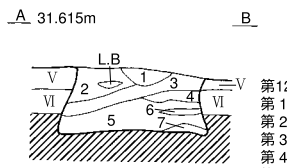
第11号土坑Ｂ
第１層　黒褐色土（10YR3/1）パミス微量
第２層　暗褐色土（10YR3/4）パミス多量

第12図　土坑（2）（7～10土・11土A・11土B）

第12号土坑

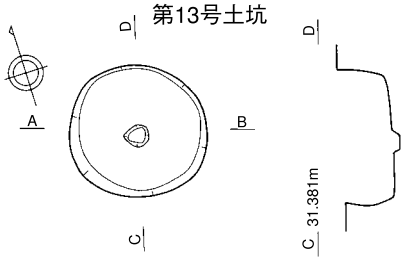


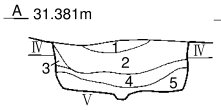
第12号土坑ピット
第１層　黒色土（7.5YR2/1）



第12号土坑
第１層　黒褐色土（10YR2/3）　パミス微量
第２層　暗褐色土（10YR3/4）　炭化物少量、パミス微量
第３層　暗褐色土（7.5YR3/4）　炭化物微量
第４層　暗褐色土（7.5YR3/4）　炭化物少量、パミス微量
第５層　黒褐色土（10YR2/3）　パミス・炭化物微量
第６層　暗褐色土（10YR3/4）
第７層　暗褐色土（7.5YR3/4）

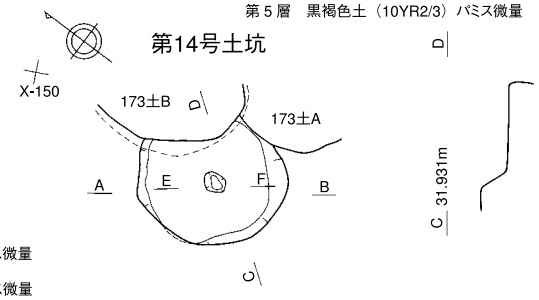
第13号土坑

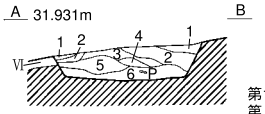


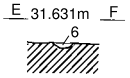


第13号土坑
第１層　黒褐色土（10YR2/2）炭化物微量
第２層　黒褐色土（10YR2/3）パミス・炭化物微量
第３層　暗褐色土（7.5YR3/4）
第４層　黒褐色土（10YR2/2）パミス・炭化物微量
第５層　黒褐色土（10YR2/3）パミス微量

第14号土坑

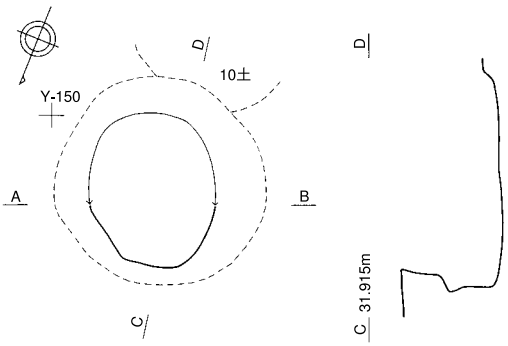


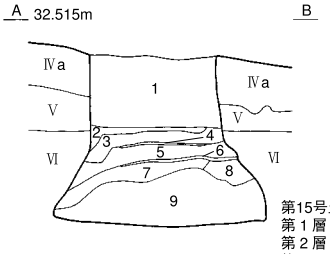




第14号土坑
第１層　黒褐色土（10YR2/2）
第２層　黒褐色土（10YR2/3）
第３層　黒褐色土（10YR2/3）
第４層　黒褐色土（10YR2/3）
第５層　黒褐色土（10YR2/3）LB少量
第６層　黒褐色土（10YR3/1）

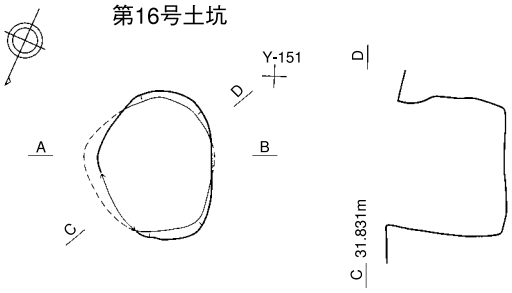
第15号土坑

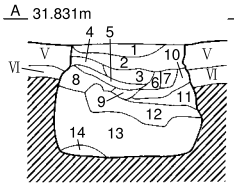




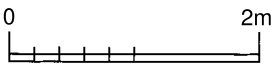
第15号土坑
第１層　暗褐色土（7.5YR3/4）パミス・ローム粒・炭化物微量
第２層　黒褐色土（10YR2/3）炭化物微量
第３層　明赤褐色土（5YR5/6）　角礫多量
第４層　暗褐色土（10YR3/3）
第５層　明褐色土（7.5YR5/8）角礫微量
第６層　暗褐色土（10YR3/4）
第７層　褐　色　土（7.5YR4/6）
第８層　褐　色　土（7.5YR4/6）角礫少量、炭化物微量
第９層　暗褐色土（10YR3/3）　LB・炭化物微量

第16号土坑

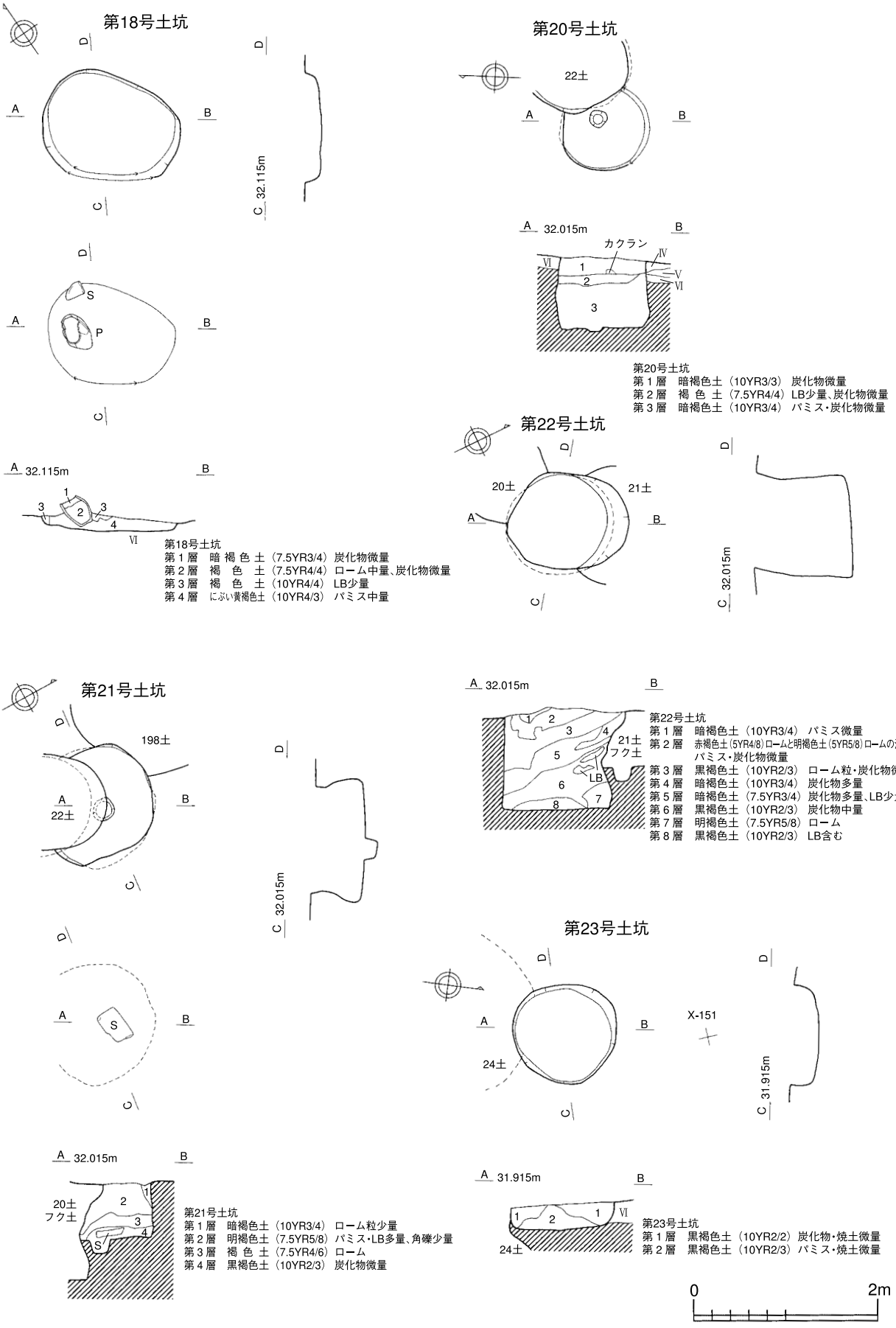




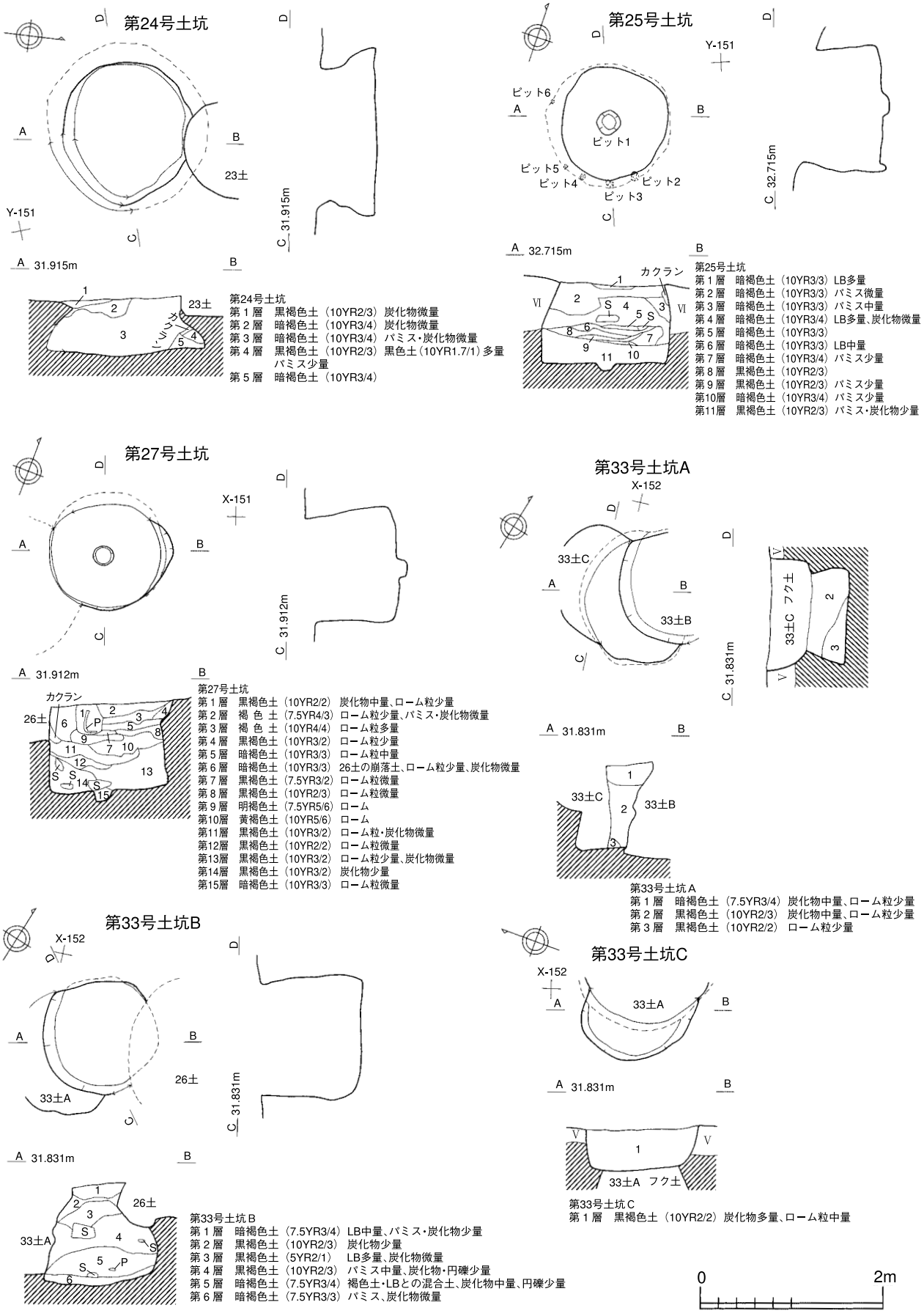
第16号土坑
第１層　暗褐色土（10YR3/4）　炭化物微量
第２層　暗褐色土（10YR3/3）　炭化物微量、LB含む
第３層　暗褐色土（7.5YR3/4）LB含む
第４層　暗褐色土（7.5YR3/4）LB含む
第５層　暗褐色土（7.5YR3/4）炭化物少量
第６層　暗褐色土（7.5YR3/4）炭化物微量
第７層　暗褐色土（7.5YR3/4）LB含む
第８層　暗褐色土（7.5YR3/4）炭化物微量
第９層　褐　色　土（7.5YR4/4）
第10層　暗褐色土（10YR3/4）　炭化物微量
第11層　暗褐色土（10YR3/4）　炭化物少量
第12層　褐　色　土（7.5YR4/6）ローム、炭化物微量
第13層　暗褐色土（7.5YR3/4）炭化物多量
第14層　暗褐色土（10YR3/4）



第13図　土坑（3）（12～16土）



第14図　土坑（4）（18土・20～23土）



第24号土坑
第１層　黒褐色土（10YR2/3）炭化物微量
第２層　暗褐色土（10YR3/4）炭化物微量
第３層　暗褐色土（10YR3/4）パミス・炭化物微量
第４層　黒褐色土（10YR2/3）黒色土（10YR1.7/1）多量
　　パミス少量
第５層　暗褐色土（10YR3/4）

第25号土坑
第１層　暗褐色土（10YR3/3）LB多量
第２層　暗褐色土（10YR3/3）パミス微量
第３層　暗褐色土（10YR3/3）パミス中量
第４層　暗褐色土（10YR3/4）LB多量、炭化物微量
第５層　暗褐色土（10YR3/3）
第６層　暗褐色土（10YR3/3）LB中量
第７層　暗褐色土（10YR3/4）パミス少量
第８層　黒褐色土（10YR2/3）
第９層　黒褐色土（10YR2/3）パミス少量
第10層　暗褐色土（10YR3/4）パミス少量
第11層　黒褐色土（10YR2/3）パミス・炭化物少量

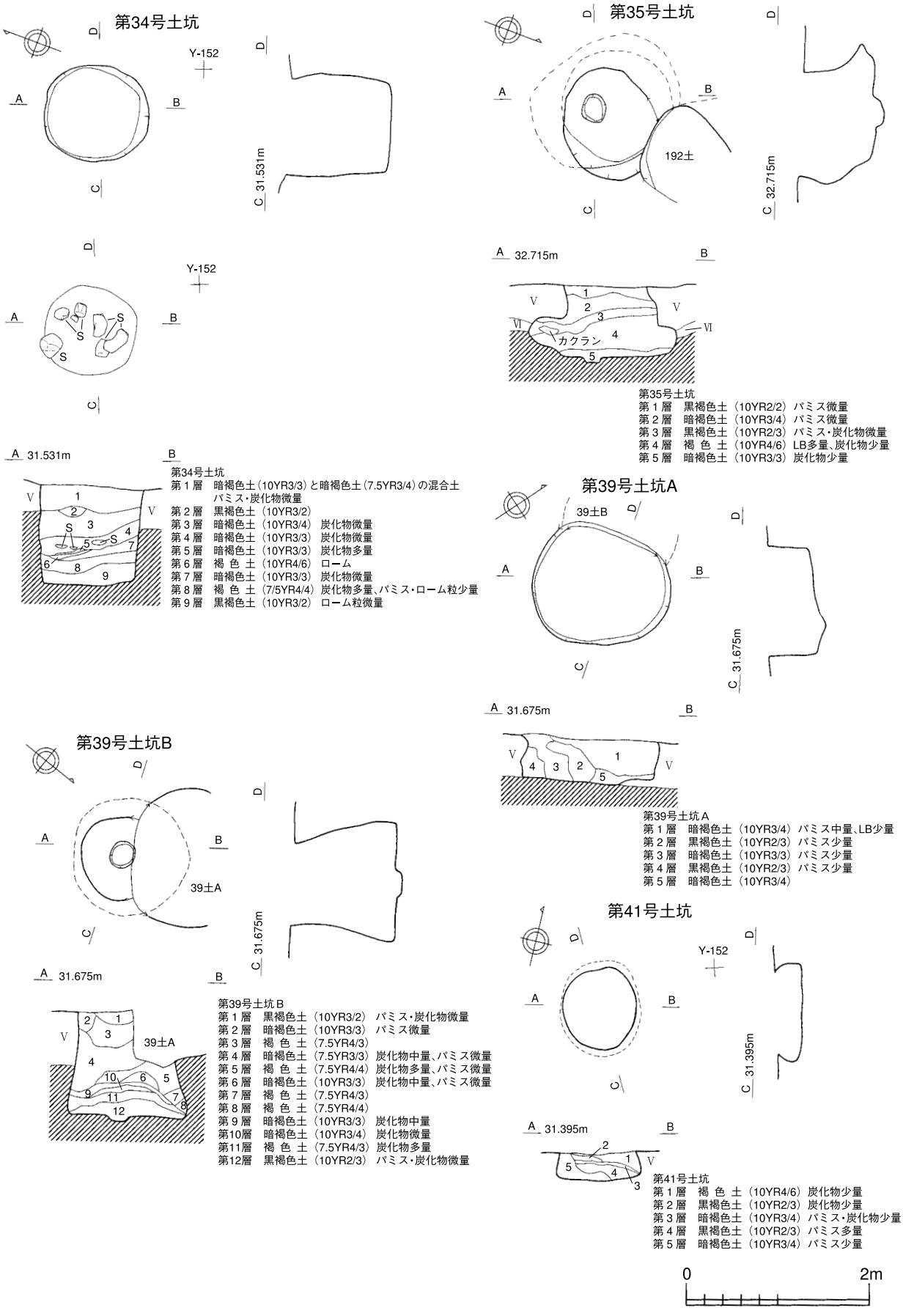
第27号土坑
第１層　黒褐色土（10YR2/2）炭化物中量、ローム粒少量
第２層　褐　色　土（7.5YR4/3）ローム粒少量、パミス・炭化物微量
第３層　褐　色　土（10YR4/4）ローム粒多量
第４層　黒褐色土（10YR3/2）ローム粒少量
第５層　暗褐色土（10YR3/3）ローム粒中量
第６層　暗褐色土（10YR3/3）26土の崩落土、ローム粒少量、炭化物微量
第７層　黒褐色土（7.5YR3/2）ローム粒微量
第８層　黒褐色土（10YR2/3）ローム粒微量
第９層　明褐色土（7.5YR5/6）ローム
第10層　黄褐色土（10YR5/6）ローム
第11層　黒褐色土（10YR3/2）ローム粒・炭化物微量
第12層　黒褐色土（10YR2/2）ローム粒微量
第13層　黒褐色土（10YR3/2）ローム粒少量、炭化物微量
第14層　黒褐色土（10YR3/2）炭化物少量
第15層　暗褐色土（10YR3/3）ローム粒微量

第33号土坑A
第１層　暗褐色土（7.5YR3/4）炭化物中量、ローム粒少量
第２層　黒褐色土（10YR2/3）炭化物中量、ローム粒少量
第３層　黒褐色土（10YR2/2）ローム粒少量

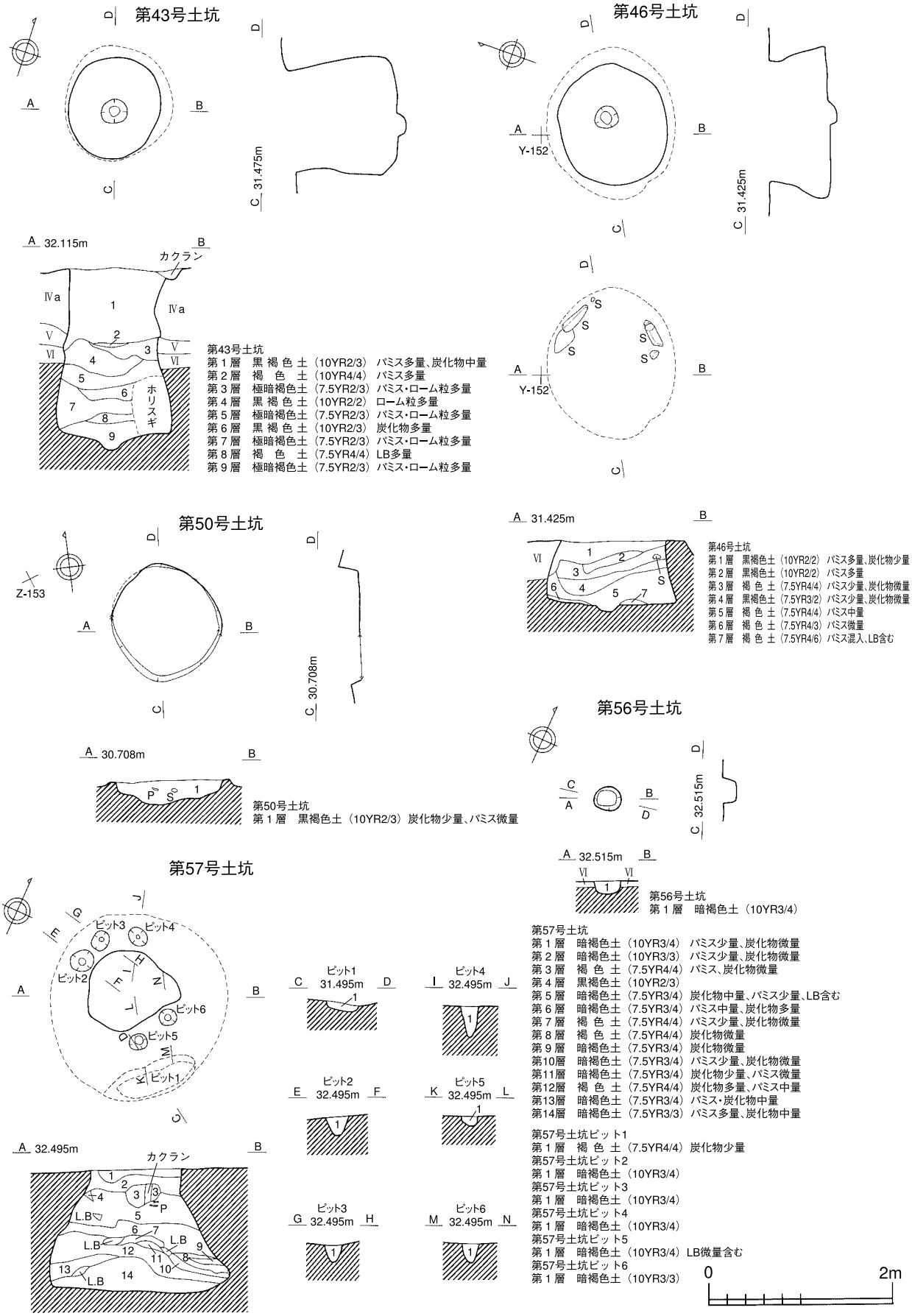
第33号土坑B
第１層　暗褐色土（7.5YR3/4）LB中量、パミス・炭化物少量
第２層　黒褐色土（10YR2/3）炭化物少量
第３層　黒褐色土（5YR2/1）　LB多量、炭化物微量
第４層　黒褐色土（10YR2/3）パミス中量、炭化物・円礫少量
第５層　暗褐色土（7.5YR3/4）褐色土・LBとの混合土、炭化物中量、円礫少量
第６層　暗褐色土（7.5YR3/3）パミス、炭化物微量

第33号土坑C
第１層　黒褐色土（10YR2/2）炭化物多量、ローム粒中量

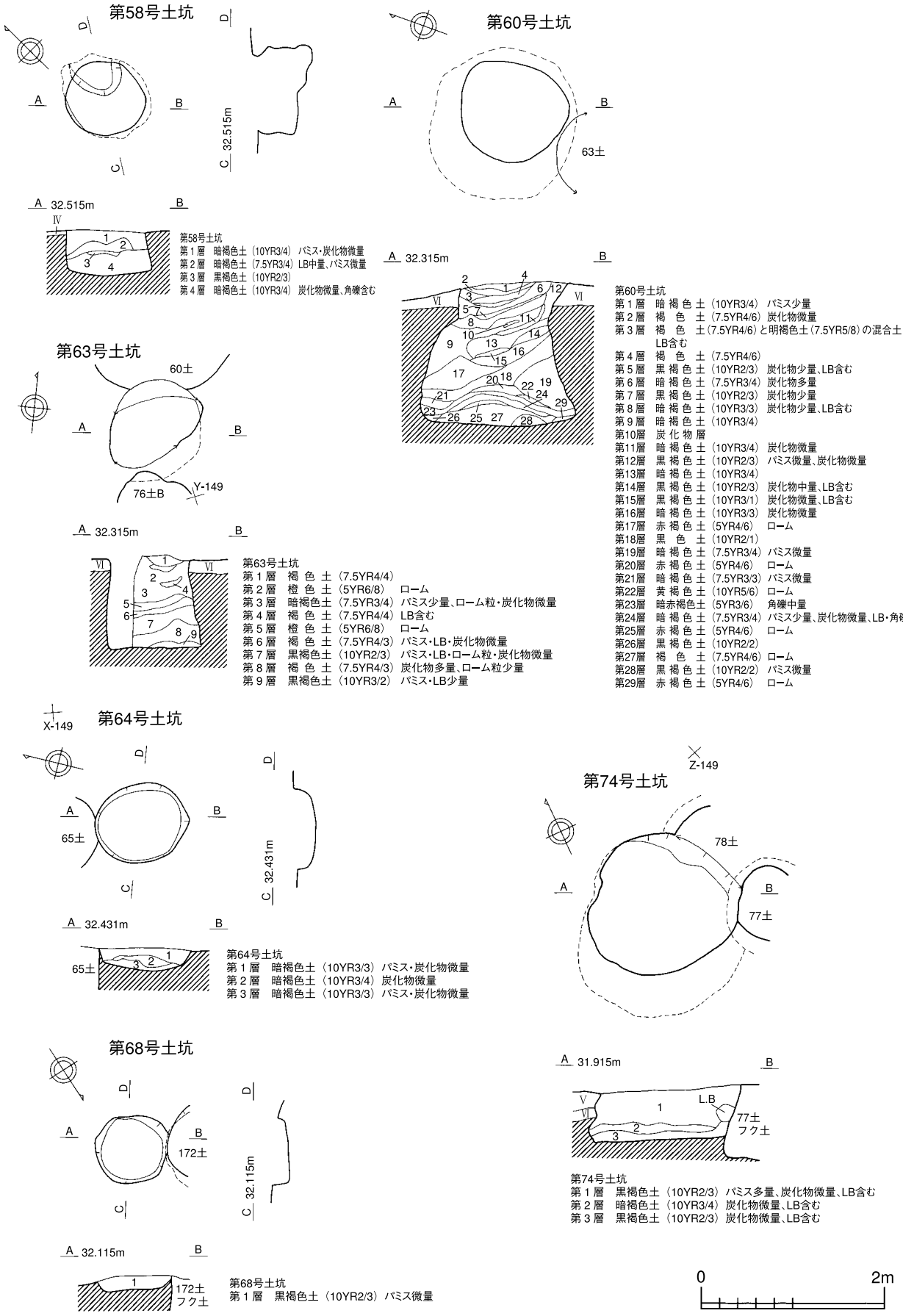
第15図　土坑（5）（24土・25土・27土・33土A・33土B・33土C）



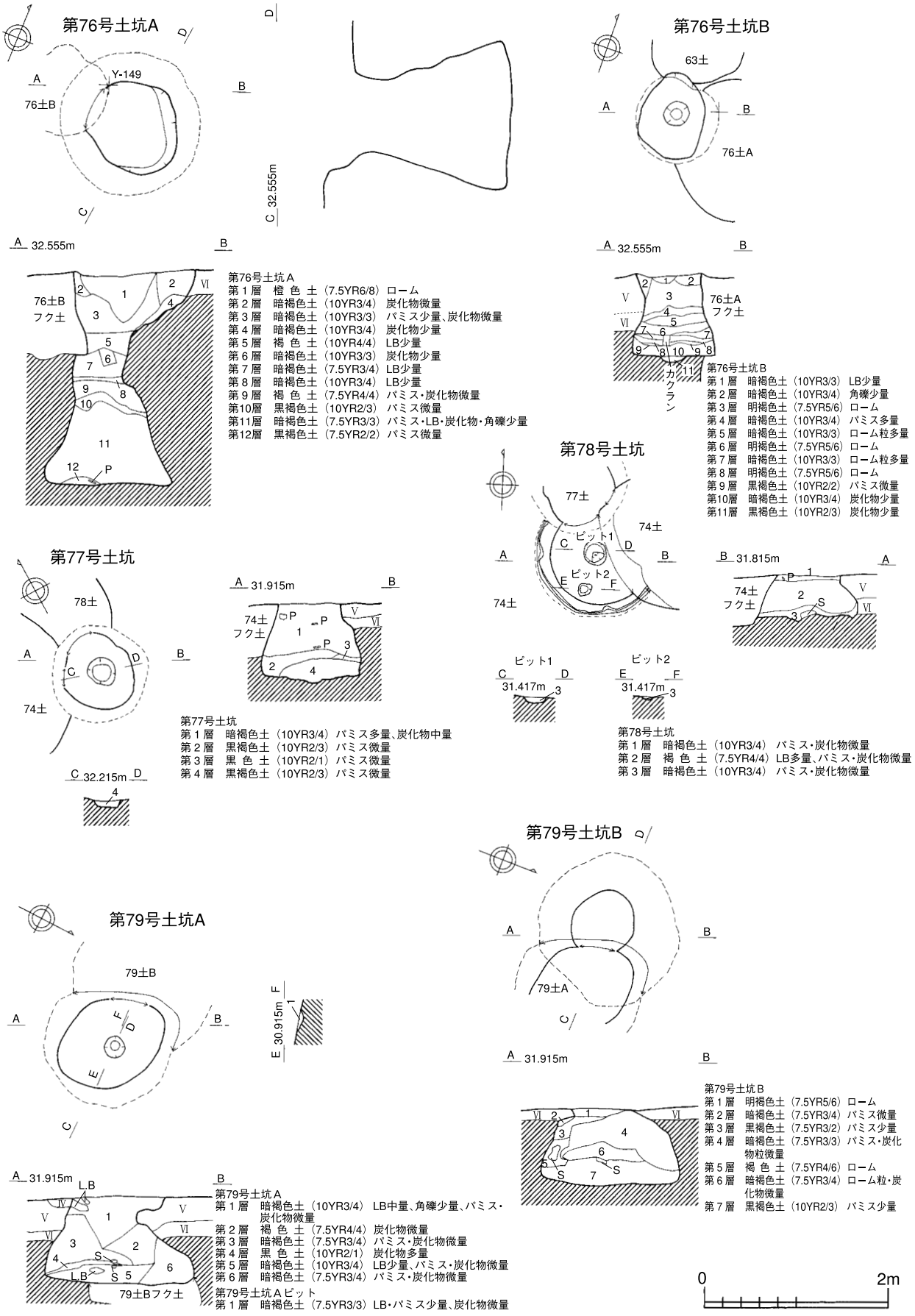
第16図　土坑（6）（34土・35土・39土A・39土B・41土）



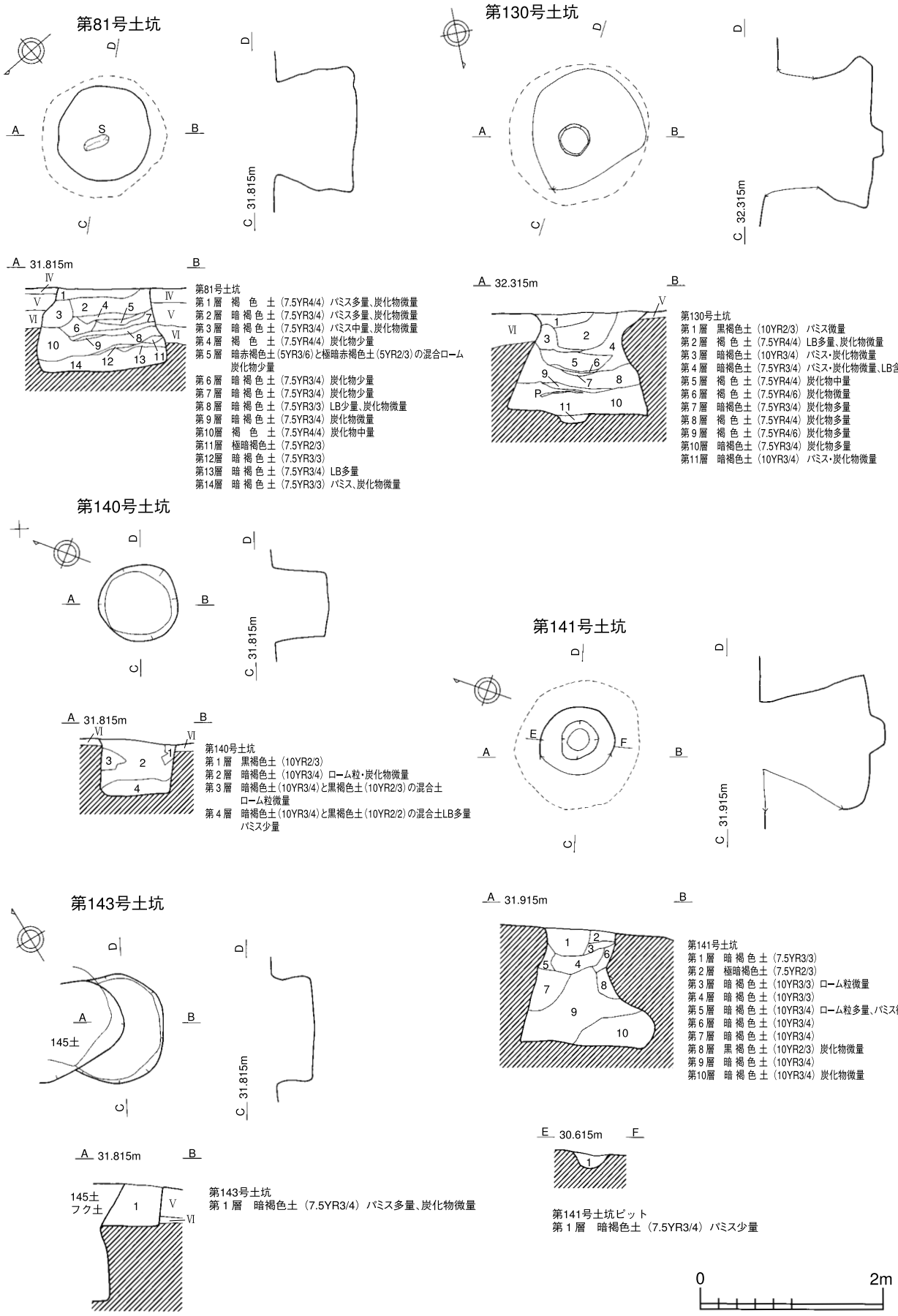
第17図　土坑（7）（43土・46土・50土・56土・57土）



第18図　土坑（8）（58土・60土・63土・64土・68土・74土）



第19図　土坑（9）（76土A・76土B・77土・78土・79土A・79土B）



第81号土坑
第１層　褐　色　土（7.5YR4/4）パミス多量、炭化物微量
第２層　暗 褐 色 土（7.5YR3/4）パミス多量、炭化物微量
第３層　暗 褐 色 土（7.5YR3/4）パミス中量、炭化物微量
第４層　褐　色　土（7.5YR4/4）炭化物少量
第５層　暗赤褐色土（5YR3/6）と極暗赤褐色土（5YR2/3）の混合ローム
　　炭化物少量
第６層　暗 褐 色 土（7.5YR3/4）炭化物少量
第７層　暗 褐 色 土（7.5YR3/4）炭化物少量
第８層　暗 褐 色 土（7.5YR3/3）LB少量、炭化物微量
第９層　暗 褐 色 土（7.5YR3/4）炭化物微量
第10層　褐　色　土（7.5YR4/4）炭化物中量
第11層　極暗褐色土（7.5YR2/3）
第12層　暗 褐 色 土（7.5YR3/3）
第13層　暗 褐 色 土（7.5YR3/4）LB多量
第14層　暗 褐 色 土（7.5YR3/3）パミス、炭化物微量

第130号土坑
第１層　黒褐色土（10YR2/3）パミス微量
第２層　褐 色 土（7.5YR4/4）LB多量、炭化物微量
第３層　暗褐色土（10YR3/4）パミス・炭化物微量
第４層　暗褐色土（7.5YR3/4）パミス・炭化物微量、LB含む
第５層　褐 色 土（7.5YR4/4）炭化物中量
第６層　褐 色 土（7.5YR4/6）炭化物微量
第７層　暗褐色土（7.5YR3/4）炭化物多量
第８層　褐 色 土（7.5YR4/4）炭化物多量
第９層　褐 色 土（7.5YR4/6）炭化物多量
第10層　暗褐色土（7.5YR3/4）炭化物多量
第11層　暗褐色土（10YR3/4）パミス・炭化物微量

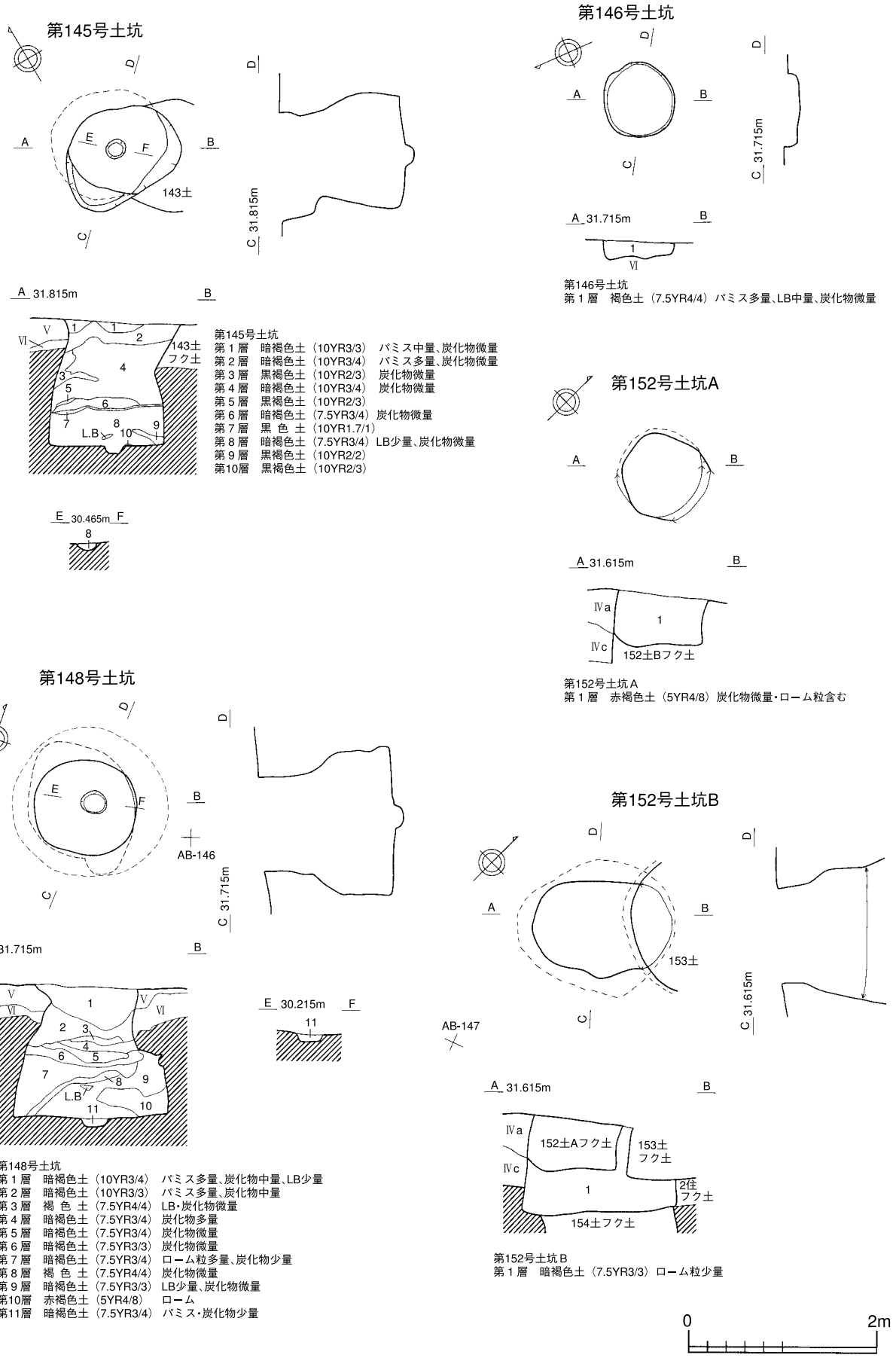
第140号土坑
第１層　黒褐色土（10YR2/3）
第２層　暗褐色土（10YR3/4）ローム粒・炭化物微量
第３層　暗褐色土（10YR3/4）と黒褐色土（10YR2/3）の混合土
　　ローム粒微量
第４層　暗褐色土（10YR3/4）と黒褐色土（10YR2/2）の混合土LB多量
　　パミス少量

第141号土坑
第１層　暗 褐 色 土（7.5YR3/3）
第２層　極暗褐色土（7.5YR2/3）
第３層　暗 褐 色 土（10YR3/3）ローム粒微量
第４層　暗 褐 色 土（10YR3/3）
第５層　暗 褐 色 土（10YR3/4）ローム粒多量、パミス微量
第６層　暗 褐 色 土（10YR3/4）
第７層　暗 褐 色 土（10YR3/4）
第８層　黒 褐 色 土（10YR2/3）炭化物微量
第９層　暗 褐 色 土（10YR3/4）
第10層　暗 褐 色 土（10YR3/4）炭化物微量

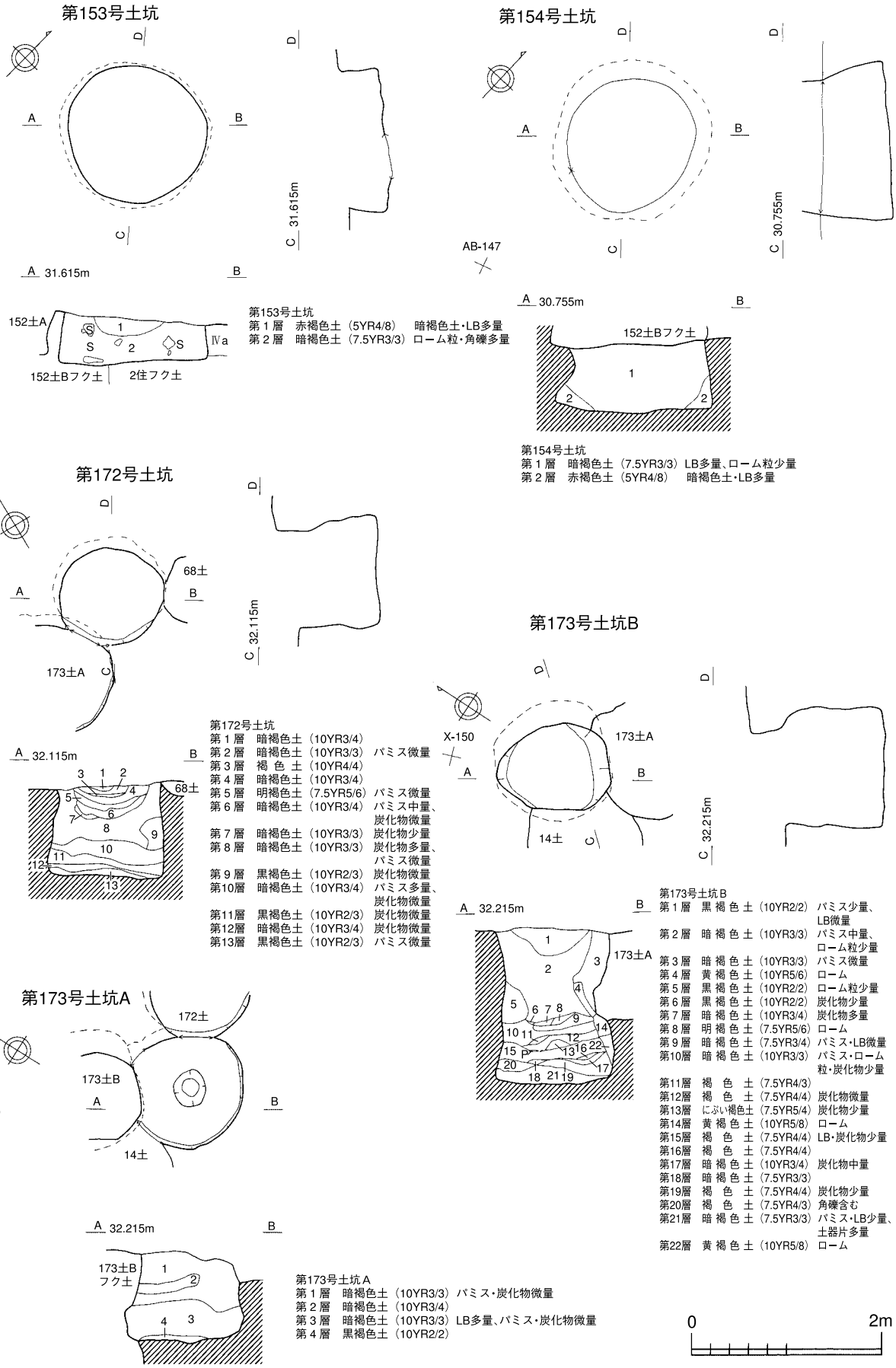
第143号土坑
第１層　暗褐色土（7.5YR3/4）パミス多量、炭化物微量

第141号土坑ピット
第１層　暗褐色土（7.5YR3/4）パミス少量

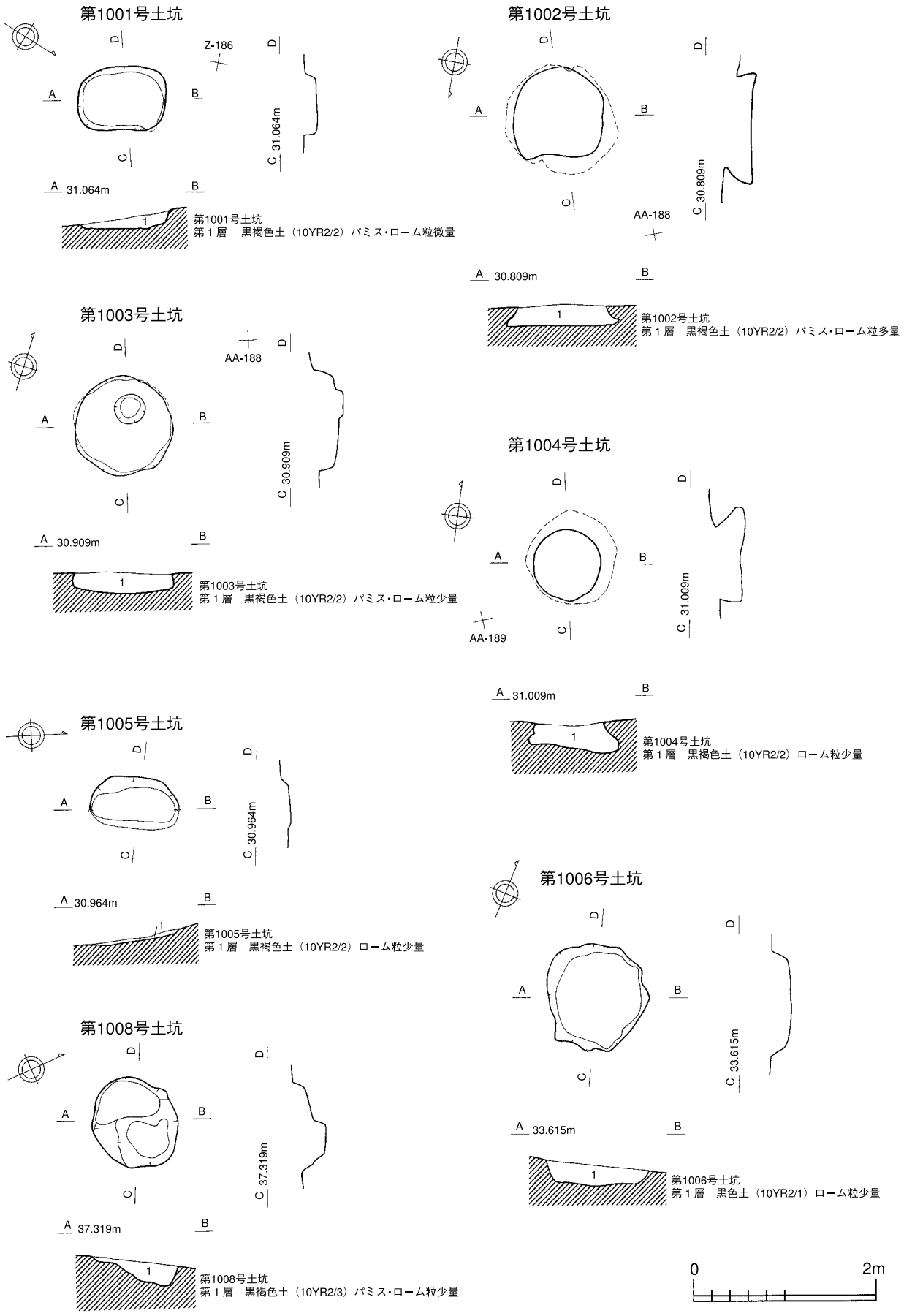
第20図　土坑（10）（81土・130土・140土・141土・143土）



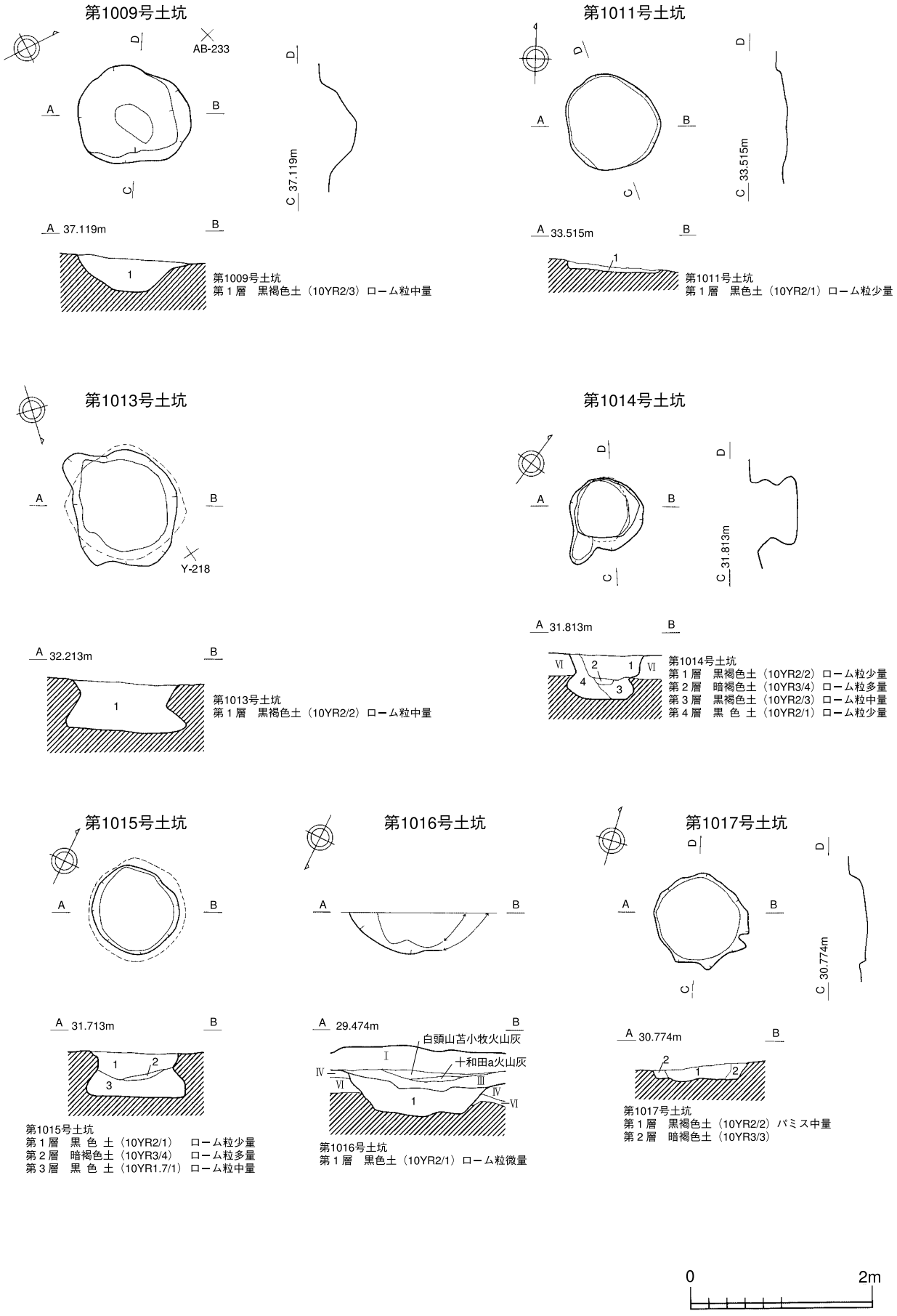
第21図　土坑（11）（145土・146土・148土・152土A・152土B）



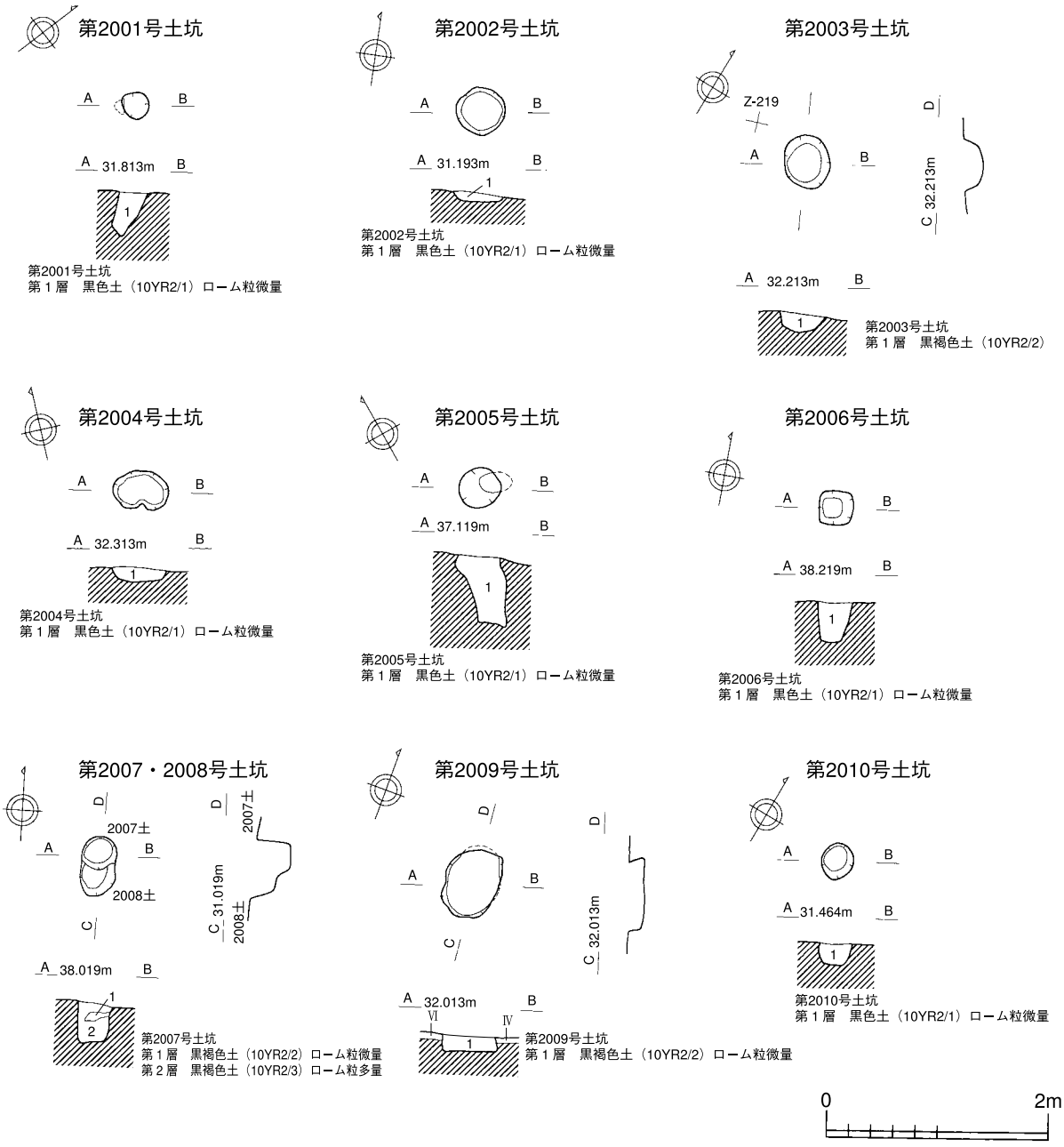
第22図　土坑（12）（153土・154土・172土・173土A・173土B）



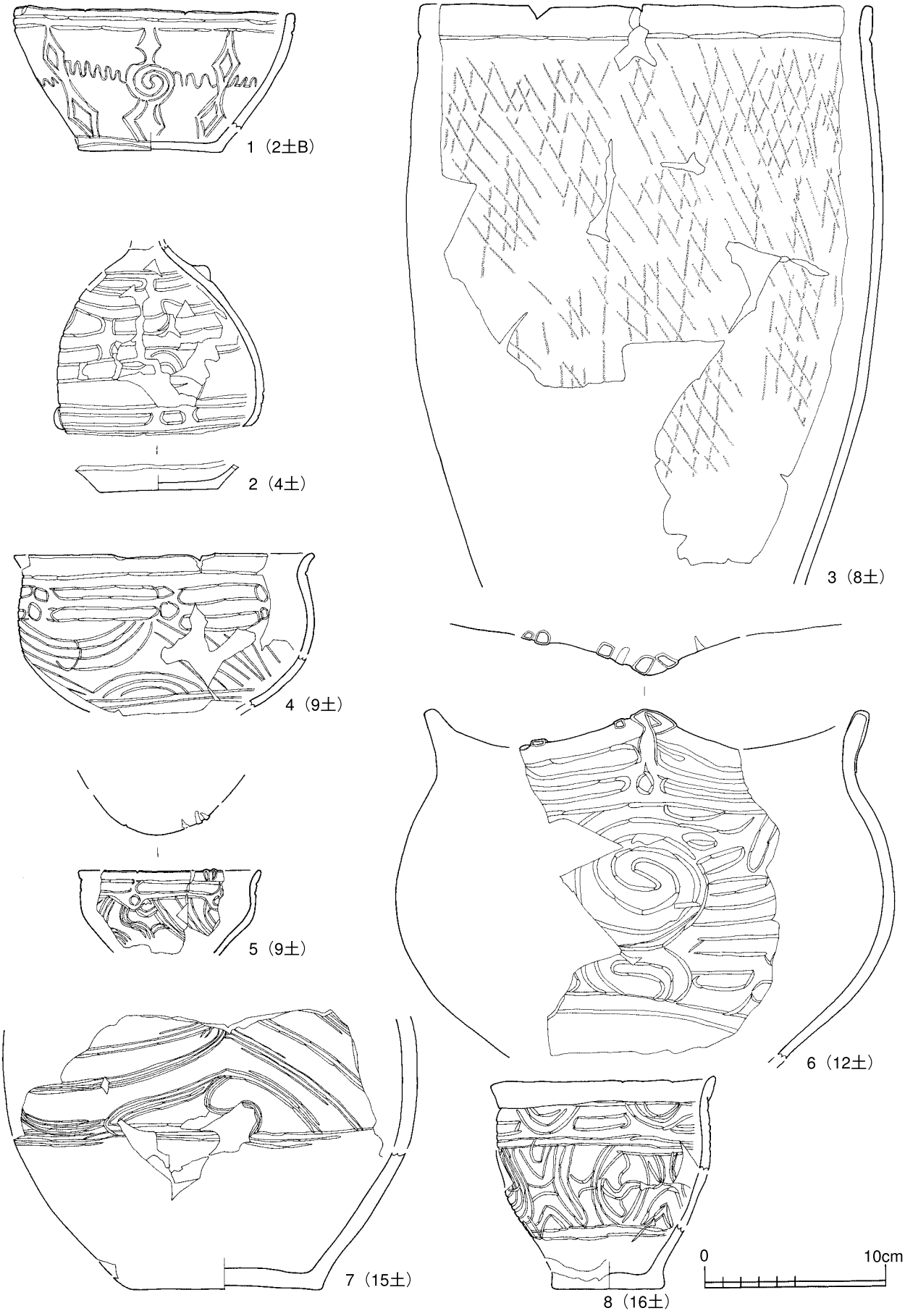
第23図　土坑（13）（1001～1006土・1008土）



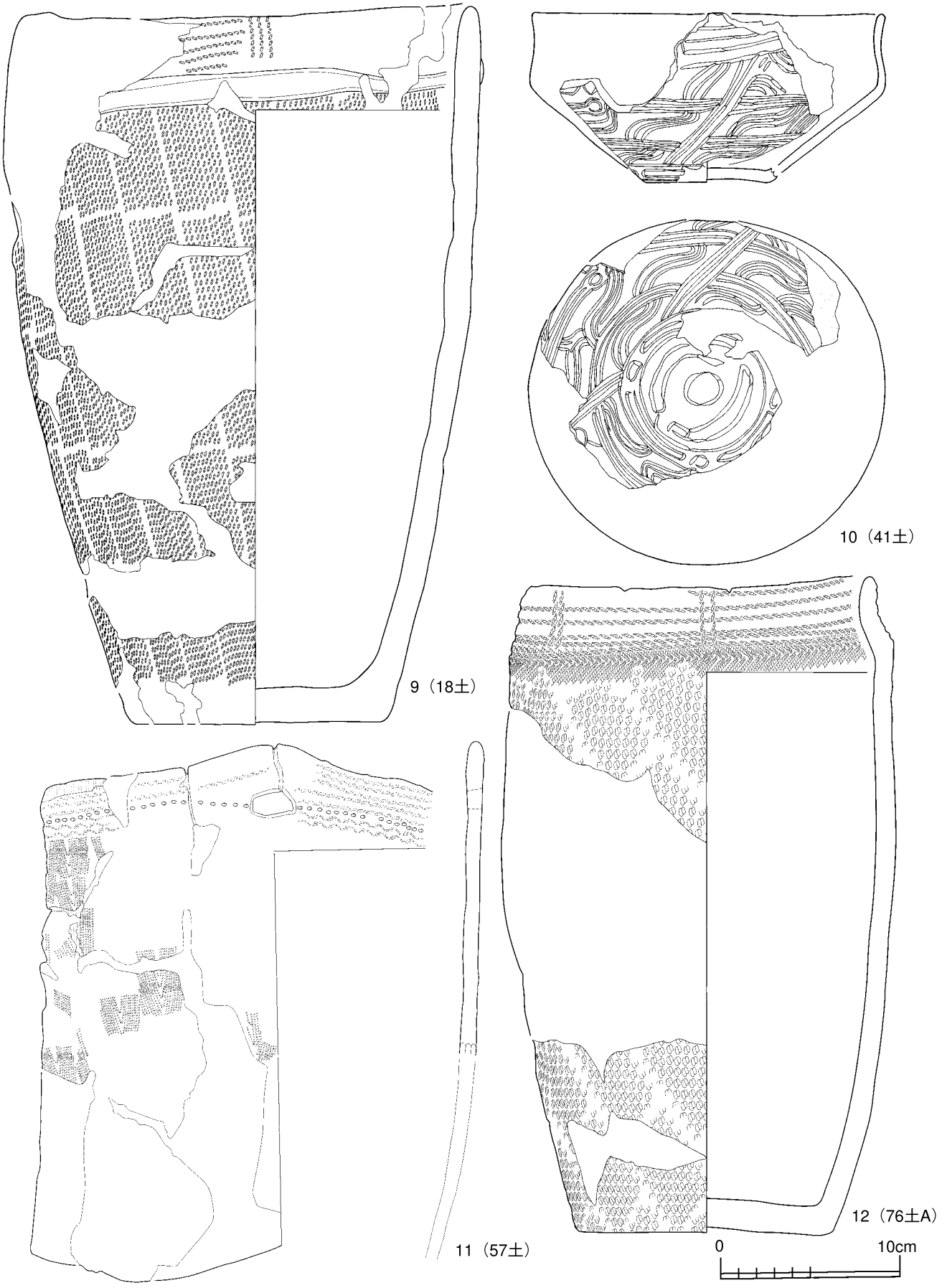
第24図　土坑（14）（1009土・1011土・1013～1017土）



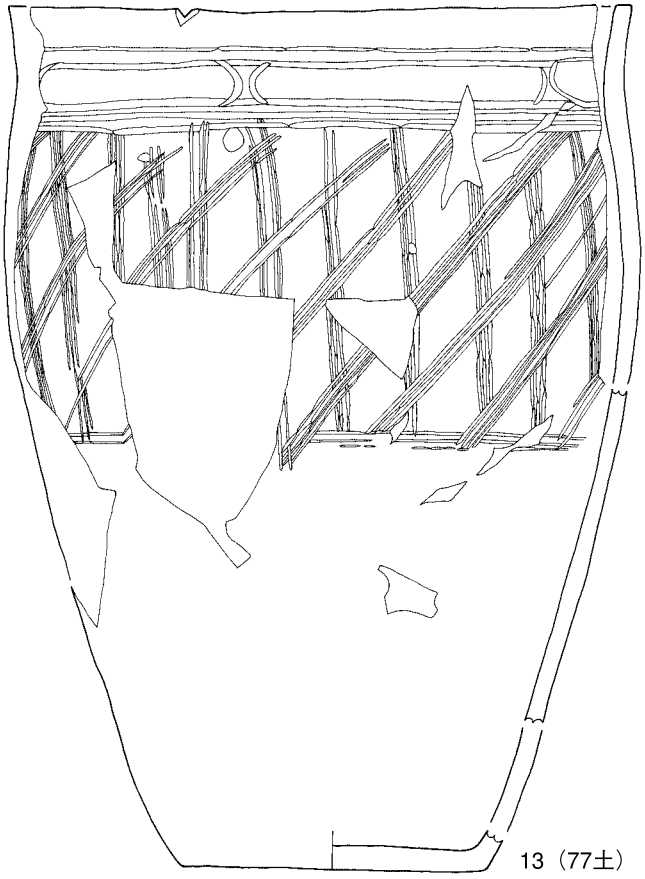
第25図　土坑（15）（2001～2010土）



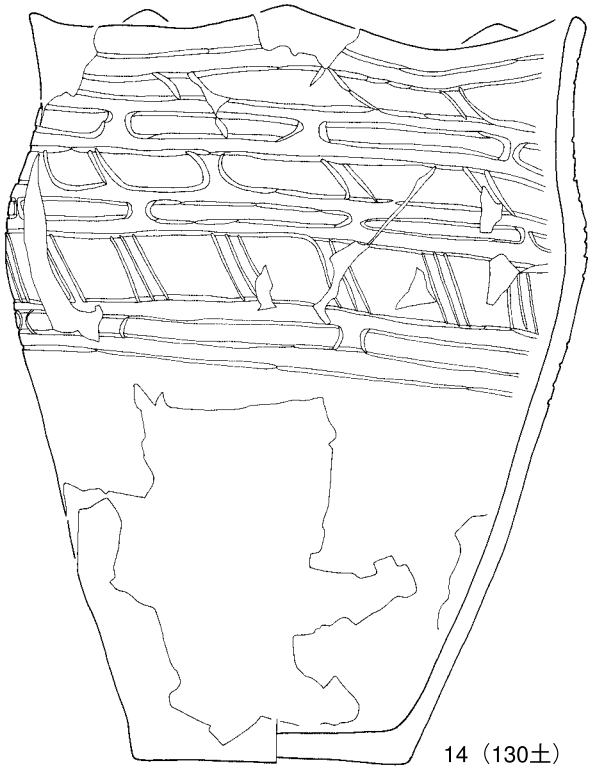
第26図　遺構内出土土器（1）



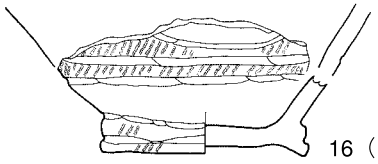
第27図　遺構内出土土器(2)



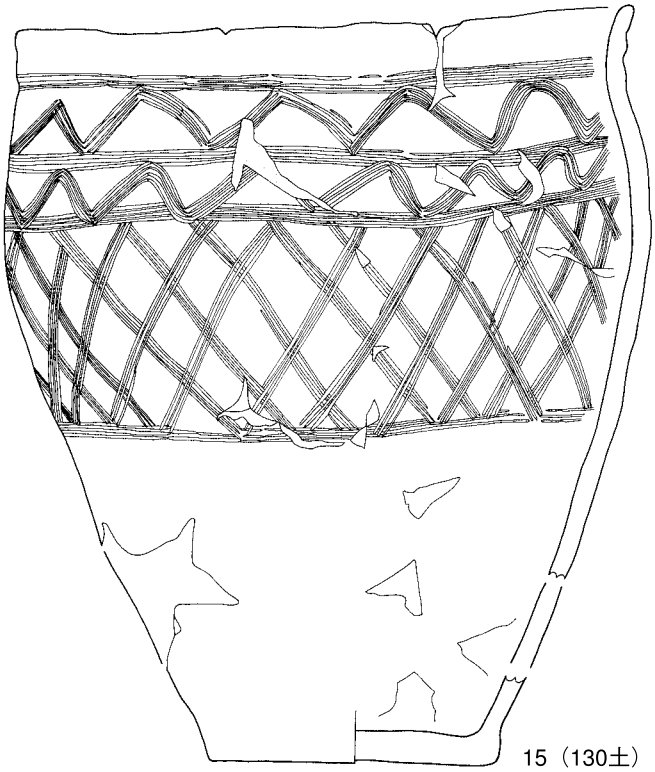
13（77土）



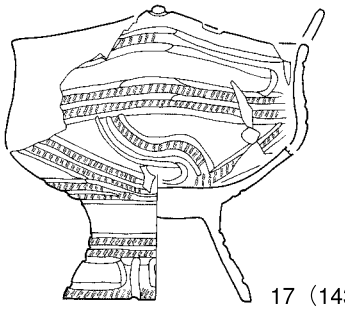
14（130土）



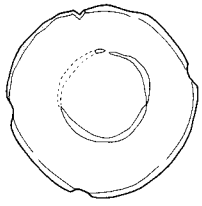
16（130土）

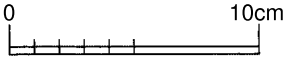


15（130土）

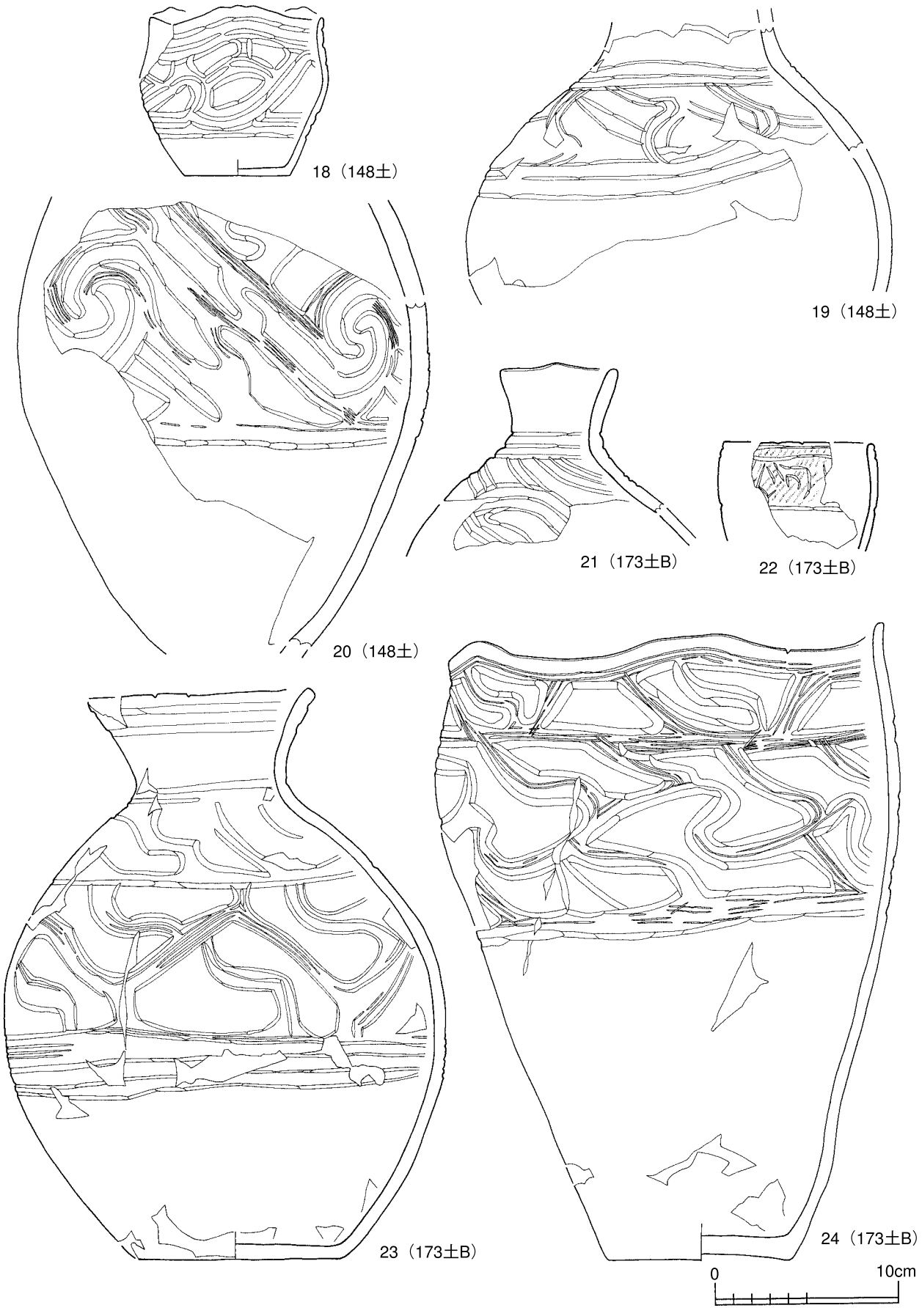


17（143土）

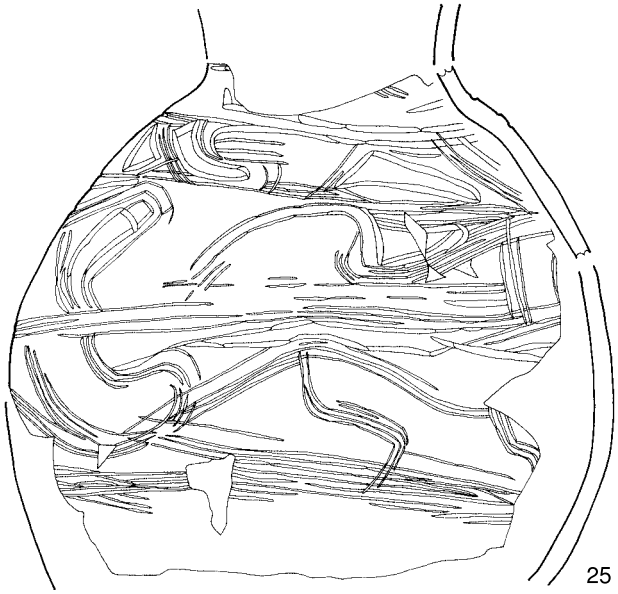


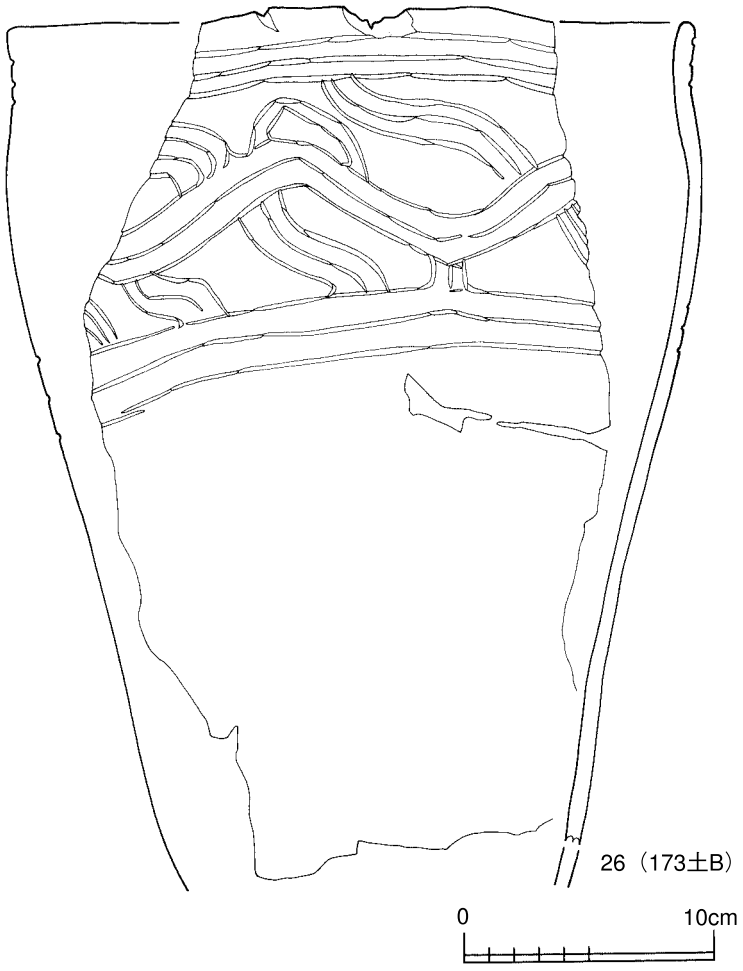


第28図　遺構内出土土器(3)

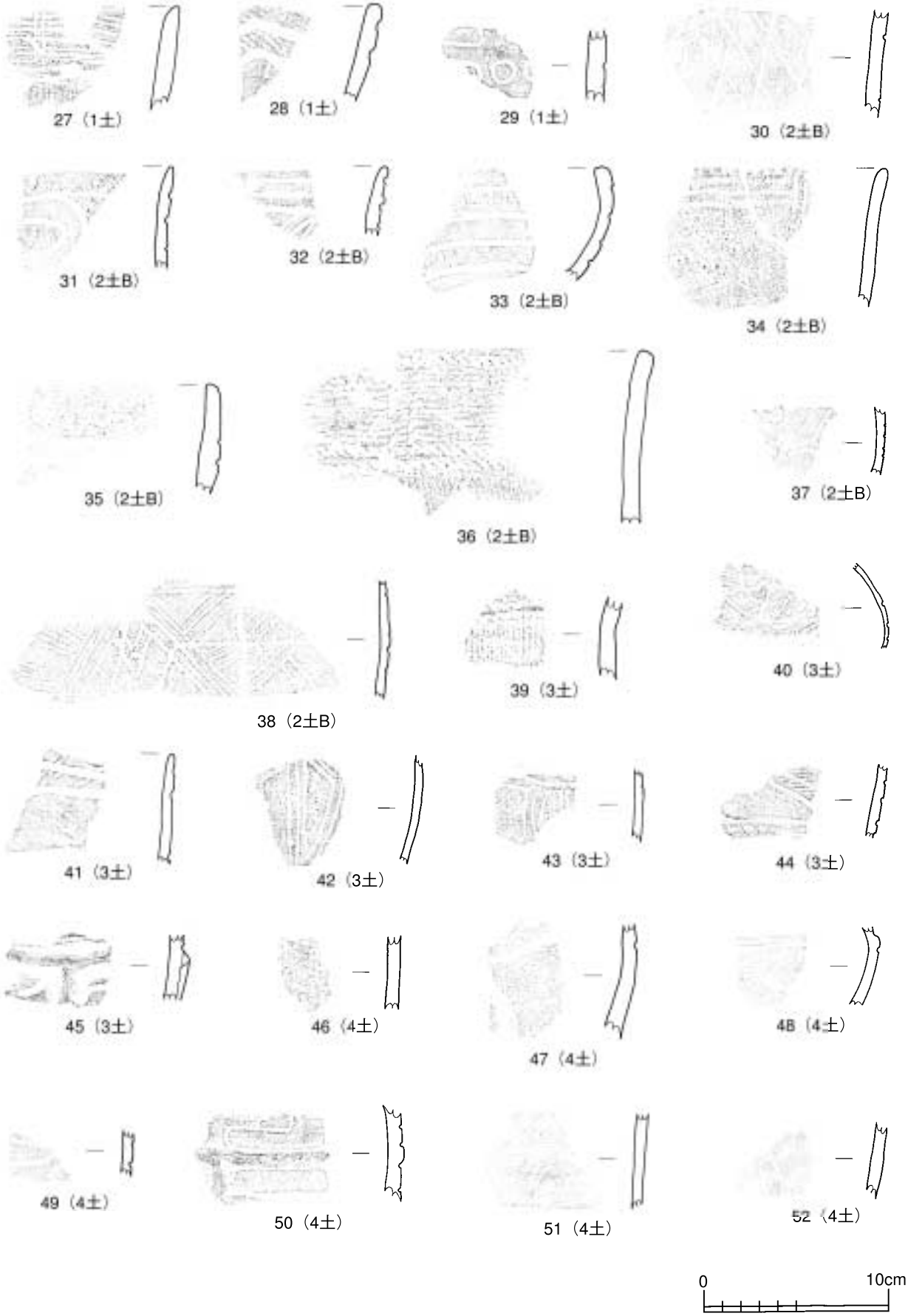


第29図　遺構内出土土器(4)

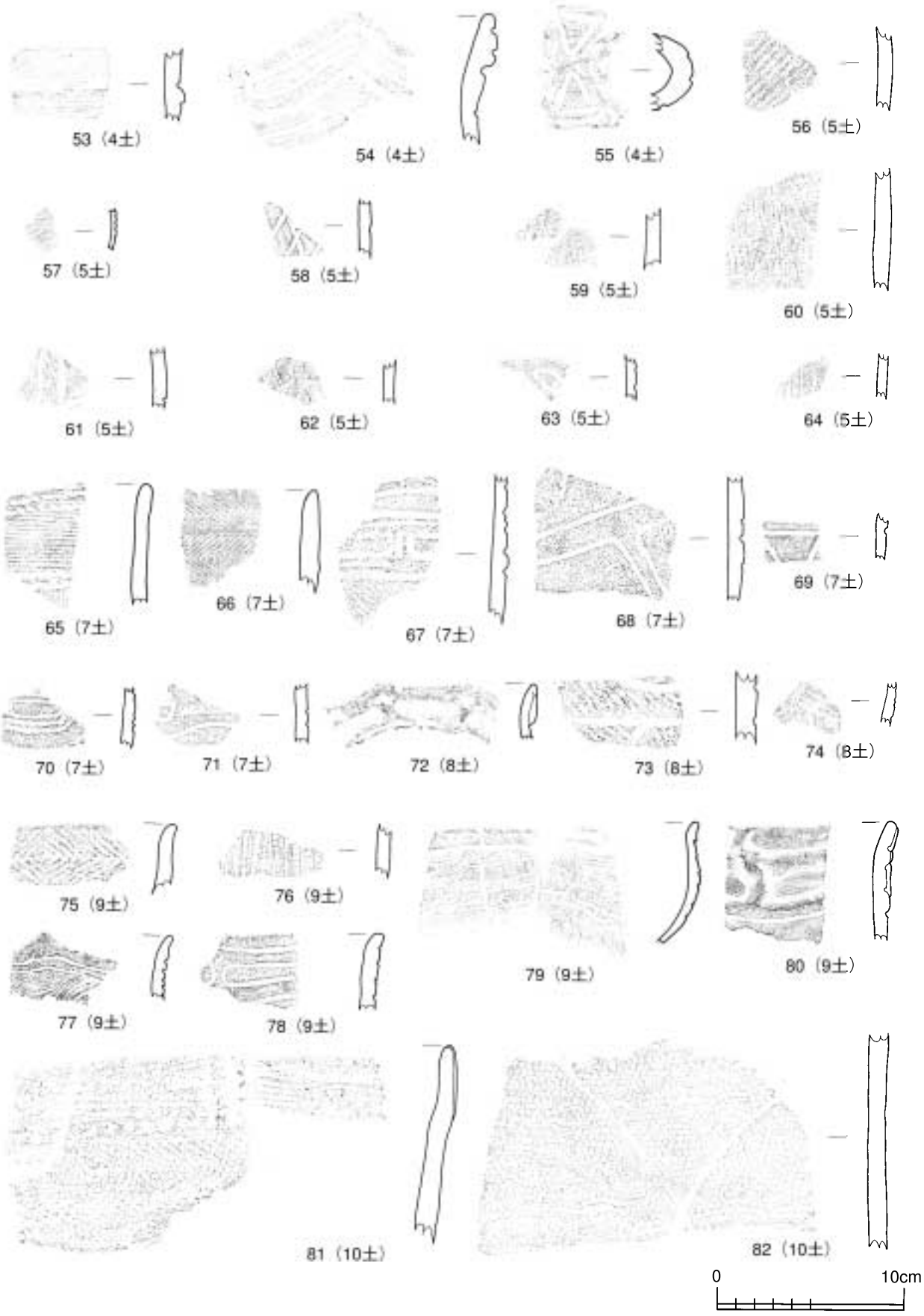




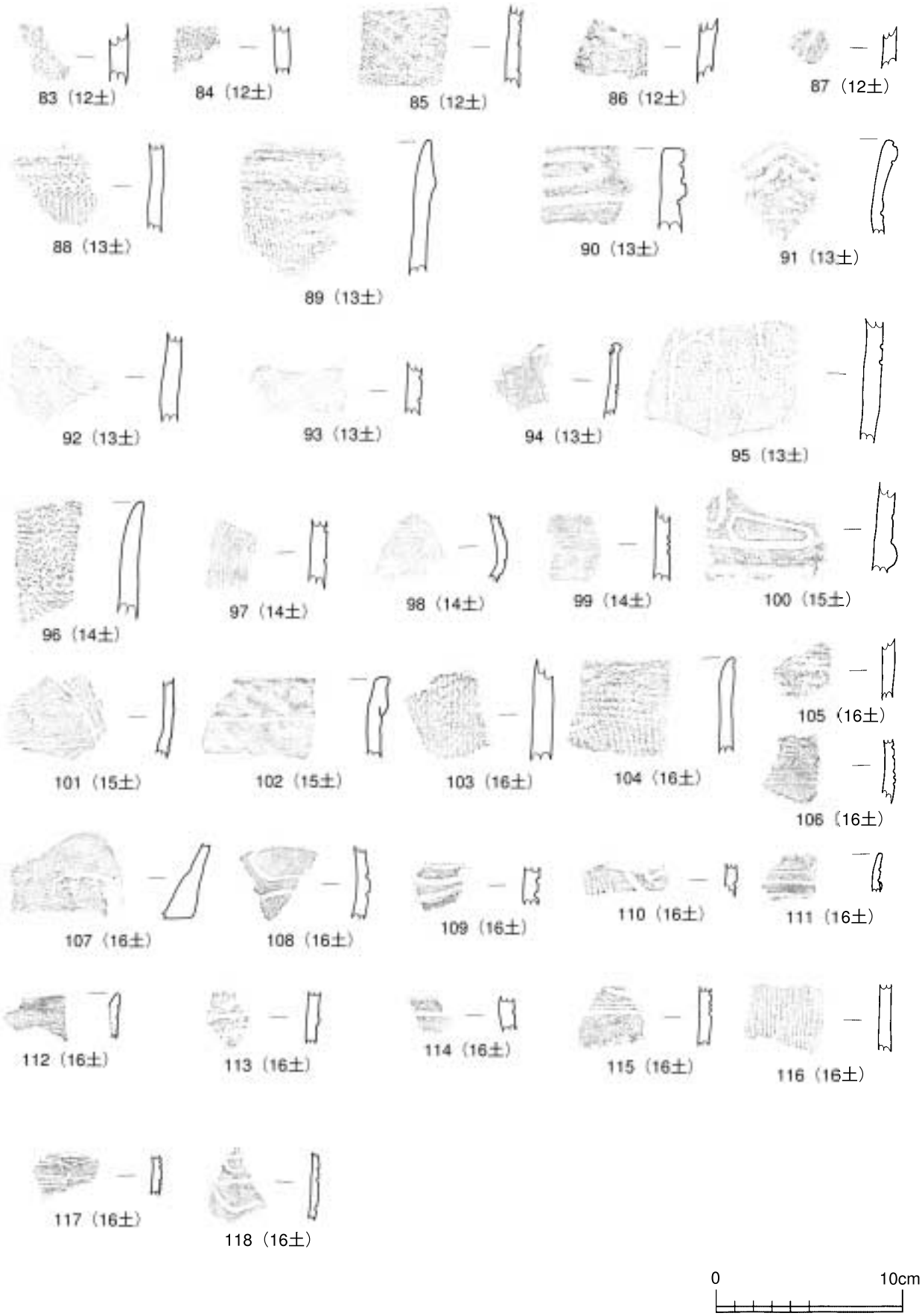
第30図　遺構内出土土器(5)



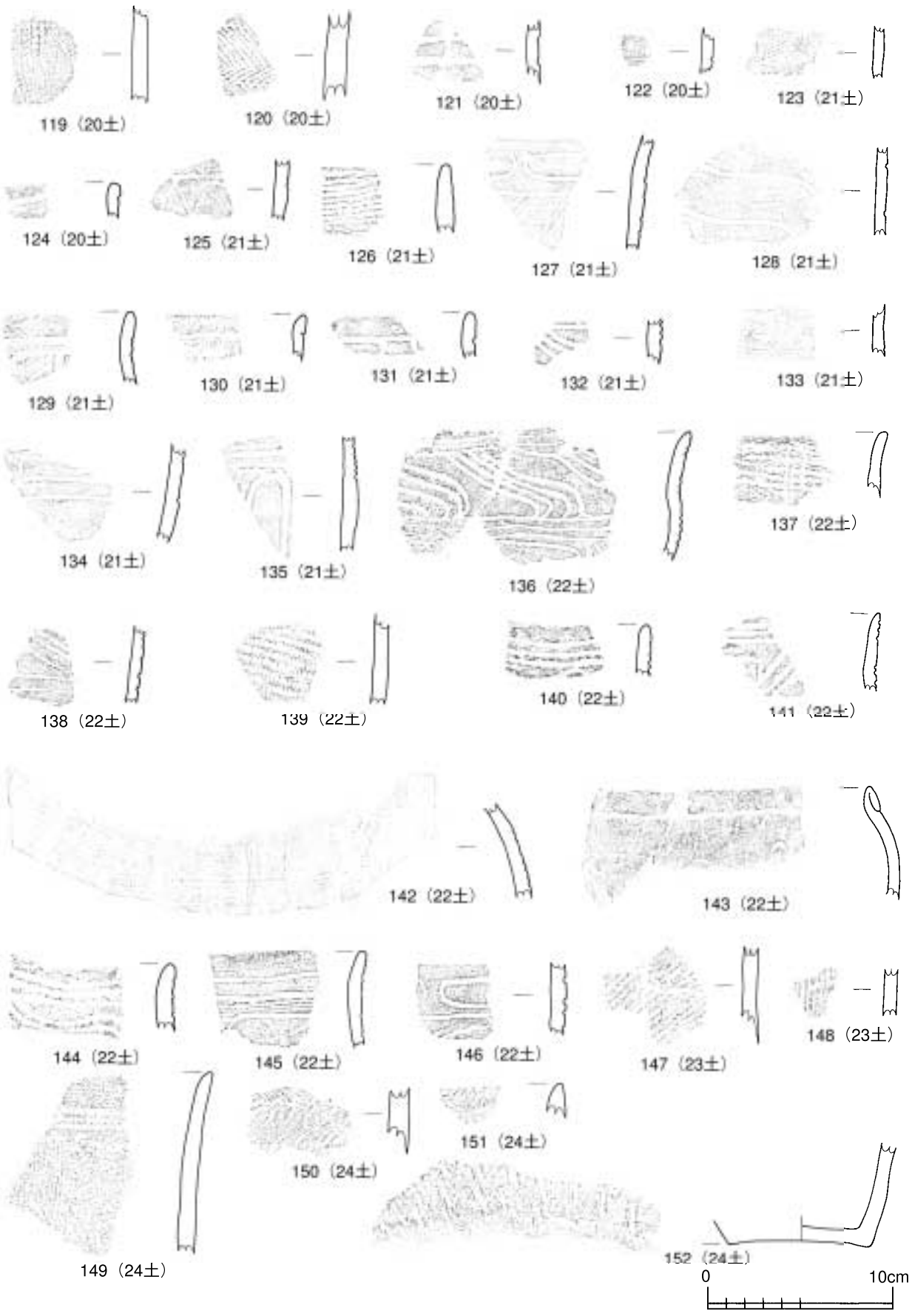
第31図　遺構内出土土器(6)



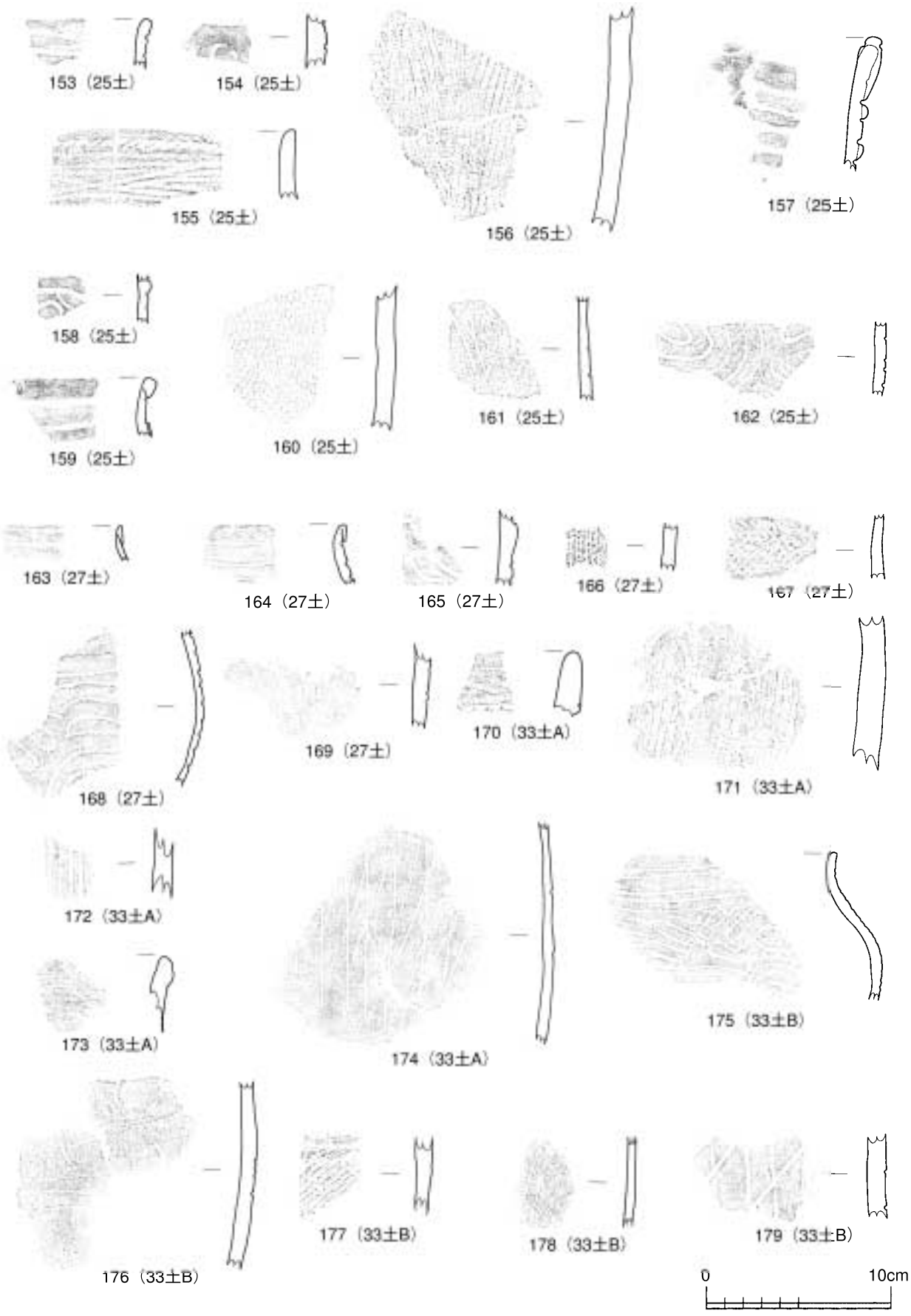
第32図　遺構内出土土器（7）



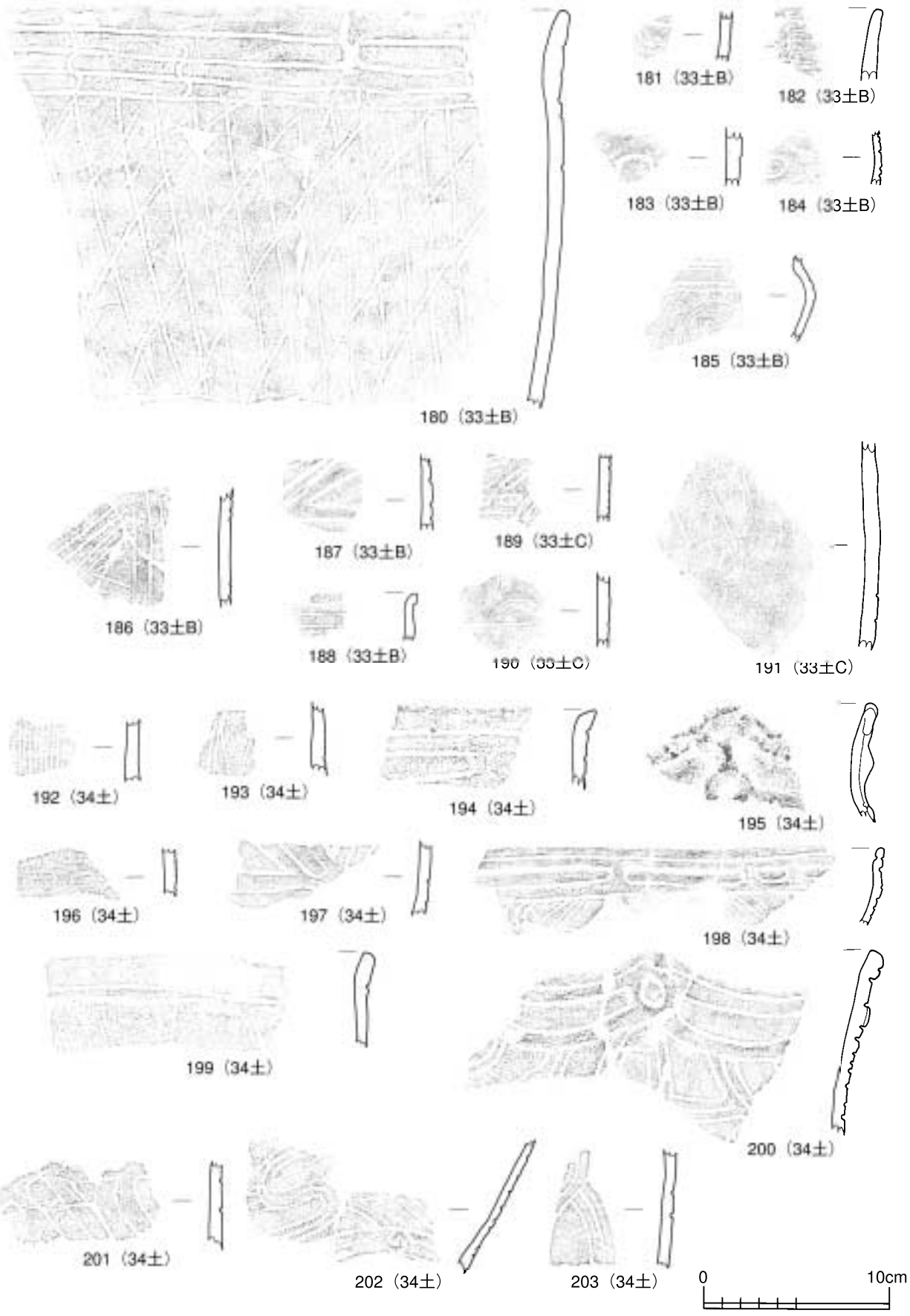
第33図　遺構内出土土器(8)



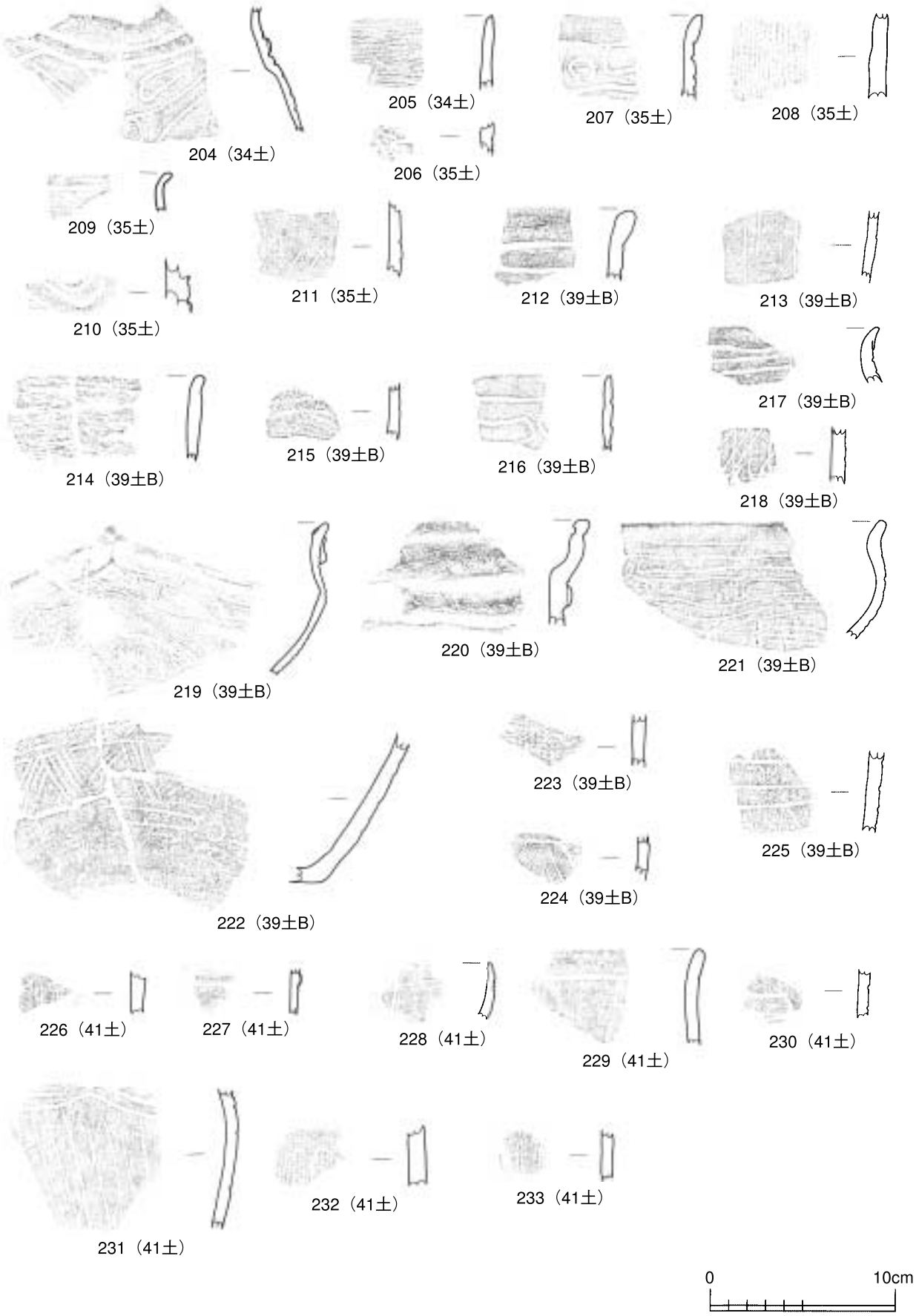
第34図　遺構内出土土器(9)



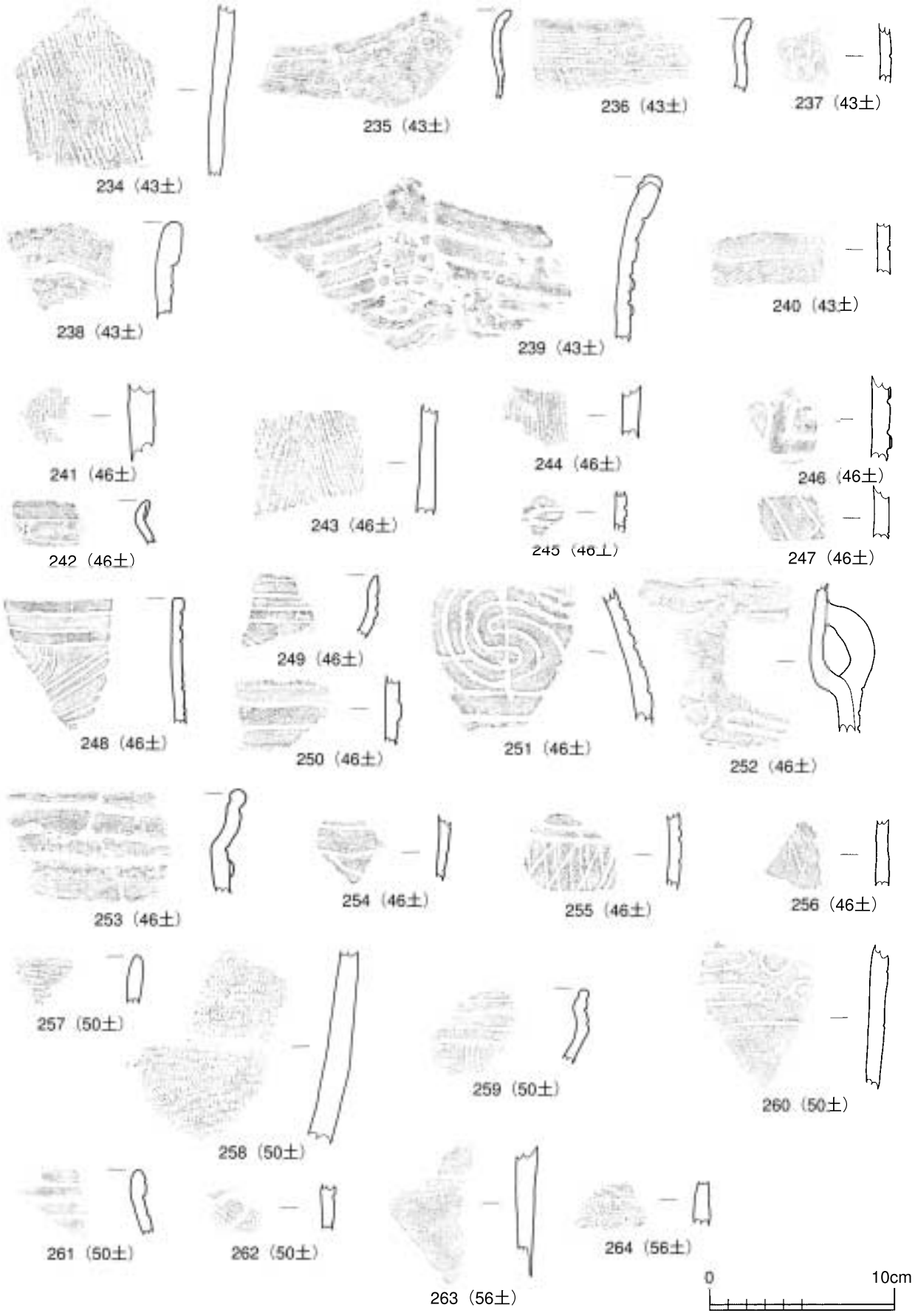
第35図　遺構内出土土器（10）



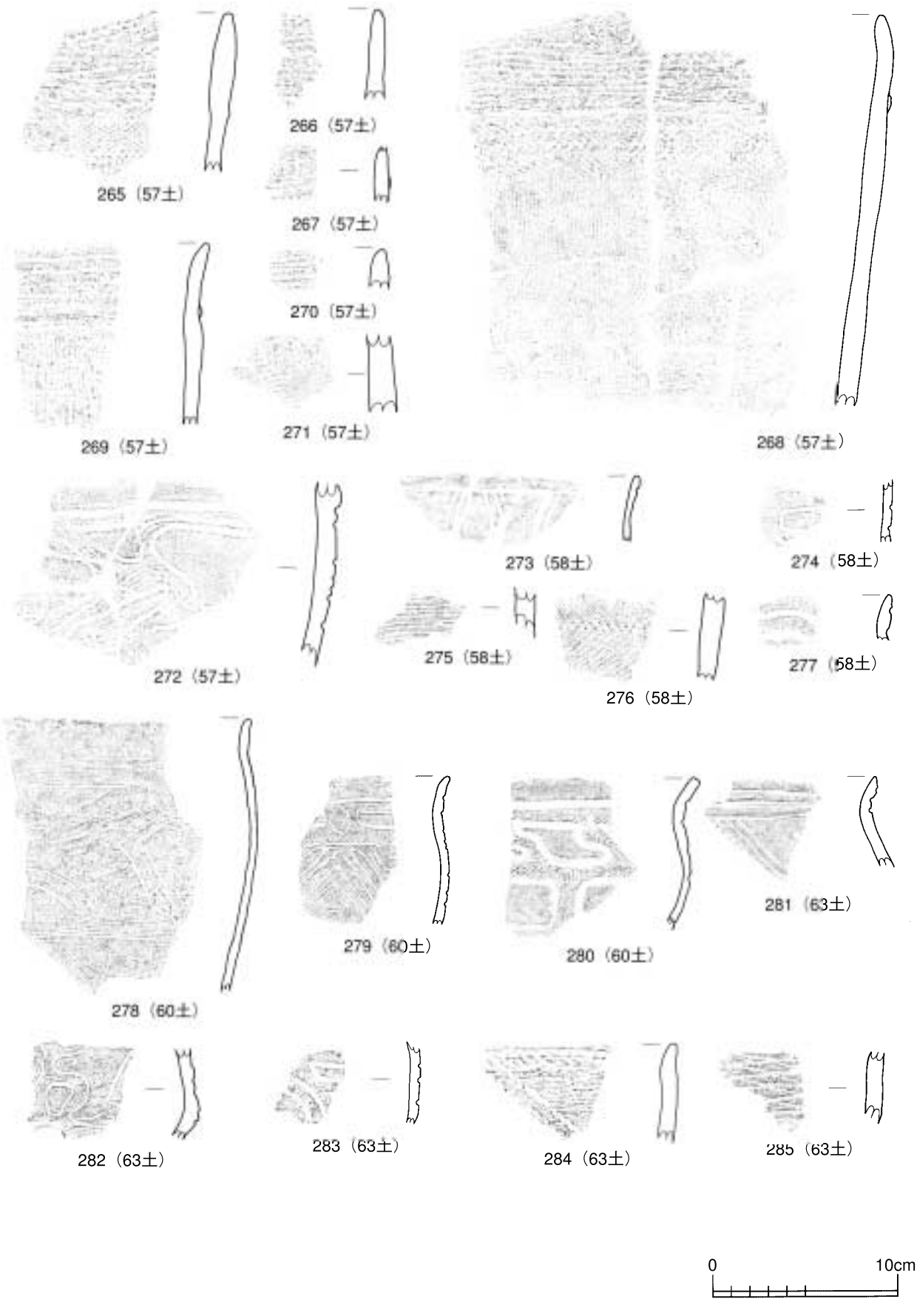
第36図　遺構内出土土器（11）



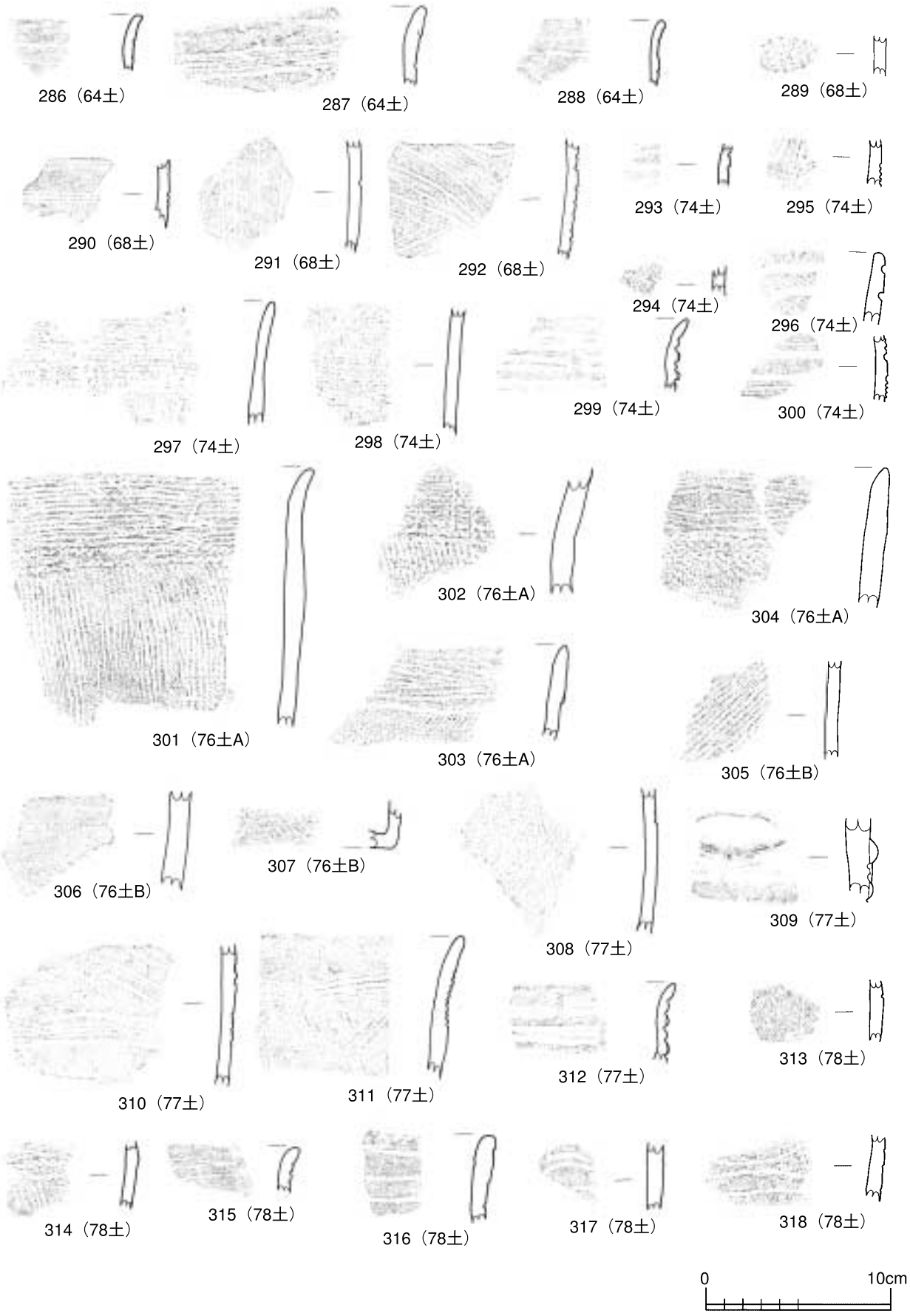
第37図　遺構内出土土器（12）



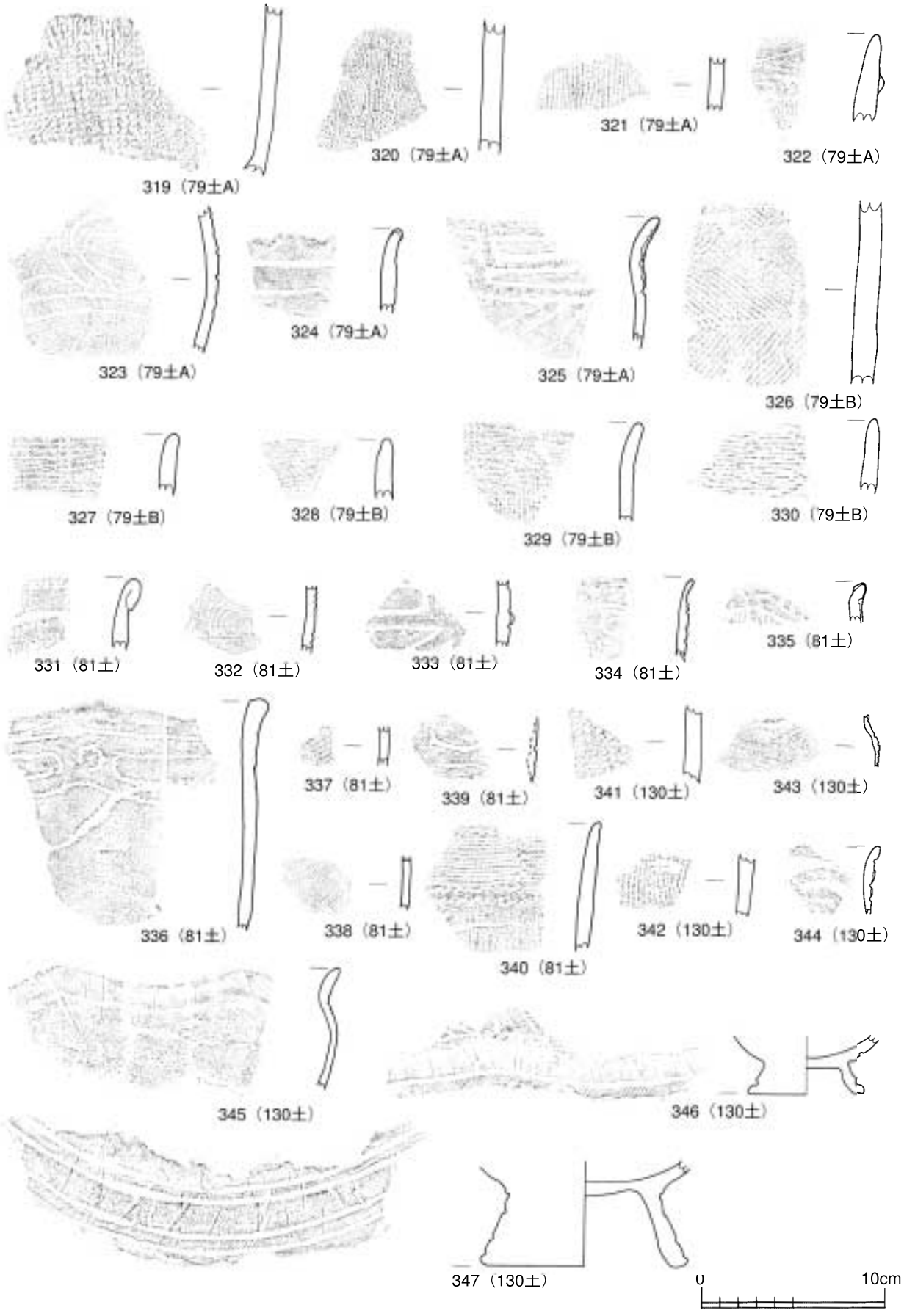
第38図　遺構内出土土器（13）



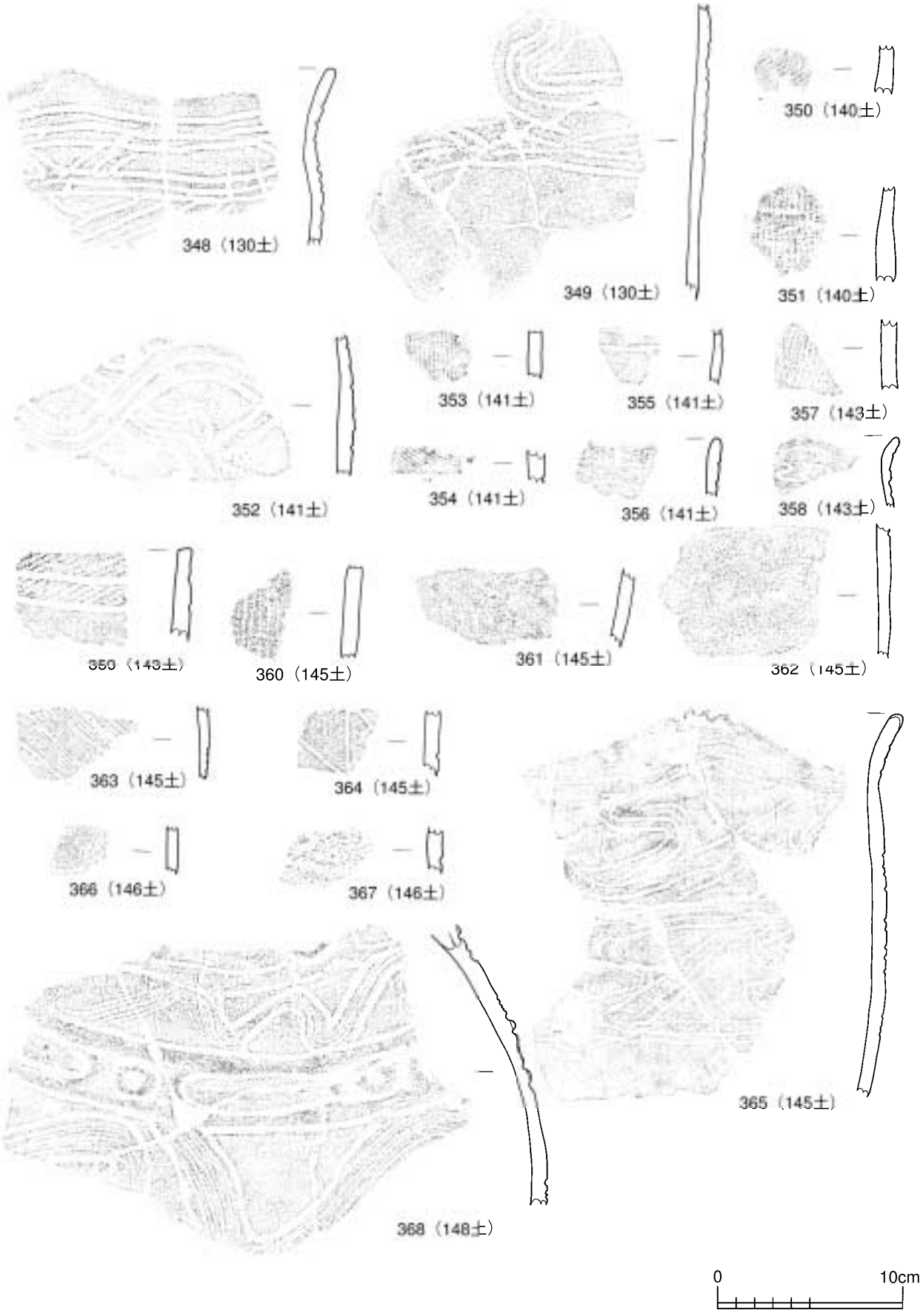
第39図　遺構内出土土器（14）



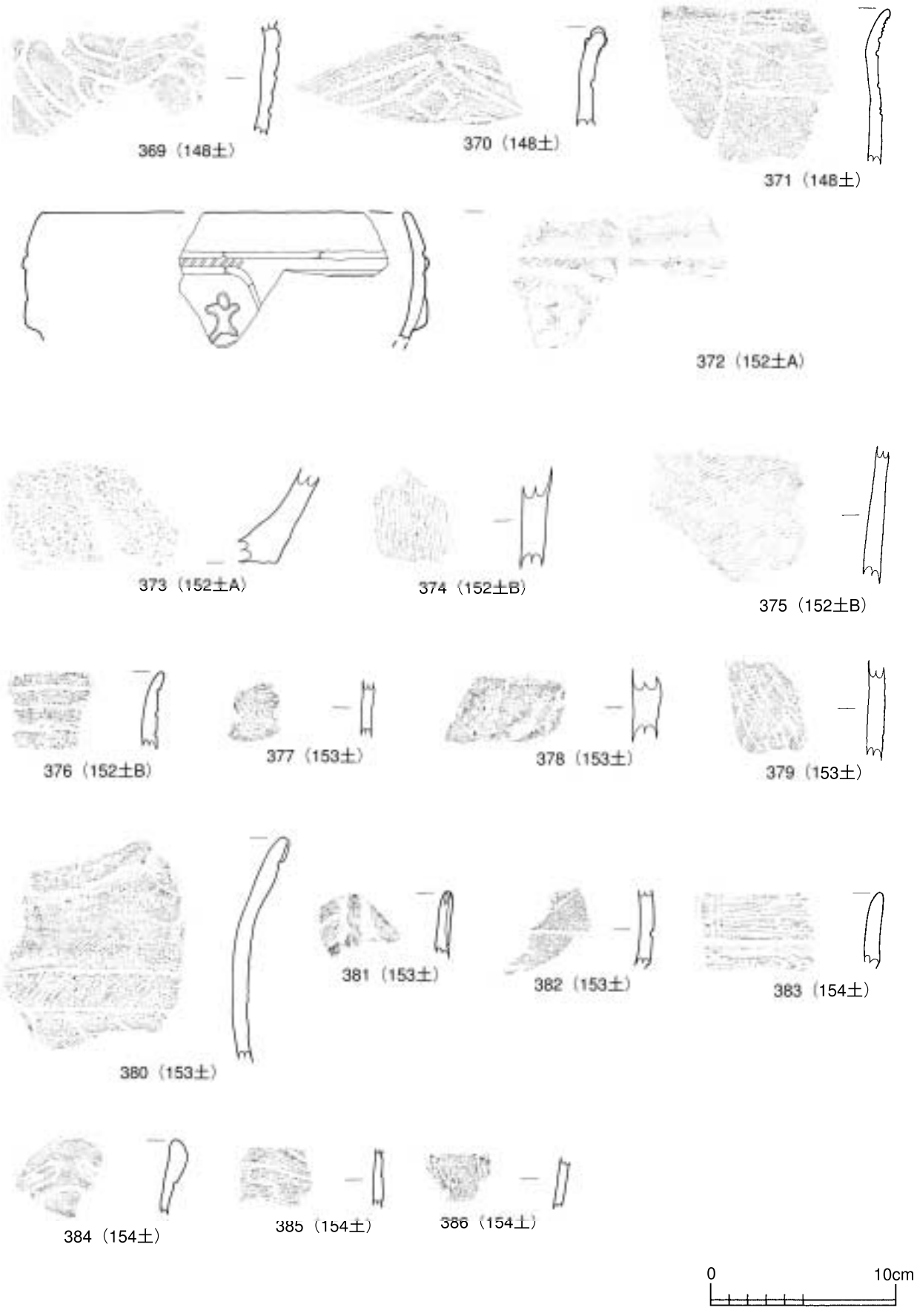
第40図　遺構内出土土器（15）



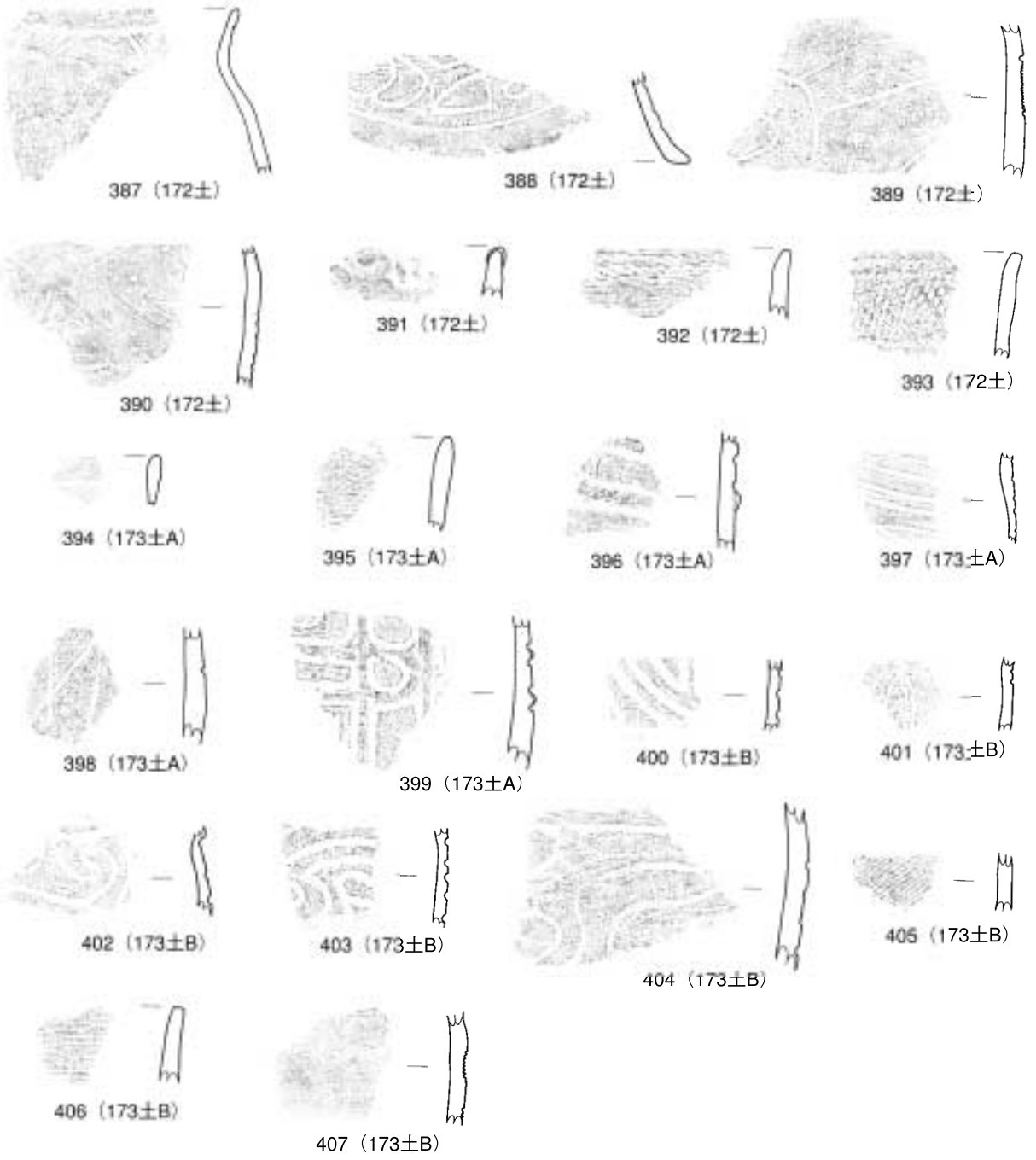
第41図　遺構内出土土器（16）



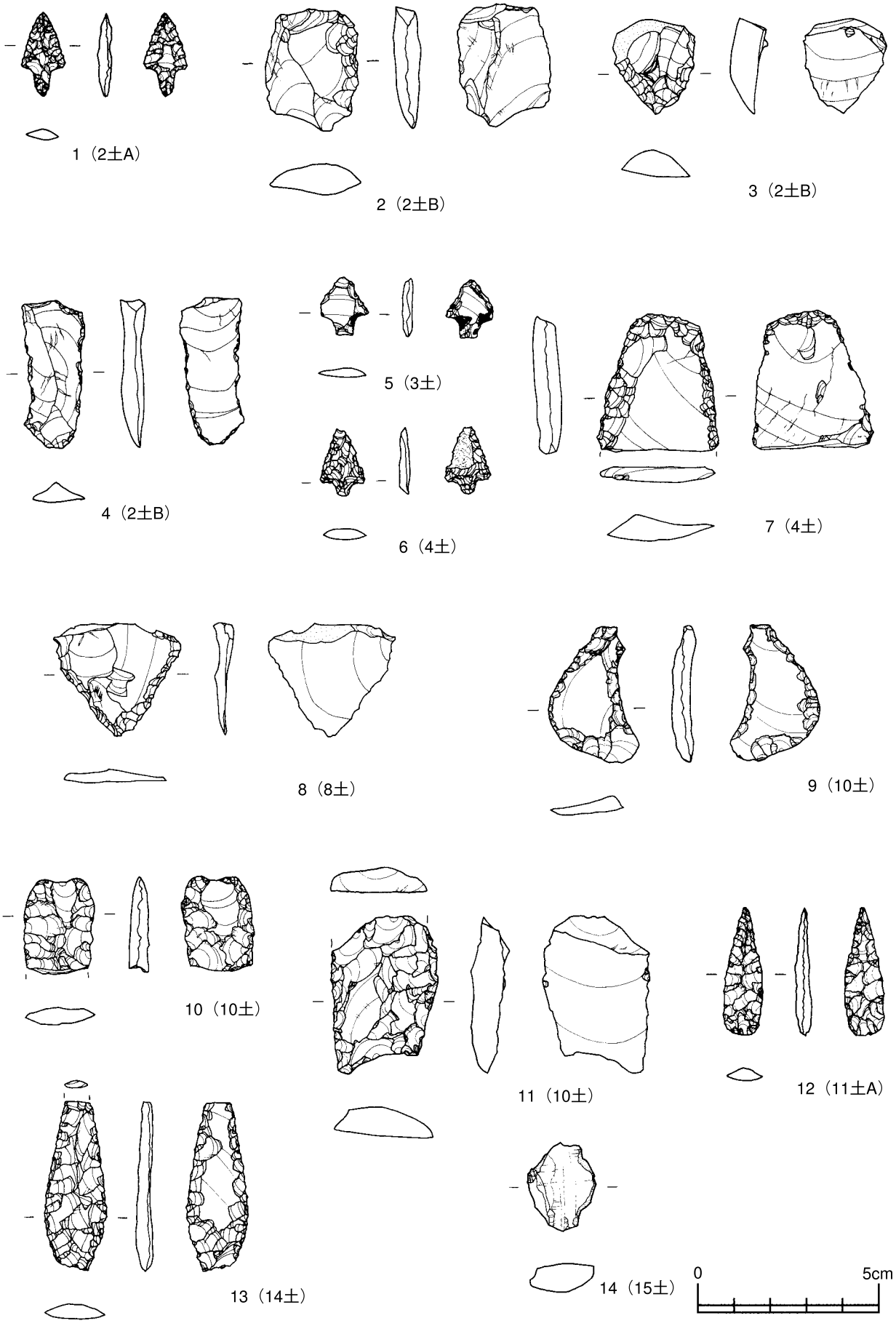
第42図　遺構内出土土器（17）



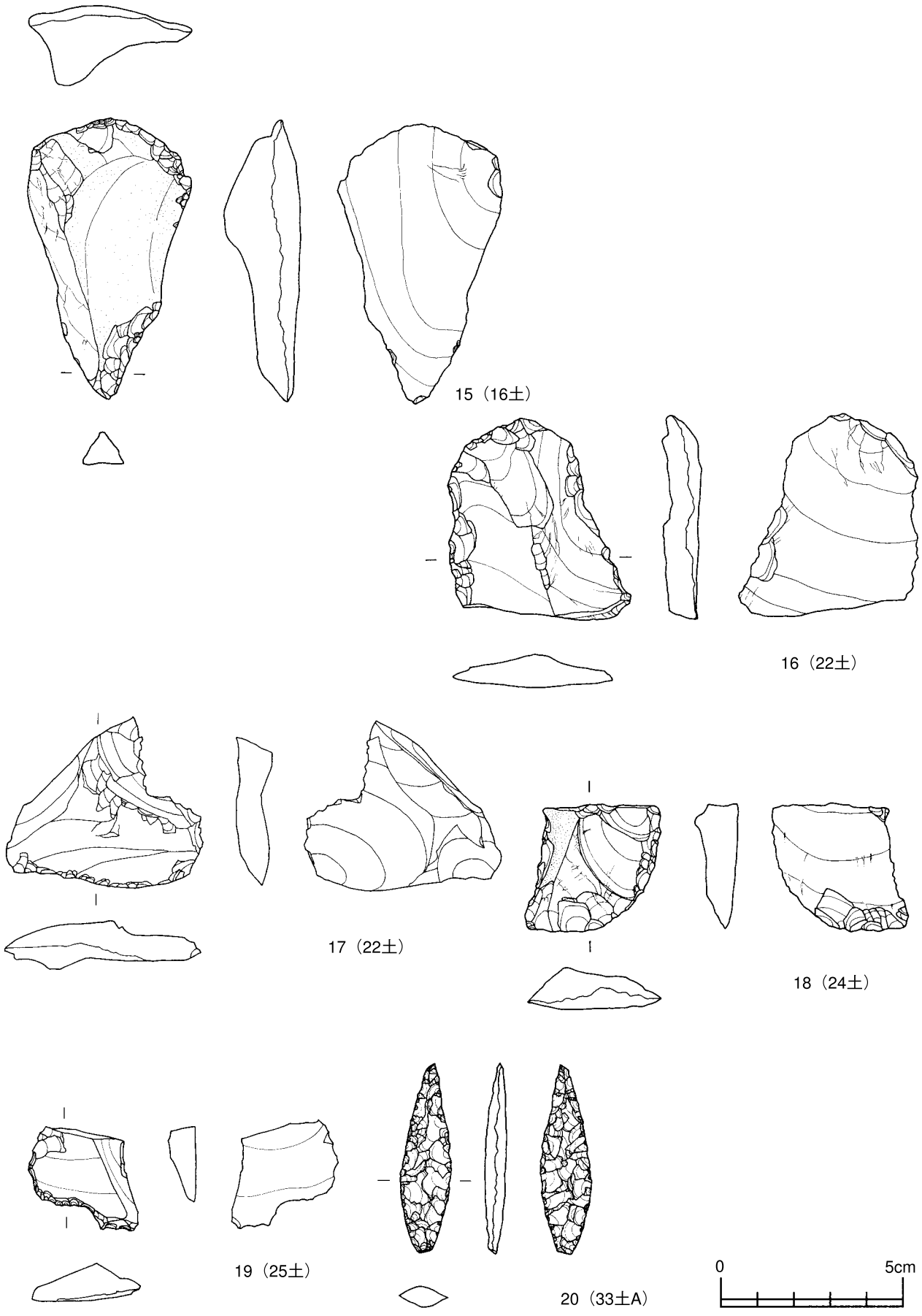
第43図　遺構内出土土器（18）



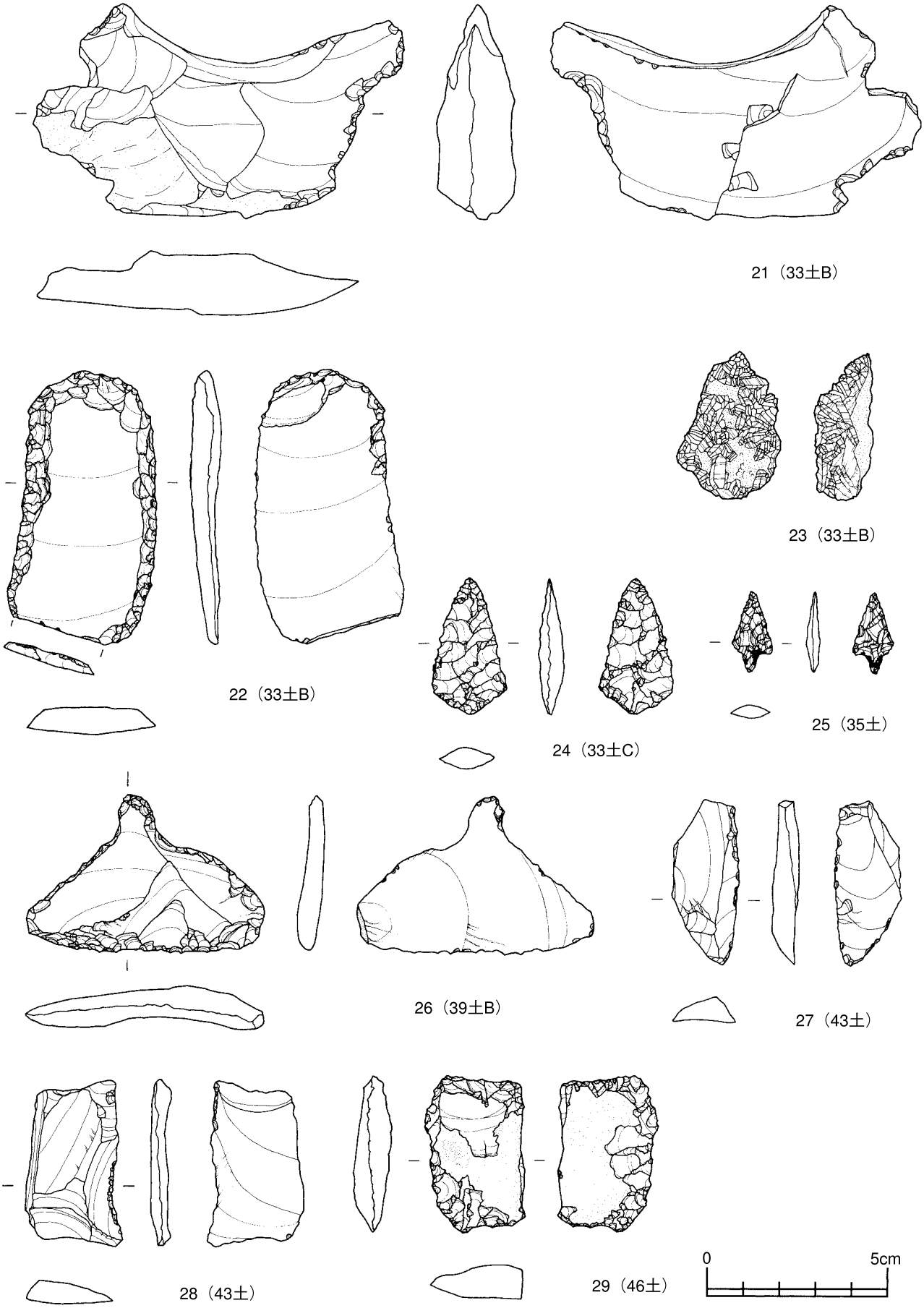
第44図　遺構内出土土器（19）



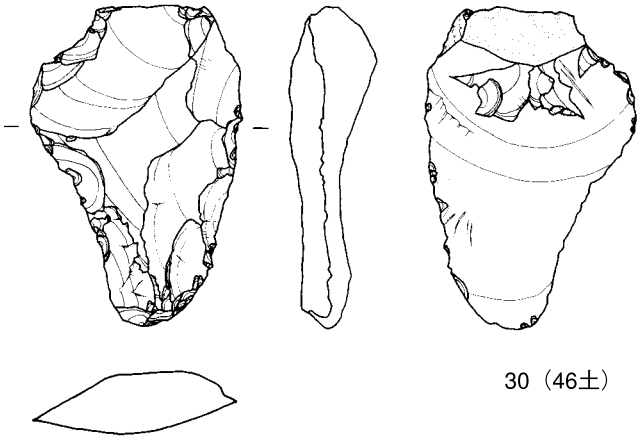
第45図　遺構内出土石器（1）



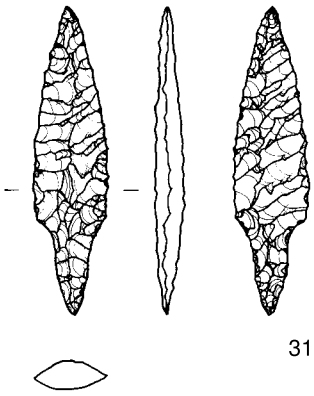
第46図　遺構内出土石器（2）



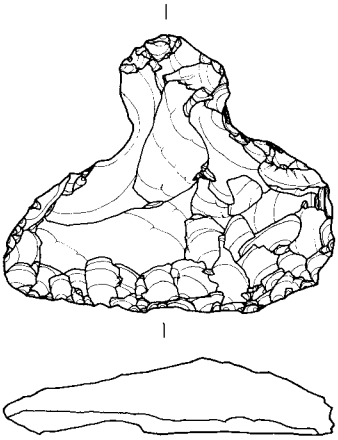
第47図　遺構内出土石器(3)



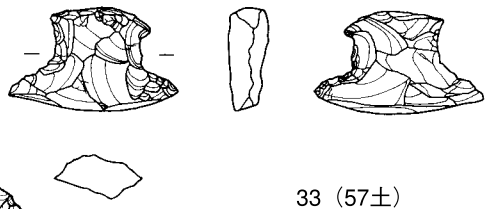
30（46土）



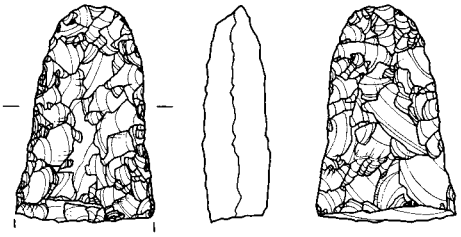
31（50土）



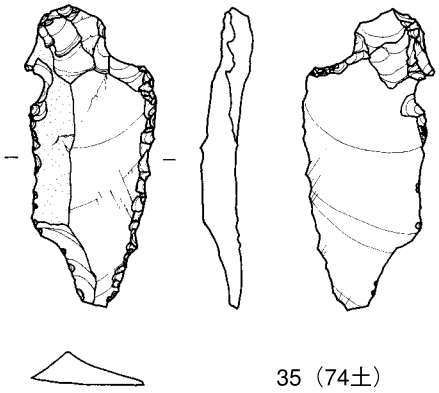
32（57土）



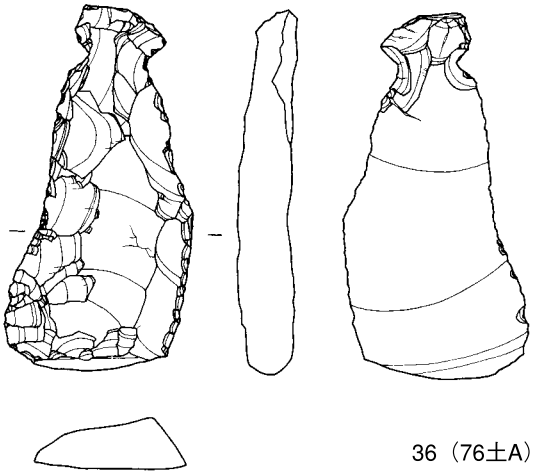
33（57土）



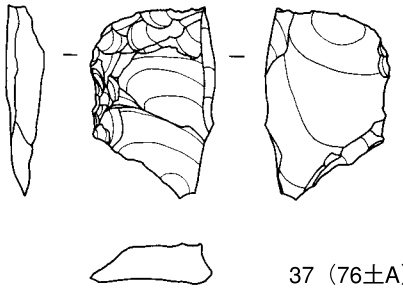
34（60土）



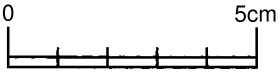
35（74土）



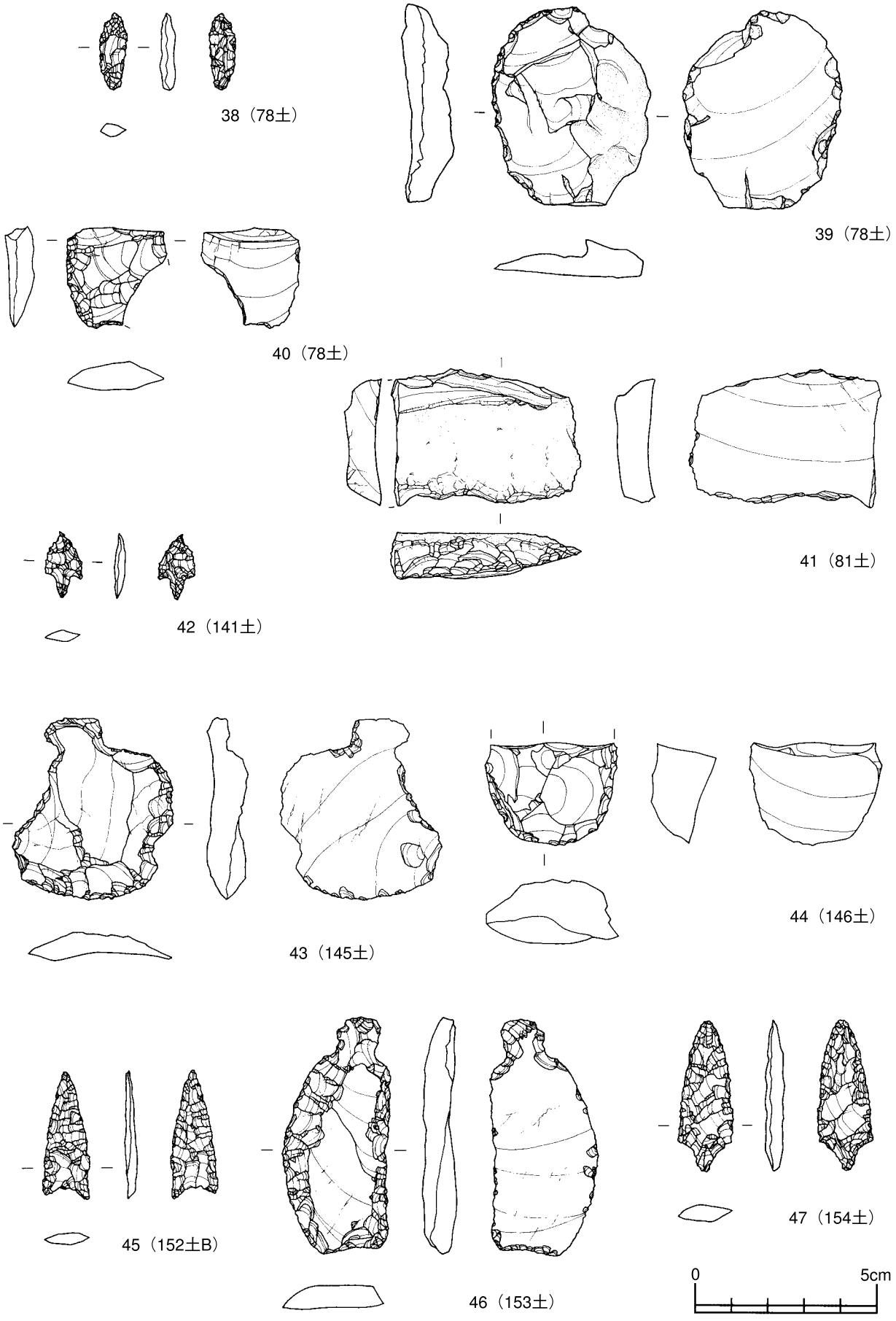
36（76土A）



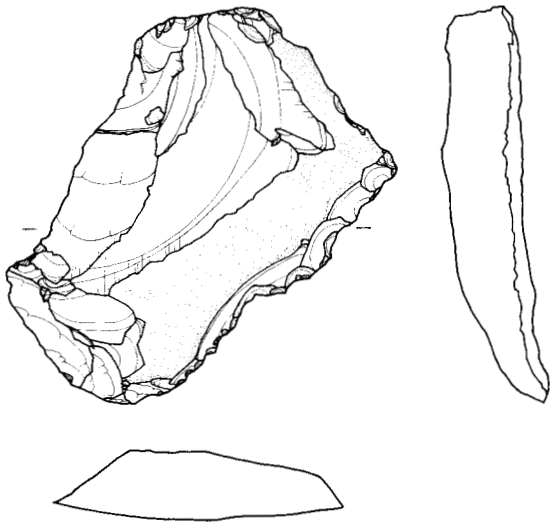
37（76土A）



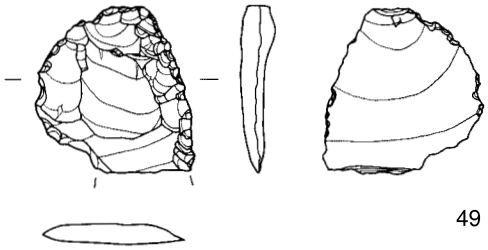
第48図　遺構内出土石器（4）



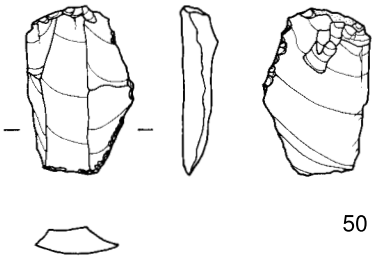
第49図　遺構内出土石器(5)



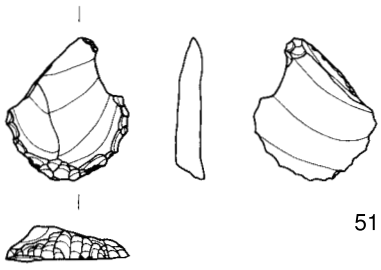
48（154土）



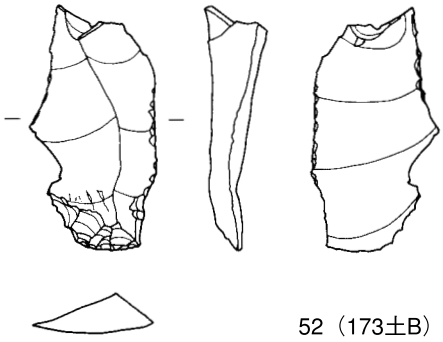
49（172土）



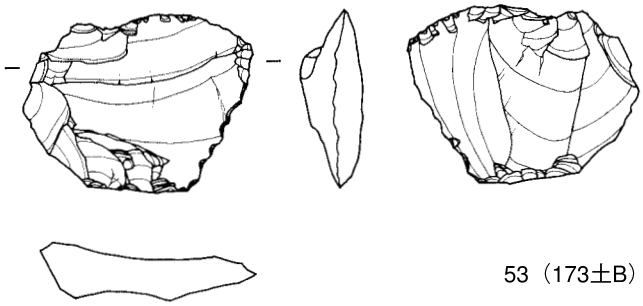
50（173土A）



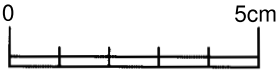
51（173土B）



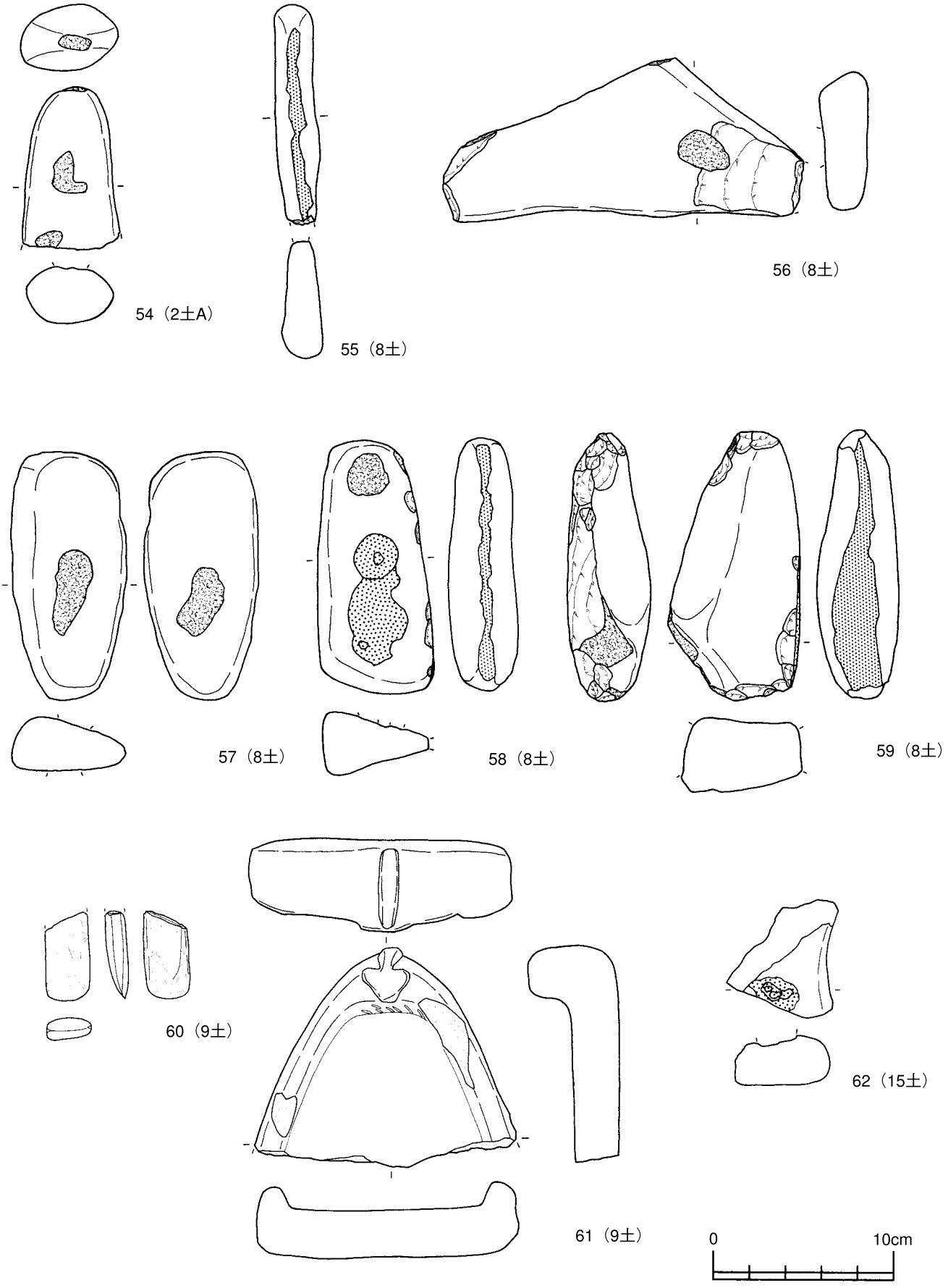
52（173土B）



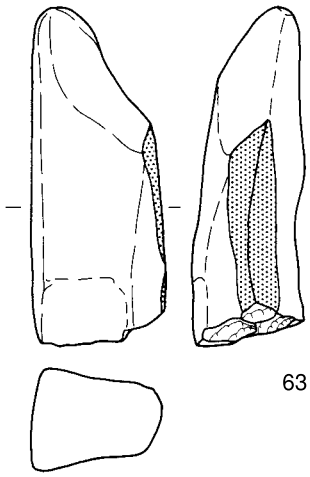
53（173土B）



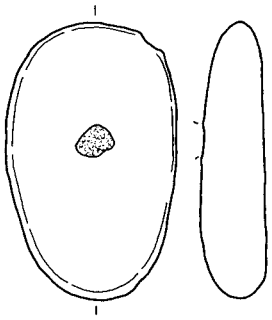
第50図　遺構内出土石器（6）



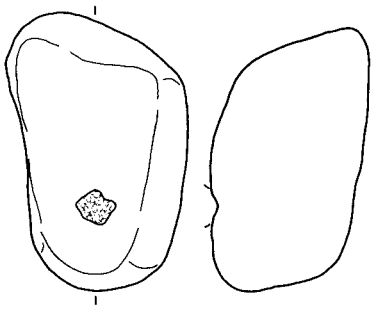
第51図　遺構内出土石器（7）



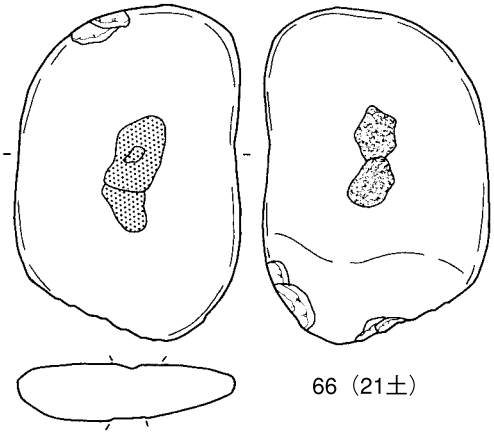
63（18土）



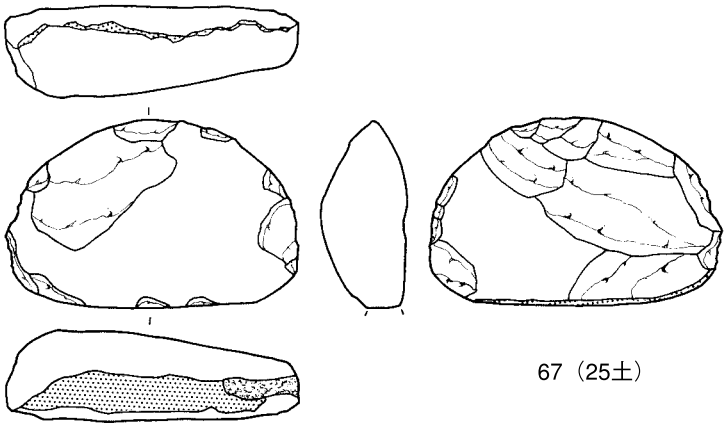
64（18土）



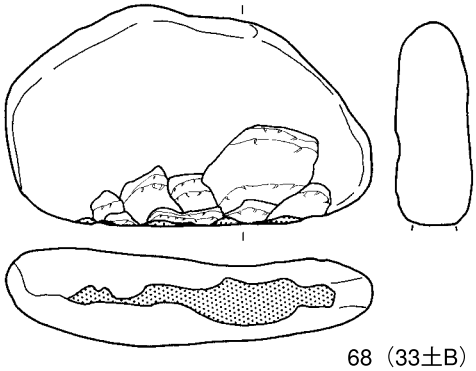
65（18土）



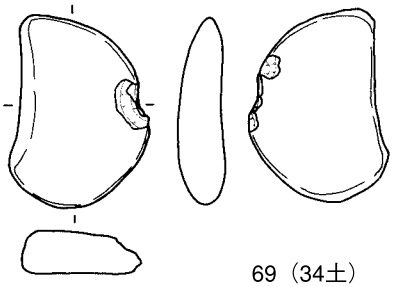
66（21土）



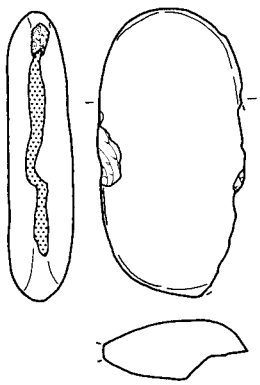
67（25土）



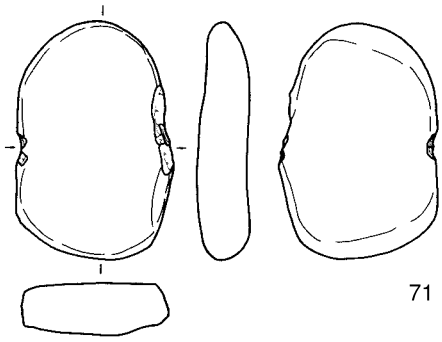
68（33土B）



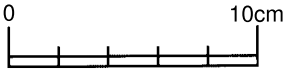
69（34土）



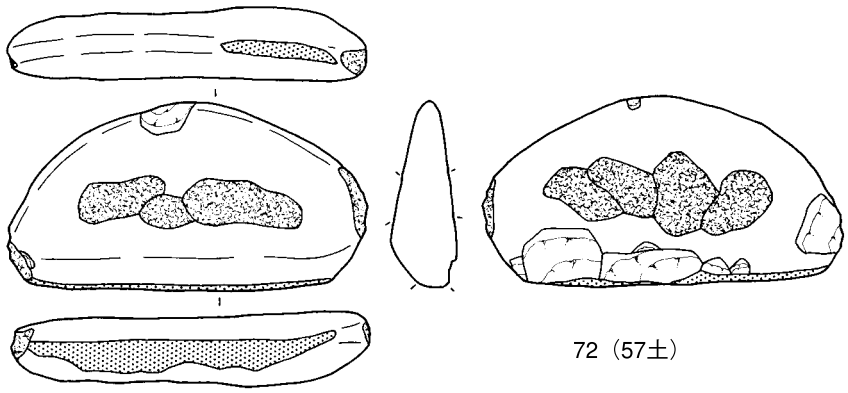
70（39土B）



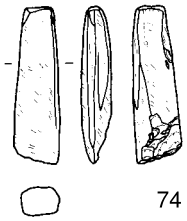
71（46土）



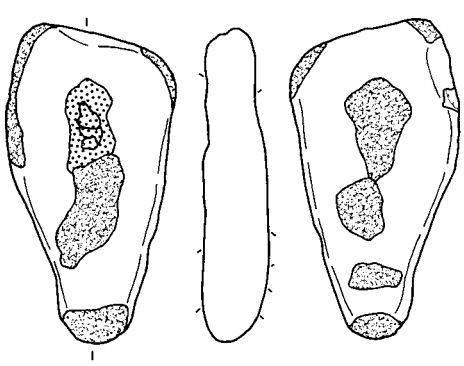
第52図　遺構内出土石器（8）



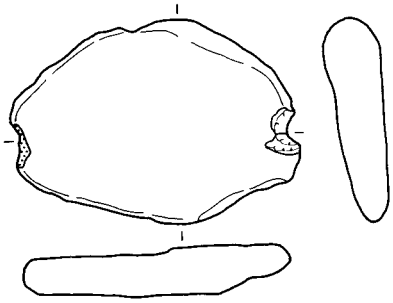
72（57土）



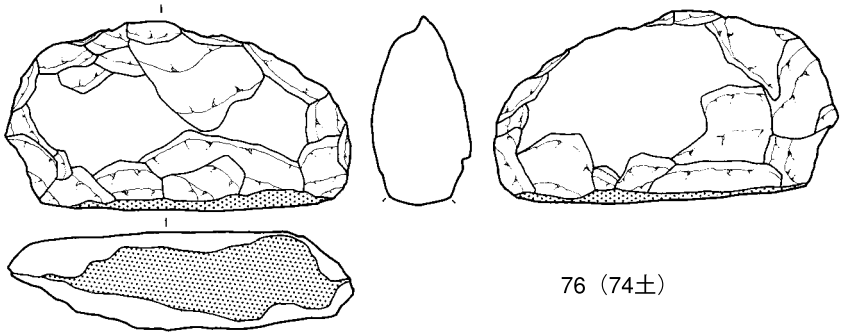
74（64土）



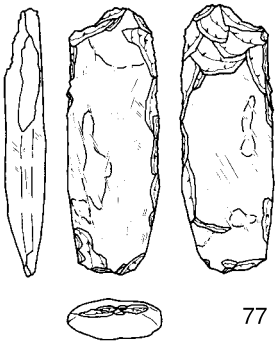
73（57土）



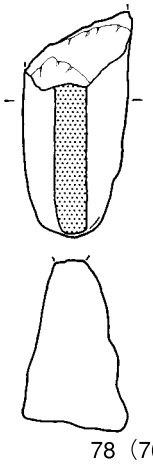
75（74土）



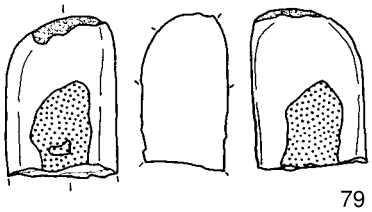
76（74土）



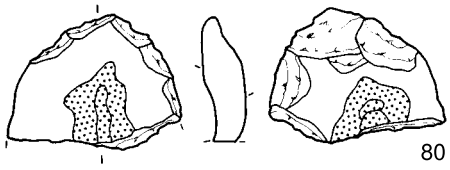
77（76土A）



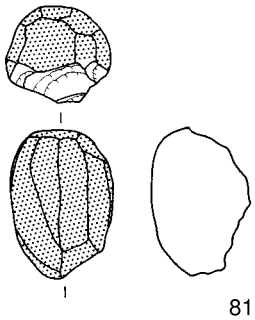
78（76土A）



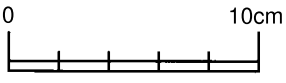
79（78土）



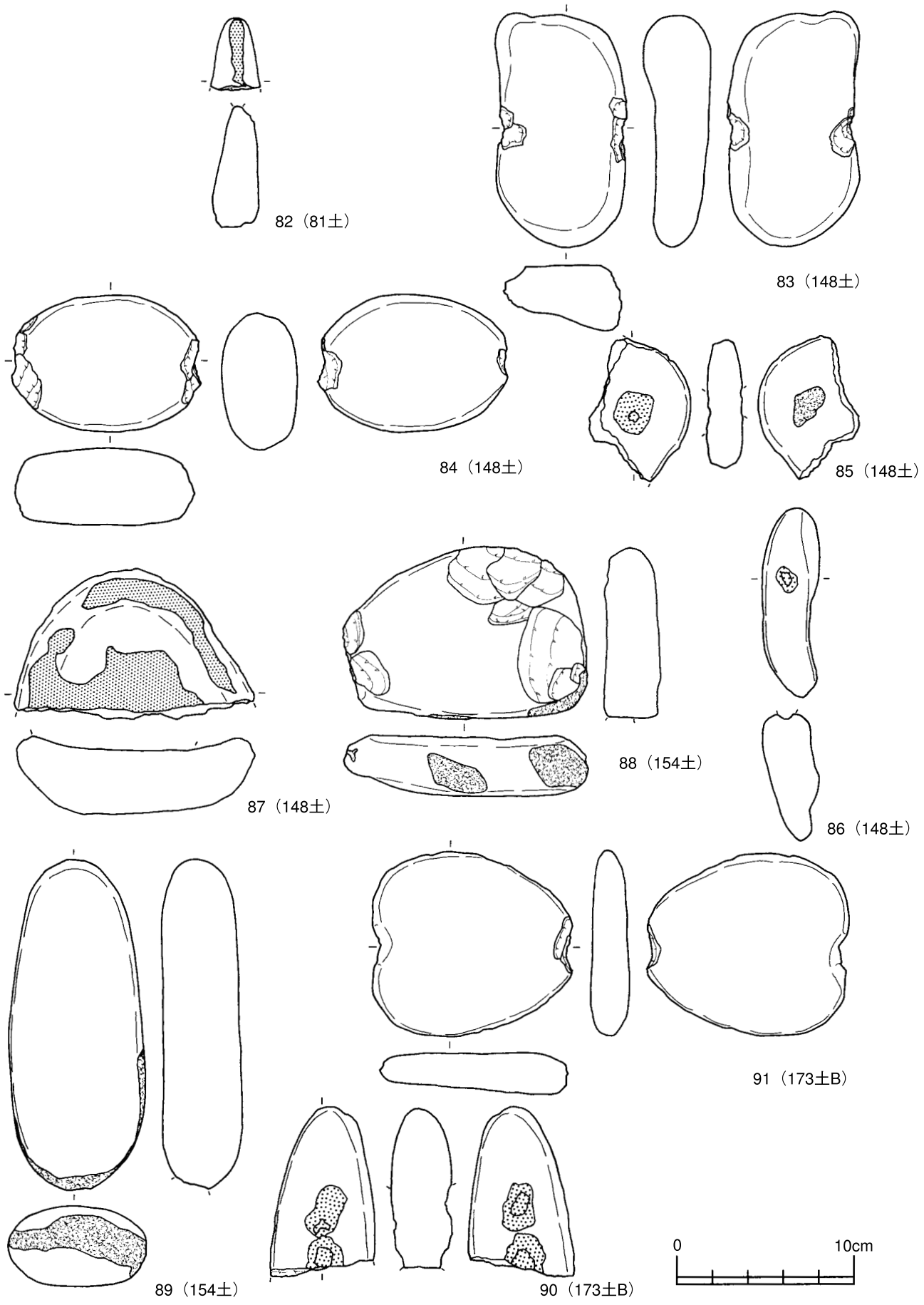
80（79土A）



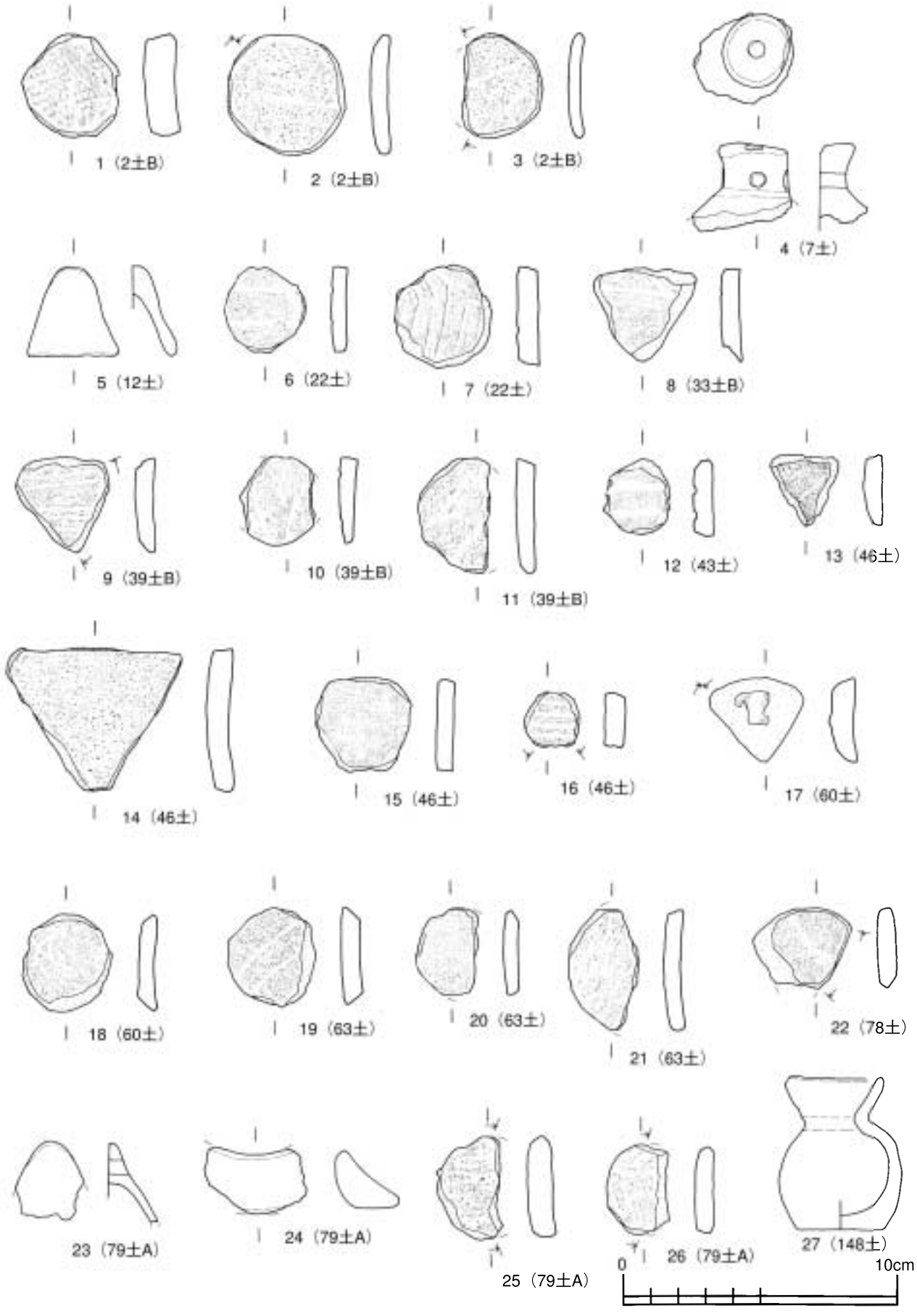
81（79土A）



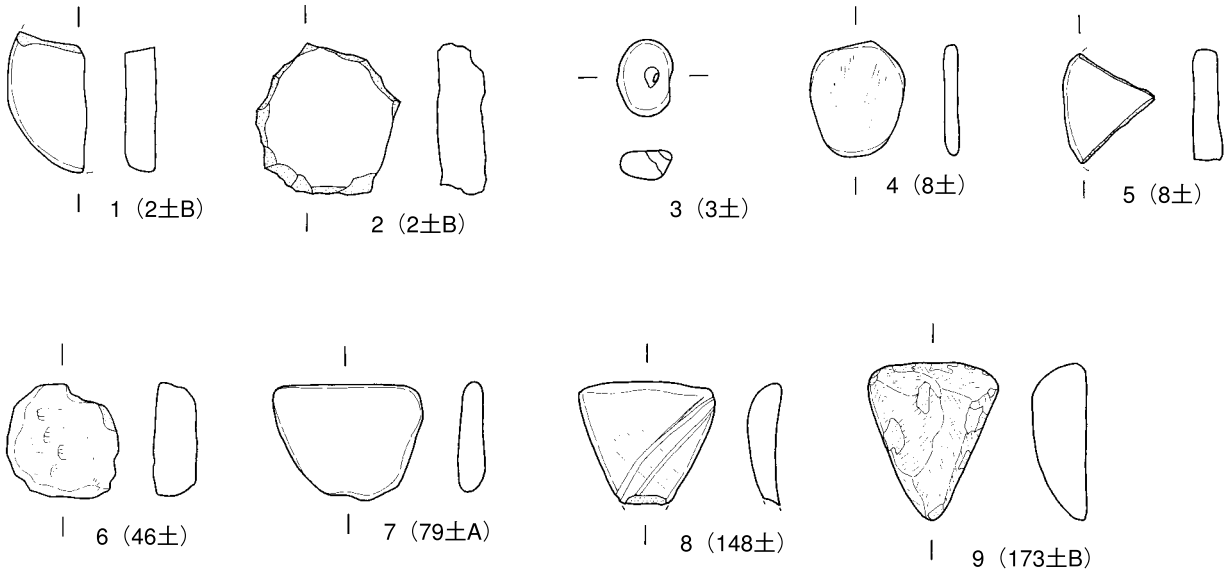
第53図　遺構内出土石器(9)



第54図　遺構内出土石器（10）



第55図　遺構内出土土製品



第56図　遺構内出土石製品

第２節　出土遺物

１．土器

本遺跡で出土した土器は以下のように分類した。

出土土器の主体は、第Ⅱ群及び第Ⅳ群土器である。第Ⅰ群並びに第Ⅲ群土器は、少量出土している。第Ⅴ～Ⅶ群土器は出土していないが、以降の調査で出土する可能性を想定し、設定した。

なお、各群土器を細分類したものについては、群別に本文で説明する。

第Ⅰ群土器　　縄文時代早期の土器
第Ⅱ群土器　　縄文時代前期の土器
第Ⅲ群土器　　縄文時代中期の土器
第Ⅳ群土器　　縄文時代後期の土器
第Ⅴ群土器　　縄文時代晩期の土器
第Ⅵ群土器　　続縄文・弥生時代の土器
第Ⅶ群土器　　平安時代の土器

第Ⅰ群土器：縄文時代早期の土器（第65図27）

第Ⅳ層より１点出土した。器厚は５～６㎜で薄手である。器内外面には全体に条痕文を施文している。外面は、横位と斜位の条痕文による構成である。全体に横位の条痕文を施文した後、４条の集合からなる条痕文を右に傾けて斜位に２条施文している。また、左に傾く条痕文も一部認められ、右に傾く条痕文施文後に施文している。内面は、全体に横位の条痕文を施文した後、中央に左に傾く条痕文を施文している。早期中葉の蛍沢ＡⅡ式土器と思われる。

第Ⅱ群土器：縄文時代前期の土器

以下の様に細分した。

１類　　縄文時代前期前葉の土器
２類　　円筒下層ａ式土器に比定される土器
３類　　円筒下層ｂ式土器に比定される土器
４類　　円筒下層ｃ式土器に比定される土器
５類　　円筒下層ｄ式土器に比定される土器
　ａ　円筒下層d_1式土器に比定される土器
　ｂ　円筒下層d_2式土器に比定される土器
６類　　大木式土器等他地域の影響を受けた土器
７類　　その他の胴部破片

２類　円筒下層ａ式土器に比定される土器（第65図28～32）

第65図28、29、31は、器面全体に斜縄文を施文しているものである。ＲＬＲ縄文（第65図28）、直前段合撚（ＬＲとＲＲ）（第65図29、31）の原体を、横位に回転施文している。第65図31は、加えて結節回転文を１条施文し、口縁部と胴部を区画している。

第65図30は、口縁部と胴部で同一原体の回転方向を変えるものである。ＲＬ縄文が口縁部では斜走し、胴部では縦走する。

第65図32は、口縁部に結節回転文を施文しているものである。これにより２㎝幅程の口縁部を有する。胴部には、斜走するＲＬ縄文を施文している。また、一部縦位に刻線が見られる。

３類　円筒下層ｂ式土器に比定される土器（第31図36、第32図65、第33図96、第34図126、149、第36図182、第37図205、214、第39図275、284、285、第40図297、301、302、第41図328、330、340、第44図392、393、406、第57図１、２、第65図33～50、第66図51～62）

・口縁部に縄文を施文するもの。（第44図393、第65図33～39）

第65図33～35は、口縁部に結節回転文を施文しているものである。胴部には、縦位に単軸、多軸の絡条体回転文を施文している。

第44図393、第65図36～39は、口縁部に縄文を施文し、その上下に横位の押圧による文様を施文しているものである。単節縄文、複節縄文、結節回転文、結束第１種による口縁部施文の上下に単節原体、絡条体の押圧による文様を施文している。第65図36は、低く細い貼付隆帯が見られる。第65図39は、絡条体の横位押圧に加えて刺突による文様を施文している。第65図37、第65図38には、縦位の押圧による文様も施文している。

・口縁部に単軸絡条体第１類の絡条体回転文を施文するもの。（第31図36、第32図65、第33図96、第34図126、149、第39図205、275、284、第40図301、302、第44図392、406、第57図１、２、第65図40～50、66図51～54）

第34図126、第39図275、第44図406、第57図１、第65図40～43は、口縁部や、口縁部と胴部間に押圧等の施文が見られないものである。第57図１、第65図40は、１㎝程とわずかな幅で施文している。第65図42は、８㎝幅にわたり施文している。第57図１、第65図40～43の胴部には縦位の絡条体回転文を施文している。第39図275は口縁部中位の、第44図406は口縁部上端の破片であるため、押圧の有無については不明である。第57図１は、底径12㎝、口径20㎝、底部から直線的に立ち上がり、円筒形を呈する器形を有する。

第34図149、第40図301、第65図44～46は、口縁部と胴部間に横位の押圧による文様を施文しているものである。押圧には絡条体、Ｒ、ＲＬＲ、ＬＲＬ原体が用いられている。胴部には絡条体回転文（第34図126、第40図301）、縦走するＲＬＲ縄文（第65図46）を施文している。

第32図65、第39図205、第65図47～50は、口縁部と胴部間に横位の押圧による文様を施文しているほか、口縁最上部に横位の押圧による文様を施文しているものである。押圧にはＲ、ＲＬ、ＬＲ原体が用いられている。胴部には縦位の絡条体回転文を施文している。第65図49は、胴最上部にＬＲ縄文を施文し、その下部に縦位の絡条体回転文を施文している。第39図205の胴部施文は不明である。

第31図36、第33図96、第40図302、第66図51は、口縁部と胴部間に横位の押圧による文様を施文しているほか、口縁部に縦位の押圧による文様を施文しているものである。第31図36、第33図96は口縁最上部にも横位の押圧による文様を施文している。

第39図284、第57図２、第66図52～54は、口縁部と胴部間に横位の押圧による文様を施文しているほか、口縁部に斜位の押圧による文様を施文しているものである。口縁最上部の横位押圧や、口縁部の縦

位押圧による文様は施文しているものとしていないものとがある。押圧は、Ｒ、ＬＲ原体による。第66図54は、斜位に８条平行に押圧による文様を施文している。第39図284は、口縁部上部の破片であるため口縁部と胴部間に横位の押圧による文様を施文しているかは不明である。第57図２は、底径10㎝、口径18㎝、底部から直線的に立ち上がる。

第44図392は、口縁部に単軸絡条体第１類による横位の絡条体回転文を施文し、口縁最上部に横位押圧による文様を施文しているものである。口縁上端の破片のため、胴部等その他の文様については不明である。

・口縁部に単軸絡条体第３類の絡条体回転文を施文するもの。(第66図55)

口縁部断面は湾曲する。胴最上部には５㎝程度、横位に結束第一種を施文しており、その下部には整然としていないが、おおむね縦位の絡条体回転文を施文している。

・口縁部に単軸絡条体第５類の絡条体回転文を施文するもの。(第39図285、第66図56)

口縁部中位の破片と思われ、押圧による文様の有無等、他の状況は不明である。

・口縁部に単軸絡条体第６類の絡条体回転文を施文するもの。(第36図182、第66図57～59)

第66図57、59は、口縁部と胴部間に横位の押圧による文様を施文しているものである。第36図182、第66図58は、口縁部と胴部間に横位の押圧による文様を有するほか、口縁部に縦位の押圧による文様を施文しているものである。

・口縁部に単軸絡条体第６Ａ類の絡条体回転文を施文するもの。(第37図214、第40図297、第41図328、330、340、第66図60～62)

第37図214、第66図60は、口縁部と胴部間には押圧による文様がない。第66図61は、口縁部と胴部間に横位の隆帯による文様を施文しているものである。細く低い隆帯が貼付られている。

第40図297、第41図340、第66図62は、口縁部と胴部間、及び口縁最上部に横位の押圧による文様を施文しているものである。第41図328、330は、口縁部上端の破片のため、胴部等その他の文様については不明である。

５類　円筒下層ｄ式に比定される土器

ａ　円筒下層ｄ$_1$式土器に比定される土器

・口縁部に結束第一種、結束第二種による文様を施文するもの。(第32図66、75、第34図151、第61図16、第66図63～67、第67図68～74)

第32図75、第34図151、第61図16、第66図63～67、第67図68～74は、口縁部に結束第一種（第32図75、第34図151、第61図16、第66図63～67、第67図68～70)、結束第二種（第67図71～74）による文様を施文しているものである。

第66図63～65は、胴部に縦走する縄文を施文しているものである。ＲＬＲ縄文を施文している。

第66図66、67は、口縁部と胴部間に横位の押圧、隆帯による文様を施文しているものである。第66図66は、縄の押圧、第66図67は細い貼付隆帯による文様を施文している。胴部には縦走する縄文を施文し

ている。

第61図16、第67図68～70は、胴部に縦位の絡条体回転文を施文しているものである。絡条体は単軸、多軸のものがある。第61図16の胴最上部には、結節回転文を施文している。第61図16は、口径23㎝、底径９㎝底部から開きぎみに直線的に立ち上がる。

第32図75、第34図151は、胴部文様が不明なものである。

第67図71～74は、胴部に縦位の絡条体回転文を施文しているものである。胴部には、単軸絡条体第１類（第67図71、72)、結束第二種と単軸絡条体第１類（第67図73)、単軸絡条体第１Ａ類（第67図74）をそれぞれ施文している。

第32図66、第64図25、第67図75～86は、口縁部から胴部全体に結束第一種（第32図66、第64図25、第67図75～81)、結束第二種（第67図82～86）による文様を施文しているものである。羽状（第32図66、第64図25、第67図75～79)、斜状（第67図80、81）を呈するものがある。第64図25は、口径15㎝、胴残部８㎝、湾曲し開きぎみに立ち上がる。

・狭い口縁部に横位平行に縄の押圧による文様を施文しているもので、胴部を縄回転による文様で施文するもの。(第27図12、第57図４、第58図７、第68図87～99)

押圧原体には、Ｒ（第68図87～89)、Ｌ（第68図90～92)、ＬＲ（第27図12、第57図４、第58図７、第68図93～98)、ＲＬ（第68図99）が見られる。口縁部に、縦位の押圧（第27図12、第57図４、第68図87、88、95）による文様を施文しているものもある。

口縁部と胴部の間に細く低い貼付隆帯（第27図12、第68図88、89、92、98)、ＬＲ縄の押圧（第68図91）による文様を施文しているものもある。

胴部には、斜縄文（第68図93～95、第68図90、第68図92)、結束第一種と斜縄文（第27図12)、縦走する縄文（第68図87、第57図４、第68図96)、結束第一種と縦走する縄文（第68図88、第68図98)、結束第一種（第68図89、91)、結束第二種（第58図７、第68図97、第68図99）による文様を施文している。結束第一種、結束第二種には縦走するもの（第58図７、第68図91）も見られる。第27図12は、底径15㎝、口径19㎝底部から開きぎみに湾曲して立ち上がり、口縁部が内湾する。第57図４は、底径８㎝、口径17㎝底部から直線的に立ち上がり円筒形を呈する。第58図７は、底径８㎝、口径13㎝、底部から開きぎみに立ち上がり口縁部は緩く外反する。

・狭い口縁部に横位平行に縄の押圧による文様を施文しているもので、胴部を絡条体による文様で施文するもの。(第33図89、第34図137、第39図269、第57図３、第58図５、第68図100～104、第69図105～110、第69図114)

押圧原体には、Ｒ（第33図89、第39図269、第57図３、第58図５、第68図100～104、第69図105)、Ｌ（第69図106、107)、ＬＲ（第34図137、第69図108～110、114）が見られる。

口縁部上端、口縁部と胴部の間に押圧の見られないもの（第58図５、第68図100、101、103）や、口縁部と胴部の間に、縄の押圧（第57図３、第68図102、第69図105)、つまみ出したと思われる隆帯（第33図89、第68図104)、低い貼付隆帯（第39図269、第68図104、第69図109、114）により横位の文様を施文しているものがある。胴部には、縦位の単軸絡条体第１類（第33図89、第68図101、103、104、第69図107～109)、単軸絡条体第１Ａ類（第69図106、110、114）による文様を施文している。胴最上部に横走する

結節回転文（第33図89、第68図101）、結束第一種（第68図103、104、第69図106）による文様を施文しているものも見られる。また、縦位の単軸絡条体第１Ａ類とともに縦位の結節回転文（第69図114）を施文しているものも見られる。第57図３は、口径18㎝直線的に立ち上がり、円筒形を呈する。第58図５は、底径８㎝、口径16㎝底部からやや開きぎみに直線的に立ち上がる。

・狭い口縁部に横位平行に２本１組の縄の押圧による文様を施文するもの。

押圧原体には、Ｒを２条（第69図112、116、117）、ＬＲを２条（第69図118）、ＬとＲ（第69図115）、ＲとＬＲ（第69図119、121）、ＬＲとＲＬ（第69図113、120）が見られる。

第69図112は、口縁部の上側から下側にかけて徐々に押圧による文様の間隔が狭まる。また、縦位の押圧による文様も施文している。第39図270、第69図115は、口縁部の上側から下側に向かい徐々に押圧の間隔が広がる。胴部施文にはＬＲ、ＲＬＲ、結束第一種、結束第一種とＲＬ、単軸絡条体第１類、無文がある。

・狭い口縁部に横位平行に縄の押圧を７～10条と条数を多く施文するもの。

口縁部押圧の条数の多いものである。押圧原体には、Ｒ（第60図15、第70図122）、Ｌ（第70図127）、ＬＲ（第41図329、第70図123～126）、ＲＬ（第58図６）原体が見られる。

口縁部及び口縁部と胴部間には、縦位貼付、つまみ出し隆帯（第58図６）、貼付（第50図15）が見られる。胴部には、単軸絡条体第１（第31図27、第41図329、第58図６、50図15）、１Ａ類（第70図127）、結束第一種と単軸絡条体第１類（第70図122）、結節回転文と縦走するＲＬ縄文（第70図123～125）が見られる。

第58図６は、口頸18㎝、胴残部径、約11㎝　やや開きぎみに直線的に立ち上がる。第62図19は、口頸29㎝胴部残部径15㎝やや開きぎみに直線的に立ち上がる。

・狭い口縁部に横位平行に絡条体を押圧し、胴部を縄により施文するもの。（第60図14、第70図128、129）

口縁部と胴部間には、貼付（第60図14）も見られる。

胴部には、結束第一種（第60図14、第70図128）、結束第二種（第70図129）を施文している。

第69図14は、口径19㎝、底径10㎝やや開きぎみに緩く湾曲して立ち上がるが概ね円筒形を呈する。

・狭い口縁部に横位平行に絡条体を押圧し胴部を絡条体により施文するもの。（第31図34、第60図12、13、第70図130～134、第71図135）

口縁部に第71図135は、単軸絡条体第１類と単軸絡条体第５もしくは６類の原体を用いて施文している。胴部には、単軸絡条体第１類（第31図34、第60図12、第70図130～133、第71図135）、単軸絡条体第１Ａ類（第60図13、第70図134）、結束第一種と単軸絡条体第１類（第70図131）による文様を施文している。

第60図12は、口径28㎝、胴残部20㎝湾曲し、開きぎみに立ち上がる器形と思われる。60図13は、口径26㎝、底部９㎝湾曲し、開きぎみに立ち上がる器形と思われる。口縁部が若干外反する。

・狭い口縁部に横位平行に縄及び絡条体、刺突等異なる手法を用いて押圧し、胴部を絡条体により施文

するもの。(第60図15、第69図111、第71図136、137)

口縁部施文には、ＬＲとＲＬ（第69図111)、ＬＲと網目状押圧（第60図15、第71図136)、絡条体と刺突（列）(第71図137）が見られる。

口縁部と胴部間には、つまみ出した隆帯（第71図136)、２条の刺突（第69図111）が見られる。

胴部には、単軸絡条体第１Ａ類（第60図15、第71図136)、多軸絡条体（第69図111、第71図137）を施文している。第60図15は、口径27㎝、胴残部18㎝若干開きぎみに直線的に立ち上がる。概ね円筒形を呈する。

・狭い口縁部に横位、斜位に縄を押圧し胴部を縄により施文するもの。(第39図265、267、第40図303、304、第58図８、第59図10、11、第62図18、第71図138～140、142～148)

口縁部の押圧には、Ｒ（第39図265、267、第58図８、第59図11、第62図18、第71図138～140、142～148)、ＬＲ（第40図303、第59図10)、ＲとＬＲ（第40図304）原体が用いられている。

口縁部と胴部間は、つまみ出した隆帯（第39図265、第40図304、第71図140)、貼付隆帯（第39図267、第40図303、第62図18、第71図138）が見られる。

胴部施文は、ＲＬＲ（第58図８、第71図138)、ＬＲ（第59図10)、ＲＬ（第39図267、第71図139)、結束第一種とＲＬ（第39図267、第71図139)、結束第二種と単軸絡条体第１類（第59図11)、結束第一種（第39図265、第71図142～147)、結束第二種（第40図304、第62図18、第71図148）が施されている。第58図８は、口径29㎝、胴残部17㎝開きぎみに直線的に立ち上がる。第59図10は、口径21㎝、胴残部11㎝湾曲し開きぎみに立ち上がる。砲弾形を呈する。第59図11は、口径22㎝、底部９㎝開きぎみに直線的に立ち上がる。第62図18は、口径推定38㎝、胴残部推定34㎝開きぎみに立ち上がる。口縁部は若干開きぎみである。

・狭い口縁部に横位、斜位に縄を押圧し、胴部を縄により施文するもの。(第72図162～168、第73図175)

口縁部の押圧には、Ｌ（第72図167、168)、ＬＲ（第72図163～166、第73図175)、ＲＬ（第72図162）原体を用いている。

胴部施文には、ＲＬＲ（第72図165、第73図175)、結節回転文とＲＬ（第72図163、164)、結束第一種とＲＬ（第72図166)、結束第一種（第72図162、167、168）が見られる。

・狭い口縁部に横位、斜位に縄を押圧し胴部を絡条体により施文するもの。(第27図９、11、第41図322、第59図９、第71図141、149～152)

口縁部の押圧には、Ｒ（第71図141、150、152)、ＬＲ（第27図９、第41図322、第59図９)、ＲＬ（第27図11)、ＲとＬＲ（第71図149)、ＲとＲＬ（第71図152）原体が用いられている。

口縁部と胴部間は、貼付隆帯（第27図９、第41図322、第59図９、第71図141、149)、孔（第27図11）が施されている。

胴部施文は、単軸絡条体第１類（第27図９、第41図322、第71図149、151)、単軸絡条体第１Ａ類（第27図11、第59図９)、結束第一種と単軸絡条体第１類（第71図141、150)、結束第一種と多軸絡条体（第71図152）が施されている。

第27図９は、口径25㎝、底部14㎝　底部から開きぎみに直線的に立ち上がる。第59図９は、口径24㎝、

胴残部18㎝　湾曲し開きぎみに立ち上がる器形を呈する。

・狭い口縁部に横位、斜位に縄を押圧し胴部を絡条体により施文するもの。(第73図169～174、176)
　口縁部の押圧には、ＬＲ原体を押圧している。
　胴部施文は、単軸絡条体第１類（第73図169、170)、単軸絡条体第１Ａ類（第73図172～174)、結束第一種と単軸絡条体第１類（第73図171)、多軸絡条体（第73図176）が用いられている。

・狭い口縁部に横位、斜位に縄を押圧し、胴部施文が不明なもの。(第35図155、第38図257、第41図327、第44図395)
　口縁部の押圧には、Ｒ（第38図257)、ＬＲ（第41図327)、ＲＬ（第44図395)、ＬＲとＲＬ（第35図155)原体を用いている。

・狭い口縁部に横位、斜位に２本１組の縄を押圧し、胴部を縄により施文するもの。(第72図153～157)
　口縁部の押圧には、ＬとＲの原体を用いている。
　口縁部と胴部間は、貼付隆帯（第72図155、156）が見られる。
　胴部施文は、結束第一種（第72図155～157)、結束第一種とＬＲ（第72図153)、結束第一種とＲＬＲ（第72図154）が施されている。

・狭い口縁部に横位、斜位に２本１組の縄を押圧し、胴部を絡条体により施文するもの。(第72図160、161)
　口縁部の押圧には、ＬとＲの原体を用いている。第72図160には刺突も加わる。
　口縁部と胴部間は、貼付隆帯（第72図161）が見られる。
　胴部には単軸絡条体第１類を施文している。第72図160には縦位の結節回転文が見られる。

・狭い口縁部に横位、斜位に２本１組の縄を押圧し、胴部施文が不明なもの。(第43図383)
　口縁部の押圧には、ＬとＲの原体を用いている。縦位の押圧も見られる。

・狭い口縁部に横位、斜位に絡条体を押圧し胴部を縄により施文するもの。(第73図177～179)
　胴部には、ＲＬ（第73図177)、ＲＬＲ（第73図178)、結束第一種（第73図179）が施されている。

・狭い口縁部に横位、斜位に絡条体を押圧し胴部を絡条体により施文するもの。
　胴部には、単軸絡条体第１類（第73図180、181)、単軸絡条体第１Ａ類（第73図182)、多軸絡条体（第73図183）が用いられている。

・狭い口縁部に横位、斜位に絡条体を押圧し胴部施文が不明なもの。(第35図170、第39図266)
　口縁部に刺突列（第35図170）や、Ｒ（第39図266）原体の押圧も見られる。

・狭い口縁部に横位、斜位に縄、絡条体の押圧、刺突等２種以上を組み合わせて施文するもの。(第73、

74図184～189）

複数の縄の原体押圧によるもの（第73図184）、縄押圧と刺突文によるもの（第73、74図185～187）、縄と絡条体押圧により口縁部文様を構成するもの（第74図188、189）がある。縄の原体には、Ｌ（第73図185、第74図188）、ＬとＲ（第74図186）、ＲＬ（第74図187）、ＬＲ（第74図189）、ＬＲと、ＬとＲの２本１組（第73図184）がある。

胴部施文は、ＲＬ（第74図186）、結束第一種（第73図184）、結束第二種（第74図189）、単軸絡条体第１Ａ類（第73図185、第74図186）、結束第二種と単軸絡条体第１Ａ類（第74図188）が見られる。

・狭い口縁部に横位、斜位に絡条体及び刺突文を押圧し、胴部を縄により施文するもの。（第74図190～192）

口縁部には絡条体押圧及び刺突により施文している。

胴部には結節回転文とＲＬ（第74図190、191）、結束第一種（第74図192）を施文している。

・狭い口縁部に横位、斜位に絡条体及び刺突文を押圧し、胴部を絡条体により施文するもの。（第74図194、195）

口縁部には絡条体押圧及び刺突により施文している。

胴部には単軸絡条体第１Ａ類（第74図194、195）を施文している。

・狭い口縁部に横位、斜位に縄及び絡条体及び刺突文を押圧し、胴部施文が不明なもの。（第74図196）

第74図196は、Ｒ原体、絡条体の押圧、刺突により施文している。胴部施文は不明である。

・狭い口縁部に曲線的に縄を押圧し、胴部を縄により施文するもの。（第74、75図197～202）

口縁部施文は、いずれもＲ原体の押圧による。

胴部施文は、結束第一種（第74図197、198）、結束第二種（第74、75図199～202）を施文している。

口縁部と胴部間には、つまみ出した隆帯（第74、75図197、201、202）が見られる。

・狭い口縁部に曲線的に縄を押圧し、胴部を絡条体により施文するもの。（第75図203～207）

口縁部の押圧には、Ｒ（第75図203～205）、ＬＲ（第75図207）、ＲＬ（第75図206）が見られる。

胴部には、単軸絡条体第１類（第75図204、205）、単軸絡条体第１Ａ類（第75図207）、結節回転文と単軸絡条体第１類（第75図206）、結束第二種と単軸絡条体第１類（第75図203）が見られる。

・狭い口縁部に曲線的に絡条体を押圧し、胴部を縄により施文するもの。（第75図208）

第75図208は、絡条体の押圧による。胴部には、結束第一種が施される。

・やや広い口縁部に横位、斜位に縄を押圧し、縦位の隆帯を施文するもの。（第32図81、第61図17、第76、77図209～216）

口縁部には縄（第32図81、第61図17、第76図209～213、215）、絡条体（第76図214、第77図216）を横位、斜位に押圧している。貫通孔（第76図209）、刺突（第76図215）の見られるものもある。加えて、縦

位の貼付隆帯を有する。

胴部施文は、縄（第32図81、第76図212、213、第77図216)、絡条体（第61図17、第76図209～211、214、215）による文様を施文するものが見られる。

第61図17は、口径33㎝、底径17㎝底部からやや開きぎみに直線的に立ち上がる。

・やや広い口縁部に横位、蕨状に縄を押圧し、胴部に絡条体を施文するもの。(第39図268)

第39図268は、口縁部にＬＲ原体を横位、及び口縁部上部に蕨状に押圧している。

胴部施文は、結束第一種と単軸絡条体第１類による文様を施文している。

ｂ　円筒下層ｄ$_2$式に比定される土器

器形が屈曲して肩部を有し、口縁部が外反するもの

・器面全体に同一の施文を施すもの。(第77図217)

第77図217は、器面全体に、結束第一種を施文している。

・口縁部に縄、絡条体を押圧するもの。(第63、64図20～22、第77図218～226)

口縁部に縄（第63、64図20～22、第77図218、219、222、223、225、226）と絡条体（第77図220、221、224）を押圧するものがある。これらに加えて刺突（第63図21、第77図225)、貼付（第63図20、21、第77図222～226）の見られるものがある。

胴部施文は、縄（第64図22、第77図221、222)、絡条体（第64図20、第77図218、220、223、224、226）によるものがある。

６類　　円筒下層式土器と思われるが時期の特定できないもの

・口縁部から胴部まで、器面に縦位に絡条体により施文するもの。(第64図23、第78図237～240)

単軸絡条体第１類（第78図237、第78図238）を施文するもの、口端が無文で下部に単軸絡条体第１類（第78図239）を施文するもの、多軸絡条体（第64図23、第78図240）を施文するものがある。第64図23は、口径15㎝、底径８㎝、底部から直線的に立ち上がり円筒形を呈する。口縁部はやや外反する。

・口縁部施文が刻線、刺突、無文のもの。(第78図241～244)

刻線（第78図241)、竹管状工具刺突（第788図242)、無文（第78図243、244）がある。無文のものは、胴部施文の痕跡が有るが、施文原体等は、摩滅により不明である。

・その他の破片資料（第31図39、46、第32図59、60、64、76、82、第33図83、84、86、88、103～105、116、第34図119、120、139、147、148、150、152、第35図156、160、166、167、171、177、第36図192、第37図208、223、226、232、第38図234、241、243、258、264、第39図271、276、289、第40図294、298、305、307、314、第41図319～321、326、341、342、第42図350、351、353、357、360、第43図373～375、377、378、第44図405、第78図227～230、245～251)

遺構内外の出土土器のうち、口縁部欠損、摩滅等により時期の特定できないものを本類とした。遺構外出土土器については、胴～底部破片のうち特徴的と思われる破片を掲載した。

第78図245、246は胴部にＬＲＬＲ縄文を施文している。第78図247は、胴部に単軸絡条体第１類及び縦位の結節回転文を施文している。第78図248は胴部に多軸絡条体を施文している。第78図249は、胴部に縦位の結節回転文を施文している。第78図250は、胴部に縦位の、結束第一種、結節回転文、単軸絡条体第１類の見られるものである。第78図251は台付深鉢と思われる底部破片である。第78図227～230は、貼付の見られるものである。

７類　大木式土器等他地域の影響を受けた土器（第64図24、第78図231～236）

おおむね、縄文時代前期末葉の土器と思われるが、施文手法などが在地の土器である円筒下層式土器とは異なるものである。第64図24は、胴部施文に縄の押圧が用いられている。第78図231、232は、口縁部に横位と鋸歯状に半隆起線文が施されている。第78図233は、口縁部に細い貼付隆帯を横位平行及び鋸歯状に施している。第78図234～236は同一個体の口縁部破片である。細い隆帯を横位、鋸歯状に貼付している。鋸歯状隆帯の一部を除き隆帯外面には半裁竹管状工具による押し引きにより結節状浮線文が施されている。第78図236の下端には胴部施文と思われる単軸絡条体第１類の縦位の回転文が施されている。

第Ⅲ群土器：縄文時代中期の土器

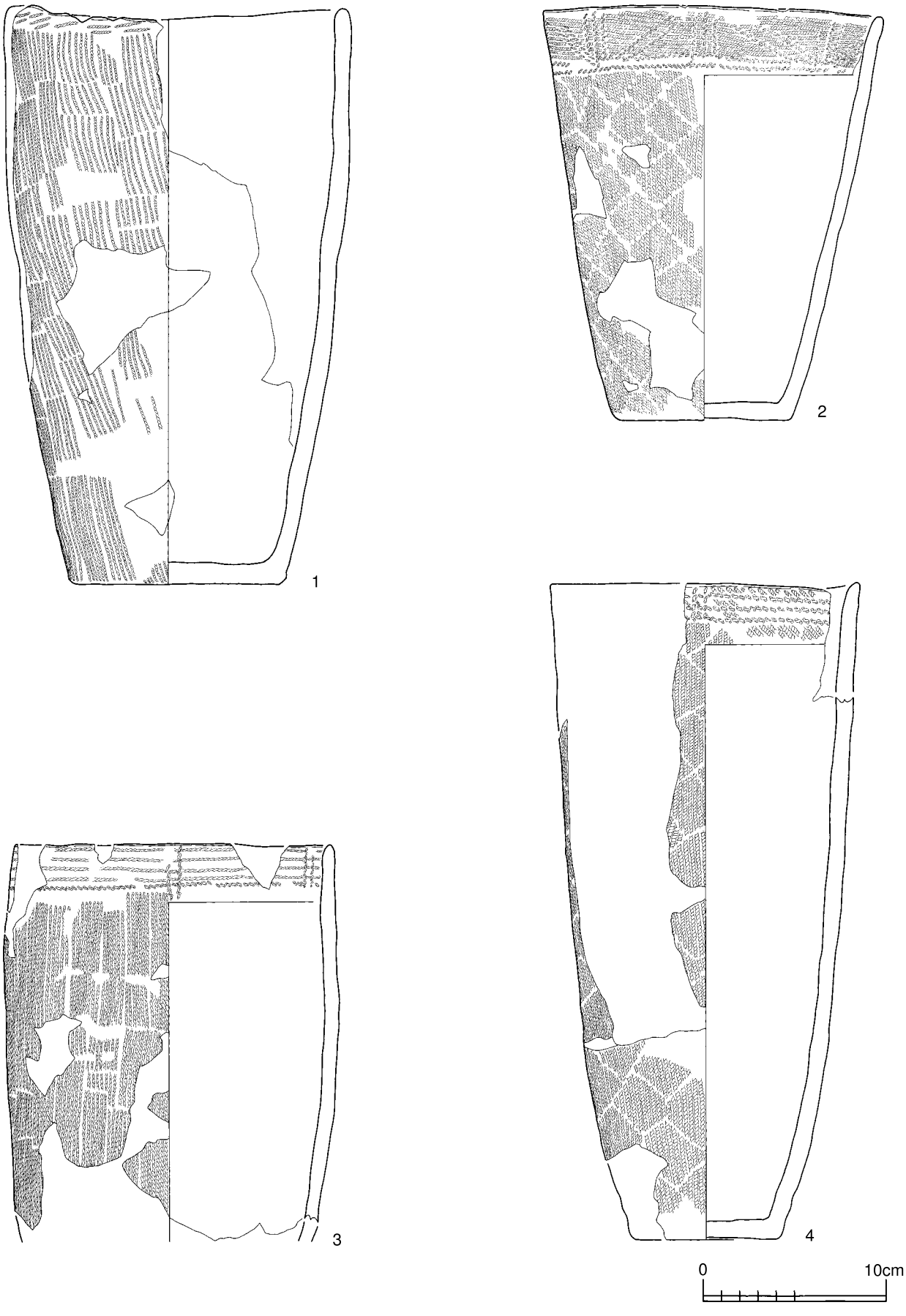
円筒上層ａ式以降の土器は、出土していないが、今後の調査で出土する可能性を想定し、１類を設定した。

１類　円筒上層ａ式土器に比定される土器（第64図26、第78図252）

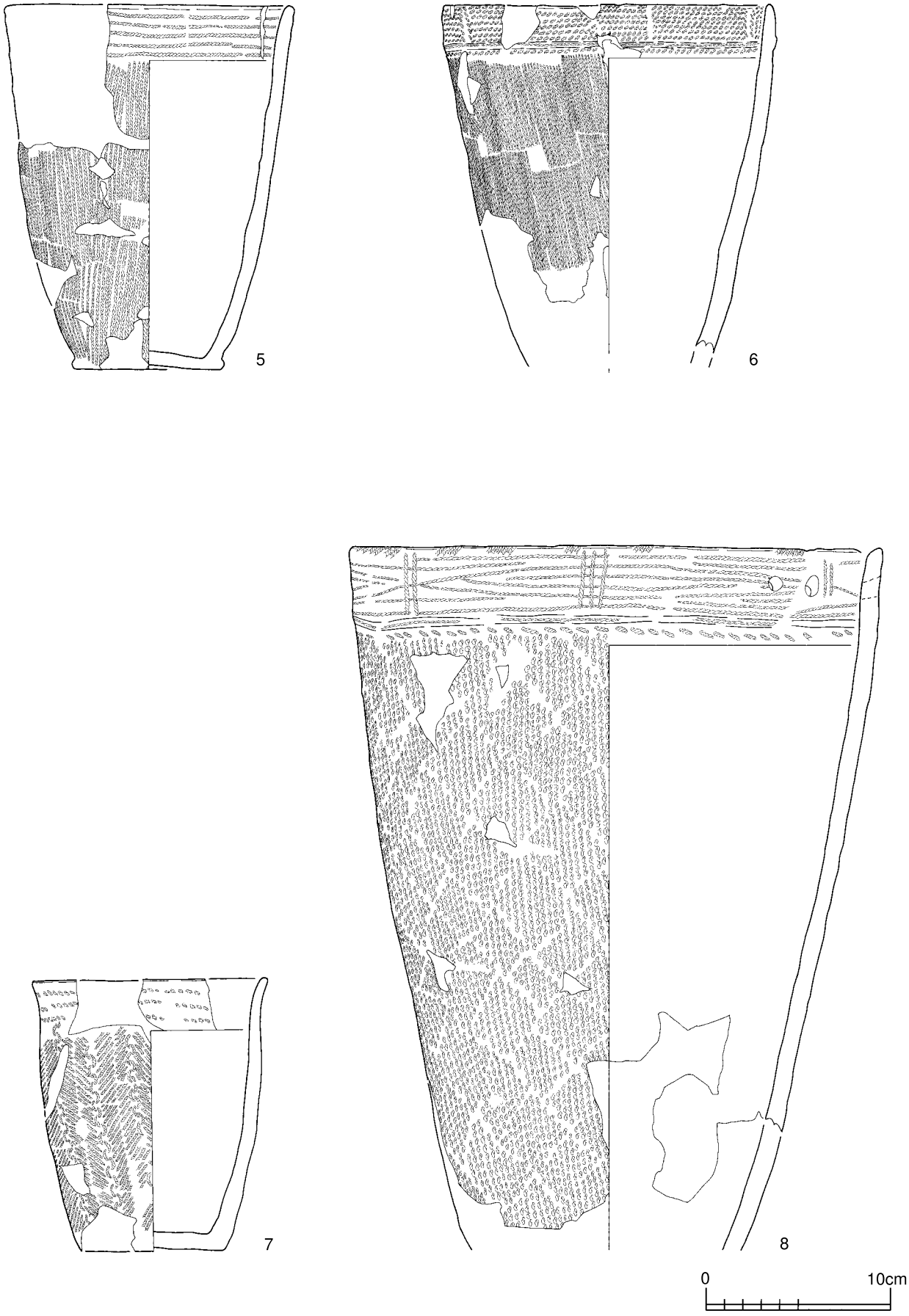
２点が出土している。

第64図26は、口縁部に縄により鋸歯状の押圧を施している。第78図252は、口縁部に縄により蕨状の押圧を施している。

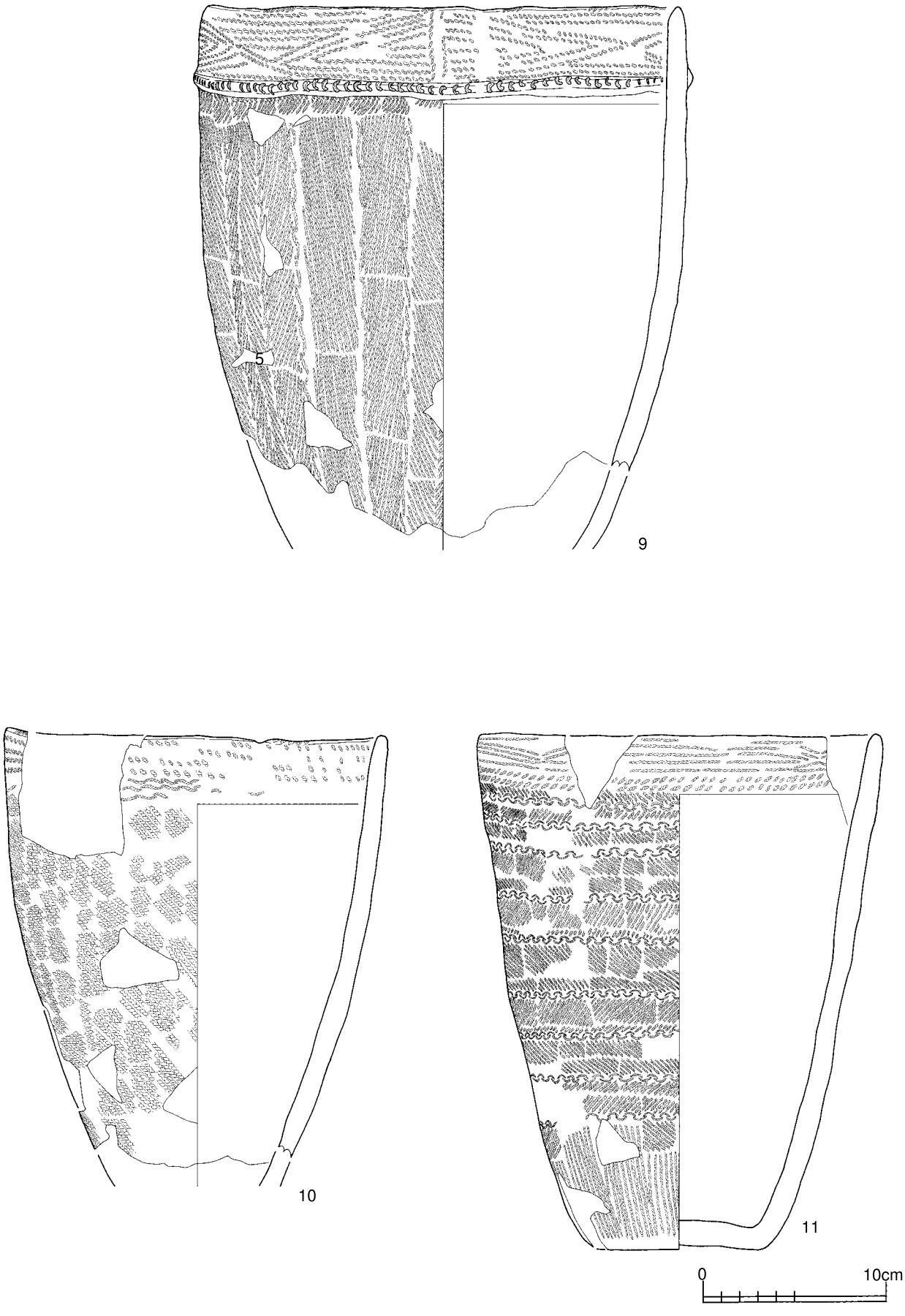
（小野）



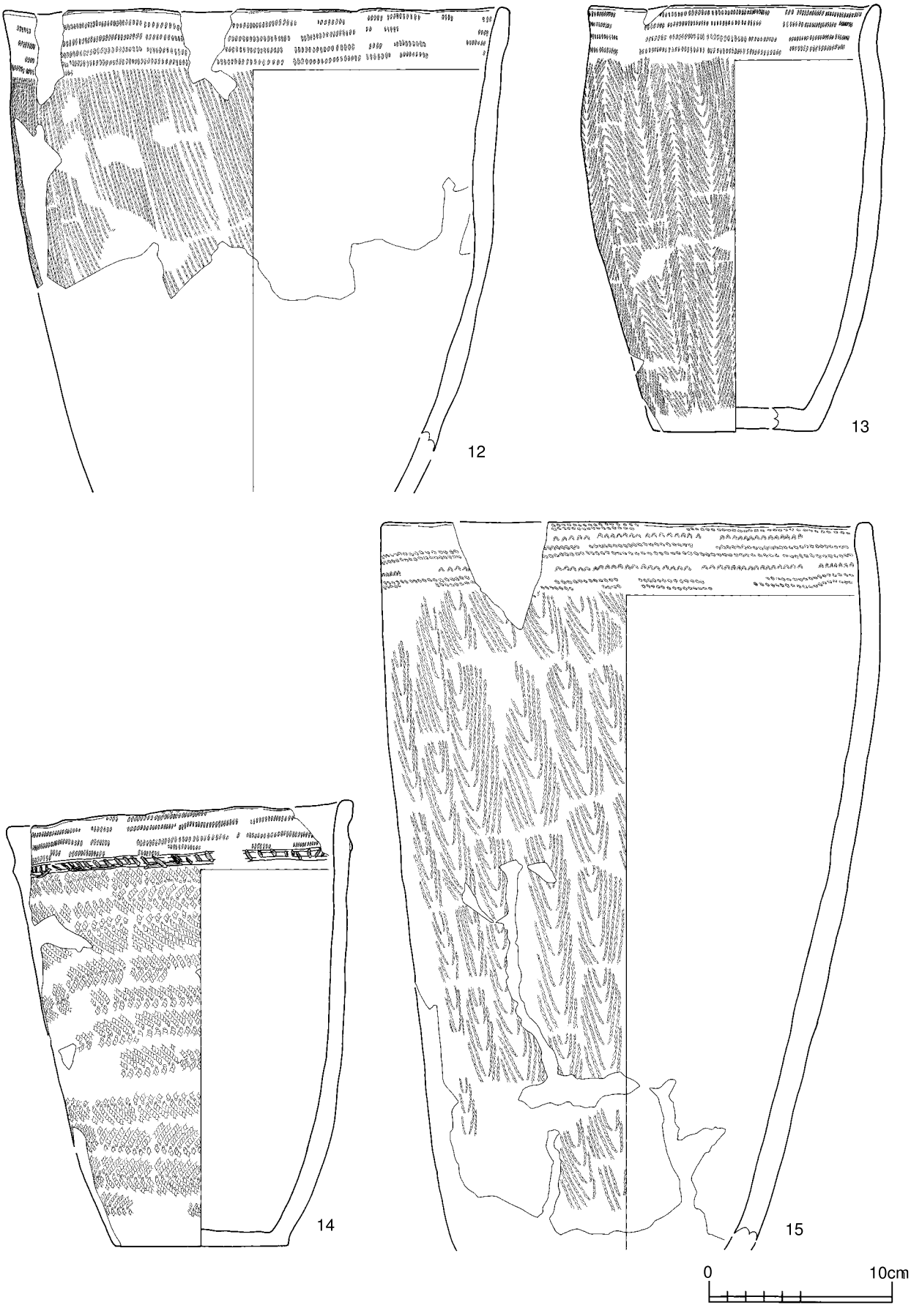
第57図　遺構外出土第Ⅱ群土器（1）



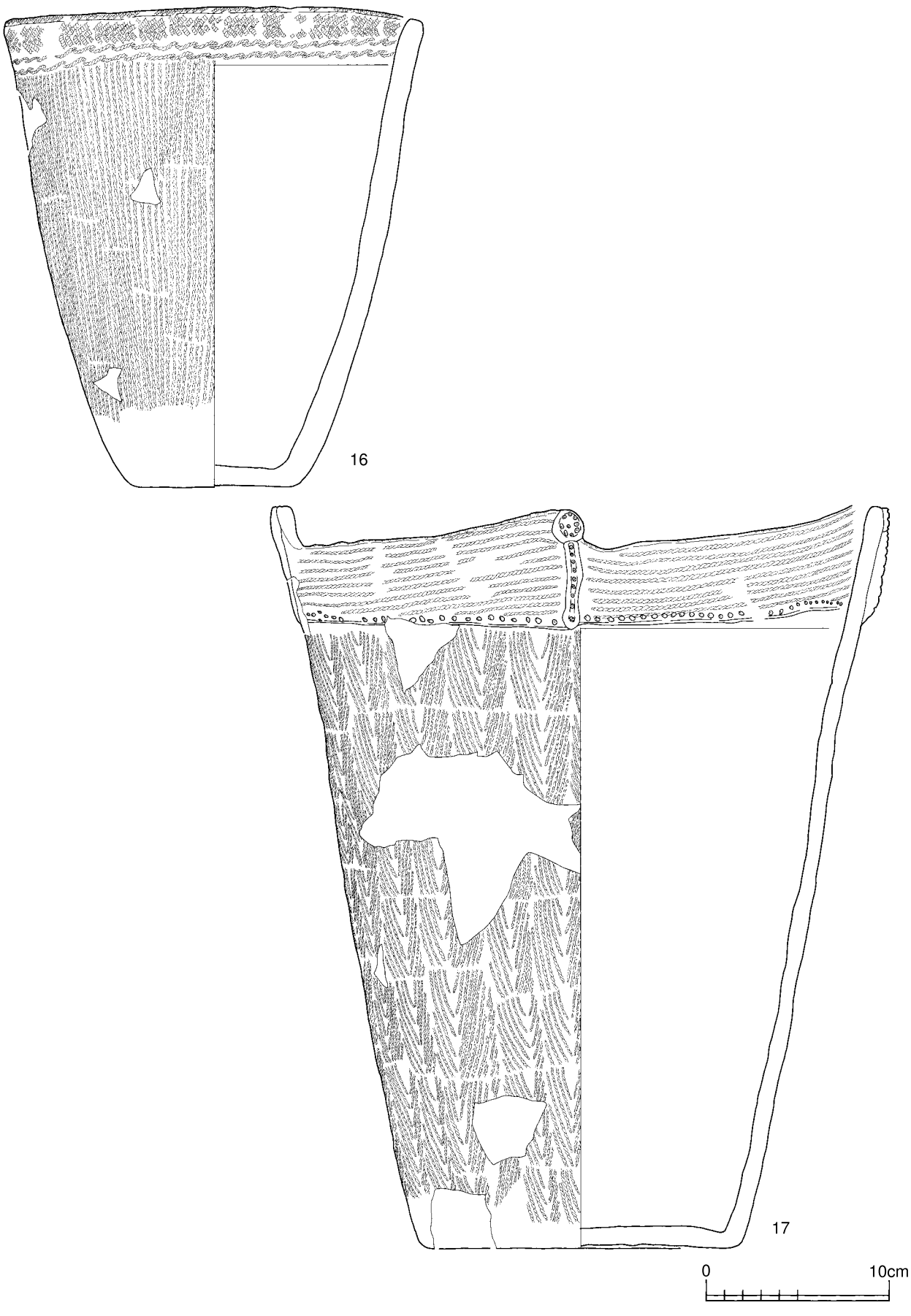
第58図　遺構外出土第Ⅱ群土器（2）



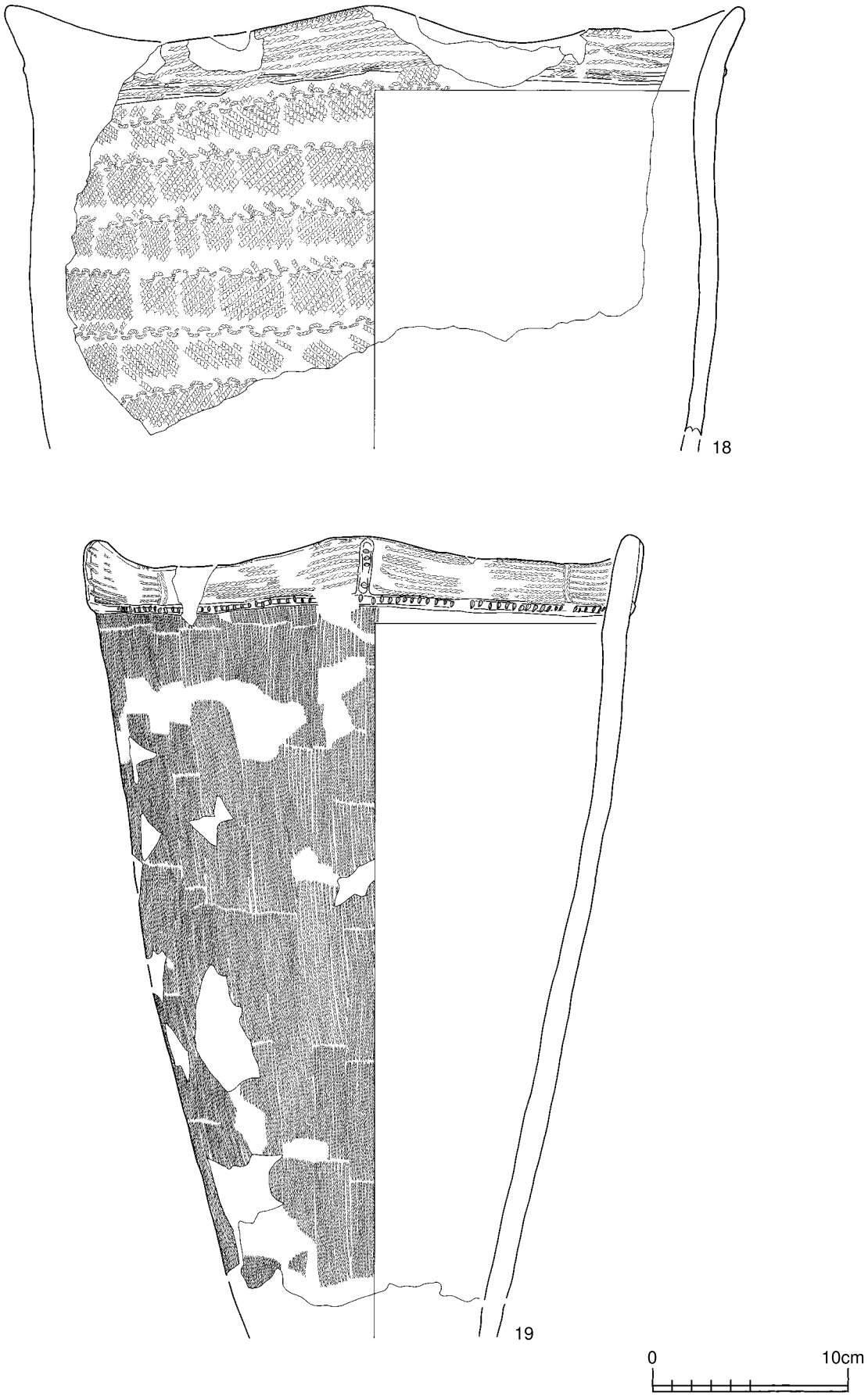
第59図　遺構外出土第Ⅱ群土器(3)



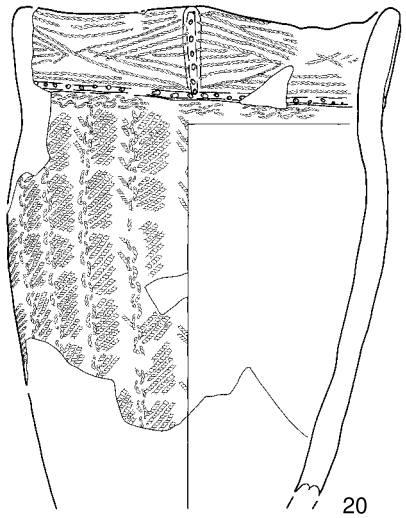
第60図　遺構外出土第Ⅱ群土器(4)

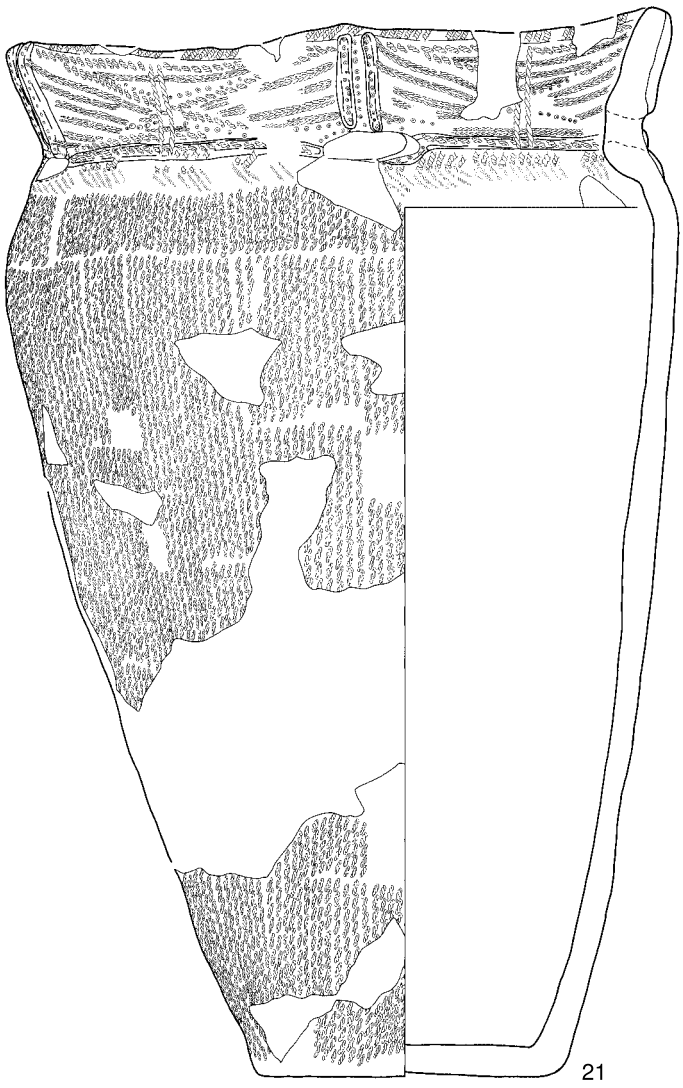


第61図　遺構外出土第Ⅱ群土器(5)

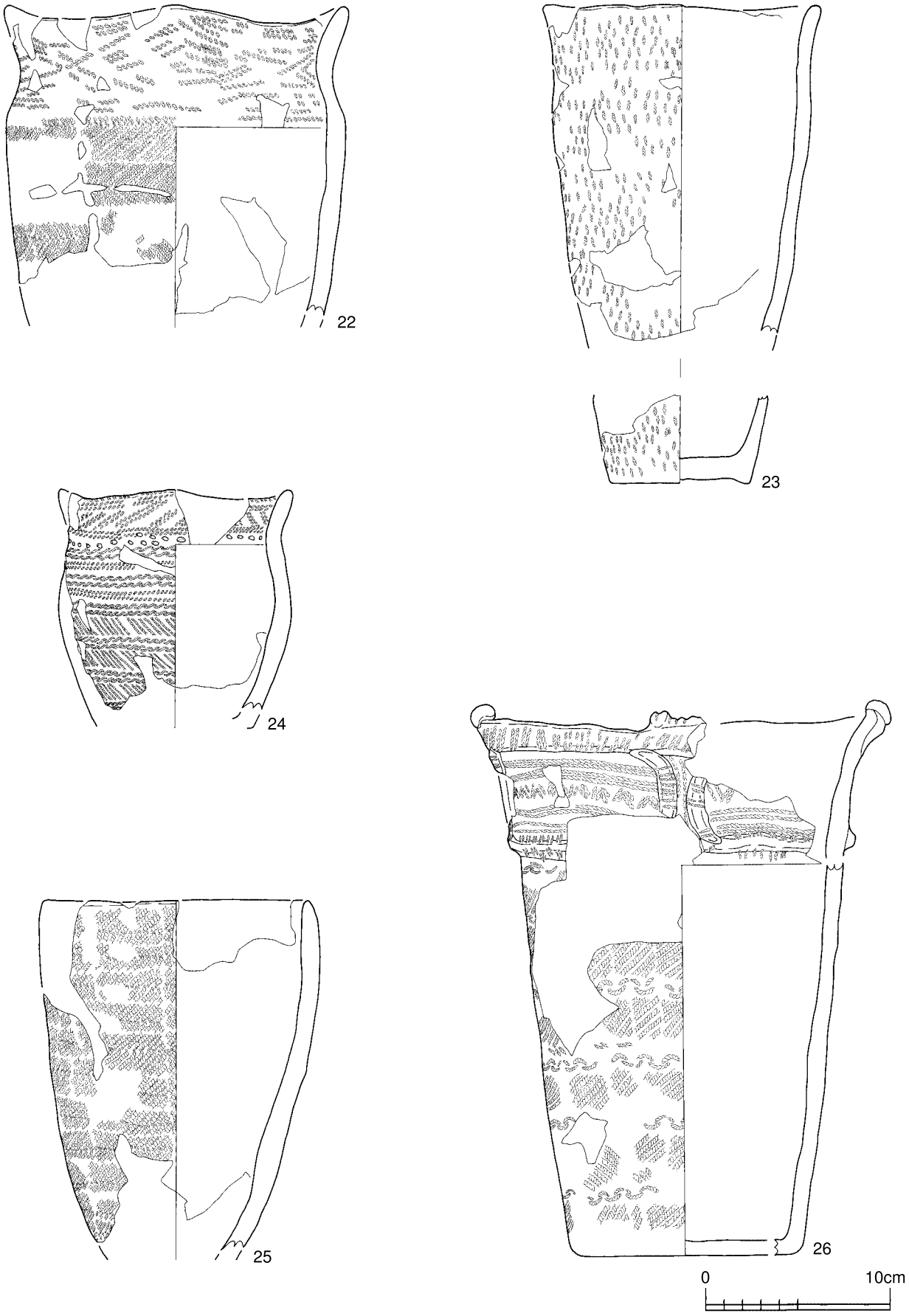


第62図　遺構外出土第Ⅱ群土器(6)

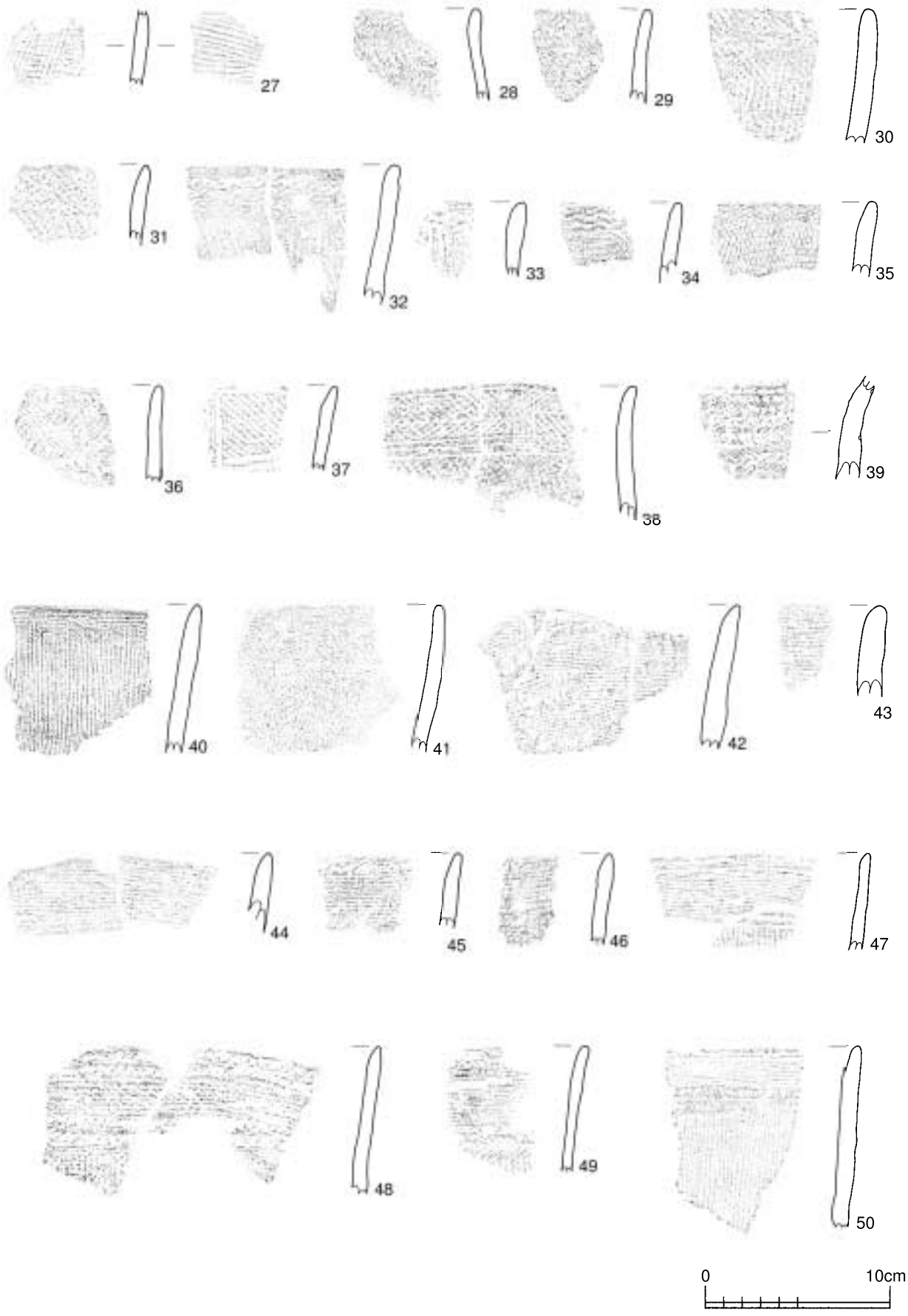




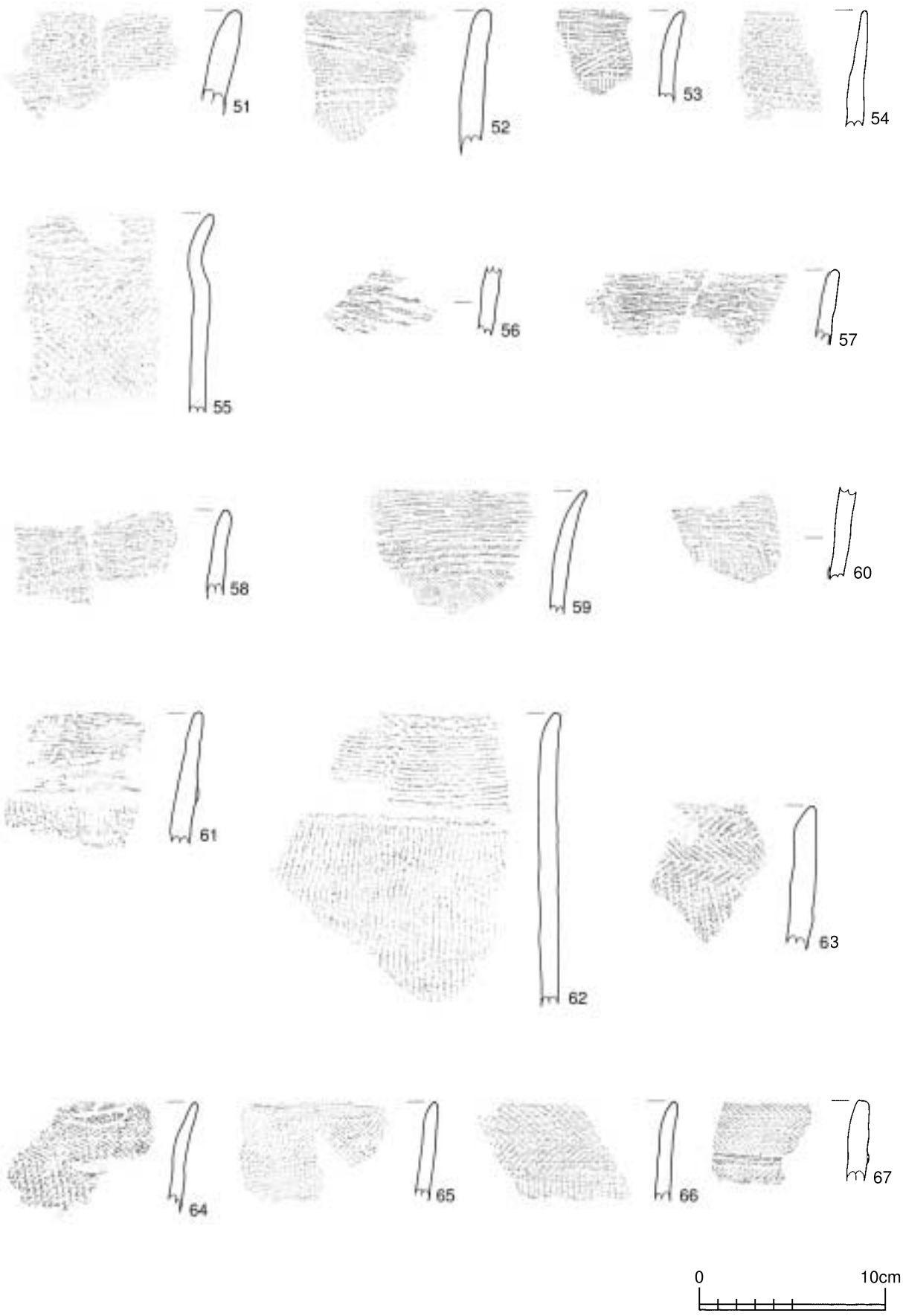
第63図　遺構外出土第Ⅱ群土器(7)



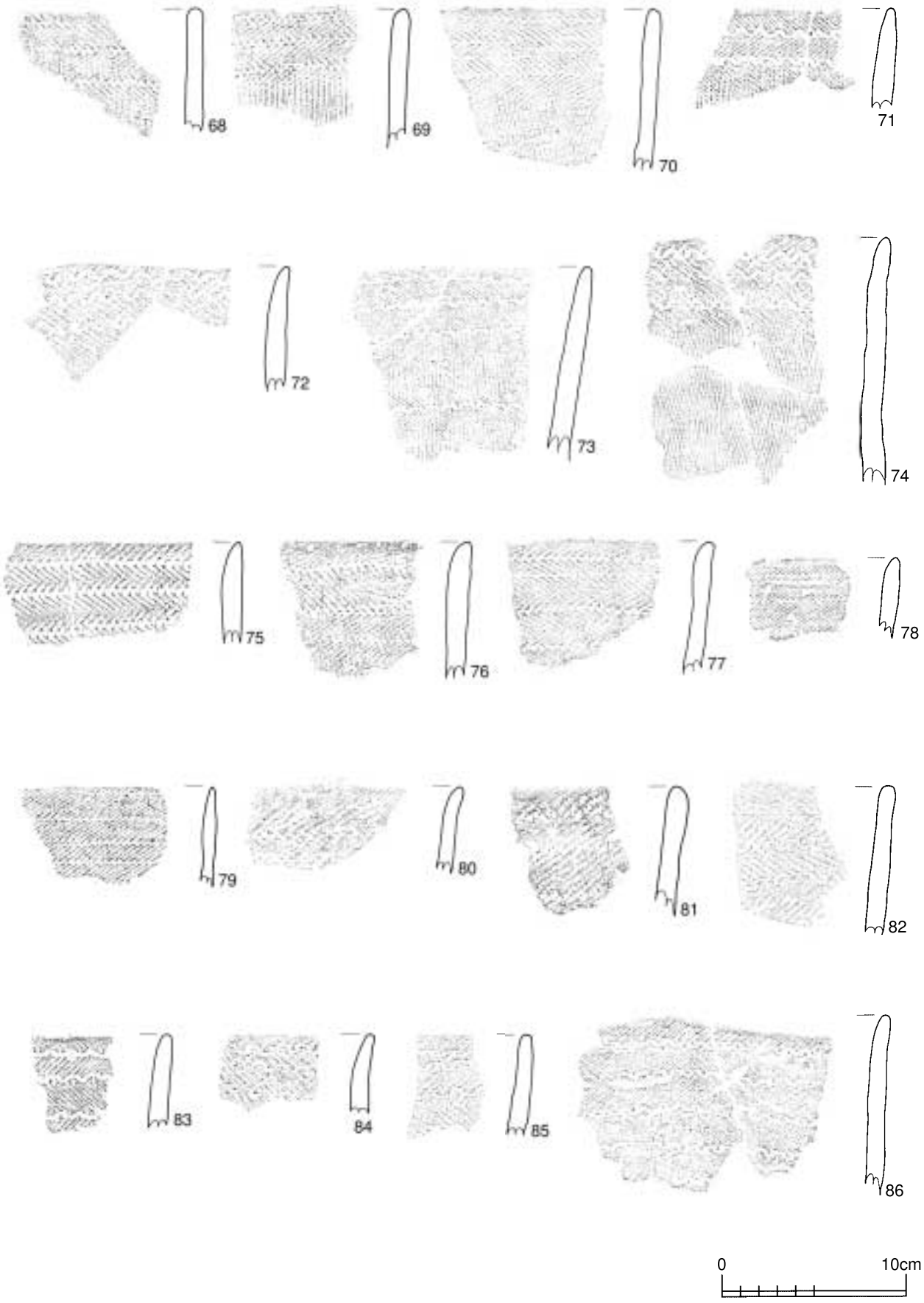
第64図　遺構外出土第Ⅱ群・第Ⅲ群土器（1）



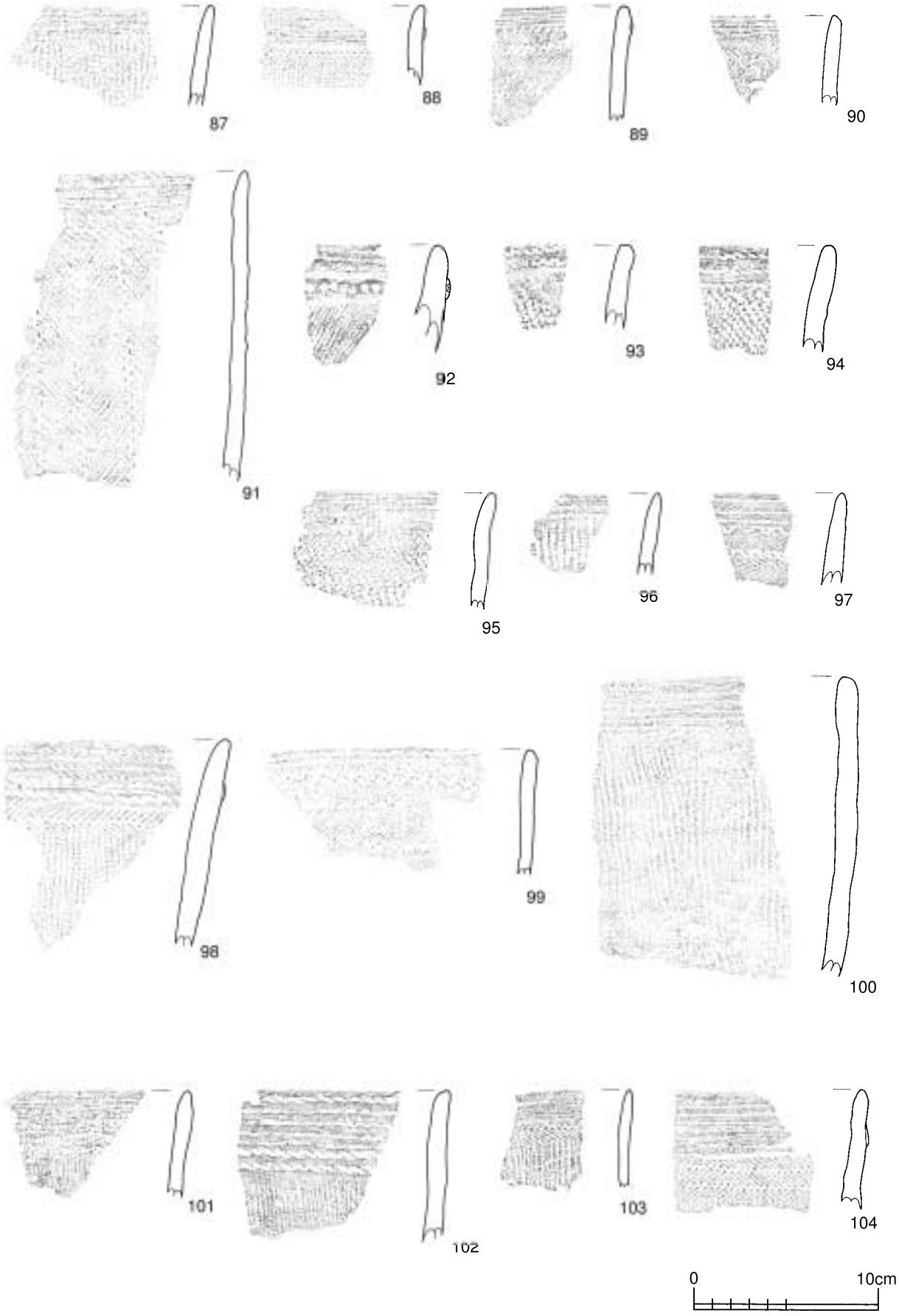
第65図　遺構外出土第Ⅰ群・第Ⅱ群土器



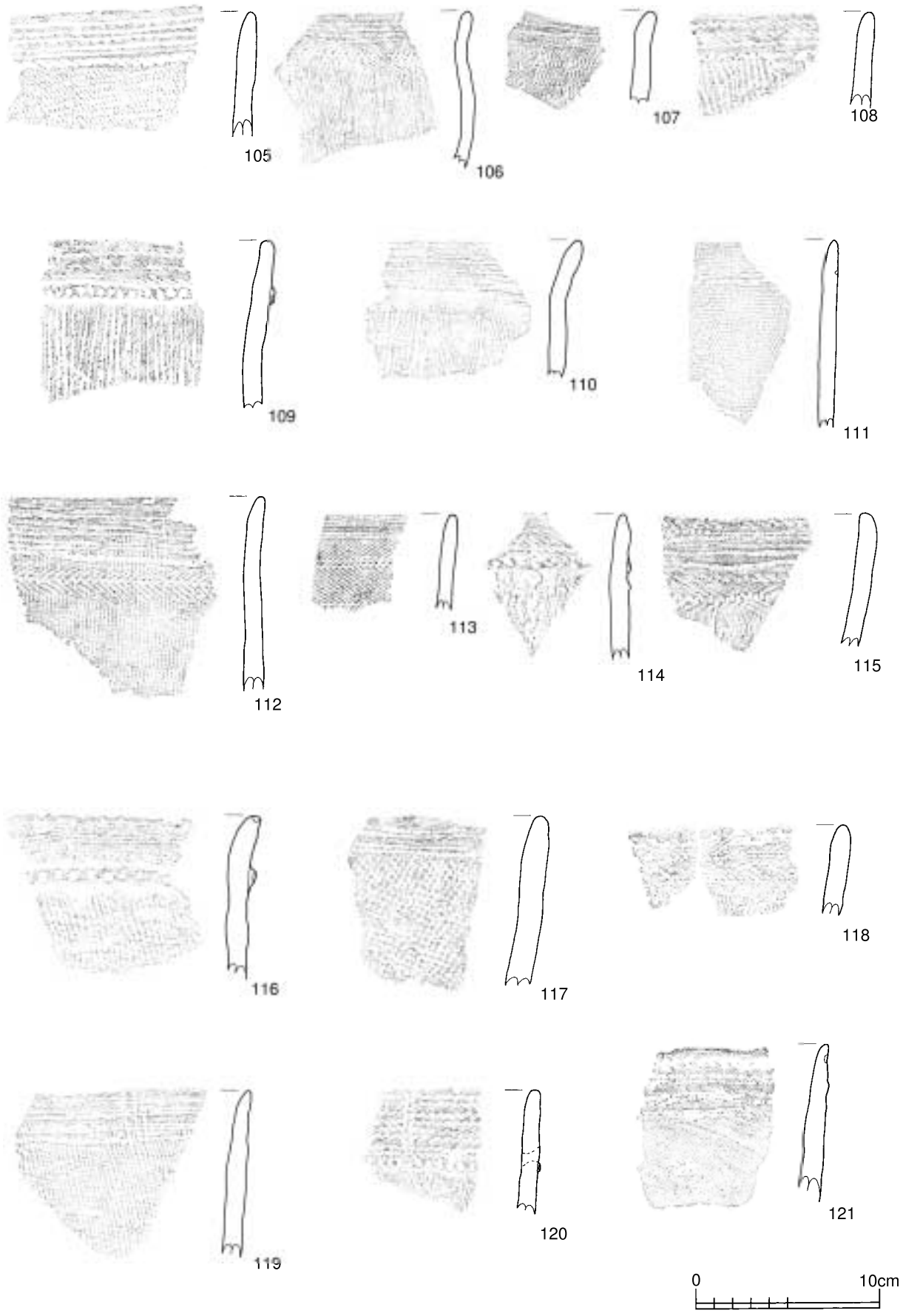
第66図　遺構外出土第Ⅱ群土器(8)



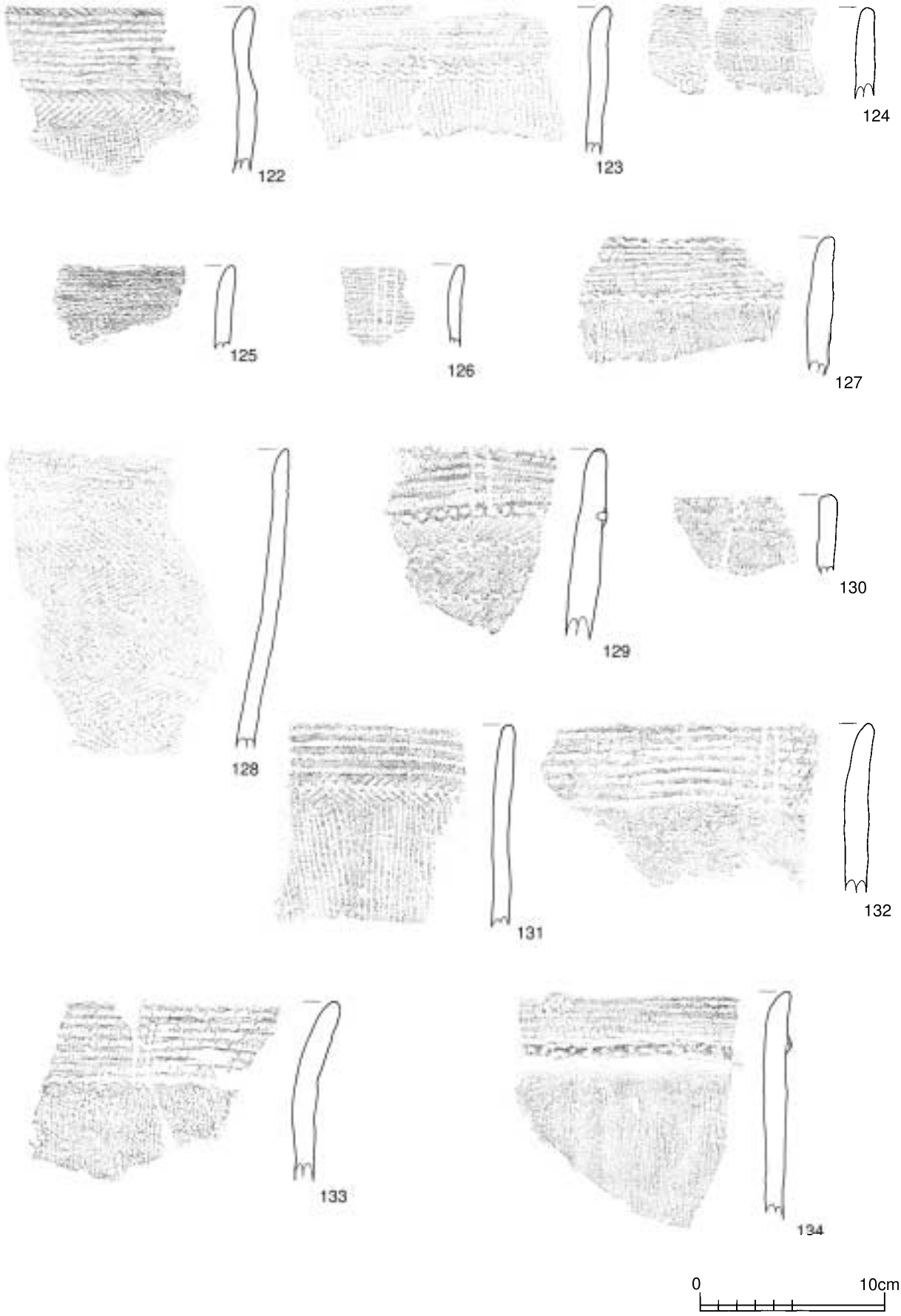
第67図　遺構外出土第Ⅱ群土器(9)



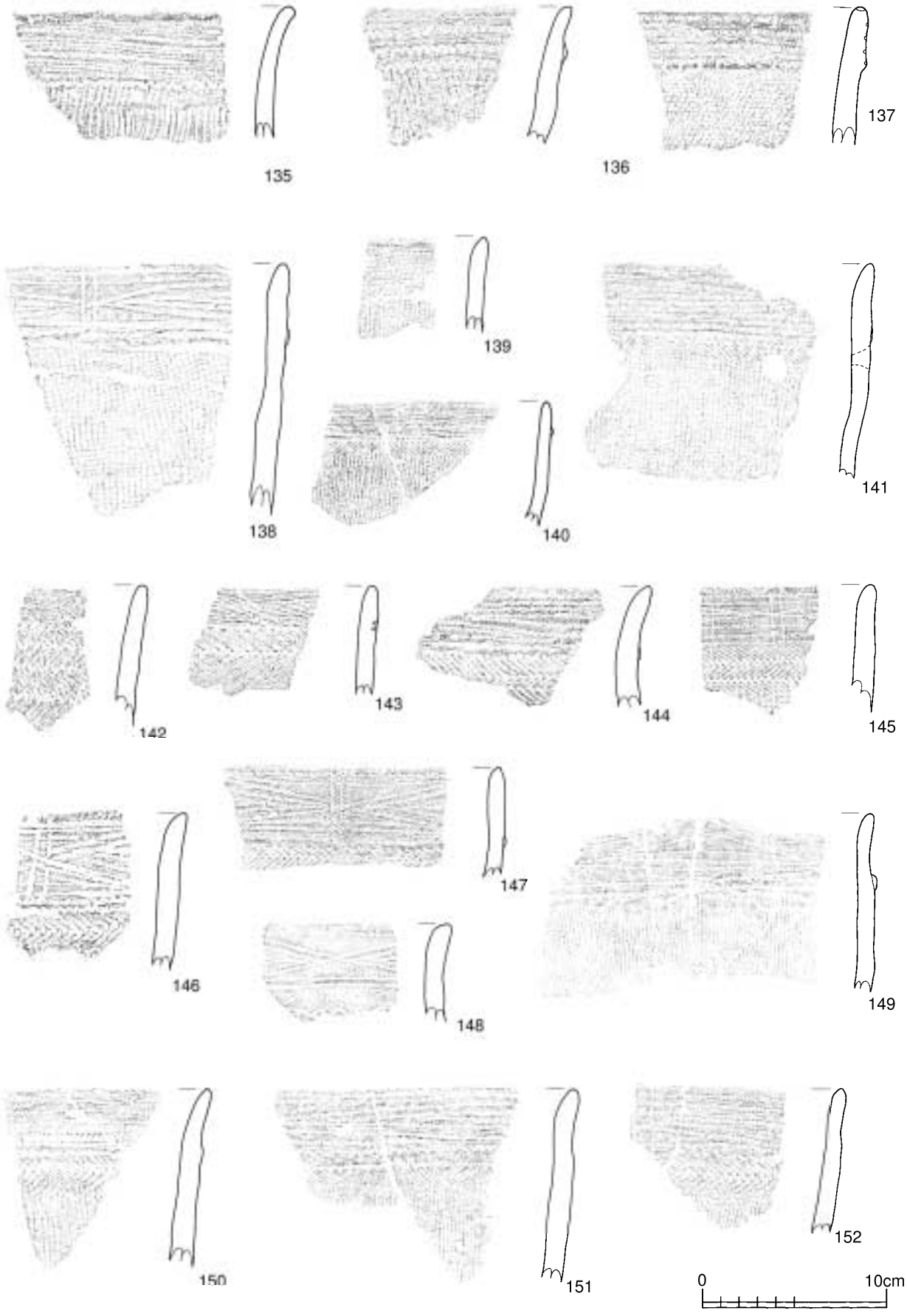
第68図　遺構外出土第Ⅱ群土器（10）



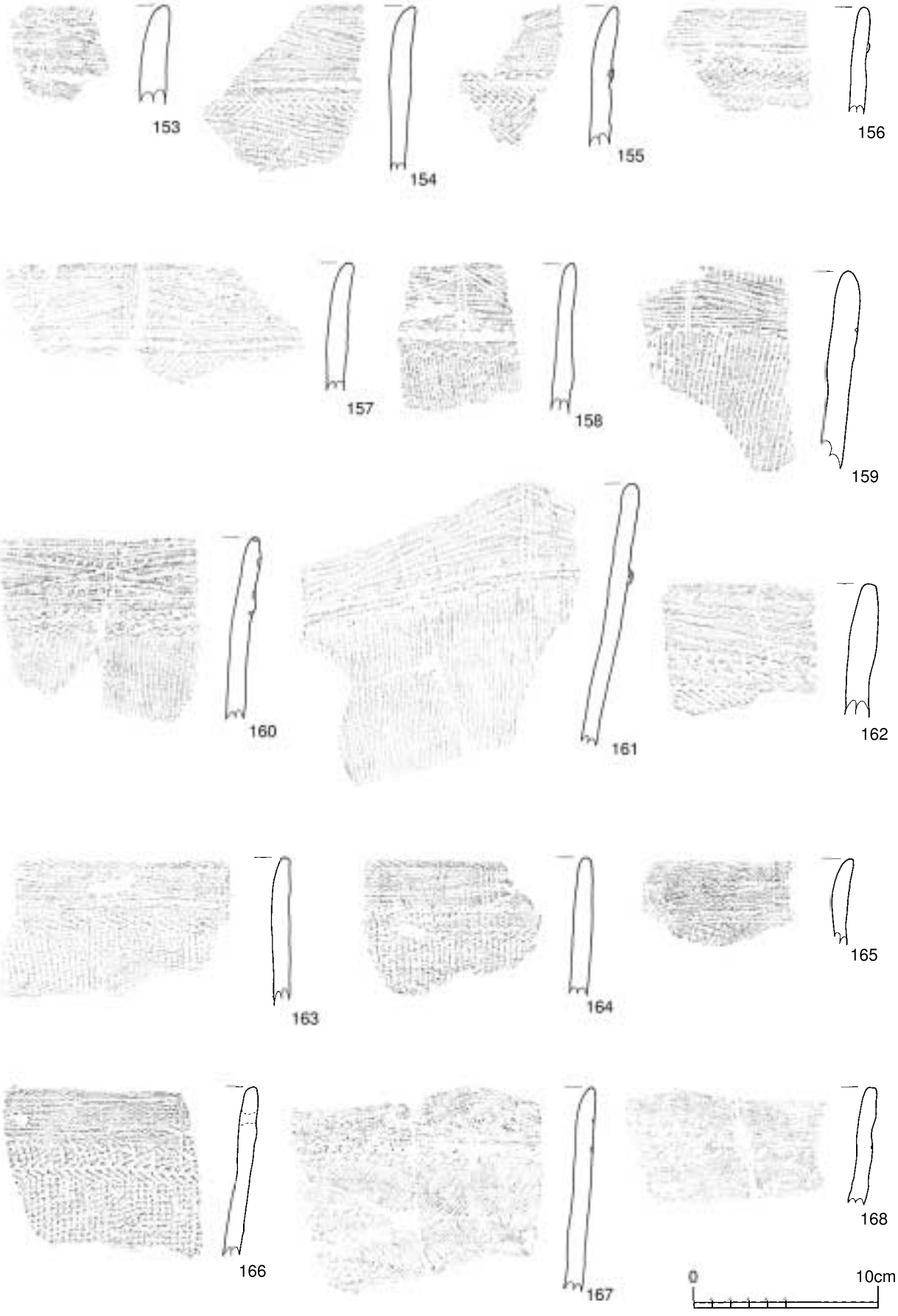
第69図　遺構外出土第Ⅱ群土器（11）



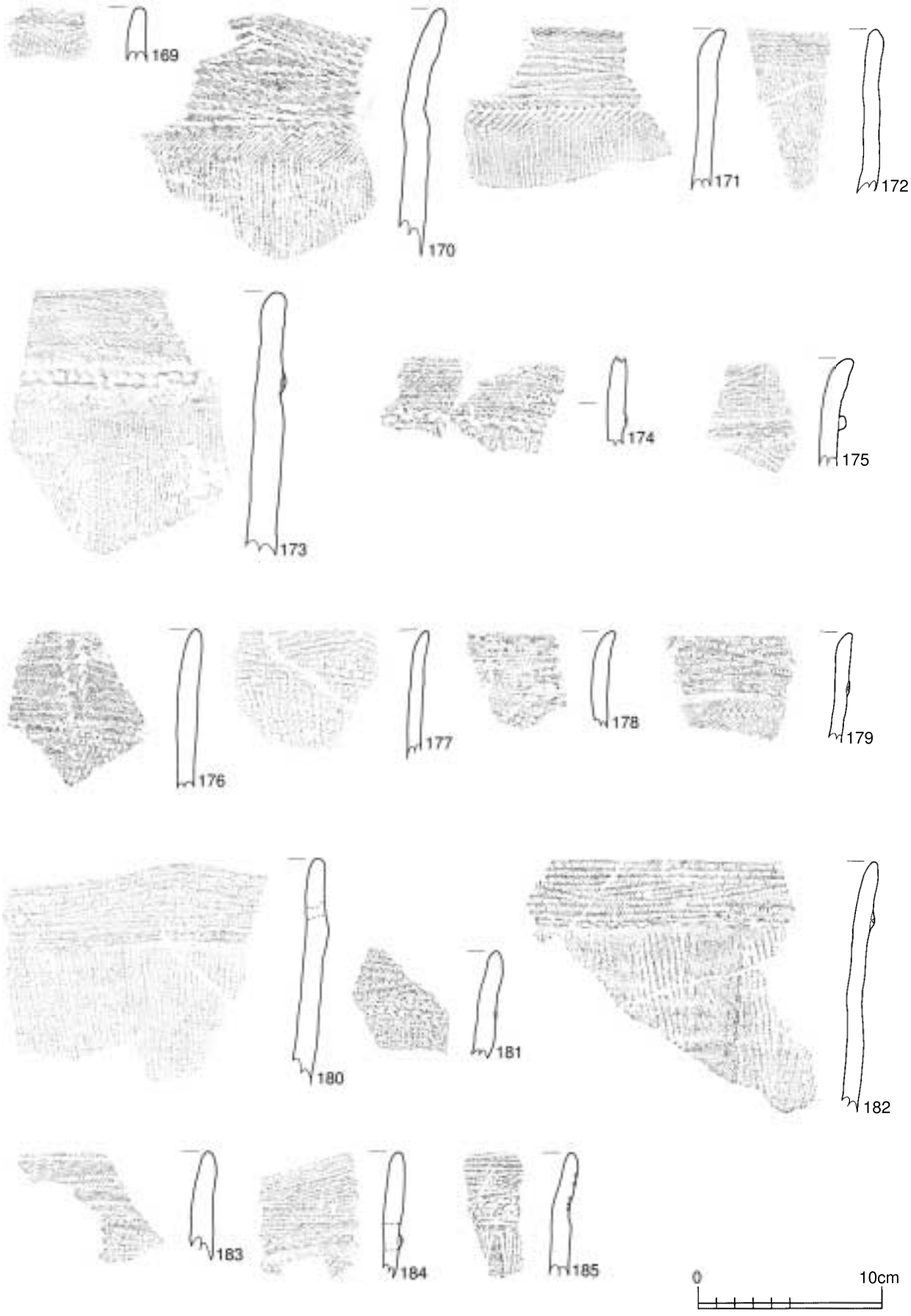
第70図　遺構外出土第Ⅱ群土器（12）



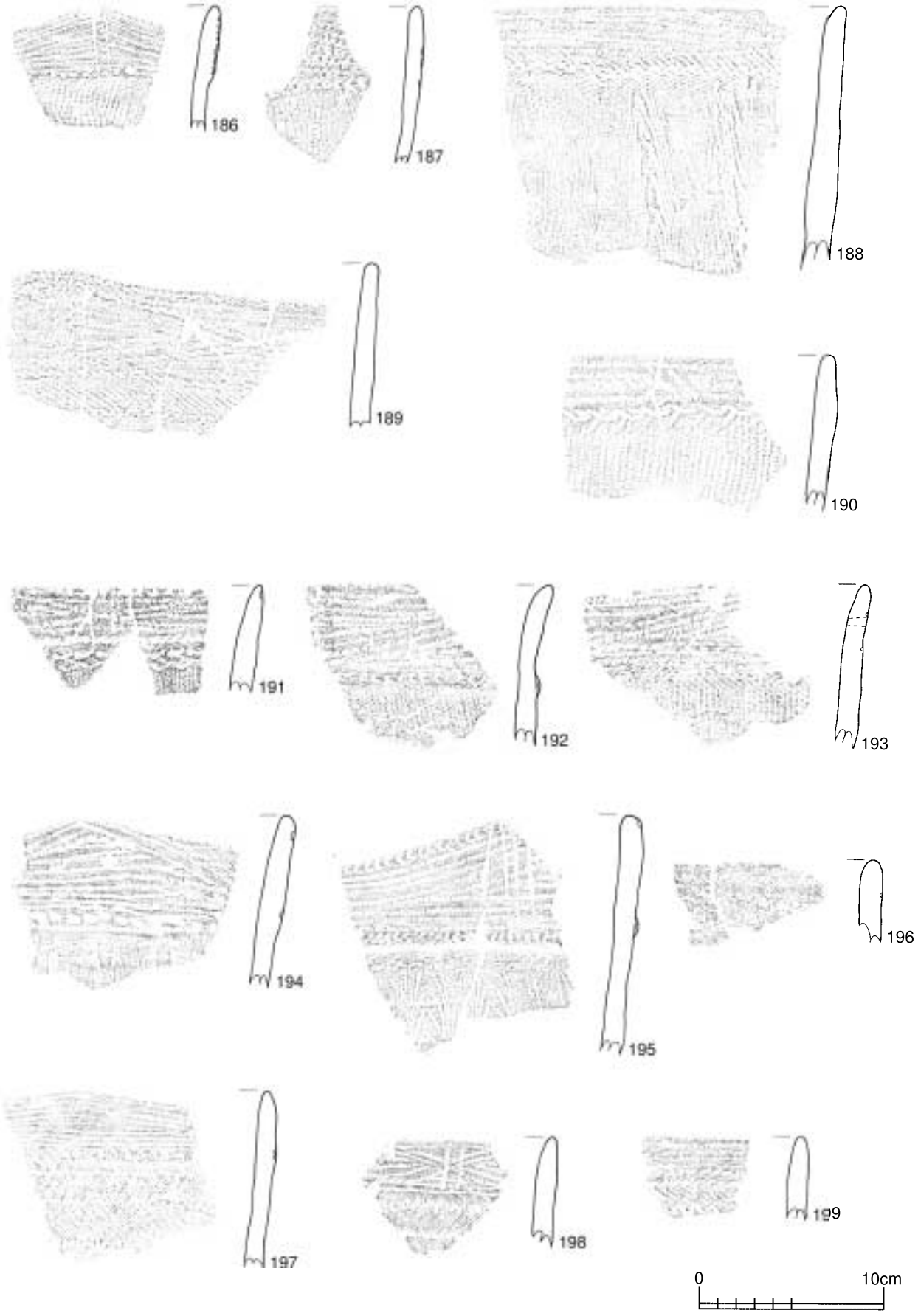
第71図　遺構外出土第Ⅱ群土器（13）



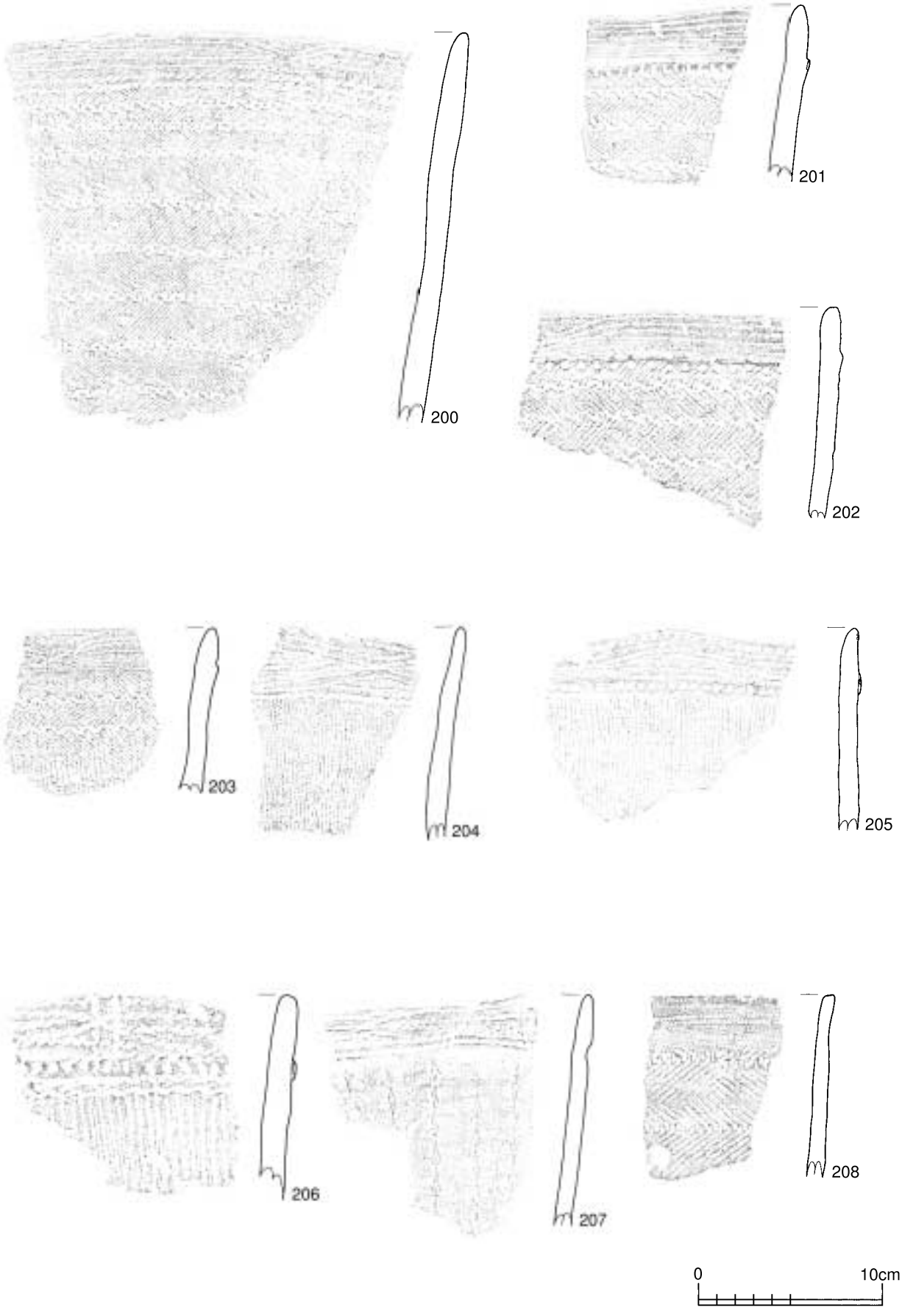
第72図　遺構外出土第Ⅱ群土器（14）



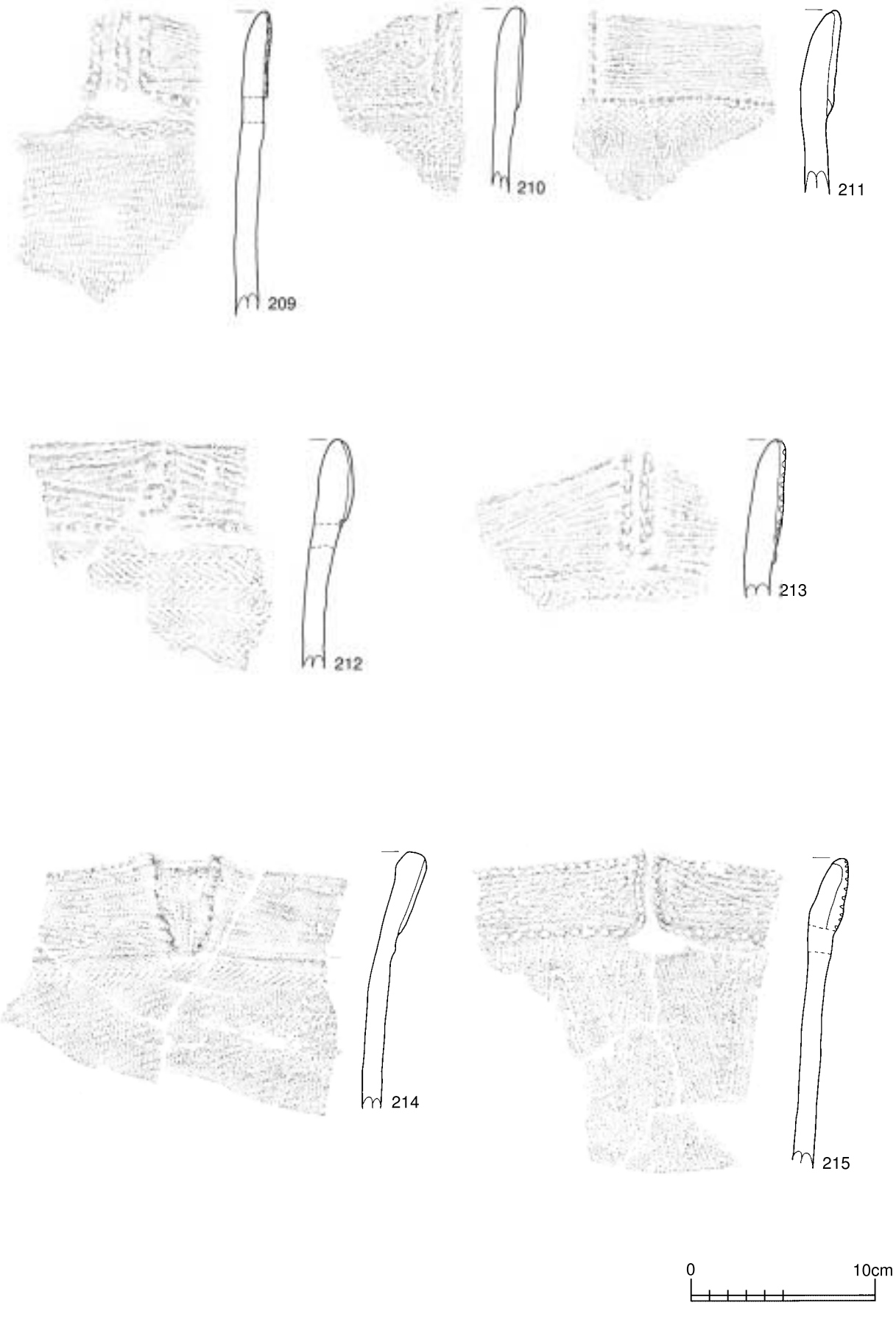
第73図　遺構外出土第Ⅱ群土器（15）



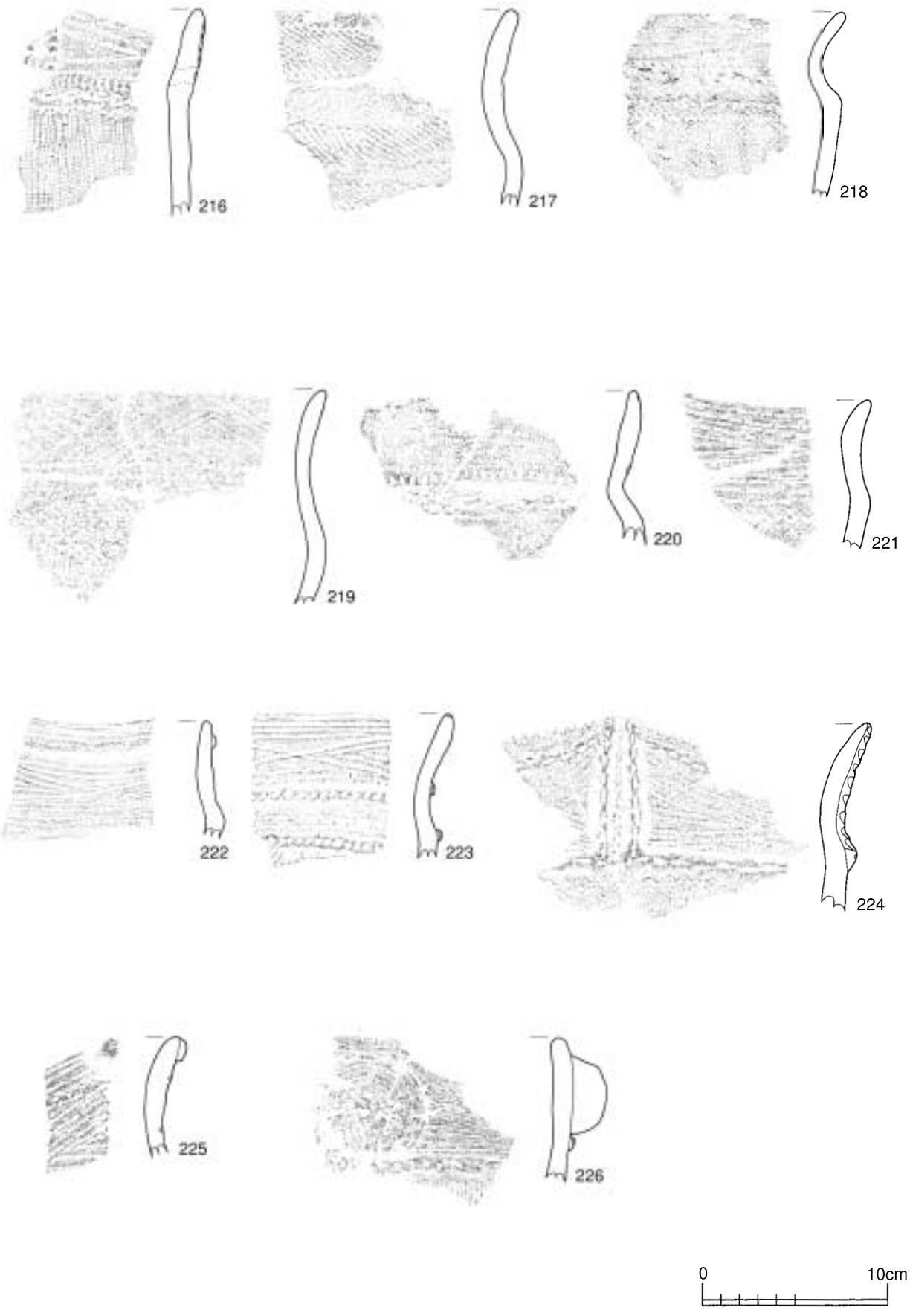
第74図　遺構外出土第Ⅱ群土器（16）



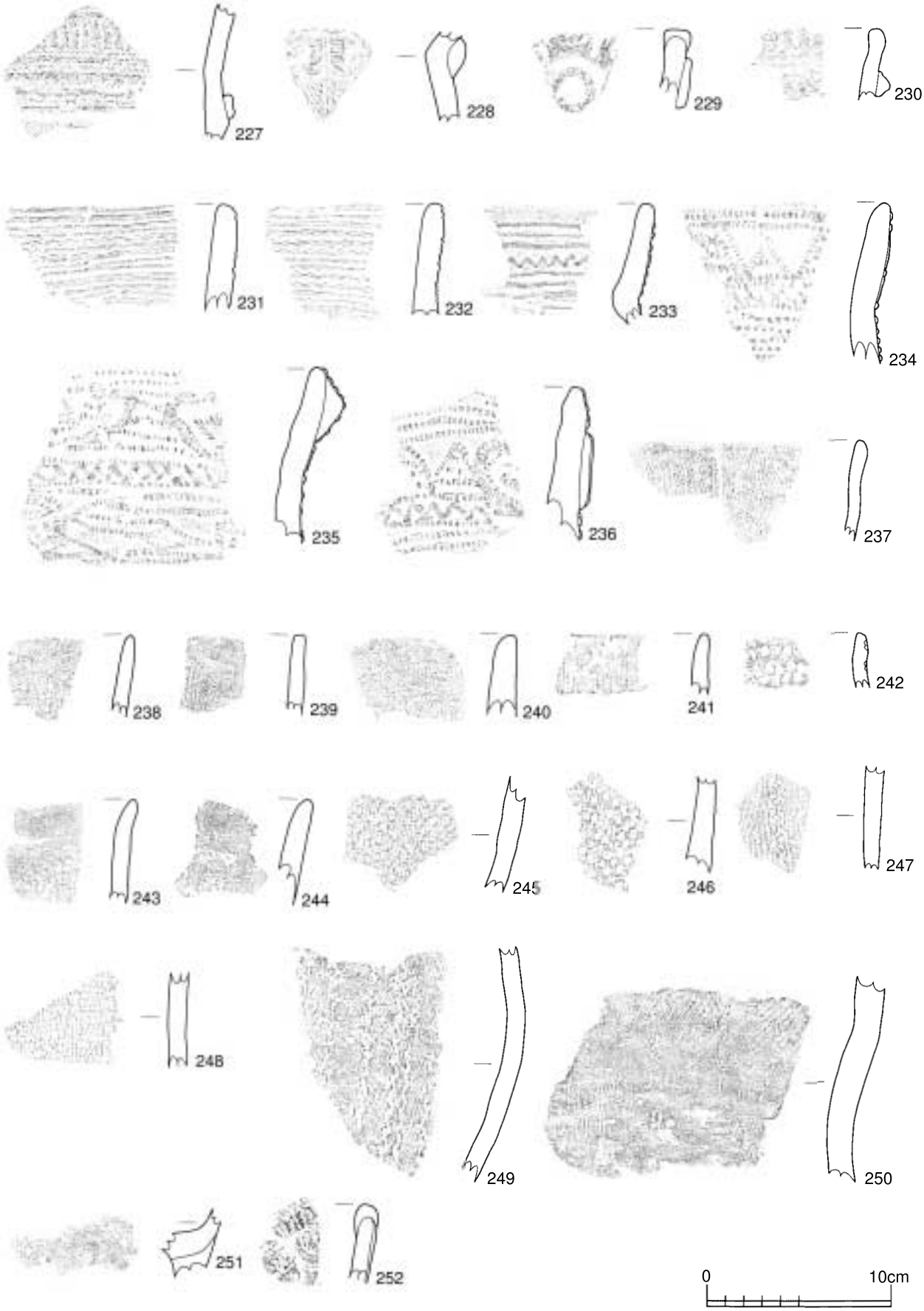
第75図　遺構外出土第Ⅱ群土器（17）



第76図　遺構外出土第Ⅱ群土器（18）



第77図　遺構外出土第Ⅱ群土器（19）



第78図　遺構外出土第Ⅱ群・第Ⅲ群土器(2)

第Ⅳ群土器：縄文時代後期の土器

（１）第Ⅳ群土器の文様等に関する用語について

本遺跡の主体を占める第Ⅳ群土器（十腰内Ⅰ式土器周辺）に施される文様は、地方公共団体で刊行される報告書や研究者の論文によって、多種多様の名称が使用され、その内容についても一律した考え方ではない。そこで、本報告書では文様等に関する用語について、以下のような定義をあらかじめ設定し記述することにした。なお、以下の定義は、『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』（青森市教育委員会1998）を参考にした。

文様に関する用語は、施文手法と単位文様を出土土器の中から抽出し、本文と観察表に記載した。施文手法及び単位文様は、以下のように整理される。

Ａ：施文手法

次の７種類が認められる。

①　一般的に沈線文と呼ばれるものは「沈線」、

②　一般的に隆帯文と呼ばれるものは「隆帯」、

③　半肉彫的技法、隆沈文などと呼ばれ、沈線文と隆帯文が併用されるものは「隆沈線」

④　縄文原体による圧痕や回転文は、例えば「ＬＲ圧痕」、「ＲＬ」、

⑤　櫛歯状沈線、多種沈線などと呼ばれるものは、「櫛歯状沈線」、

このほか⑥「条痕文」、⑦「刺突文」などがある。

Ｂ：単位文様

沈線の結合関係により、次の３群に大別される。

第１群　単線によるもので「横線文」「縦線文」「斜線文」「曲線文」「Ｃ字状文」「Ｚ字状文」「Ｓ字状文」「渦巻状文」「蛇行文」「山形文」「弧状文」「重孤状文」などが認められる。

第２群　沈線の両端が連結するもの、あるいは他の単位文様に接し、結果的に沈線の端部が連結するもの。「円形文」「楕円形文」「長楕円形文」「方形文」「長方形文」「三角形文」などが認められ、１群と重複する名称には、その語尾に「連結」を付した。「連結Ｃ字状文」「連結Ｓ字状文」「連結渦巻文」などである。これらの、沈線手法によるものはａ類、３本組沈線で構成されるものはｂ類に細分される。

第３群　２本組みの単位文様の屈曲部や端部が、その他の単位文様と結合し同体化しているものである。本群の単位文様を認定するにあたり、沈線のみを目で追って文様を観察しようとすると、どの部分が単位文様なのか見失う、あるいは見当がつかなくなる場合も多い。単位文様どうしが密着していたり、縄文や櫛歯状沈線などの施文効果により、単位文様の反転化が考えられるからである。そこで、本群では、前記の縄文や櫛歯状沈線が施される部分を基準として単位文様を認めることにする。なお、本群の単位文様の名称は、２群の「連結○○文」と区別するため、語頭に「連携」を付し、混乱を回避した。「連携Ｓ字状文」「連携渦巻文」「連携曲線文」「連携山形文」「連携Ｙ字状文」などが認められる。

さらに、単位文様と隣接する、空間の幅や、結合する単位文様全体が展開していく方向によって、次のａ～ｃ類に細分することができる。

ａ類　単位文様の幅が、次のｂ類と比較して広く、また単位文様と隣接する空間が同じ位の幅で構成

されるものを本類とした。

ｂ類　単位文様の幅が、前記のａ類と比較して狭く、隣接する空間の幅と比べてみても幅狭のものを本類とした。

ｃ類　結合する単位文様が横位に展開するものを本類とした。ただし、ａ・ｂ類の単位文様も結合して横位に展開するものもみられるが、これらの場合、結合する単位文様が重層しているため、本類とは別扱いとした。

（２） 時期区分

数種類の単位文様が集合あるいは結合して型式指標の一つとなる主文様は、複雑・多岐にわたってモデル化されることが多いが、主文様や副文様などを構成する単位文様は、比較的単純に理解することができ、かつ時間的に変化しやすい要素の一つとして土器の変遷指標にもなりうる。

以上のようにして分類された単位文様は、土器が型式として変化していくうえで、密接に関連する要素の一つとして理解される。これらの単位文様は有意な変遷指標であり、層位学的方法を援用することによって具体的な内容を明らかにできるはずである。青森市小牧野遺跡においては、発掘調査により、前記の単位文様が３群ａ類→３群ｂ類→２群→３群ｃ類の順で遷移することが確認されている（児玉1999)。本遺跡においても同じグリッド内でⅣａ層を掘り下げていくと、日が進むに連れ、単位文様２群から３群ａ・ｂ類へ変化していくことを確認している。

本遺跡での土器群の層位的な分析は、第７図にも示しているＹ～ＡＥ－150ラインの幅50mのセクションベルトから出土した土器について、現在進めており、その結果については報告書の最終年度である平成15年度の考察編に掲載する予定としている。

以上のような文様は、単位文様の層位的関係が示すように時間的な段階として、単位文様３群ａ類→３群ｂ類→２群ａ→２群ｂ→３群ｃ類の順に変遷するものと考えられる。これらの単位文様の変遷を、これまでに設定された土器型式に比定させ、稲山遺跡における縄文時代後期前半の土器の時期区分を試みると以下のようになる。

第１期　牛ヶ沢（３）式土器（成田1989）に相当するが、本調査では出土していない。今後の調査や整理の段階で確認される可能性を想定し、本類を設定した。

第２期　蛍沢（本間1988)、馬立式（鈴木1998）に相当し、単位文様３群ａ類を主体とする土器群によって構成される。内容的に二分される型式を含むものとも考えられることから、弥栄平（２）式土器（成田1989）に相当するものを２ａ期、蛍沢３群（葛西1979ａ)、沖附（２）式土器（成田1989）に相当するものを２ｂ期とした。

第３期　２類と３類との間に位置付けられるもので、十腰内Ⅰ式第２段階Ａ種（葛西1979ｂ)、小牧野編年３期（児玉1999）に相当する。単位文様３群ｂ類を主体とする土器群によって構成される。

第４期　十腰内Ⅰ式第２段階Ｂ種（葛西1979ｂ)、十腰内ＩＡ式（成田1989）に相当し、単位文様２群ａ類を主体とする土器群によって構成される。十腰内Ⅰ式土器の古相として理解される。

第５期　３本組沈線手法による単位文様２群ｂ類を主体とする土器群によって構成される。型式的には、十腰内ＩＡ式として理解される場合が多いが、明らかにＩＢ式の特徴をもつ土器も存在する。４期と６期と並行する土器を含み、かつ斬移する土器として考えられる。

第６期　十腰内Ⅰ式第３段階（葛西1979ｂ）、十腰内ⅠＢ式（成田1989）と呼称した時期に相当し、単位文様３群ｃ類を主体とする土器群によって構成される。十腰内Ⅰ式土器の新相を示すものである。

（３）出土土器の説明

本調査では、前項で設定された１～６期の時期区分のうち、１期を除く全ての時期の土器が出土している。本報告書では、多量に出土した後期の土器（第Ⅳ群土器）を注記や接合の段階から分類し、その代表的なものを複数点掲載した。また、掲載した土器の個々の属性は、別冊の観察表に記載した。

出土した土器は、文様の特徴から１～11類に分類される。そのうち、１～６類については、時期区分が可能な土器で、その内容も前項の１～６期と重複するものである。

１類

第１期に相当する土器であるが、本調査では出土していない。今後の調査や整理の段階で確認される可能性も考えられることを想定し、本類を設定した。

２ａ類（第44図402、第79図１・２、第111～113図169～193）

単位文様３群ａ類を主体とする土器で構成され、第２ａ期に相当する。沈線幅が２ｂ類と比較して幅広なのが特徴的である。

深鉢形土器は、口縁部文様帯に連携長楕円形文が施されるもの（第112図183）、頚部に無文帯を有し胴部に渦巻状の連携曲線文（平行沈線と結合）が施されるもの（第79図１）、波状口縁に平行する波状文、胴部に他の沈線と結合する連携曲線文と渦巻文が施されるもの（第111図169～175）、連携三角形文や連携渦巻文が施されるもの（第112図184）、単線による渦巻文が施されるもの（第44図402、第112図185）、隆帯による円形文と区画文を有するもの（第112図186）などがみられる。

鉢形土器は、胴部から口縁部にかけて内彎するものが目立つ。胴部に連携長楕円形文（第79図２）や連携渦巻文（第112図189）が施されるもの、各沈線文の端部あるいは交差部に円形の隆帯（第111図179・180）や刺突（第112図187）を有するものがみられる。

２ｂ類（第43図372、第79～82図３～12、第113図193～205）

２ａ類と同じく単位文様３群ａ類を主体とする土器で構成されるが、沈線幅は比較的狭い。第２ｂ期に相当するものである。

深鉢形土器は、波状口縁をもつものがほとんどであるが、中には装飾的な突起を有するもの（第113図193～195）もみられる。口縁部には、楕円形文が施され、頚部に無文帯（第80図４・５）や区画文（第79図３、第81図７、第113図197）などが施され、口縁部文様帯と胴部文様帯との３段構成によるものが目立つ。胴部には、他の沈線文と結合する連携渦巻文（第79図３、第80図５、第81図６、第82図９）や連携波状文（第81図８）などが施されている。これらの連携する単位文様の沈線間には、縄文が施されている場合がほとんどで、その沈線間と隣接する単位文様（無文であることが多い）の沈線間の幅は、ほぼ同じ幅であることが多い。また、口縁部や胴部には、隆帯を巡らすものもみられ、装飾的に施されるもの（第113図195）や、区画文として施されるもの（第113図197）などがある。

鉢形土器は、胴部に動物形の隆帯が貼付されるもの（第43図372）がみられる。この土器の詳細については、本項のその他の土器の項目で再度説明する。

浅鉢形土器は、胴部に連携渦巻文が施されるものがみられる（第82図10）。

台付浅鉢形土器は、台部に方形文が施され、２ヶ所に長方形の透かし孔を有するものがみられる（第113図204）。

壷形土器は、胴部に区画文系の文様が施されていることが多く、方形の区画文（第113図205）や、その中に縦位の蛇行文が施されるもの（第82図11）、複数の方形文を配することにより、区画文系のモチーフを作り出すもの（第82図12）もみられる。そのほか、胴部に渦巻文と思われる曲線文が施されるものもみられる（第113図203）。また、肩部付近で切断される土器もみられる（第82図12）。

３類（第82～83図13～23、第114図206～223）

単位文様３群ｂ類を主体とする土器で構成され、第３期に相当する。

深鉢形土器は、波状口縁をもつものと平坦口縁をもつものとの両方がみられる。頚部には、無文帯（第114図207・208）や、区画文（第82図14、第114図206）がみられるが、２ｂ類ほど割合少ない。むしろ、第83図15・16や第114図209～211のように、口縁部文様帯と胴部文様帯の２段構成が多くなる傾向がみられる。胴部文様帯には、楕円形文や連結Ｃ字状文など（単位文様２群ａ類）の外側に、縄文を充填することで、単位文様を反転させ、結果、連携うろこ状文（第83図15）、連携渦巻文（第114図214）などが効果的に作り出されている。また、縄文は施されていないが、同じ反転効果による連携うろこ状文（第83図16、第114図220）、連携渦巻文（第82図14）などが施されているものもみられる。

鉢形土器は、上記の深鉢形土器のプロフィルや文様帯と同様に構成されるものが多い。胴部には、連携渦巻文（第83図19・20）、連携Ｓ字状文（第114図221）、連携楕円形文（第114図223）などが施されている。

浅鉢形土器は、ボウル形を呈し、連携曲線文（第83図23）や連携渦巻文（第114図216）が施されるものや、膨らみをもつ胴部に口縁が外反する器形のもので連携Ｓ字状文が施されるもの（第83図22）がみられる。

壷形土器は、球胴で胴部に連結波状文や横位の連結Ｙ字状文が施されるもの（第114図213）、連携曲線文が施されるもの（第114図222）、大型で肩部付近に隆沈線が巡らされるもの（第114図217・218）がみられる。

４類（第26図１・２・４・６、第84～92図26～67、第115～116図225～242）

単位文様２群ａ類を主体とする土器で構成され、第４期に相当する。

以前の時期（２・３類）と比べ、口縁が折り返されるものが少なく、器面も丁寧に調整されるものも多くなり、色調も明るさを増してくる。また、隆沈線技法による文様も多用されるようになる。

深鉢形土器は、波状口縁をもつものがほとんどであるが、小型の深鉢については平坦口縁をもつものもみられる。文様帯は、基本的に口縁直下と胴部との２段構成である（胴部文様帯の上下に配置される区画帯は、胴部文様帯に付属するものとして考えている）。口縁直下の文様帯は、円形文と長楕円形文からなる文様帯（第84図26・27、第85図30・31、第86図33、第87図36・39、第88図40）と、８字状の隆帯と長楕円形文を配置した文様帯（第85図28、29、第86図32、35、第87図37、第88図42、第115図229、

第116図237）のどちらかが採られる場合が多い。胴部文様帯は、いわゆる“輪ゴム状沈線”と呼ばれる手法、すなわち沈線の両端が結合する単位文様２群ａ類に属される文様によって構成されている。構成要素となっている単位文様は、連結渦巻文（第84図27、第116図237）、連結Ｓ字状文（第85図31、第86図35、第115図233、234、第116図235）、連結Ｃ字状文と連結Ｓ字状文などを噛合せた重層する連結渦巻文（第84図26、第85図29、30）、連結斜線文と連結Ｓ字状文が結合するもの（第86図34）、連結Ｃ字状文が噛合いながら縦位交互に配されるもの（第87図36）、楕円形文が重層するもの（第115図225）、楕円形文が数段、横並びするもの（第115図227）などがみられる。また、単線による単位文様１群に属される、蛇行文（第88図41）、Ｓ字状文（第88図42）などもみられる。

鉢形土器は、その器形が深鉢系のものと浅鉢系のものとに二分される。深鉢系のものは、平坦口縁で口縁文様帯に長楕円形文、胴部文様帯に蛇行文が施されるものがみられる（第88図43）。浅鉢系のものは、波状口縁のものが目立ち、長楕円形文や連結渦巻文が施されるものがみられる（第26図６）。

浅鉢形土器は、平坦口縁をもつものが多くみられる。文様帯は、深鉢形土器と同様に２段構成のものが多い。口縁部文様帯は、無文帯のもの（第88図45）や円形文と長楕円形文が配されるもの（第89図49）などがみられる。胴部文様帯には、連結渦巻文（第26図１、第88図45）や、連結Ｓ字状文（第88図44、第89図49、第116図24）が施されるものが多くみられる。また、浅鉢形土器の底面には、円形文と連結弧状文（底部に平行する長楕円形文）が配されるもの（第116図241）や、同心円状の円形文が施されるもの（第116図242）もある。

壷形土器は、大型や小型のものがある。大型のものは口縁が屈折するタイプ（この部分だけみると浅鉢形土器に形状が近い）のもの（第90図53、55、第91図59、第116図239）や広口のタイプ（第89図52）などがみられ、橋状突起が付されるもの（第90図55、56）も目立つ。胴部には、連結Ｓ字状文（第89図52）や、連結渦巻文（第90図55、第91図58、第92図60）が施されるものが多い。また、数面の方形区画をもち隆沈線手法によって文様が構成されるもの（第90図53）もみられる。小型のものは、胴部に楕円形文を配するものが多く（第92図61・62・64・65）、中には、渦巻文が施されるもの（第92図63）や無文のもの（第92図63）もみられる。また、小型の壷形土器は、胴部上半あるいは下半が切断される場合も多い（第92図62～66）。

そのほか、四脚付の土器も出土している（第92図67）。この土器は、壷形土器と思われる底部に、三角柱状の脚部が付されており、胴部には隆沈線手法による楕円形文などが施されている。

５類（第26図５・８、第27図10、第93～98図68～104、第117～118図243～262）

３本組沈線手法による単位文様２群ｂ類を主体とする土器で構成され、第５期に相当する。

深鉢形土器は、波状口縁をもつものが多くみられる。文様帯は、４類と同様に基本的に口縁部文様帯と胴部文様帯との２段構成である。口縁部文様帯は、４類と同様に円形文と長楕円形文からなる文様帯が多くみられるが（第93図69・70、第94図74、第95図77）、８字状の隆帯と長楕円形文を配置した文様帯は稚拙化する傾向もみられる（第93図71、第95図75）。また、４類で多用された隆沈線技法は、口縁部文様帯にのみに文様が施されるようになる。胴部文様帯は、３本組沈線手法による横方向に連続するＳ字状文（第93図68～71、第117図244～246）、縦方向に連続するＳ字状文（第94図72～74、第95図75、第114図247～249）が多くみられる。

鉢形土器は、胴部文様帯に、３本組沈線手法による横方向に連続するＳ字状文（第95図78）、弧状文

（第26図８）が施されるものがみられる。

浅鉢形土器は、平坦口縁をもつものが多くみられる。文様帯は、深鉢形土器と同様に２段構成のものが多い。口縁部文様帯は、円形文と長楕円形文が配されるもの（第95図79・82、第96図83～86）が多く、渦巻文と長楕円形文が配されるもの（第95図81・第96図87）もみられる。胴部文様帯には、３本組沈線手法によるＳ字状文（第95図79～82、第96図83～87）が多く、次いで渦巻文（第96図93、第97図95～98）が多く施され、波状文系の文様（第96図92・94）もみられる。

壷形土器は、４類と比べ大型のものや、切断土器は出土していない。文様帯も深鉢形土器や浅鉢形土器と同様に、口縁部と胴部との２段構成となっている。口縁部文様帯は、深鉢形土器と同様に、円形文と長楕円形文が配されるもの（第97図99、第98図103）が目立つ。胴部文様帯は、３本組沈線手法によるＳ字状文が多用され、横方向に連続するＳ字状文（第97図99）や波状文の上下を連絡するためのＳ字状文（第97図101、第98図104）、部分的に配されるＳ字状文（第97図100）などがみられる。また、渦巻文が施されるものもみられる（第98図102）。

６類（第26図７、第28図13～15・17、第29図18・20・23・24、第30図25・26、第34図136、第35図169、第42図348・368、第84図24、第98図105～107、第99図108・109、第119図265、267）

単位文様３群ｃ類を主体とする土器で構成され、第６期に相当する。

口縁部がほとんど折り返されなくなる。また、沈線に縁どられる単位文様内に、縄文や櫛歯状沈線を充填するものや、櫛歯状沈線手法により単位文様が描かれるものなどがある。

深鉢形土器は、波状口縁をもつものと平坦口縁をもつものとの両方がみられる。

文様帯は、４類や５類と同様に口縁部文様帯と胴部文様帯との２段構成によるもの（第28図13、第98図106）と胴部文様帯のみの１段構成（胴部文様帯の上下に配置される区画帯含む）によるもの（第30図26）、口縁部と胴部文様帯の区別が明確でないもの（第28図14・15、第29図24）などがある。また、底部から胴部にかけての無文帯を有するものが多く、上部へ押し上げられた胴部文様帯の幅も４・５類と比べて幅狭となり、その結果、単位文様が横方向へと展開していくように配置されている。このように横位展開する単位文様には、３本組沈線手法による斜線文（第28図14）やＳ字状文・波状文（第30図26）が施されるもの、４本組沈線手法でＳ字状文（第34図136）が施されるもの、櫛歯状沈線手法による渦巻文（第98図106）、格子目文（第28図13・15、第35図169）、沈線で縁どられる単位文様に櫛歯状沈線が充填されるもの（第29図24）、縄文が充填されるもの（第98図105、第119図267）などがみられる。

鉢形土器は、波状口縁をもつもので、胴部に３本組沈線手法による波状文が施されるもの（第29図18）がみられる。

浅鉢形土器は、波状口縁をもつもので、胴部にＶ字状文が複数配置されるものがみられる（第98図107）。

台付浅鉢形土器は、平坦口縁や口縁の一部が突出するものなどがみられる。胴部には、沈線で縁どられる単位文様や３本組沈線手法による単位文様に縄文が充填されるもの（第28図17、第84図24、第99図108）などがみられる。また、台部に透かし孔を有するもの（第119図265）もみられる。

壷形土器は、胴部に櫛歯状沈線手法による曲線文とＳ字状文（第26図７）、波状文とＳ字状文（第30図25）連携Ｓ字状文（第29図23）が施されるもの、沈線で縁どられる単位文様に櫛歯状沈線が充填されるもの（第29図20、第42図368）、縄文が充填されるもの（第99図109）などがみられる。

７類（第26図３、第99～101図110～118、第120図281～283）

撚糸圧痕による格子目文を主体とする土器で構成される。深鉢形土器がほとんどである。１本の撚糸を器面に押圧して施文されるもの（第26図３、第99～101図110～116、第120図281～283）と、絡条体圧痕によるもの（第101図117・118）がある。いずれも、Ｒの撚糸が多用されているが、Ｌの撚糸も使用されている。また、一度縄文を施した土器の器面を磨り消し、改めて撚糸を押圧したもの（第100図115）や、口縁部に渦巻文が施されるもの（第120図283）もみられる。

８類（第36図180、第102～104図119～128、第120図284～287）

沈線や櫛歯状沈線手法による格子目文を主体とする土器で構成される。深鉢形土器が多くみられるが、鉢形土器もみられる。口縁部文様帯に沈線手法による円形文や長楕円形文、長方形文を配するもの（第36図180、第102図121、第103図123、第120図284・285）もみられる。格子目文には、沈線手法によるものが多いが、櫛歯状沈線手法（第120図286）や３本組沈線手法（第103図123、第120図287）によるものもみられる。これらの施文手法は、縦位あるいは右傾の沈線をほぼ等間隔に引き、その上に左傾の沈線を引いて施文される場合が多いが、この逆のパターンもある。沈線を交互に施文する例は、あまりみられない。

９類（第104図130、第38図244）

沈線手法や櫛歯状沈線手法による並列縦線文（いわゆる条痕文）を主体とする土器で構成される。深鉢形土器がほとんどである。沈線手法によるもの（第104図130）と櫛歯状沈線手法（第38図244）がみられる。

10類（第105・106図131～141、第120図288～293）

格子目文を除く撚糸の圧痕文や回転文、縄文の回転文を主体とする土器で構成される。深鉢形土器がほとんどであるが、鉢形土器もみられる。撚糸の圧痕文は、１本あるいは複数本の撚糸を器面に押圧して施文されるもの（第105図131～134）と絡条体圧痕によるもの（第105図135、第120図283）がみられる。撚糸を器面に押圧して施文されるものはＲがほとんどで、絡条体圧痕にはＲとＬの両方がみられる。撚糸の回転文は、Ｌで横位回転（第106図136・137）、Ｒで斜位回転（第120図289）して施文されたものがみられる。縄文の回転文は、ＲＬで横位回転（第106図138、140、第120図291）、ＲＬで縦位回転（第106図139、第120図290・292・293）、ＬＲで横位回転（第106図141）して施文されたものがみられる。

11類（第34図143、第107～110図142～168）

無文を主体とする土器で構成される。深鉢形土器は、平坦口縁をもつものがほとんどで、口縁部に隆帯が巡らされるもの（第107図144）や沈線や細い溝を有するもの（第107図142、第108図146・151）などがみられる。また、胴部に一度施された撚糸圧痕の格子目文をすべて磨消し、無文としたものある（第34図143）。

鉢形土器は、その器形が３類鉢形土器（第83図21）と近似するもの（第109図152）や５類浅鉢形土器（第96図86）と近似するもの（第109図153）は、それぞれの時期に帰属できうるものとして考えてよいであろう。

浅鉢形土器についても、その器形が５類浅鉢形土器（第95図81）と近似するもの（第109図157）は、その時期に帰属する可能性が考えられる。

壷形土器は、底部が切断されるもの（第110図167）や球胴のもの（第110図166）がみられる。

皿形土器は、全体形が楕円形を呈するものと思われる底部に、円形の脚が４ヶ所に付されている。また、脚部付近の縁辺部に内面から貫通する有孔突起が付されている。この有孔突起も４ヶ所に付されていたものと思われる。

その他の土器

上述してきた施文手法や単位文様による分類方法と異なるものである。

①狩猟文土器（第43図372）

本調査で出土した狩猟文土器は、前記の２ｂ類（２ｂ期）に属する鉢形土器で、口縁から胴部にかけて一部残存する破片資料である。狩猟文は、胴部に施され、隆帯の貼付によって尻尾のない四肢獣が表現されている。本狩猟文がどのような動物を表したものかは不明であるが、これまでの動物意匠関係の出土例からイノシシやクマを表現したものとして考えられている（福田1998）。

②切断土器（第26図２、第82図12、第92図62～66、第97図99、第110図167）

本調査で出土した切断土器は、９点出土しており、前記の２ｂ～５類（２ｂ～５期）に属する。器種は、いずれも壷形土器である。この種の土器は、「切断壷形土器（阿部1985）」、「切断蓋付土器（成田1986）、「合子作りの壷形土器（小林1994）」などと呼ばれているもので、壷形土器の胴部を輪切りにして、上下二つの部位が作られるものである。土器の切断される位置は、胴部上半つまり肩部付近で切断されるもの（第82図12、第92図62、66、第97図99）と、胴部下半でつまり底部の立ち上がり付近で切断されるもの（第26図２、第92図63～65、第110図167）があり、胴部の中央で切断されるものはない。土器の接合部には、焼成後に切断された痕跡と考えられる多数の刻目が残されている場合が多く、ほとんどの土器が焼成後に切断された可能性が強い。また、第97図99のように、接合部に漆状の黒色物質で目張りを行ったと思われる土器もある。

③赤色顔料塗彩土器（第35図168、第91図58、第92図62・63、第97図99、第116図237）

酸化鉄系と考えられる赤色顔料が塗彩された土器には、次のようなものがある。

・焼成前に単位文様を意識して、その外側あるいは内側に塗彩されるもの（第31図29、第32図78、第34図146、第35図165、第36図187、第38図251、第41図339、第44図399、第116図237）。これらには、胎土中に顔料を含ませて発色させるものと、直接顔料を塗って焼成されるものがある。

・焼成前に全体的を赤色塗彩し、その後で白色の粘土を用いて単位文様の外側に白色塗彩されるもの（第35図168）。

・焼成後に単位文様を意識して塗彩されるもの（第37図204、第37図207、第91図58）。

・焼成後に全体的に塗彩されるもの（第32図57、第34図142、第43図370、第92図62・63、第117図243）

・焼成後に漆状の固着材を用いて塗彩されるもの（第97図99）。

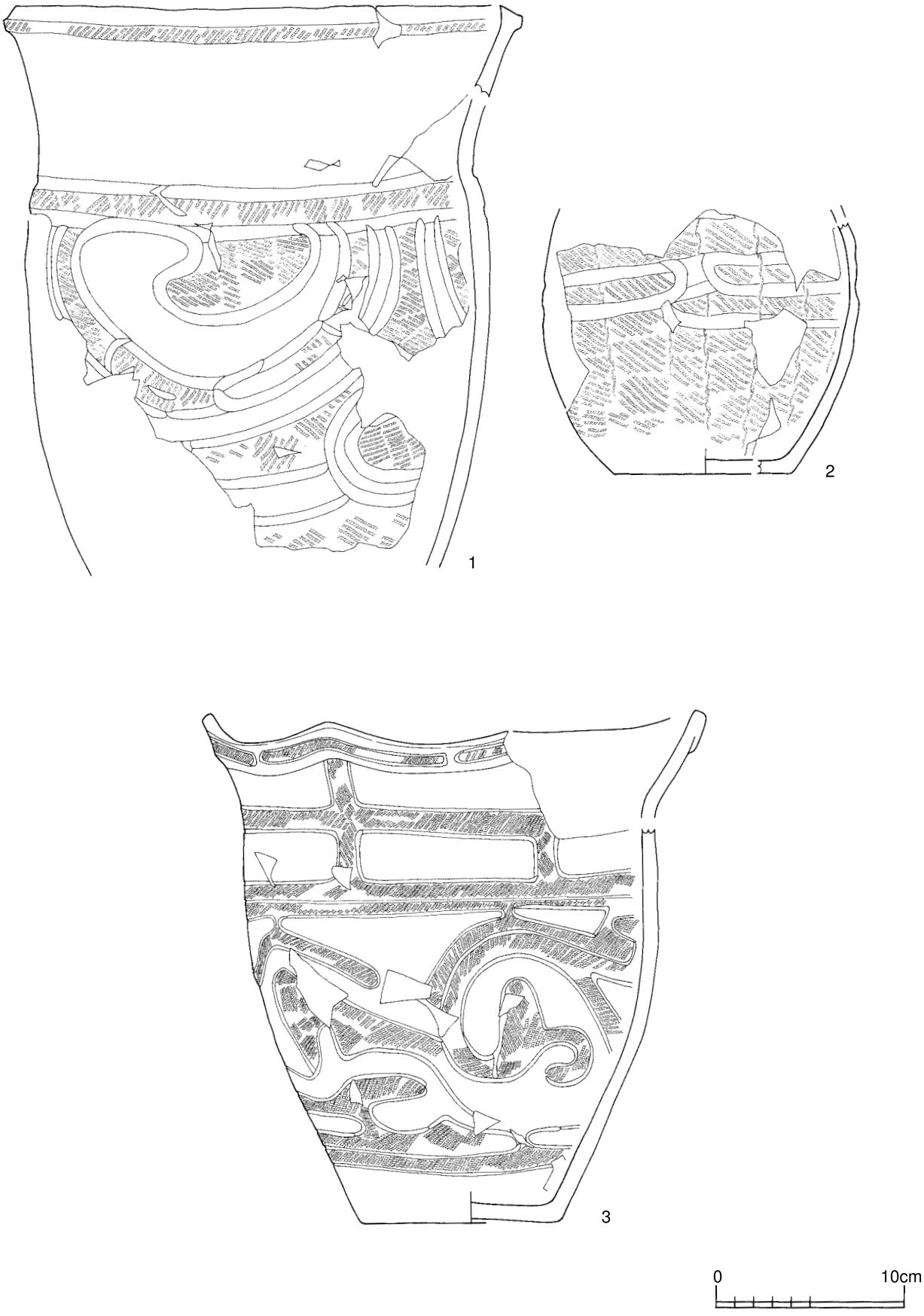
④底面にのこる網代組み（第120図294・295）

第120図294は、底部底面が一部剥離し、その剥離面に網代組みの痕跡がみられる資料である。この土器は、土器成形時に、付いた網代痕を覆い隠すように、粘土をかぶせたもので、何らかのアクシデントにより底面が剥離して、このような状態となったものである。網代の組み方は、「一本すくい一本押さえ」を基調とするものと思われる。

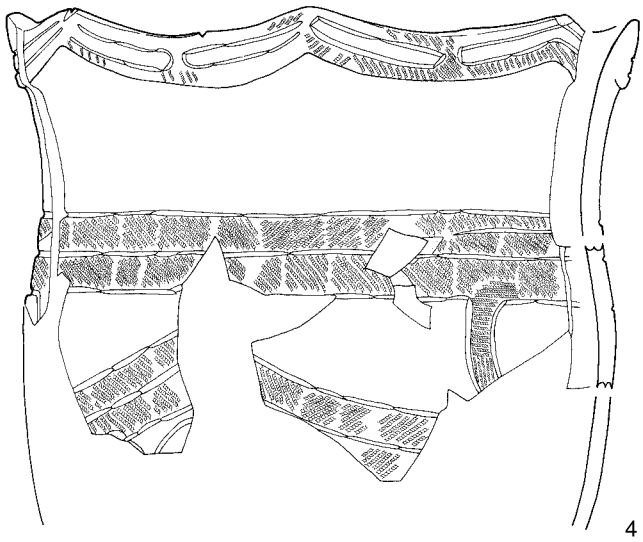
第120図295も、底部底面に網代痕がみられるもので、凹凸が顕著な植物質素材をテープ状に整えたものと思われる。組み方は、三内丸山遺跡で出土している小型の組み籠（いわゆる縄文ポシェット）に類似し、「二本すくい二本押さえ」を基調とするものと思われる。

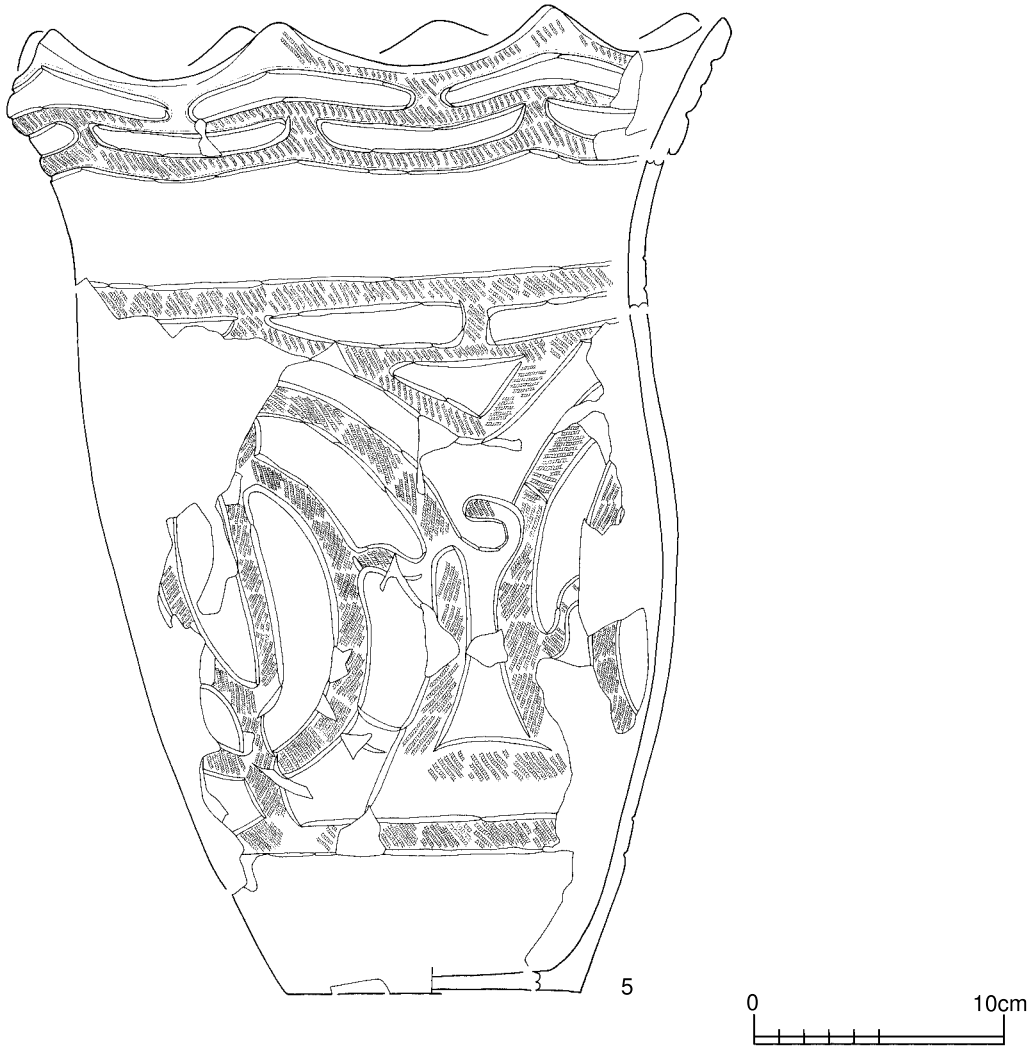
これらのほかにも、実測図非掲載資料（写真66）が３点出土しており、いずれもその組み方は、「一本すくい一本押さえ」を基調とするものと思われる。

（児玉）

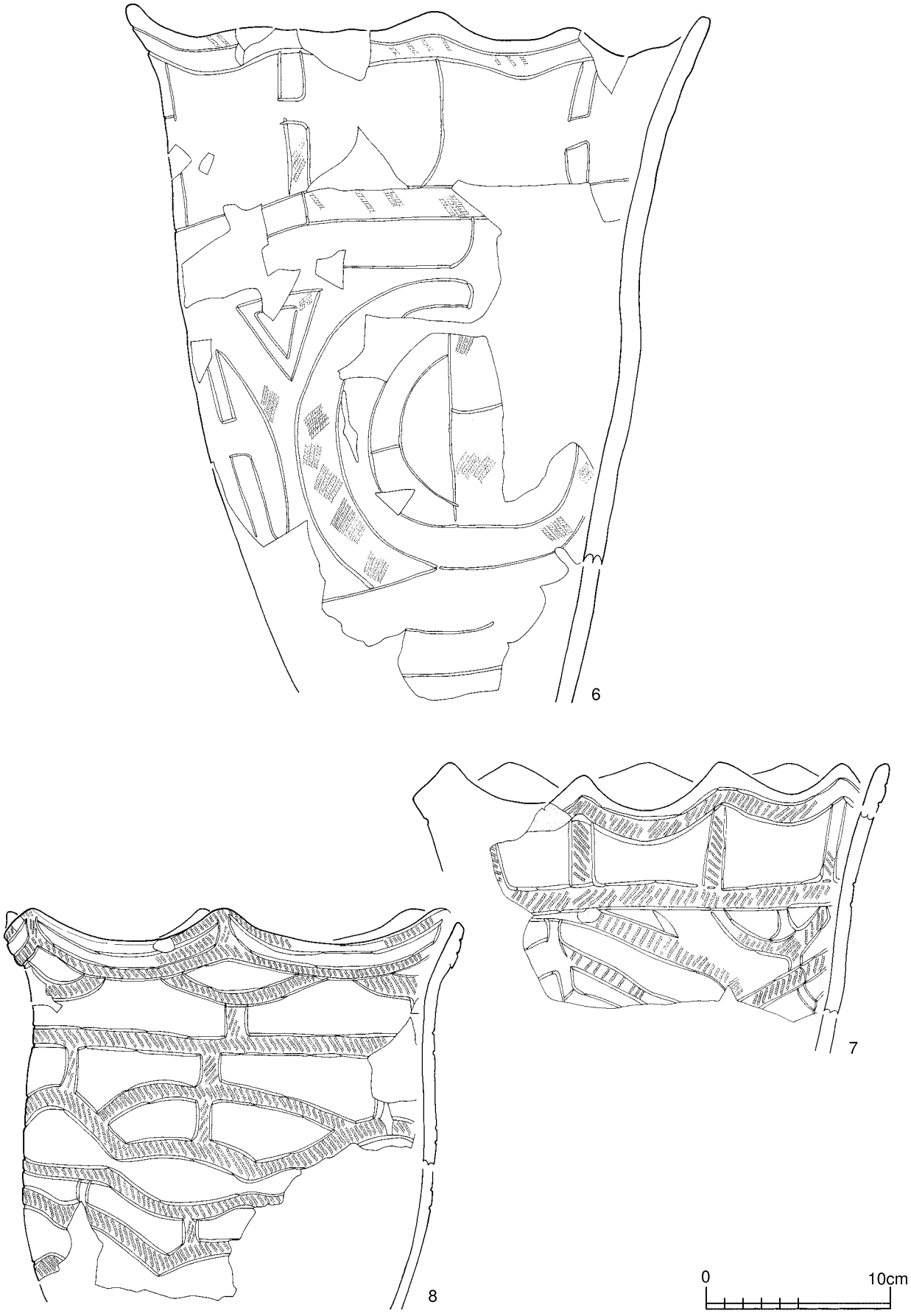


第79図　遺構外出土第Ⅳ群土器（1）

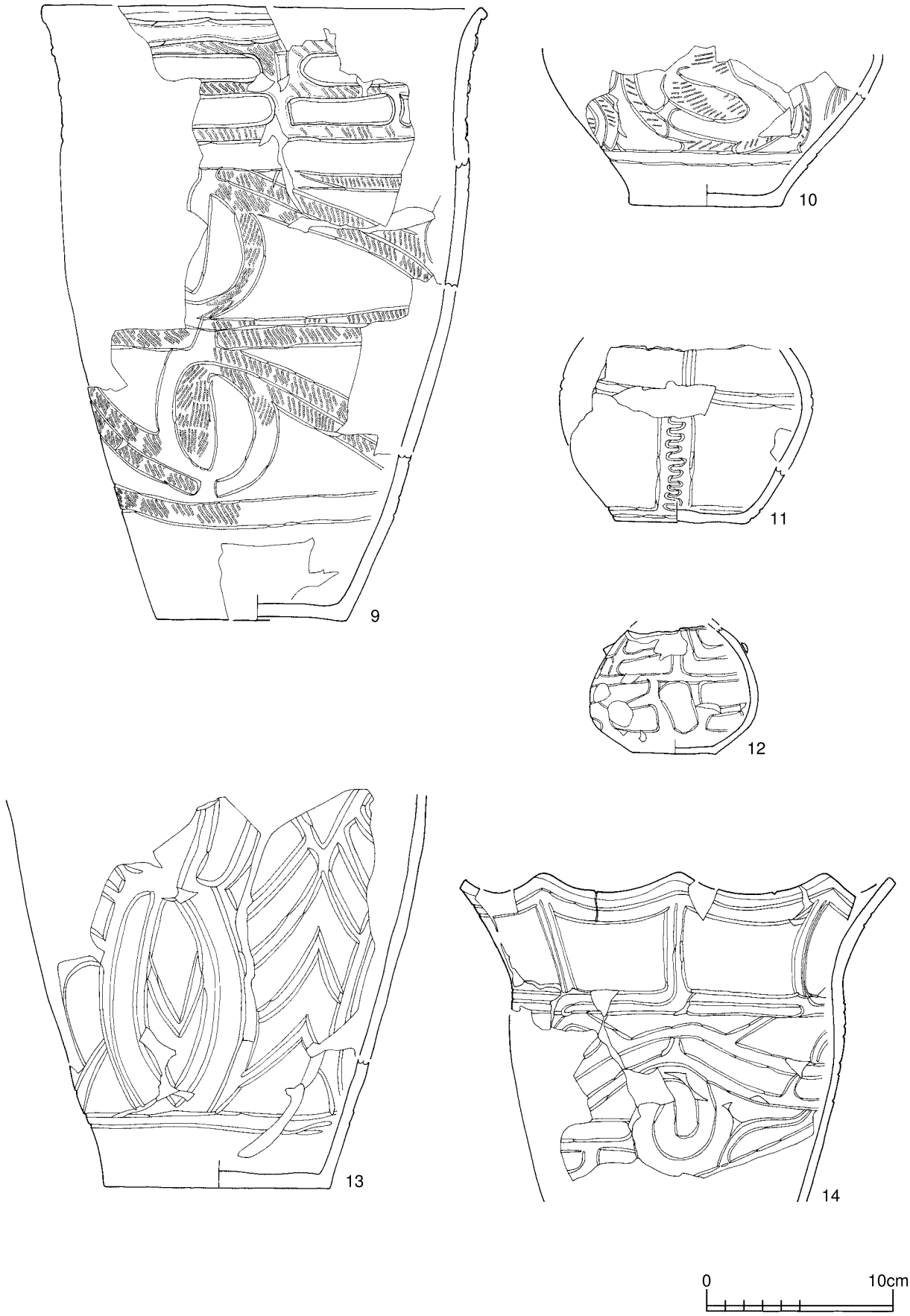




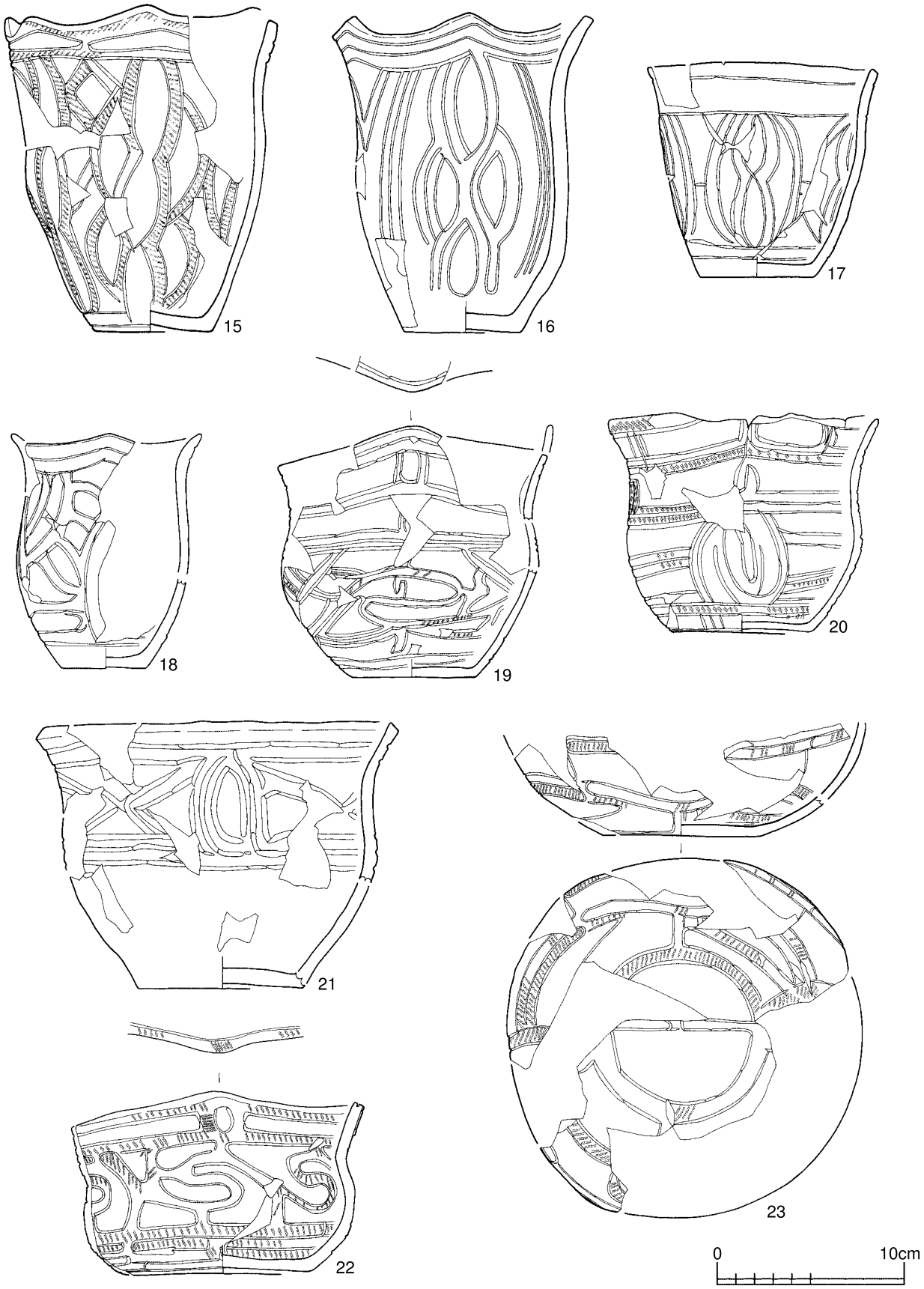
第80図　遺構外出土第Ⅳ群土器(2)



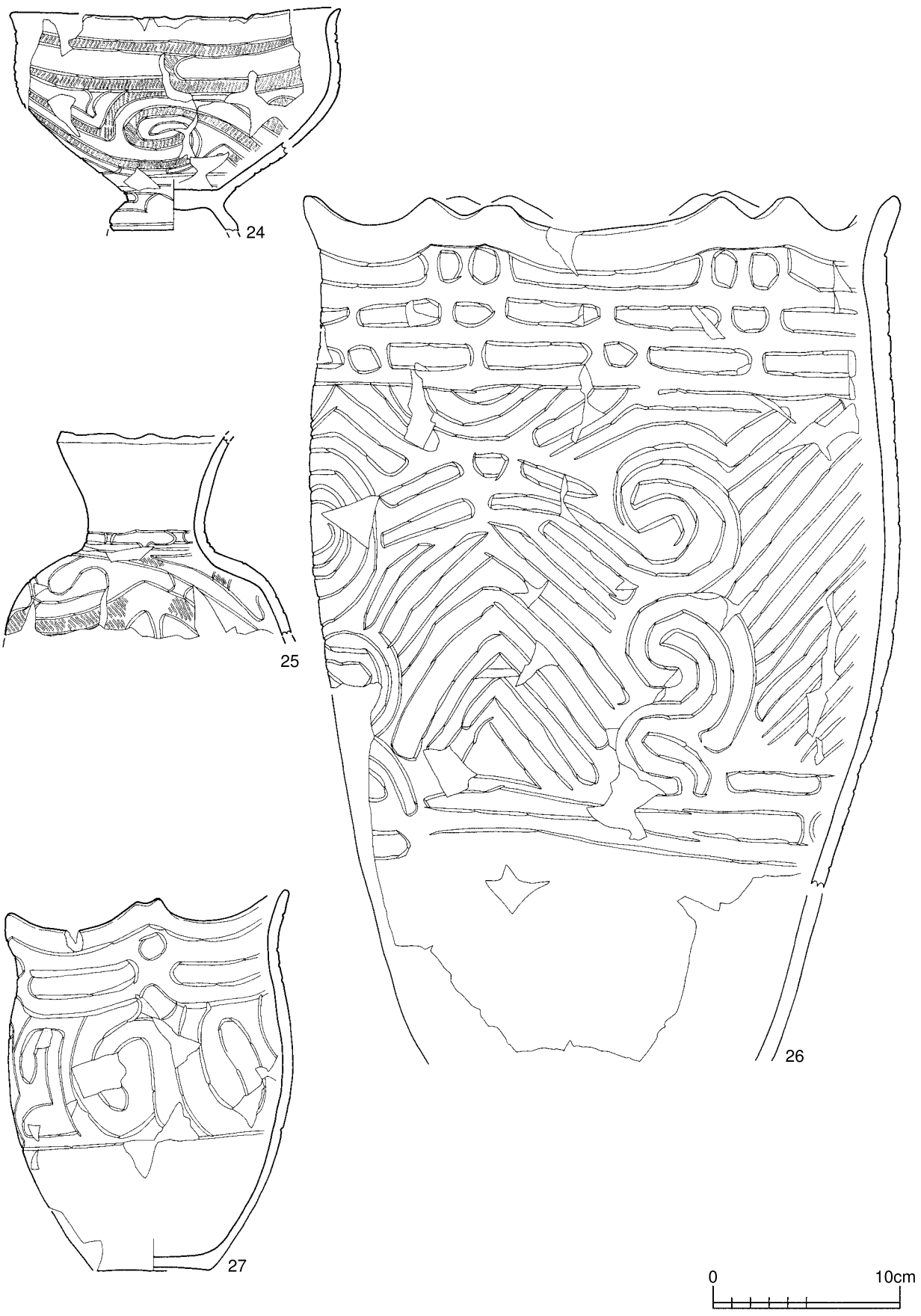
第81図　遺構外出土第Ⅳ群土器(3)



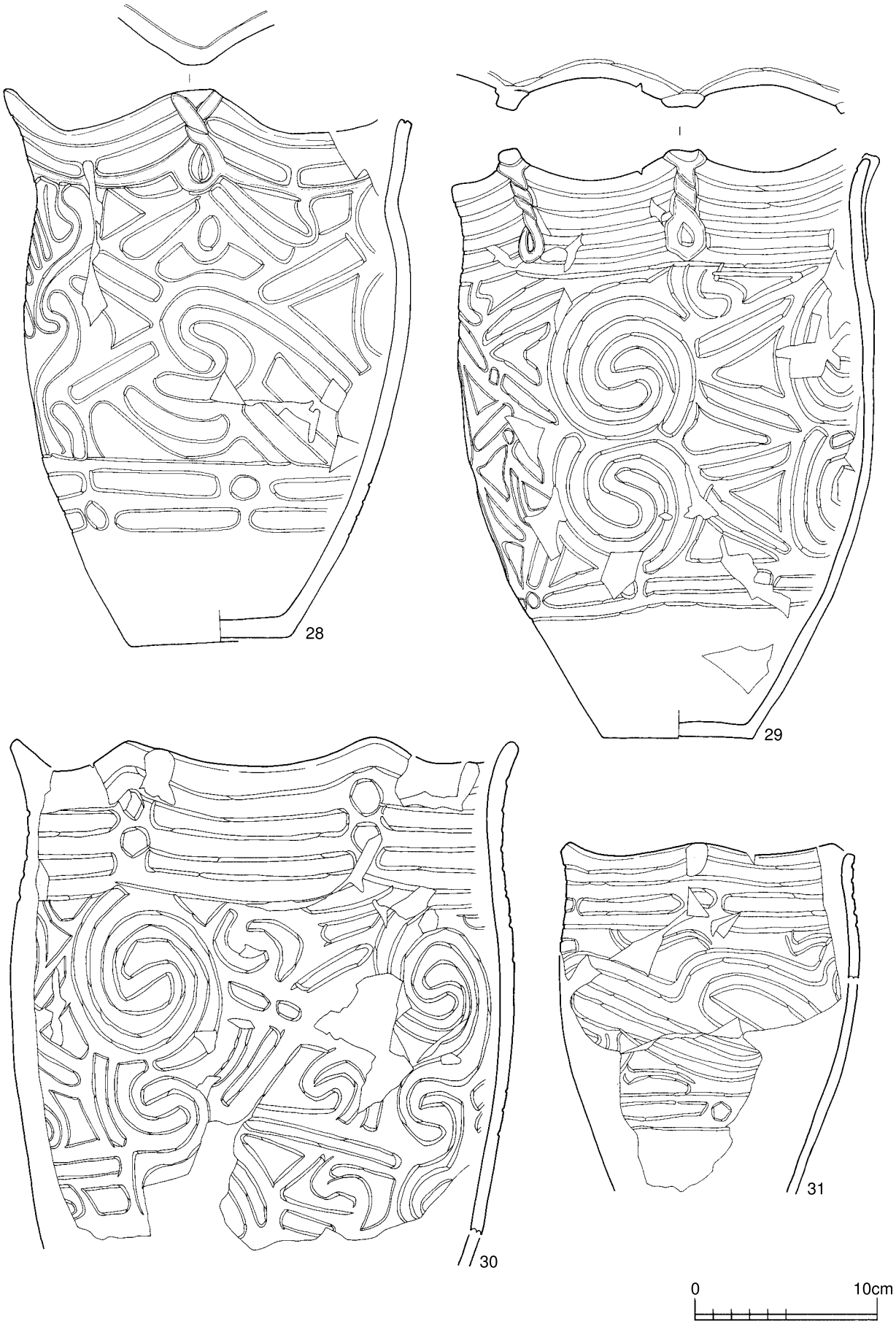
第82図　遺構外出土第Ⅳ群土器(4)



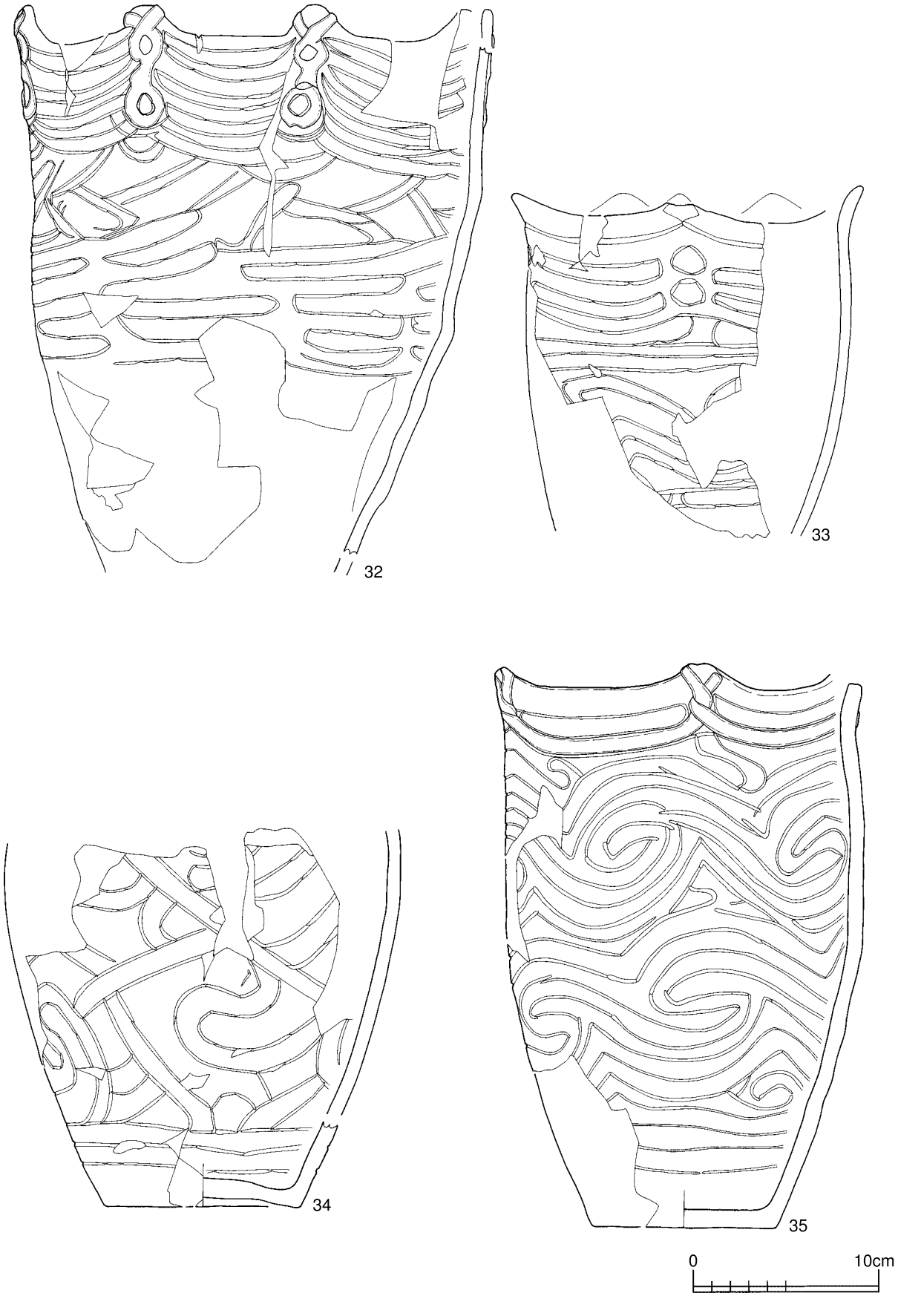
第83図　遺構外出土第Ⅳ群土器(5)



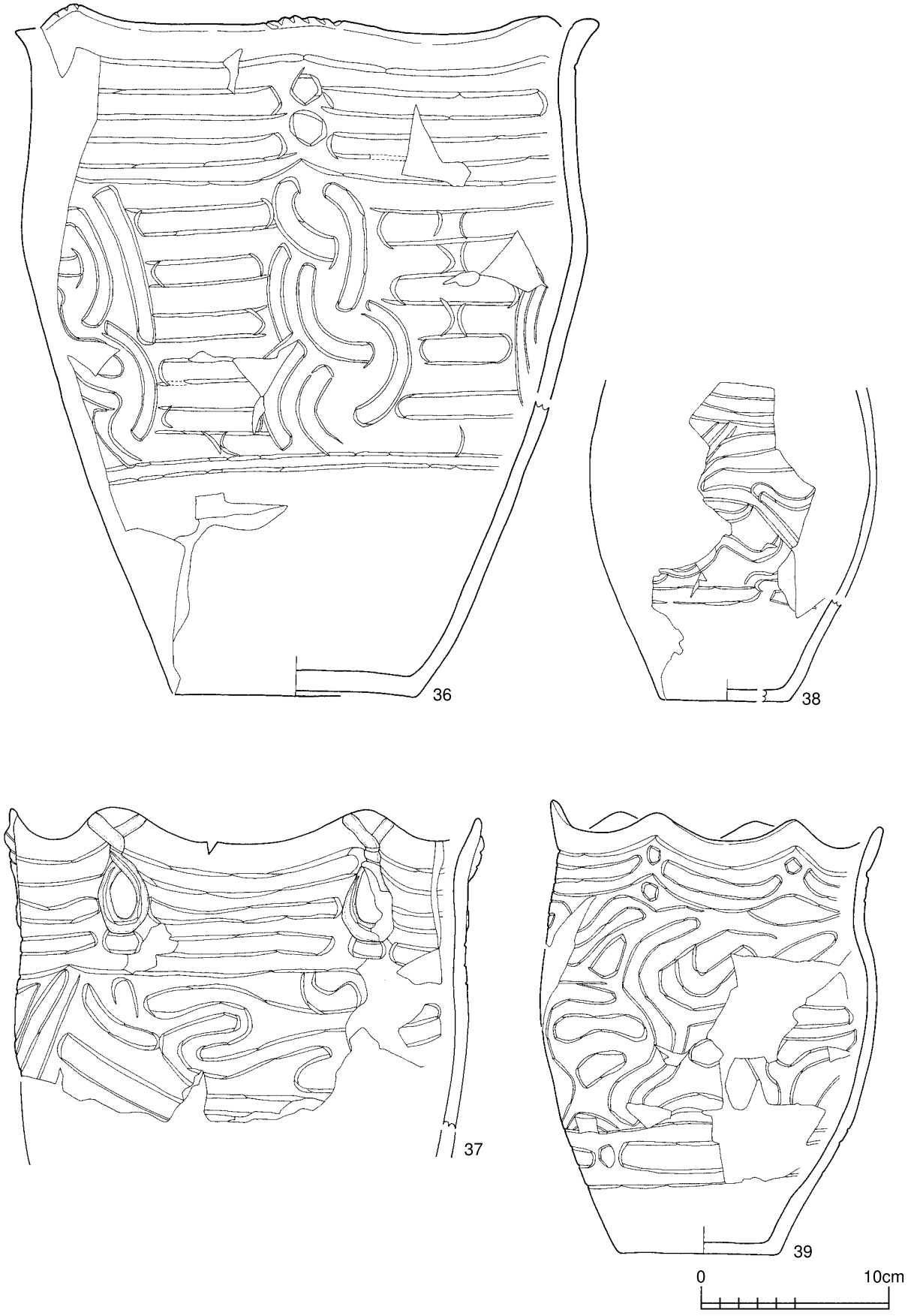
第84図　遺構外出土第Ⅳ群土器(6)



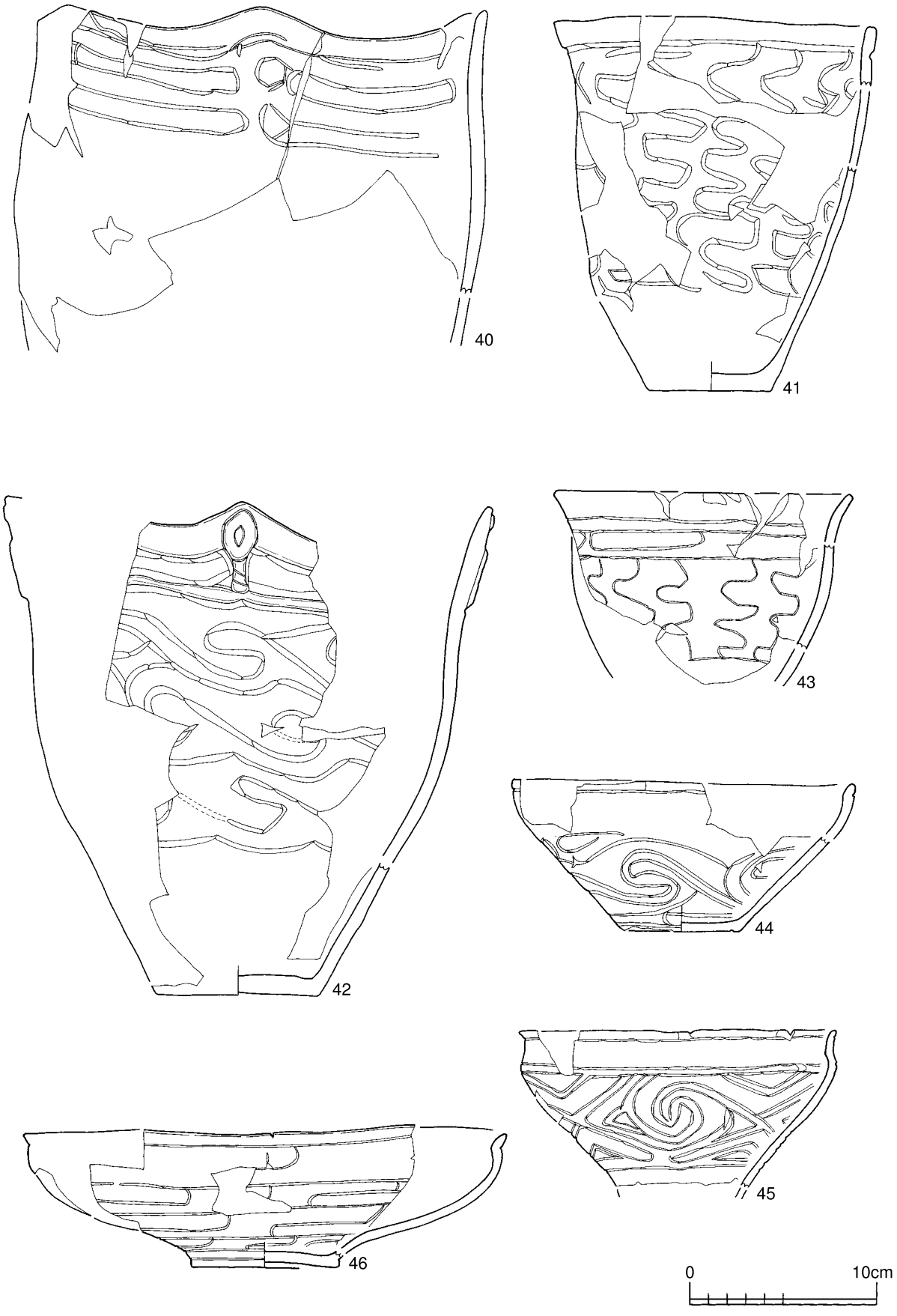
第85図　遺構外出土第Ⅳ群土器(7)



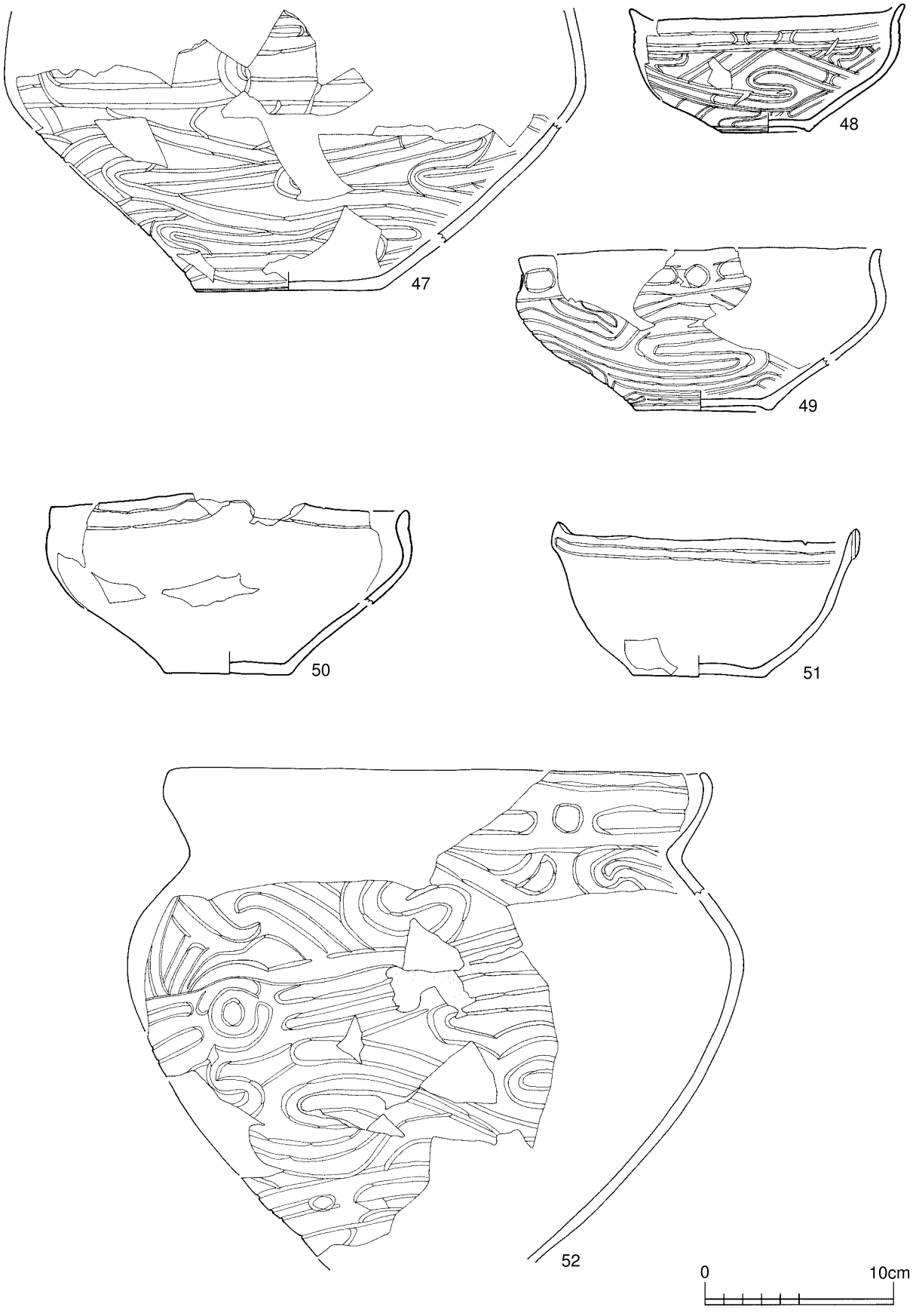
第86図　遺構外出土第Ⅳ群土器(8)



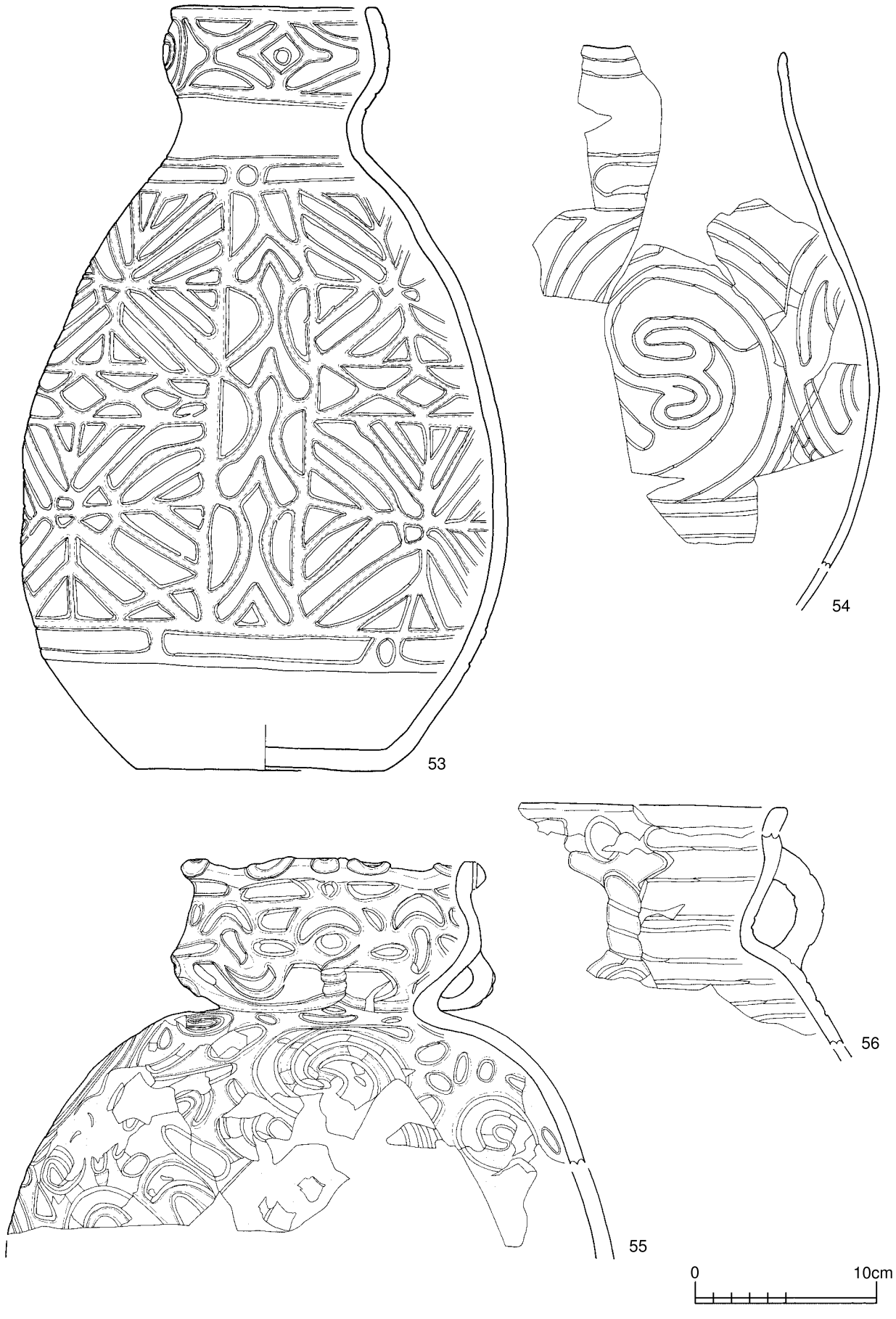
第87図　遺構外出土第Ⅳ群土器(9)



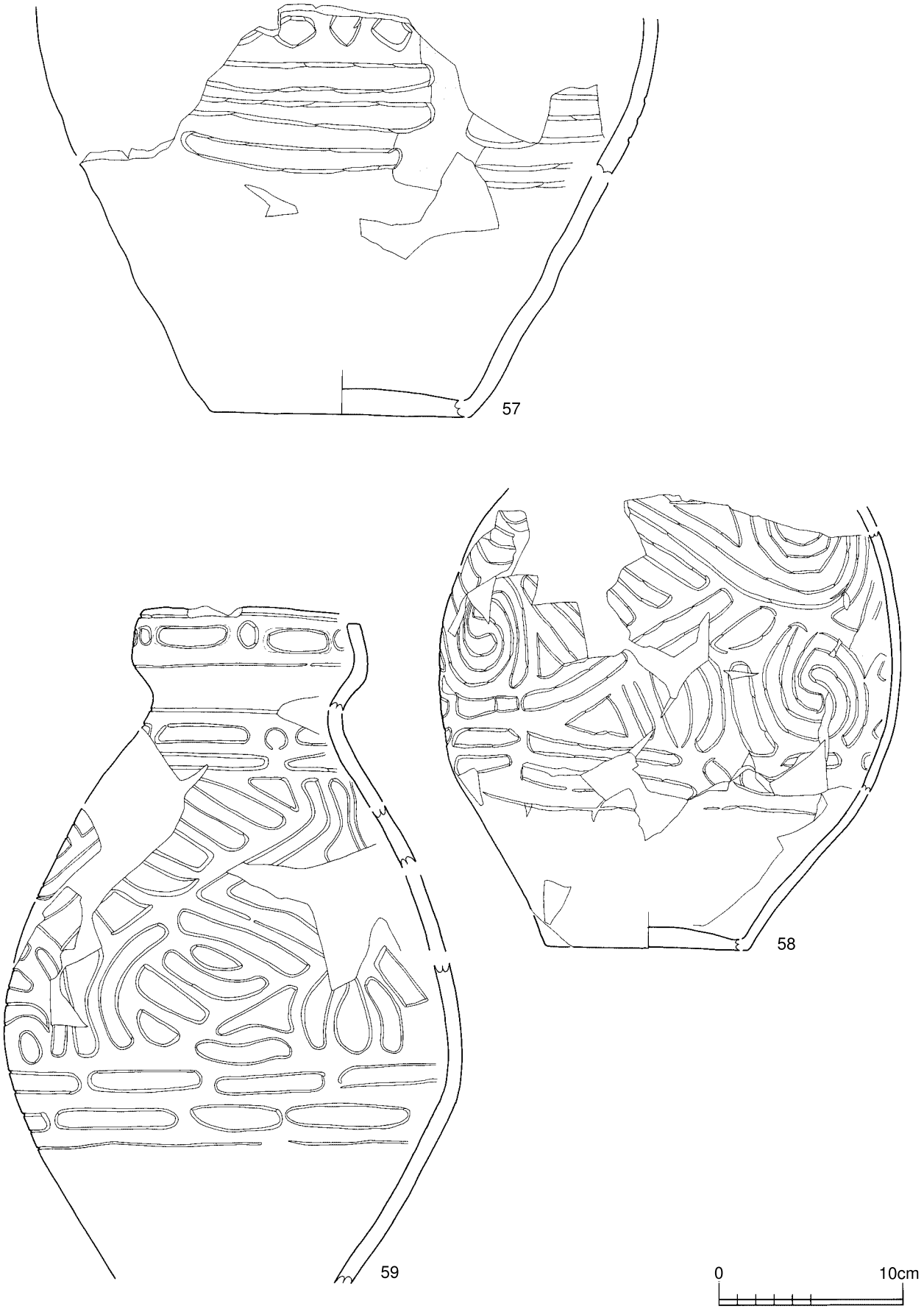
第88図　遺構外出土第Ⅳ群土器（10）



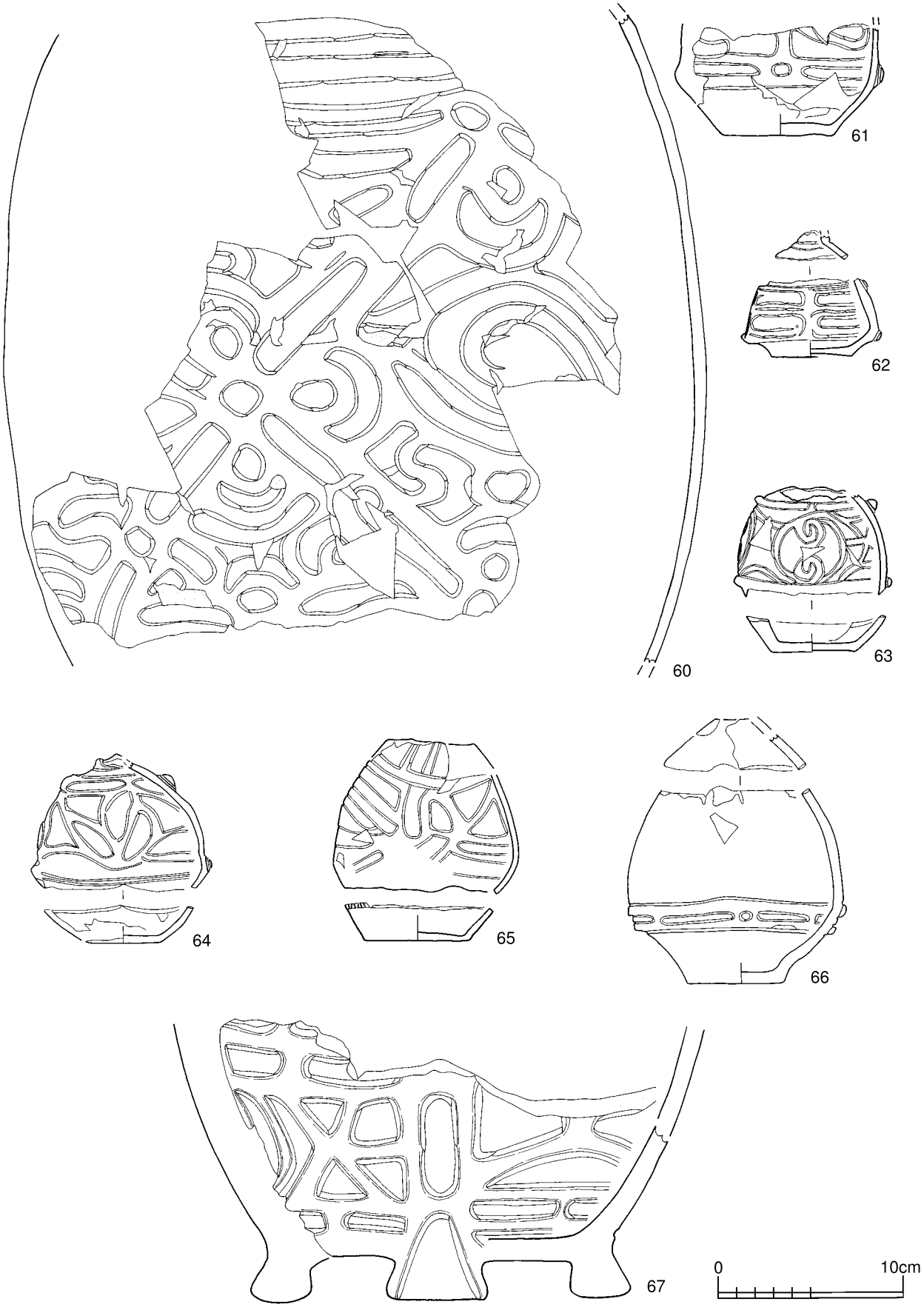
第89図　遺構外出土第Ⅳ群土器（11）



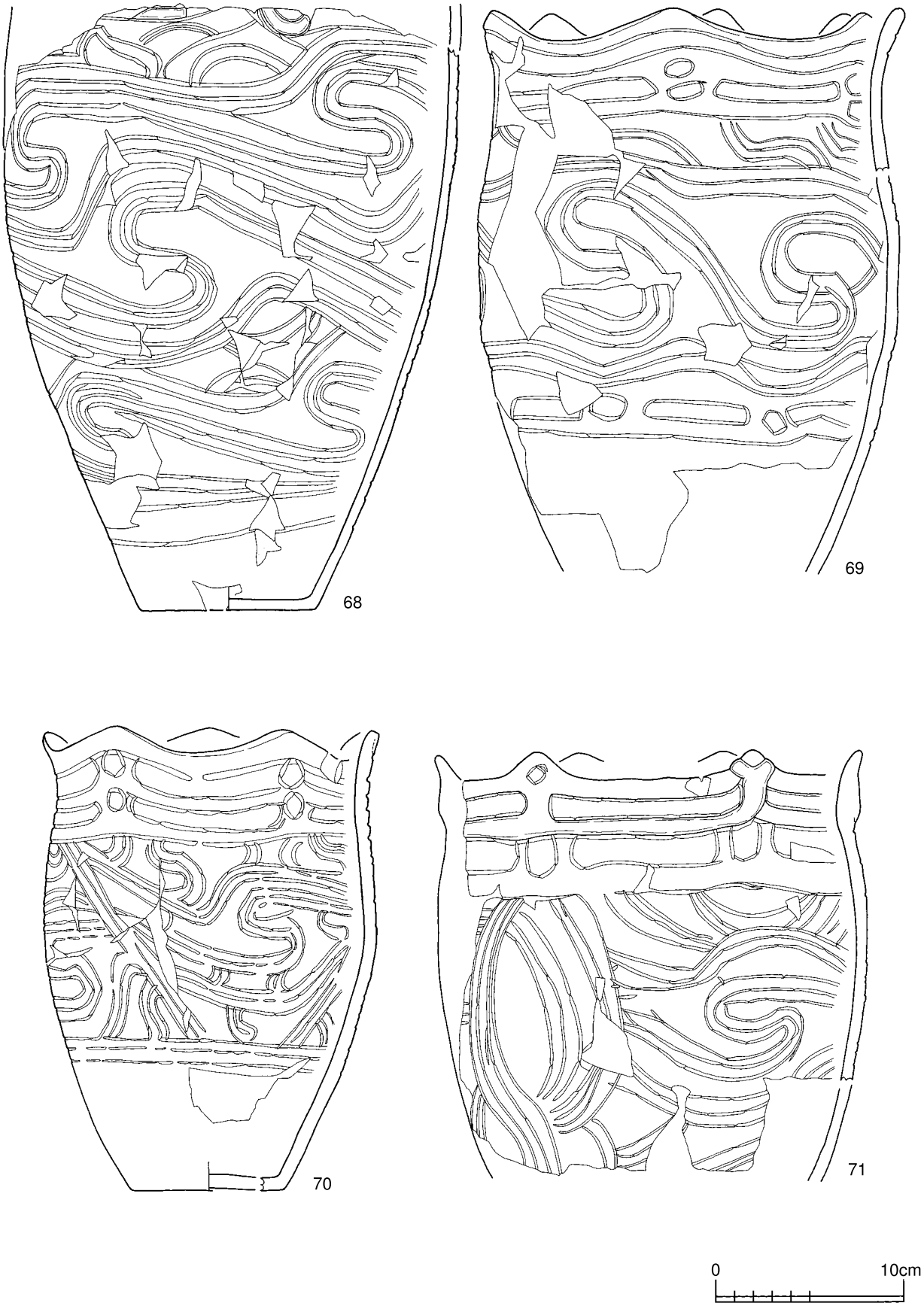
第90図　遺構外出土第Ⅳ群土器（12）



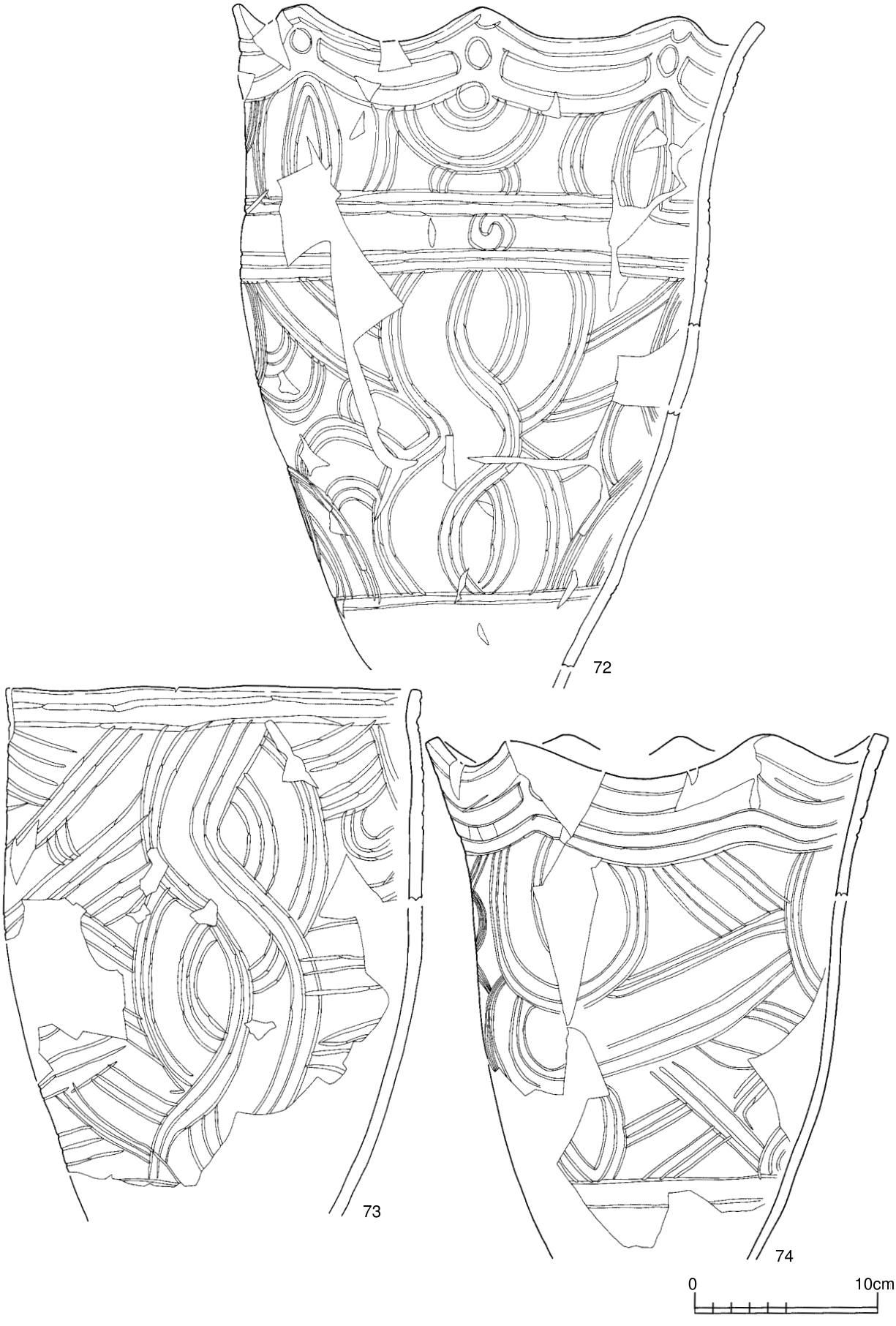
第91図　遺構外出土第Ⅳ群土器（13）



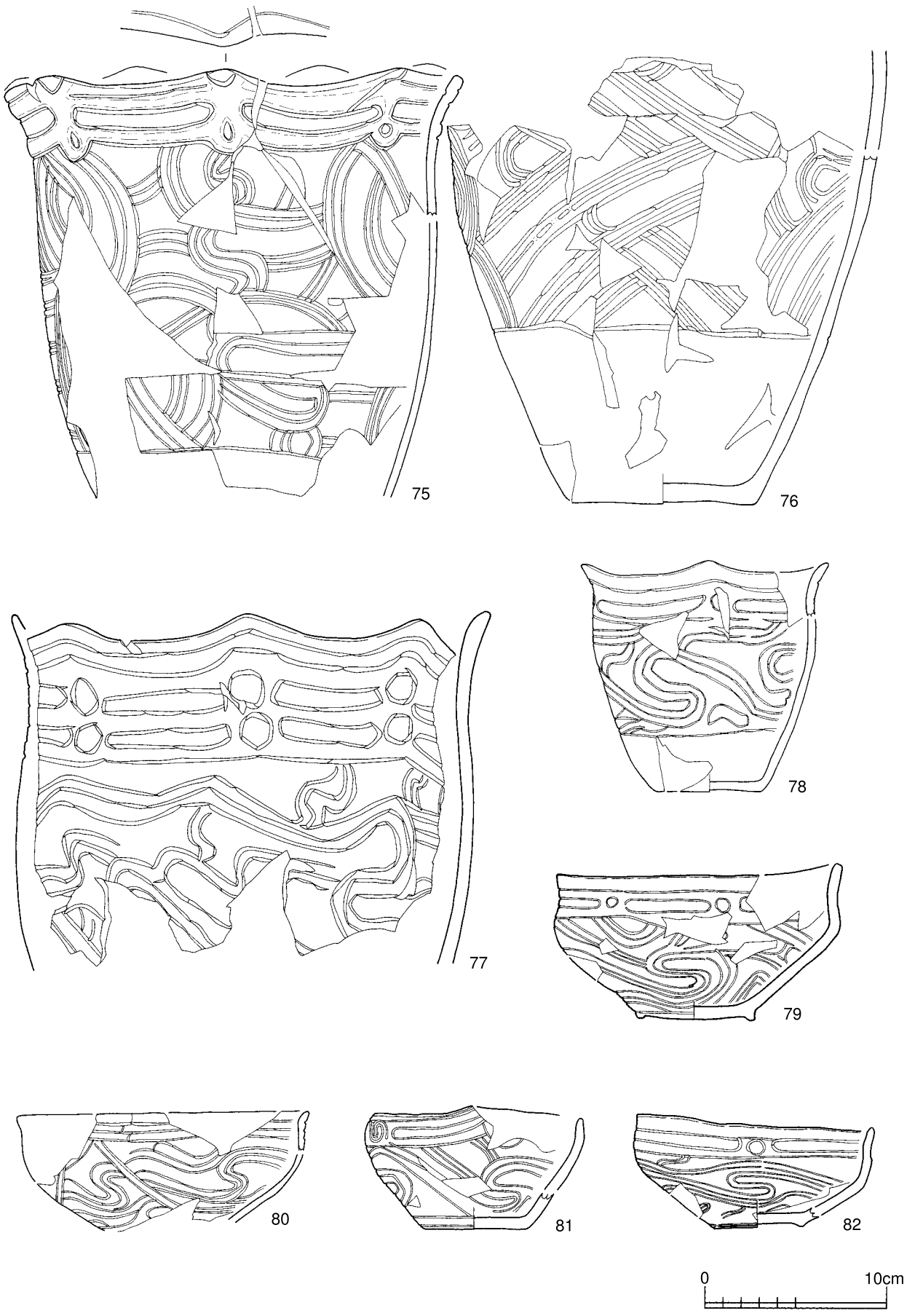
第92図　遺構外出土第Ⅳ群土器（14）



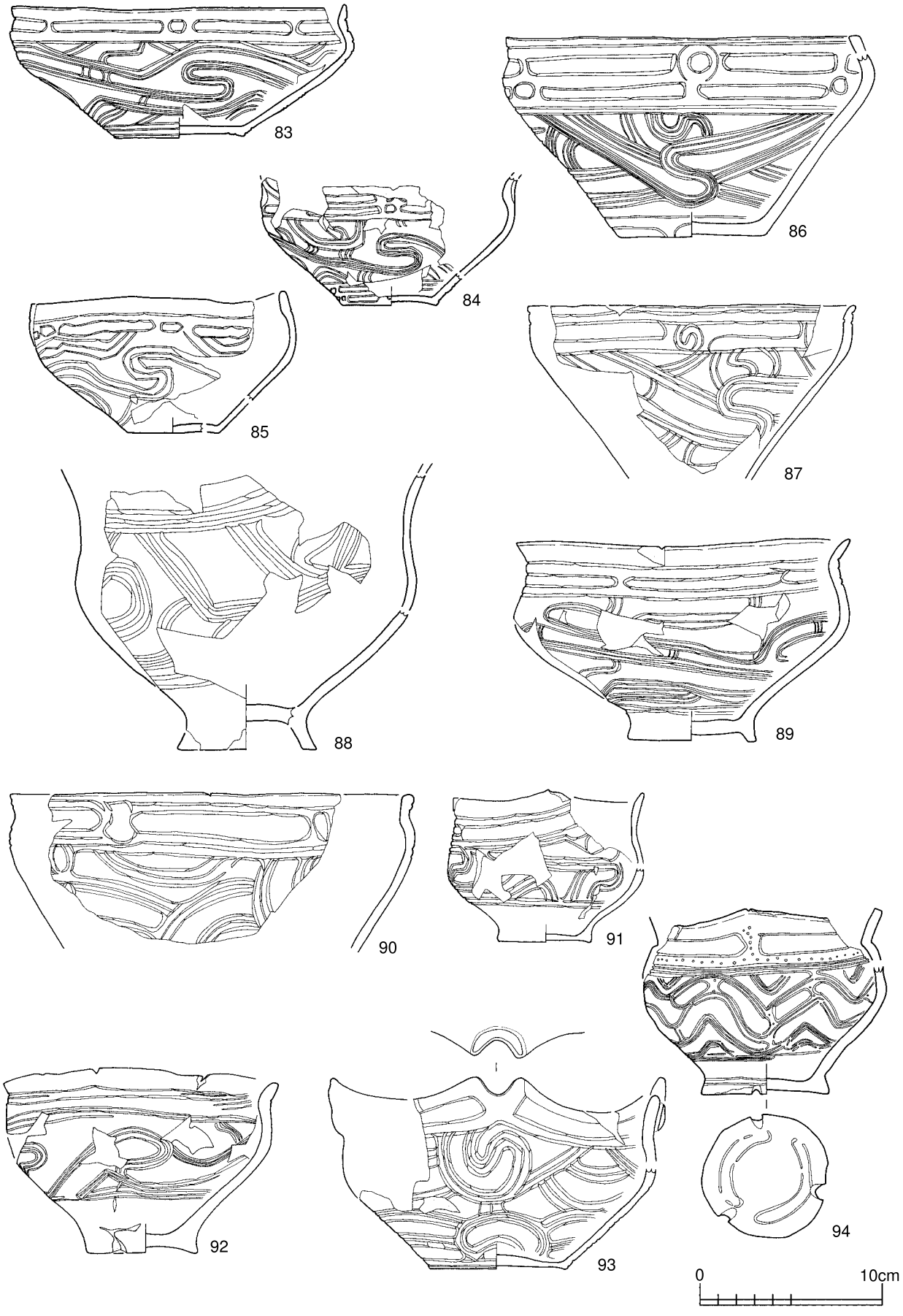
第93図　遺構外出土第Ⅳ群土器（15）



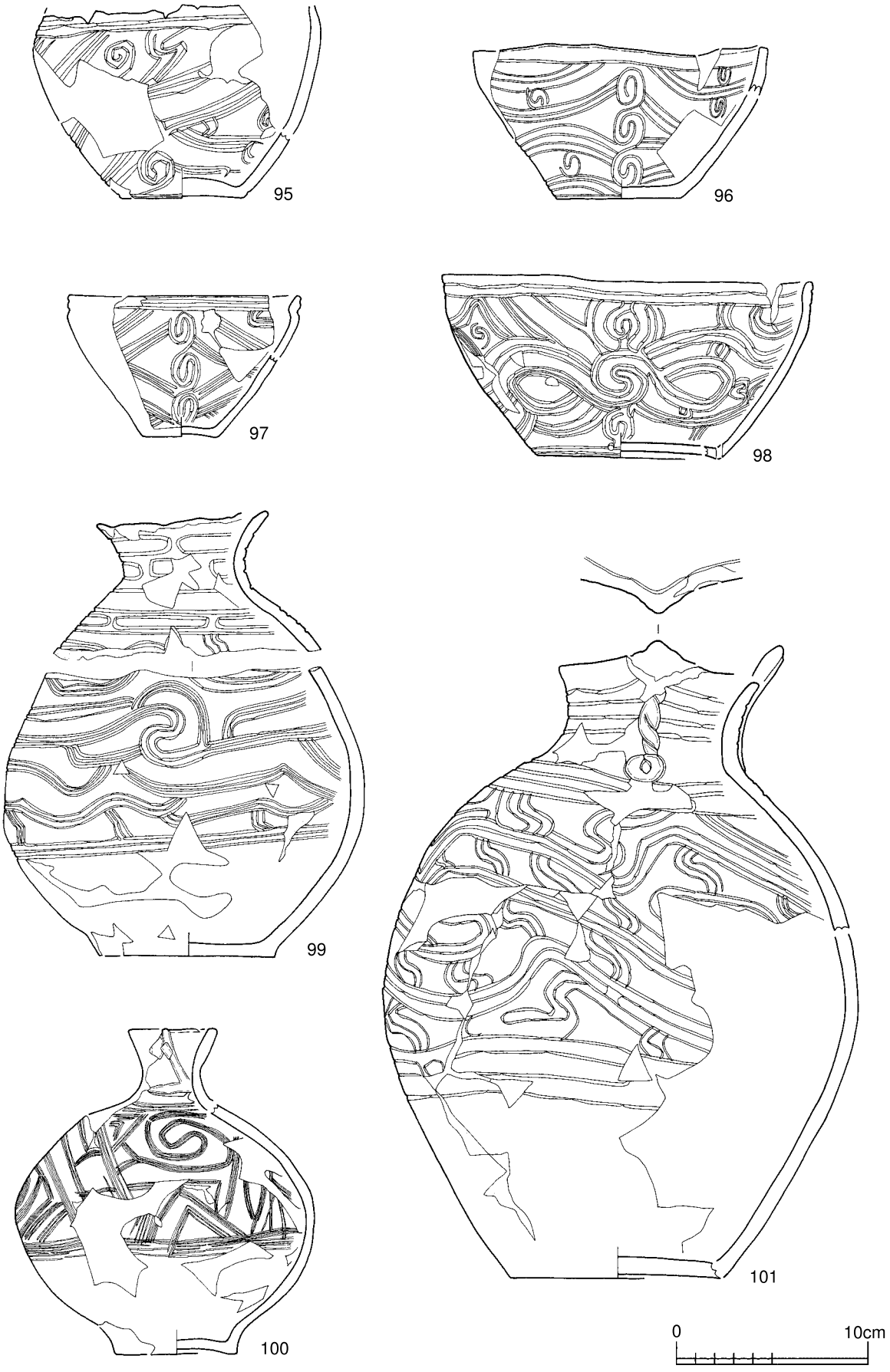
第94図　遺構外出土第Ⅳ群土器（16）



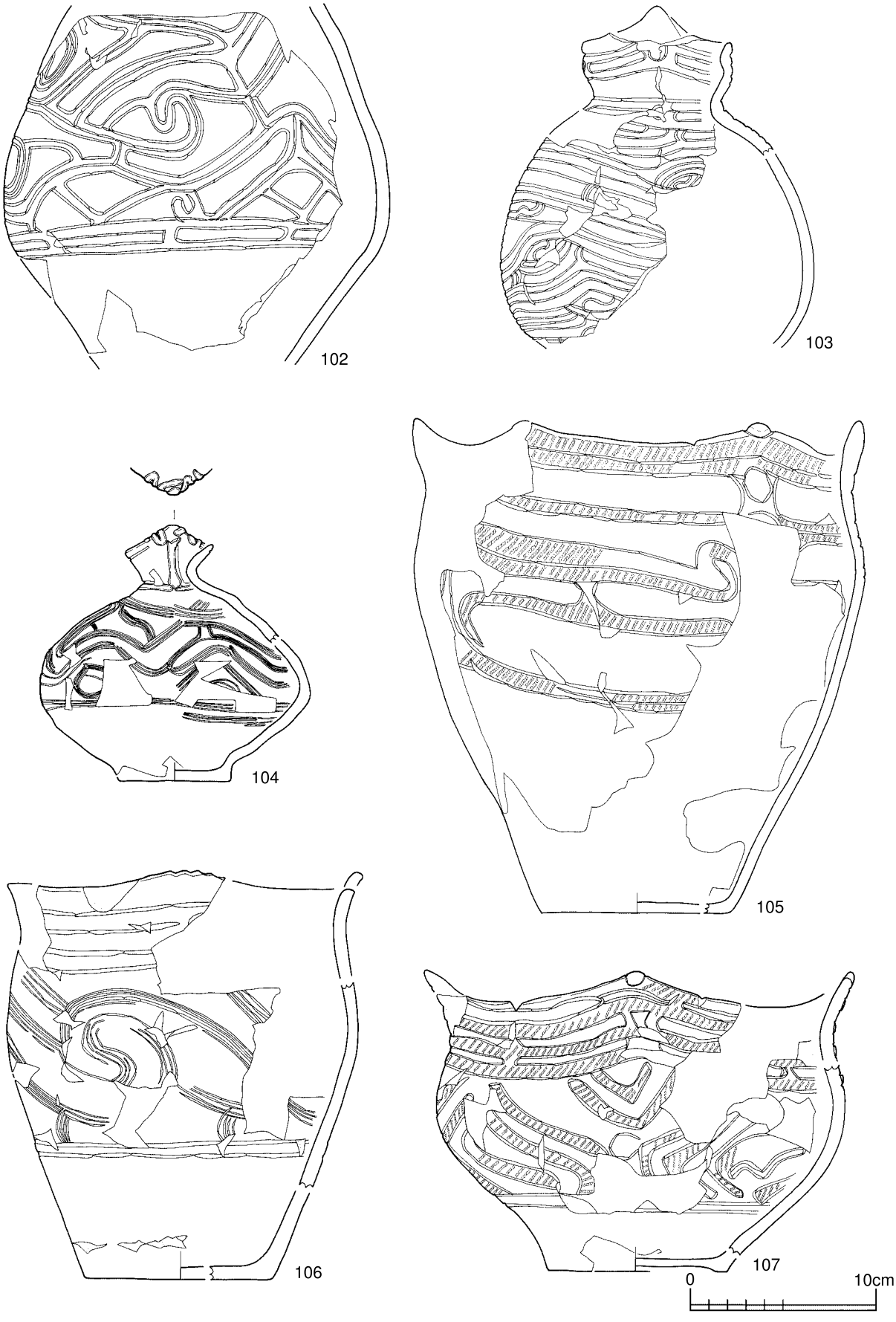
第95図　遺構外出土第Ⅳ群土器（17）



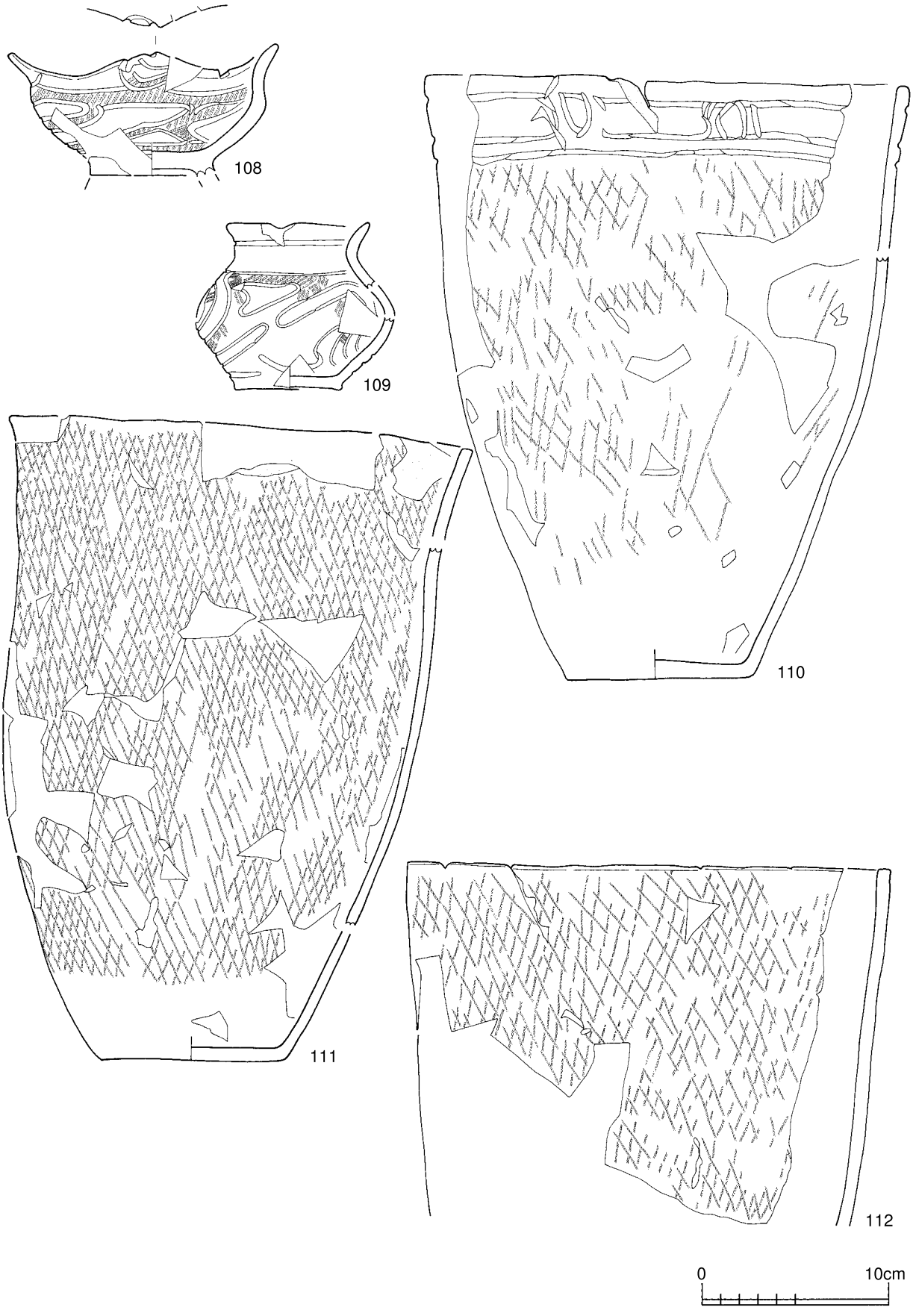
第96図　遺構外出土第Ⅳ群土器（18）



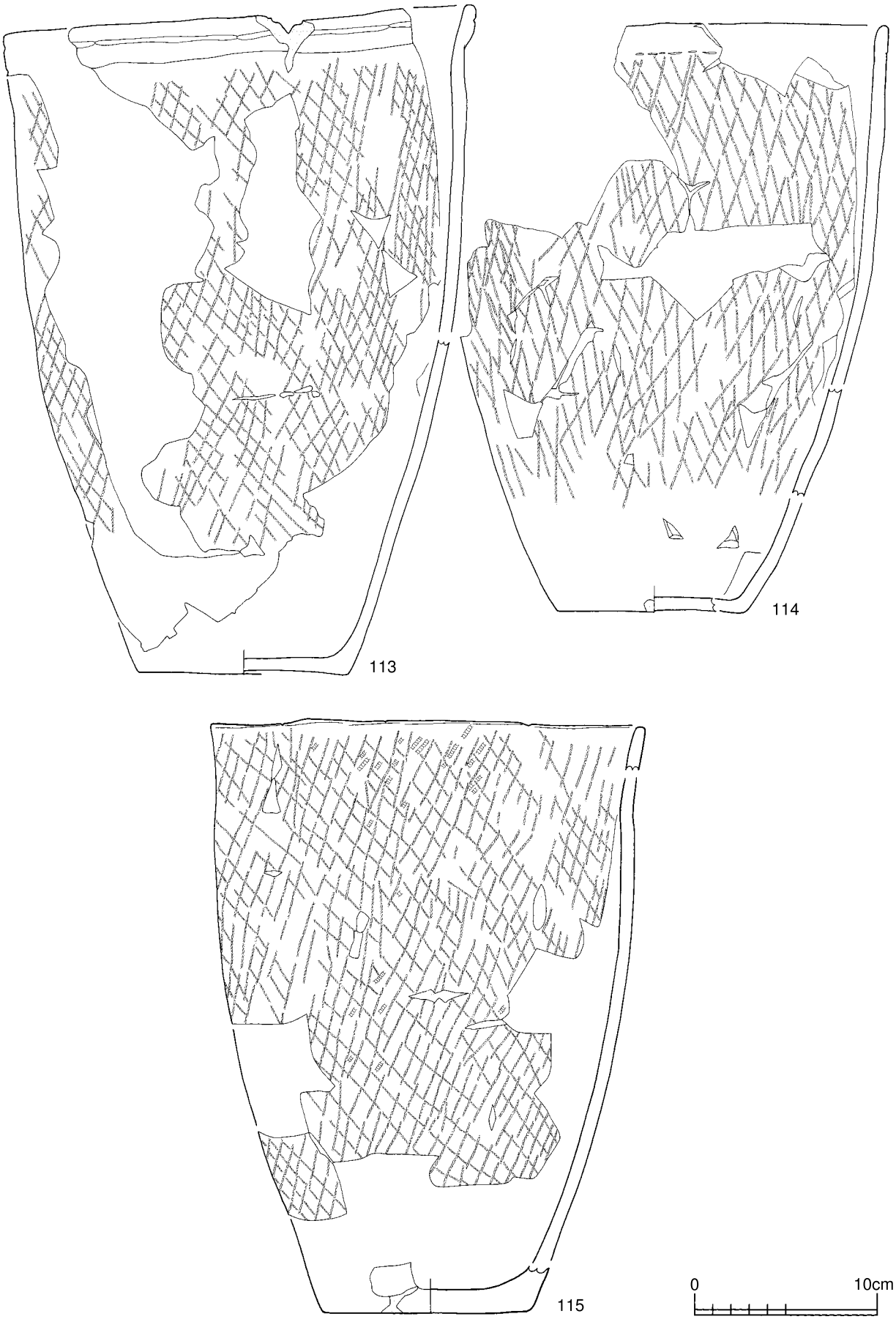
第97図　遺構外出土第Ⅳ群土器（19）



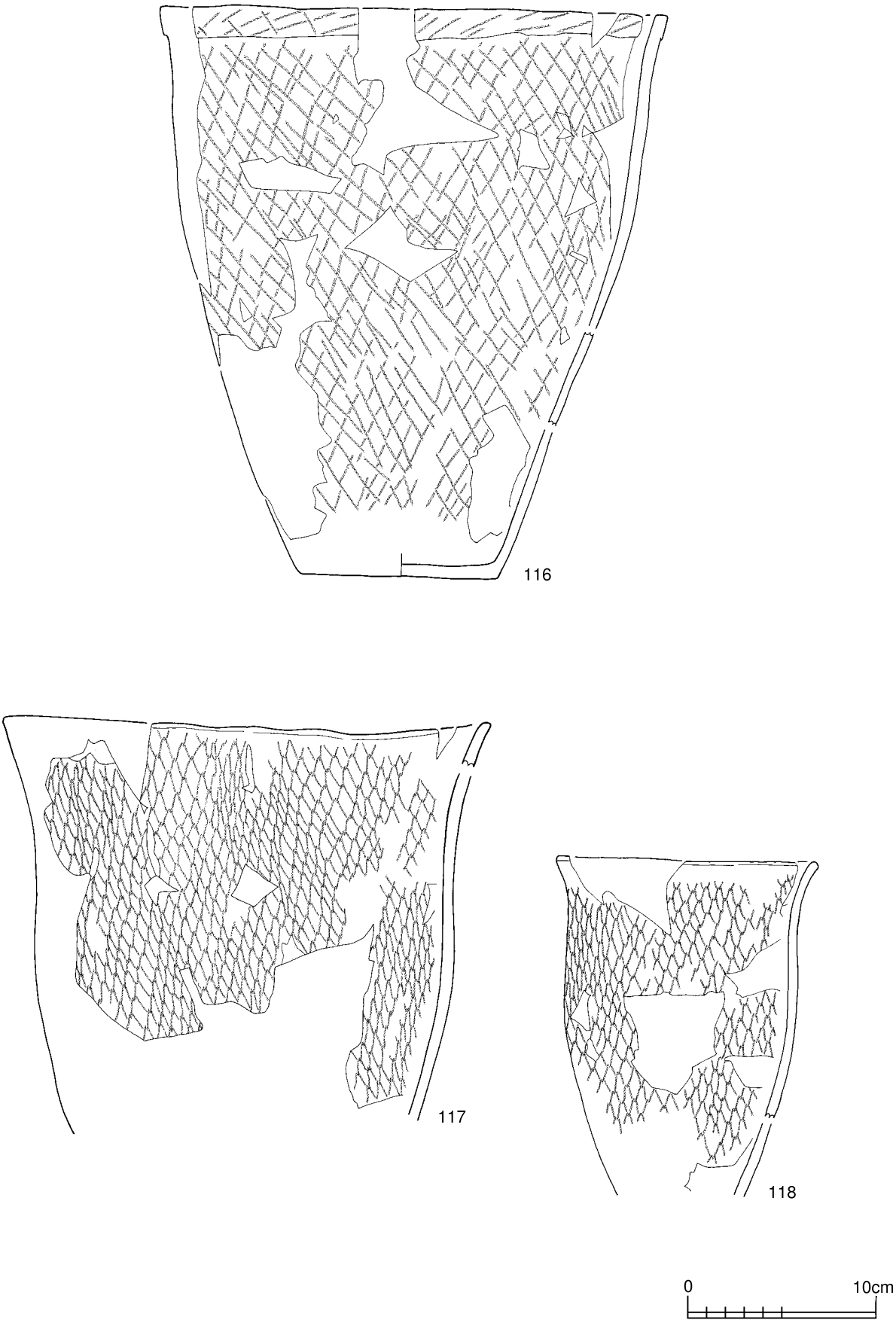
第98図　遺構外出土第Ⅳ群土器（20）



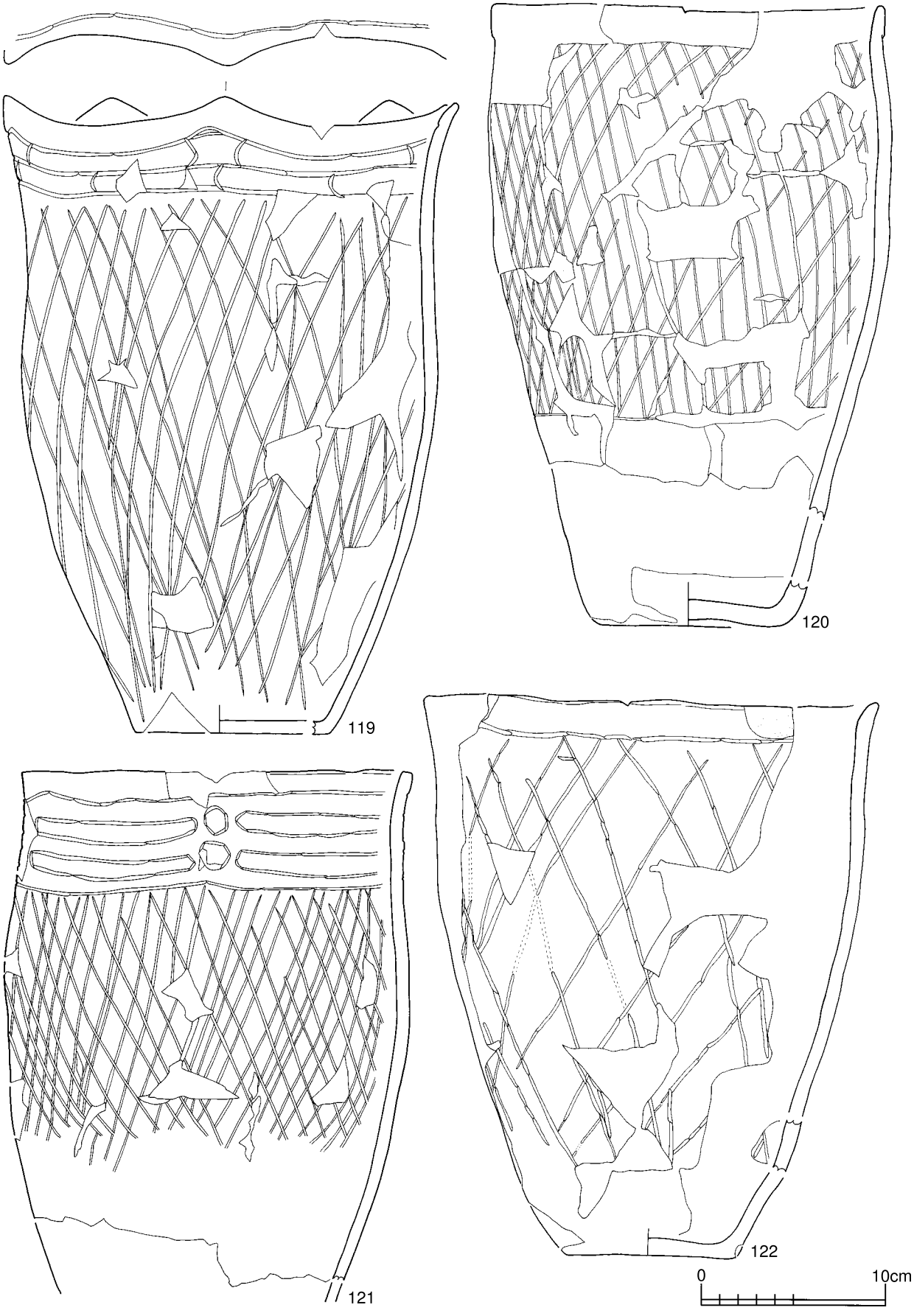
第99図　遺構外出土第Ⅳ群土器（21）



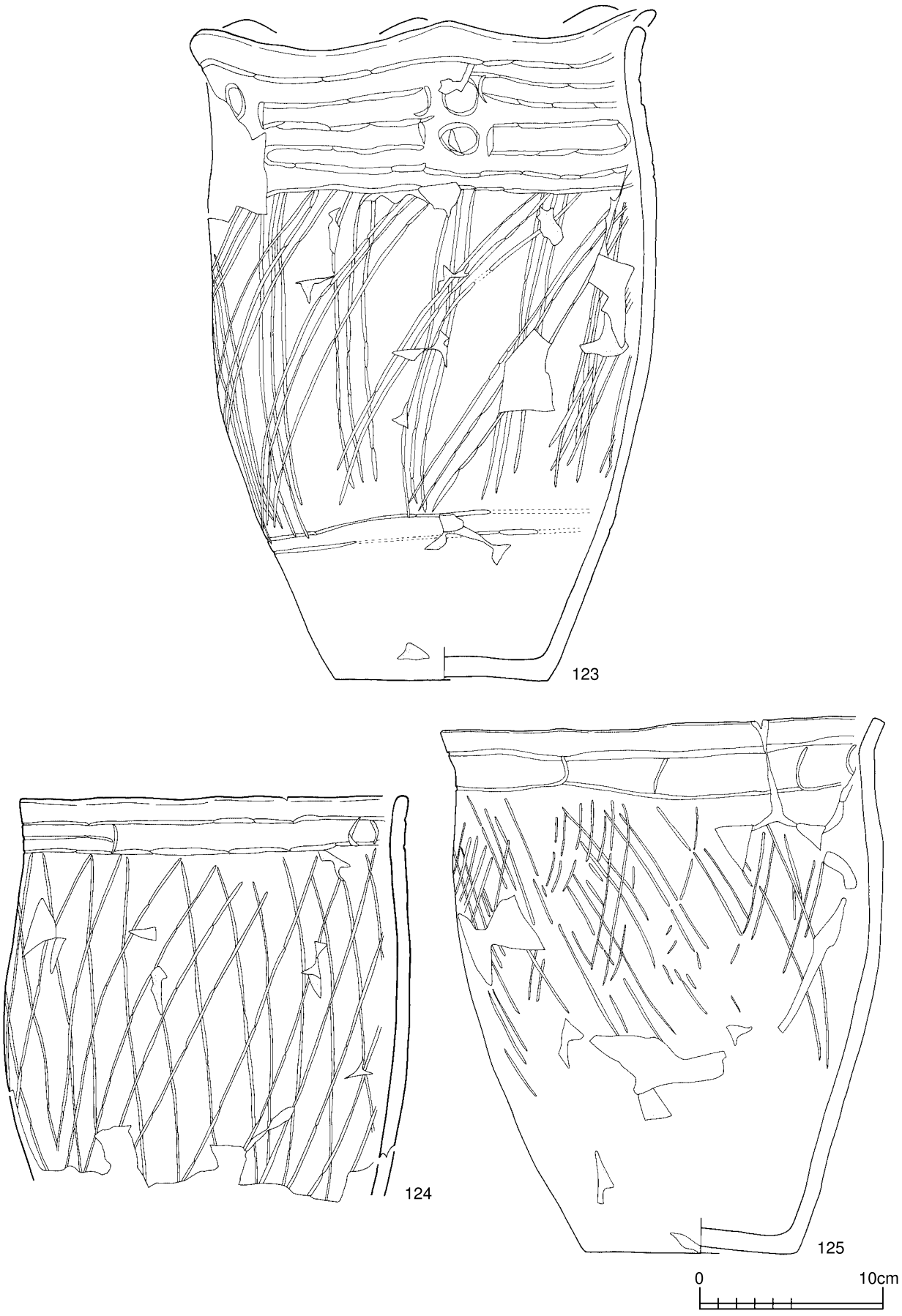
第100図　遺構外出土第Ⅳ群土器（22）



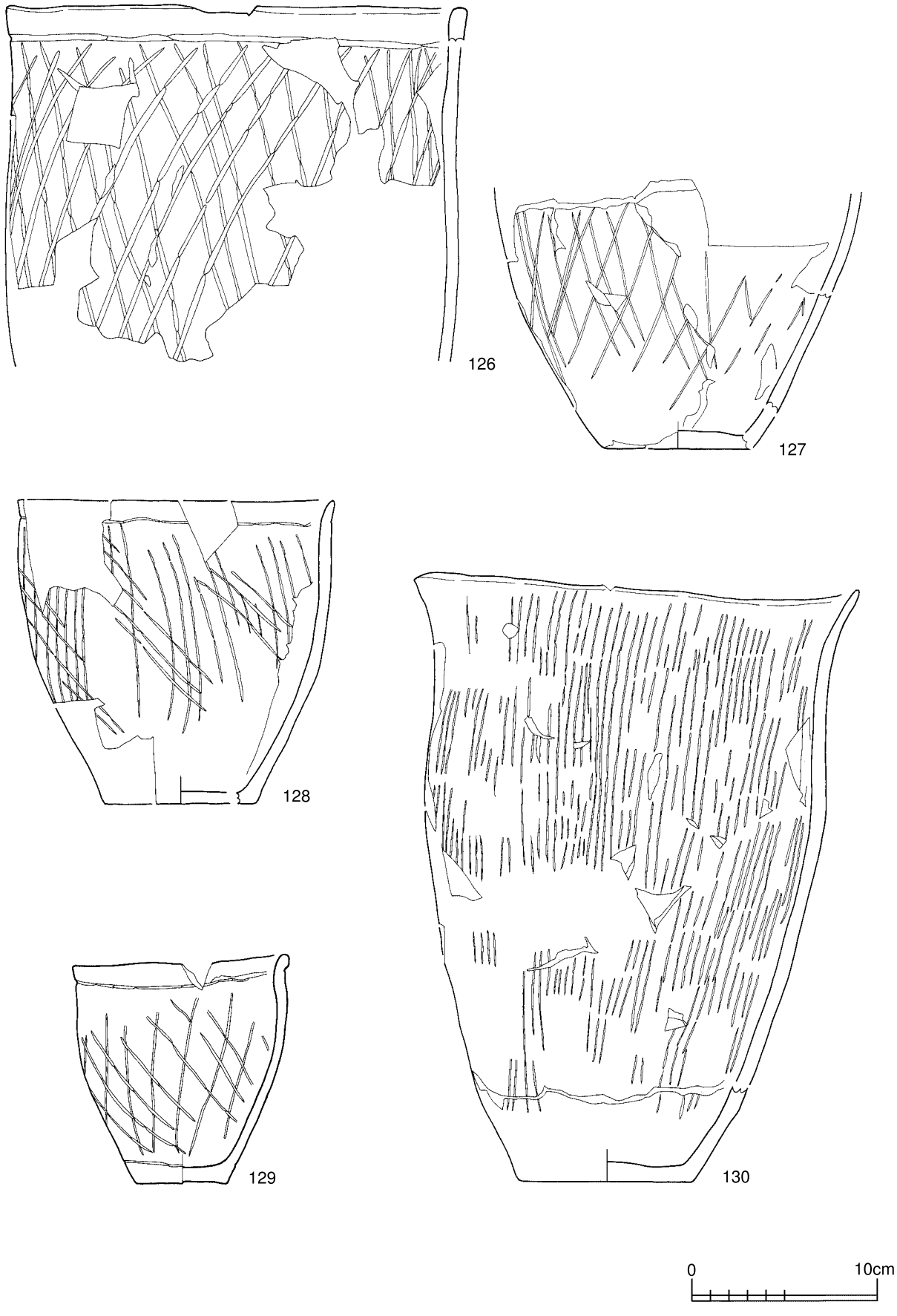
第101図　遺構外出土第Ⅳ群土器(23)



第102図　遺構外出土第Ⅳ群土器（24）

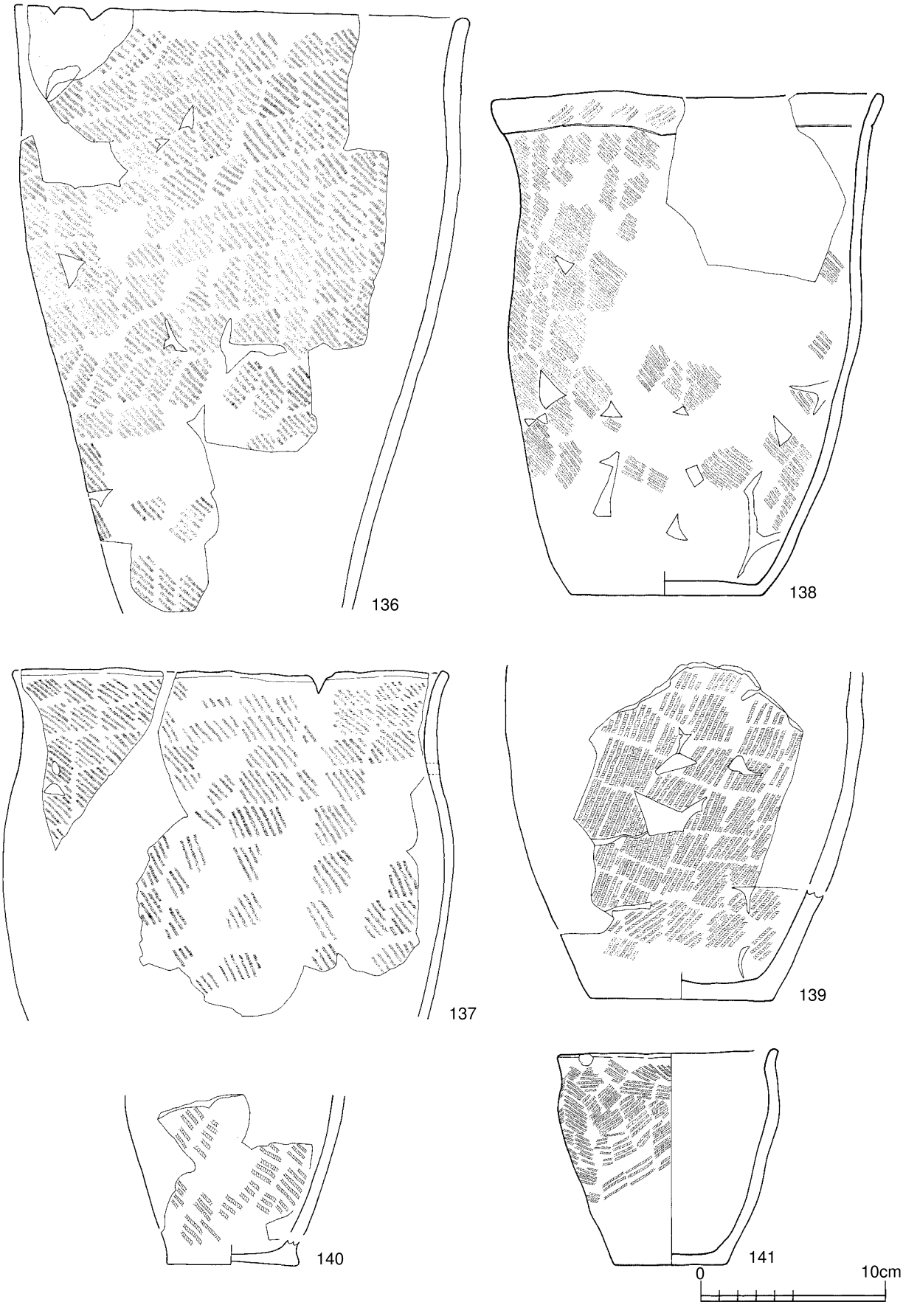


第103図　遺構外出土第Ⅳ群土器（25）

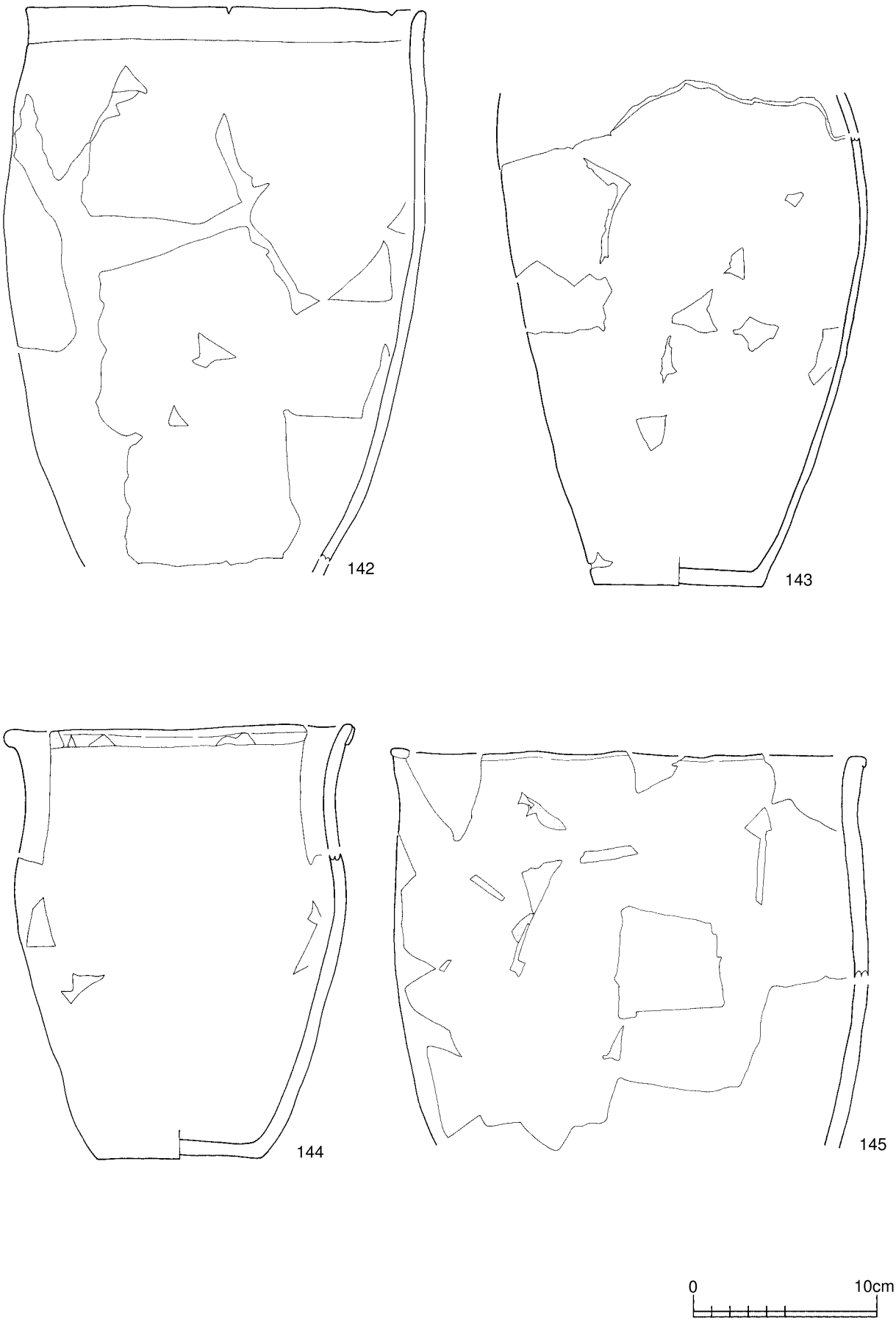


第104図　遺構外出土第Ⅳ群土器(26)

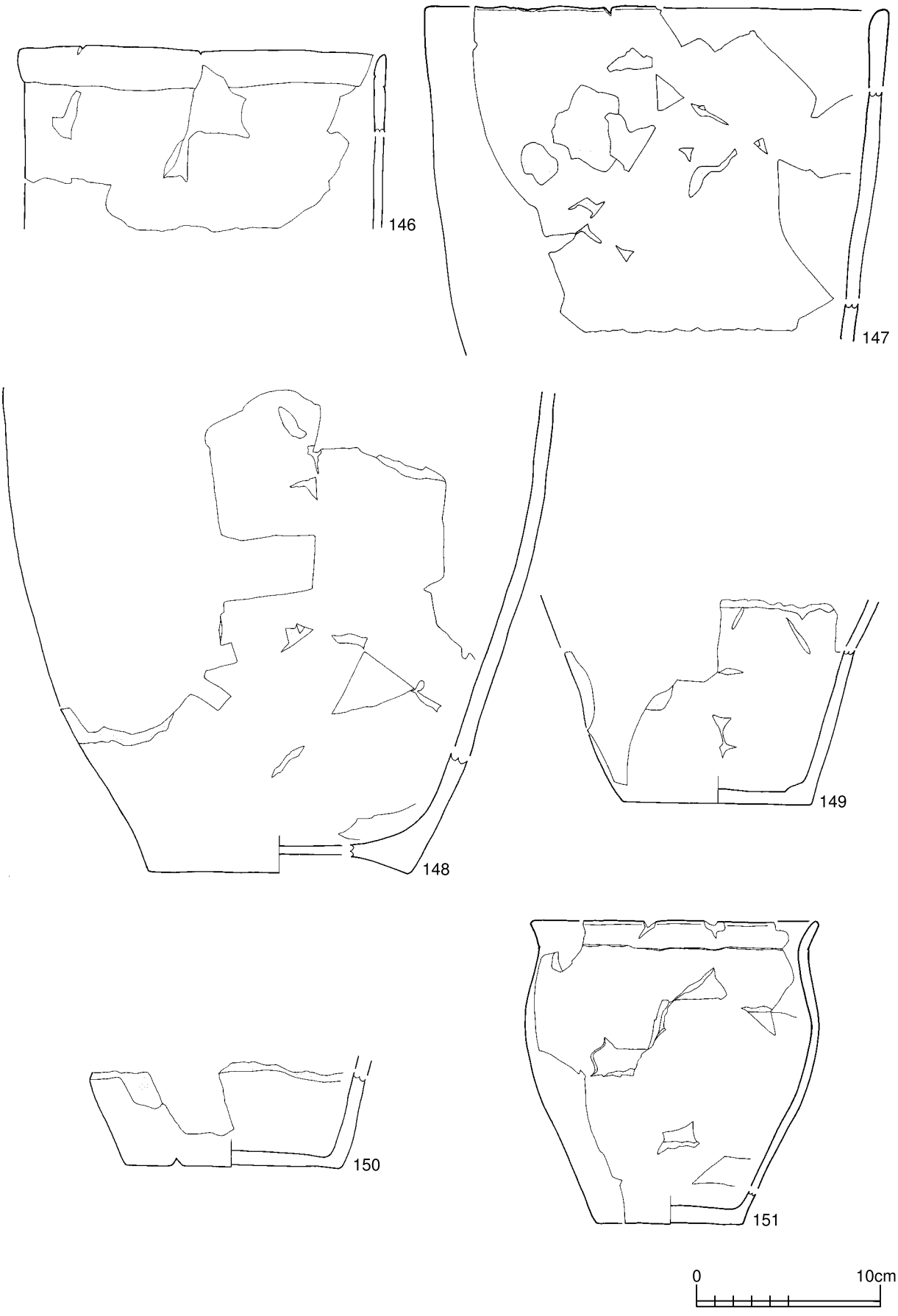
第105図　遺構外出土第Ⅳ群土器（27）



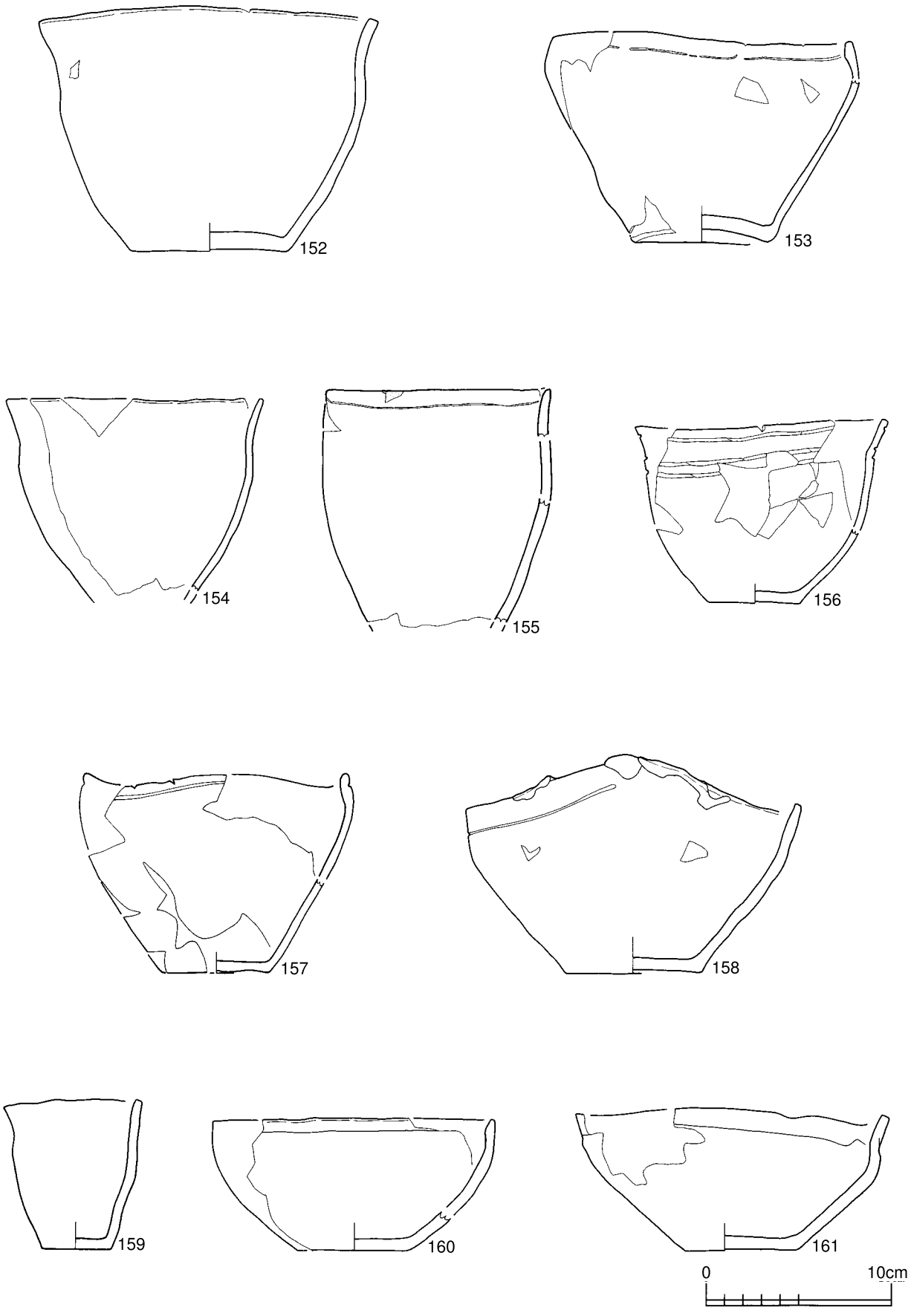
第106図　遺構外出土第Ⅳ群土器（28）



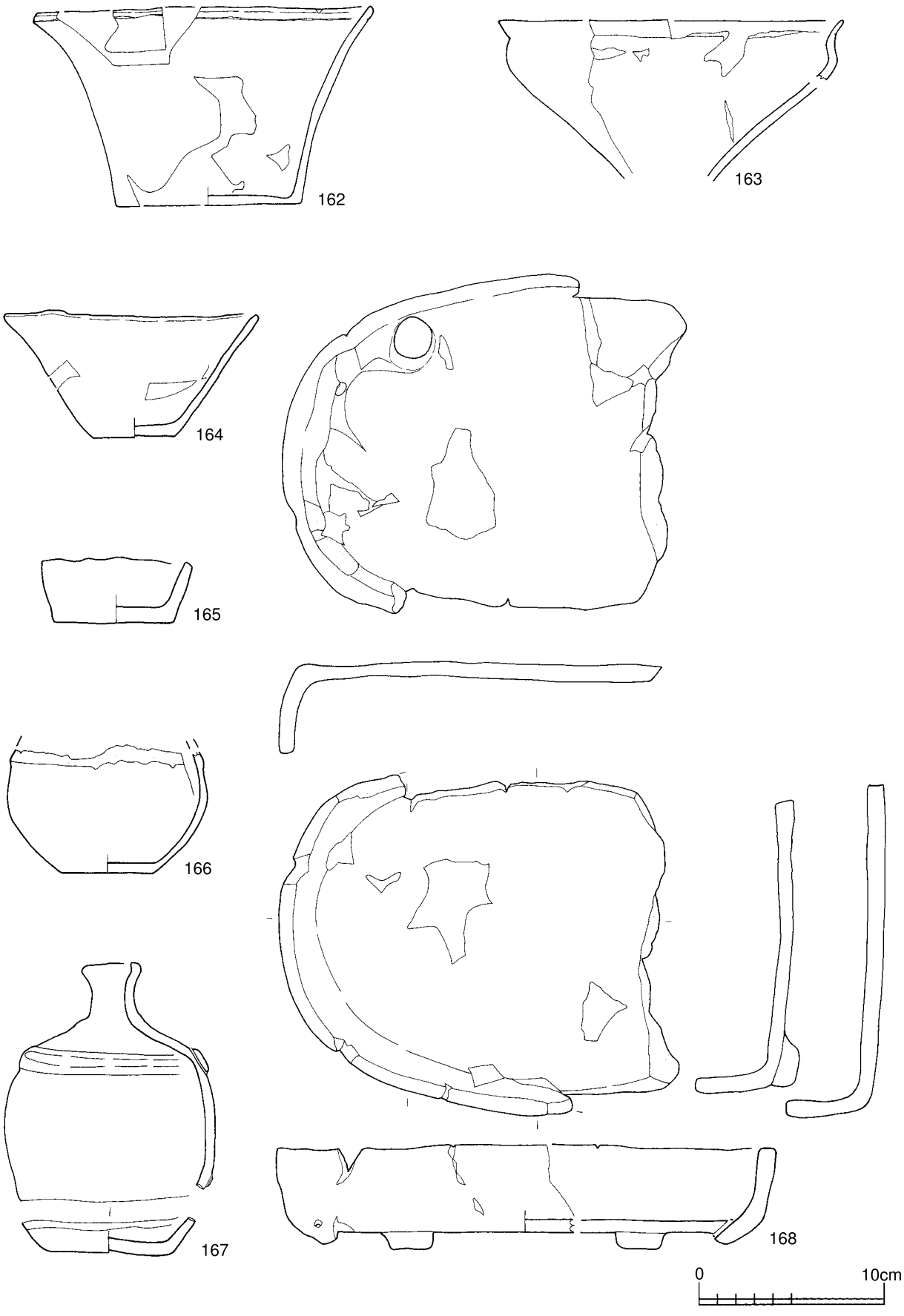
第107図　遺構外出土第Ⅳ群土器（29）



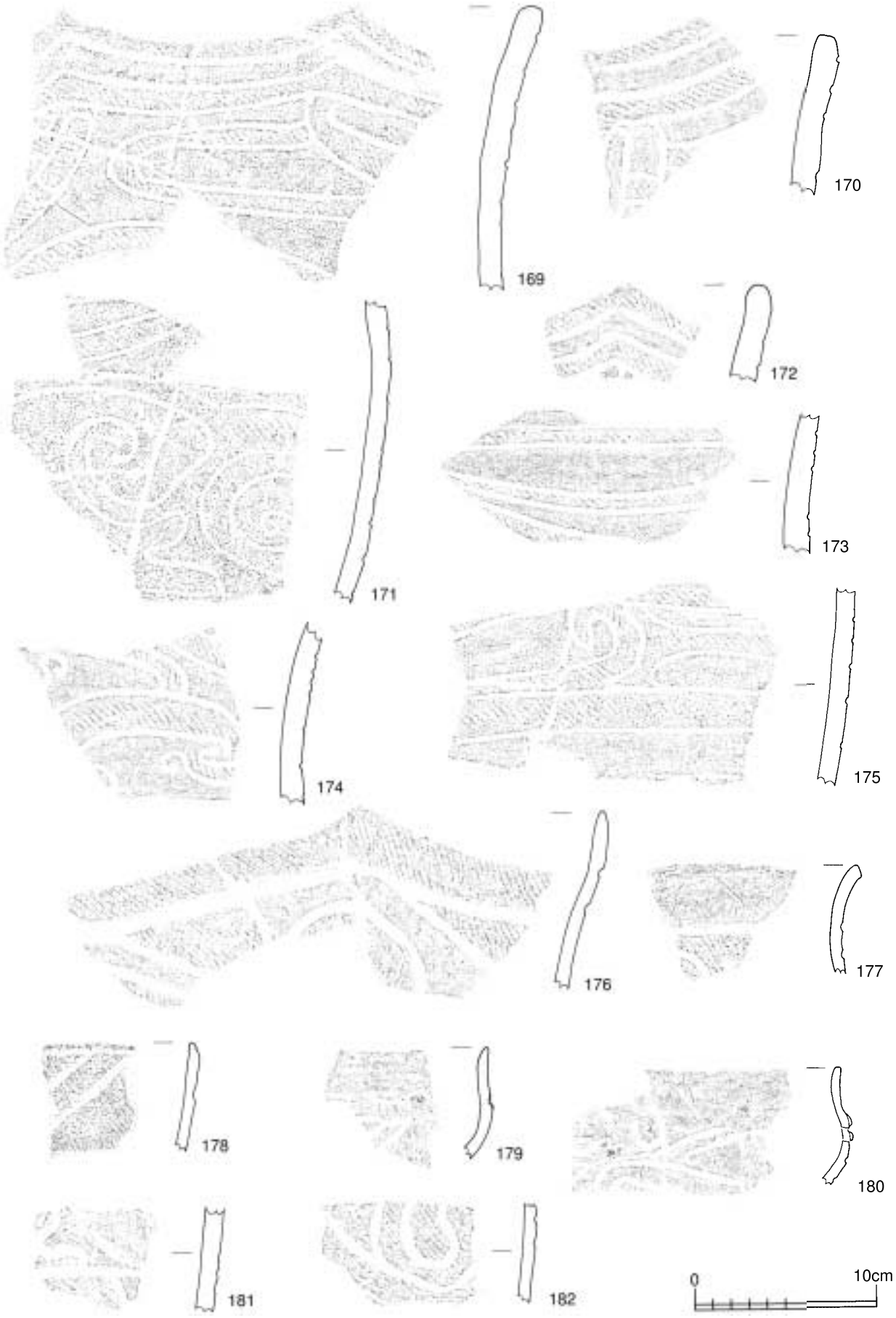
第108図　遺構外出土第Ⅳ群土器（30）



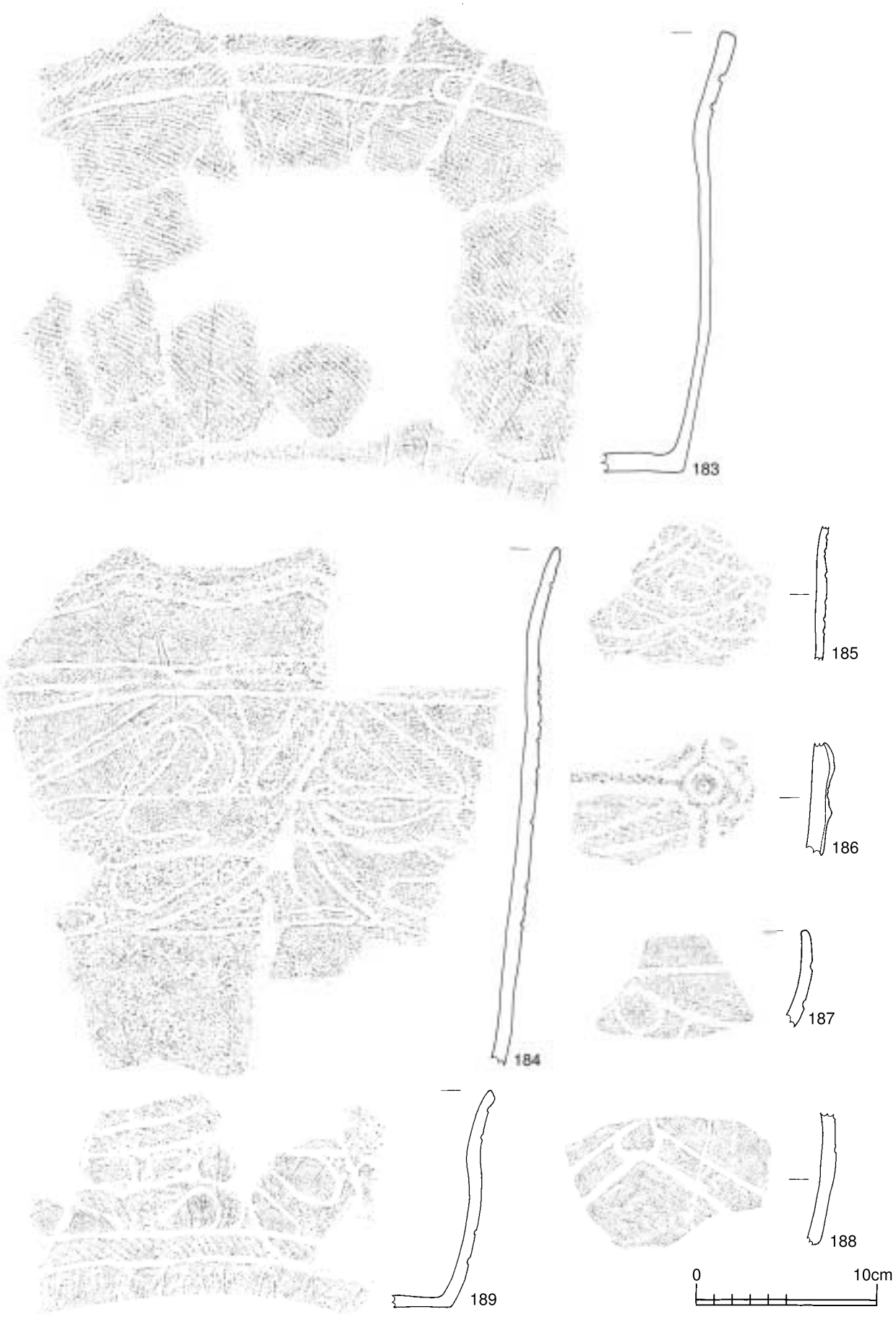
第109図　遺構外出土第Ⅳ群土器（31）



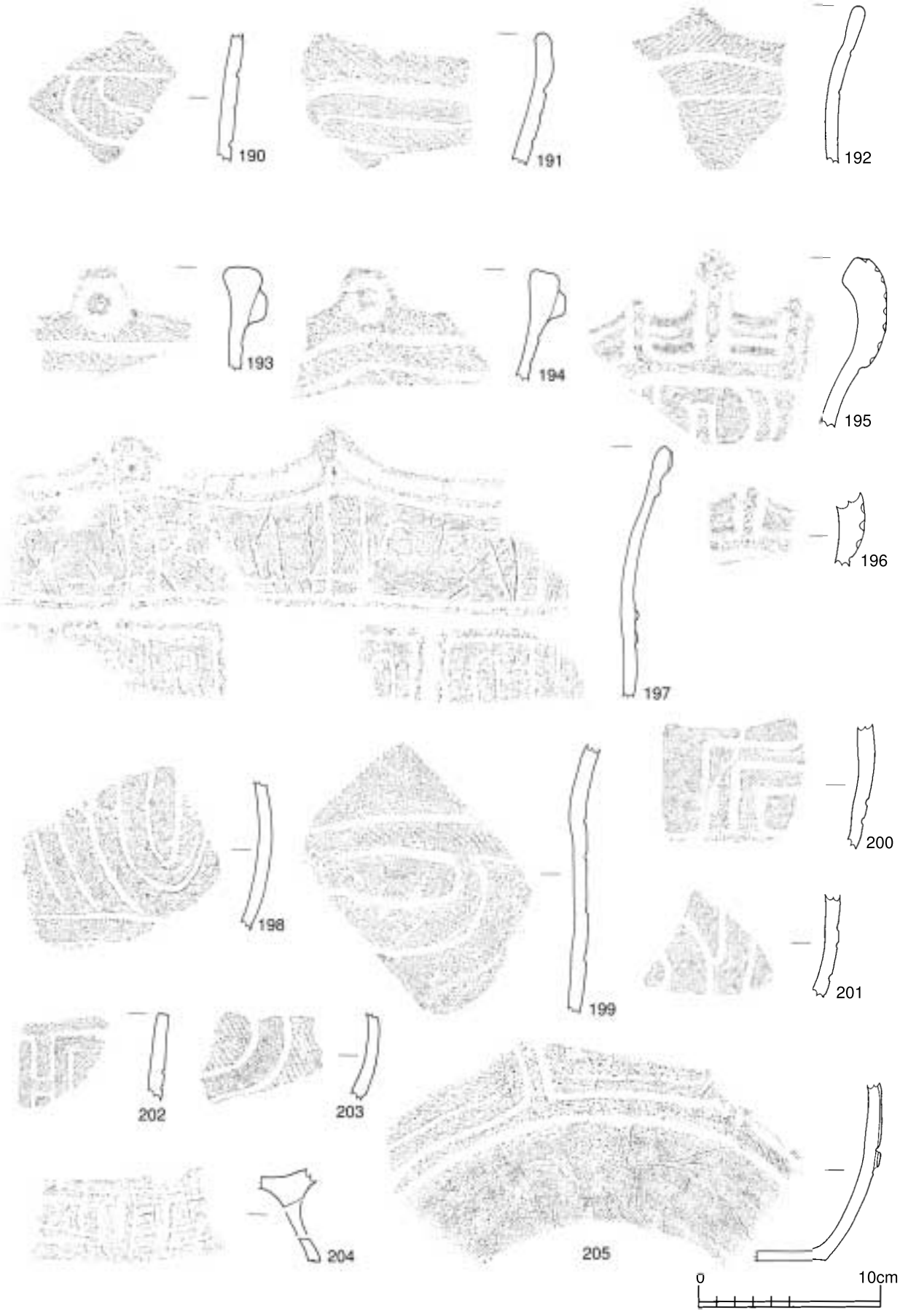
第110図　遺構外出土第Ⅳ群土器(32)



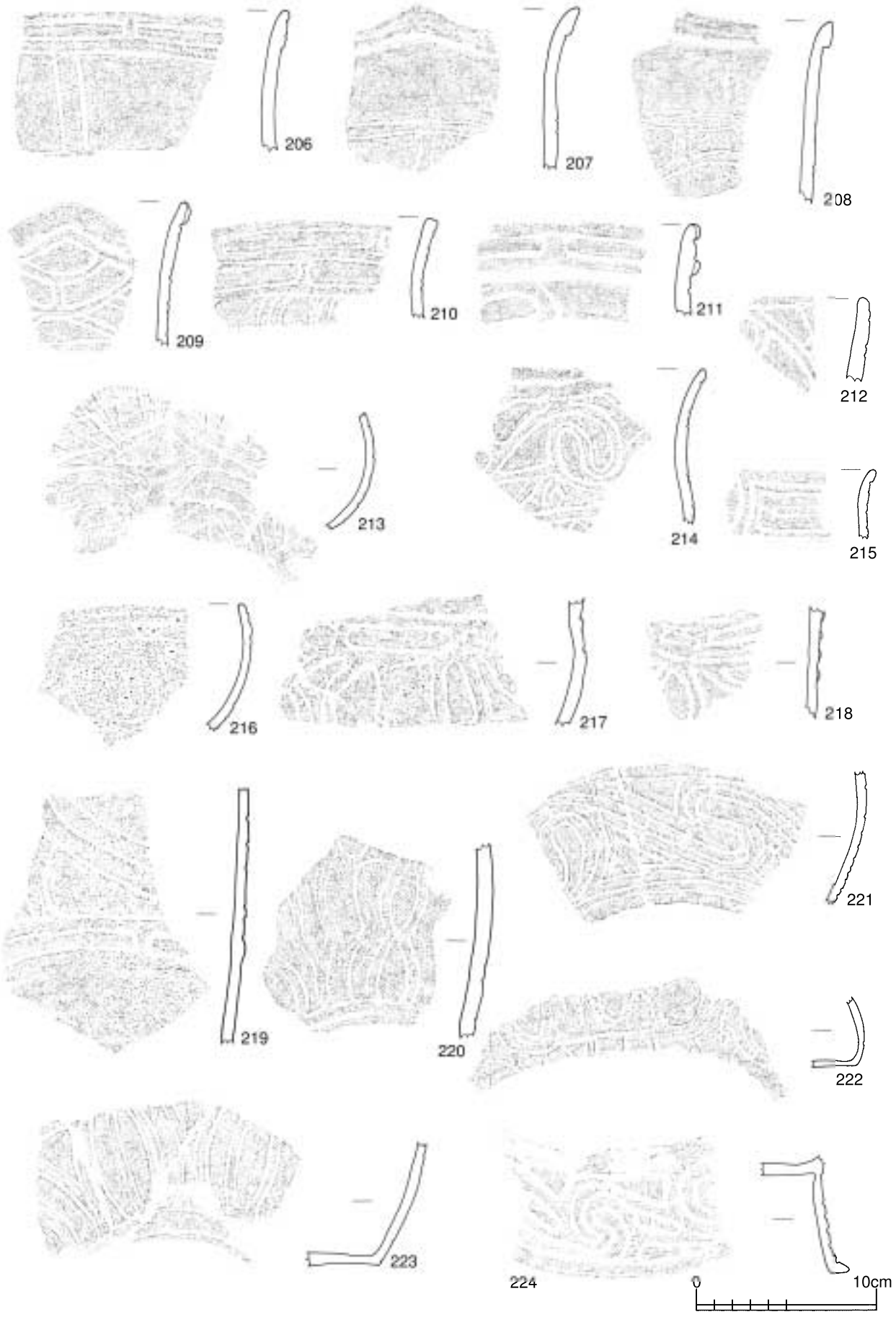
第111図　遺構外出土第Ⅳ群土器（33）



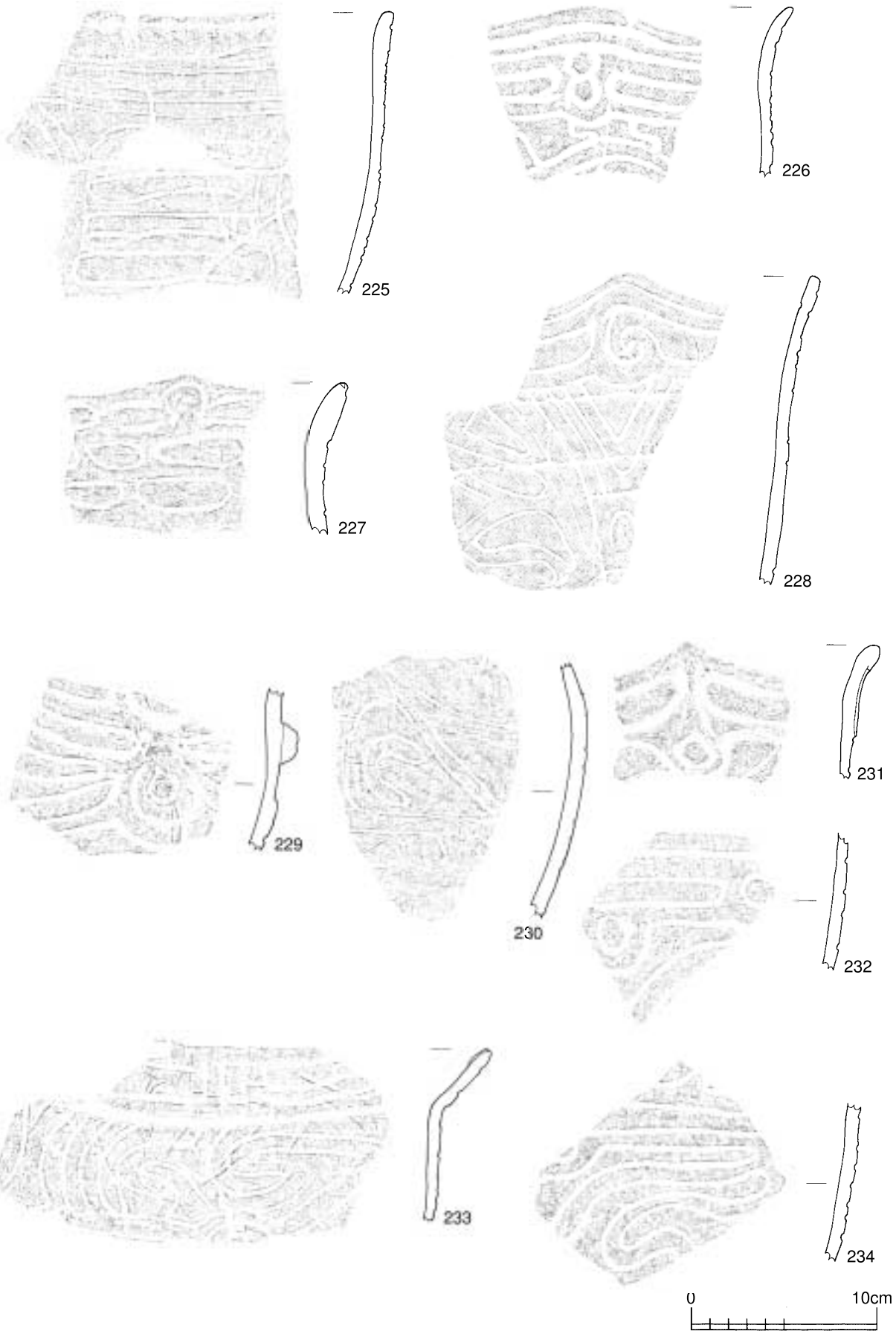
第112図　遺構外出土第Ⅳ群土器（34）



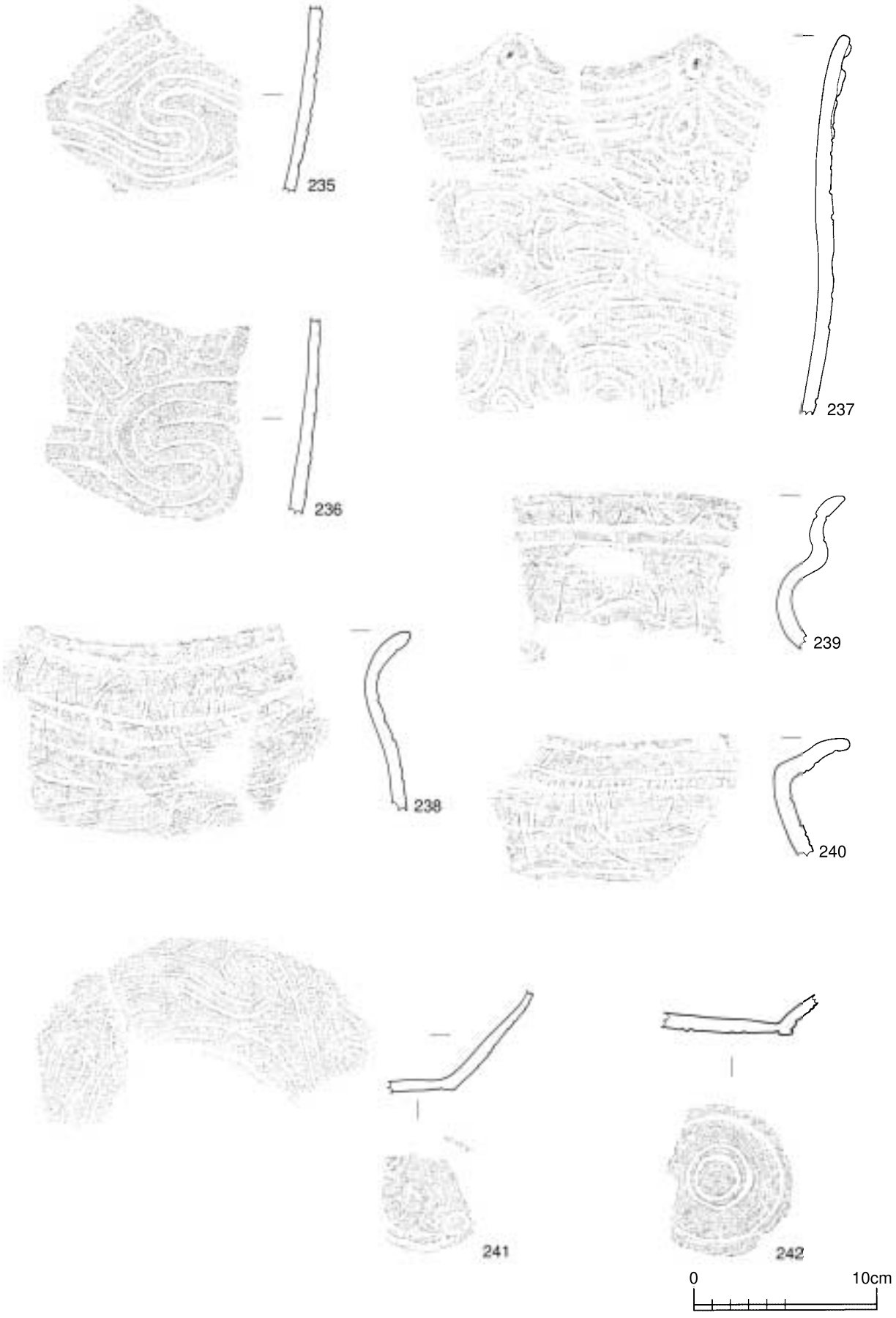
第113図　遺構外出土第Ⅳ群土器（35）



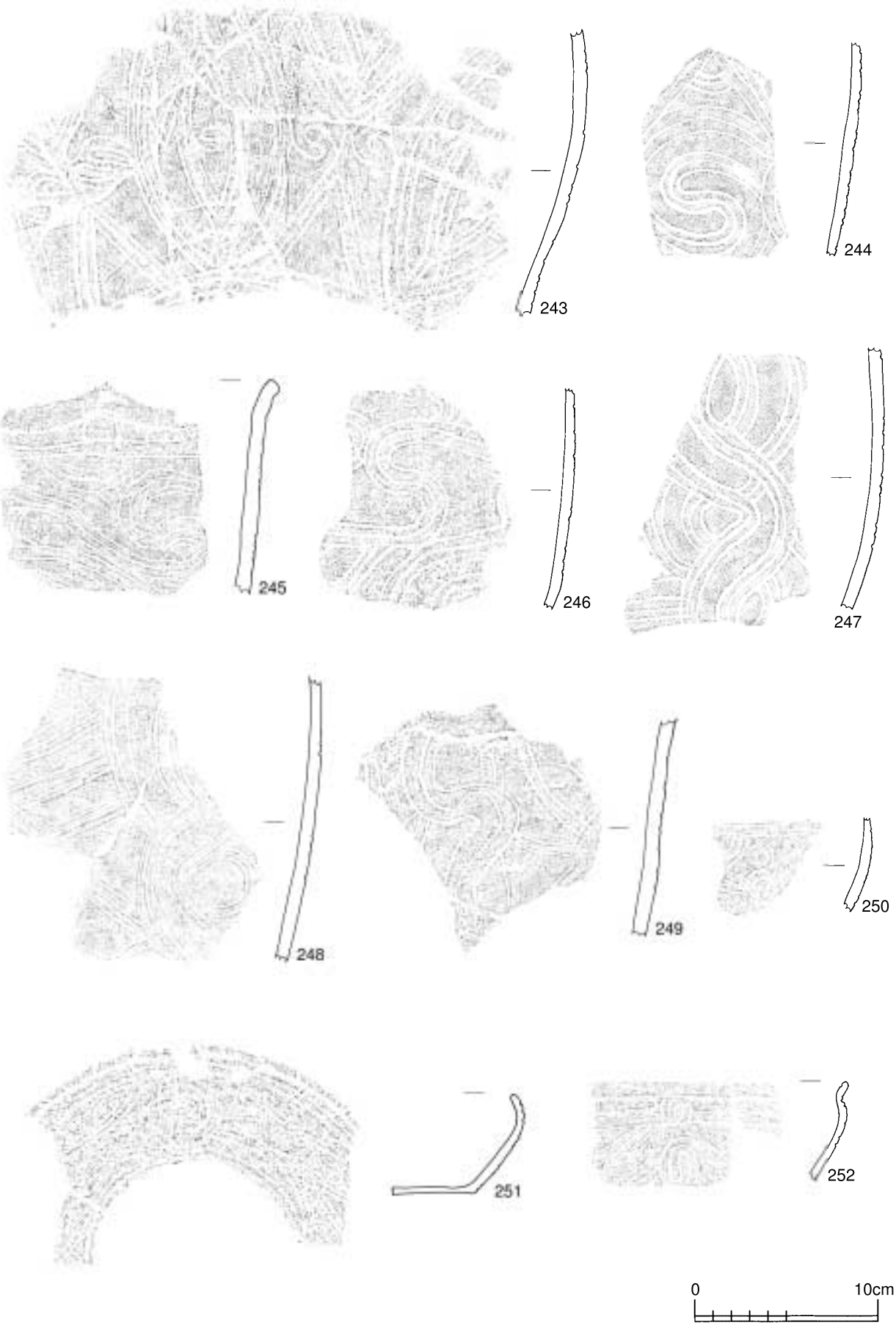
第114図　遺構外出土第Ⅳ群土器（36）



第115図　遺構外出土第Ⅳ群土器（37）

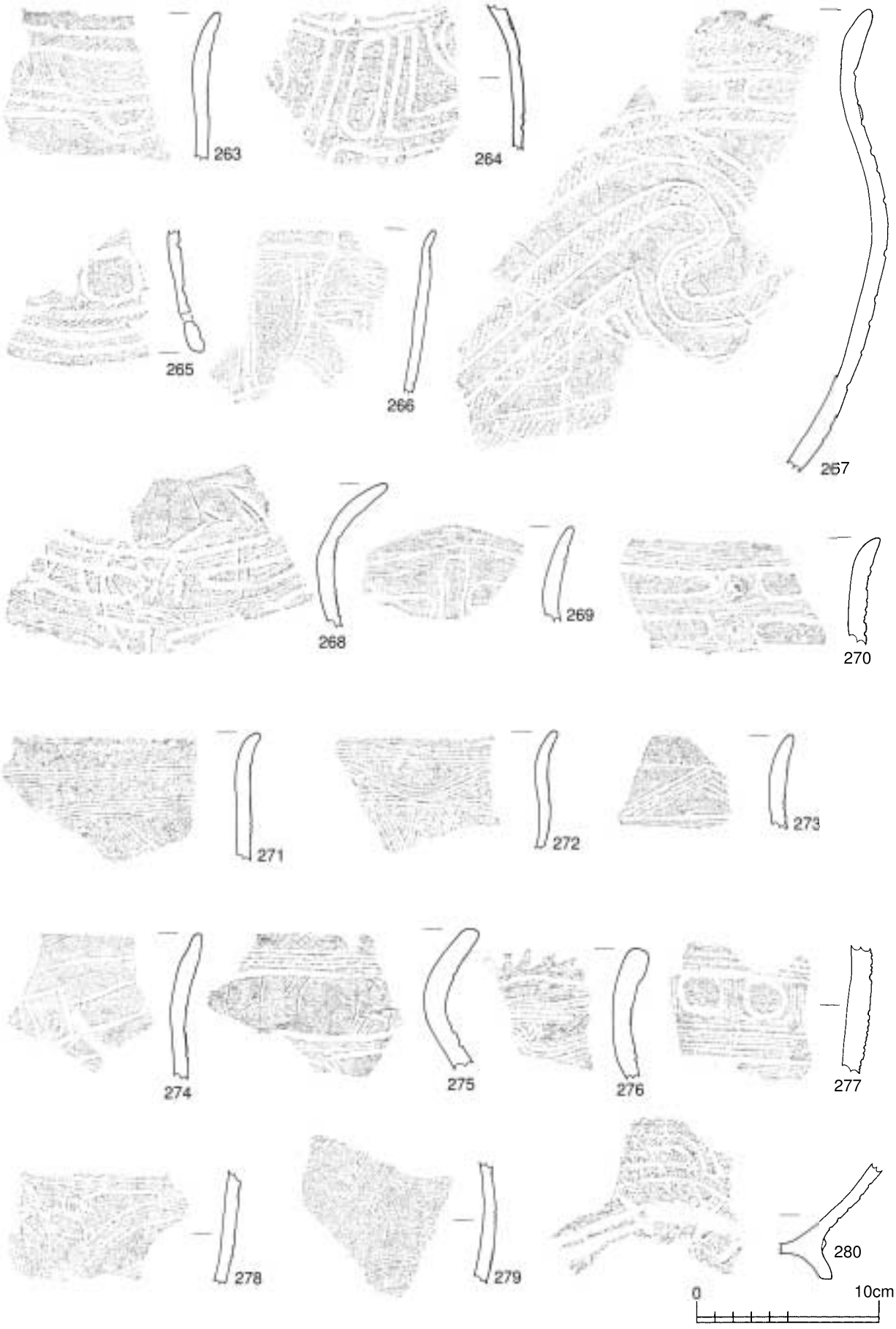


第116図　遺構外出土第Ⅳ群土器（38）

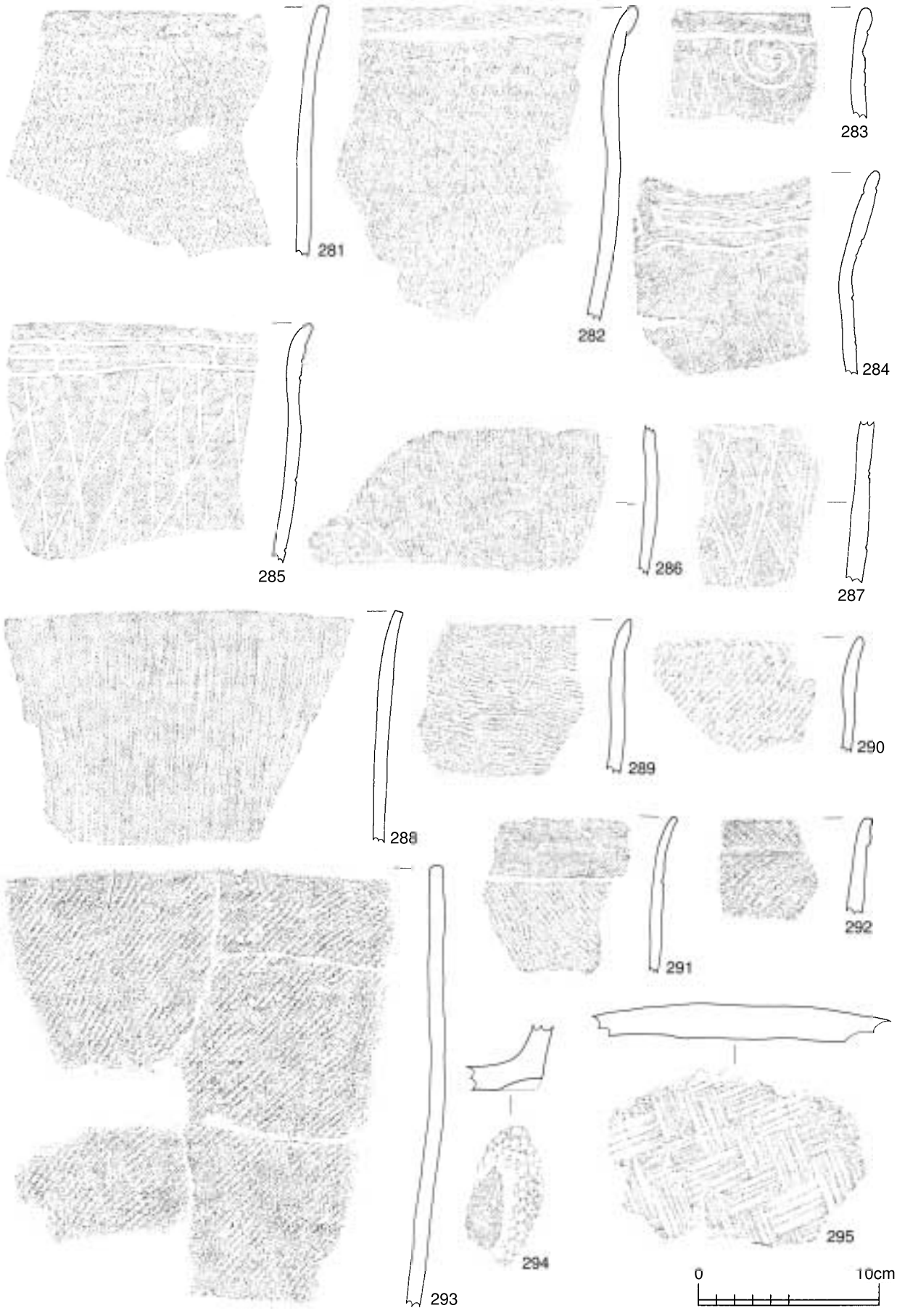


第117図　遺構外出土第Ⅳ群土器（39）

第118図　遺構外出土第Ⅳ群土器（40）



第119図　遺構外出土第Ⅳ群土器（41）



第120図　遺構外出土第Ⅳ群土器（42）

２．石器

平成10年度の調査では、剥片石器1,700点、剥片318点、石核28点、石斧68点、礫石器554点、水晶166点、総数2,834点が出土した（自然礫を除く）。うち遺構内出土96点、遺構外出土2,738点である。

石器の石質については、剥片石器は、珪質頁岩が大半であり、その他僅かに頁岩、玉髄、メノウ、黒曜石、赤鉄鉱が有る。石斧は、輝緑凝灰岩、粘板岩、閃緑岩、珪質頁岩、石英安山岩、変朽安山岩が用いられており、輝緑凝灰岩、閃緑岩が他より多い。礫石器は、安山岩、変朽安山岩、石英安山岩、凝灰岩、緑色凝灰岩、溶結凝灰岩、泥岩、閃緑岩、流紋岩、玢岩、頁岩、珪質頁岩が有り、その中で安山岩が約40％、凝灰岩、緑色凝灰岩が各約23％、変朽安山岩が約10％と多数を占める。

石器の出土地点について遺構外出土石器は、平面的にはグリッドラインの140～160ライン間に密度濃く分布しており、同範囲を中心に西側に向かうにつれ密度が薄くなる傾向が見られる。石器の出土層位はⅥａ層が圧倒的に多数を占める。遺構内出土石器についても、石器が出土した遺構はグリッドラインの140～160ライン間に存在する。

出土した石器については、下記のとおり分類した。

（１）剥片石器

・石鏃
・鍬先鏃
・石槍
・石錐
・石匙
・大石平型石篦
・石篦
・異形石器
・不定形石器
・剥片
・石核

（２）石斧

・石斧

（３）礫石器

・礫石錘
・有溝石錘
・敲磨器類
・半円状扁平打製石器及び類似する石器
・抉入扁平磨製石器及び類似する石器
・砥石
・石皿・台石

（４）水晶

・水晶

出土石器の掲載については、遺構内出土石器は原則的に掲載することとし、94.7％を掲載した。

遺構外出土石器は、一部を掲載した。遺構内出土石器を加えての掲載率については、定形剥片石器は58.5％、不定形石器は、点数が多いことから、5.5％を掲載した。剥片及び石核は、表の記載のみとした。

石斧は、44.1％、礫石器は点数が多いことから25.2％を掲載した。

水晶は、１㎝以下の小さいものが多いことから15.6％を掲載した。

（１）剥片石器

・石鏃（第45図１、５、６、12、13、第46図20、第47図24、25、第48図31、第49図38、42、45、47、第121～127図１～108、第132図５）

遺構内から13点、遺構外から186点、総数199点が出土している。石質は、珪質頁岩が95％を占め、その他頁岩、玉髄、黒曜石である。

茎部及び形状から以下のように細分した。

１．無茎（第49図45、第121図１～４、７、８）

（１）凹基（第49図45、第121図１～４）

遺構内から１点、遺構外から４点、総数５点が出土している。

第121図１は、縁辺部のみに２次調整が施されるもので、両面中央部には、素材剥片の剥離面が残存しているものである。第121図２～４が、おおむね断面中央部に稜を有するのに対して、第121図１は平坦な形状となっている。他と比較し規模がやや大きいこともあり、後述する銛先鏃の可能性もあるかと思われたが、基部の調整がやや粗雑と思われたことから本類に含めた。第121図３は、他の刃部が外湾するのに対して直線的であり、基部の抉り幅も少ないものである。

（２）平基（第121図７、８）

遺構外から４点が出土している。最大幅を器体中位から基部付近に有する。

２．円基、尖基（第45図12、13、第46図20、第47図24、第49図38、第121図６、９、10、12～15、第122図16～30、第127図108）

（１）円基（第45図12、第121図12、13）

遺構内から１点、遺構外から７点、総数８点が出土している。器体中位に最大幅を有し、刃部は緩やかに外湾している。刃部調整に際しては、他の石鏃より大きめの剥離が見られる。

（２）尖基（第45図13、第46図20、第47図24、第49図38、第121図６、９、10、14、15、第122図16～30、第127図108）

遺構内から４点、遺構外から28点、総数32点が出土している。刃部が緩やかに外湾し、器形が柳葉状のもの（第121図９、10、14、15、第122図20、21、25、28～30）と、刃部が屈曲し、器形が菱形を呈するもの（第121図６、14、15、第122図16～19、22～24、26、27、第127図108）とが有る。

３．有茎（第45図１、５、６、第47図25、第48図31、第49図42、47、第121図５、11、第123～127図31～107）

（１）凹基（第47図25、第123図31～34、36～44、第124図47、57）

遺構内から１点、遺構内から32点、総数33点が出土している。小型のものは、正三角形に近い形状で、大型のものは、二等辺三角形に近い形状である。刃部は大半が直線的か、僅かに内湾すると思われるが、

その中で、第123図42、第124図47は、刃部が緩やかに外湾している。特に第124図47は、器形も他と異なり、長い細身の器形である。

（２）平基（第45図１、５、６、第49図42、第121図５、第123図35、第124図45、46、48～50、52～56、58、59、第125図60～67、69～72、74～78、第126図85、91、第127図101）

遺構内から４点、遺構外から45点、総数49点が出土している。第124図45、46は基部付近が非対称ぎみであるが、本類に含めた。

（３）凸基　57点（第48図31、第49図47、第121図11、第124図51、第125図68、73、第126図79～84、86～90、92、93、第127図94～100、102～107）

遺構内から２点、遺構外から55点、総数57点が出土している。

４．その他の石鏃（第132図148）

遺構外から１点が出土している。一方の刃部が緩やかに外湾し、他方が直線的と、左右がやや非対称ではあるが、両面調整で基部に抉りを有し、アメリカ式石鏃と思われるものである。

５．欠損品等で基部が無く、分類できないもの

図示していないが、遺構外から10点が出土している。

・銛先鏃（第127図109）

無茎石鏃と形態は類似するが、全体的に薄く平板で基部付近が薄くて平らなものを本類とした。遺構外から１点が出土している。石質は珪質頁岩である。石鏃の項で、無茎凹基とした石鏃とは、形態が異なる。基部付近の調整もより深い剥離が認められる。

・石槍（第128図110）

おおむね６㎝以上のものを本類とした。遺構外から４点が出土している。石質は珪質頁岩が３点で75％、頁岩１点で25％を占める。形態等により３類に分類した。１とした幅広いものは出土していない。２が１点の出土である。他３点は、欠損等で細分できないものである。

・石錐（第128図111～120、第129図121～129、第133図155）

遺構外から58点が出土している。石質は、珪質頁岩が98％を占め、他は頁岩が１点である。形態等により４類に分類した。また、３類は１と２に細分した。

１は、錐部のみ二次調整を行うものである（第128図111、113～115、第129図124、129、第133図155）。また、他の剥片石器を素材とし、錐部を作出して転用しているもの（第128図114、第129図129、第133図155）もこの類に含めた。27点が出土している。うち、他の剥片石器を素材としているものは６点である。

２は、全体に２次調整を行うものである。うち、（１）つまみ部を有するもの（第128図116）と、（２）直線的な棒状のもの（第128図112、117～120、第129図121～128）とに細分した。（１）が６点、（２）が21点出土している。第128図117、118は、（２）の直線的な棒状のものの中でも特に細身のものである。第128図117は器体中央部に膨らみを有する。

３は、錐部の欠損品等で分類できないものである。図示していないが４点が出土している。

・石匙（第47図26、第48図32、33、35、36、第49図43、46、第129～137図130～147、149～154、156～178、192）

遺構内から８点、遺構外から97点、総数105点が出土している。石質は珪質頁岩が95％を占め、他は頁岩、玉髄である。

１．縦型（第48図35、36、第49図43、46、第130～136図136～147、149～154、156～160、163～178）

76点が出土している。つまみ部は、長軸の軸線上に見られる。両側縁が平行なものと両側縁の形状が異なるものとがある。

両側縁が平行なものは、細身で下端部が尖頭状のもの（第132図149～151、第133図153）、幅広で下端部が尖頭状のもの（第133図152、156）、下端部が丸みを持つもの（第130～132図136～138、140～145、147）、下端部が直線状のもの（第48図36、第134、135図163～167、第136図176）がある。

第130図136、第133図156は一側縁に、第131図140、132図150は両側縁に、第132図149は尖頭状の下端部に腹面への調整が認められたが、その他大半は、つまみ部を作出する以外に腹面への調整は見られない。また、第48図35は両側縁が平行であるが、下端部の形状は欠損により不明である。

両側縁の形状が異なるものは、一側縁が直線的、他側縁が弧状で半月状のもの（第49図46、第133、134図154、155、157～160、第135、136図168、171～175、177、178）が大半で、その他、直線的な一側縁に対し、他側縁が斜交する三角形状のもの（第131図139、第132図146）、一側縁が弧状で他側縁が屈曲するもの（第135図169）、両側縁が屈曲するもの（第49図43）等がある。

第136図178は、一側縁に腹面への調整が認められたが、その他は、つまみ部を作出する以外に腹面への調整は見られない。

２．横型（第47図26、第48図32、第129、130図130～135、第134図161、162、第137図192）

23点が出土している。つまみ部を作出する以外には、腹面にはほとんど調整がなされていない。

つまみ部が短軸の軸線上にあるもの（第47図26、第48図32、第129図130～132、第130図134、135、第137図192）と、つまみ部が短軸の軸線と斜交するもの（第129図133、第134図161、162）とに大別される。

第129図130は、幅広いつまみ部を有するものである。第129図132、第137図192は、小型のものである。

３．欠損品等で分類できないもの（第48図33）

６点が出土している。第48図33は、つまみ部のみが残存するものである。

・大石平型石篦（第137、138図179～191、193～196）

遺構外から34点が出土している。石質は全て珪質頁岩である。器体は、大きくつまみ部と刃部に別れ、つまみ部は背面、腹面両面からの調整によって作り出されている。つまみ状の頭部を呈するものと、細長い柄状のものとがあり、柄状のものが多数である。刃部は背面側からの調整によりおおむね弧状を呈し、刃部調整においては、調整が端部のみに行われ、原礫面や素材剥片の古い剥離面を広範囲に残すものと、背面のほぼ全面に調整が行われるものとがある。

第137図180は、刃部調整が端部に見られるものであるが、刃部右側には調整が見られない。第138図196は、つまみ部に対して刃部の長さが極端に短いものである。

・石篦（第48図34、第138～142図197～231）

遺構内から１点、遺構外から93点、総数94点が出土している。石質は珪質頁岩が94％を占め、他は、頁岩である。形態等により４類に分類した。

１は、撥形を呈するものである（第48図34、第138～142図197～214、217、222、225、226、229)。おおむね三角形状を呈するものも本類に含めた。54点の出土である。第140図217は、調整が片面のみのものである。その他は、範囲の多少はあるが、調整が両面に認められる。刃部調整は、両面に認められるもの（第138～140図198、201～204、206、209、210、212、213、第141図222、225、226）と、片面のもの（第138図197、199、200、第139図205、207、208、211、第140図214、217、第142図229）との両者が見られる。

２は、側縁が弧状のものである（第140図218～220、第142図230、231)。最大幅を器形中位に有する。８点が出土している。小型のもの（第140図218～220）と大型のもの（第142図230、231）とがある。

第142図230は腹面側に調整の見られないものであるが、その他は、背面、腹面両面に調整が施されている。

３は、側縁が直線的なものである（第140、141図215、216、221、223、224、227、228)。22点が出土している。幅広のもの（第140図215、216、第142図228）と幅狭のもの（第141図221、223、224、227）とがある。第140図216は、腹面側の調整が側縁部のみに施されている。第142図228は、刃部調整が粗いものである。幅狭のものは、両面に調整が施されているが、第141図223、227の刃部調整は片面である。

４は、欠損品等で細分できないものである（第48図34)。10点が出土している。

・異形石器（第142図232、233）

遺構内出土のものは無く、遺構外から２点が出土している。石質は珪質頁岩である。

第142図232は、四方から抉りが施され、Ｘ字状の形態を有するものである。第142図233は、両端が尖頭状の器体中央部に抉りが施されるものである。いずれも両面から調整が施されている。

・不定形石器（第45図２～４、７～11、第46図15～19、第47図21、22、27～29、第48図30、37、第49図39～41、44、第50図48～53、第135図170、第143～148図234～269）

遺構内から30点、遺構外から1,173点、総数1,203点が出土している。石質は珪質頁岩が86％を占め、その他、頁岩、玉髄、チャート、黒曜石、赤鉄鉱、安山岩、粘板岩、泥岩、玄武岩、凝灰岩、凝灰角礫岩である。刃部の調整の状況、有無により３分類した。

１．刃部の調整が一側縁の１／２以上に渡るもの。（Ａ）～（Ｆ）に細分類した。

Ａ．側縁部のみに調整が施されるもの（第45図２、９、10、11、第46図16、17、第47図21、第48図37、第49図39、40、第50図49、第143図238、239、242、第144図245、246、248、第145、146図249～257、第146図265、268、第148図266）

遺構内から11点、遺構外から438点、総数449点が出土している。

Ｂ．端部のみに調整が施されるもの（第46図19、第48図30、第49図41、第50図51～53、第143図240、第146図258、259、第148図267）

遺構内から６点、遺構外から151点、総数157点が出土している。

Ｃ．側縁部及び端部に調整が施されるもの（第45図４、７、８、第46図18、第47図22、29、第50図48、50、第135図170、第143図241、第144図243、244、247、第147、148図260～265）

遺構内から８点、遺構外から372点、総数380点が出土している。

Ｄ．尖頭状の刃部を有するもの（第45図３、第46図15、第144図247）

遺構内から２点、遺構外から16点、総数18点が出土している。

Ｅ．円形、楕円形の周囲に調整が施されるもの（第143図234～237、第144図245）

遺構外から20点が出土している。

Ｆ．定形石器の欠損品と思われるもの（第49図44）

遺構内から１点、遺構外から２点、総数３点が出土している。

２．刃部の調整が一側縁の1/2未満のもの（第47図27、28、第148図266、267、269）

遺構内から２点、遺構外から37点、総数39点が出土している。

３．刃部は作出されていないが、微細剥離が認められるもの

遺構外から119点が出土している。

・剥片（図示していない）

刃部調整や微細剥離の認められないものを一括した。318点が出土している。石質は、珪質頁岩が86％、頁岩が12％、その他玉髄、黒曜石、メノウである。

・石核（図示していない）

28点出土している。石質は、珪質頁岩が89％、頁岩７％、その他メノウである。なお、両極技法による石核は含めていない。

（２）石斧（第51図60、第53図74、77、第149、150図270～295）

・石斧

遺構内から３点、遺構外から65点、総数68点が出土している。石質は、閃緑岩、輝緑凝灰岩が各26％、粘板岩、珪質頁岩が各８％、変朽安山岩が７％を占め、その他、安山岩、頁岩、石英安山岩、凝灰岩、砂岩である。

１．磨製石斧と２．打製石斧に分類し、１の磨製石斧は、３細分した。２とした打製石斧は出土していない。

１．磨製石斧

（Ａ）小型磨製石斧

形状の小型のものを本類とした。20点が出土している。擦切痕の認められるもの（第53図74、第149、150図281、283、287、291）、全体を研磨しているもの（第51図60、第149、150図275、282、284～286、288、289）とがある。

（Ｂ）擦切磨製石斧（第150図290）

小型以外で器体に擦切痕が残存するものを本類とした。２点が出土している。

（Ｃ）その他のもの

（Ａ）、（Ｂ）以外のものを本類とした。46点が出土している。全体を研磨しているもの（第53図77、第149、150図271、273、274、276～280、292）、部分的に研磨しているもの（第149図270、272）、敲打により整形したと思われるもので部分的に磨いているもの（第150図293～295）などが見られる。

２．打製石斧　出土していない。

（３）礫石器

・礫石錘（第52図69、71、第53図75、第54図83、84、91、第151、152図297～308）

遺構内から６点、遺構外から33点、総数39点が出土している。石質は、安山岩が51％、凝灰岩が20％、変朽安山岩、石英安山岩が各７％、流紋岩が５％を占め、その他、緑色凝灰岩、頁岩である。

抉りを作出する部位により、１～４に分類した。

１．器体の長軸に平行な側縁に抉りを作出するもの（第52図69、71、第54図83、第151図、第152図297～303、308）。遺構内から３点、遺構外から17点、計20点の出土である。

２．器体の短軸に平行な側縁に抉りを作出するもの（第53図75、第54図84、91、第151図、第152図304～307）。遺構内から３点、遺構外から８点、計11点の出土である。第151図305は、側縁に抉りを作出するほか、側縁に磨痕、平坦面に敲打痕を有する。

３．器体の長軸及び短軸に平行な側縁に抉りを作出するもの（第152図306～308）。遺構外から７点の出土である。第152図306、307は、器体の短軸に平行な側縁に抉りを作出するものであるが、第152図306はその他、器体の長軸に平行な側縁に、一方は側縁中央部、他方は側縁端に抉りを作出している。第152図307は、器体の長軸に平行な側縁に、やや弱い抉りを作出している。第152図308は、器体の長軸に平行な側縁に抉りを作出している。器体の短軸に平行な側縁の中央からはやや外れた部分に抉りを作出している他、器体の平坦面に敲打痕を有する。

４．欠損等により抉りを作出する部位の判断がつかないもの。図示していないが、遺構外から１点出土している。

・有溝石錘（第152図309～317）

遺構外から９点が出土している。石質は、変朽安山岩が33％、凝灰岩、安山岩、緑色凝灰岩が各22％を占める。

素材となる礫の形態等により４分類した。

１は、円礫の、器体長軸に器体を全周する１条の溝を有するものである（第152図309、310、312、313）。遺構外から４点の出土である。

２は、扁平な礫の、器体長軸に器体を全周する１条の溝を有するものである（第152図314～316）。遺構外から３点の出土である。第152図315、316は、器体の平坦面両面に磨痕が認められる。

３は、１、２以外の形態で、器体長軸に器体を全周する１条の溝を有するものである（第152図317）。遺構外から１点の出土である。器体をおおむね鐸形に整形した礫の長軸に１条の溝を有する。

４は、２条の溝を有するものである（第152図311）。遺構外から１点の出土である。円礫を用い、器体長軸に２条の溝を有する。２条の溝は器体の両端で十字に交わっている。条の一方は、器体を全周するが、他方は途中で途切れている。

・敲磨器類（第51図54～59、62、第52図63～68、70、第53図73、78～81、第54図82、85、86、88、89、90、第153～159図318～322、326～376）

遺構内から29点、遺構外から364点、総数393点が出土している。石質は、安山岩が52％、凝灰岩が22％、石英安山岩が６％、緑色凝灰岩が５％を占め、その他変朽安山岩、溶結凝灰岩、頁岩、泥岩、凝

角岩、閃緑岩、珪質頁岩、砂岩、流紋岩、チャート、ホルンフェルス、玄武岩、玢岩である。

礫に敲打痕、磨痕、窪みの痕跡がそれぞれ単独、複合して見られるものを本類とした。１～５に分類した。

１は、磨痕を有するものである。遺構内から７点、遺構外から59点、総数66点が出土している。

（A）円形、楕円形を呈する礫の側縁に磨痕を有するもの（第51図55、59、第52図67、68、第54図82、第153図318～320、322、326～328)、遺構内から７点、遺構外から37点、総数44点が出土している。磨痕は一側縁に認められるものや二側縁、三側縁に認められるものがある。

（B）断面が三角形を呈する礫の側縁に磨痕を有するもの（第52図63、第53図78)、遺構外から10点が出土している。

（C）円形、楕円形を呈する礫の全面に磨痕を有するもの（第153図329)、遺構外から６点が出土している。第153図329は、平面形が楕円形を呈する偏平な礫の全面に磨痕が認められる。

（D）円形、楕円形を呈する礫の平坦面中央に磨痕を有するもの（第153図321、330)、遺構外から６点が出土している。第153図321は棒状に近い礫であるが幅広い磨痕が見られる。第153図330は、平坦面に磨痕が認められるほか、同一面に長軸方向の擦痕が認められる。

２は、敲打痕を有するものである。遺構内から12点、遺構外から109点、総数121点が出土している。

（A）円形、楕円形等の扁平な礫の平坦面に敲打痕を有するもの（第51図54、56、57、第52図64、第155図345、346、348、第156図350)、遺構内から６点、遺構外から56点、総数62点が出土している。敲打痕が礫平坦面の片側に認められるもの、両側に認められるものがあり、敲打痕は、礫平坦面のおおむね中央部に認められる。第156図350は、棒状を呈する礫であるが、敲打痕は、長い平坦面において両端部と中央を挟んだ２カ所に認められる。

（B）円形、楕円形等の扁平な礫の端部に敲打痕を有するもの（第52図66、第54図88、89、第155図347、第156図351～356)、遺構内から４点、遺構外から47点、総数51点が出土している。

扁平な礫等の器体長軸端に敲打痕を有するものである。端部のみに敲打痕を有するもの（第156図351)、端部他側縁に敲打痕を有するもの（第156図355、356)、端部他平坦面に敲打痕を有するもの（155図347、第156図353)、端部他側縁、平坦面に敲打痕を有するもの（第156図352）がある。

（C）おおむね球状を呈する礫の広範囲に敲打痕を有するもの（第52図65、第53図81、第157図358)。遺構内から２点、遺構外から６点、総数８点が出土している。第157図358は、球状を呈する礫の半面を超える範囲に帯状に敲打痕が認められる。

３は、凹み痕を有するものである。(第51図62、第53図79、第54図86、90、第154、155図331～340、第155図341～344）遺構内から５点、遺構外から119点、総数124点が出土している。

円形、楕円形の礫の平坦面中央に凹み痕を有するもので、礫平坦面の片側（第154図331、332）や両側（第154図333～335）に凹み痕を有するものがある。また、平坦面の形状が細長い礫では、平坦面中央と礫端部との間に凹み痕を有するものが見られる（第154図336、338)。これらの凹み痕は同一面に１、２カ所であるが、他に平坦面に器体長軸に沿って３カ所以上の凹み痕を有するもの（第154図337、339、第155図341）も見られる。さらに、平坦面に加え、側縁にも凹み痕を有するもの（第154図340、第155図342～344）がある。平坦面両側及び側縁の複数面に凹み痕を有するものは、各面での凹み痕の残る個所が似通った傾向が見られる。

４は、磨痕、敲打痕、凹み痕がそれぞれ複合して見られるものである。複合する痕跡の種類で１～４

に分類した。遺構内から５点、遺構外から74点、総数79点が出土している。

（A）磨痕と敲打痕の見られるもの（第52図70、第157図357、363、364、第159図376)。遺構内から１点、遺構外から19点、総数20点が出土している。

球状の礫全面を磨り、敲打痕の見られるもの（第157図357)、側縁に磨り平坦面中央に敲打痕の見られるもの（第157図363）側縁に磨り端部に敲打痕の見られるもの（第157図364)、側縁部に敲打痕と磨痕の見られるもの（第159図376）がある。

（B）敲打痕と窪みの痕跡が見られるもの（第53図73、80、第54図85、第158図368、370、第159図371、373)。遺構内から３点、遺構外から20点、総数23点が出土している。

側縁に敲打痕、平坦面に窪み痕の見られるもの（第158図368、370)、端部に敲打痕平坦面に窪み痕の見られるもの（第159図371)、側縁及び端部に敲打痕、平坦面に窪み痕の見られるもの（第159図373）がある。

（C）磨痕、窪みの痕跡が見られるもの（第157図360、362、第159図372、374、375)。遺構外から23点が出土している。

側縁に磨痕、平坦面に窪み痕が見られるもの（第157図360、362)、側縁に磨痕、平坦面及び側縁に窪み痕が見られるもの（第159図372)、端部に磨痕、平坦面に窪み痕が見られるもの（第159図374)、平坦面片面に磨痕、反面に窪み痕が見られるもの（第159図375）が見られる。

（D）磨痕、敲打痕、窪みの痕跡がそれぞれ見られるもの（第51図58、第157図359、361、第158図365～367、369)。遺構内から１点、遺構外から12点、総数13点が出土している。

側縁の磨痕、敲打痕、平坦面の敲打痕、窪み痕（第157図359)、側縁の磨痕、敲打痕、平坦面の窪み痕（第157図361、第158図365)、側縁の磨痕、端部の敲打痕、平坦面の窪み痕（第158図366、367)、側縁の磨痕、敲打痕、端部の敲打痕、平坦面の敲打痕、窪み痕（第158図369）等が見られる。

５は、棒状の石英安山岩の側縁に敲打痕の見られるもので上記１～４に含まれないものである。遺構外から３点が出土している。(第156図349）側縁に敲打痕の見られるものがある。

・半円状扁平打製石器及び類似する石器（第53図72、76、第160～162図377～389、第163図390～392）

遺構内から２点、遺構外から74点、総数76点が出土している。石質は安山岩が76％、変朽安山岩が10％を占め、その他石英安山岩、凝灰岩、緑色凝灰岩である。

弧状の縁辺を剥離により作出し、対辺に磨痕を有するもの（第53図76、第160～162図377～387)、原礫の弧状の縁辺を利用し、対辺に磨痕を有するもの（第53図72、第163図388、第163図390、392)、直線状に縁辺を剥離により作出し、対辺に磨痕を有するもの（第163図391）等が見られる。

第53図76は、幅広い磨痕が見られるものである。第162図387は、弧状の縁辺部の厚みが大きいものである。第163図390は、弧状の縁辺部全体に敲打痕の見られるものである。

また、第163図389は、弧状の縁辺を剥離により作出するが対辺に磨痕の認められないものである。弧状の縁辺部には磨痕が見られる。類似するものとして本類に含めた。

・抉入扁平磨製石器及び類似する石器（第164図393～397）

遺構外から８点が出土している。全て欠損品である。石質は、安山岩、凝灰岩が各50％を占める。

第164図393～395は、抉りの見られる短軸辺側が残存するものである。第164図396は、先細りを呈す

る側が残存するものである。いずれも長軸辺に剥離と磨痕が認められる。また、第164図393を除き両側の長軸辺に磨痕が認められる。

第164図397は、残存部には、抉りが見られず、また先細りを呈する側とも考えにくいため、半円状扁平打製石器に類似するものとして扱うべきものであるかもしれないが、全面を磨って整形していることから類似する石器として本類に含めた。

・砥石（第165図398～404）

遺構外から７点の出土である。全て欠損品である。石質は、凝灰岩が37％、変朽安山岩が25％、頁岩、溶結凝灰岩、緑色凝灰岩が各12％を占める。平坦面に断面がＵ字状を呈する溝を有する。第165図403は側縁にも溝を有する。側縁及び平坦面の敲打痕、平坦面の窪み痕が見られるもの（第165図400、402、403）があるが、溝との新旧関係や窪み痕が欠損品平坦面のほぼ中央に位置することにより、欠損後の転用によるものと思われる。

第165図404は、薄手で扁平な器体の表裏に研磨が見られるものである。

・石皿・台石（第51図61、第54図87、第166、167図405～418）

使用面がスリによる石皿と使用面が敲打による台石に分類した。遺構内から２点、遺構外から20点、総数22点の出土である。全て欠損品である。

石質は、凝灰岩が54％、安山岩が27％を占め、その他砂岩、溶結凝灰岩、石英安山岩、緑色凝灰岩である。１点出土した台石は、石英安山岩が用いられている。

石皿は、遺構内から２点、遺構外から19点、総数21点が出土している。形態等により５細分した。

（Ａ）縁を有し、使用面が窪んでいるもの（第166図407、410）。遺構外から３点が出土している。

（Ｂ）縁を有し、使用面が平坦なもの（第51図61、第54図87、第166図405、406、408、409、412、413）。遺構内から２点、遺構外から７点、総数９点が出土している。

（Ｃ）縁が無く、使用面が窪んでいるもの（第166図411、414、415）。遺構外から６点が出土している。

（Ｄ）縁が無く、使用面が平坦なもの（第167図416、417）。遺構外から２点が出土している。

（Ｅ）欠損等により細分できないもの、図示していないが遺構外から１点出土している。

２．台石は遺構外から１点のみ出土している（第167図418）。断面が三角形を呈する礫の平坦面中央部に敲打痕が見られる。

（４）水晶（第45図14、第47図23、第168、169図419～442）

Ⅳａ層の精査中に、ＡＡ－150グリッドから長さ4.6㎝を計測する単体の水晶（第168図432）が出土し、以降の精査においても同様に水晶が出土する状況が見られた。これらは、現在まで明確な加工痕を有するものは見られないが、本項で取り上げることとし、その状況を述べるものとする。

遺構内から２点、遺構外から164点、計166点が出土している。

出土層位は平成12年度の調査まででは、Ⅳａ層、Ⅳｃ層、Ⅳ層等様々であるが、全体としてはⅣａ層の出土が多数を占めると思われる。平成10年度の調査においては、特にⅣａ層での出土が圧倒的多数を占めている。

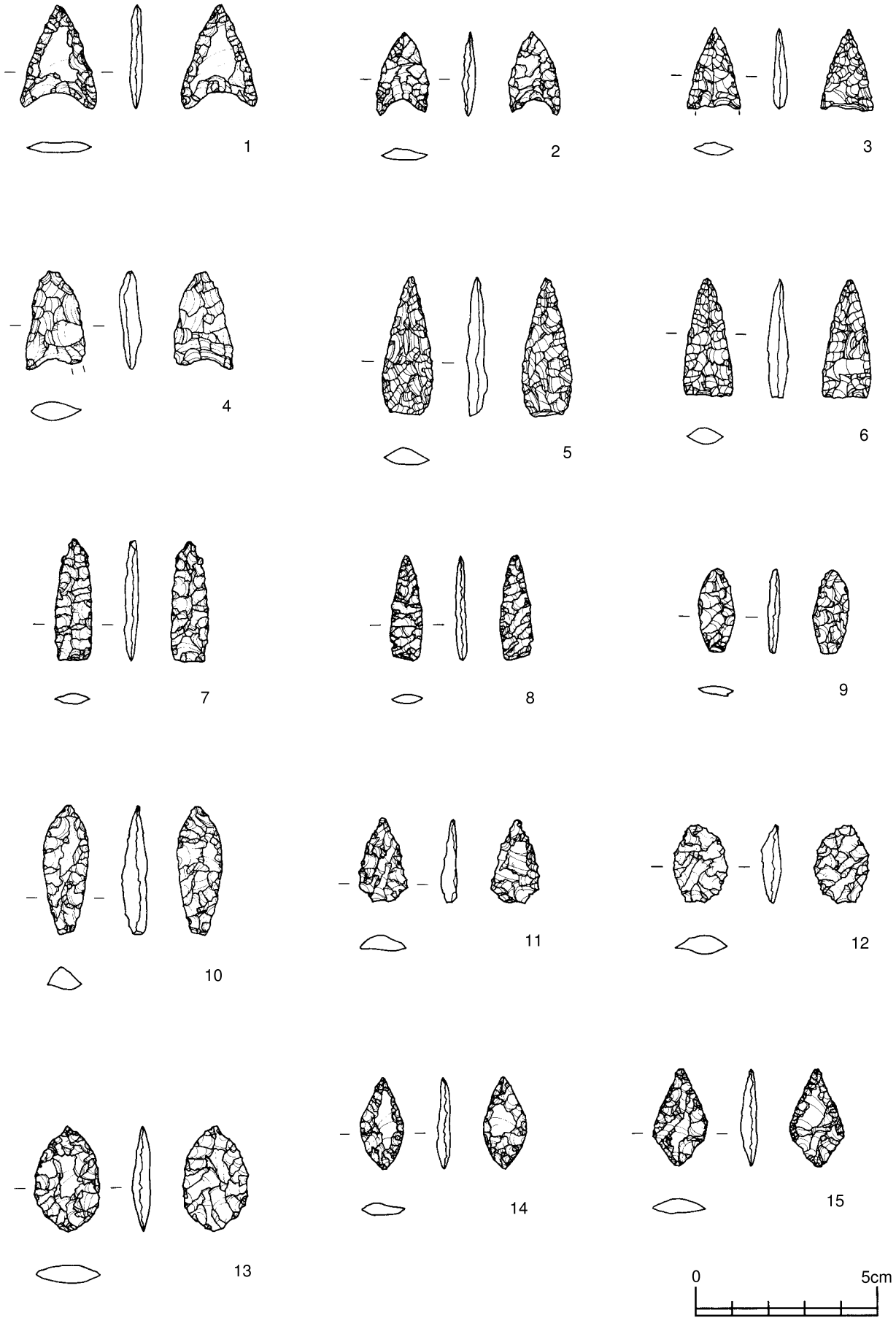
出土した水晶の状況は、母岩の外面もしくは内部で小結晶が密集した状況で確認される群晶や、３㎝

未満の小結晶（中でも１㎝未満が多数である。）が単体ないし２～３個程度のまとまりで出土し、おそらくは、群晶から欠落したものと考えられるものなどが多数を占める。３㎝以上の単体で出土したものは２点であった。

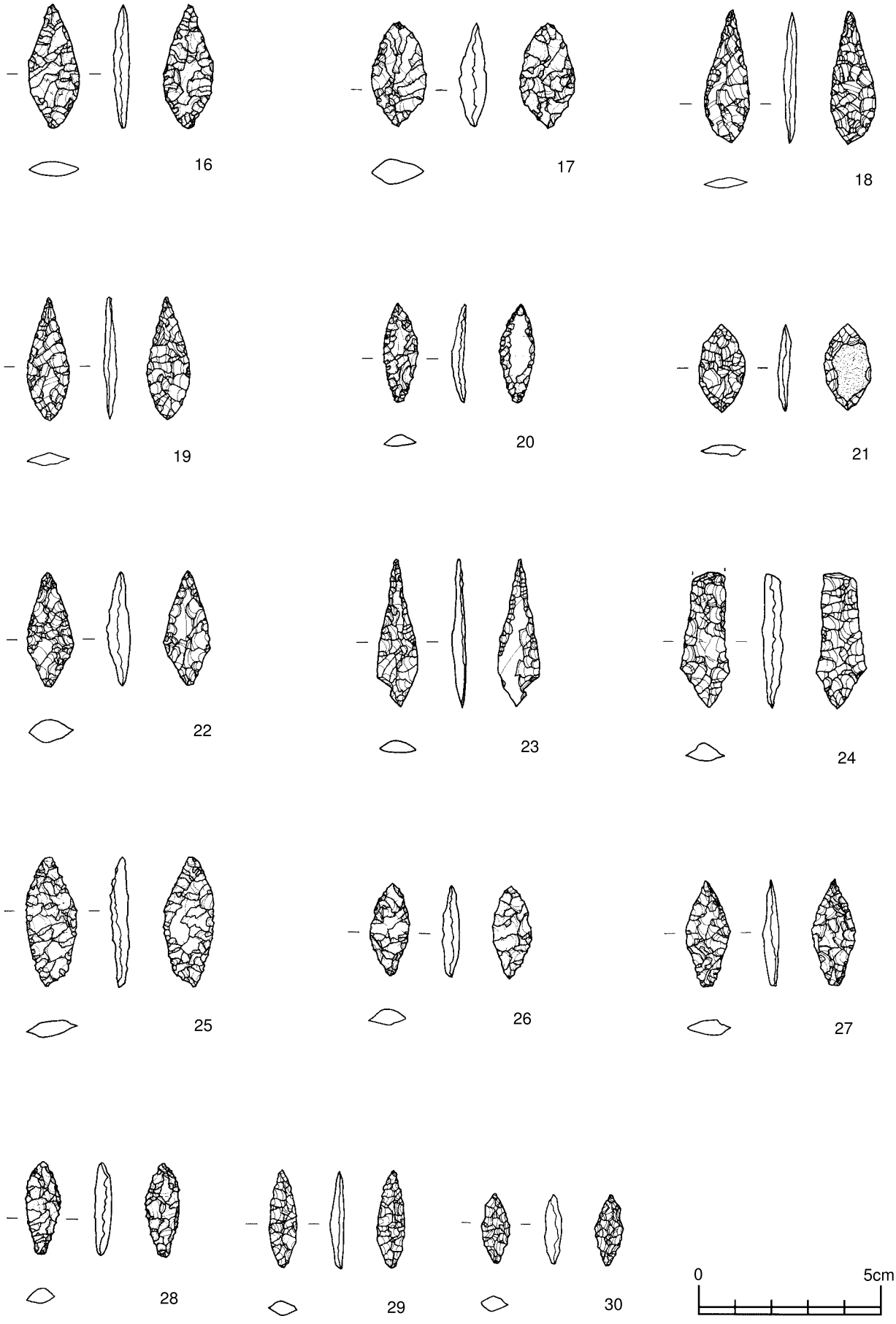
なお、平成10年度調査における水晶出土点数については、以前に81点と報告しており（青森市教育委員会　1999ｂ）、本報告と大きく隔たりがある。これについては、取り上げた群晶から整理段階までに新たに欠落したと考えられるものがあること、調査概報では、一定範囲にまとまって出土したものを一括して１点として数えたものがあること、整理の段階で一括出土土器等他の遺物に混在していたものを確認し、新たに追加したものがあることなどによる。

これらの出土水晶については、１．加工しているもの（出土していない）２．加工していないものに大別した。また、２については、Ａ．群晶（第45図14、第47図23、第168、169図433～442）、Ｂ．単体（第168図419～432）に２細分した。２細分にあたっては、小結晶についても単体か否かで判断した。Ａが106点、Ｂが60点出土している。

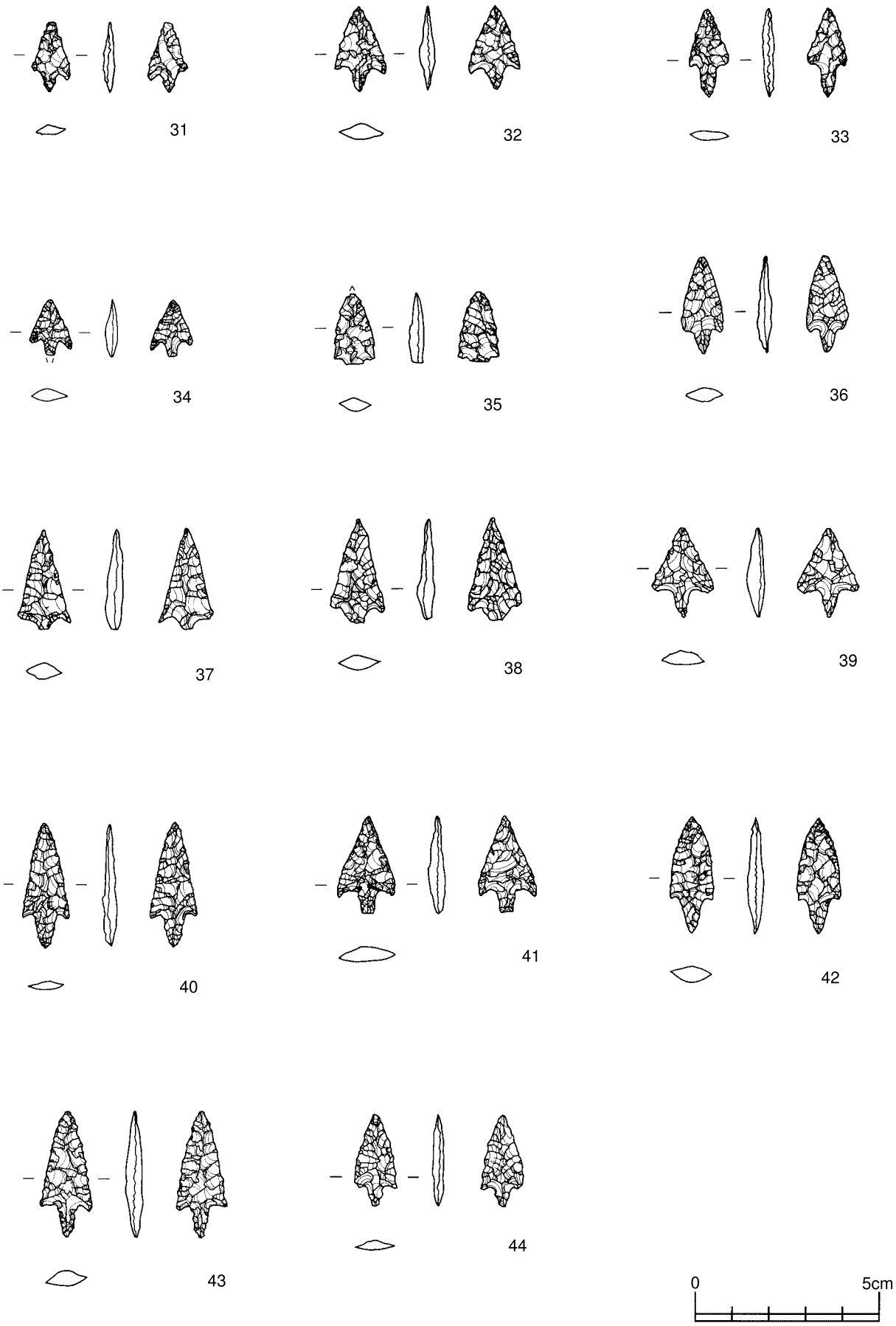
（小野）



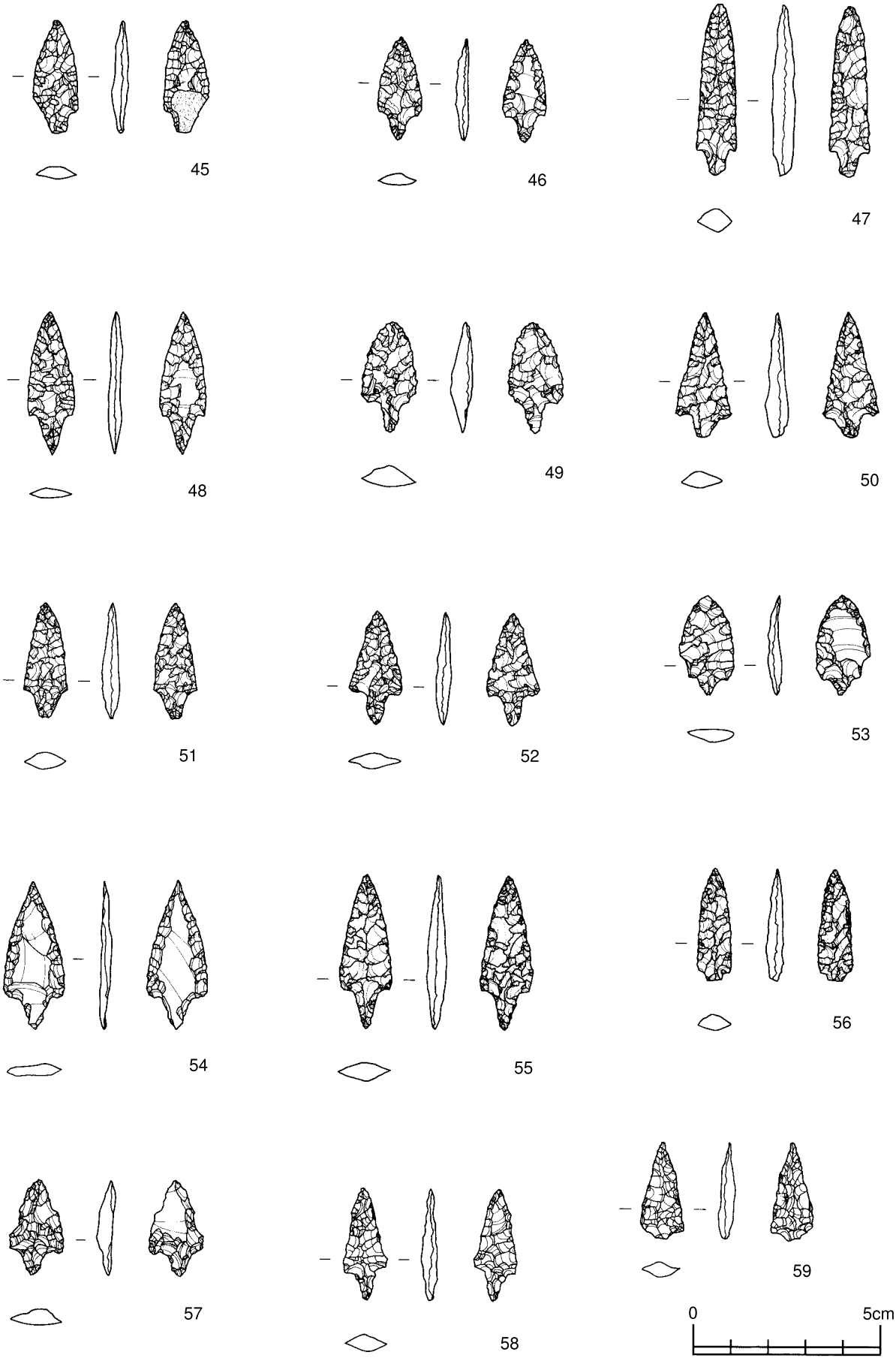
第121図　遺構外出土石器（1）



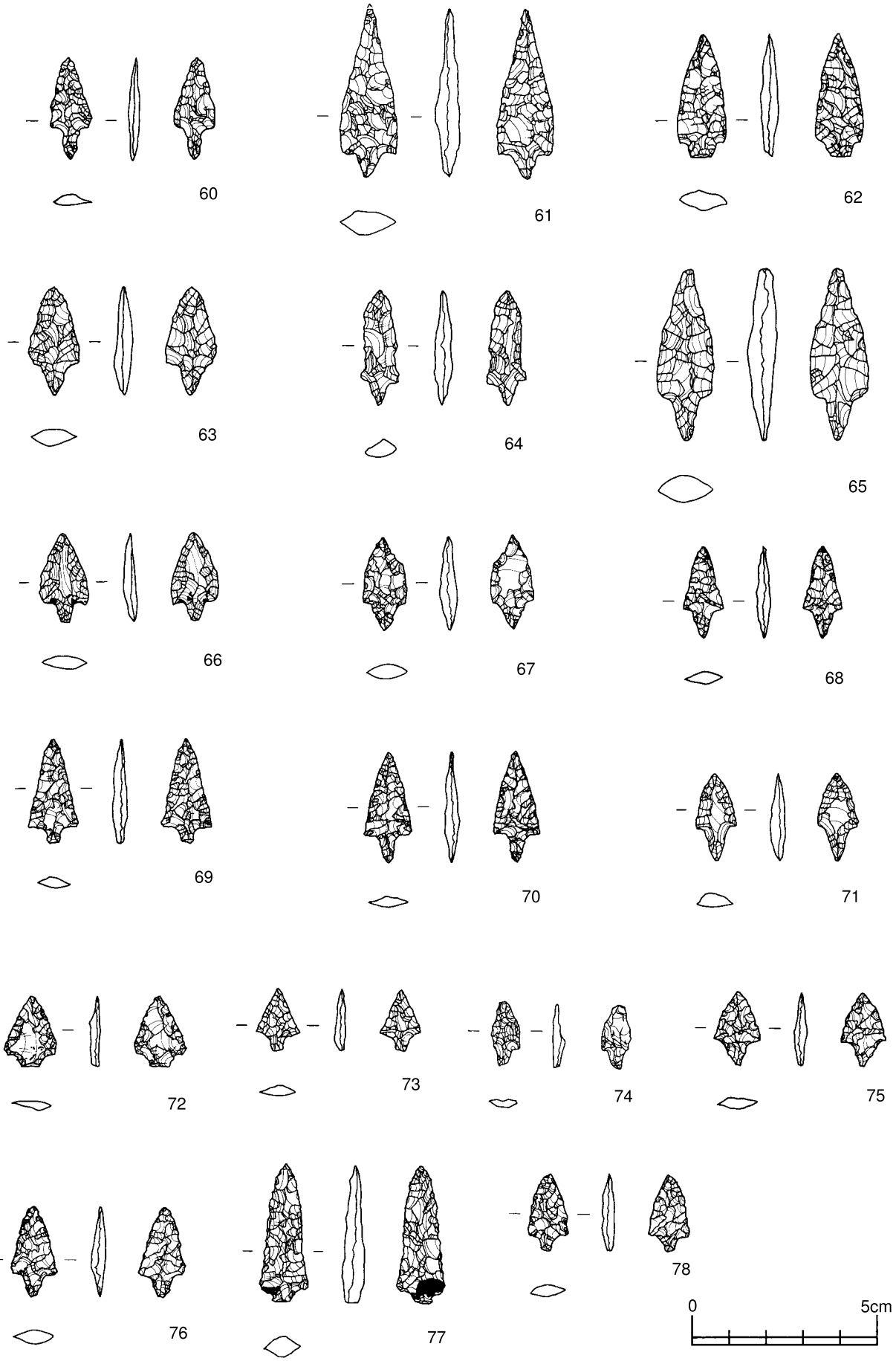
第122図　遺構外出土石器（2）



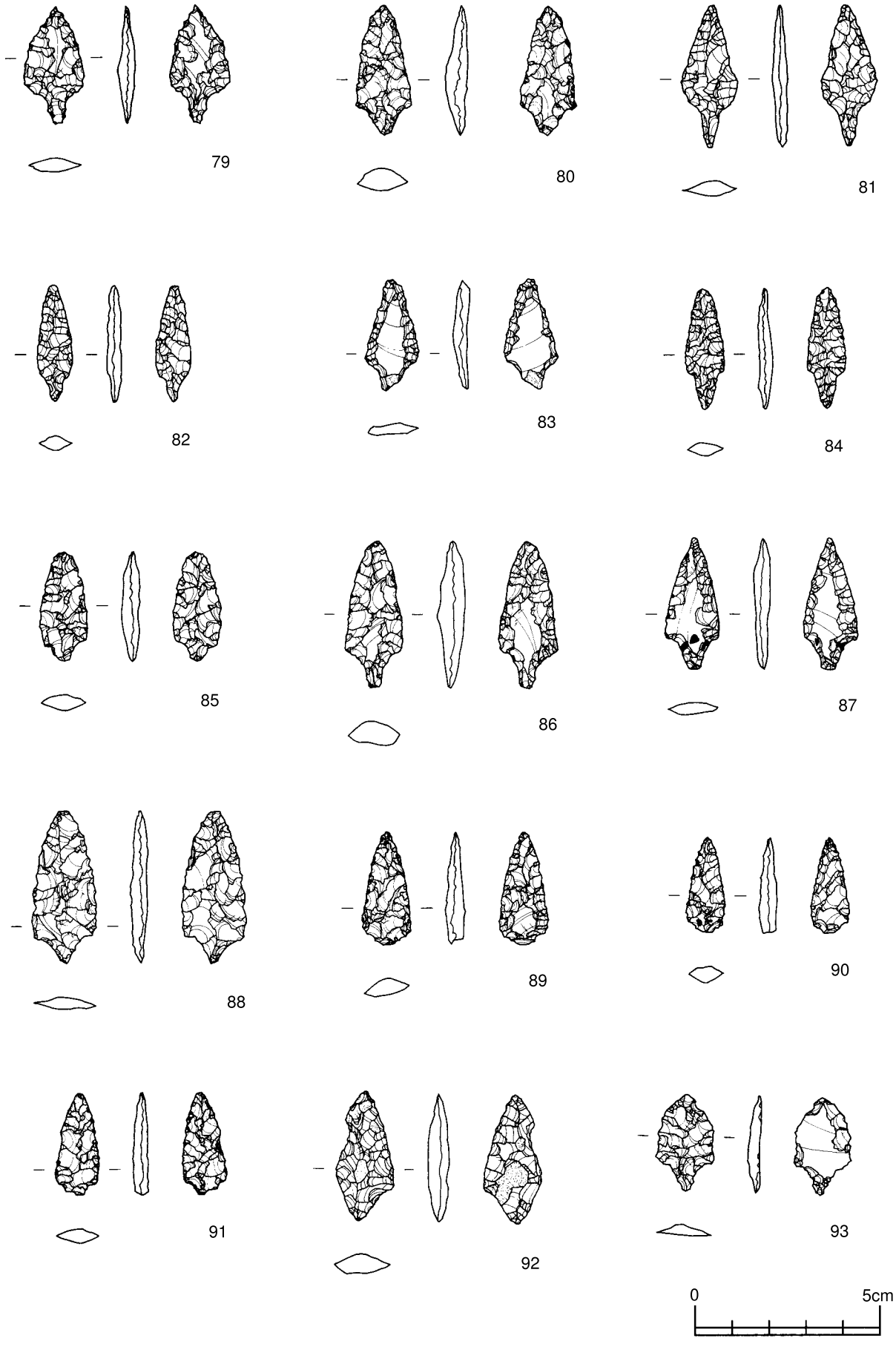
第123図　遺構外出土石器(3)



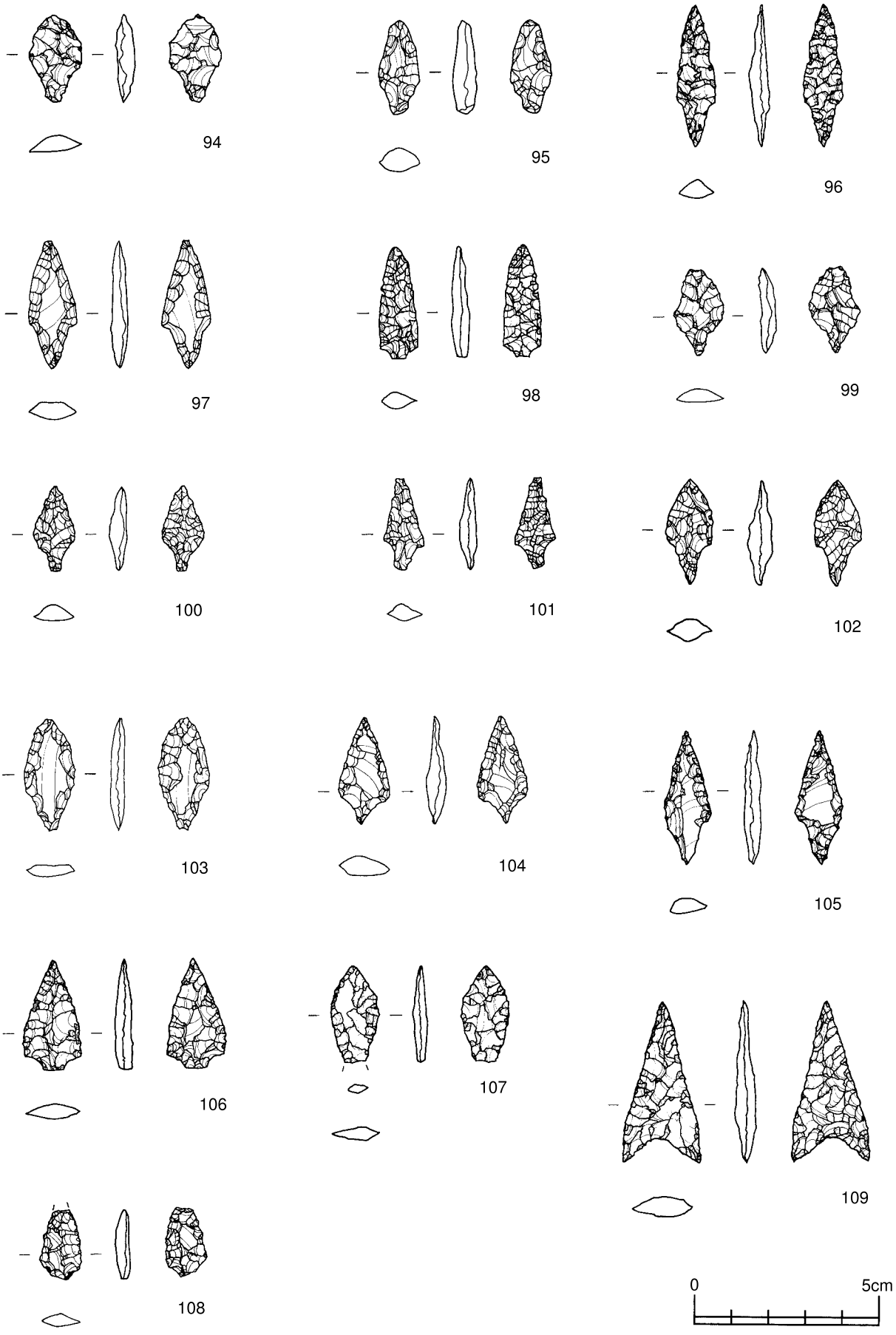
第124図　遺構外出土石器（4）



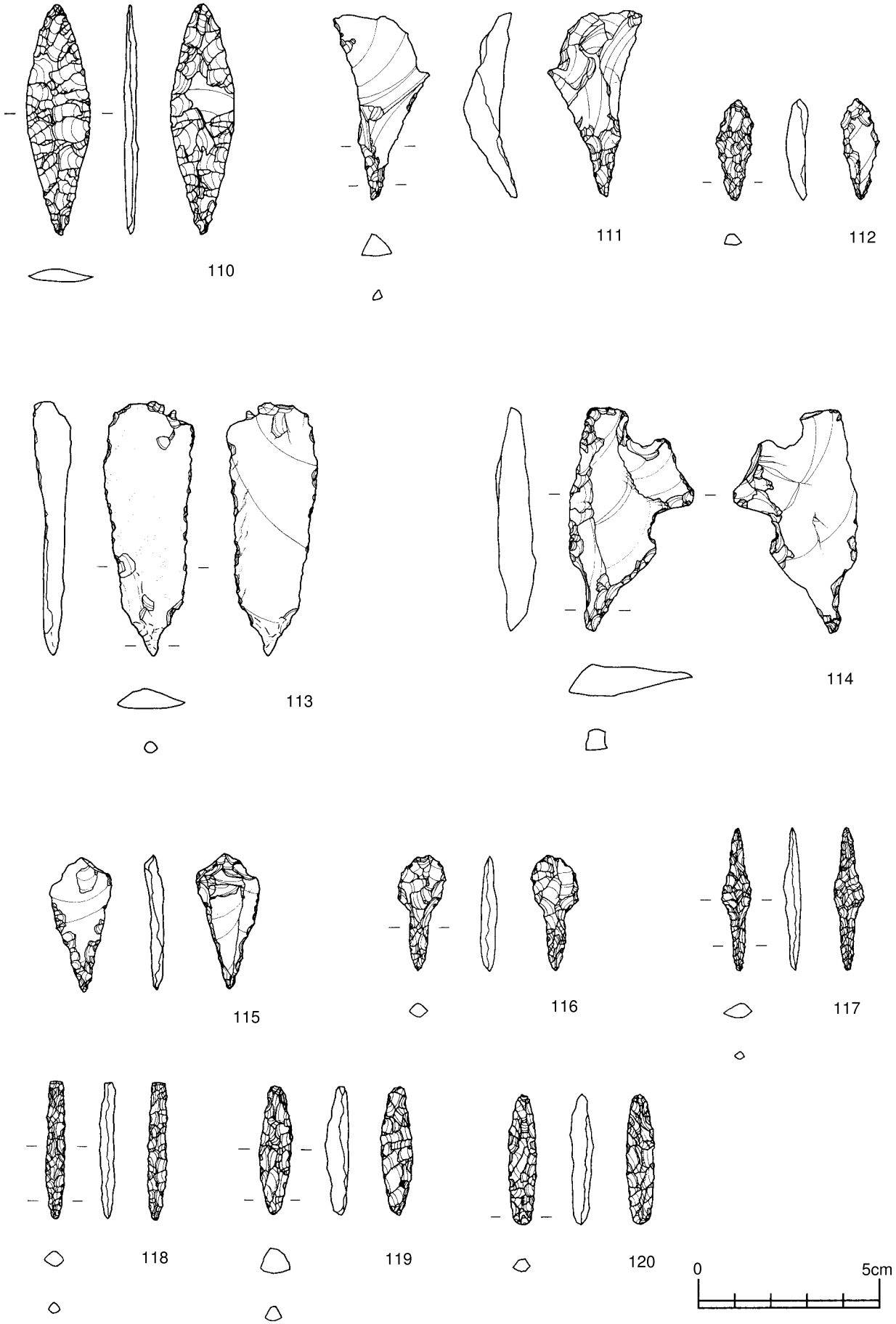
第125図　遺構外出土石器(5)



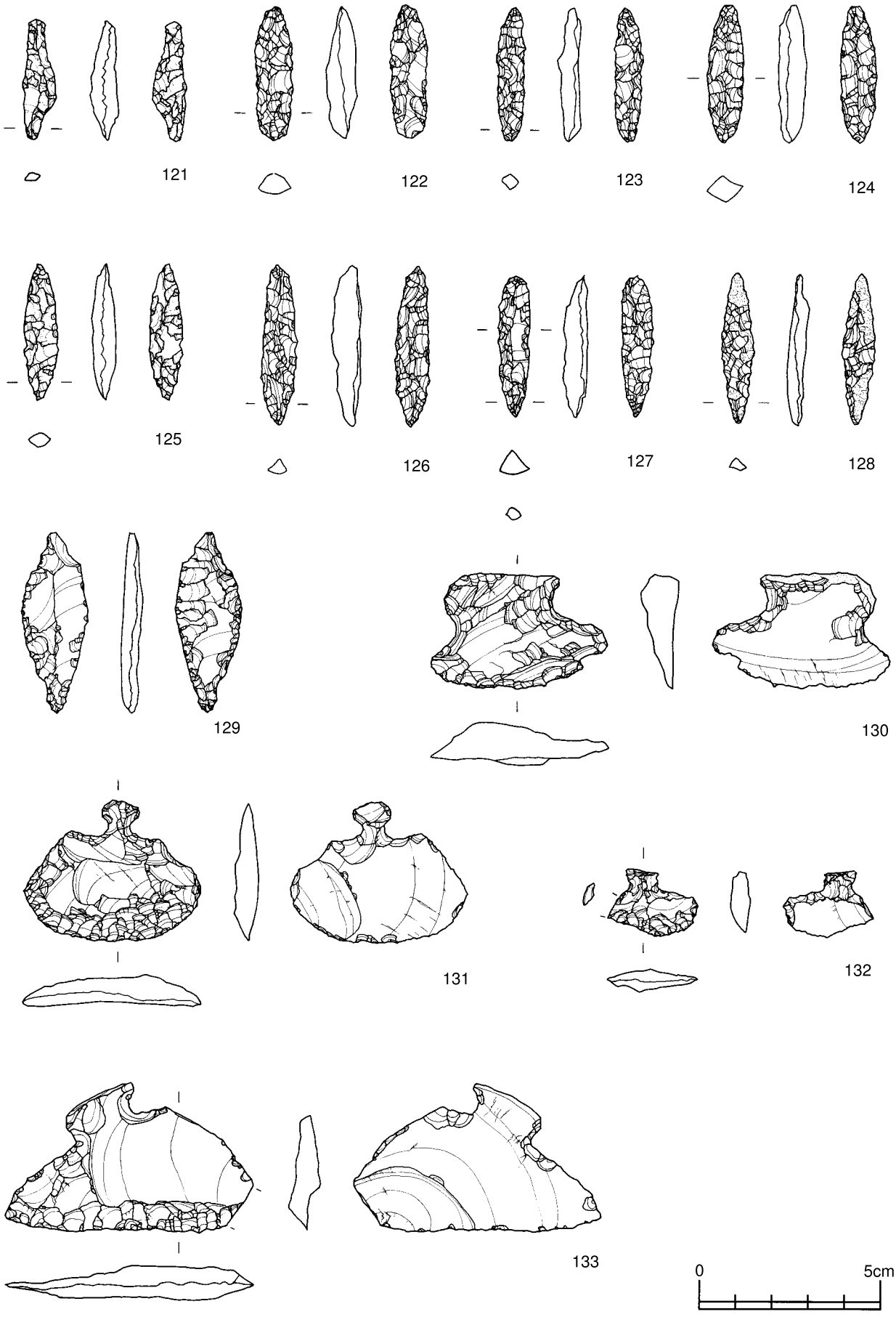
第126図　遺構外出土石器（6）



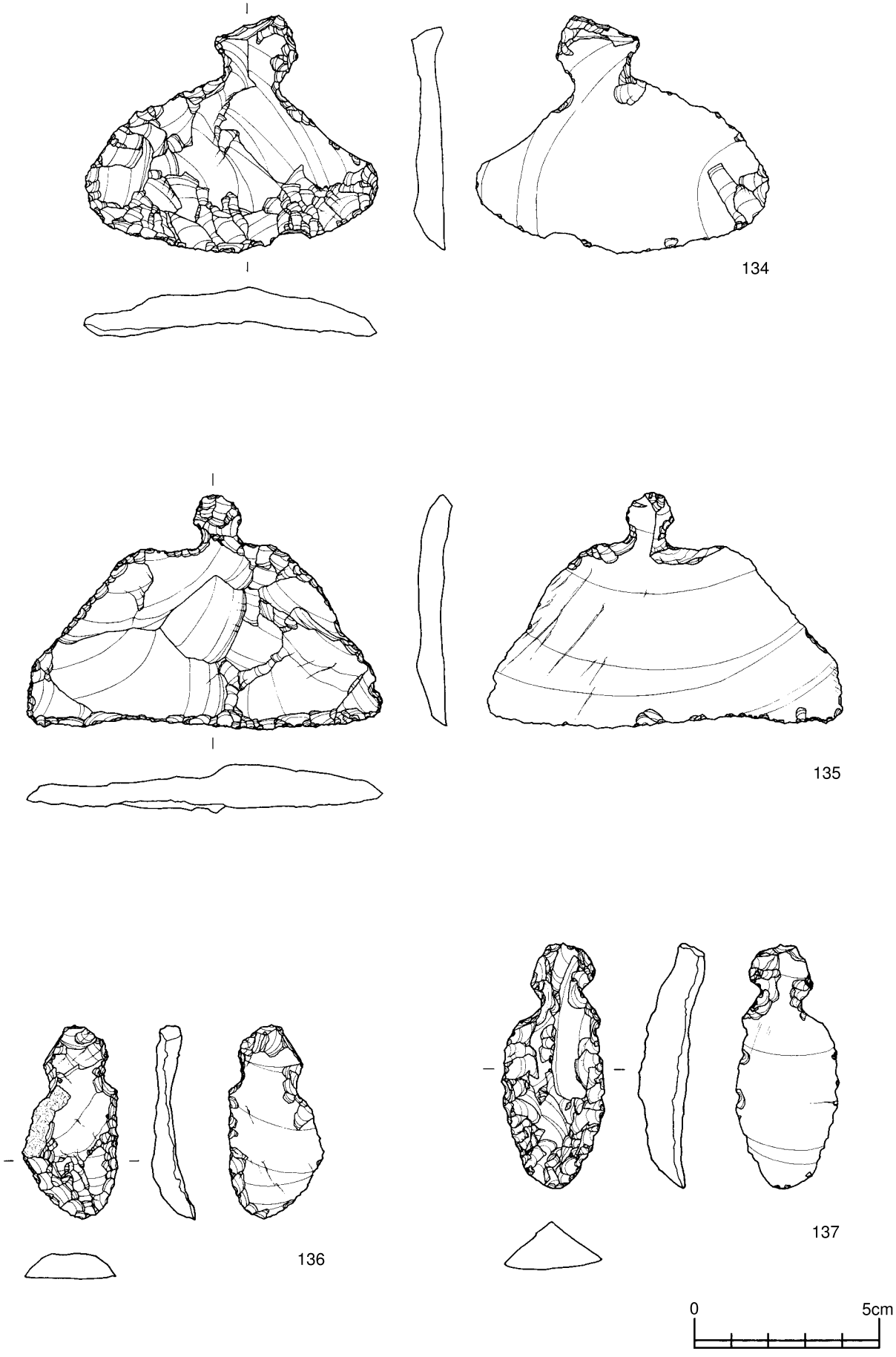
第127図　遺構外出土石器（7）



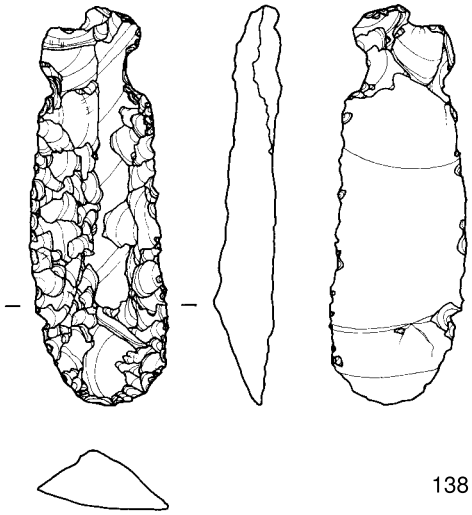
第128図　遺構外出土石器（8）

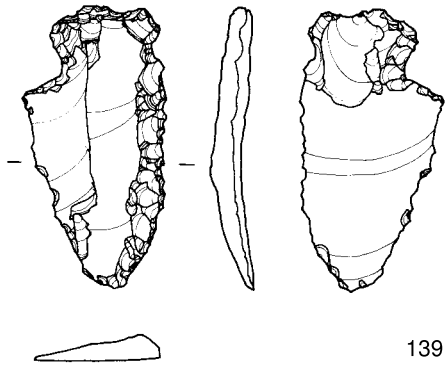


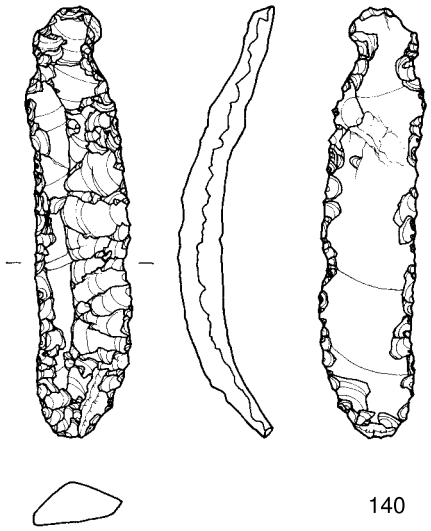
第129図　遺構外出土石器(9)

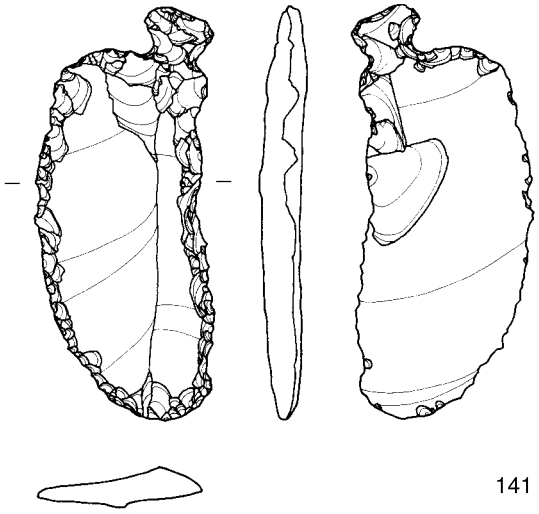


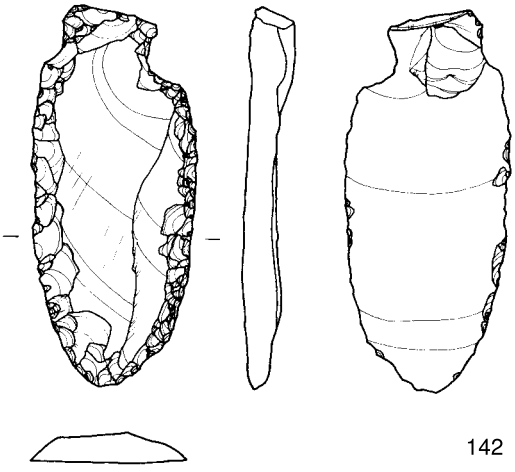
第130図　遺構外出土石器（10）

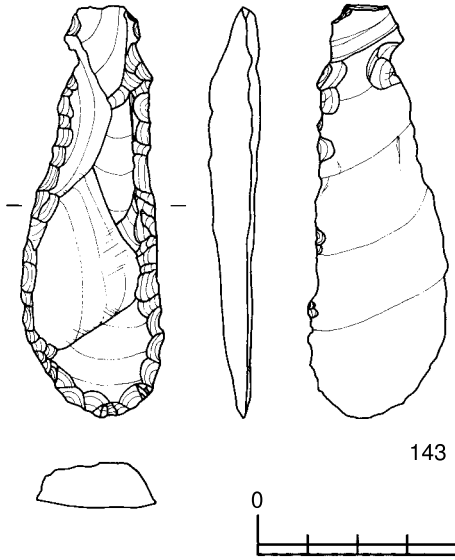




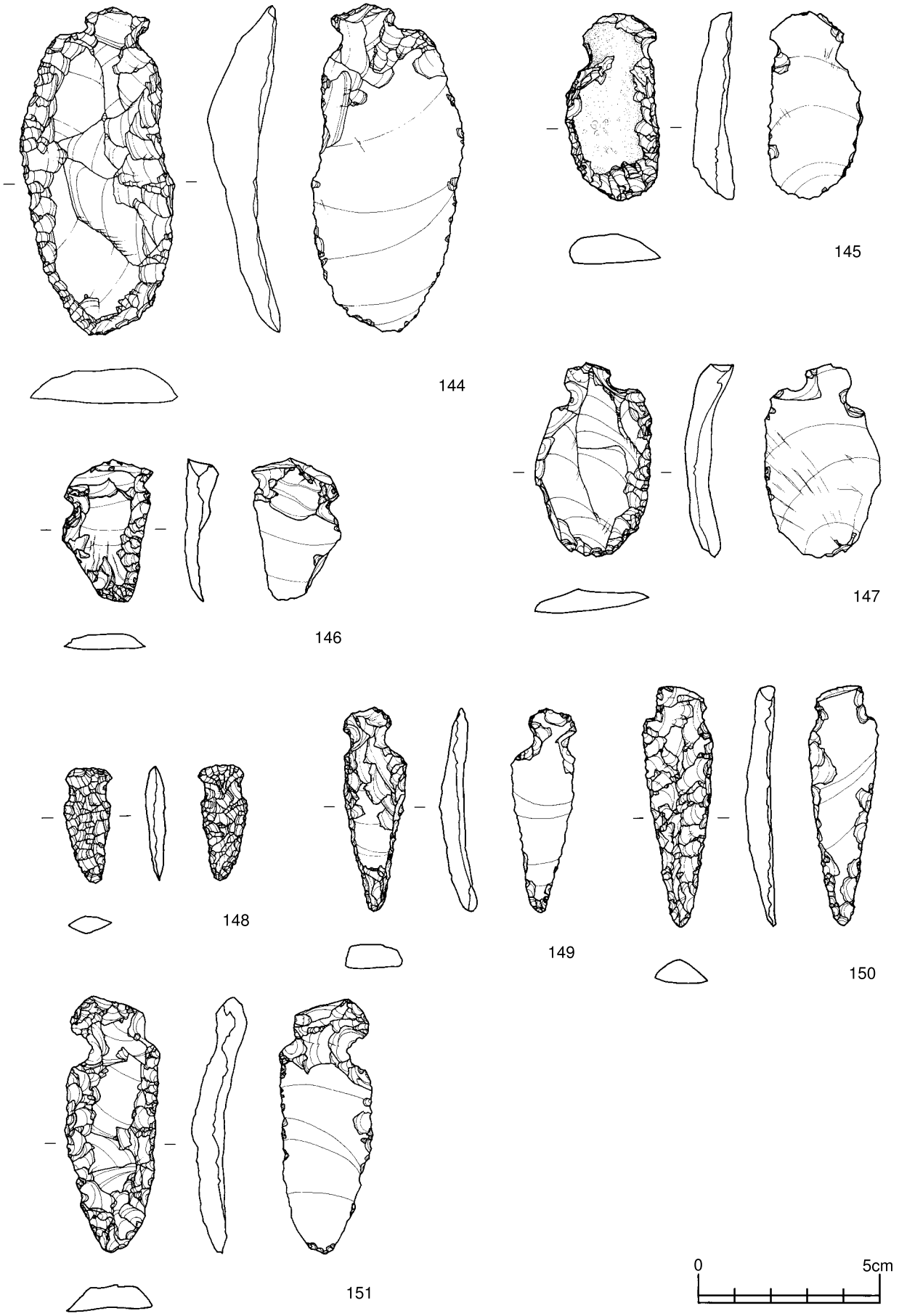




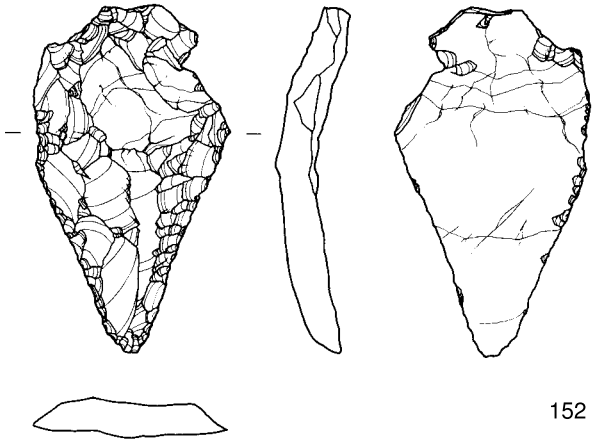


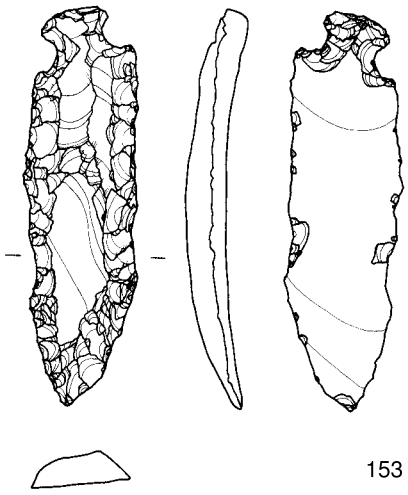


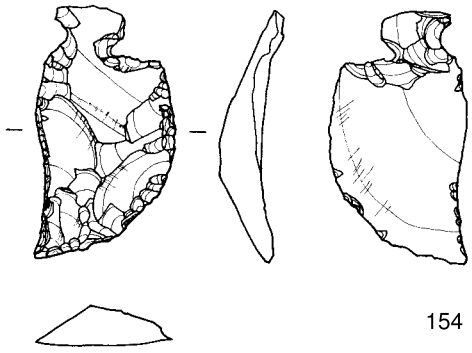
第131図　遺構外出土石器（11）

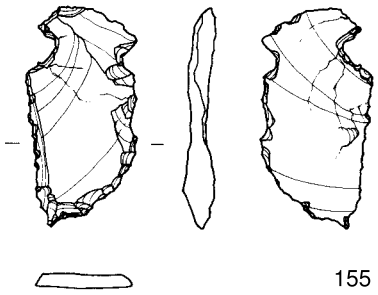


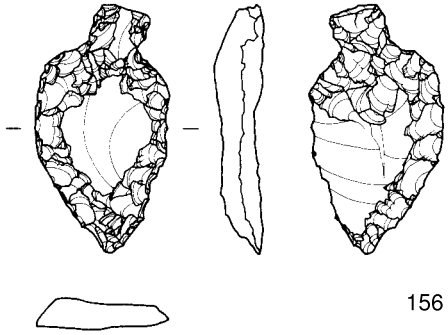
第132図　遺構外出土石器（12）

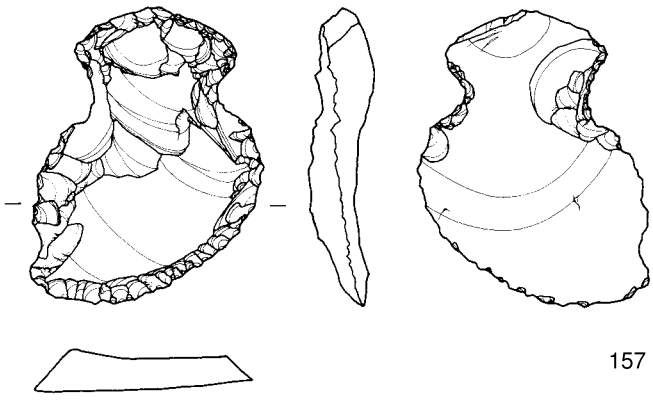


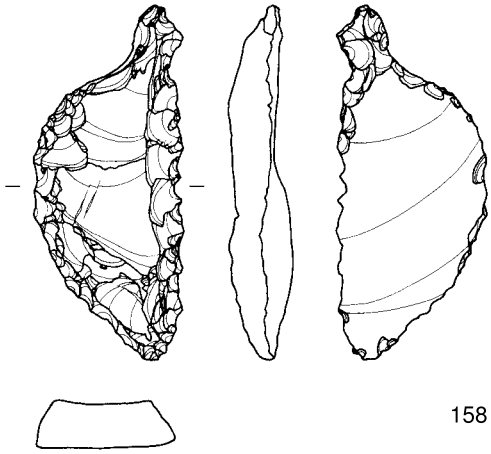


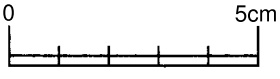




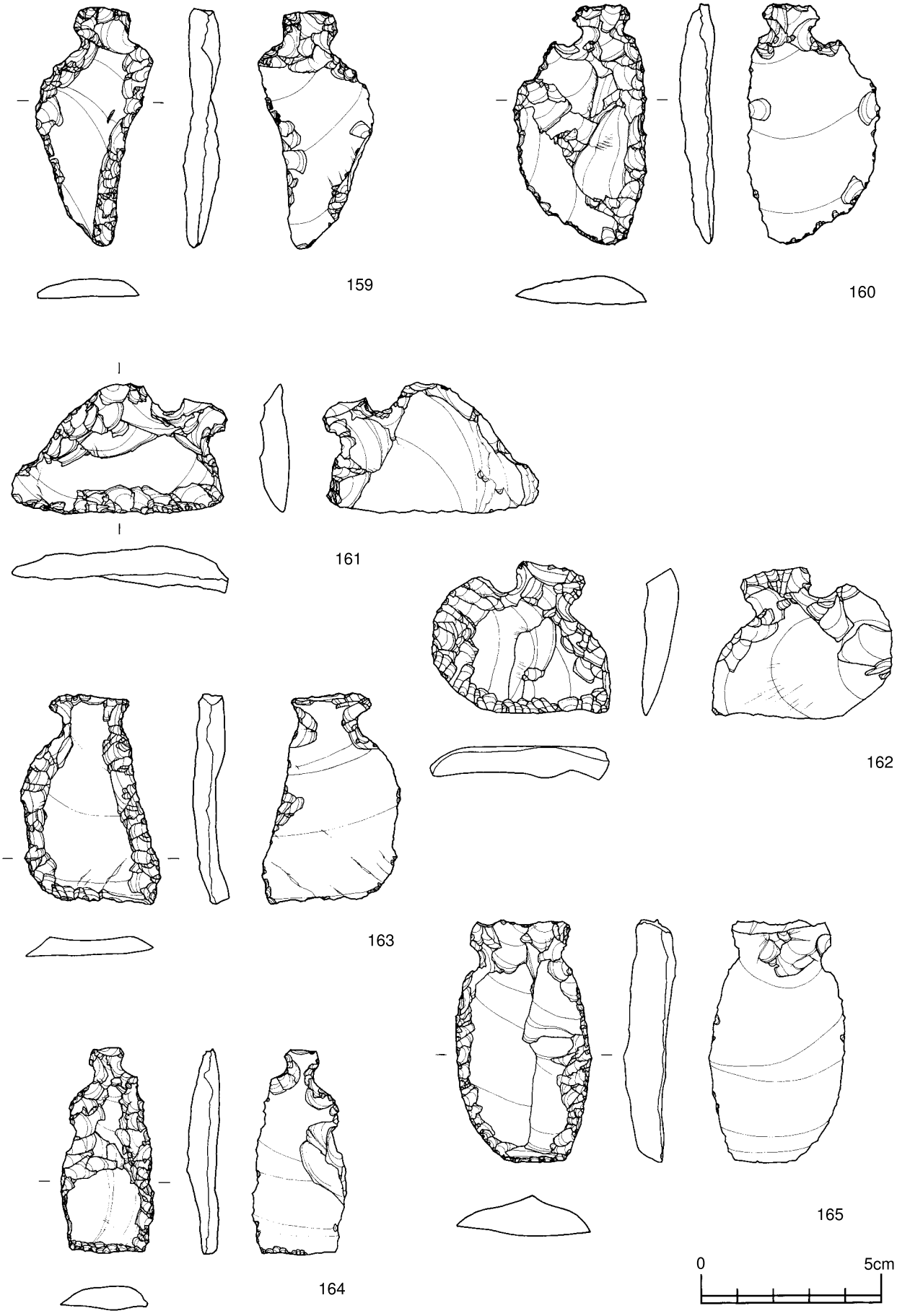




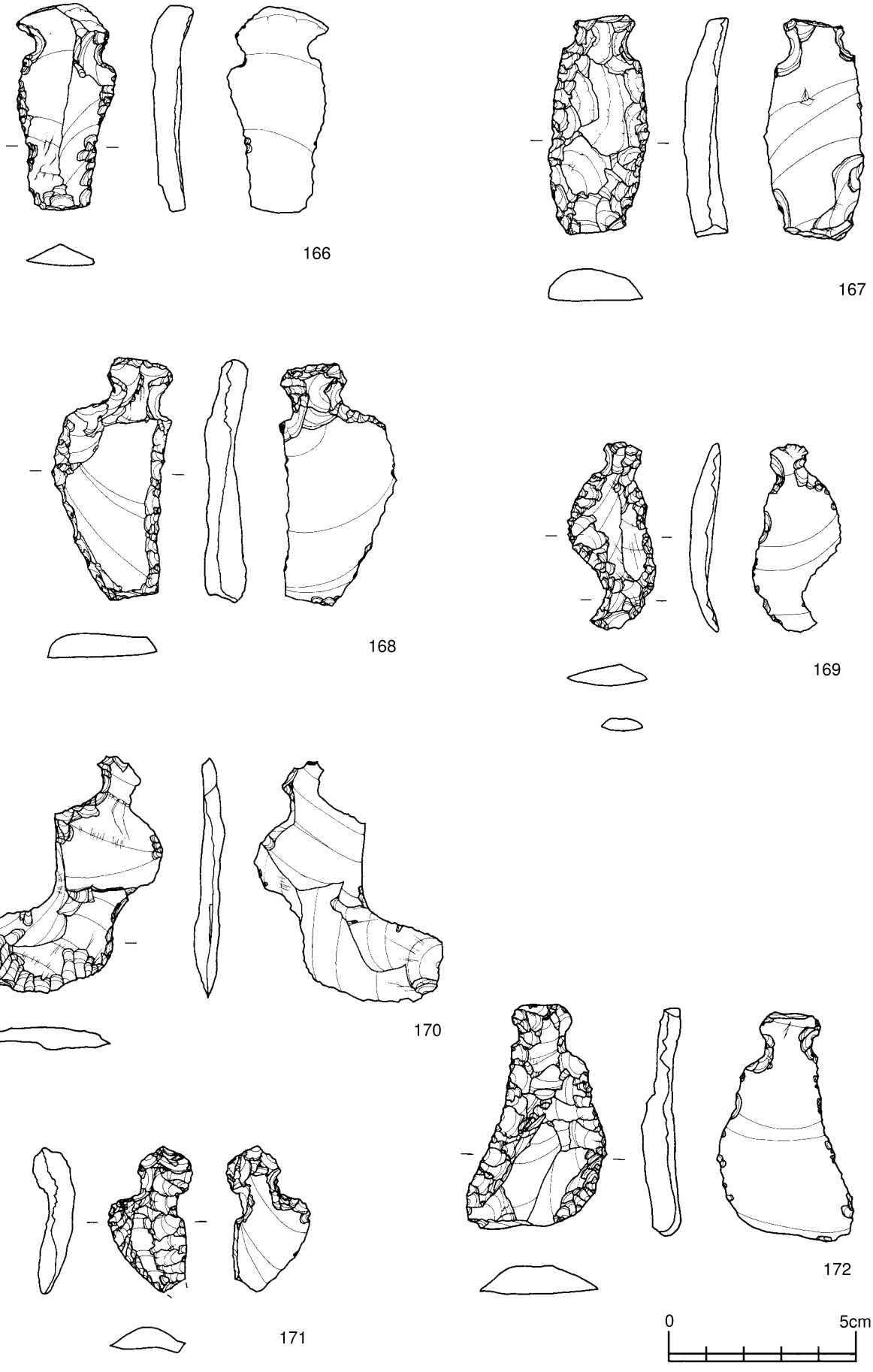




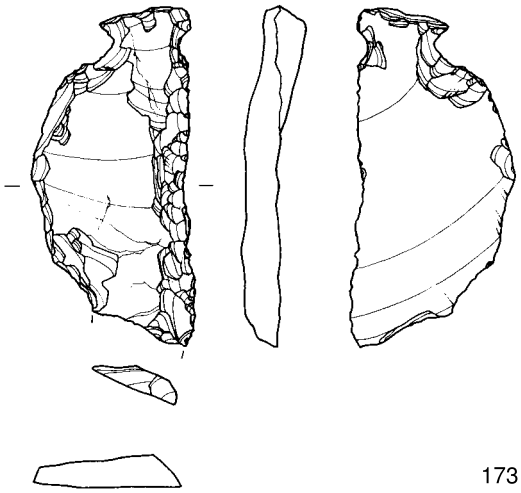
第133図　遺構外出土石器（13）



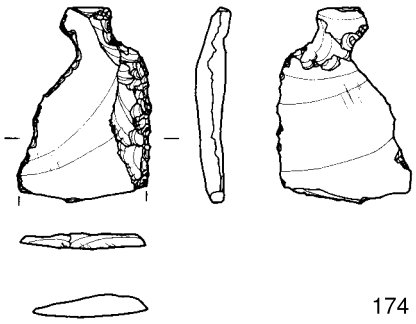
第134図　遺構外出土石器（14）



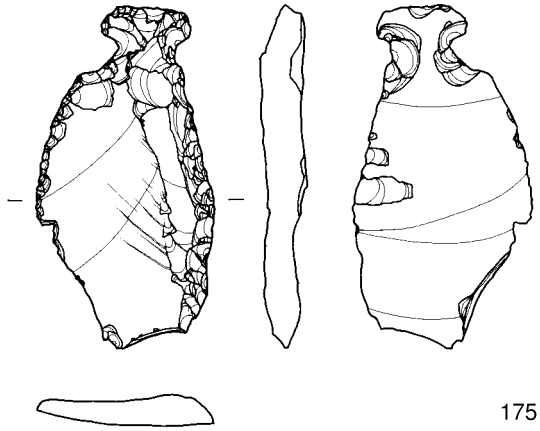
第135図　遺構外出土石器（15）



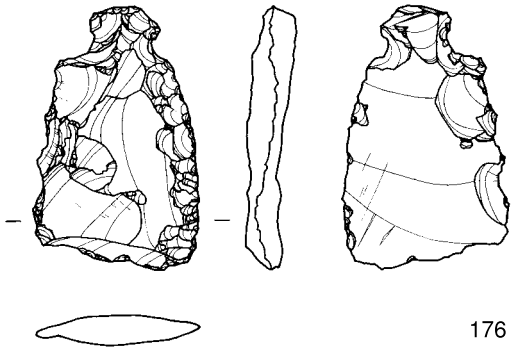
173



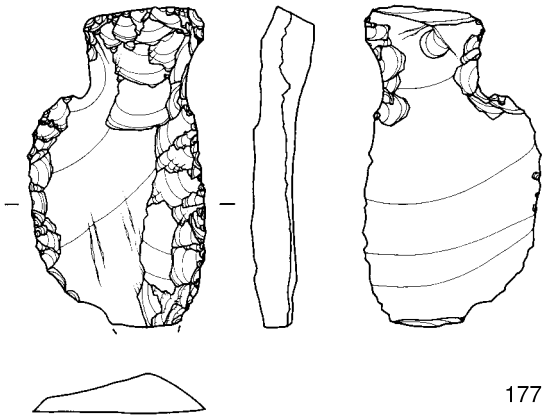
174



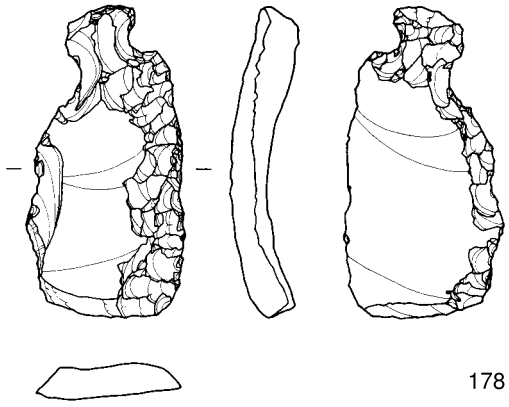
175



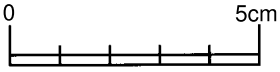
176



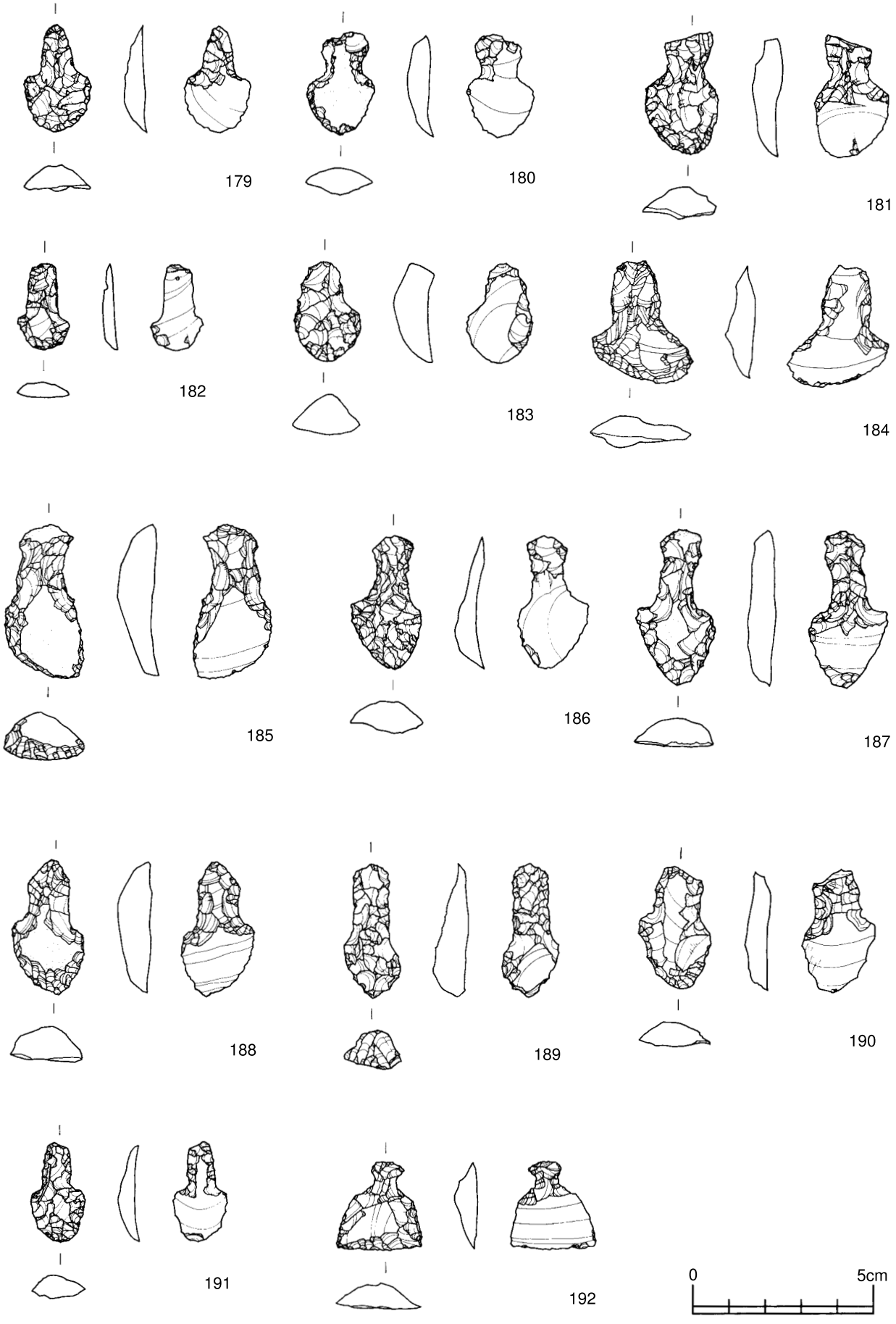
177



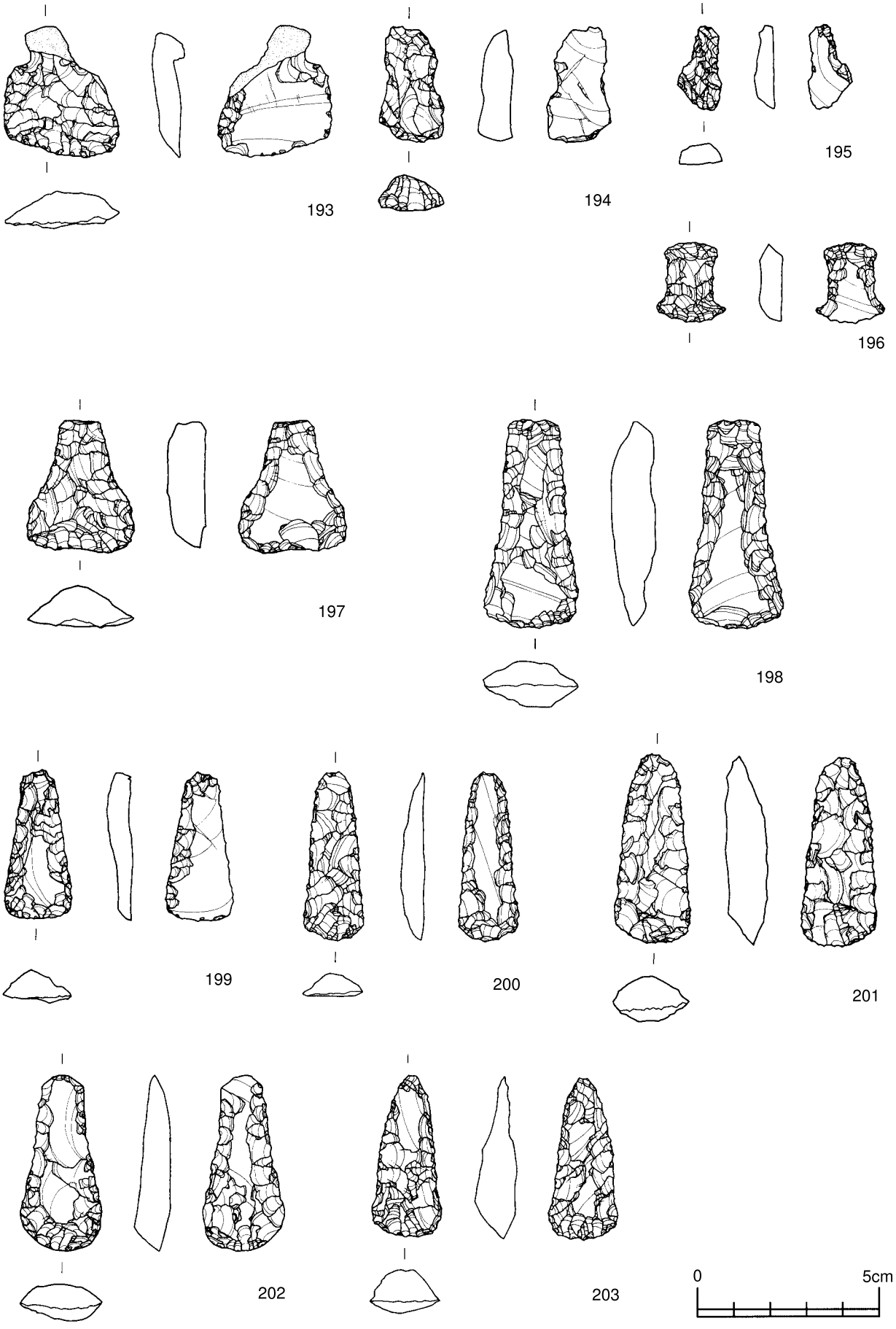
178



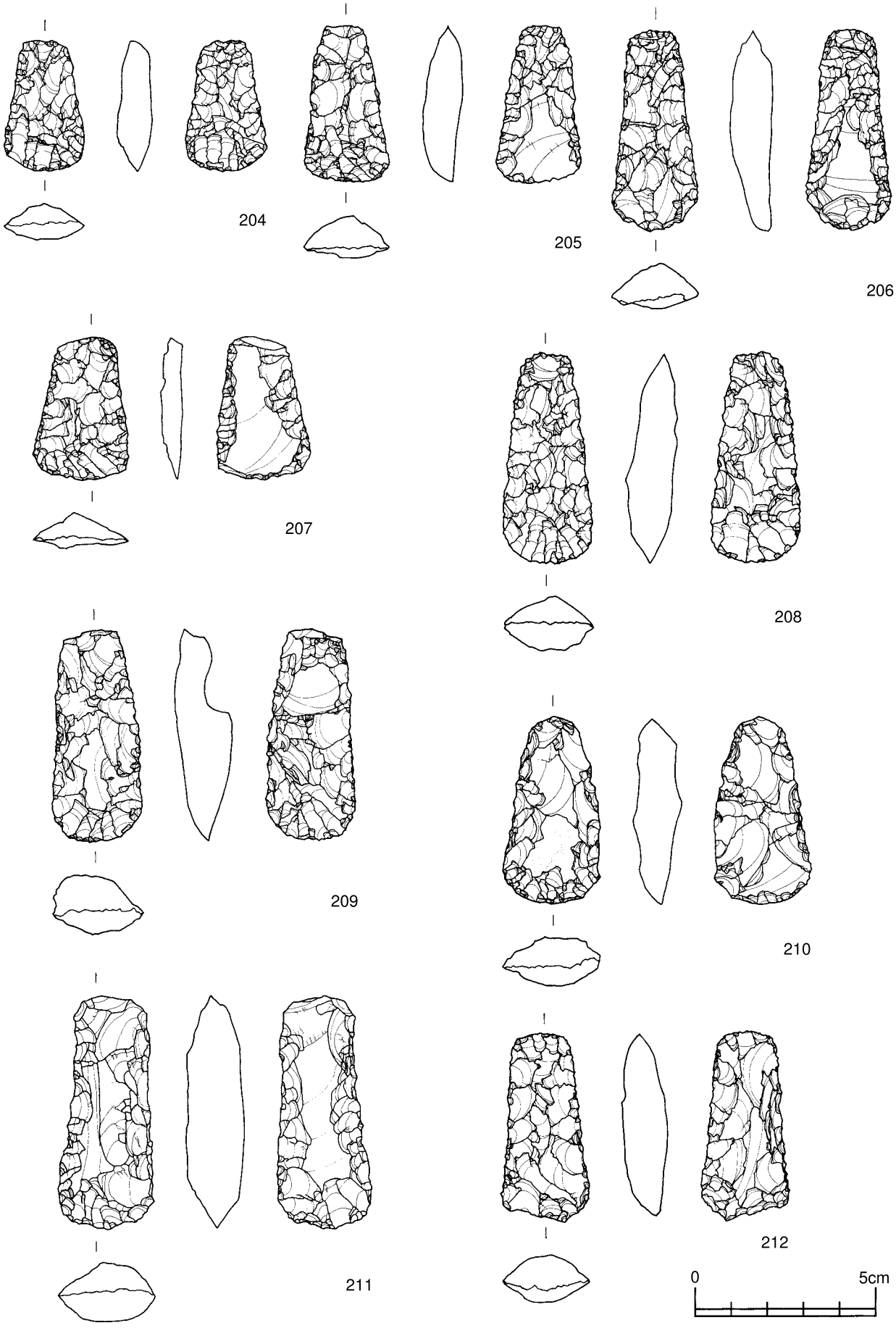
第136図　遺構外出土石器（16）



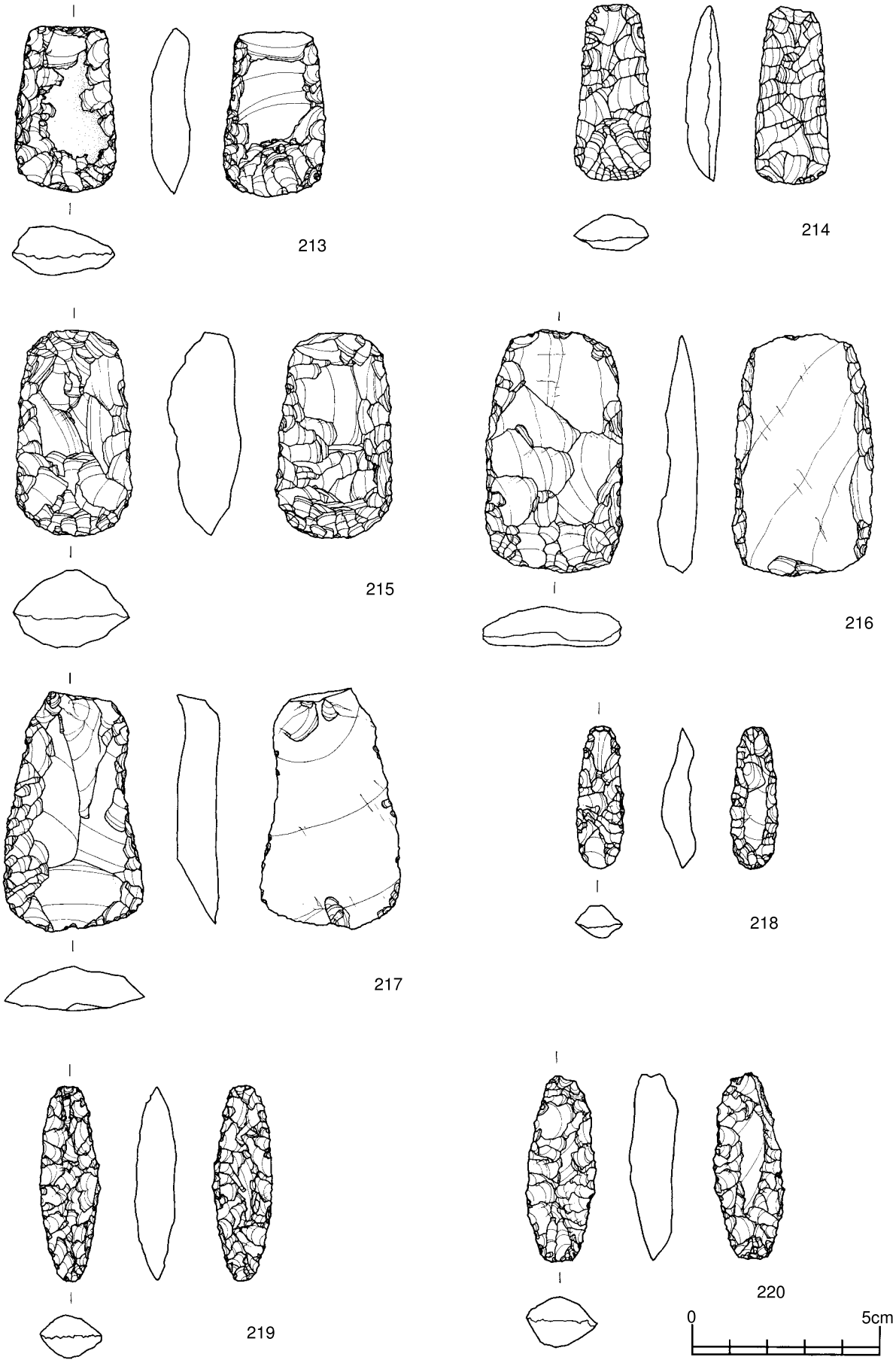
第137図　遺構外出土石器（17）



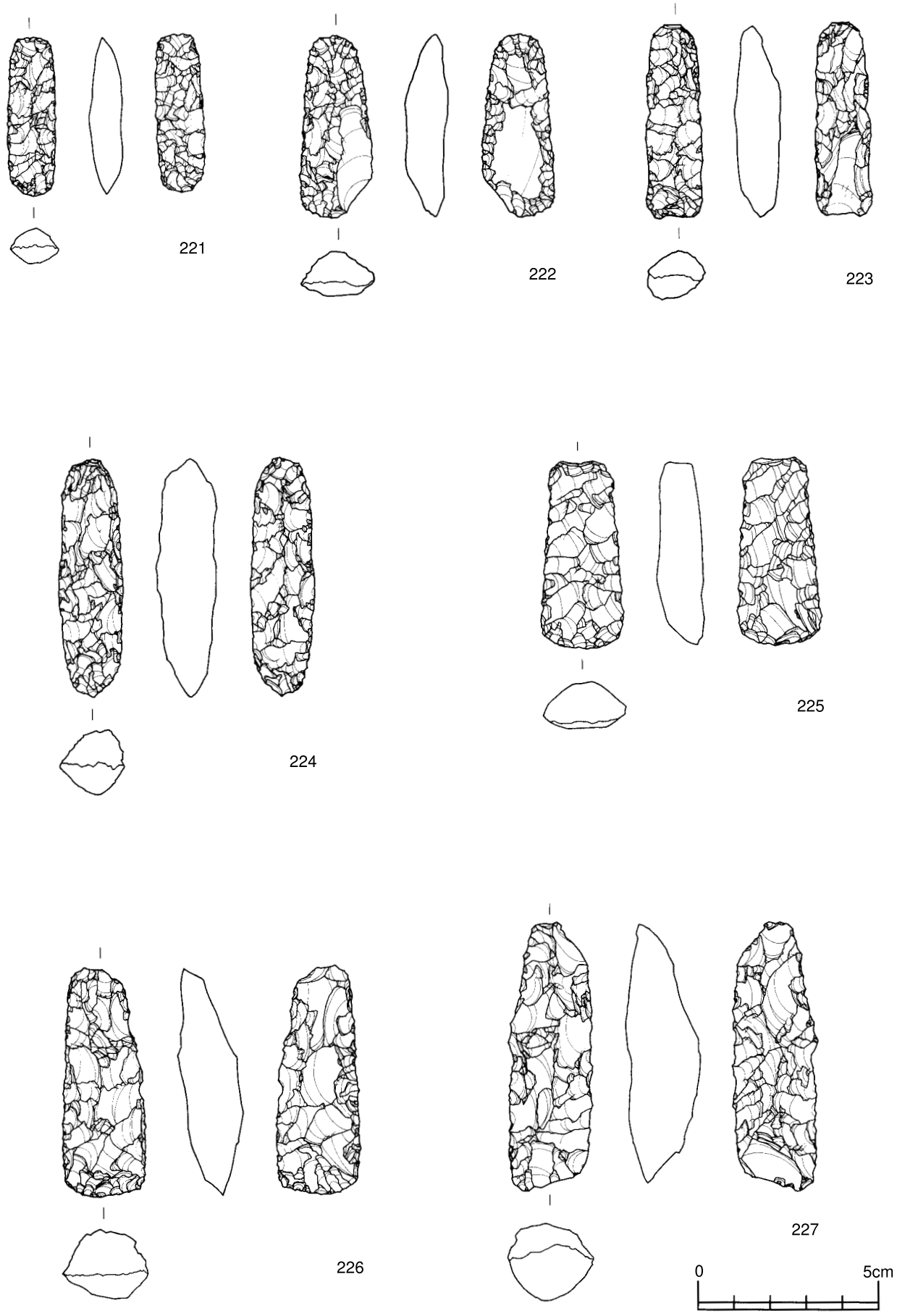
第138図　遺構外出土石器（18）



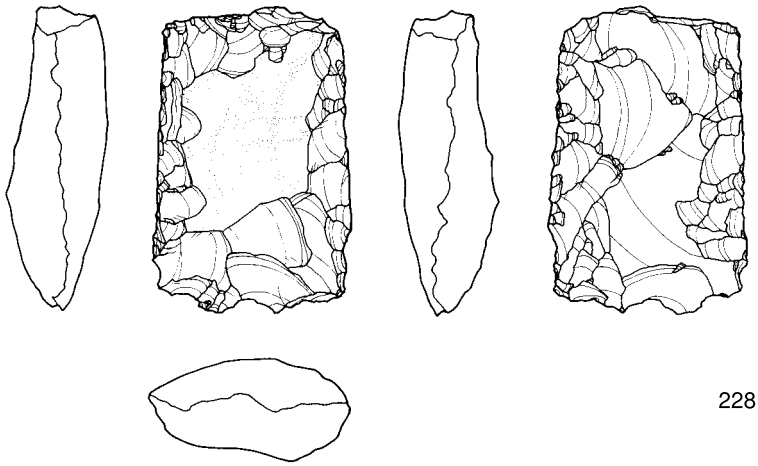
第139図　遺構外出土石器（19）

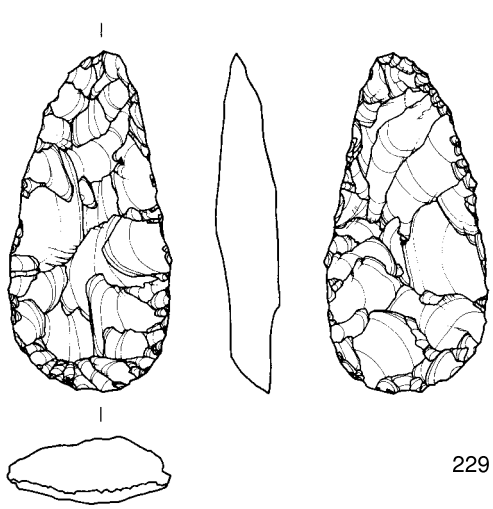


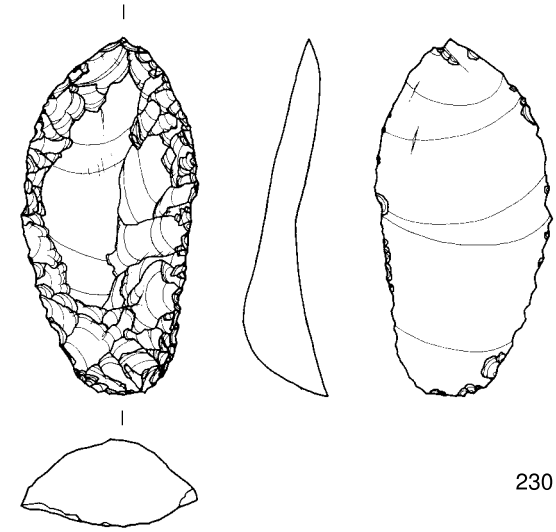
第140図　遺構外出土石器（20）

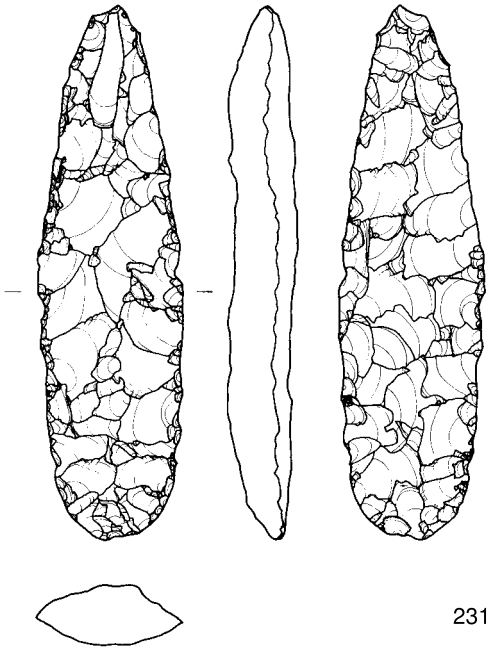


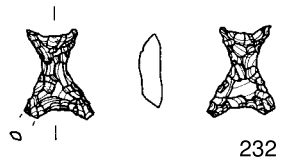
第141図　遺構外出土石器（21）

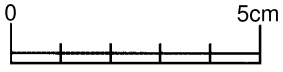




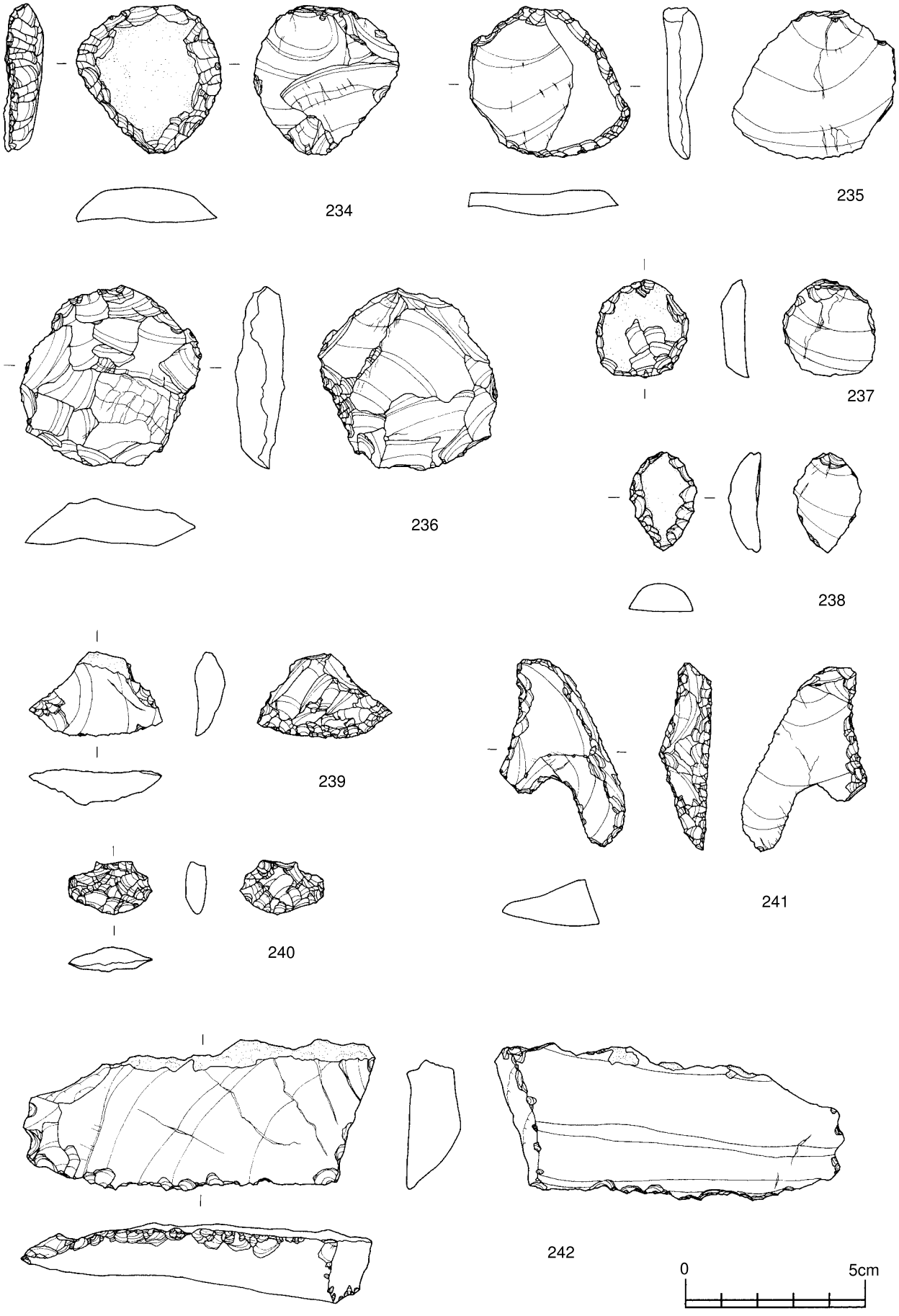




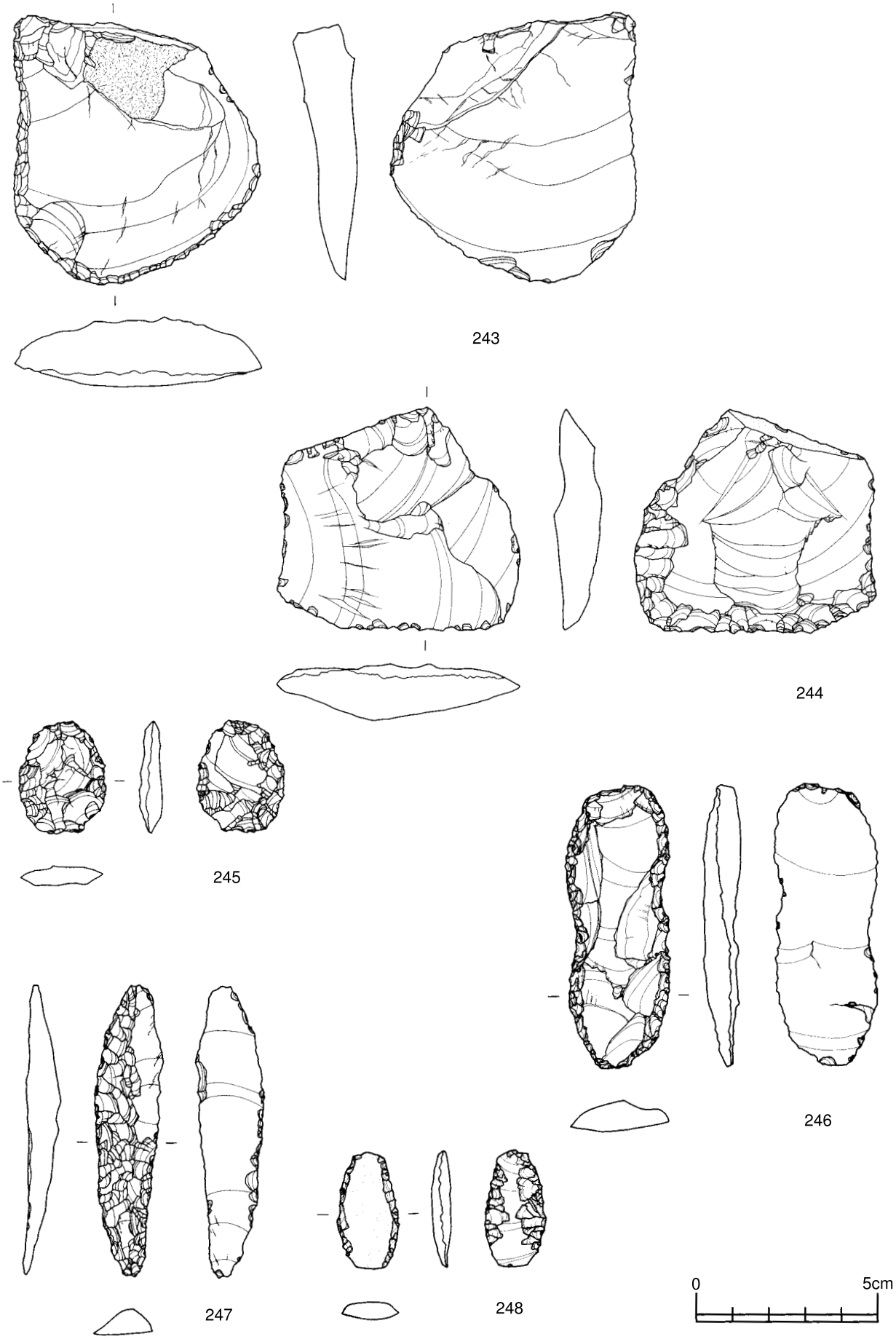




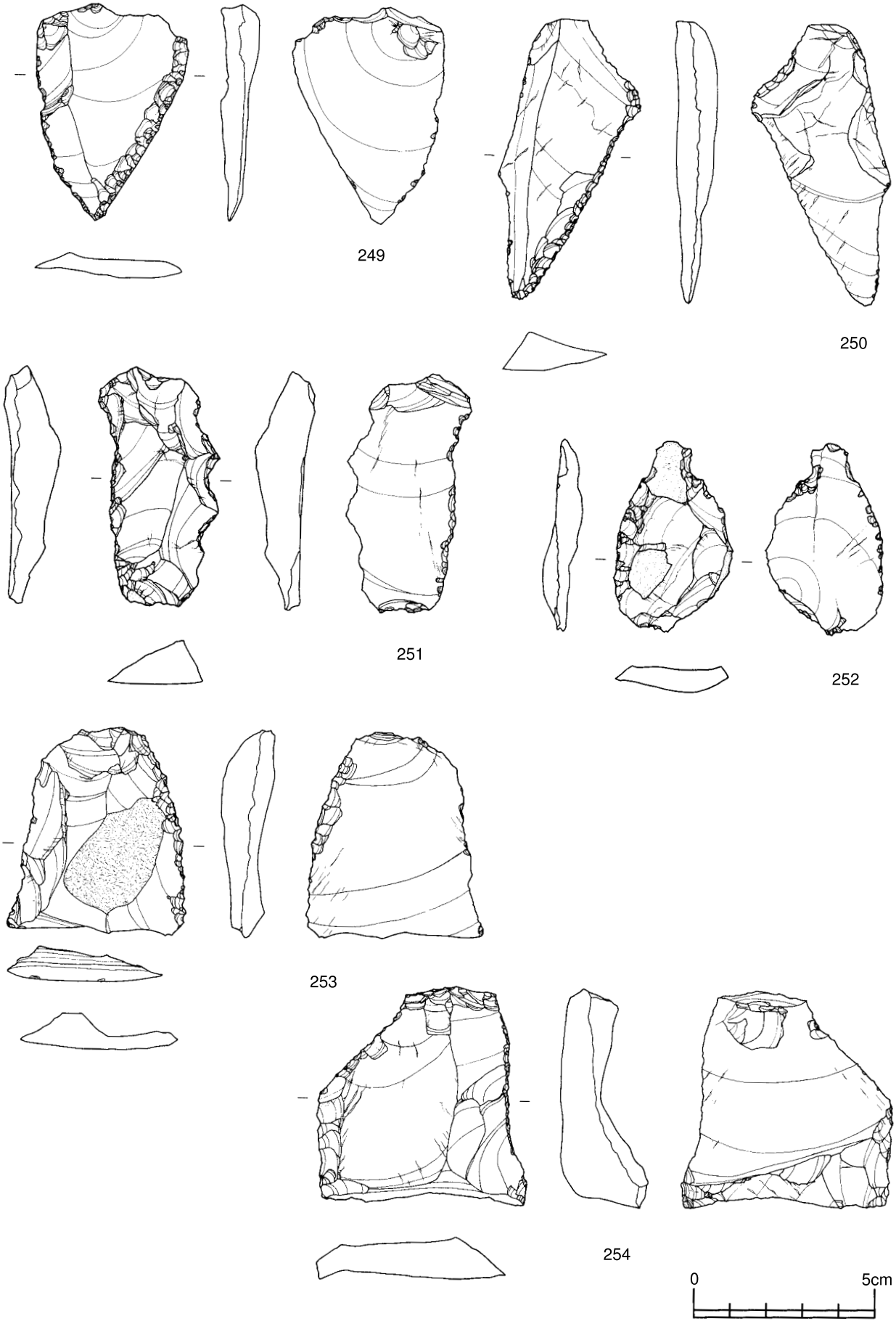
第142図　遺構外出土石器（22）



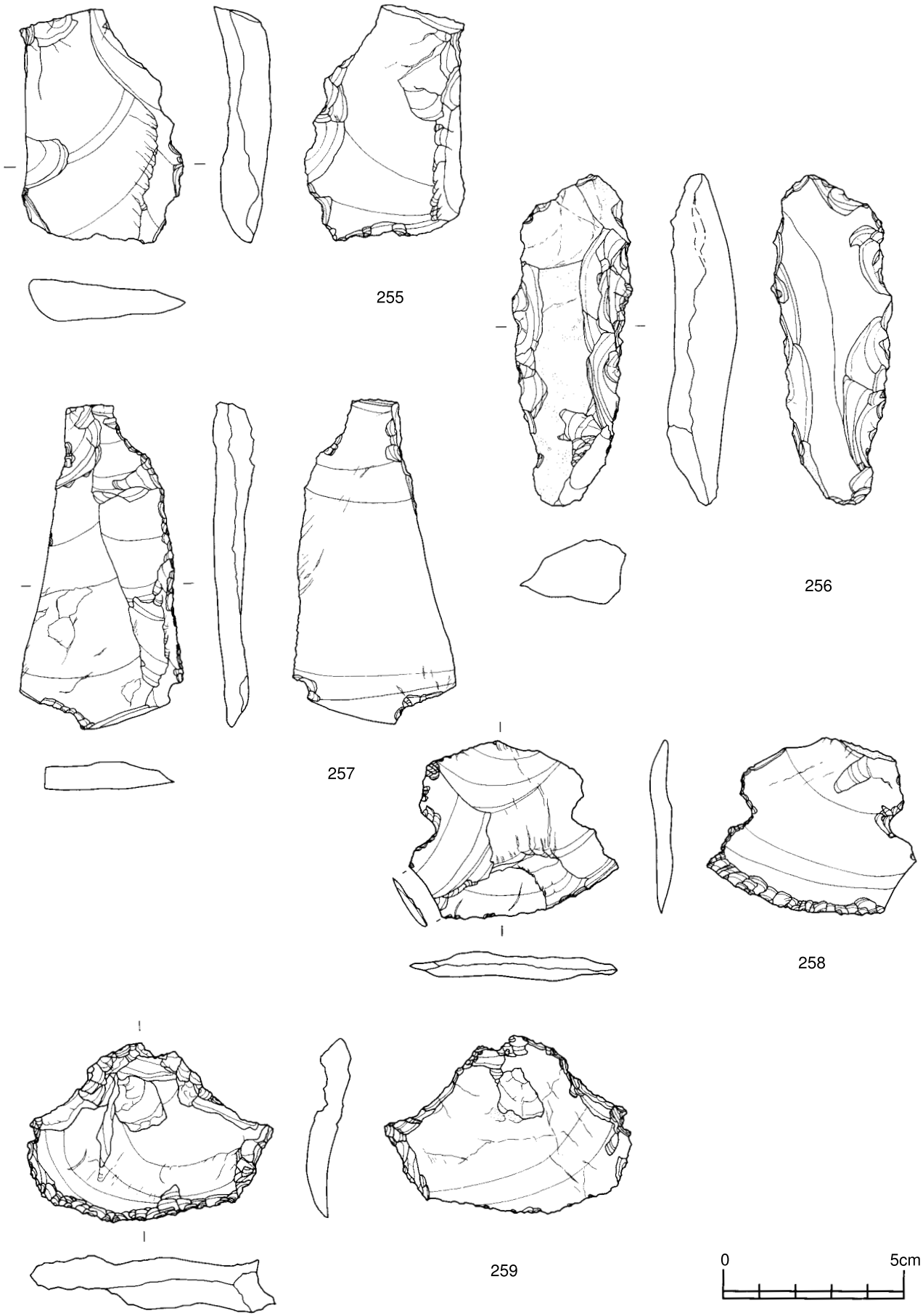
第143図　遺構外出土石器（23）



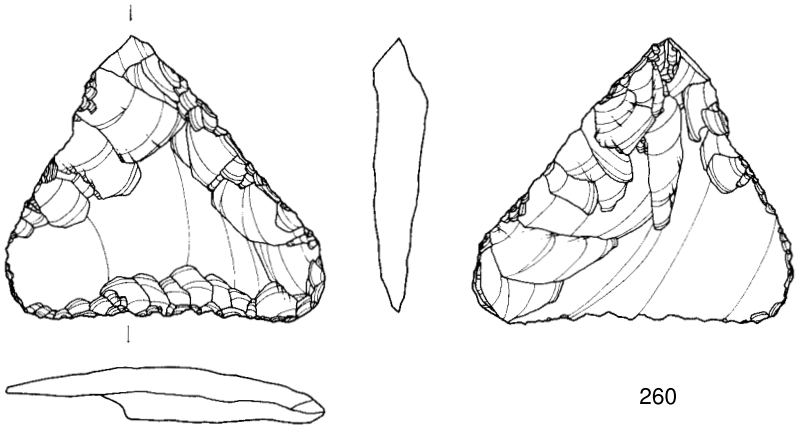
第144図　遺構外出土石器（24）

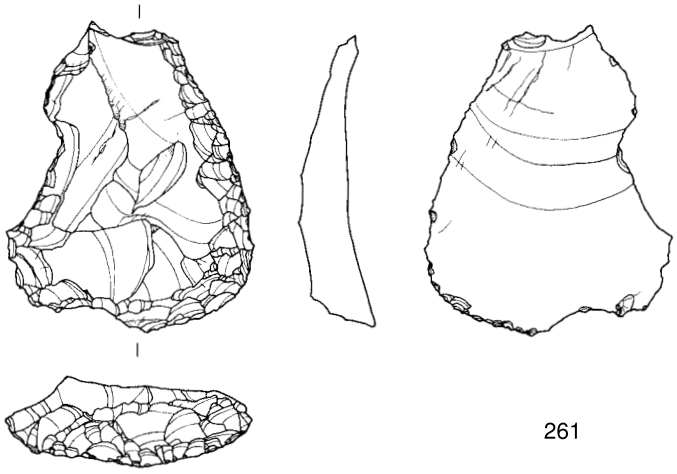


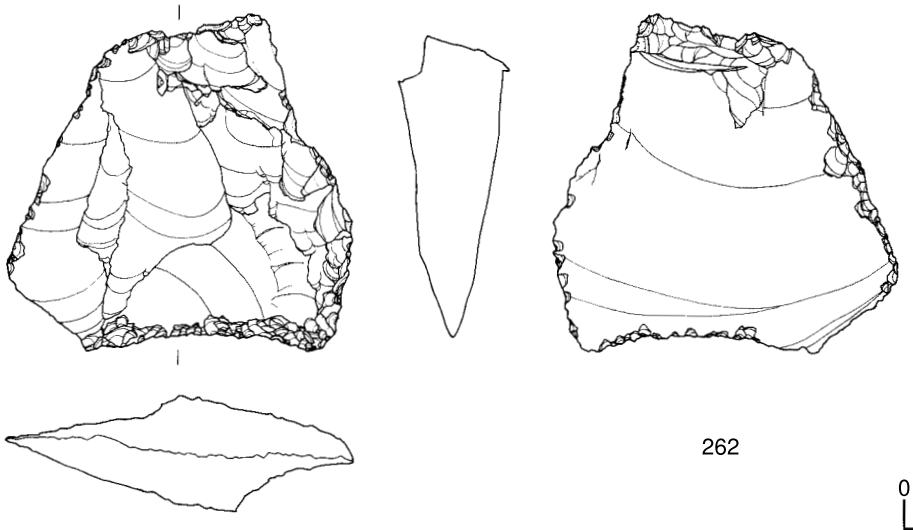
第145図　遺構外出土石器（25）



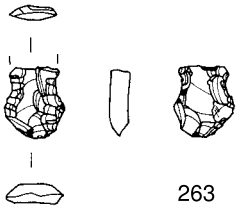
第146図　遺構外出土石器（26）



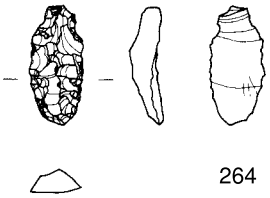




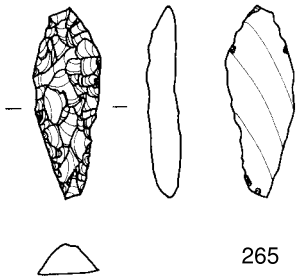
第147図　遺構外出土石器（27）



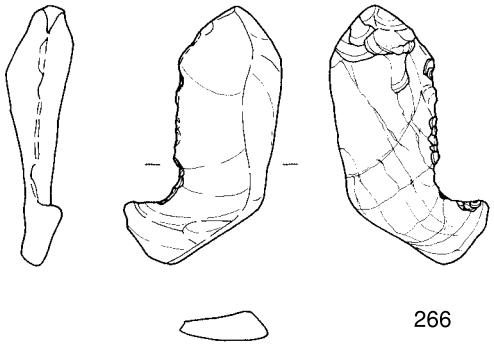
263



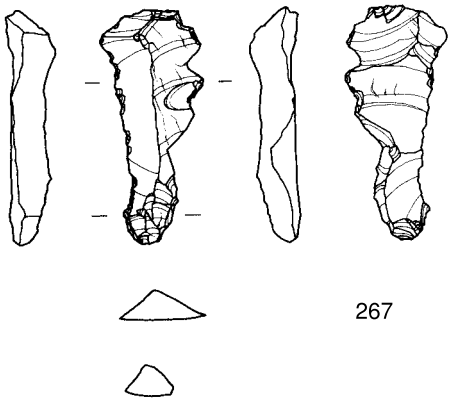
264



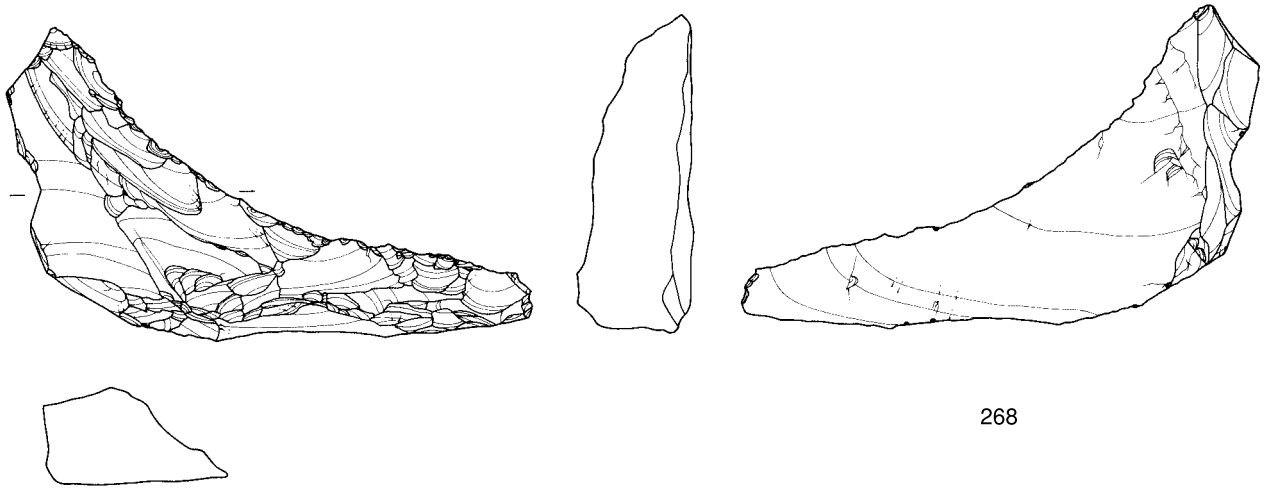
265



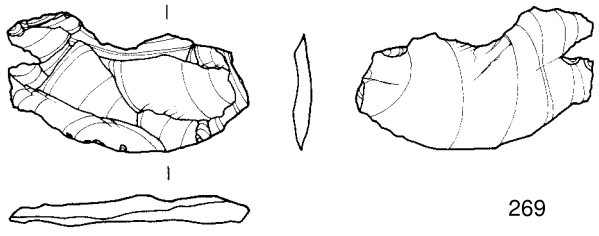
266



267



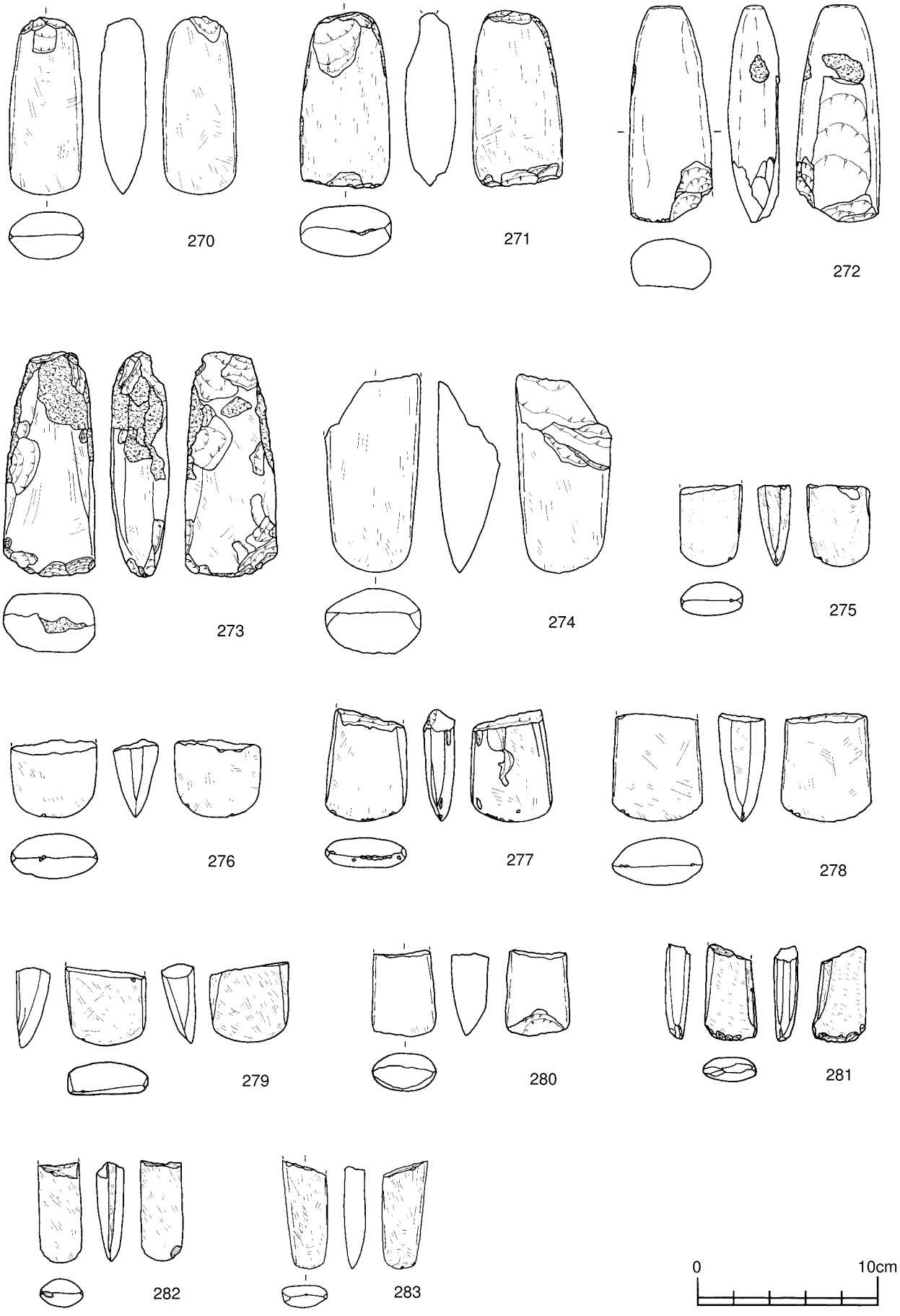
268



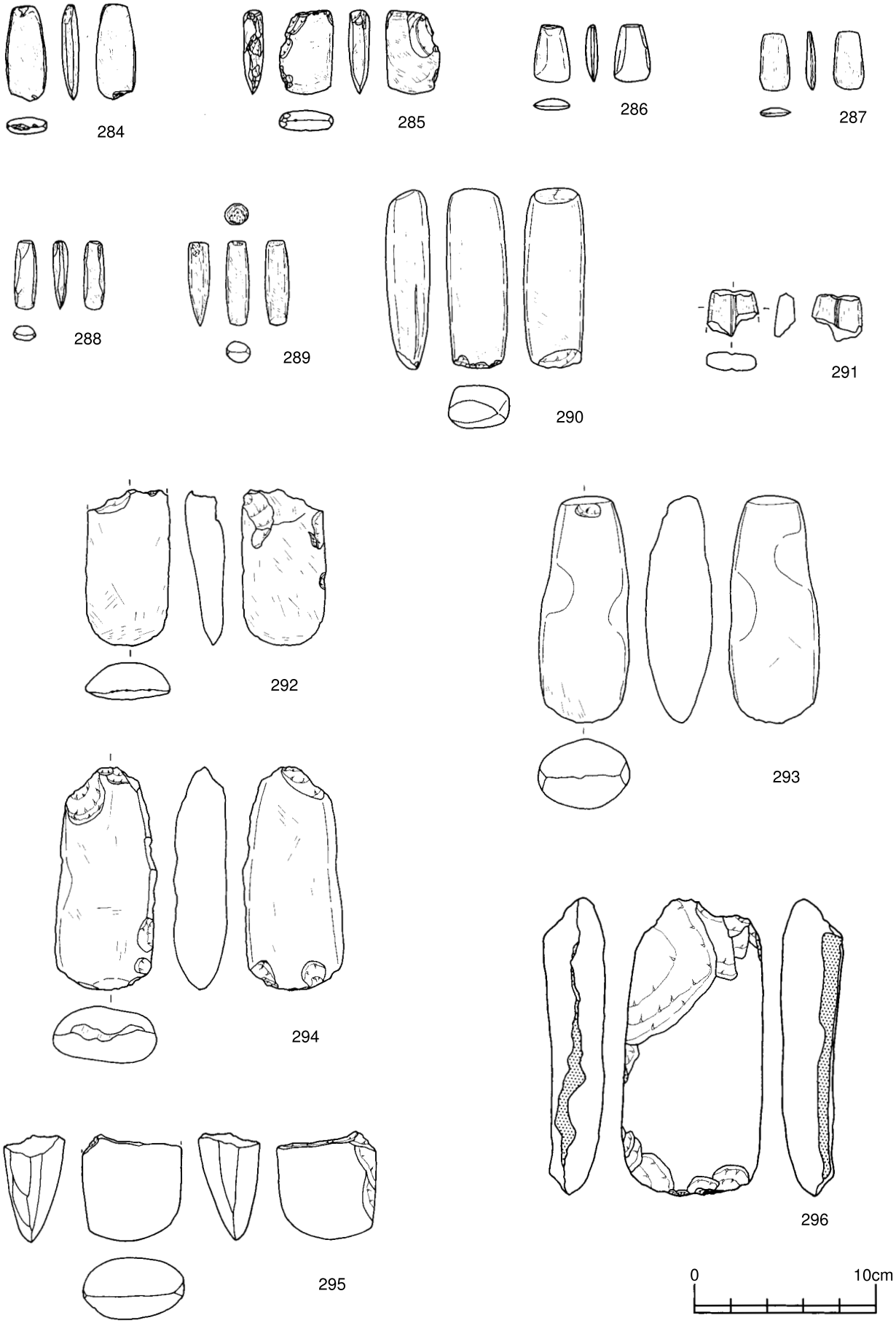
269

0　5cm

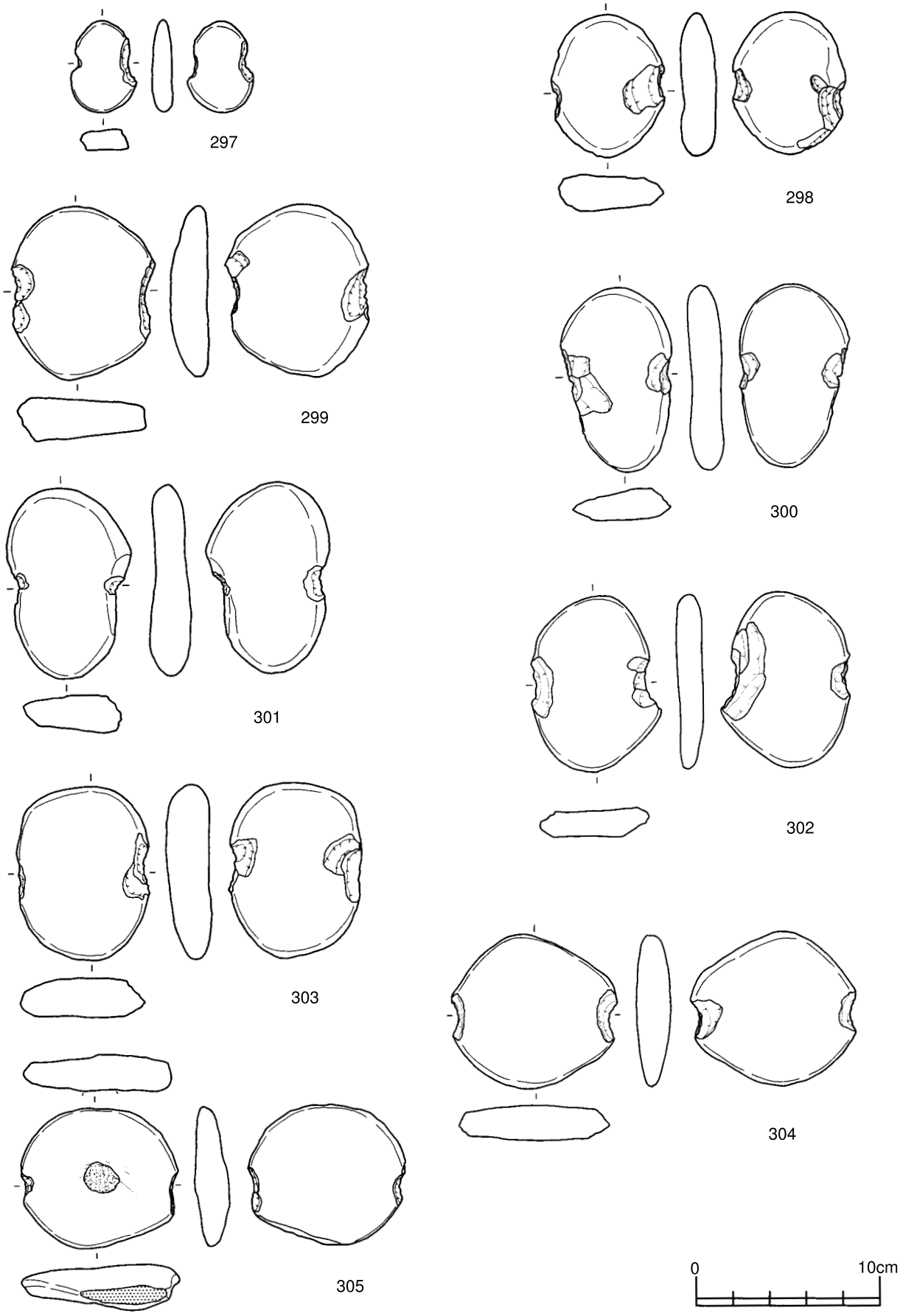
第148図　遺構外出土石器（28）



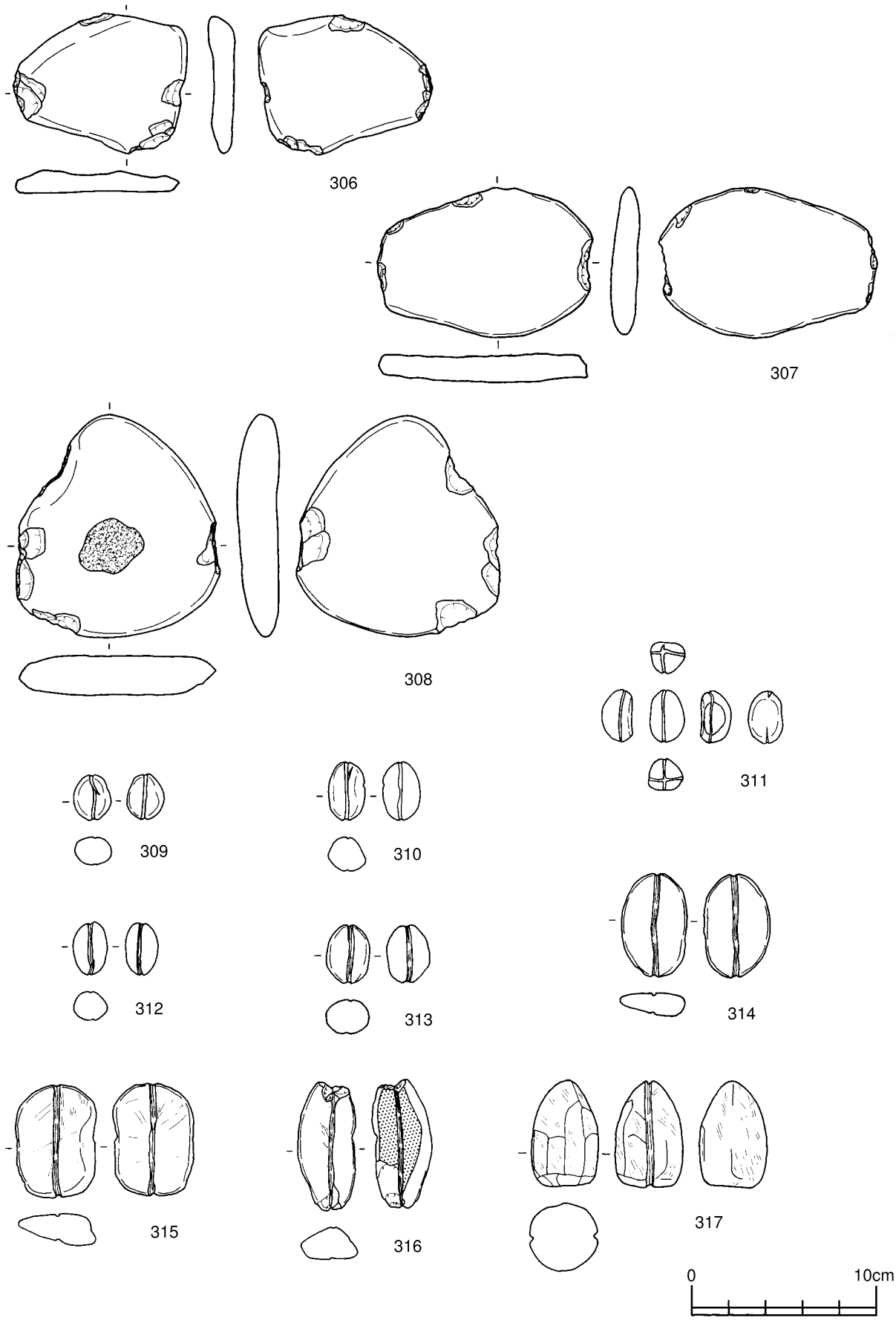
第149図　遺構外出土石器（29）



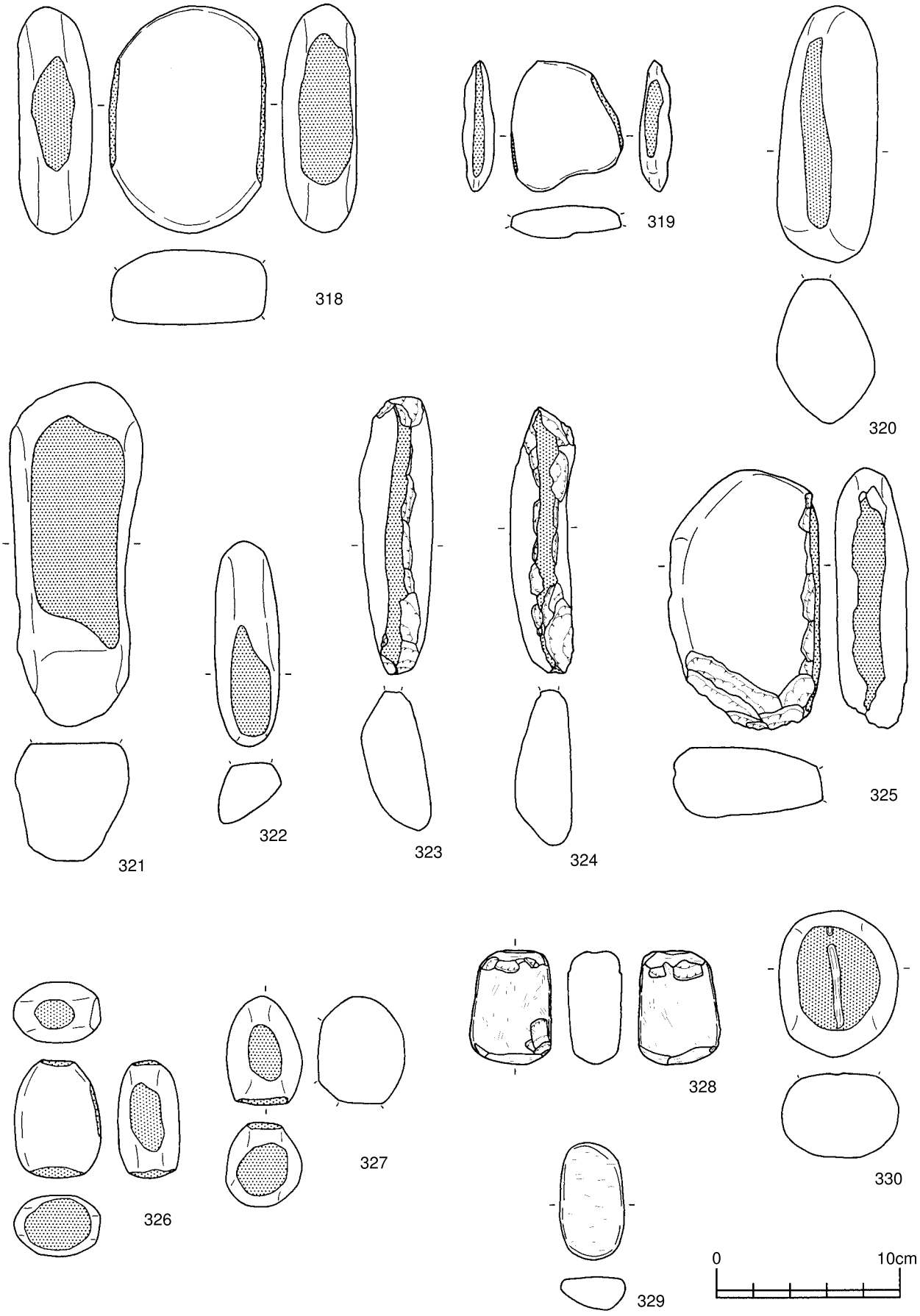
第150図　遺構外出土石器（30）



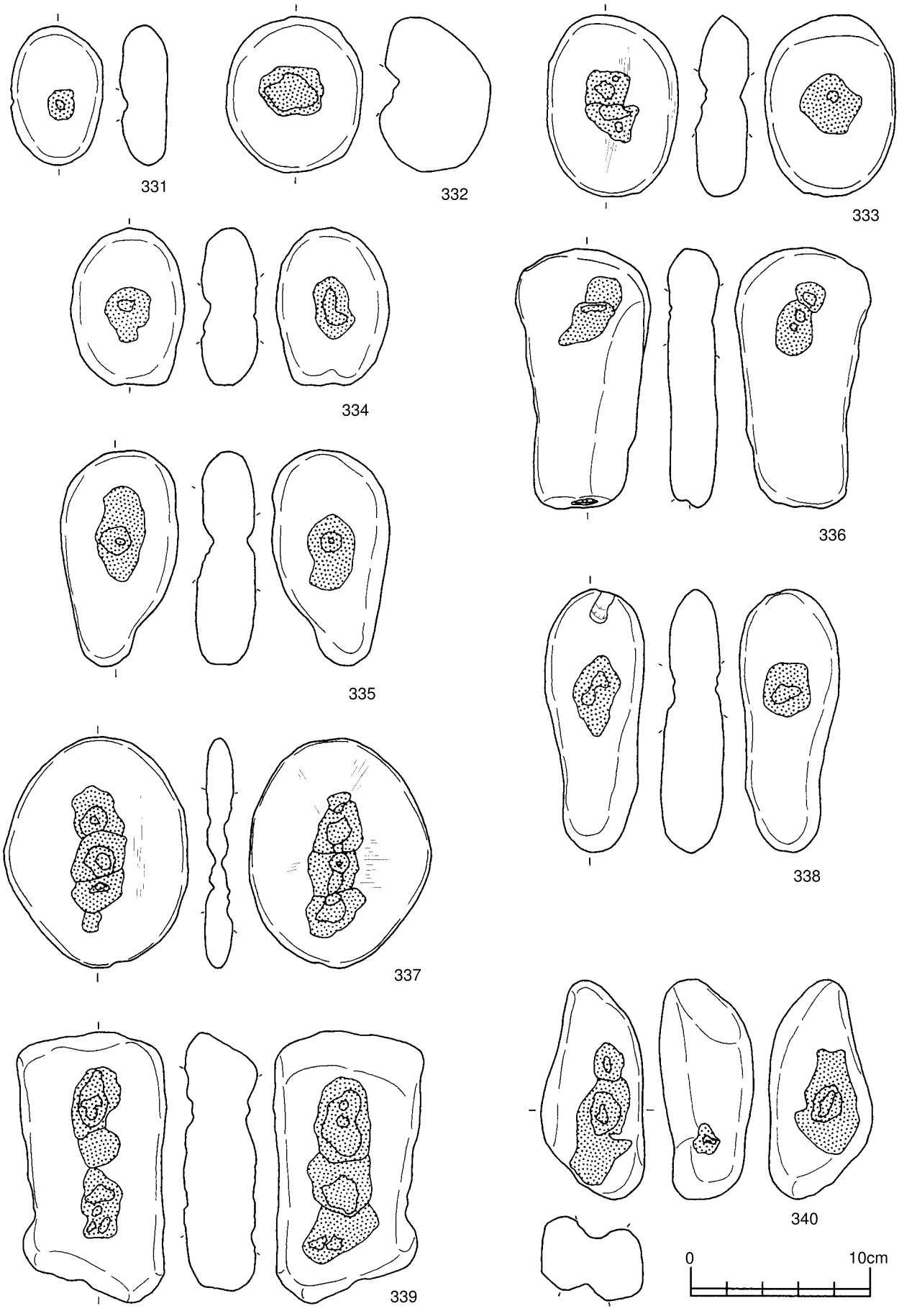
第151図　遺構外出土石器（31）



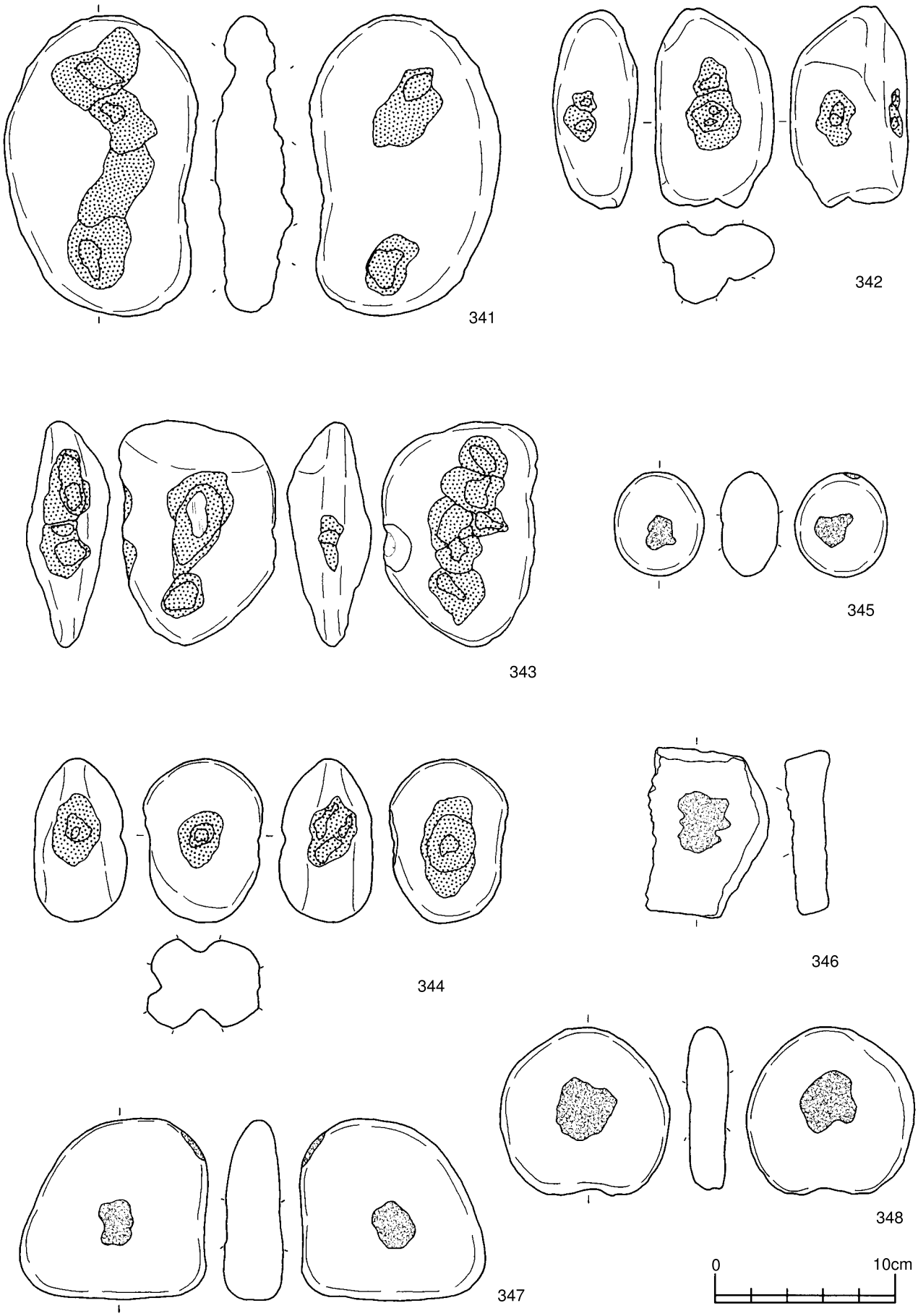
第152図　遺構外出土石器（32）



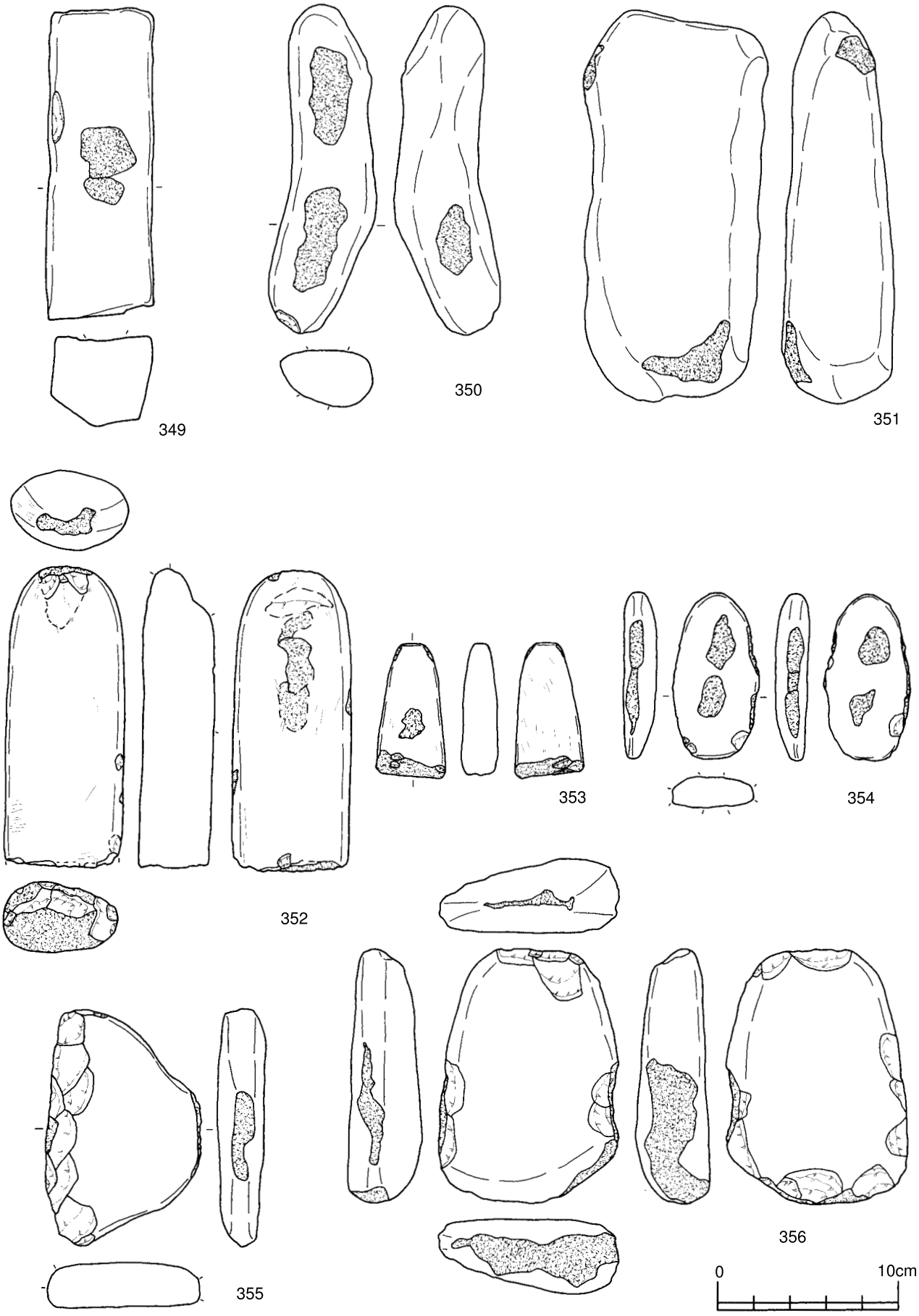
第153図　遺構外出土石器（33）



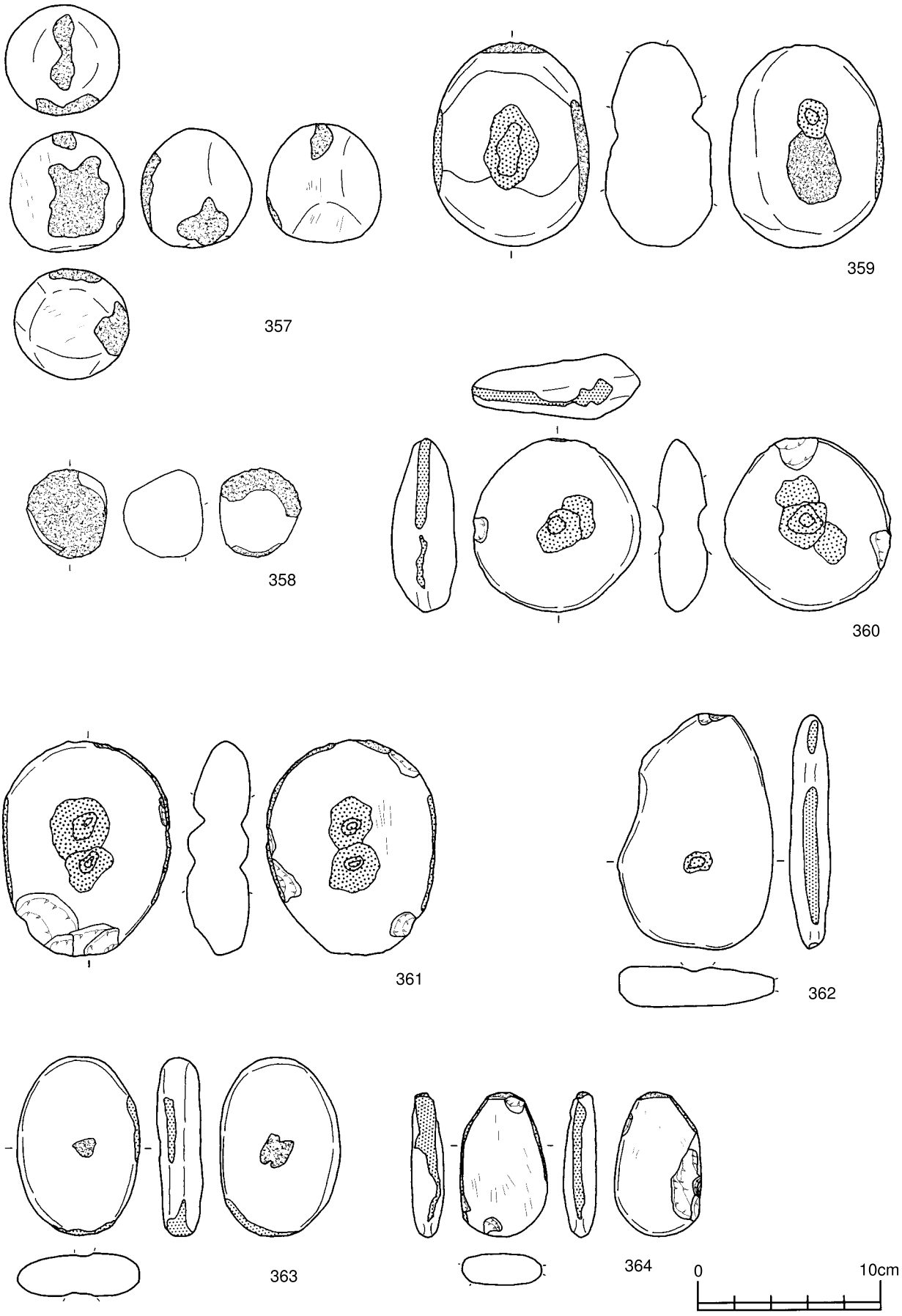
第154図　遺構外出土石器（34）



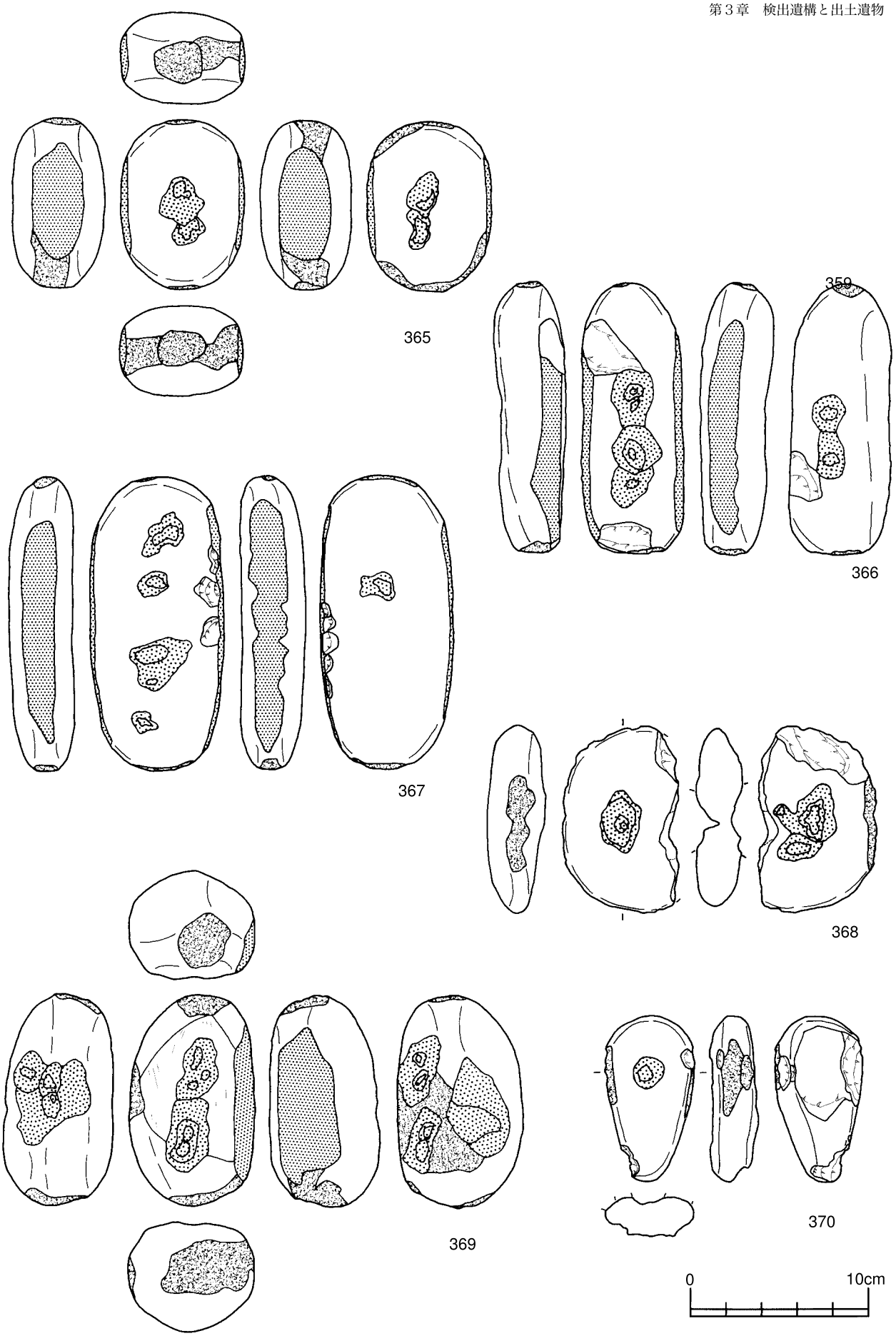
第155図　遺構外出土石器（35）



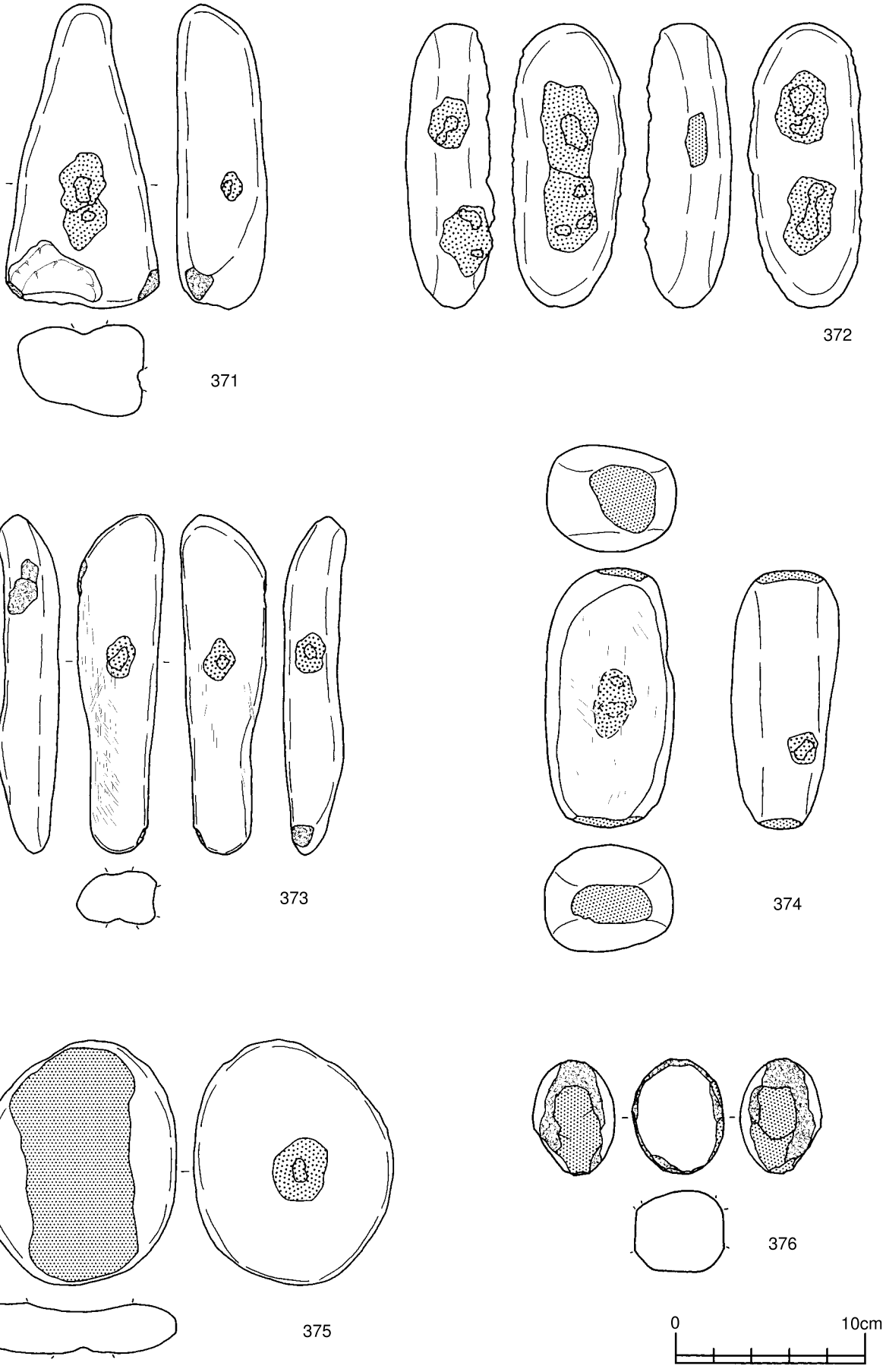
第156図　遺構外出土石器（36）



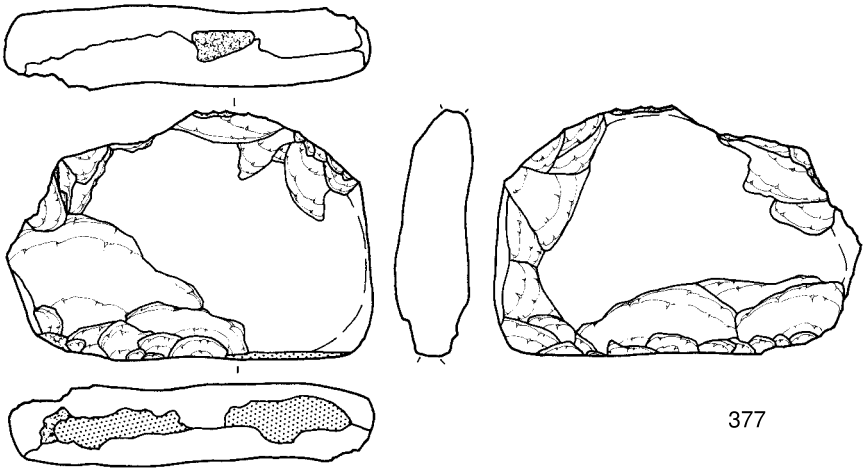
第157図　遺構外出土石器（37）

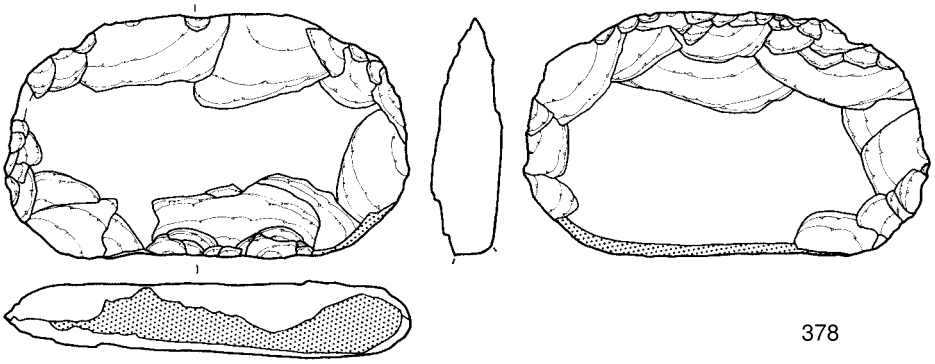


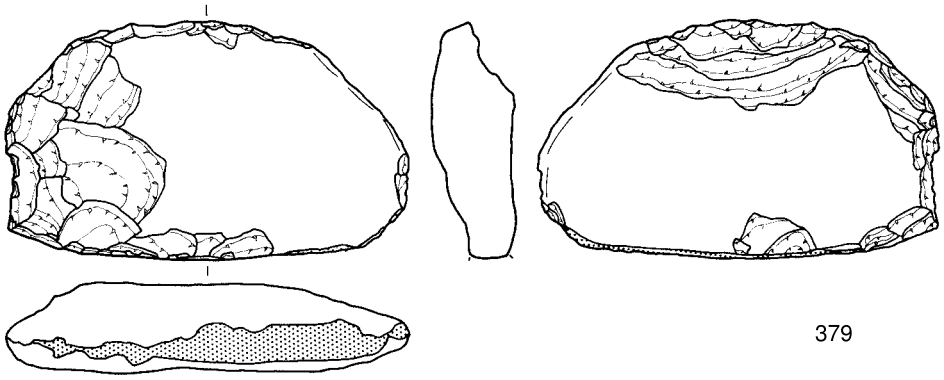
第158図　遺構外出土石器（38）

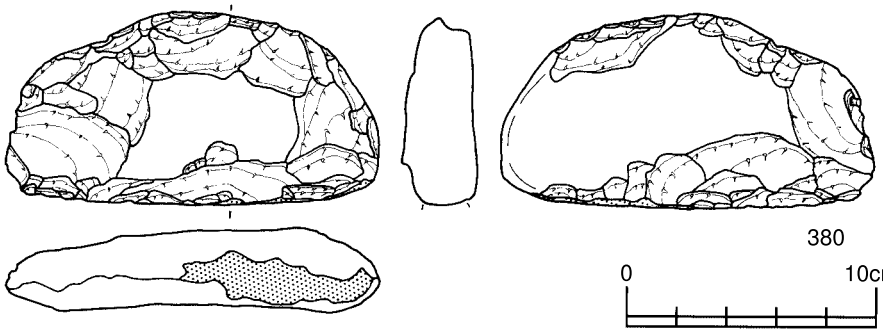


第159図　遺構外出土石器（39）

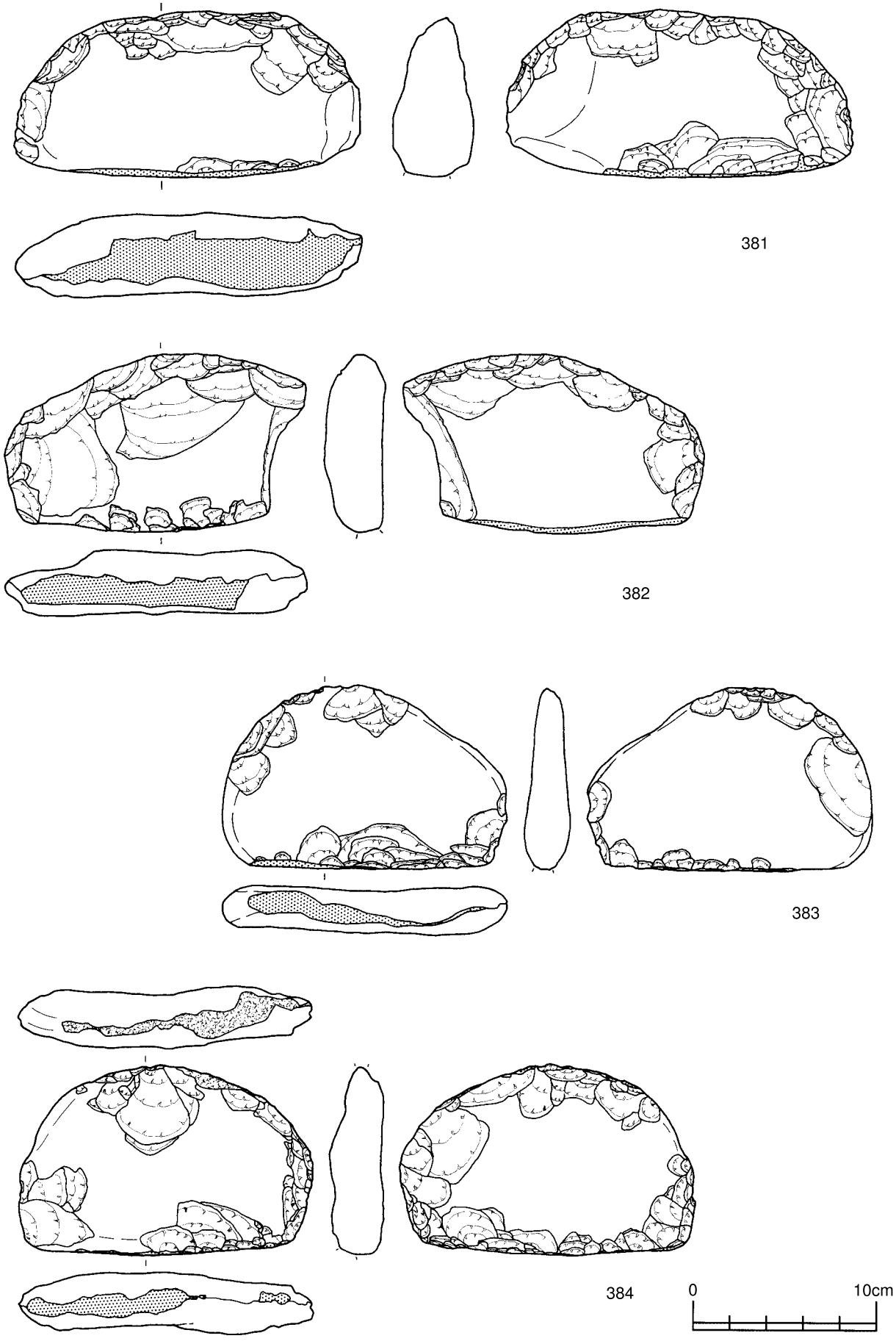




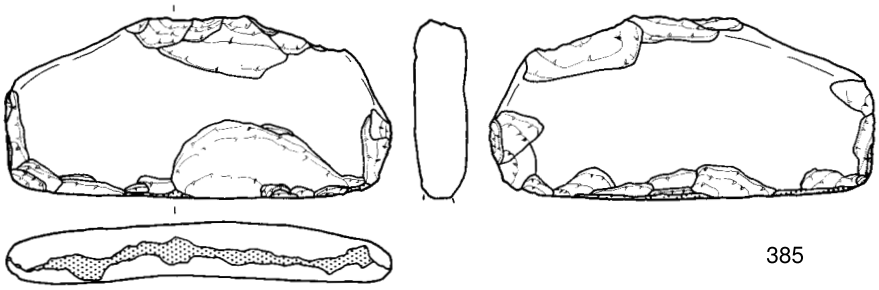




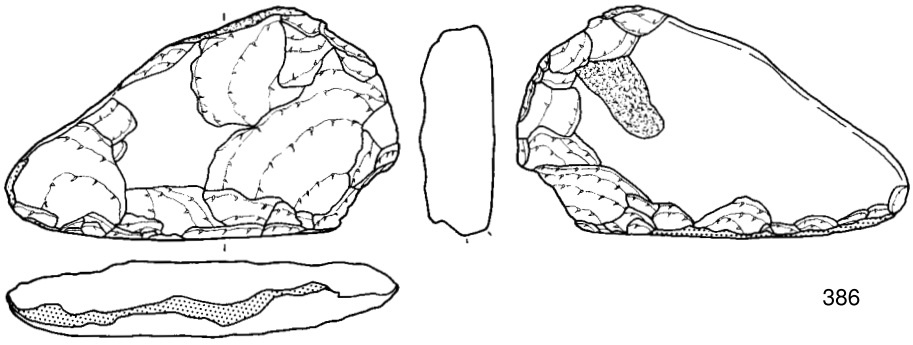
第160図　遺構外出土石器（40）



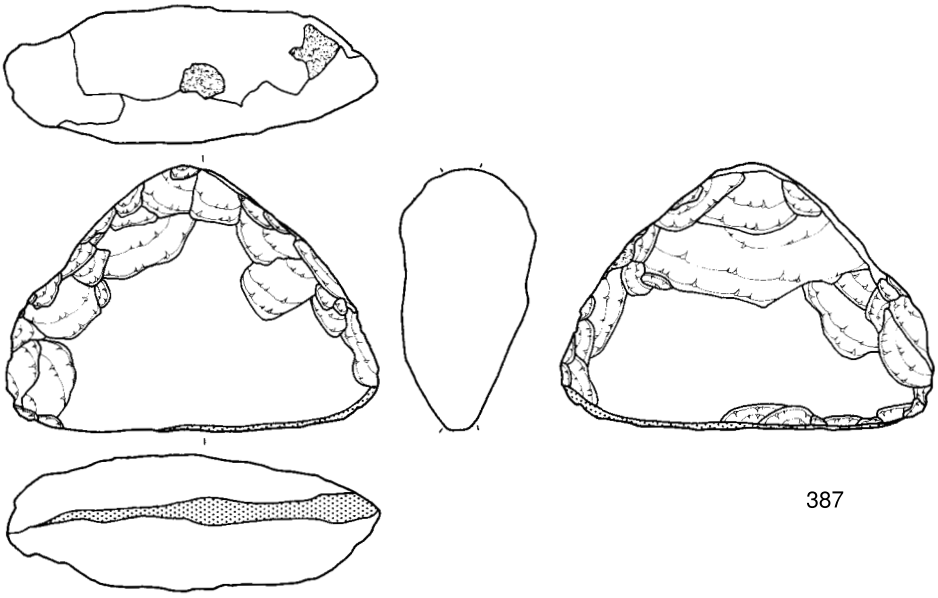
第161図　遺構外出土石器（41）



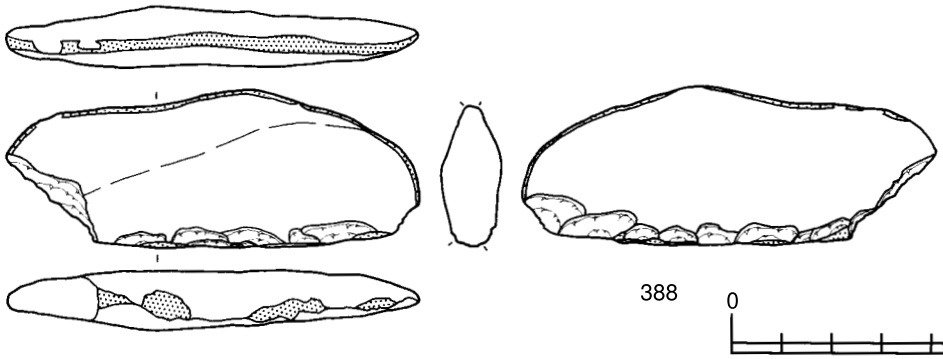
385



386



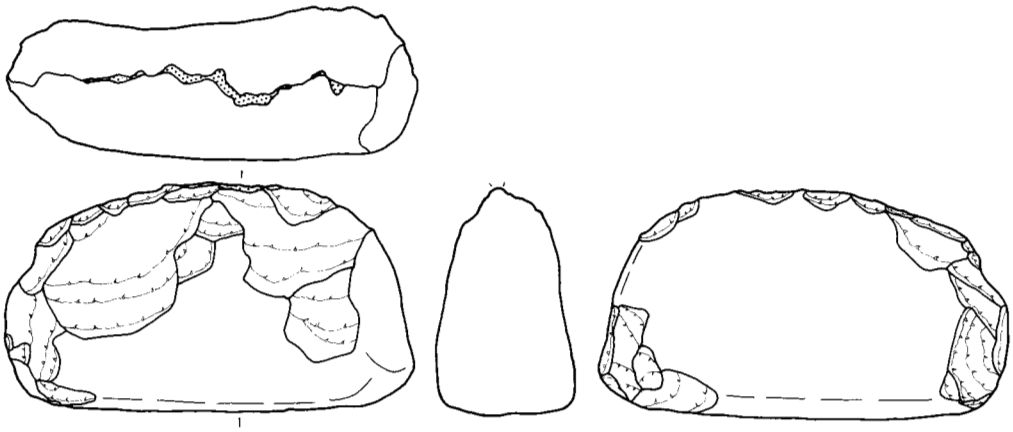
387



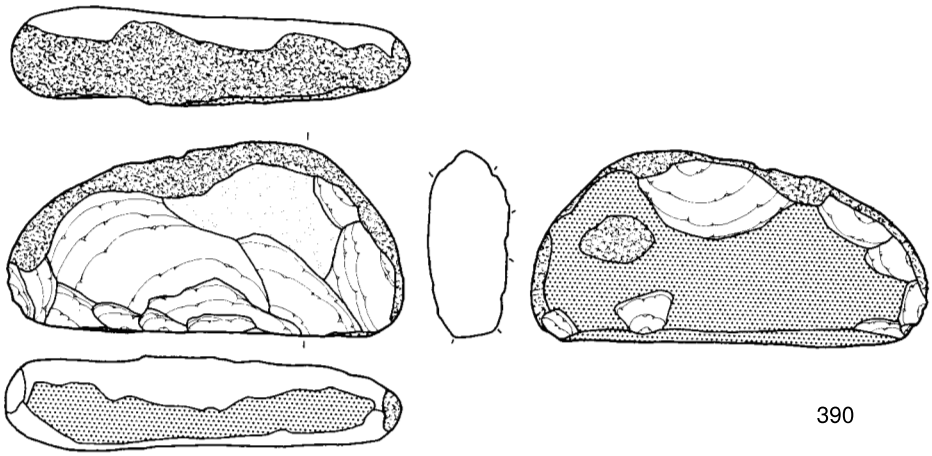
388

0　10cm

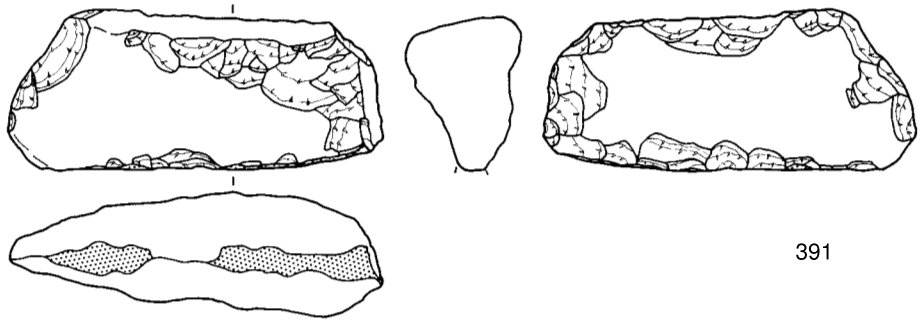
第162図　遺構外出土石器（42）



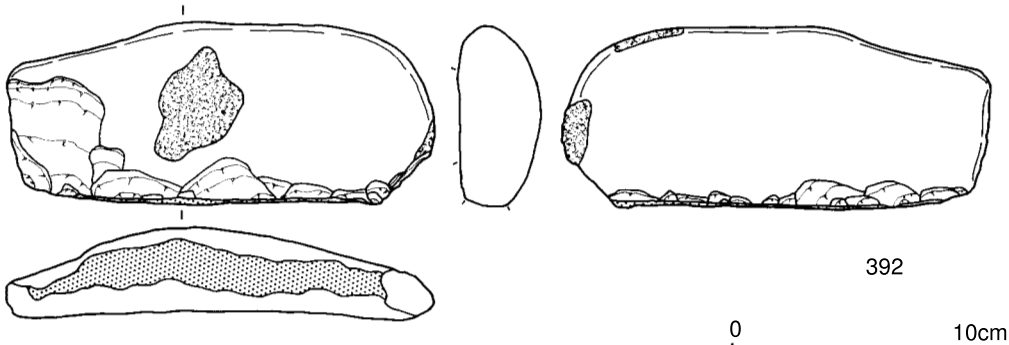
389



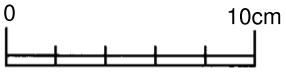
390



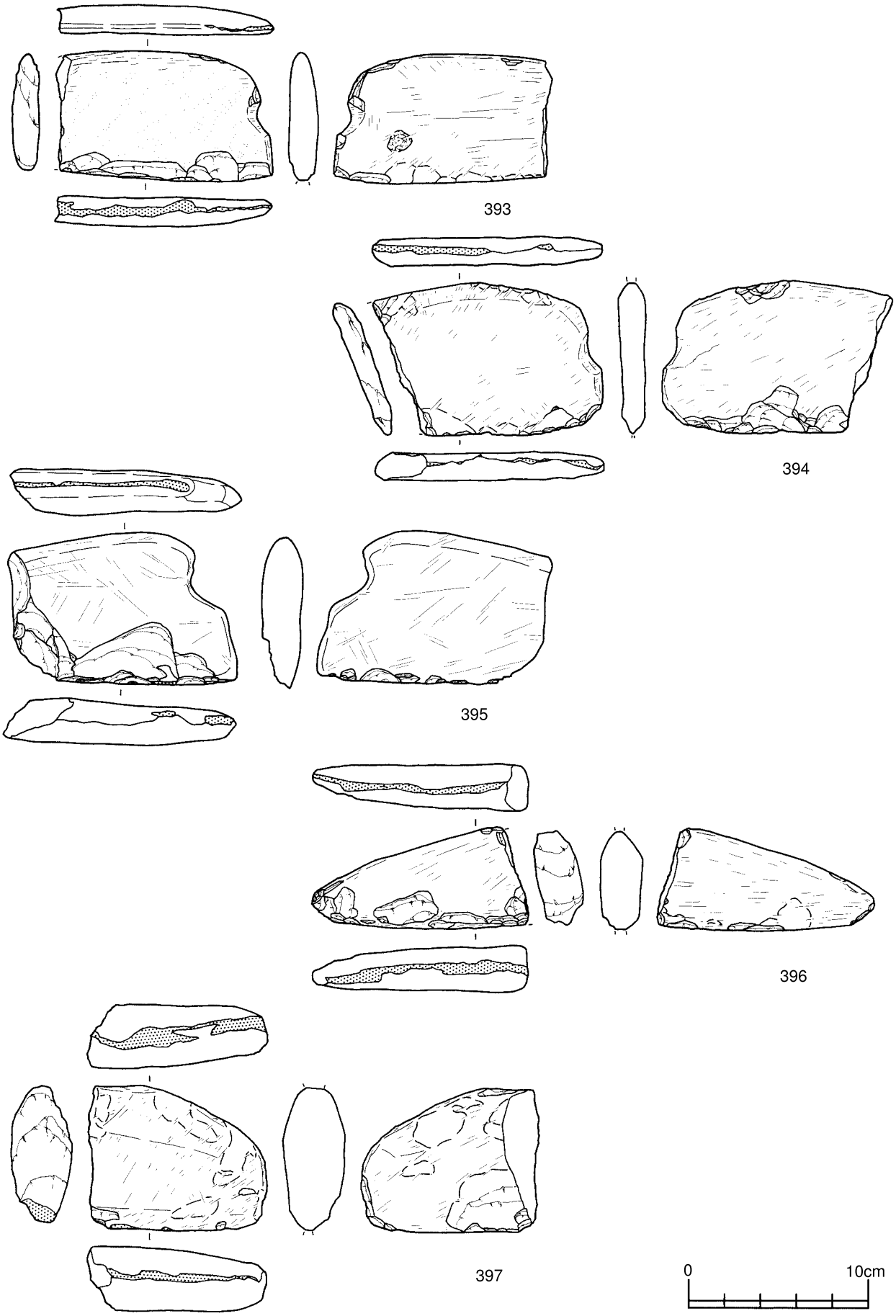
391



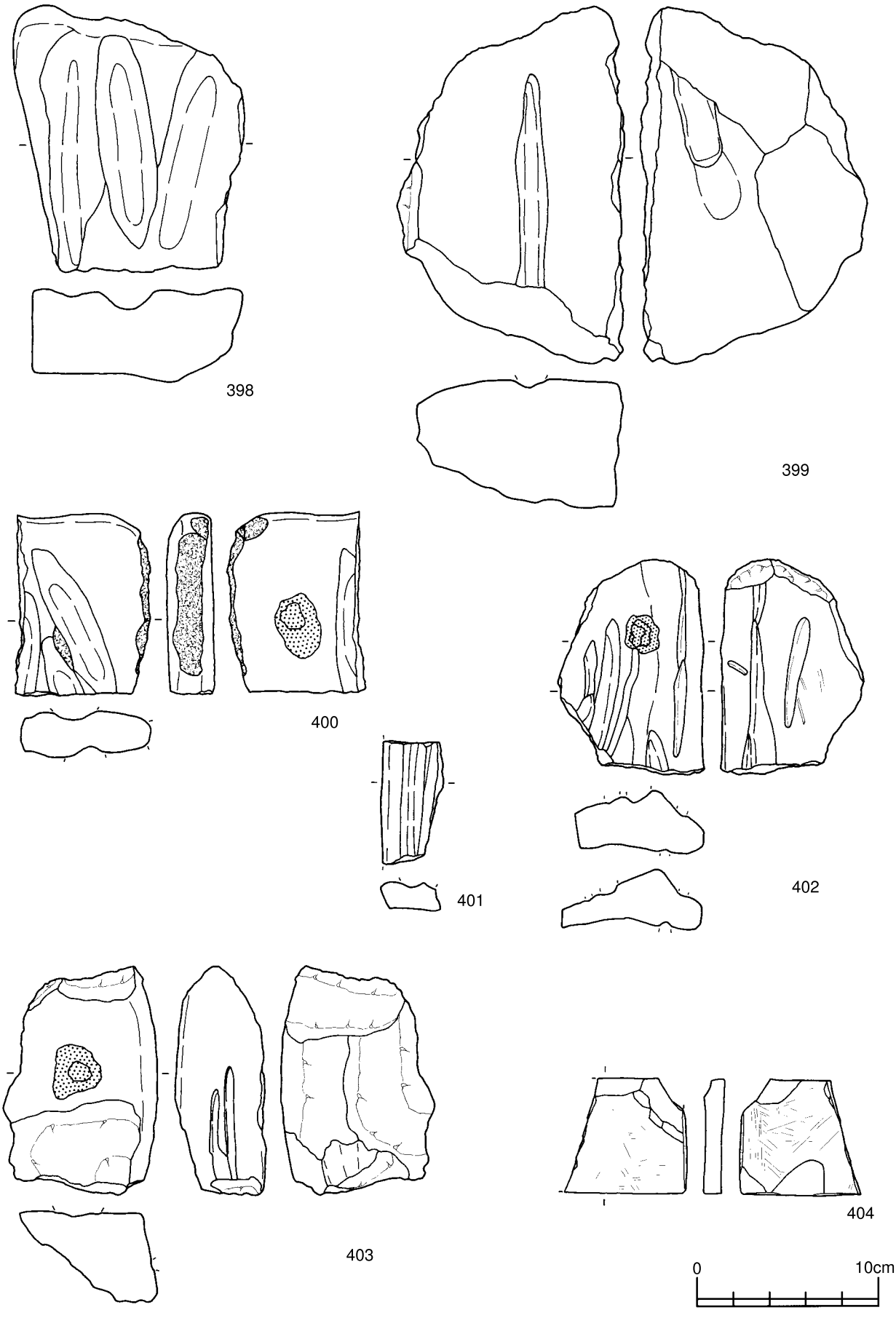
392



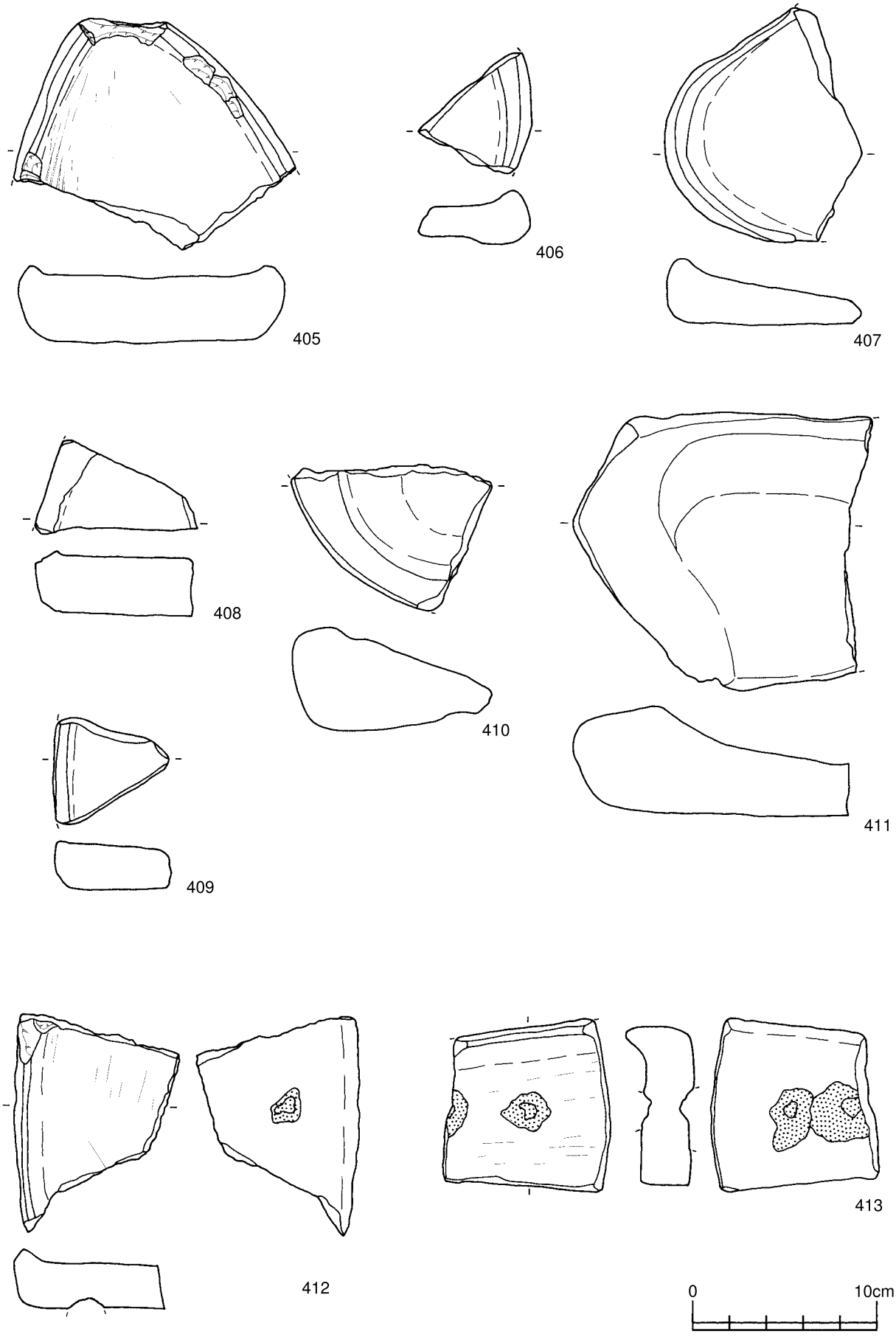
第163図　遺構外出土石器（43）



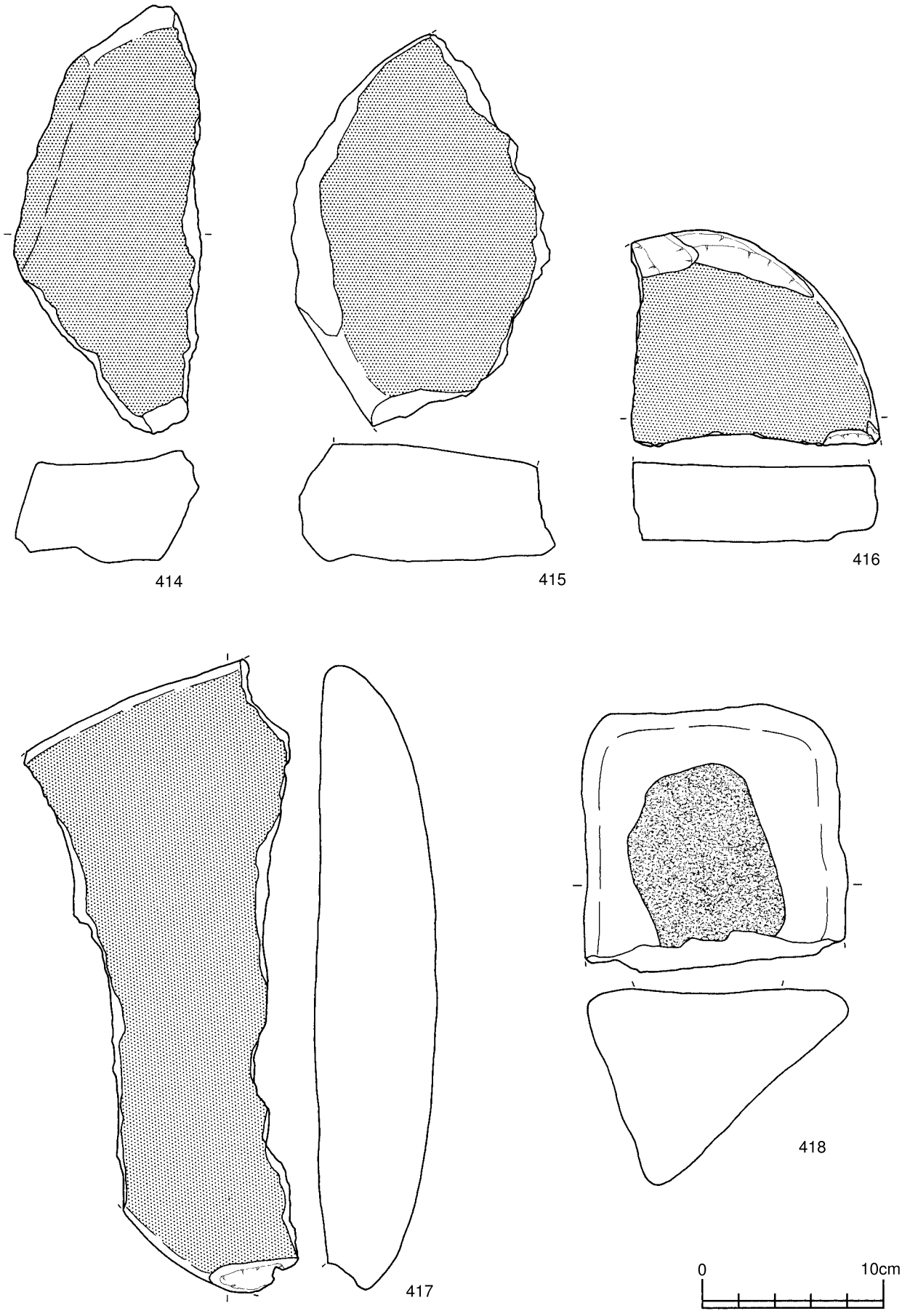
第164図　遺構外出土石器（44）



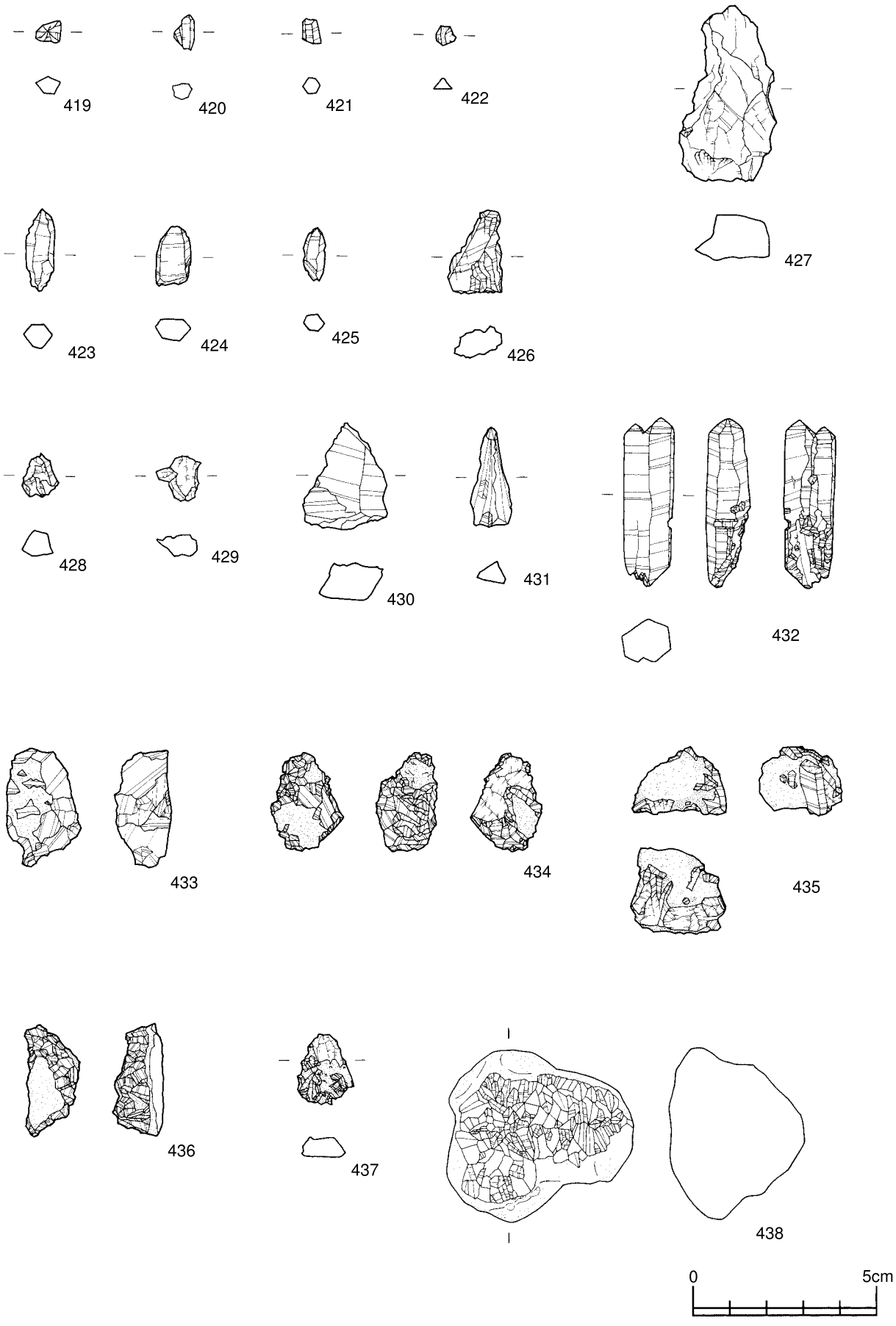
第165図　遺構外出土石器（45）



第166図　遺構外出土石器（46）



第167図　遺構外出土石器（47）



第168図　遺構外出土石器（48）

第169図　遺構外出土石器（49）

３．土製品

本調査で出土した土製品は、遺構内27点、遺構外187点の計214点である。出土した土製品の種別、出土遺構、数量は下表のとおりである。

	遺構内		遺構外	合計
種別	遺構番号	点数	点数	
土偶		0	12	12
鐸形土製品	79土Ａ(1点)	1	26	27
ミニチュア土器	148土(1点)	1	16	17
四足付皿形土製品		0	1	1
耳飾		0	3	3
有孔土製品		0	5	5
環状土製品	79土Ａ(1点)	1	1	2
笠形土製品	12土(1点)	1	1	2
三角錐形土製品		0	1	1
柱状三角形土製品		0	1	1
棒状土製品		0	2	2
紐状土製品		0	1	1
球状土製品		0	2	2
多孔土製品	7土(1点)	1	0	1
三角形土版		0	1	1
円形土版		0	1	1
土器把手未製品		0	2	2
土器片利用土製品	2土Ｂ(3点)、22土(2点)、33土Ｂ(1点)、39土Ｂ(3点)、43土(1点)、46土(4点)、60土(2点)、63土(3点)78土(1点)79土Ａ(2点)	22	107	129
焼成粘土塊		0	4	4
合計		27	187	214

土偶

人間の形態を模倣、もしくは抽象化して製作された土製品である。本調査では12点（第170図１～９、第171図10～12）を確認し、全て遺構外からの出土であった。完全な形での出土はみられず、頭・胴・足などが部分的に残存する資料である。以下、残存部位別に記載する。

・頭部のみ残存する資料（第170図１～５）

１は、目・鼻・口が刺突で、眉が隆帯で表現されているが、髪などの表現は認められない。２は、１と同様に目・鼻・口・眉が刺突と隆帯によって表現されている。３は、顔面を逆三角形状に整形し、目・口が刺突によって表現され、両目の間には横位の沈線が施されている。頭頂部には刻み目が９ヶ所認め

られる。眉・鼻の表現は認められなかった。４は、１～３に比べやや小型で、１・２と同様に目・鼻・口・眉が刺突と隆帯によって表現されている。５は、目・鼻が軽い押圧によるくぼみと隆起、鼻の穴が刺突で表現され、首の周囲には縦位の沈線が施されている。

・胴部のみ残存する資料（第170図６～９）

いずれも逆三角形の板状に整形されているものである。６は、両肩上部から、斜位の貫通孔が施され、正面には肩部から胴部に横位沈線・渦巻状沈線・曲沈線が、背面には肩部から胴部にかけて正面と同様の文様が、胴部には縦位・斜位の沈線が施されている。７は、右肩上部から脇にかけて斜位の貫通孔が施され、正面には平行沈線・渦巻状沈線が、背面には斜位の沈線と短沈線が施されている。７・８では乳房が突起によって表現されている。８は、正面に平行沈線・渦巻状沈線が、背面には斜位の沈線と短沈線が施されている。また、乳房の下に格子目状沈線が施されている。９は、正面および背面に格子状沈線と縦位の連鎖状沈線が施されている。

・足部のみ残存する資料（第171図10～12）

10・11は足首から下、12はすねから下が残存する資料である。11・12は刻み目で足の指が表現されている。

鐸形土製品（第55図23、第171図13～25、第172図26～38）

鐸や鐘等の形状を呈している土製品である。本調査では27点が出土し、遺構内から１点（第55図23）、遺構外から26点（第171・172図13～38）が出土している。

［形状］鐸身は中空となっており、開口部が円形を呈するものと楕円形を呈するものとがある。突起の形状や貫通孔により次の８種類を把握した。

ａ：突起の短軸方向に開口部と平行に穿孔されるもの（第171図13～15）。11.1%（５点）。

ｂ：突起の長軸方向に開口部と平行に穿孔されるもの（第55図23、第171図16～25）。40.7%（11点）。

ｃ：二又突起の短軸方向に穿孔されるもの（第172図26・27）。7.4%（２点）

ｄ：二又突起の長軸方向に穿孔されるもの（第172図28）。3.7%（１点）。

ｅ：二又突起の両端を斜位方向に穿孔されるもの（第172図29・30）。7.4%（２点）。

ｆ：ほぼ円形の突起に穿孔されるもの（第172図31～33）。11.1%（３点）。

ｇ：突起のないもの（第172図34）。7.4%（１点）。

ｘ：不明なもの（第172図35～38）。14.8%（４点）。

また、これらの中には、鐸身に孔を有するもの（14）などが認められる。ｇ類とした34は、ほぼ完形品で開口部の製作状況が本製品に共通する。

［文様］本製品の外面的な特徴として文様があげられる。文様の有無ならびに施される文様の種類により、次の通り分類を行った。

ａ：無文のもの（第171図16～23など）。59.2%（16点）

ｂ：沈線が施されるもの（第171図24～25、第172図26、34、37）。18.5%（５点）。

ｃ：沈線と刺突の両方が施されるもの（第171図13、15、30、33、35）。18.5%（５点）。

ｄ：隆帯が施されるもの（第172図28）。3.7%（１点）。

結果、無文のものが約60%を占める。なお、ｂ類やｃ類の沈線が施されるものは、土器文様と類似す

るものがあり、13は楕円形文、15は方形文、24は渦巻文などが施されている。

［付着物］鐸身の内壁に煤状の炭化物を付着しているものが認められる。百分率では25.9％（７点）が認められた。

ミニチュア土器

手捏ねで作られた土器および器高や底径が５㎝未満の小型の土器である。本調査で出土した土器片や底部、完形品等から17点を抽出し、遺構内から１点（第55図27）、遺構外から16点（第172図39～54）を確認した。

器形は、鉢形が11点（第172図39～49）、台付鉢が２点（第172図50・51）、浅鉢が１点（第172図52）、皿が１点（第172図53）、壷形が１点（第172図54）認められた。

文様は、無文のもの（第55図27、第172図39～43、48～50、52）、渦巻状沈線（第172図44）、平行沈線、格子目状沈線（第172図46）、胴部に変形工字文風の沈線（第172図47）、平行沈線（第172図53）、３本組沈線手法による曲線文や平行沈線、底面に円形および不整楕円形の沈線（第172図54）を有するものなどが認められた。

製作状況については、手捏ねで成形されたものが６点（第172図43・45・46・49・52・53）、粘土紐を積み上げて成形されたものが11点（第55図27、第172図39～42・44・47・48・50・51・54）が認められた。

四足付皿形土製品

皿状の底面に四つの突起が付される土製品である。本調査では遺構外から１点（第172図55）が出土している。平面形は楕円形を呈し、内面は湾曲している。同様の形態をもつ石皿を模倣したものとも考えられる。

耳飾

耳飾として想定される土製品である。本調査では遺構外から３点（第173図56～58）出土している。直径1.6～1.8㎝程の小型のものである。形状は、平面形が円形、断面形が椎骨状を呈している。中央に、貫通孔を有するものもあり、58には５㎜程の貫通孔が認められる。また赤色顔料が全面に塗布されるもの（第173図56）もある。

有孔土製品

貫通孔を有する土製品である。本調査では遺構外から５点（第173図59～63）が出土している。貫通孔は、円柱状を呈するものや工字状の土版には長軸方向に、算盤玉状や逆三錐形を呈するものには短軸方向に穿孔されている。装飾品や錘としての用途が考えられる。

環状土製品

環状を呈する土製品である。本調査では、遺構内から１点（第55図24）、遺構外から１点（第173図64）が出土している。形状は、いずれも断面が三角形である。

笠形土製品

笠状を呈する土製品である。本調査では、遺構内から１点（第55図５）、遺構外から１点（第173図65）が出土している。いずれも平面形が円形を呈するものである。

三角錐形土製品

三角錐形を呈する土製品である。本調査では、遺構外から１点（第173図66）が出土している。くびれの部分もあり、茸形土製品と類似するものである。

柱状三角形土製品

柱状三角形を呈する土製品である。本調査では、遺構外から１点（第173図67）が出土している。両面の側縁と三角形頂部から中央にかけて、弧状の隆帯が施されており、底辺の中心に、穿孔がみられる。本土製品は、直立することが可能なため、三角形土版とは区別した。

棒状土製品

棒状を呈する土製品である。本調査では、遺構外から２点（第173図68・69）が出土している。２点ともゆるやかに湾曲している。

紐状土製品

紐状を呈する土製品である。本調査では、遺構外から１点（第173図70）が出土している。一部剥離した面が見られる。

球状土製品

球状を呈する土製品である。本調査では、遺構外から２点（第173図71・72）が出土している。71は、数条の沈線と全体に刺突が施されている。

多孔土製品

複数の孔を有する土製品で装飾品とは異なるものである。遺構内から１点（第55図４）が出土している。全体形は不明であるが、製品本体の突起部分に複数の孔を有する。孔は、側面から交差するように２方向、垂直に１方向の計３方向から穿孔されており、孔の数としては５ヶ所である。

三角形土版

平面形が三角形を呈する土版である。本調査では、遺構外から１点（第173図73）が出土している。表面が球状を呈し、裏面が若干湾曲している。表面には刺突で、Ｙ字を縁どるようにして文様が施されている。

円形土版

平面形が円形を呈する土版である。本調査では、遺構外から１点（第173図74）が出土している。砂粒を多く含んでいる。

土器把手未製品

第Ⅳ群土器の壷形土器の口頸部に付される橋状把手部の未製品である。本調査では、遺構外から２点（第173図75・76）が出土している。本製品は土器の把手として成形される前のもので、２本の粘土紐が絡みあっている。

土器片利用土製品

土器の破片を打ち欠いたり研磨して、三角形ならびに円形等に形作られた土製品である。本調査では、129点を確認した。形状によって次の４種類を把握した。

・三角形を呈するもの。16.3％（21点）。遺構内から６点（第55図、８、９、13、14、17、22）、遺構外から15点（第174図77～91）が出土している。
・円形を呈するもの。80.6％（104点）。遺構内から16点（第55図、１～３、６、７、10～12、15、16、18～21）、遺構外から88点（第174図92～105、第175図106～132、第176図133～160、第177図161～179）が出土している。
・方形を呈するもの。2.3％（３点）。遺構外から３点（第177図180～182）が出土している。
・貫通孔を有するもの。0.8％（１点）。遺構外から１点（第177図183）が出土している。

（素材）

素材となる部位の多くは、胴部の破片であるが、底部を用いるもの（第175図124、第176図144、148、151、第177図166、167）もある。素材となっている土器の器種は、各形状に関わりなく主に深鉢形土器の破片が使用されている。

（破損状況）

完形品のものが多く、12.4％（16点）が欠損資料である。各形状の破損状況は次の通りであった。

・三角形を呈するもの。完形品95.2％（20点）、一部欠損4.8％（１点）。
・円形を呈するもの。完形品85.6％（89点）、一部欠損3.8％（４点）、約半分欠損9.6％（10点）、一部残存1.0％（１点）。
・方形を呈するもの。完形品３点。
・貫通孔のあるもの。完形品１点。

結果、各形状に関わりなく完形品のものが多数を占めている。なお、この現象は、本製品の認定にあたり、欠損品が選定されにくいという状況も考慮しなければならない。

（加工状況）

適当な破片の選定後、加工が施されている。土器片の周縁に見られる痕跡によって次の３種類を把握した。なお、観察表には、この加工状況の記号を掲載した。

ａ：打ち欠きのみのもの。34.9％（45点）。
ｂ：打ち欠き後、一部に研磨が施されるもの。20.9％（27点）。
ｃ：全周に研磨が施されるもの。44.2％（57点）。

形状毎の加工状況は次の通りである。

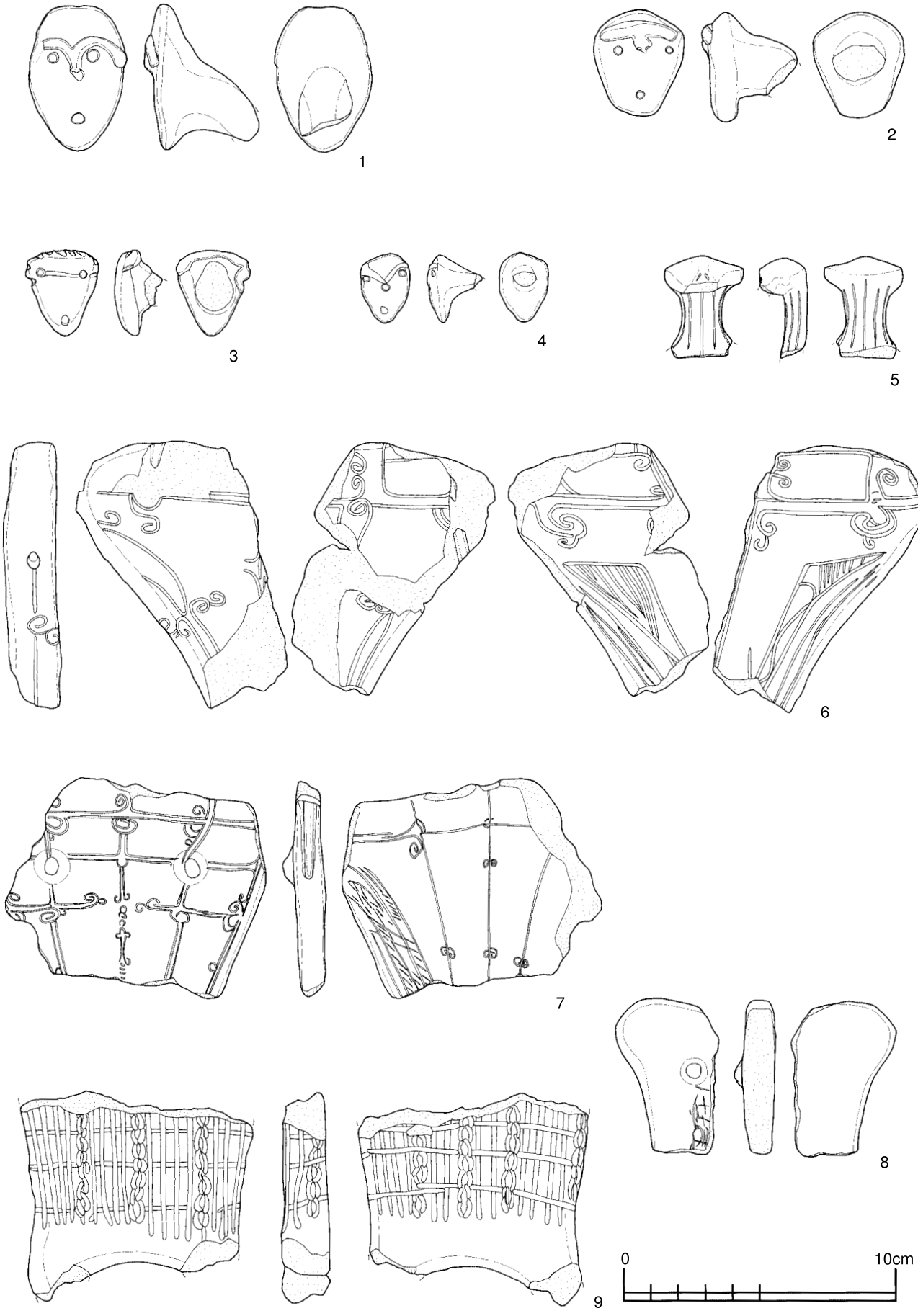
・三角形を呈するもの：ａ７点、ｂ７点、ｃ12点。
・円形を呈するもの：ａ38点、ｂ23点、ｃ43点。

・方形を呈するもの：ｂ１点、ｃ２点。
・貫通孔のあるもの：ｂ１点。
結果、各形状に関わりなく、打ち欠き後、全周もしくは一部に研磨が施されるものが過半数を占めた。

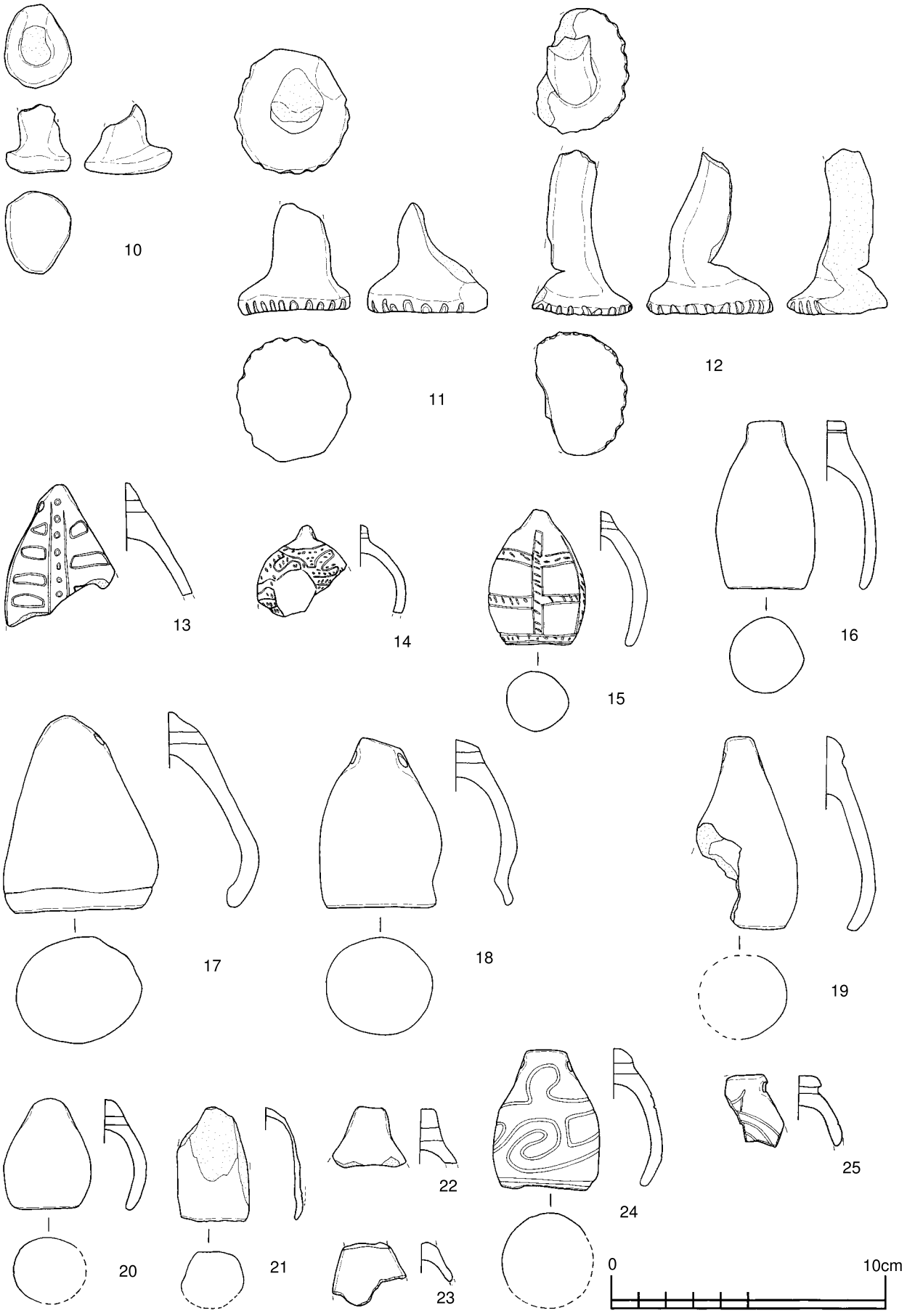
焼成粘土塊

焼成された不定形の粘土の塊である。本調査では、遺構外から４点（第177図184～187）が出土している。形状は、棒状や紐状を呈するものや平面形で円形を呈するものなどがある。184は、表面に２本の指で押されたと思われる圧痕がみられる。

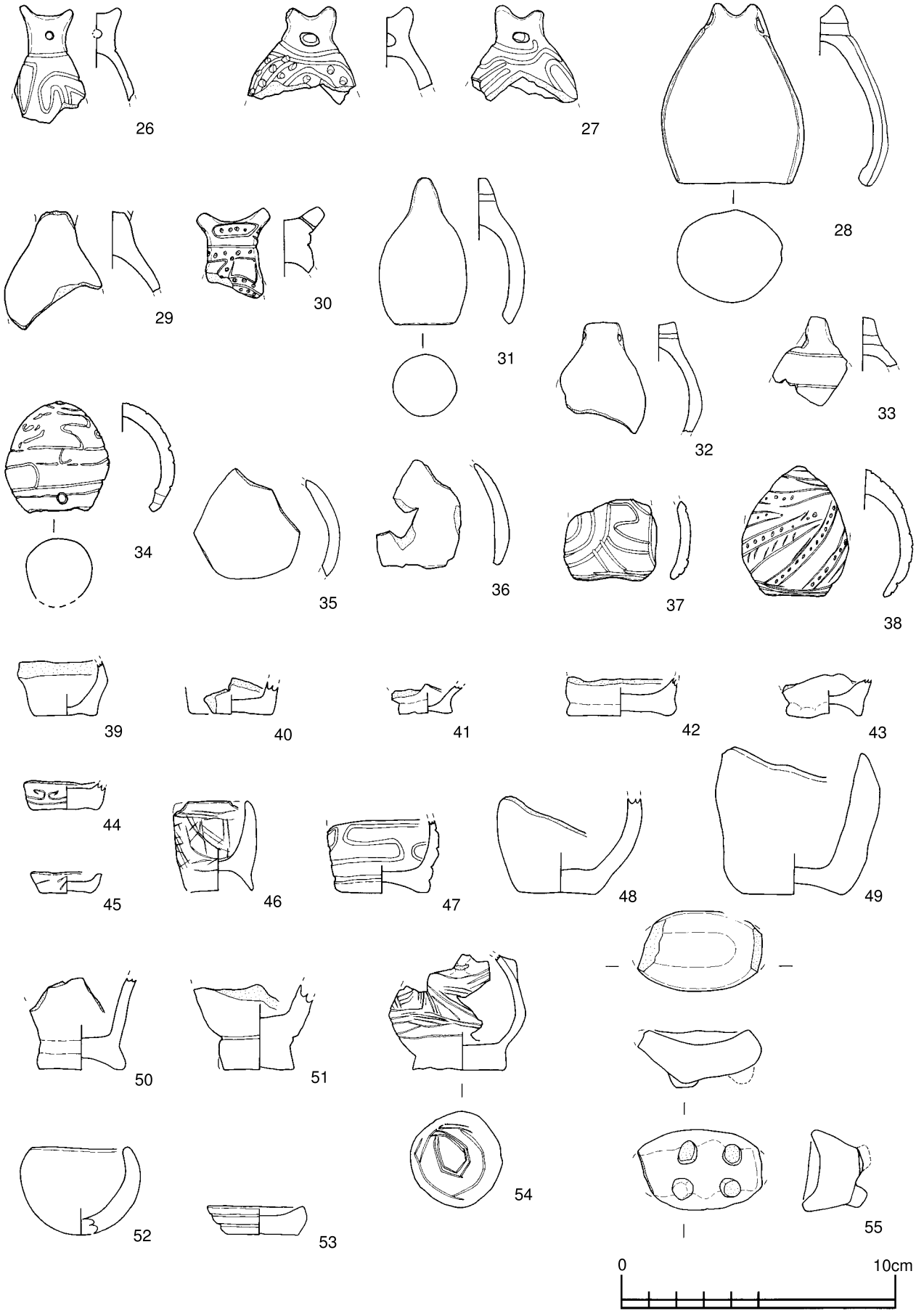
（児玉、蝦名、堀内、長内、工藤）



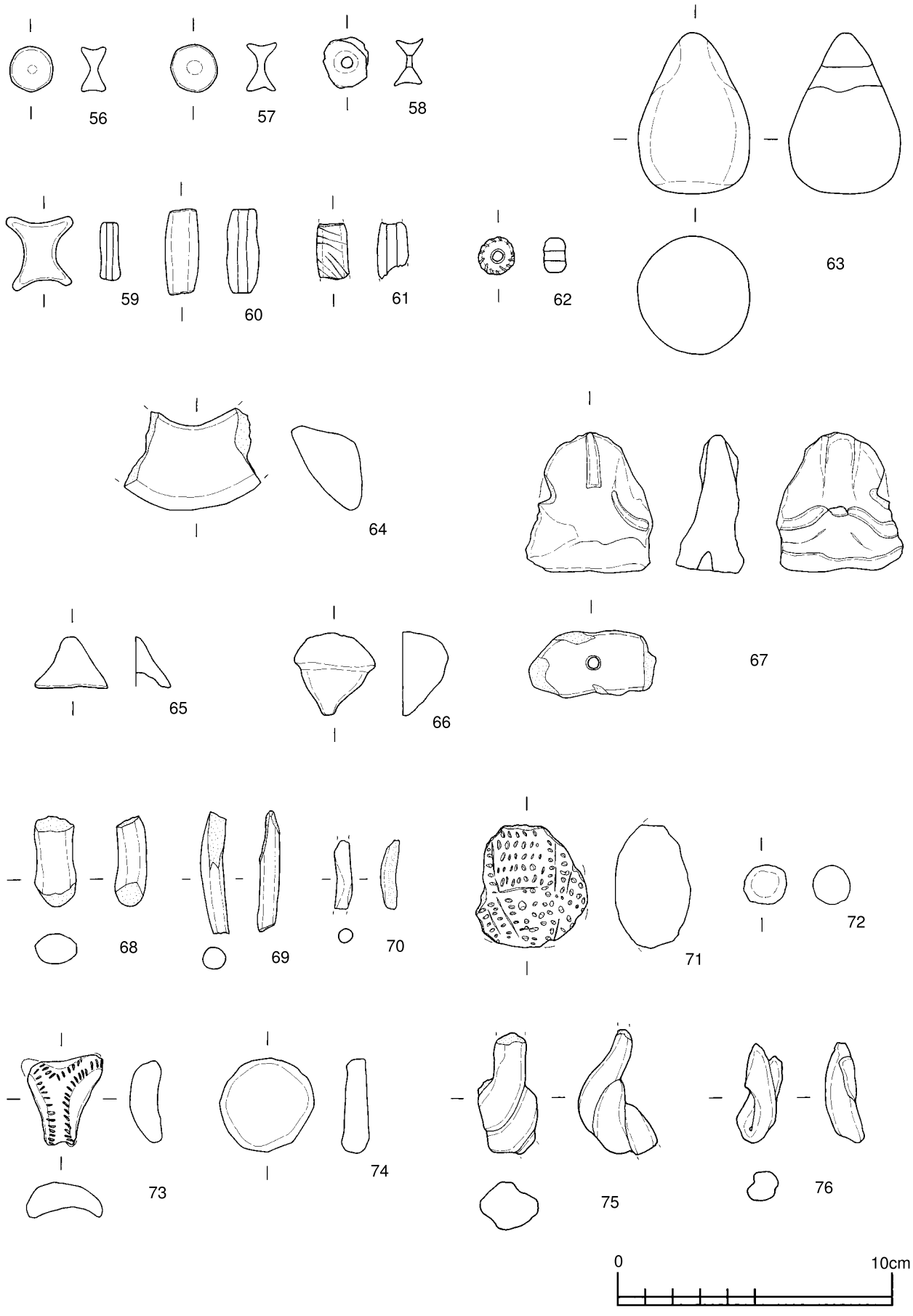
第170図　遺構外出土土製品（1）



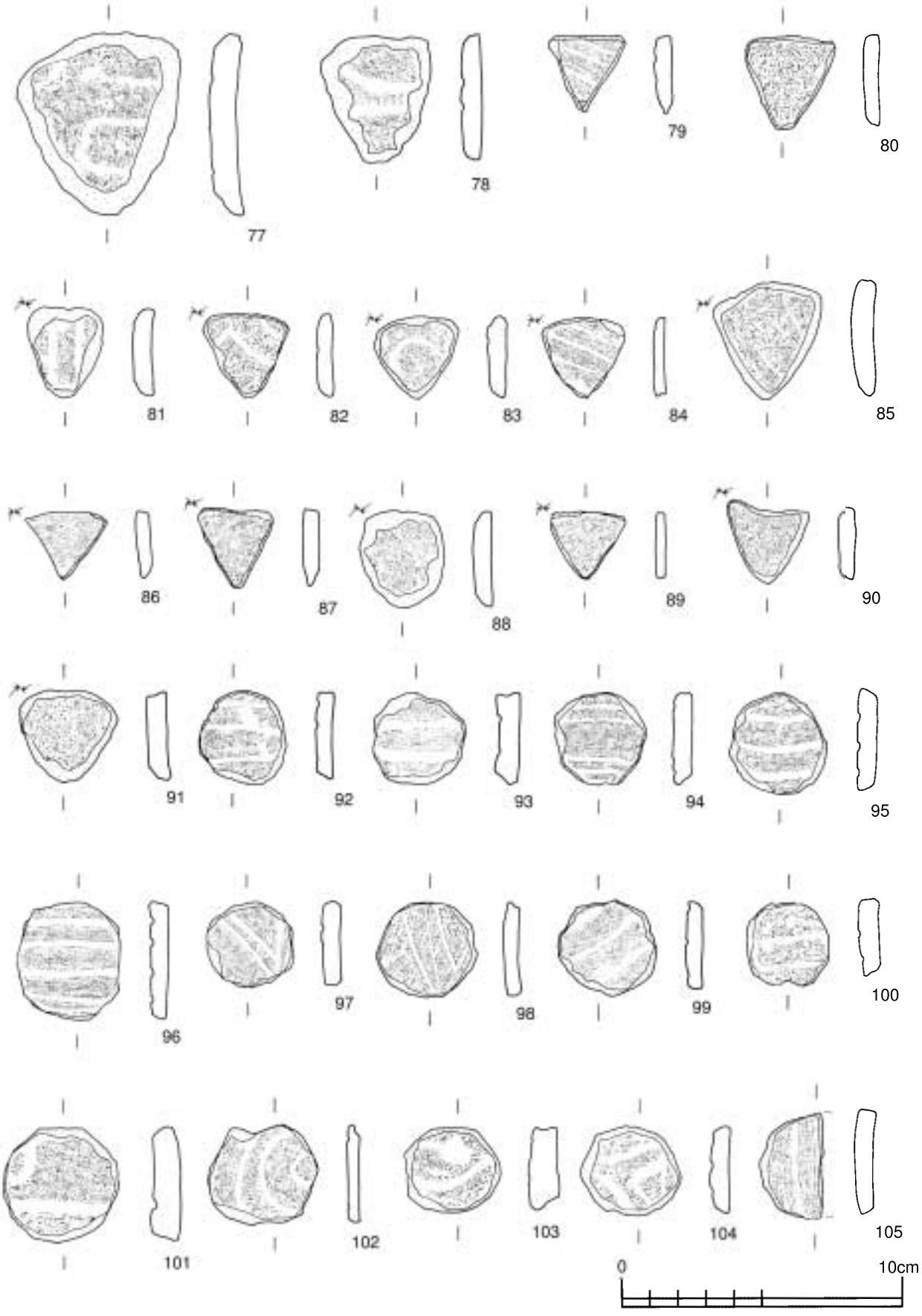
第171図　遺構外出土土製品(2)



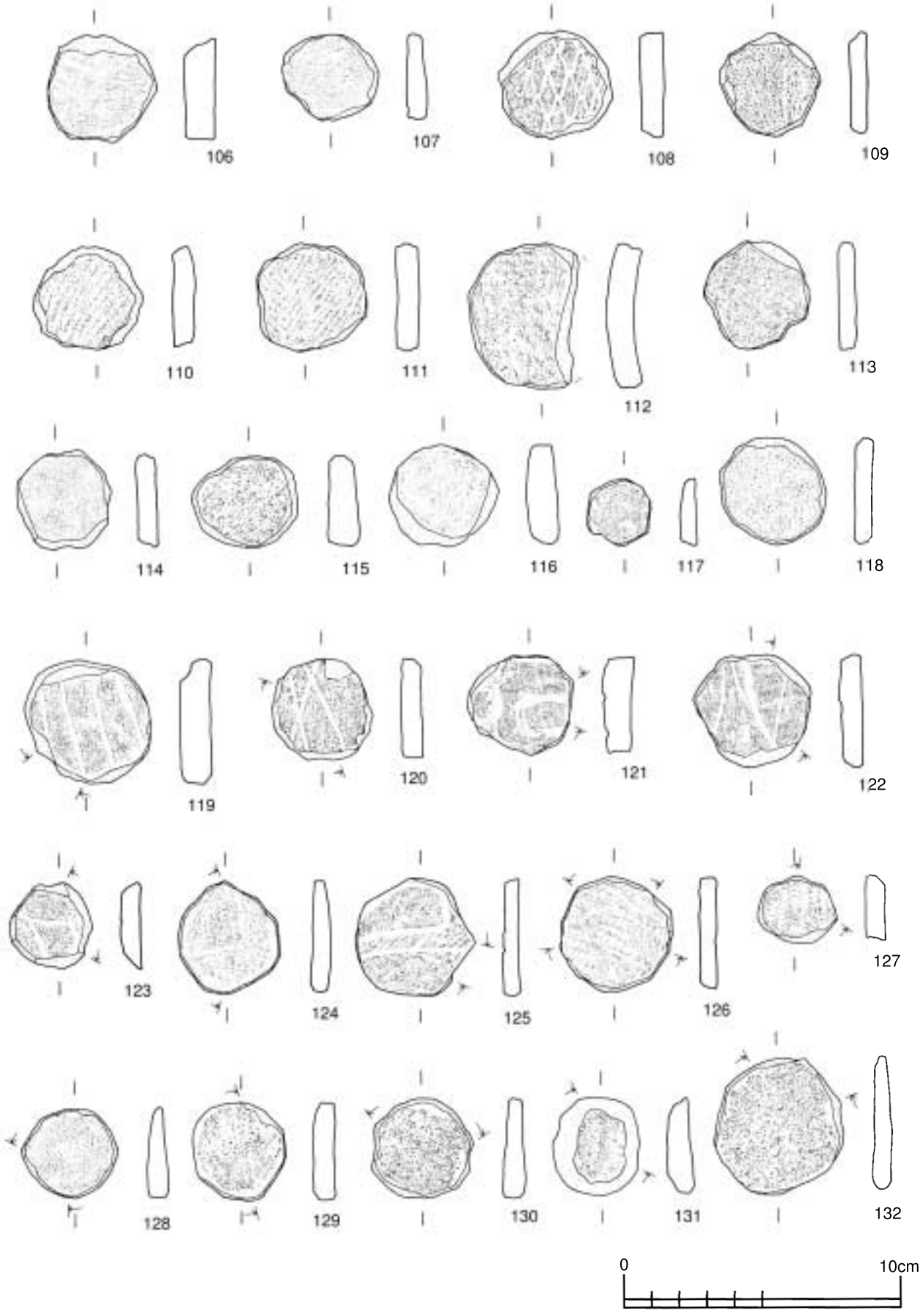
第172図　遺構外出土土製品 (3)



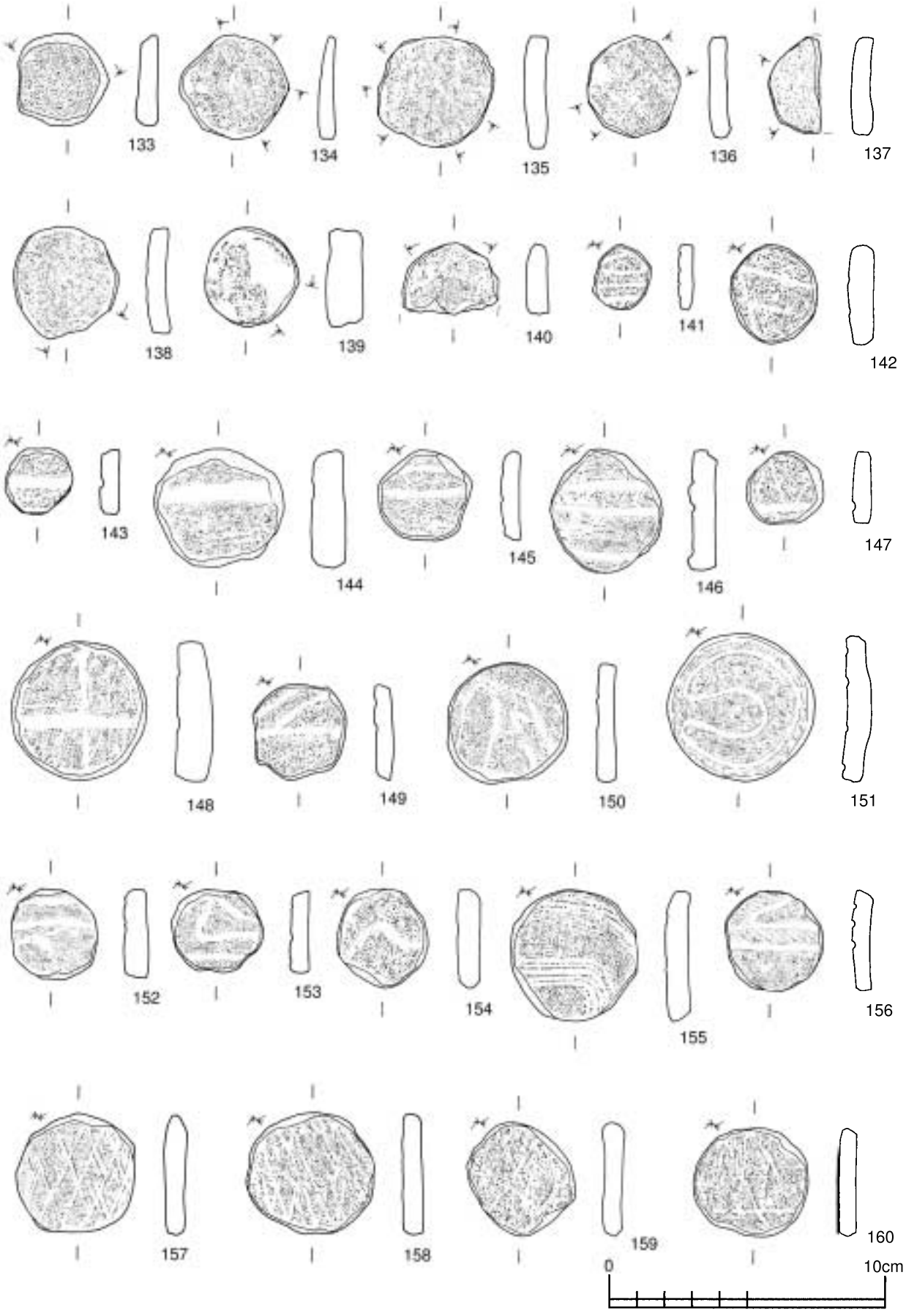
第173図　遺構外出土土製品(4)



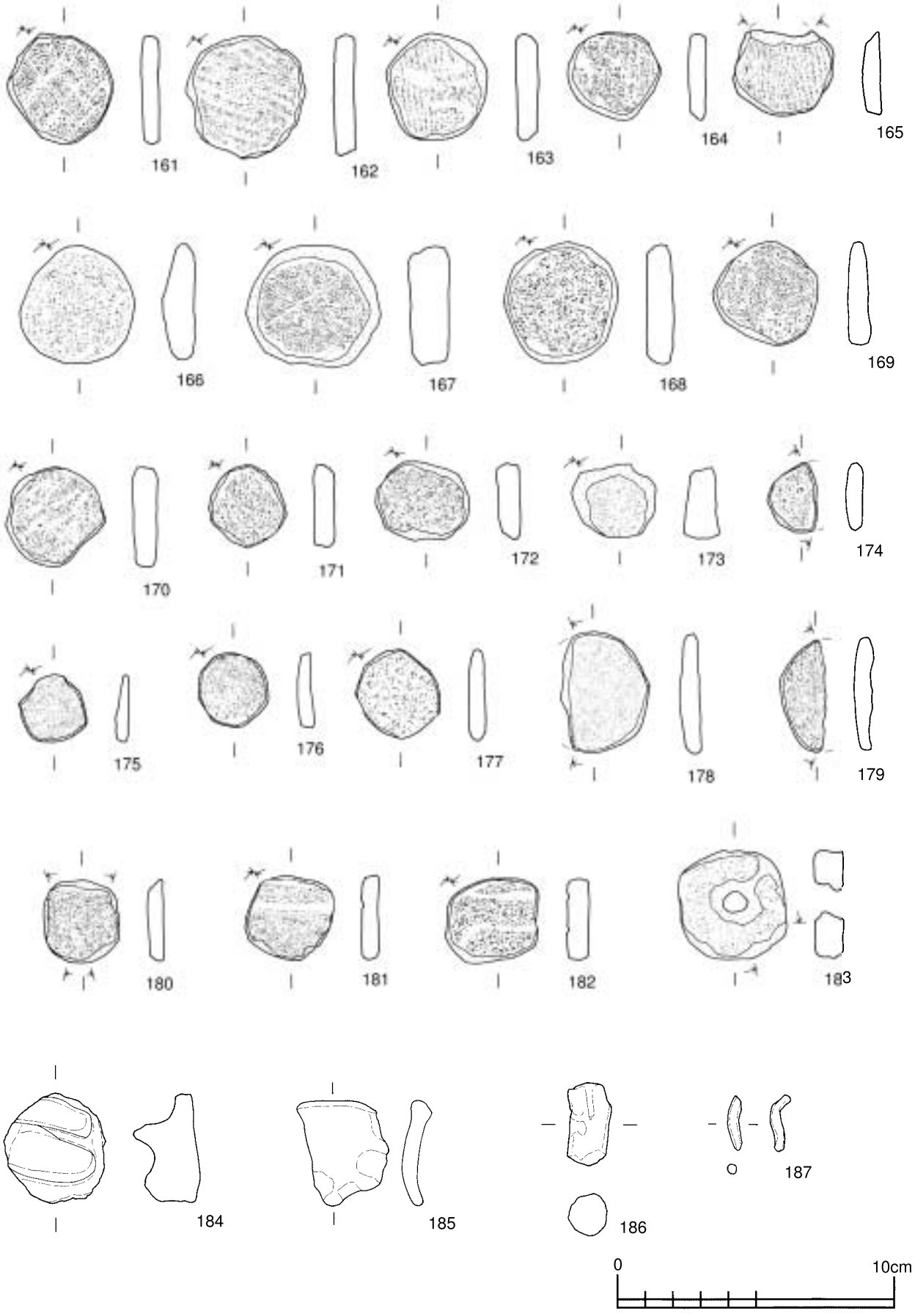
第174図　遺構外出土土製品（5）



第175図　遺構外出土土製品（6）



第176図　遺構外出土土製品（7）



第177図　遺構外出土土製品（8）

４．石製品

本調査で出土した石製品は、遺構内９点、遺構外265点である。出土した石製品の種別、出土遺構、数量は下表のとおりである。

	遺構内		遺構外	合計
種別	遺構番号	点数	点数	
三角形岩版	79土Ａ(1点)、148土(1点)、173土Ｂ(1点)	3	85	88
円形岩版	2土Ｂ(2点)、8土(2点)、46土(1点)	5	110	115
その他の岩版		0	12	12
岩版関係資料		0	5	5
有孔石製品	3土(1点)	1	32	33
球状石製品		0	11	11
碗状石製品		0	3	3
皿状石製品		0	2	2
線刻礫		0	3	3
採集石製品		0	2	2
合計		9	265	274

三角形岩版

平面形が三角形、あるいは三角形に近い形状を呈する岩版である。

本調査では遺構内から３点（第56図１～３）、遺構外から85点（第178図１～17、第179図18～45、第180図46～65、第181図66～85）の計88点が出土している。

［破損状況］

完形品は全体の13.6％と少なく、欠損もしくは剥離しているものが86.4％と大半を占めている。破損資料の中では一頂角欠損など1/3以下の欠損が34.2％、頂角から縁辺部にかけてまたは全頂角欠損など1/3以上の欠損が42.1％、一部剥離のみでほぼ完形のものが23.7％となっている。中には破損後、両面にアスファルトと思われる物質を付着したと思われるもの（第179図24）も認められた。

［形状］

形状は、おおむね次の６種類に分けることができる。

・二等辺三角形を呈するもの。55.7％（49点）。
・正三角形を呈するもの。4.5％（４点）。
・台形に近い形状を呈するもの。4.5％（４点）。
・楕円形に近い形状を呈するもの。8.0％（７点）。
・蒲鉾形を呈するもの。0.0％（０点）。
・不明のもの。27.3％（24点）。

また、各辺は直線的ならびに曲線的に整形されている。

［加工状況］

本調査で出土した資料の90.9％は、表面が球状に研磨されていた。裏面と同様に表面が平滑的に研磨されているものも若干みられたが、表面を球状、裏面を平滑的に研磨して製作する方法が一般的のようである。

［文様］

三角形岩版に施される文様は、土器にみられるような１本単位の沈線で描かれるのではなく、細い傷のような刻線の集合体が１本単位として構成される場合が多く、基本的には５種類の単位文様の組み合わせによって表現される（児玉1997）。５種類の単位文様は以下の通りである。

・斜位直線：平行する刻線が斜めに施される。
・弧状線：平行する刻線が弧状に施される。
・重弧状線：上記の弧状線の上位に、もう１つの平行する弧状線が施される。
・ブーメラン状刻線：２条の刻線の端部が連結しており、ブーメラン状に施される。
・渦巻状刻線：渦巻状の刻線が施される。

以上のような単位文様の組み合せにより、複数のパターンの文様が構成される。三角形岩版の文様パターンは、『小牧野遺跡発掘調査報告書』（青森市教育委員会　1996、1999a）により、ある程度把握されている。そこで、本遺跡出土の三角形岩版の文様については、それらの報告書の分類を基本的に基準とし、あらかじめ分類を設定したうえで、該当するものをカウントした。分類の基準は、基本的にａ類は無文、ｂ類以下は文様が施されるものである。ｄ類は斜位直線のみで構成されているもの、ｅ類からｈ類は斜位直線と弧状線で構成されているものである。ｉ類は重弧状線を主体としたもの、ｋ類はブーメラン状刻線が施されたもの、ｌ類は渦巻状刻線が施されたものである。また、ｂ類およびｊ類は弧状線、重弧状線の配置によって細分、ｄ～ｈ類、ｊ類、ｌ類、ｍ類は斜位直線の傾きによりそれぞれ細分した。

上記の基準によって分類された三角形岩版の文様パターンと出土点数は、次のとおりである。

ａ類：無文のもの。61.4％（54点）
ｂ類－１：弧状線を右縁辺部に配置するもの。3.4％（３点）
　　－２：弧状線を左縁辺部に配置するもの。1.1％（１点）
　　－３：弧状線を上縁辺部に配置するもの。1.1％（１点）
　　－４：弧状線を左右対称に配置するもの。0.0％（０点）
　　－５：縁辺部全周にわたり弧状線を配置するもの。0.0％（０点）
ｃ類：斜位直線が左右に交差するもの。0.0％（０点）
ｄ類－１：右傾の斜位直線が施されているもの。2.4％（２点）
　　－２：左傾の斜位直線が施されているもの。0.0％（０点）
ｅ類－１：右傾の斜位直線と右縁辺部に弧状線を配置するもの。4.5％（４点）
　　－２：左傾の斜位直線と右縁辺部に弧状線を配置するもの。0.0％（０点）
ｆ類－１：右傾の斜位直線と左縁辺部に弧状線を配置するもの。0.0％（０点）
　　－２：左傾の斜位直線と左縁辺部に弧状線を配置するもの。0.0％（０点）
ｇ類－１：右傾の斜位直線と左右縁辺部に弧状線を配置するもの。1.1％（１点）
　　－２：左傾の斜位直線と左右縁辺部に弧状線を配置するもの。0.0％（０点）
ｈ類－１：右傾の斜位直線と縁辺部全周にわたり弧状線を配置するもの。0.0％（０点）

－２：左傾の斜位直線と縁辺部全周にわたり弧状線を配置するもの。0.0％（０点）
ｉ類－１：重弧状線を右縁辺部に配置するもの。0.0％（０点）
－２：重弧状線を左縁辺部に配置するもの。0.0％（０点）
－３：重弧状線を上縁辺部に配置するもの。0.0％（０点）
－４：重弧状線を左右対称に配置するもの。1.1％（０点）
－５：縁辺部全周にわたり重弧状線を配置するもの。1.1％（０点）
－６：重弧状線と弧状線を縁辺部に配置するもの。3.4％（３点）
ｊ類－１：右傾の斜位直線と重弧状線を縁辺部に配置するもの。1.1％（０点）
－２：右傾の斜位直線と重弧状線を縁辺部に配置するもの。0.0％（０点）
－３：左傾の斜位直線と重弧状線を縁辺部に配置するもの。0.0％（０点）
－４：左傾の斜位直線と重弧状線を縁辺部に配置するもの。0.0％（０点）
ｋ類：ブーメラン状刻線を施すもの。3.4％（３点）
ｌ類－１：渦巻状刻線を施すもの。0.0％（０点）
－２：右傾の斜位直線に渦巻状刻線を施すもの。0.0％（０点）
－３：左傾の斜位直線に渦巻状刻線を施すもの。2.4％（２点）
ｍ類－１：弧状線、重弧状線および渦巻状刻線を施すもの。0.0％（０点）
－２：右傾の斜位直線と弧状線、重弧状線および渦巻状刻線を施すもの。0.0％（０点）
－３：左傾の斜位直線と弧状線、重弧状線および渦巻状刻線を施すもの。1.1％（１点）
ｘ類：分類不能および不明のもの。3.4％（３点）

結果をみてみると、無文であるａ類が61.4％と半数以上を占めていることがわかる。これは無文の出土率が半数を占める小牧野遺跡などにも共通してみられるものである。しかし文様をもつものを比較してみると、小牧野遺跡で比較的多くみられたｊ類が本遺跡では1.1％と殆どみられなかったことや、小牧野遺跡で極めて出土率の低かった左傾の斜位直線を施したものが有文の中で5.9％を占めること、また単位文様の組み合わせが多様化していることなど、各遺跡ごとに相違がみられる。

［材質］石質は泥岩70.5％（62点）、凝灰岩25.0％（22点）、緑色凝灰岩4.5％（４点）である。

円形岩版

平面形が円形を呈する岩版である。本調査では118点が出土し、遺構内から５点（第56図１、２、４、５、６）、遺構外から113点（第182図86～115、第183図116～140、第184図141～170、第185図171～195）が出土している。なお、接合品３点が確認され、実数は115点となった。

［破損状況］欠損しているものが多く、円形岩版の60％（69点）が破損資料である。内訳は完形品40％（46点）、一部欠損10.4％（12点）、約半分欠損35.6％（41点）、一部残存13.9％（16点）となっており、欠損資料中、半分に折れた状況で出土することが多い。

［加工状況］加工状況によって６種類を把握した。分類の基準と個体数は次のとおりである。なお観察表には、加工状況の記号を掲載した。

ａ類：表裏両面および側面に平滑的な研磨を施し、断面形が長方形および台形に近い形状を呈するもの（第182図86～115、第183図116～140、第184図141～170）。77.4％（89点）。

ｂ類：表裏両面に平滑的な研磨を施し、側面が丸みを帯びているもの（第185図171～177）。6.1％（７

点)。

ｃ類：周縁のすべてを打ち欠きによって整形し、表裏両面に平滑的な研磨を施すもの（第56図２、第185図178～184)。7.0%（８点)。

ｄ類：周縁の一部を打ち欠きによって整形し、表裏両面に平滑的な研磨を施すもの（第185図185)。0.9%（１点)。

ｅ類：周縁を打ち欠きと研磨によって整形し、表裏両面に平滑的な研磨を施すもの（第185図186～190)。4.3%（５点)。

ｆ類：表面を球状、裏面を平滑的に研磨し、断面形が蒲鉾状を呈するもの（第185図191～195)。4.3%（５点)。

結果、表裏両面および側面に平滑的な研磨（ａ類）を施して、製作する方法が多用されていることがわかる。

［材質］石質は凝灰岩64.3%（74点)、泥岩28.7%（33点)、緑色凝灰岩5.2%（６点)、砂質凝灰岩0.9%（１点)、細粒凝灰岩0.9%（１点）である。

その他の岩版

平面形が三角形および円形以外の岩版である。本調査では、遺構外から12点（第186図196～207）出土している。

形状は、楕円形あるいは不整楕円形を呈するものが８点（第186図196～203)、半円形を呈するものが１点（第186図204)、当初方形を呈していた礫の頂角の２ヶ所を打ち欠き、六角形に整形したもの１点（第186図205)、三角形を呈し、上部側面に２ヶ所の切り込みがみられるものが１点（第186図206)、ひし形を呈するのもが１点（第186図207）認められた。

石質は泥岩58.3%（７点)、凝灰岩33.3%（４点)、緑色凝灰岩8.4%（１点）である。

岩版関係資料

岩版の製作段階における破片、破損資料、または加工途中の資料などである。本調査では、遺構外から５点出土した。岩版関係資料は、原石が３点（第186図210～212、参考図①)、半割され接合されたものが１点（第186図208、参考図③)、半割されたもの１点（第186図209、参考図③）で、そのうち表面のみに研磨痕が施されたものが１点（第186図210、参考図⑤)、裏面のみに研磨痕が施されたもの２点（第186図211、212、参考図⑤）が認められた。

石質は凝灰岩１点、細粒凝灰岩１点、泥岩３点である。

有孔石製品

孔を有する石製品である。本調査では33点出土し、遺構内から１点（第56図３)、遺構外から32点（第187図213～231、第188図232～244）出土している。有孔石製品は、人工的な孔を有するものと、孔を有する自然礫のものとがある。人工的に孔が認められたものでは、楕円形を呈するもの９点（第187図213～221、231)、円形を呈するもの１点（第187図222)、半円形を呈するもの３点（第187図223～225)、三角形を呈するもの１点（第187図226)、隅丸三角形を呈するもの１点（第187図227)、ひし形を呈するもの１点（第187図228）不明のもの２点（第187図229～230）が認められた。そのうち穿孔が１ヶ所のもの

（第187図213～216、第187図222～224、226）、穿孔が２ヶ所のもの（第187図220、225）、穿孔が４ヶ所でその上に直線的な溝を有するもの（第187図221）、貫通孔が１ヶ所で貫通していない孔が４ヶ所みられるもの（第187図227）、複数の刻線を有するもの（第187図228）、穿孔がずれているもの（第187図219）、未製品のもの（第187図231）などが認められた。

孔を有する自然礫では、遺物の表面および孔が加工されていないため形状は多様である。楕円形および不整楕円形のもの（第188図232～237）、不整円形のもの（第188図238～244）が認められた。

石質は凝灰岩30.3％（10点）、緑色凝灰岩30.3％（10点）、安山岩15.1％（５点）、泥岩9.0％（３点）、玉髄6.0％（２点）、細粒凝灰岩3.1％（１点）、軽石3.1％（１点）、石英3.1％（１点）である。

球状石製品

球状に整形している石製品である。本調査では遺構外から11点（第189図245～255）出土している。249や255には明瞭な研磨痕が観察される。

石質は細粒凝灰岩63.7％（７点）、凝灰岩27.3％（３点）、溶結凝灰岩9.0％（１点）である。

碗状石製品

球状の凹部を有する石製品である。本調査では、遺構外から３点（第189図256～258）出土している。窪みは、回転作用によって作られている。

石質は細粒凝灰岩２点、凝灰岩１点である。

皿状石製品

皿状に窪んだ石製品である。本調査では遺構外から２点（第189図259～260）出土している。いずれも全体形が不明である。

石質は泥岩、凝灰岩それぞれ１点ずつである。

線刻礫

線刻が施されている礫である。本調査では３点（第190図261～263）出土している。上部、下部に横位の刻線を施しているもの（第190図261～262）、全体に短刻線を施しているもの（第190図263）が認められる。

石質は泥岩、頁岩、変朽安山岩それぞれ１点ずつである。

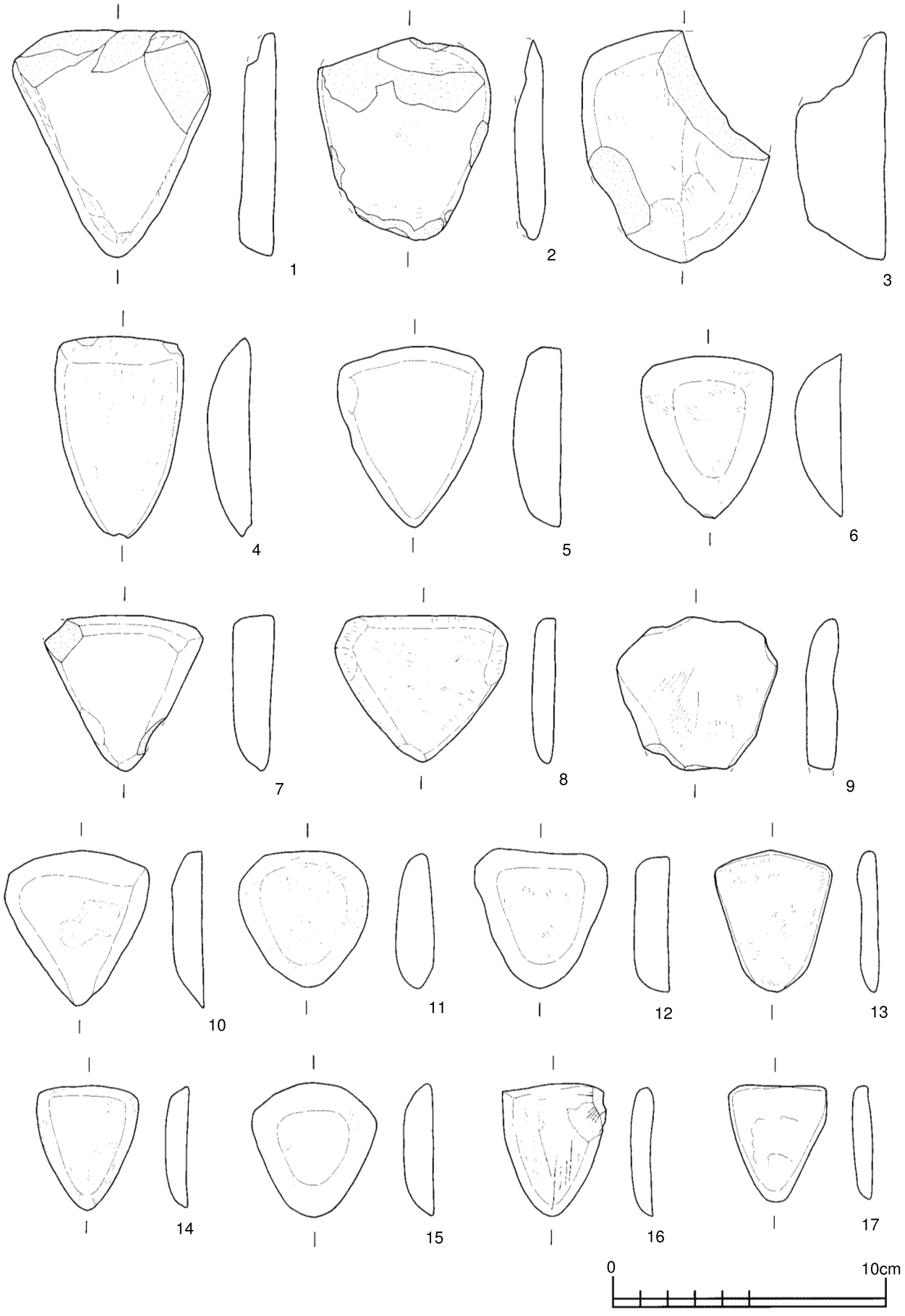
採集石製品

特異な形態を呈する自然礫で、縄文人が製品もしくは道具として意図的に採集してきたものと考えられる。本調査では、遺構外から２点（第190図264、265）出土している。264は、瓢箪形を呈するもので、265は石冠状を呈する。

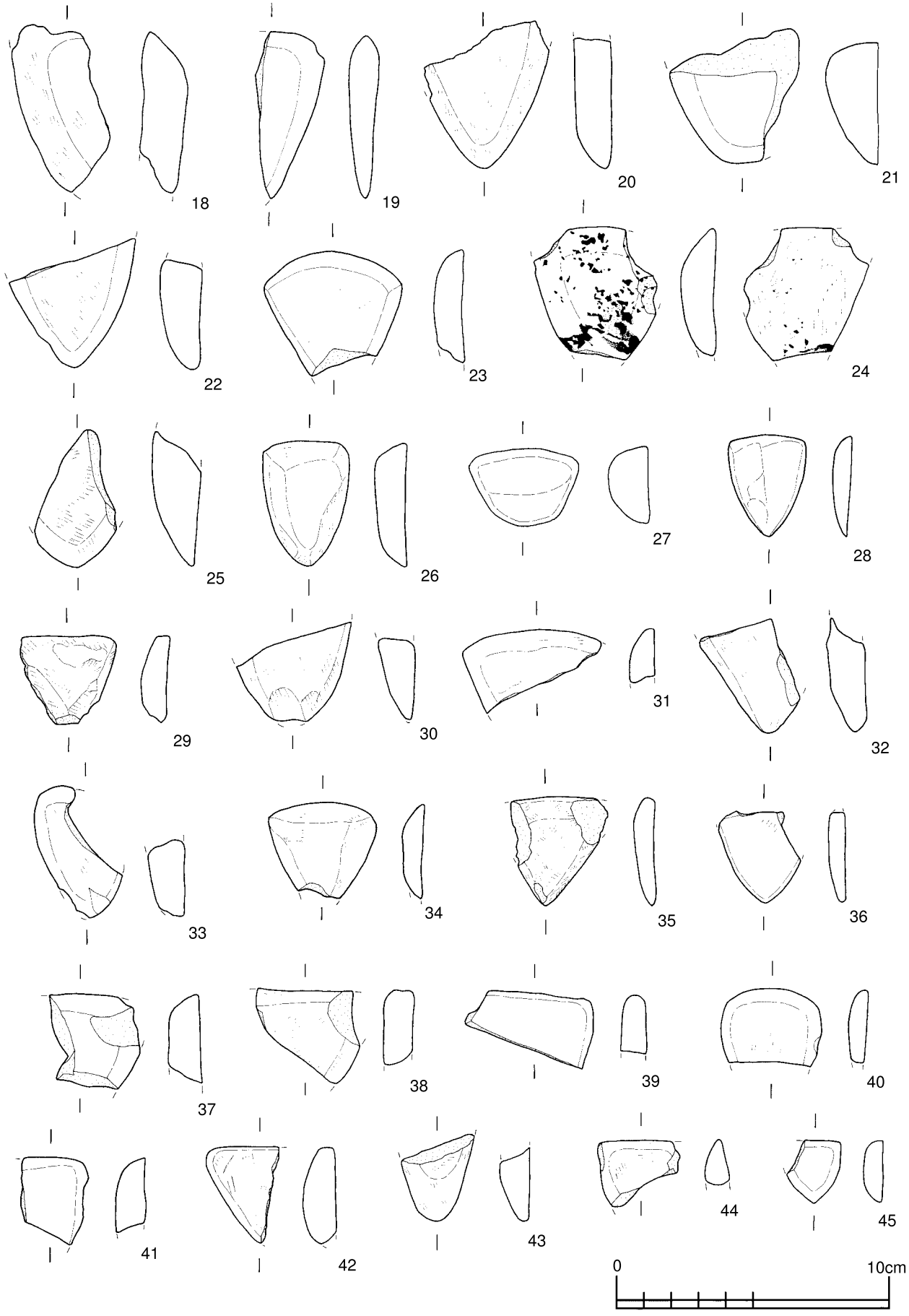
石質はすべて頁岩である。

このような形態の自然礫は、縄文後期の小牧野遺跡や縄文晩期の宇鉄遺跡でも出土している。なお、前述した有孔石製品のうち自然礫に孔を有するものは、本製品と同様に孔があるものを意図的に採集してきたものと考えられる。

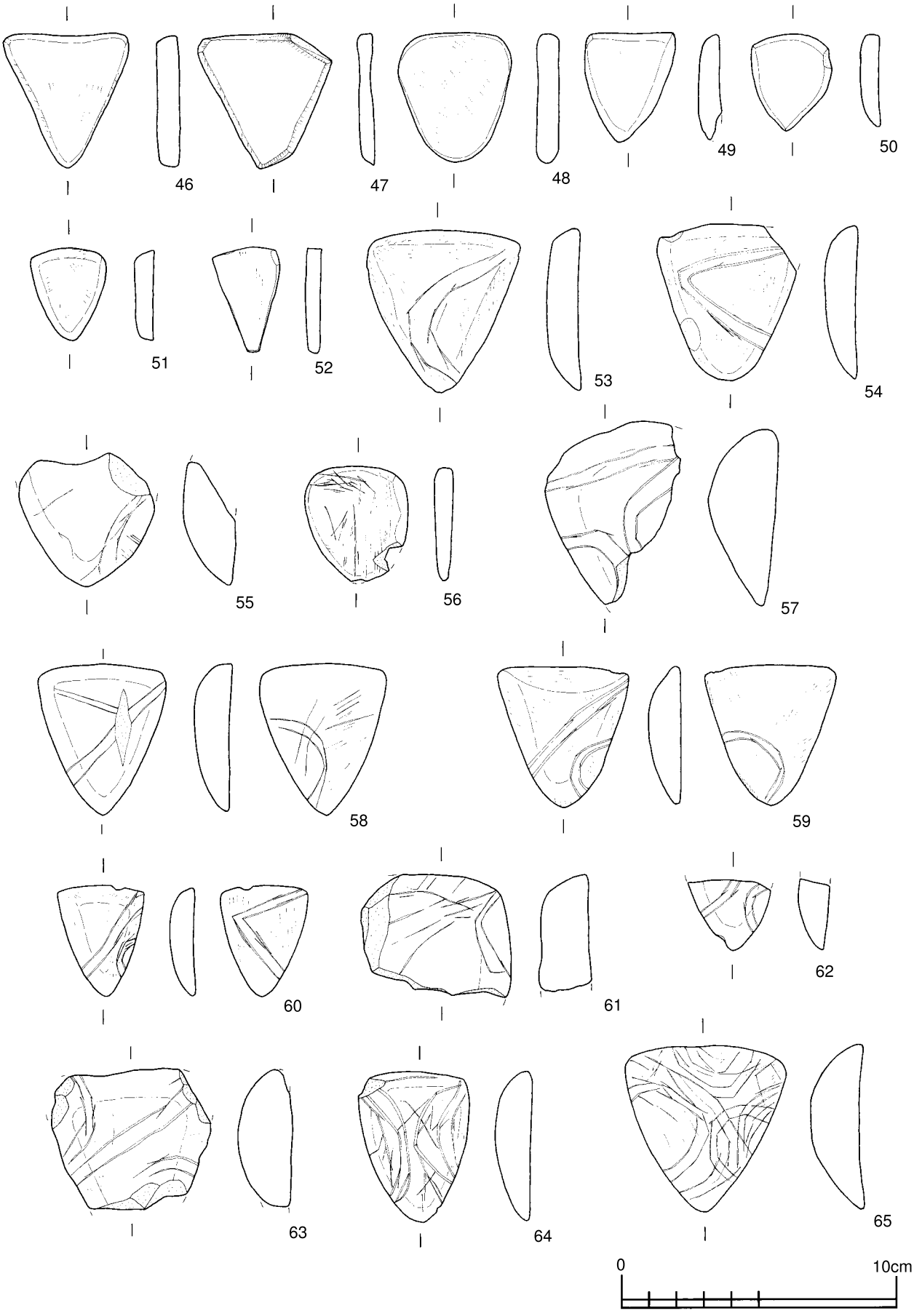
（児玉、蝦名、本多、横山）



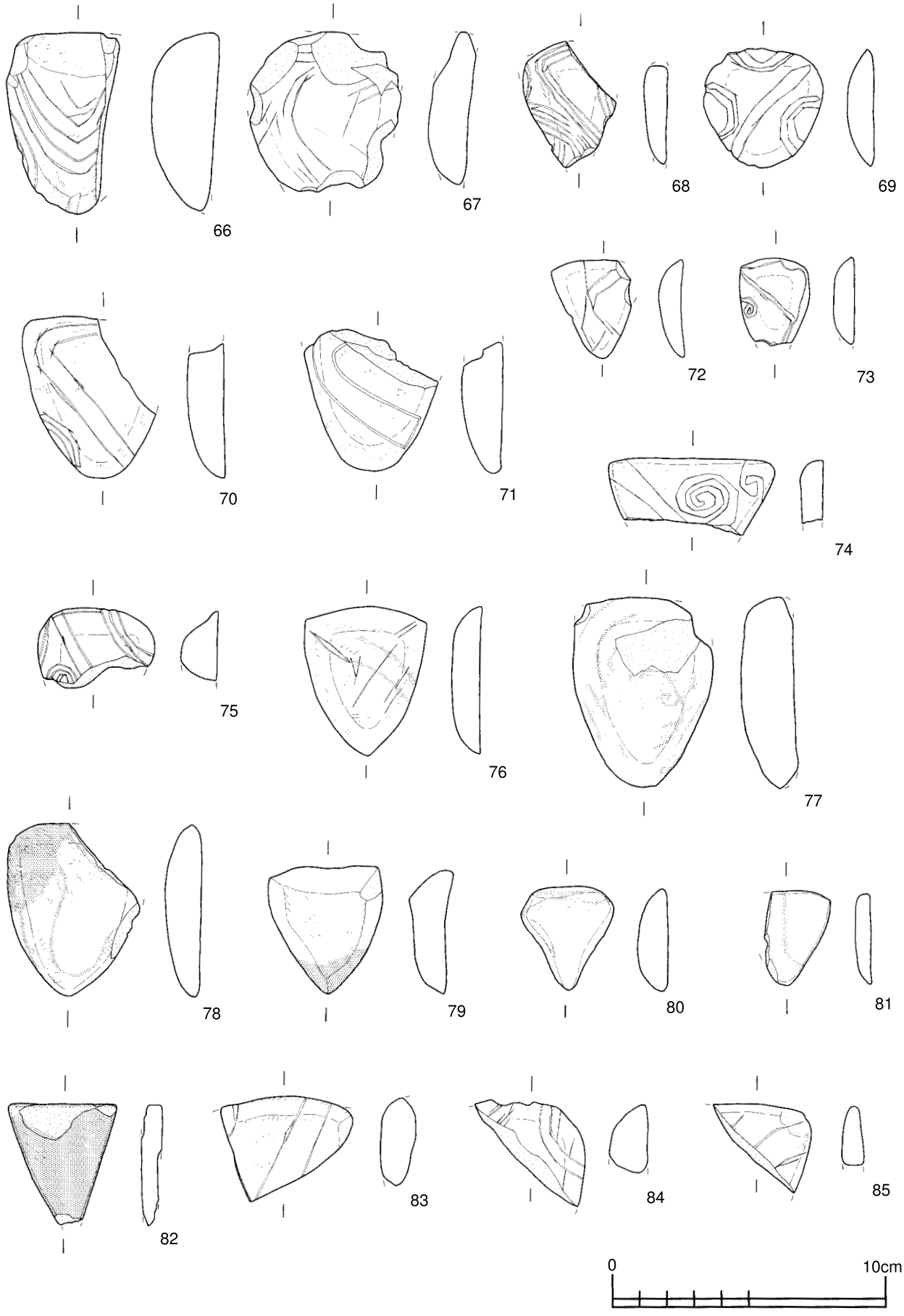
第178図　遺構外出土石製品（1）



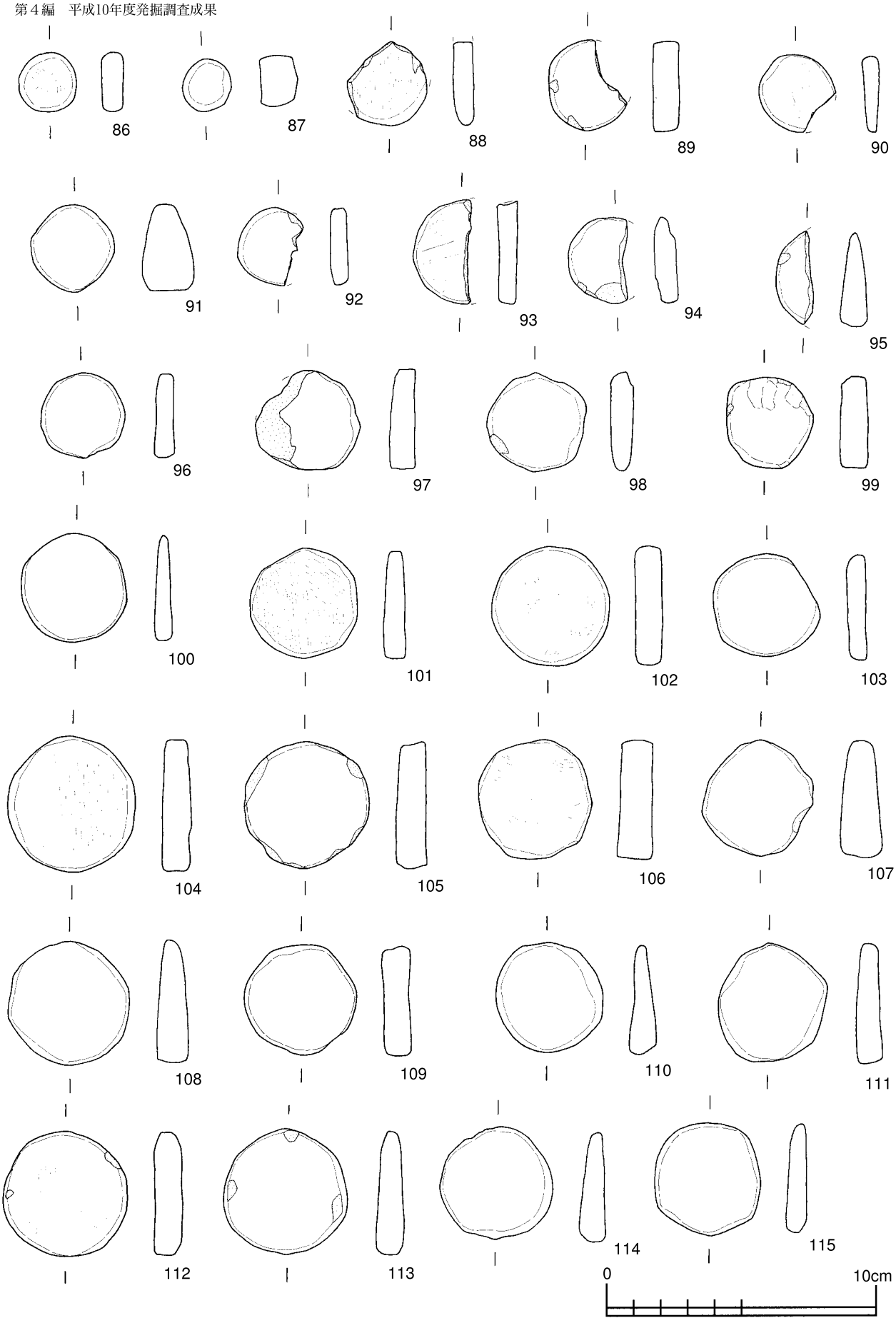
第179図　遺構外出土石製品（2）



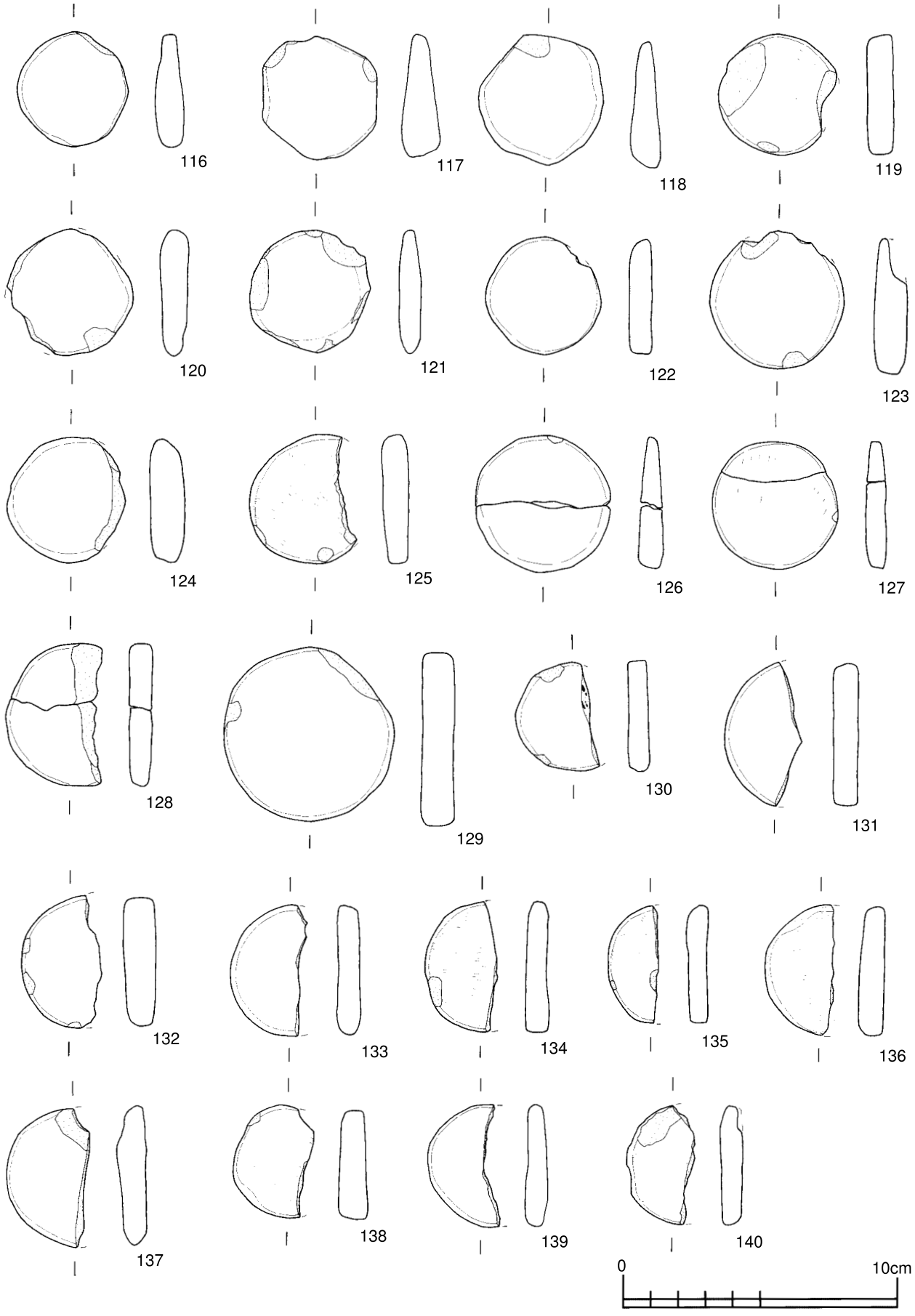
第180図　遺構外出土石製品 (3)



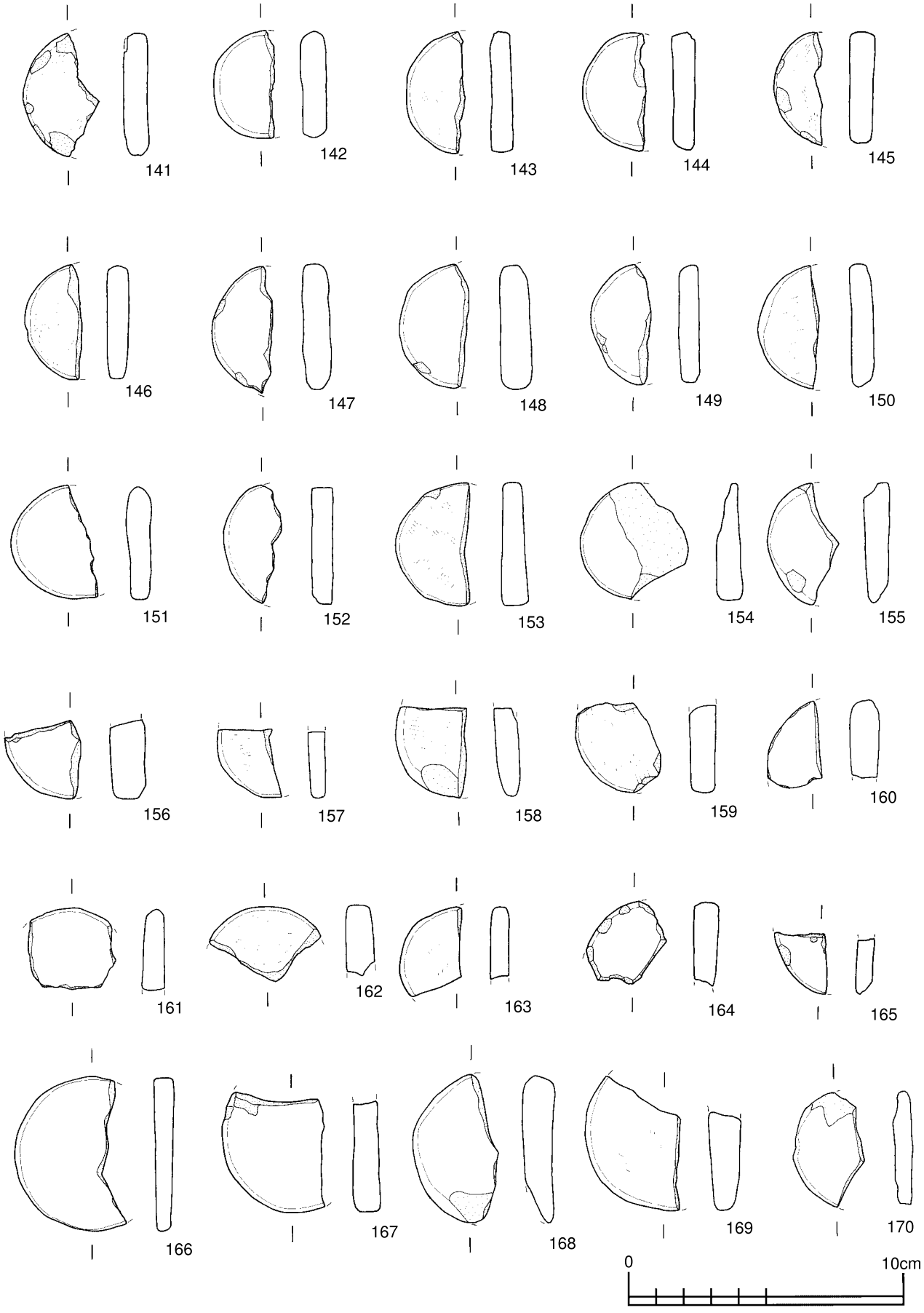
第181図　遺構外出土石製品（4）



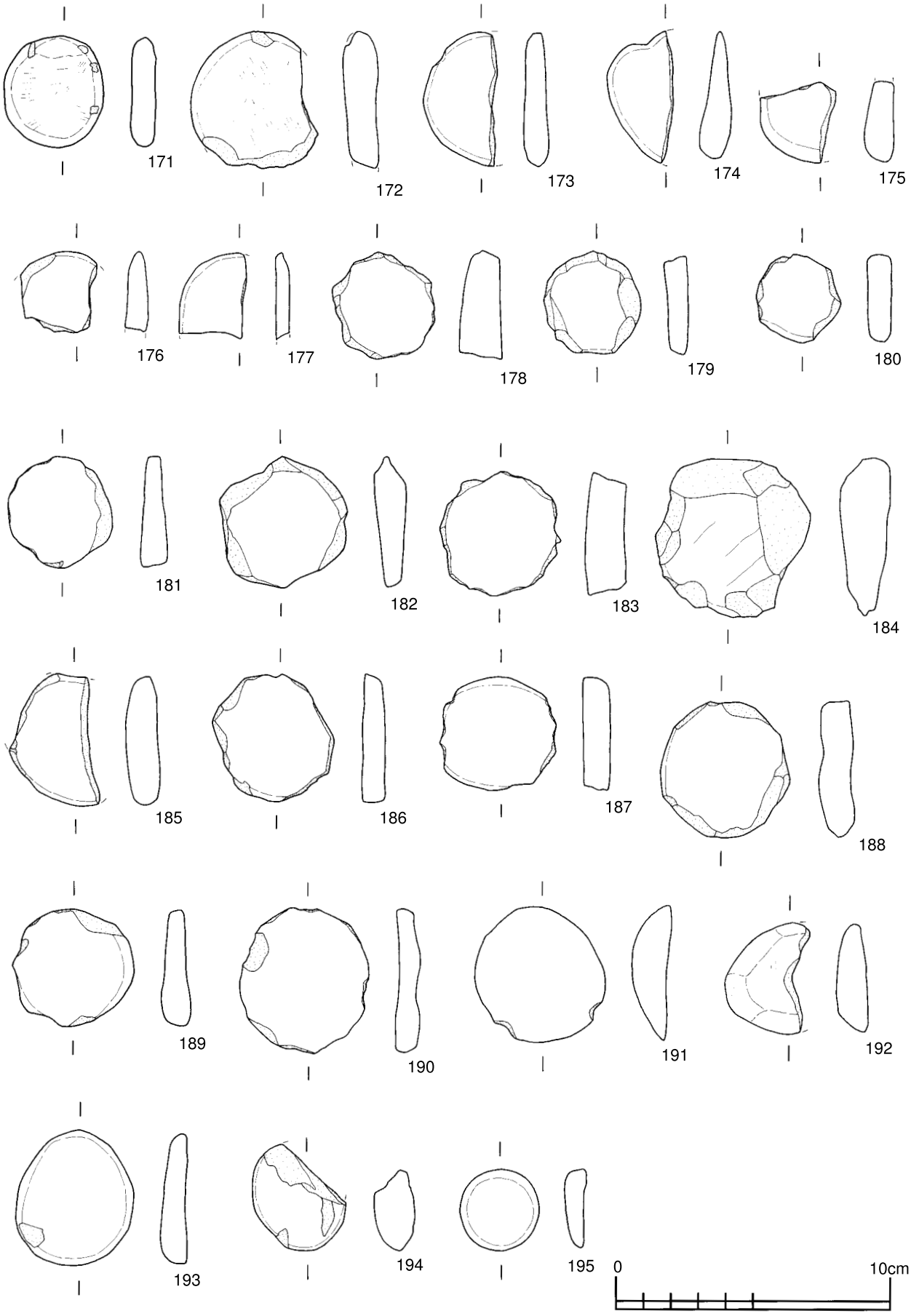
第182図　遺構外出土石製品(5)



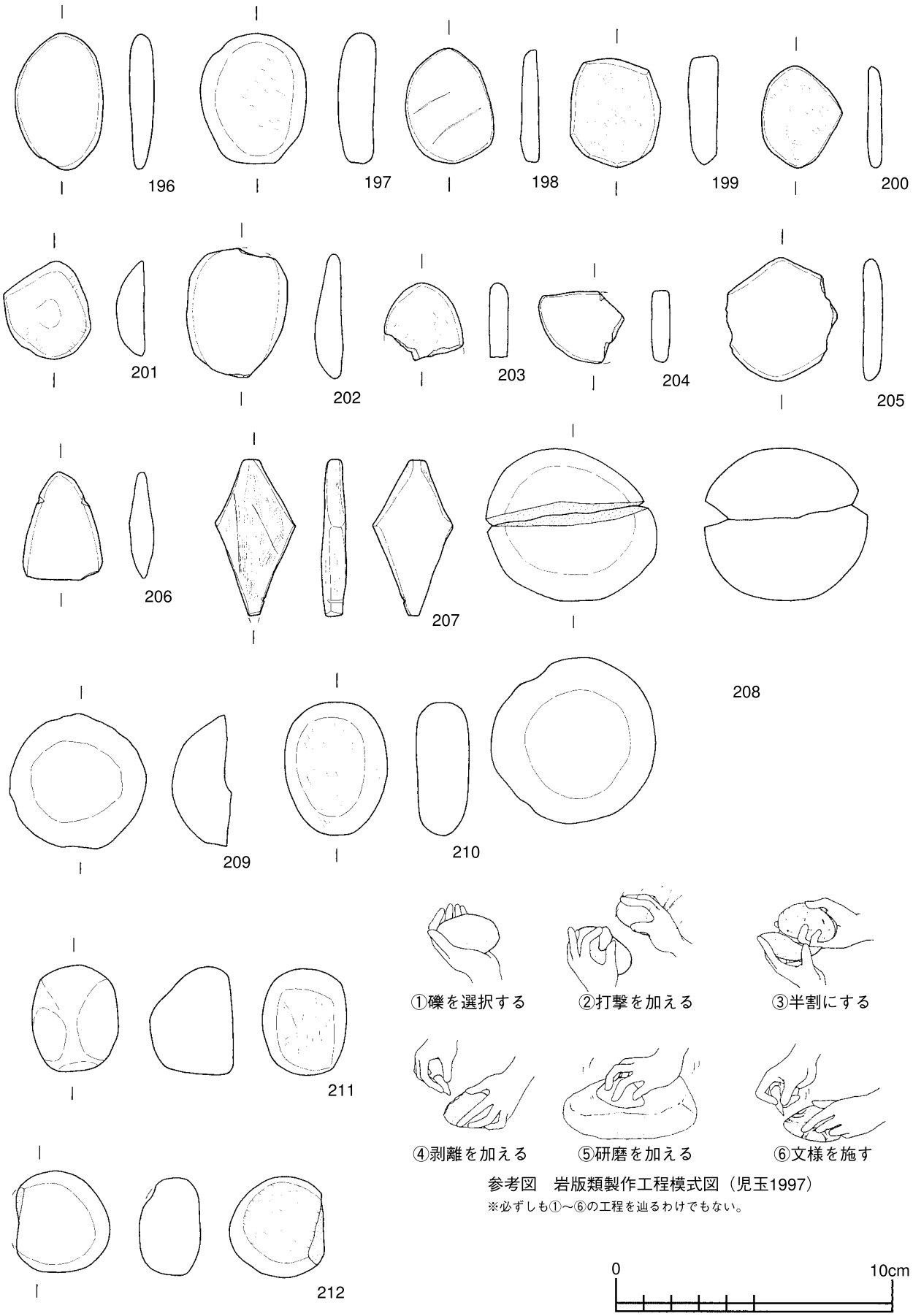
第183図　遺構外出土石製品（6）



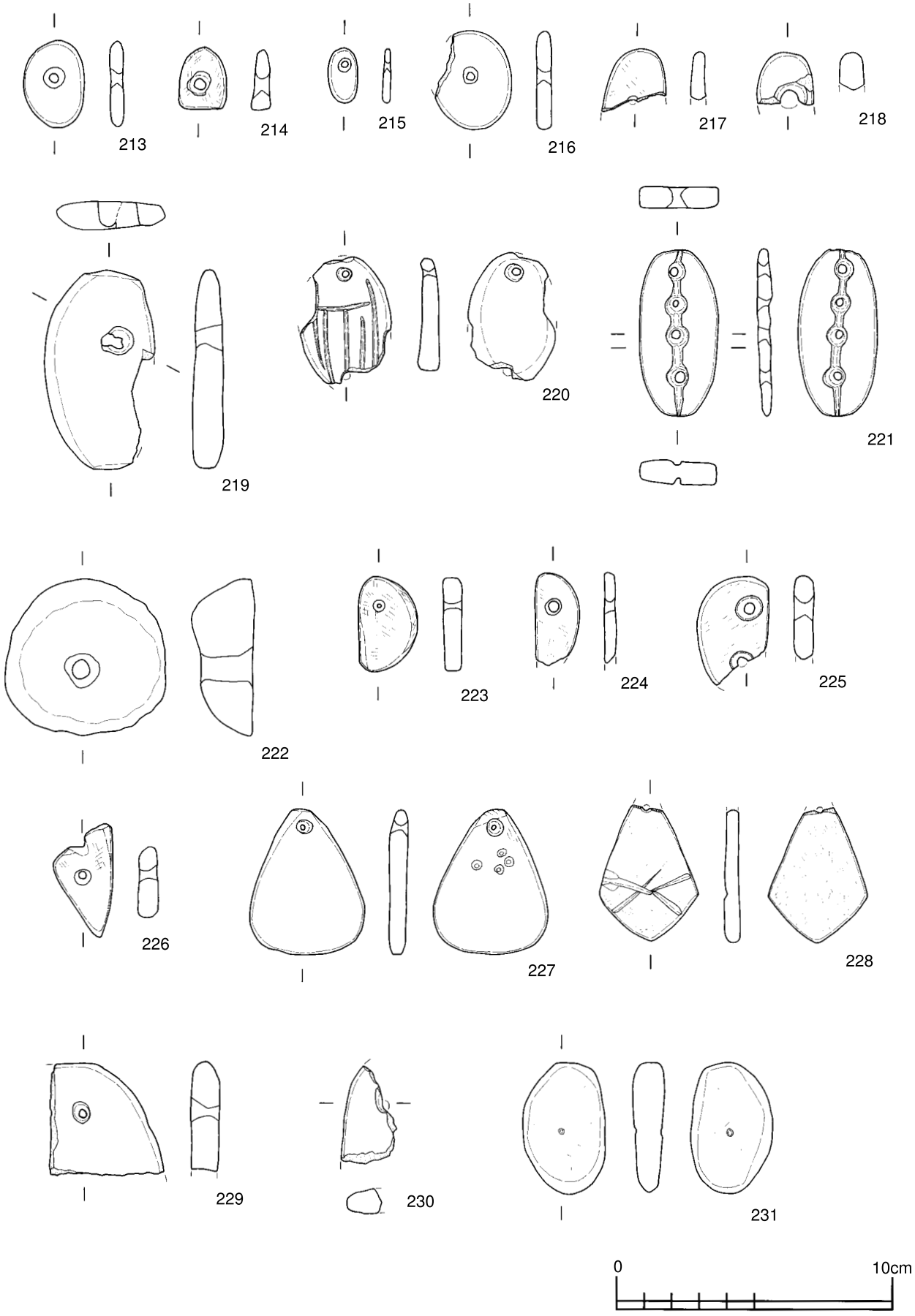
第184図　遺構外出土石製品（7）



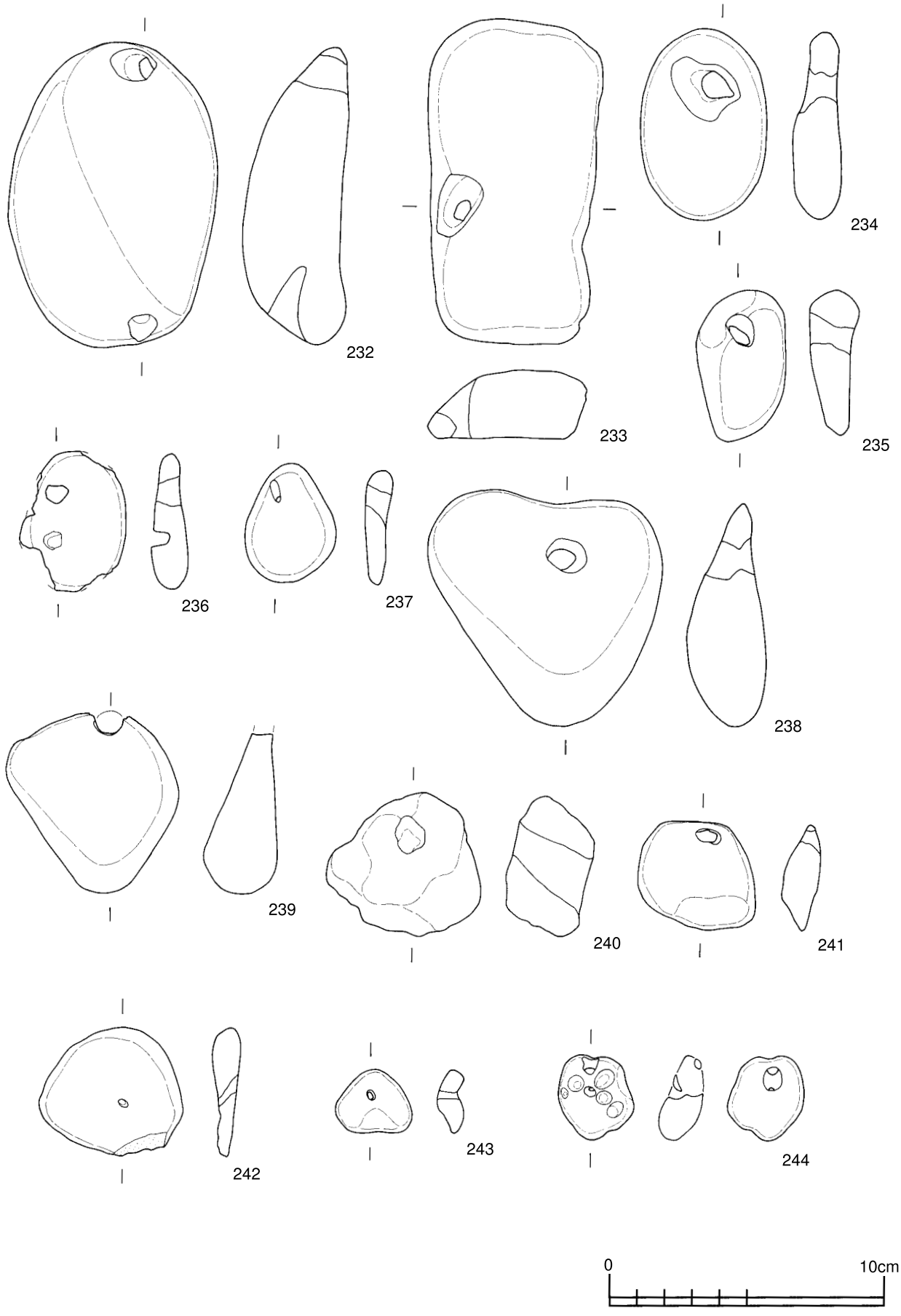
第185図　遺構外出土石製品（8）



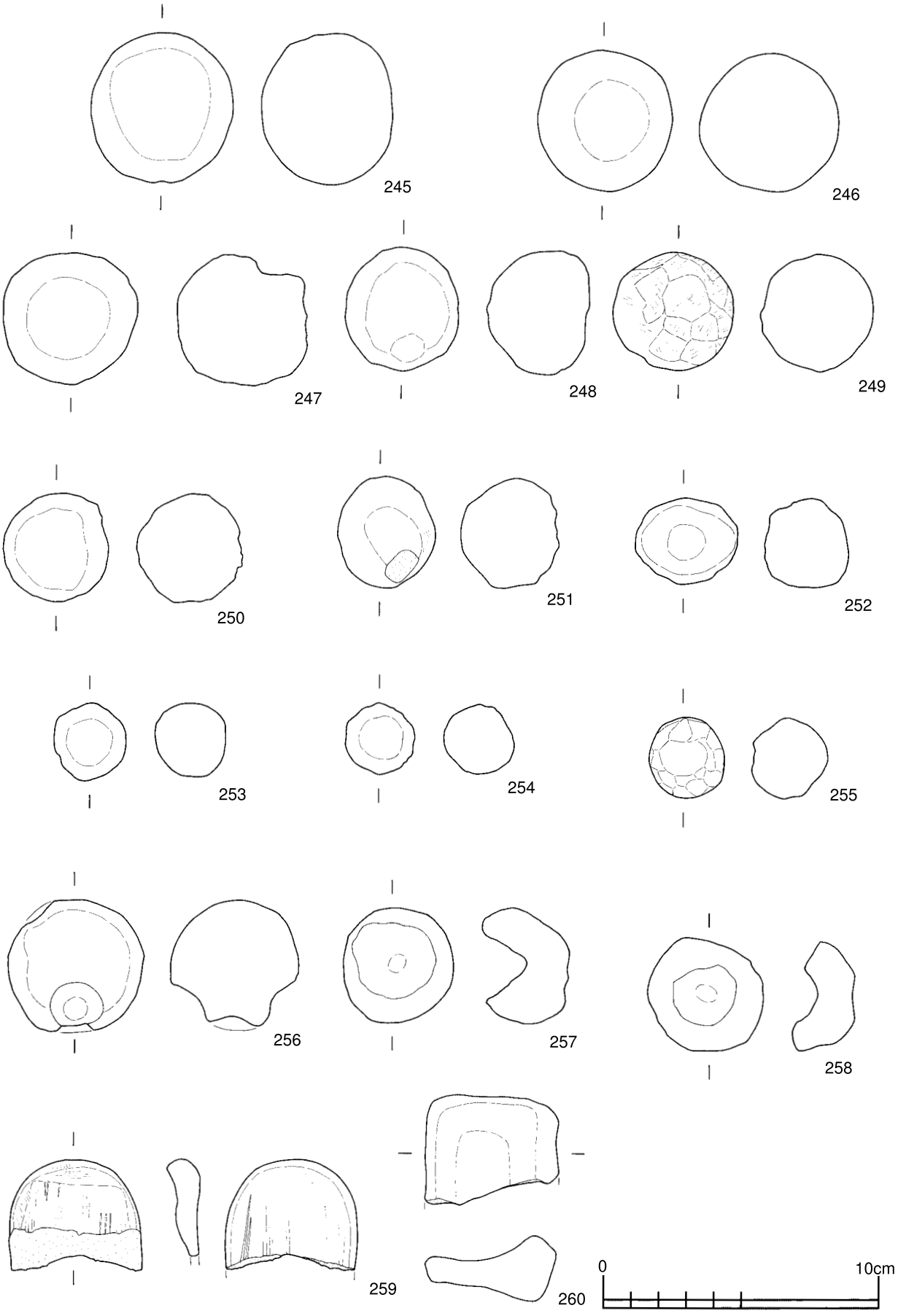
第186図　遺構外出土石製品(9)



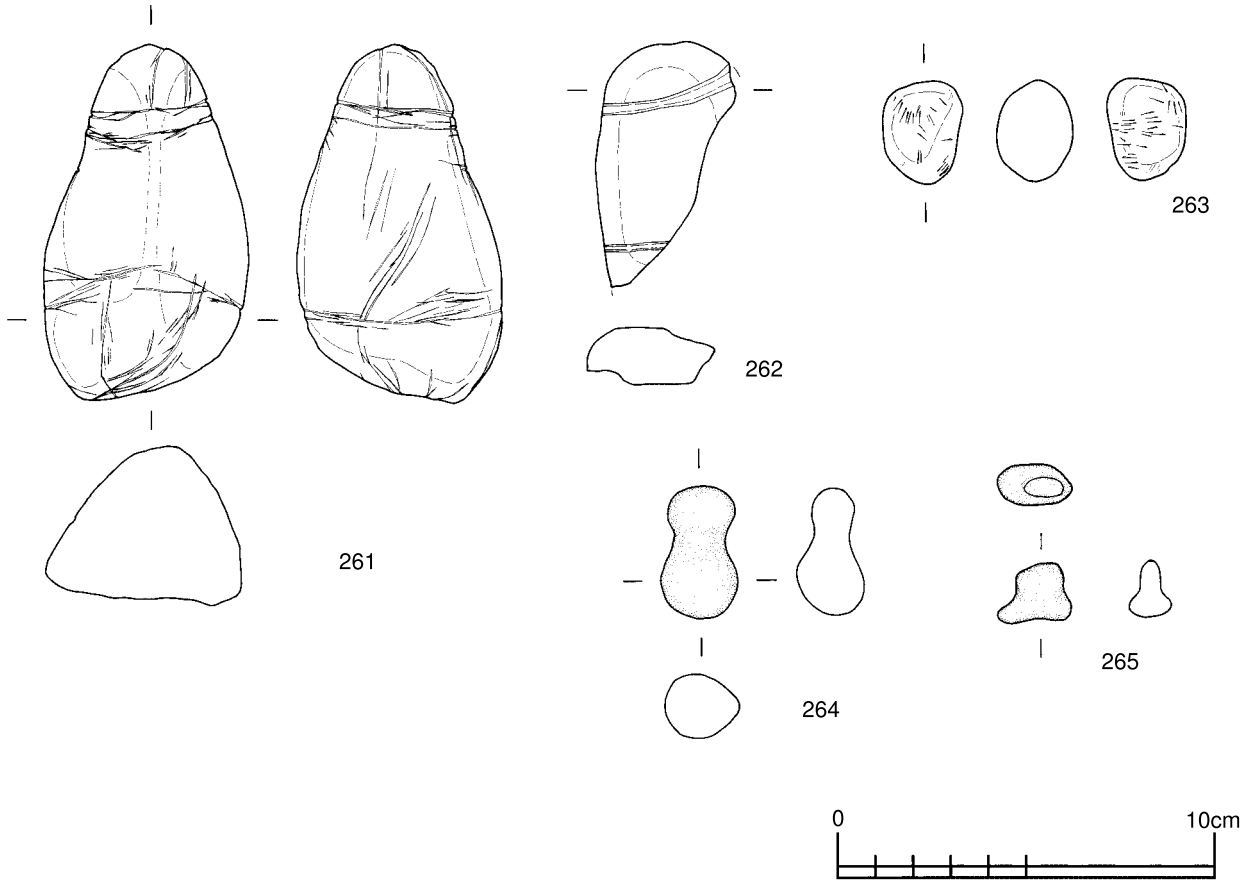
第187図　遺構外出土石製品（10）



第188図　遺構外出土石製品（11）



第189図　遺構外出土石製品（12）



第190図　遺構外出土石製品（13）

平成10年度調査のまとめ

稲山遺跡は、青森市諏訪沢字山辺に所在する遺跡である。

本遺跡は、青森市東部の山地に位置し、砥取山から北東に伸びる小山地の末端部に相当する稲山の南丘陵、標高10～40mに位置する。調査対象区は遺跡の北側にあたり、調査区中央部は丘陵が一部南に突出し、東西と比較し標高の高い台地上の地形となっている。西側は緩やかな丘陵、東側は平坦に近い地形である。

平成10年度調査においては、調査対象範囲の西側を主体に調査面積7,552㎡の発掘調査を実施した。

調査の結果、土坑89基を検出した。また縄文時代前期並びに後期の遺物包含層を検出した。

検出した土坑は、調査区中央部の台地上に位置する縄文時代前期並びに後期の土坑と思われるもの（縄文時代後期以前の土坑１基を含む。）65基と、調査区西側に位置する時期不明の土坑24基とに状況等大別される。

遺物包含層は、縄文時代前期と後期とがあるが、いずれも調査区中央部の台地を中心に広がり、特にⅣａ層とした後期の遺物包含層からは、多量の遺物が出土した。Ⅳｃ層とした前期の遺物包含層においては全体的な遺物の出土状況はやや散発的であるが、下部に竪穴住居跡が存在し、窪地となっていたと思われる地点では、多量の遺物が存在することを確認した。

調査区中央部の台地においては、その他にも多数の土坑が密集する状況や、竪穴住居跡１軒、石棺墓１基を確認したが、平成10年度の調査においては、確認、もしくは一部検出に留まっている。これらについては、平成11年度調査分として、今後報告する予定である。

出土した遺物には、土器、石器、土製品、石製品等がある。出土遺物の全体量は遺構内外を合わせ、段ボール箱換算で480箱である。

土器は、縄文時代早期、前期、中期、後期の土器が出土しているが、縄文時代後期初頭から前半の土器、中でも十腰内Ⅰ式周辺の土器が多数を占める。出土量には大差があるが、縄文時代前期末葉の円筒下層ｄ₁式土器がそれに次ぐ。

石器は、石鏃、銛先鏃、石槍、石錐、石匙、大石平型石篦、石篦、異形石器、不定形石器、磨製石斧、礫石錘、有溝石錘、敲磨器類、半円状扁平打製石器及び類似する石器、抉入扁平磨製石器及び類似する石器、砥石、石皿、台石が計2,668点出土している。その他水晶が166点出土している。

土製品は、土偶、鐸形土製品、ミニチュア土器、四足付皿形土製品、耳飾、有孔土製品、環状土製品、笠形土製品、三角錐形土製品、柱状三角形土製品、棒状土製品、紐状土製品、球状土製品、多孔土製品、三角形土版、円形土版、土器把手未製品、土器片利用土製品、焼成粘土塊と20種類の土製品が遺構内外から合計214点出土している。中でも土器片利用土製品は129点の出土で土製品出土点数のうち半数以上を占める。その他、鐸形土製品、ミニチュア土器、土偶が二桁を超える点数の出土である。

石製品は三角形岩版、円形岩版、その他の岩版、岩版関係資料、有孔石製品、球状石製品、碗状石製品、皿状石製品、線刻礫、採集石製品と10種類の石製品が遺構内外から274点出土している。うち、三角形岩版が88点、円形岩版が115点と多数を占める。

以下、検出遺構及び出土遺物についてその状況を述べ、平成10年度調査のまとめとしたい。

土坑は、調査区中央部の台地上で65基、調査区西側で24基検出している。

調査区西側で24基検出した土坑は、丘陵斜面広範囲に散発的に分布している。出土遺物は無く、基本

層序第Ⅶ層で確認したものが多数で、本来の掘り込み面も不明であり、時期を特定できないものである。唯一、調査区端に位置する第1016号土坑は第Ⅳ層を掘り込み遺構上部に第Ⅲ層が堆積する状況を確認している。多数の遺構覆土は、黒～黒褐色土が主として堆積しており、基本層序第Ⅰ、Ⅱ層に起因する印象を受けた。

調査区西側の土坑の形態には、規模の小さいいわゆる小ピットや、壁がオーバーハングするフラスコ状土坑、楕円形ないし小判型を呈する土坑、すり鉢形、皿形を呈する土坑、不整形を呈する土坑等、様々なものが見られる。小ピット状の土坑には、柱穴としての用途が想定されるものは無かった。

フラスコ状を呈する土坑は、調査区中央部で検出した、縄文時代のフラスコ状土坑と比較すると。確認面からではあるが、土坑の深さが非常に浅いものであり、その中で壁が屈曲するものである。

調査区中央部において65基検出した土坑は、台地の地形に沿い、列をなすように密集して分布している。出土遺物、遺構間の重複関係、遺構確認層などにより縄文時代前期並びに後期の土坑と思われる。縄文時代前期に属すると思われるもの７基、縄文時代後期に属すると思われるもの57基、縄文時代後期以前と思われるが時期の特定ができないもの（11土Ｂ）１基である。縄文時代後期に属すると思われるものが89％と多数を占めた。

縄文時代前期の土坑（10土、18土、23土、24土、57土、79土Ｂ、140土）は、７基と数は少ないが後期の土坑とおおむね同様に、台地の地形に沿い、列をなすような分布状況を呈している。平成10年度以降の調査においては、土坑が分布する区域の外側に縄文時代前期の竪穴住居跡を確認しているが、７基の土坑は、特定の個々の住居を意識した配置とは思われない。土坑の形態には、フラスコ状、袋状を呈するもの（10土、24土、57土、79土Ｂ）、遺構確認面から土坑底面までが比較的浅く皿形を呈するもの（18土、23土）、壁が垂直に近く直線的に立ち上がりビーカー形を呈するもの（140土）の３種がある。

浅い皿形を呈する土坑については、後述するように遺構確認が遅れたため本来は、フラスコ状、袋状土坑やビーカー形を呈する土坑であった可能性もある。前期の土坑で特徴的なものには、底面近くに土器が埋設されているもの（18土）や、土坑底面の壁際に楕円形の浅いピットを有するほか、５基の開口部付近を巡るピットを有するもの（57土）がある。

縄文時代後期の土坑は、台地の地形に沿い列をなすように密集して分布している。遺構の重複関係は、前期の土坑のほか、後期の土坑間でも見られる。土坑の形態には、遺構確認面から土坑底面までが比較的浅く皿形を呈するもの、フラスコ状、袋状を呈するもの、規模の小さいいわゆる小ピット、壁が垂直に近く直線的に立ち上がりビーカー形を呈するものとおおむね前期の土坑と同様である。前期の土坑と同様、比較的浅く皿形を呈するものは、遺構確認が遅れたため本来は、フラスコ状、袋状土坑やビーカー形を呈する土坑であった可能性もある。特徴的なものには、土坑上部を掘り込み土器を埋設したと思われるもの（27土）、土坑底面の壁際に溝の巡るもの（78土）がある。

土坑の形状のなかで比較的浅く皿形を呈するものは、本来フラスコ状、袋状を呈する土坑であったものが、遺構の確認が遅れた結果、本来の土坑の下部のみを検出し、その形態によって判断している可能性があると述べた。調査区中央部には縄文時代後期の遺物包含層であるⅣａ層が、地点にもよるが暗褐色土を主体とし、厚く堆積している。このⅣａ層を掘り込んでいる土坑が存在することは、調査区に設定してあったベルトの観察により判明している。しかし、土坑の堆積土の多くがⅣａ層と同様に暗褐色土を主体にした堆積土であること、また土坑間の重複も多い状況のため、Ⅳａ層での遺構確認は一部を除いて困難であり、調査区中央部で検出した土坑については、大半を基本層序第Ⅴ層以下で確認した。そ

のため、仮にⅣａ層の層厚が80㎝の地点で、Ⅳａ層を掘り込んでいた土坑を第Ⅴ層以下で確認した場合には、少なくとも80㎝にわたる土坑上部の情報、例えば各種の墓標や開口部周囲のピット等が、存在していたとしても、その情報は失われたこととなる。また、土坑には前述したⅣａ層を掘り込む土坑のほか、土坑内にⅣａ層が入り込んでいる堆積状況を示すものがあり、Ⅳａ層より新しいものと古いものとがあるが、第Ⅴ層以下で確認したことによりⅣａ層との新旧関係についても大半が不明となってしまった。

また、先述した、土坑の項では、調査区中央部で検出した土坑の堆積状況について、大半を人為堆積と考えられると記述した。人為堆積と判断した理由については、縄文時代に相当する基本層序第Ⅳ層が主に黒褐色を呈するのに対して、主として土坑堆積土中に基本層序第Ⅶ層に起因すると思われる、パミス、ローム等を含む堆積土が存在することや、個々の土坑において主となる堆積土が暗褐色土を呈することによった。しかし、Ⅳａ層が内部に入り込んで堆積している土坑を確認していることもあり、個々の土坑について人為堆積と判断したものについても個々の土坑を埋めようとして堆積したものか、個々の土坑とは関係無く、Ⅳａ層としての性格を持つものが下部に存在する土坑に入り込んだものかは、本来の掘り込み面周囲の状況と同様、第Ⅴ層以下で確認したことによりⅣａ層との新旧関係についても大半が不明となってしまった。これら、主として検出した土坑とⅣａ層との関係に係わる点について、調査の反省点として述べておく。

土器については、縄文時代早期から後期の土器が出土している。うち、縄文時代早期については、早期中葉の蛍沢ＡⅡ式土器と思われる土器１片の出土である。縄文時代前期では、円筒下層ａ式、ｂ式、ｄ式土器が出土しているが、ｄ式なかでも円筒下層ｄ$_1$式土器が多数である。縄文時代中期では、円筒上層ａ式土器が僅かであるが出土している。縄文時代後期では、十腰内Ⅰ式土器周辺の土器が出土している。平成10年度の調査では、縄文時代晩期以降の時期の土器は出土していない。

いずれも調査区中央部の台地上で大半が出土したものであり、これを中心に徐々に周縁に向かうにつれ密度が薄くなる傾向が見られる。また、出土層位は縄文時代後期の包含層であるⅣａ層からの出土が大半である。

石器は、先述した器種が出土しているが、石鏃、石匙、大石平型石篦、有溝石錘等の器種の占める割合が高いものと思われる。また、今年度調査の主体となったⅣａ層精査時に、水晶が出土したことを契機に出土水晶も取り上げて報告した。出土水晶の中には、山梨学院大学　十菱　駿武教授に鑑定頂いたところ、先端部等に使用された痕跡の可能性のあるものも存在する。

土製品並びに石製品は、いずれも多種類が出土している。土製品では、土器片利用土製品が、石製品では、三角形岩版、円形岩版等がそれぞれの半数以上を占める状況である。

以上、平成10年度の調査における検出遺構と出土遺物について概略を述べた。

本遺跡の発掘調査は、当委員会がこれまで平成10年度から平成12年度の３次にわたり実施しており、本遺跡において主体部と思われる調査区中央部の台地については、平成13年度に調査実施予定である台地の北側580㎡を除いて調査が終了している状況である。２次以降の調査においては、縄文時代後期の配石遺構や、前期の埋設土器遺構等新たに検出した遺構もあり、本遺跡の様相が次第に明らかになりつつある。これらについては、平成11年度分調査報告等、以降の報告で述べることとする。

最後になりましたが、本遺跡の現地調査並びに整理・報告書刊行作業にわたり、ご指導ご協力を賜った多くの方々に、深くお礼を申し上げます。また、現地調査や整理・報告書刊行作業は、今後も、引き続き実施する予定であり、今後とも、ご指導ご協力を頂けますよう何卒お願い申し上げます。

（小野）

引用・参考文献

青森県教育委員会　1978　第38集　『熊沢遺跡発掘調査報告書』
青森県教育委員会　1981　第68集　『山崎遺跡発掘調査報告書』
青森県教育委員会　1987　第103集『大石平遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
青森県教育委員会　1995　第180集『熊ケ平・板子塚遺跡発掘調査報告書』
青森県教育委員会　1996　第190集『泉山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
青森県教育委員会　1999　第258集『山下遺跡・上野尻遺跡発掘調査報告書』
青森県教育委員会　2000　第274集『山下遺跡Ⅱ・米山(２)遺跡発掘調査報告書』
青森市教育委員会　1967　『玉清水遺跡調査概報』
青森市教育委員会　1971ａ　『玉清水Ⅲ遺跡調査報告書』
青森市教育委員会　1971ｂ　『大浦遺跡調査報告書』
青森市教育委員会　1983　『山野峠遺跡』
青森市教育委員会　1985　『長森遺跡発掘調査報告書』
青森市教育委員会　1996　第30集　『小牧野遺跡発掘調査報告書』
青森市教育委員会　1997　第35集　『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
青森市教育委員会　1998　第40集　『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
青森市教育委員会　1999ａ　第45集　『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
青森市教育委員会　1999ｂ　第47集　『稲山遺跡発掘調査概報』
青森市教育委員会　2000ａ　第48集　『熊沢遺跡発掘調査報告書』
青森市教育委員会　2000ｂ　第49集　『稲山遺跡発掘調査概報Ⅱ』
青森市教育委員会　2000ｃ　第50集　『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
青森市蛍沢遺跡発掘調査団　1979　『蛍沢遺跡』
阿　部　芳　郎　1985　「持ち運ばれる土器－「切断壷形土器」の移動と地域間交流」『季刊考古学』12　雄山閣
葛　西　　励　1979ａ　「第６章　後期編」『蛍沢遺跡発掘調査報告』青森市蛍沢遺跡発掘調査団
葛　西　　励　1979ｂ　「十腰内Ⅰ式土器の編年的細分」『北奥古代文化』11　北奥古代文化研究会
児　玉　大　成　1997　「三角形岩版について」『青森県考古学』10　青森県考古学会
児　玉　大　成　1999　「小牧野遺跡研究における環状列石の構築時期」『青森県考古学』11　青森県考古学会
小　林　達　雄　1977　『縄文土器』原始美術大系１　講談社
小　林　達　雄　1994　『縄文土器の研究』　小学館
鈴　木　克　彦　1998　「東北地方北部における十腰内Ⅰ式土器様式の編年学的研究・４」『縄文時代』９　縄文時代文化研究会
名久井　文　明　1998　「縄紋時代から継続する編組技術」『縄文式生活構造』　同成社
成　田　滋　彦　1986　「切断蓋付土器考－東北地方の資料を中心に－」『弘前大学考古学研究』３
成　田　滋　彦　1989　「入江・十腰内Ⅰ式土器様式」『縄文土器大観』４　小学館
福　田　友　之　1998　「狩猟文土器再考－津軽海峡域特有の絵画土器－」『北方の考古学』　野村崇先生還暦記念論集刊行会
本　間　　宏　1988　「縄文時代後期初頭群の研究(２)」『よねしろ考古』第３号　よねしろ考古学研究会
三　宅　徹　也　1979　「第４章　早期編」『蛍沢遺跡発掘調査報告』　青森市蛍沢遺跡発掘調査団
三　宅　徹　也　1989　「円筒土器下層様式」『縄文土器大観』１　小学館
村　越　　潔　1974　『円筒土器文化』　雄山閣
山　内　清　男　1969　『日本先史土器の縄文』

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962『三内霊園遺跡調査概報』
青森市の文化財	1	1962『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965『四ツ石遺跡調査概報』
〃	3	1967『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	1971『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979『蛍沢遺跡』
		1983『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983『山野峠遺跡』
〃		1985『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1987『横内城跡発掘調査報告書』
〃		1988『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書	第16集	1991『山吹（１）遺跡発掘調査報告書』
〃	第17集	1992『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第18集	1993『三内丸山（２）遺跡発掘調査概報』
〃	第19集	1993『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第20集	1993『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃	第21集	1994『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第22集	1994『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第23集	1994『三内丸山（２）・小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第24集	1995『横内遺跡・横内（２）遺跡発掘調査報告書』
〃	第25集	1995『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第26集	1995『桜峯（２）遺跡発掘調査報告書』
〃	第27集	1996『桜峯（１）遺跡発掘調査概報』
〃	第28集	1996『三内丸山（２）遺跡発掘調査報告書』
〃	第29集	1996『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第30集	1996『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第31集	1997『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第32集	1997『桜峯（１）遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第33集	1997『新町野遺跡試掘調査報告書』
〃	第34集	1997『葛野（２）遺跡発掘調査報告書』
〃	第35集	1997『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第36集	1998『桜峯（１）遺跡発掘調査報告書』
〃	第37集	1998『新町野遺跡発掘調査報告書』
〃	第38集	1998『野木遺跡発掘調査報告書』
〃	第39集	1998『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第40集	1998『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
〃	第41集	1998『野木遺跡発掘調査概報』
〃	第42集	1998『熊沢遺跡発掘調査概報』
〃	第43集	1999『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第44集	1999『葛野（２）遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第45集	1999『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
〃	第46集	1999『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
〃	第47集	1999『稲山遺跡発掘調査概報』
〃	第48集	2000『熊沢遺跡発掘調査報告書』
〃	第49集	2000『稲山遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第50集	2000『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
〃	第51集	2000『桜峯（１）・雲谷山吹（３）遺跡発掘調査報告書』
〃	第52集	2000『大矢沢野田（１）遺跡発掘調査報告書』
〃	第53集	2000『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第54集	2001『新町野遺跡発掘調査報告書Ⅱ・野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第55集	2001『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
〃	第56集	2001『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
〃	第57集	2001『稲山遺跡発掘調査概報Ⅲ』
〃	第58集	2001『大矢沢野田（１）遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第59集	2001『市内遺跡発掘調査報告書』

報 告 書 抄 録

ふりがな	いなやまいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	稲山遺跡発掘調査報告書Ⅰ
副書名	
巻次	
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第56集
編著者名	小野貴之、児玉大成、蝦名純、長内礼二、堀内万里子、本多顕子、工藤かおり、横山智子
編集機関	青森市教育委員会
所在地	〒030-8555 青森県青森市中央一丁目22－５　TEL 017－734－1111
発行年月日	西暦　2001年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
稲山（いなやま）	青森市大字諏訪沢字山辺（あおもりしおおあざすわのさわあざやまべ）	02201	045	40° 49′ 2″	140° 47′ 30″	19980511 ～ 19981120	7,552	道路建設(東北縦貫自動車道八戸線建設工事並びに高規格道路建設促進事業)に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲山（いなやま）	集落跡	縄文	土坑　89基	土器 石器 土製品 石製品	

青森市埋蔵文化財調査報告書第56集

稲山遺跡発掘調査報告書Ⅰ

発行年月日　平成13年３月30日

発行　青森市教育委員会
〒030-8555 青森市中央一丁目22-５
TEL 017-734-1111

印刷　青森オフセット印刷株式会社
〒030-0802 青森市本町二丁目11-16
TEL 017-775-1431